RADICAL
紙のプロレス

NO.17



オィオィ
オィオィ
UFO
襲撃!襲撃三昧!!!

「ジャングルを守るより、
ジャングルを作る!というか」な2大特集

新旧 FIRST CONTACT
タイガー戸口(キム・ドク)
矢口壹琅 他、未知の強豪も続々来襲!!

格闘
MAKE JUNGLE
小川直也/高田延彦in USA/桜庭和志/宮戸優光
池田大輔/マグナムTOKYO/アントニオ猪木

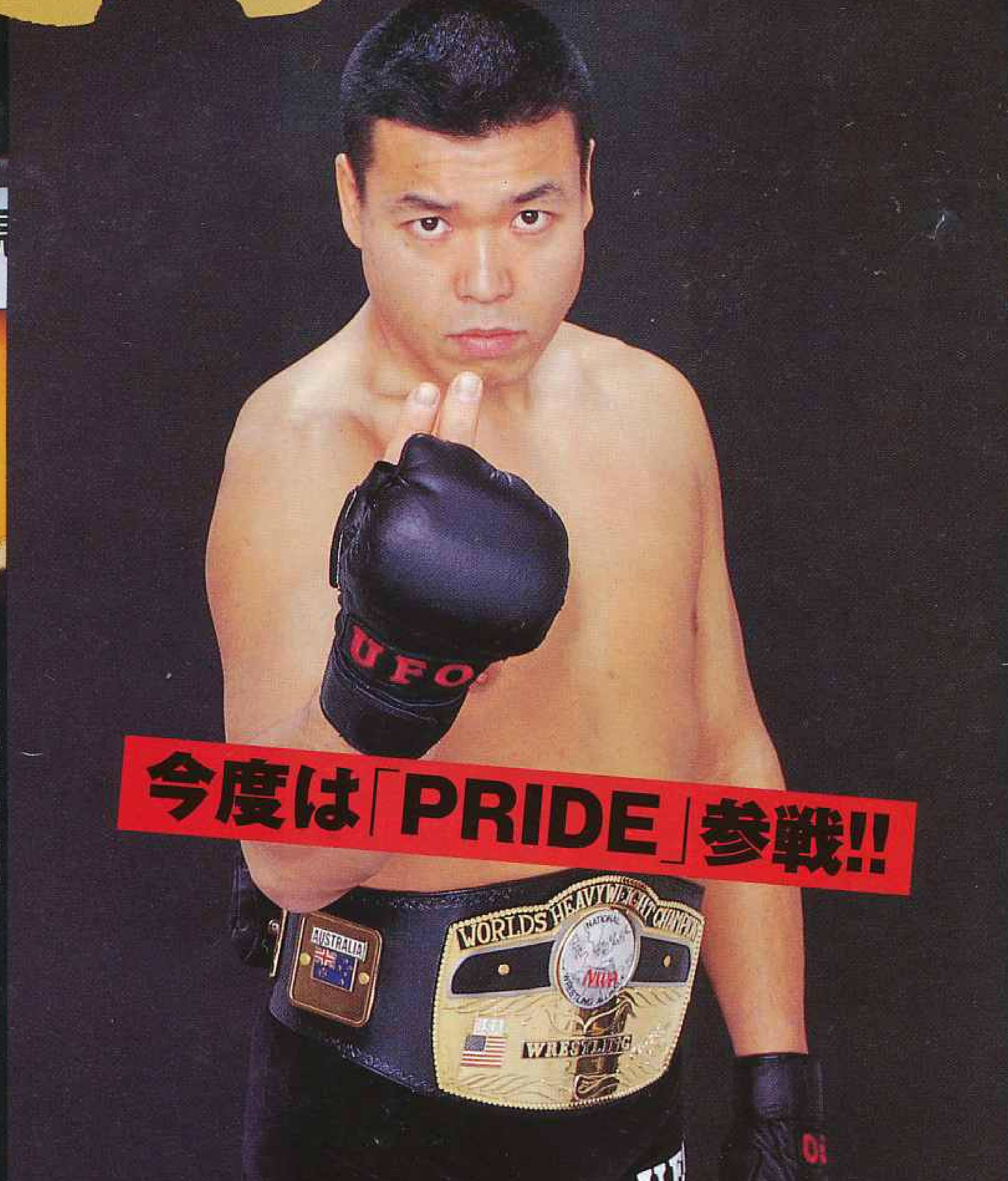
新生リングス
BONE & BLOOD
山本宜久/成瀬昌由/ランディ・クートゥアー/前田日明

紙のプロレス RADICAL NO.17
オィオィ 襲撃!襲撃三昧!!!

発売元:(株)ワニマガジン社 〒160-8580 東京都新宿区内藤町1番地 電話/03-3357-2911
発行元:(株)ダブルクロス 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話/03-3403-5188
ワニマガジン社 定価:本体743円+税

UFO 小川直也 襲撃三昧!!





今度は「PRIDE」参戦!!



「UFO・小川直也『PRIDE』シリーズ正式参戦決定」――4月15日深夜、一通のリリースが編集部にFAXされてきた。記者会見は翌日の午後2時。京王プラザホテルで開かれるという。

しかし、当日の会見は荒れに荒れた！　会見開始時間から50分ほど遅れて、ようやく到着した小川は、「元気が一番！」の猪木イズムとはほど遠い苦笑いの表情で、「困惑してます。今日午前中に記者会見があることを聞いたんで。対戦相手も聞いてないし、怒り半分で、という感じです（怒）」と最後まで、席にも着かずにまくしたてた。

送られてきたリリースには「4・29に参戦」と明記されていたが、正式決定はしていないのか？　報道陣にも困惑の表情が浮かぶ。

小川が「とにかく今日、ここに来てくれということしか聞いていない。いつ何時、誰の挑戦でも受けるが、なにがどうなってんですか？（怒）」と言うと、『PRIDE』のルール・ディレクター、島田裕二氏が「キチンと伝えてあります。UFO側の不手際じゃないですか？」と応戦。小川が睨み返すと、島田氏は一瞬ひるみ、一触即発のムードが漂う。

小川は不満を露にし、会見場をアッという間に後にし、追いかける報道陣を振り切りタクシーに乗り込んだ。

その後、『PRIDE』広報の笹原圭一氏と島田氏が「どうなってるんだ？」と報道陣に詰め寄られる。「困惑しています」「4月に出場するかはわからない」としどろもどろに答える笹原氏。まさに困惑だらけの記者会見である。

島田氏は「猪木さんの陰謀だ。UFOが『PRIDE』を取り込もうとしている。猪木さんのブレーンとも話しているし、小川選手には『寝言は寝て言え』と言いたい」とまで発言。

しかし、その島田氏もUFOではレフェリーとして上がっているから話はややこしい。UFOが『PRIDE』を乗っ取ろうとしているのか？『PRIDE』がUFOを取り込もうとしているのか？　それとももっと大きな見えない力が働いているのか――？

結局、この日の会見では4・29に小川が参戦するかどうかも霧の中。なんらかの契約上のトラブルがあったのか、話がキチンと詰められていないことだけが露呈してしまった。

しかし、ここでUFOと『PRIDE』が接点を持ったことは事実。会見以降の調べでは、4・29には、小川はエキシビション参戦（または観戦）、『PRIDE』シリーズには7月に本格参戦というラインが濃厚なことがわかった。

この号が出る頃には、ハッキリした答えが出ているかもしれないが、1・4では新日本プロレス帝国を襲撃したUFOが、俗にいう「格闘技側」に照準を合わせることをいとわないとわかっただけでも、これからのマット界にとっては重大な出来事だったと言えるだろう。

UFOはこれからもプロレス、格闘技分け隔てなく襲撃三昧を繰り返していくのか？　その標的にはヒクソンを始めとするグレイシー一族も含まれるのか？

この困惑記者会見に困惑しているだけではいけない。とにかくマット界の未確認飛行物体・UFOを見失わないことである。

この会見の3日前に収録した小川直也ロング・インタビューは次ページから掲載しているが、もしかしたら今後のUFOの飛びっぷりのヒントが詰まっているかもしれない。いずれにせよ、いつ何時、何が起こるかわからないUFOの軌道からは目を離さないほうがいいだろう――。

NAOYA OGAWA
LONG INTERVIEW



NWA世界王座奪取記念
UFO襲撃三昧記念
ビバ! ハッピーバースデー記念

新日本プロレスのトップ、橋本真也を相手に“1・4事変”を勃発させた小川直也! 3月14日には、この大きな問題提起を「風化」させようとするマット界の力学をあざ嗤うかのように、ダン・スバーンを破ってNWA世界ヘビー級王座を奪取! 続いて、『PRIDE.』への飛来! 乗り込んだUFOの飛びっぷりは予測不可能な軌道を描く。そんな男の『知ってるつもり!?』風インタビュー。『紙プロ』読者の皆さま、目を覚ましてください! (再び)

聞き手/山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影/森鷹博
photographs by Takahiro “MosuMosu” Mori

格闘 MAKE JUNGLE

ジャングルを守るより
ジャングルを作る!!



やってナンボ！
やらなかったら、
なにも生まれてこない!!

97年、橋本真也を破るという破天荒なプロレスデビューを飾った小川直也。その後、G・ムタ、D・フライなどと熱戦を繰り広げるものの、試合から小川の"肝"が伝わってこないため、イマイチ評価は低いままだった。

2度の無差別級世界選手権制覇、バルセロナ・オリンピック95kg級銀メダルという柔道の実績を引っ提げてプロレス入りした逸材は、このままマットの下で夢見るように眠ってしまうのか――?

昨年はK―1のリングにも出陣し、UFOも本格発進。それでも小川の周囲には"猪木のあやつり人形""佐山にリモートコントロールされている"というありがたくない声が渦巻いていた。

そんな評価を地球規模でひっくり返したのが、記憶に新しい"1・4事変"である。

ここからUFOと小川直也は本格的にマット界にマーズアタックを開始！　遂には『PRIDE』まで標的に定めた（P1参照）。

強くて凄くて面白い飛びっぷりを見せるUFOのエース・小川直也とは一体どういう男なのか。

その、なかなか立ち現れてこない全貌を知るきっかけが掴めさえすれば、いまはまだUFOを目撃していない人の目にも、ハッキリとUFOの姿が見えてくるはずである。

というわけで、オイオイオイ、冗談じゃねえよ、もう始まりかよ～、と叫びつつ、『PRIDE』参戦記者会見の3日前に収録した『知ってるつもり？』風な小川直也ロング・インタビュー、テイク・オフ！

――いや、昨日もまた仕掛けてくれましたね。

小川　なんかありました？

――またトボけますね（笑）。村上（一成）選手の正式入団発表のあとに、アレク（サンダー大塚）選手と村上選手を引き連れて他団体に出て行くって宣言したじゃないですか。

小川　まあね、アレク選手はバトラーツですから、引き連れてっていう言い方はアレですけど、いまUFOと協力関係のもとにありますからね。まあ、ちっちゃな渦が出来てるってヤツですかね。

――ゼヒ大きくしてほしいですね。

小川　大きくなってね、格闘技界ってものに大きな渦を起こしていきたいなと。

――で、その会見の模様を報道してる今日の『東スポ』の見出しが、「UFO、他団体無差別襲撃」。「無差別襲撃」っていうのがいいですよ（笑）。相変わらず『東スポ』は面白いですね。

小川　その『東スポ』によく言われるんですよ、「新日本を批判するのは小川さんぐらいですよ」って（笑）。こっちとしては批判してるつもりじゃないけど、ケンカ吹っかけるから。

――いや、堂々と新日本にケンカ吹っかけるのは、小川さんだけでしょうね。

小川　「振り向けば誰もいなかった」。

――by小川直也ですか（笑）。でも「この道を行けばどうなるものか危ぶむなかれ」ですからね。1・4の乱闘でも大活躍した村上選手は、小川選手にとってはどういう存在なんですか？

小川　う～ん、いい意味では弟ができたなと。非常に信念のある弟っていうのかな？

NAOYA OGAWA

日頃、「プロレスは鍛え抜かれた共通の肉体言語」って言うなら、やればいいじゃない!!

――信念のない弟もいるわけですか？

小川　うん、ウチの（実の）弟みたいな。マズイかな（笑）。でもまぁ、自分の弟ぐらいは批判しても、とやかく言われないからね（笑）。村上君と最初にやったときにね、彼は凄くいいものを持ってるなっていうのはありましたよね。なんかあるじゃないですか？　パッと見て……。

――雰囲気というか、オーラというか。

小川　雰囲気っていうか、考え方が真っ直ぐだから。

――アレク選手はどういうふうに映ってますか？

小川　あんまりね、面識っていう部分では挨拶程度しかしてないんで。できることなら同じ格闘技者ですから対戦してみたい相手でもあるし、逆に一緒にやっていっても面白いかなっていう存在かな。

――アレク選手も実に面白い男で、最終目標は『1・2の三四郎』の東三四郎なんですよ（笑）。その過程としてアントニオ猪木と肌を合わせてみたいという夢を持った男なんですよね（笑）。だから、3人は非常に夢を与えられるユニット、という気がするんですよね。

小川　そうですね。夢を与えるっていうか、夢を与えなきゃしょうがない仕事だし！　自分たちが好きでやってるだけですから。

――なるほど。しかし、1・4以降の見事な変身ぶりは、「一本勝ち！」って感じですね。

小川　一本勝ちっていうんですかね？（笑）。でも、自分でもよくわからないけ

小川直也BOUT REVIEW



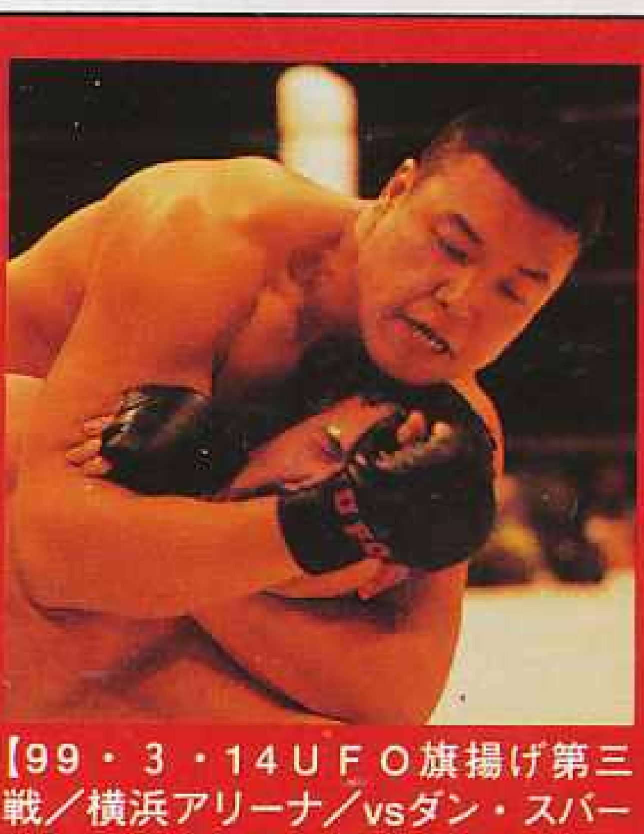
【98・10・24UFO旗揚げ第一戦／両国国技館／vsドン・フライ】勝利は手にしたものの、最後にリング中央に立っているのはドン・フライだった。この日のオーちゃんは、"プロとしての陣地取り"の部分で不安を残した



【98・12・30UFO旗揚げ第二戦／大阪城ホール／vsジェラルド・ゴルドー】喧嘩屋G・ゴルドー相手にメインを張ったものの、これといった印象を残せないまま勝ち名乗りを受ける。UFOの飛びっぷりに一抹の不安が…



【99・1・4新日本プロレス／東京ドーム／vs橋本真也】UFO、突如本格的に襲来！　無効試合となったものの、内容は小川の圧勝。現在の新日本の力学を無視した闘いぶりは、大きな波紋を呼んだ



【99・3・14UFO旗揚げ第三戦／横浜アリーナ／vsダン・スバーン】ファンの目を覚まさしただけでなく、1・4をきっかけに自らも目を覚ました小川が、NWA王座を強奪！

ど、なにかが動いてるっていう雰囲気ではありますよね。

——この動きを風化させちゃいけないですよね（笑）。

小川　そう、渦を巻くぞ、と！　竜巻だとすぐなくなっちゃうからね。

——そういえば、STO（スペース・トルネード・オガワ）も竜巻でしたね（笑）。

小川　ワハハハ！　だから、通り過ぎないように、デカく！　常に渦巻いてるような感じでいきたいね。

——97年のプロレス・デビュー後は、プロレスファンの中に「小川直也」という存在を突き刺すまでにはいかなかった時期が続きましたよね。でも、"1・4事変"で風向きが確実に変わりましたね。

小川　そうですね。常に新天地、新天地っていうパターンで行けたから、よかったなと。

——デビュー戦の相手も橋本（真也）選手で、1・4も橋本選手が犠牲者……犠牲者って言い方はおかしいですけど（笑）。

小川　いや、俺にはありがたい人ですよ。

——ありがたい人？（笑）。

小川　もの凄くありがたい人ですよ。心配してますよ。

——いま、かすかに笑いながら言ってませんでしたか？（笑）。

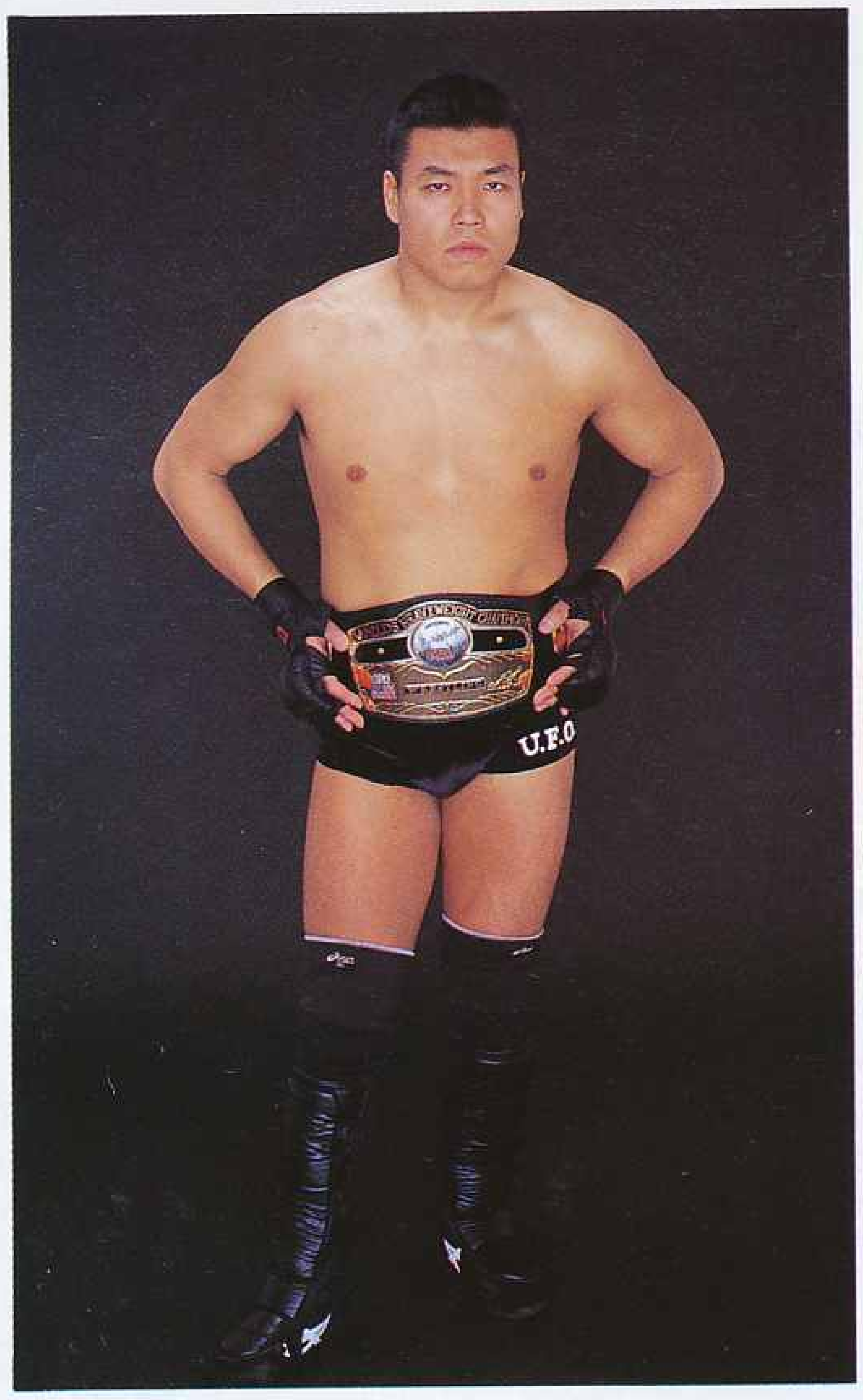
小川　いや、そんなことない。心配でしょうがないんですから。早く目を覚ましてくれないかなって（笑）。

——ガハハハハ！

全然心配してないじゃないですか！

小川　いや、心配ですよ！　早く目が覚めてくれないかなぁ、と。で、それを俺に見せつけてくれということですね。目が覚めたことを。1・4以降ズッと音沙汰ないからどうなっちゃってるのかなと思って。

——リングに上がってないですからね。小川選手は『PRIDE』のリングに興味があるそうですね。



小川　まずバトラーツと協力関係結んで、今度は『PRIDE』と提携っていうか、殴り込みというか。

——提携というか殴り込み！　いい響きですねぇ。

小川　殴って言うことききかすのはよくないけど、勝負の中ではね。常に会場には殴り込みの気持ちで行きますよ。それが渦になればいいかなと。

——そういう言葉を吐いてくれる人が、いまはホント少ないんですよ。選手も小利口になってしまって、なんか冷えてるんですよね。

小川　冷えちゃってるねぇ。しょうがないねぇ。別に利口になんなくったってさぁ、人間、もともと利口を装ってる生き物なんだから。

——『PRIDE』のリングはどういったところが魅力なんですか？

小川　やっぱり大物と言われてる選手が出てるってとこですね。

——「おいしいな」って感じですか？

小川　おいしいっていうかね、やっぱり一流どこが集まってるっていうのは、日本では『PRIDE』かな、いまは。

——その中だと誰に興味がありますか？

小川　『PRIDE』といえばヒクソン（・グレイシー）、高田（延彦）両選手ですかね。その2人は興味あるもないも、2人でやってるようなもんですから。いろいろいますけど、名前の通った選手といえばヒクソン、高田選手ですよね。

——4・29に参戦するエンセン井上選手はどう映ってます？

小川　ファイターとしてはいいんだけど、やっぱり知名度というか、誰にでもわかるっていう感じじゃないと始まんないじゃないですか。でも、まあ、相手というのは、そのときそのときのニーズに応えていったらいいかなと。ただ、いまの段階で言えることは『PRIDE』の両巨根……あ、違った。両巨頭ですね（笑）。興味があるのは。

——『PRIDE』に上がってる選手以外だと、誰に興味がありますか？

小川　誰っていうより、プロレスは将来どうなっていくかに興味がありますからね。このプロレス界というものがどのような展開になっていくのかが。生かすも殺すも、どうなるんだろうという感じでね。まあ、取りあえず自分はこうやっていきたいっていうことを、いまやってる。まだ、それが正解かどうかはわからないけど、自分は自然のままにやるだけやろうと。

——決していまのUFOが最終形態じゃないわけですよね。

小川　UFOっていうのは世界に発信するものだよね。だから、どうなっていくのか僕にもよくわかんないし（笑）。ただ、格闘技界全体に渦を巻いていくっていう発想がある。自ずと、なるようになっていく。例えば『PRIDE』の話にしろ、急浮上っていうか、少なからず今年の初めはなかった話でしょ。いまは凄い時代の流れが早いですよね。

——その分、風化するのも早いですね。

小川　させちゃいけないものも風化させちゃってね（笑）。要するに、プロである以上は興行っていうものが頭にあるじゃないですか。お客さんが来て、お客さんの払うお金で自分たちは生活するわけだから、興行をするためには、お客さんの要望に答えていかなきゃいけないんじゃないか、っていうのは思ってるんですよ。

NAOYA OGAWA

会長(猪木)と会って話すと、必ず印象深いっていうか、必ず新しい発見がありますよね

――ファンが面白いと思うものをやってやろうじゃねえか、ということですね。

小川　でも、それを敢えてなぜ拒むの？と。だって日頃、「プロレスは鍛えられた肉体の共通言語」っていうなら、やればいいじゃないですかって話。

――やりゃあいいじゃねえかと（笑）。

小川　練習はわかったから、やってくれよと。そういう問題じゃないですか。

――橋本選手は、1・4以降、猛練習してるというのを聞きますからね。

小川　練習とか、もうわかったから！　どうしちゃったんですかね？　普段練習してんの無駄じゃないですか、やらないんだったら。なんのために練習してんだって感じじゃないですか！

――そうですよね。

小川　だって、勉強も受験とかのために勉強するんでしょ。受験しなかったら一緒じゃん。でも僕は、柔道のときもそうだけど、相手を調べても、最終的にはやっぱり調べようがないんですよ。やんなきゃダメなんですよ！　やってナンボなんですよ！　やって、それでどういう反響が起こるか？　そこに〝ニーズ〟ってものが生まれるわけで、やらない限りニーズは生まれないんですよ！　やって初めて、一つか二つかわからないけど、選択肢ってものが出てくるんじゃないですか。やらなかったら、なにも生まれてこないよね。

――小川さんは、ある意味で柔道時代から、その〝ニーズ〟っていうことを考えながらやってたんですね。

小川　覚えましたよね、やっていくうちにね。

――〝やらなきゃニーズは生まれない〟っていうのはまさにその通りですね。

小川　だから、「古賀（稔彦）と小川がやったらどうなんの？」って思うわけでしょ、みんな。じゃあ、やればいいじゃねえかって（笑）。

――猪木イズムだ（笑）。

小川　俺、「上がってこないよ、アイツは」って話してたら、上がってきちゃったからね、古賀が。「なにやってんだ、重量級は」って思っちゃった（笑）。

※90年の全日本選手権＝無差別級で、軽量級の古賀が勝ち上がり、重量級の小川との夢の対決が実現。結果は小川の優勝。

――画期的なことでしたよね、あれは。

小川　実数1万2千人は凄いんじゃないですか？（日本）武道館で。NHKの発表は嘘言わないですからね（笑）。

――ガハハハ！　主催者発表じゃないわけですね。でも、アマチュアでそれだけ集められるんだから、見たいものを提供していけば、プロの世界も当然入るわけですよね。でも、いまはバラバラで「やらない」から、ファンのニーズが生まれにくいわけですよね。

小川　あのときは、古賀が宣伝してくれたお陰ですよ。宣伝マンだったから。いい意味でね。〝平成の三四郎〟としてね。

――いま、マット界には、そういう意味でのスポークスマンが少ないんですよ。

小川　あれは古賀の功績ですね。そりゃあね、あのときは、「しょうがねえな、マスコミばっか集まって」と思ったけどね。俺って、マスコミ嫌いなほうだから。

――古賀選手がやってるような役割は「俺には向かない」と思ったんですか？

小川　向かないっていうか、重量級のチャンピオンであるうちは、やっちゃいけないなと。人気は実力で勝ち得るもんだからと思ってましたね。そういう自分なりの哲学っていうのを持ってたいですからね。

――柔道日本一時代には「試合になったら自分の力を最大に出せるかどうかが一番大事」「相手のことに気を取られると、自分の柔道ができなくなる」っていう発言をしてましたよね。

小川　うん。あんまり研究しても、逆に腰が引けちゃったりするから。どっちかっていうと行って勝負のほうが好きなタイプだから。

――「迷わず行けよ！」ですか（笑）。

小川　「知らぬが仏」！（笑）。その言葉通りに、知らないで行こうや、というね（笑）。

――ガハハハ！　猪木さんじゃないけど、「めんどくせぇんです」っていうヤツですね。

小川　柔道時代は、強制的に「相手を研究しろ」って言われた時期もあったからね。あんまり強制されるとね。

――強制的にやらされるのは嫌なタイプっていうのはわかりますね（笑）。

小川　というか、モノサシで測られちゃうのが一番嫌だな、と。大きなモノサシで測ってくれるんならいいんだけど、自分だけの経験で測られても困るなと。

――じゃあ、アントニオ猪木のモノサシは、やっぱりデカかったわけですよね。

小川　プロレスラーであり、国会議員という部分も吸収してますからね。

――その猪木さんと、最近話をした中で印象深い話はありますか？

小川　いや、会って話すと、必ず印象深いっていうか、必ず発見がありますよね。「常に自分っていうものに対して第三者的な目から見ろ」とか、「自分中心じゃなく、自分を外から見るようにしろ」っていうのはよく言われますね。

――猪木さんは以前、「リングに上がったら闘いに集中してる自分と、どこかで2階席の後ろから見てる自分を置いておかなければいけない」って言ってたことがありましたね。

小川　ああ、なるほど。そういう、自分自身をプロデュースするっていうか、プロデュース論的なこともズッと教わってるんで。

●

――ところで、3・14には、ダン・スバーンを破ってNWA世界王座を奪取したわけですが……あ、おめでとうございます！　言い忘れてました（笑）。3月31日は誕生日だったということで、ダブルでおめでとうですね。

小川　いやいや。どうもありがとうございます（笑）。


――で、ダン・スバーン戦では自分の闘いはできたと思いますか？

小川　できたというより、レフェリーのドリー（ファンク・Jr）さんの笛にやられたかなと（笑）。

※小川vsスバーン戦では、ブレイクする度に特別レフェリーのドリー氏が、首から下げたホイッスルをテキサス・ブロンコ全開で鳴らしていた。

――あの笛は、わかりやすくてお客さんには好評だったけど、選手としてはやりにくかったでしょうね（笑）。

小川　1～2回なら許せる部分はあるけど、でも、ああもピッピピッピピやられるとね。息づかいまで笛吹いてるみたいに「フィー」ってなっちゃってたからね


WEIGHT CHAMPION

（笑）。最初はね、「いいなぁ」と思ったけど、やっぱり同じネタ何回もやられると辛いでしょ。それと一緒ですよ（笑）。

――ガハハハ！　ネタという言葉が出てくるところが、さすが、ビートたけしファンという感じですね。話は変わりますけど、ビートたけしのどういうところが好きなんですか？

小川　う〜ん、向こうもひとつの、お笑い系の首領ですよね。それで、すべて世間を知ってるっていうか。こないだ浅草キッドと対談したんですけど、話を聞いてると、会長（猪木）とたけしさんって、どうも同じようなことを言ってるみたいで。

――2人は、タイプは違っても、世界を視野に入れてるところとか、常に世間に目が向いてるところとか、共通点はありすぎますよね。

小川　会長はプロレスだけじゃないじゃないですか。ビートたけしもお笑いだけじゃないですよね。だから、常に見てしまうっていうか、引き込まれてしまう。

――ああ、引き込まれる。そういう点でも猪木さんと共通点ありますよね。

小川　で、自分の弟子を抱えて指導したりとか。

――猪木さんがビートたけしだとすると、小川さんはたけし軍団でいうと誰になるんですかね？　もの凄くくだらない質問ですけど（笑）。

小川　……わかりませんねぇ。軍団も名前が複雑過ぎて、ひとりずつフルネームで覚えてないんですよ。こないだ初めて浅草キッドのふたりの名前が、水道橋博士と……。

――もうひとりは玉袋筋太郎（笑）。知らなかったんですか？

小川　いや、水道橋博士は読めるけど、もうひとりは「どうやって読むんだろう?」って（笑）。

――「タマブクロキン・タロウ」と読んだりとか（笑）。

小川　そうそう。それが「スジタロウ」とはねぇ（笑）。

――浅草キッドも強烈なプロレスファンで、1・4の闘いを見て、目が覚めるどころか、目が冴えきっちゃってるんですよ（笑）。

小川　なんかね、最近『目を覚ませ』ってテレビ番組の題名にされてるみたいで。

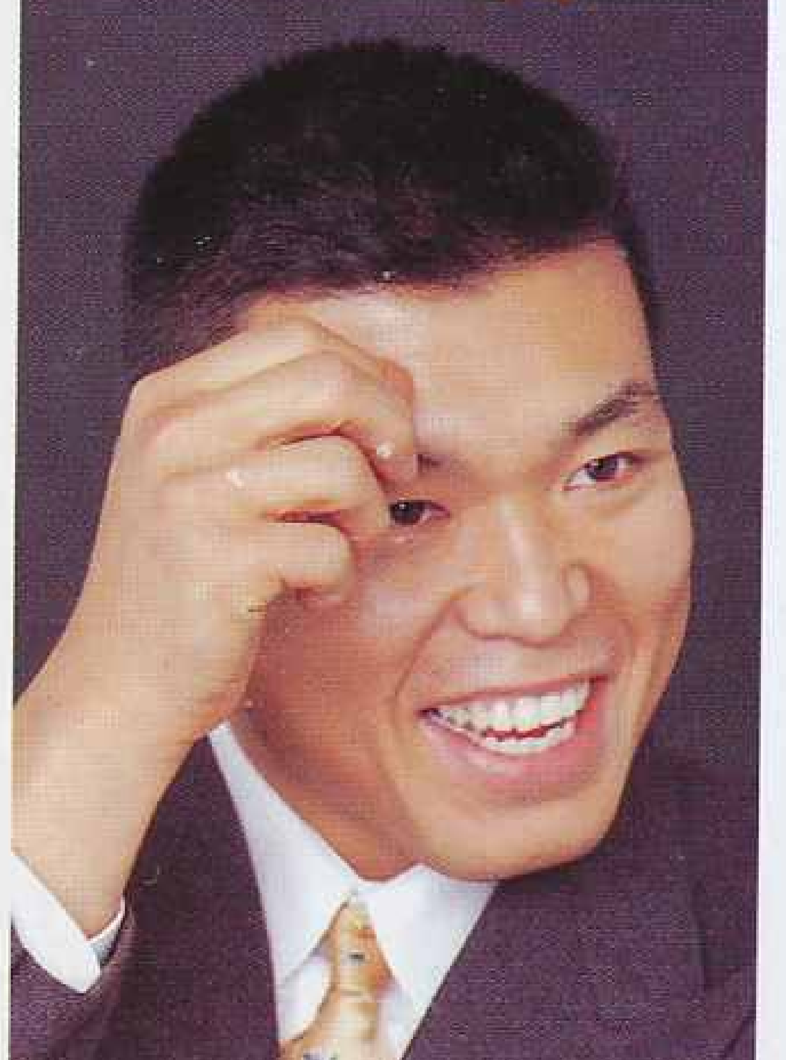
――飛行機ポーズもナインティナインとかが使ってますからね。かなりの部分でお笑い界にも貢献してますよ（笑）。





【おがわ・なおや】1968年3月31日東京都出身。193cm、120kg。高校時代から柔道を始め、86年に明治大学入学。柔道の主な経歴は、86年全日本学生選手権優勝、87年世界選手権無差別級優勝、89年世界選手権95kg超級＆無差別級優勝、92年バルセロナ・オリンピック95kg超級銀メダル。97年、新日本のリングでプロ格闘家として衝撃のデビュー。今年1月4日には橋本真也を喧嘩マッチで長期欠場に追い込む"1・4事変"を起こした。昨年正式に旗揚げしたUFOのエースであるとともに、NWA世界ヘビー級王者にも君臨。マット界を揺るがす存在となる





小川　ワハハハ。だといいですけどね。

――で、さっき見事な変身ぶりっていうことを僕は言ったんですけど、柔道時代は「中国の大人（たいじん）」を思わせる」とか、「茫洋としたスケールを感じさせる」とか、誉めてんだかケナしてんだか、よくわかんないような言い方をされてましたよね。

小川　あんまりね、マスコミ受けよくなかったですよね。あんまり取材受けなかったですから。

――割と「やる気があるのかないのかわからないタイプ」みたいな書き方もされてましたし。

小川　前の時代が、山下（泰裕）、斎藤（仁）両選手の時代が、「これだけやりました」「血みどろになりました」とか言ってるから、じゃあ「俺は違うぞ」って思って。

――なるほど。人と同じ自己表現をやりたくないと（笑）。

小川　練習はね、やらされたっていうか、やったっていうか半分半分なんだけど、やったっていうことを表に出すのが悔しかったから、「全然やってない」とか言っちゃって。

――ガハハハ！　表現方法が違うわけですね。やっぱり、ビートたけし出現以降、『ひょうきん族』以降は違いますよね（笑）。

小川　そうそう（笑）。うまいじゃないですか、前の世代は。「血の滲むような練習をしてきた」とか。「血の滲む」ってね、そりゃあ練習したら血は滲みますよ。「吐くぐらい練習した」とかさ、どうやって練習するのかと思って（笑）。"そうかなぁ？　ああは言ってるけど、俺のほうが練習したぞ"なんて思ったりね（笑）。

――僕らの世界でもありますよ。「吐き気がするほどめまいがした」とかヘーキで書かれると、"そりゃないだろ"ってツッコミたくなりますからね（笑）。

小川　そのころは、「10年早い」っていうのかな？　俺は10年前、20歳の頃は、なにかというと「新人類」って言われてましたからね。

――懐かしい言葉ですね（笑）。ちょっと早すぎたんですね。表現として（笑）。

小川　いまだったらこういう話しても通用するけど、早すぎたんですね。まだその頃19歳だからね。

――大人たちには、小川さんがなにを考えてるか理解できなかったんですね。

小川　ましてや書き手が理解できなかったんでしょうね。

―「コイツは柔道をナメてるのか」って感覚で見てたんでしょうね。プロレスや格闘技も、昔だと『空手バカ一代』とか『四角いジャングル』とか、「血の汗流せ」って感じの劇画系でしか表現できなかったけど、小川さんたちの世代だと、『1・2の三四郎』とか、ギャグを交えた漫画でも、十分プロレスの面白さを表現できる時代になりましたよね。

小川 『キン肉マン』とかね。

―はいはい（笑）。その違いはありますよね。

小川 そうですね。っていうか、もうゴマカシきかないじゃないですか！　正直言って。

―「要は強くなきゃいけないんですよ」ということですね。

小川 いまはカラクリをわかっちゃってる時代って言われるじゃないですか。

―プロレス以外でも、いろんなジャンルがそうですね。

小川 だから、あれこれ考えるより、素のままのほうが楽かなって（笑）。社会的な話になっちゃうと、「会社のために」とか「こんなに尽くしたのに」とか、そういうのがあるでしょ。50代ぐらいのサラリーマンとか。「会社のために」って、自分で自分を使い分けてたら、いつの間にか自分を失っちゃうっていうことが。

―それこそ「血の滲むような」って感じですよね。そういう世代は、そういう“鎧”を付けたからこそ迫力が出たってことも言えますけどね。でも、そういう鎧が時代に合わなくなってきてるんですよね。

小川 合わないっていうか、自然にそうなるってことは、これから世の中そうなっていくんじゃないですか？

―プロレスマスコミが書かないことが、インターネットで、ファンの側から広がっちゃう時代ですからね。それがすべてホントなわけないんだけど。

小川 批判になっちゃうかもしれないけど、プロレスマスコミが「プロレスってもんを十分知ってるよ」っていうふうに言ってるでしょ。それで書くものになると「えっ？」っていうようなことばっかりじゃない。だから『東スポ』だけにお願いしてるんですけど（笑）。

―ガハハハ！　そういう理由があったんですね。

小川 『東スポ』さんっていうのは、「許される新聞社」でしょ。でも『東スポ』に敢えて言うなら、「最近はちょっと固いよ」って（笑）。

―あれでも固いですか（笑）。

小川 固いよ〜。昔はもっと凄かったじゃないですか。だから最近、『東スポ』が普通の新聞社になっちゃったって、いつも嫌味言ってるんですけどね。

―ガハハハ！　ほかに好きな新聞や雑誌とかありますか？　好きなテレビとか。

小川 あ、好きなテレビはね、『火曜サスペンス』かな。『火曜サスペンス』は見逃せない！（笑）。

―ガハハハ。なんかネタのような気がするんですけどね（笑）。

小川 いやいや（笑）。連ドラっていうのは嫌いなんですよ。毎週毎週見るっていうのは。やっぱ2時間で決めるんなら決めろよっていうね。起承転結がハッキリしたのがいい。見慣れてくるとね、犯人ってすぐわかる。そうすると、「この犯人、どういう仕草するのかな」って、ついつい細かく見ちゃうんですよ。

NAOYA OGAWA

もうゴマカシきかないじゃないですか！　正直言って。だから素のままでいたほうが楽かなって（笑）

―観察しちゃう。結構マニアックなとこがありますね。NIKEにも詳しいらしいし（笑）。

小川 マニアですよぉ！　ドラママニアですよ。

―さすが、『スクールウォーズ』に憧れて、高校ではラグビーをやりたかった人は違いますね。

小川 いまは『火曜サスペンス』だから（笑）。まぁ、ほかに野球が始まれば野球見るしね。

―他のスポーツは興味あるんですか？

小川 スポーツ全般が好きだからね。

―柔道やってたときは、スポーツマンっていう認識はあったんですか？

小川 スポーツマンといえばスポーツマン、武道といえば武道ですかね。

―僕はスポーツっていうか、「スポーツ」の画一的なイメージが嫌いなんですよ。「清く、正しく」っていう画一的な押しつけが（笑）。

小川 そんなことないんだけどね〜。

―ああ、オリンピック行った人にそう言われると心強いなぁ。僕、スポーツ見直しましたよ（笑）。

小川 かえってアマチュアのほうが「清く、正しく」なんてできるもんじゃないですよ！　4年に一度の代表が1人しかいないんだから！　選手同士仲よく見えるでしょ。でもタヌキですからね（笑）。

―化かし合いですか。

小川 そうそう（笑）。

―アマチュアの世界でも、トップクラスになってくると、せめぎ合い、ツバ競り合いは避けられないもんなんですね。

小川 でも、ある意味では純粋ですよ。変な細工とかするわけじゃないし。

―それはわかりますよ。ただ「清く、正しく」一辺倒っていうのが嫌なんですよね。マスコミの書き方とか。「そんなに底の浅いものなのか、スポーツってもんは」って思っちゃうんですよ（笑）。

小川 結局、普段接してないじゃないでしょ、選手と。その試合ごとに来て、その場で人の話を聞いて書くだけでしょ？　プロレスって毎日のように記者が追ってるじゃないですか。そこが違うかなって。

―そこではいろんな面を見るわけですからね。結局、猪木さんの「プロレスは闘いだ」っていう言葉に集約されて、さっき言ったアマチュアにもある神経戦、エゲツないせめぎ合い、ツバ競り合いを含んだものが「闘い」ですよね。「闘い」のあるスポーツと「闘い」の希薄なスポーツってあると思うんですよ。スポーツを「プロレス」か「格闘技」に置き換えてもいいんですけど。だから1・4には「闘い」があったんですよね。

小川 ああ。なるほどね。いまは野球のほうが、よっぽど闘いがあると思うからね。

―どこと比べてですか？（笑）。

小川 いや、どこって言うわけじゃなくて（笑）。

―小川さんは、昔からヒーロー願望っていうのはあったんですか？

●

NAOYA OGAWA

ヒーロー好きで、ヒーローに勝ってほしいんだけど、「負けるとどうなるんだろうなぁ?」って思っちゃう

小川　ヒーローがいつ負けるのかなっていうのを考えてたね（笑）。

――ガハハハ！　どちらかというと悪役好き？

小川　ヒーロー好きですよ！

――どっちなんですか！（笑）。

小川　いや、ヒーロー好きなんだけど、「ヒーローが負けるときはどうなんのかな?」って。「いつ見ても勝ってほしいなぁ」っていう気持ちもあるけど、負けたら、「あぁ、こうやって負けちゃうんだ」っていうね。歴史的なものを見たいんですよ。

――要は強いものが好きなんですね。

小川　そう。強いってことは尊敬できますよね。だってトップに立った気持ちがわかるじゃないですか。

――小川さんも柔道界でズッとトップに立ってきたから、立場的に下の選手にはわからない部分を経験してるわけですよね。

小川　だからまず、ズッと独走状態だったんだけど、常に僕への指示は厳しかったですからね。先生が「人の三倍の自信がなきゃダメだ」って、常にね。

――高校時代も練習漬けだったんですよね。

小川　練習漬けだったけど、大学とは比べもんになんない。

――ちなみに、練習から帰るとサザンオールスターズを聞く日々だったとか（笑）。

小川　聞く日々もなにも、歌わされるんで、歌い飽きちゃったんですけどね（笑）。

――サザンの桑田（佳祐）さんは、猪木さんのファンですからね。

小川　あ、そうなんですか？　僕、サザンオールスターズのコンサートは3～4回見に行ってるんですよ。なかなかチケットが買えなくってね。

――猪木さんがサザンのプロモビデオに出てますよ（笑）。きっと、小川選手のファンですよ。

小川　あ、そうですか？（テレコに向かって）ありがとうございます！　僕、4回コンサート見ました！……でも、サザンのコンサートってね、キツいんですよ。

――なんでですか？

小川　いきなりみんな立っちゃうからね！　最初っから最後まで総立ちだから。座って見ようよ！

――ガハハハ！　NWA世界王者からの提言。「サザンのライブは座って見よう」（笑）。

小川　ちょうど土曜日でね、練習で疲れてるでしょ、柔道のとき。土曜日の練習って一番キツい。「明日休みなんだから、もっとやれ！」ってなるから。

――あ、なるほど。

小川　「あ～、今日の練習シンドかった」と思って、座って始まるのを待ってるでしょ。6時ぐらいからコンサートでしょ。で、終わったら9時半とかで、もう腰痛くなっちゃって（笑）。

――サザンのライブで腰が痛くなったNWA世界王者！（笑）。

小川　それで、もうねぇ、最初っから立っちゃうから！　いきなり立っちゃうとは思わなかったからね（笑）。

――「いきなり立つ」っていうのにこだわりますね（笑）。

小川　立っちゃうから見えない！　で、座ってると視線感じるでしょ。ひとりでシラけてると、視線を感じるんですよ。「ヤバい」と思って。で、「しょうがねぇな」って立ってね。

――ガハハハ。立ちますか（笑）。そういえば以前、高校時代の練習は「その日その日で自分がヒーローになれるか、なれないかが問題だった」って言ってましたけど、小川さんは、人の視線を浴びてるほうが力が出るタイプですか？

小川　浴びてるもなにも、監督がズッと目線を離さなかったですから。

――あ、そうか。監督の視線が（笑）。

小川　「あ、来た！」と思ったらズッと離れないからね。そういう日々が続いて、それがそのうち慣れてきて。だから、手が抜けなかったんで、そのまま手を抜けない練習を覚えてしまったというね（笑）。最初、高校では、みんな同じような練習をして、「みんな凄いなぁ。俺だけ、なんでヘトヘトなんだ?」と思ってた。で、大学入ってマンツーマンになった。で、また「みんな凄いなぁ、俺だけなんでひとりで身体がキツいのかなぁ?」と思ってね。それから二年になり、三年になり、あるとき、フと視線をそらしたら、「あれ？　アイツらやってねぇじゃねえか！」って。「あれじゃ、疲れねぇよな」って（笑）。

――ガハハハ！　自分だけ練習の質と量が違ってたと。目が覚めたわけですね（笑）。

小川　大学三年になって、やっとそれに気付いた。だけども、慣れちゃってたから。そのころは「サボること」に関しては目が覚めてなかったから（笑）。

――じゃあ、柔道時代っていうのは練習ぐらいしか思い出はないわけですか？

小川　学生時代も社会人になってもそうだったですね。柔道はもう、やり飽きました（笑）。

――あ、やり飽きた（笑）。やり抜いたって感じですかね。

小川　10年間世界でやってれば、やり飽きるでしょう。半分以上はプロですからね。

――やっぱり世界の強豪とやってると、揉まれ方の部分でいうと全然違うもんですよね。

小川　そうだね。日本だけだと窮屈。

――アマチュアのころからワールドワイドだったんですね。

小川　考え方は、そうですね。

――プロレスもワールドワイドだけど、旧ソ連勢が参戦してきたのは、10年くらい前からですからね。

小川　ちょうど、俺が20歳のときかな？　ちょうど試合でソ連に行ってたんですよ。そのときに新日本が来てたんですよ。

――あ、そこで猪木さんと初めて会ったんですよね？

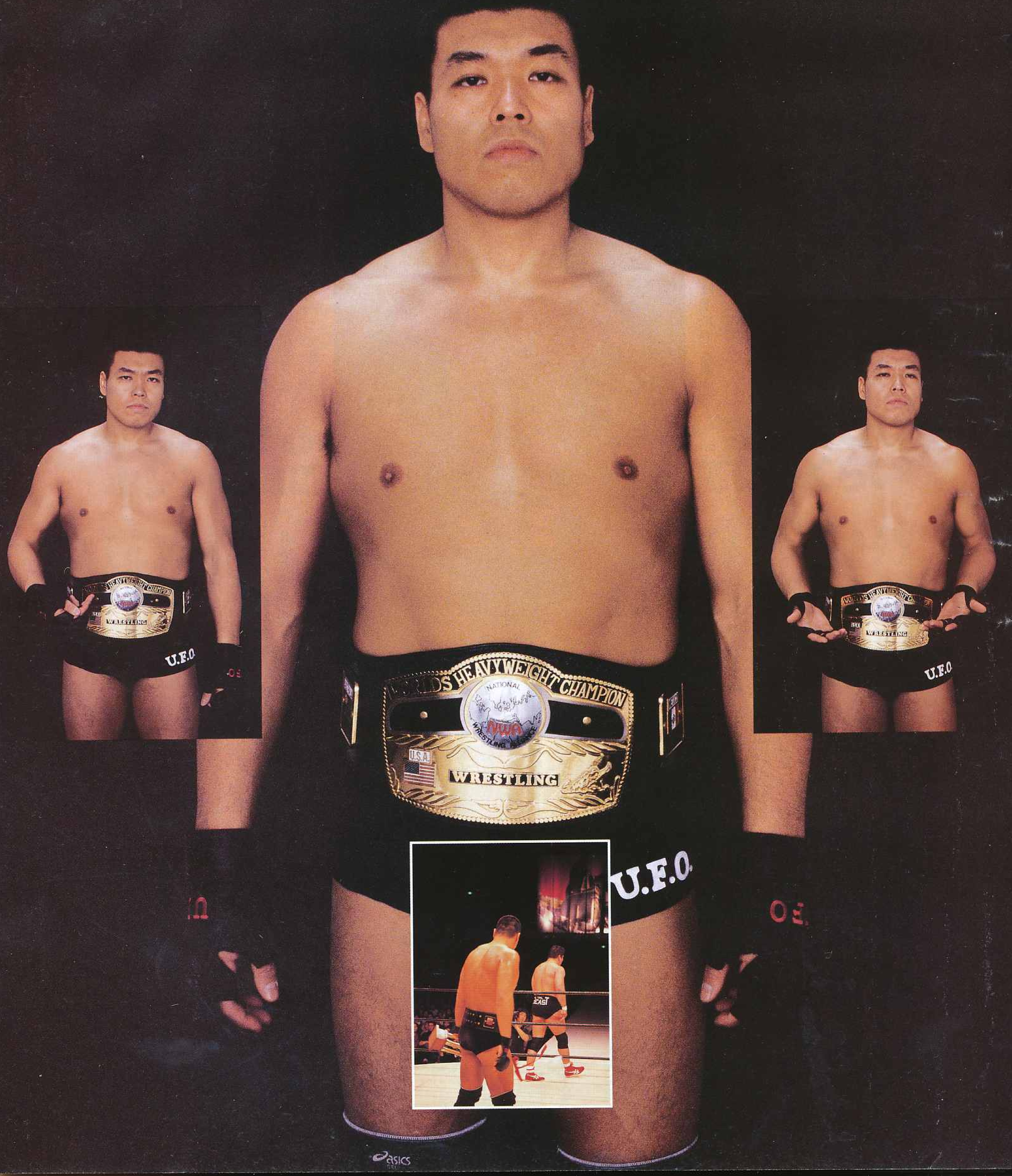
小川　「なんでこんなとこでプロレスやってんのかな?」って思って見てたのがね、平成元年には東京ドームでやったでしょ（猪木vsショータ・チョチョシビリ）。「凄えなぁ」と思って。でも、そのときは「猪木、勝てねぇんじゃねえかな?」って思ってましたね（笑）。

――強さを知ってますからね。

小川　ソ連の体型って独特ですからね。短足で胴太で首が太くてっていう。柔道でもそういうのが多くてね。身体は固いんですよ。闘うと強いんですよ、力が。でも3分まで！　3分凌ぐと勝機あり。それは徹底してました。

――リングスには旧ソ連の選手が上がってますが、プロのリングで、旧ソ連勢と

格闘
MAKE JUNGLE
ジャングルを守るより
ジャングルを作る!!



闘ってみたいという気はありますか？

小川　怖いねぇ。3分間のパワーを知ってるだけに。

――トラウマになってたりして（笑）。

小川　でも、その3分間だけなんですよね、怖いのは。

●

――92年バルセロナ・オリンピックで優勝しましたよね。

小川　負けました！

――あ、優勝じゃない。銀メダルでしたね。

小川　わざと言ったんじゃない？　いま（笑）。

――いや、単なる言い間違いです（笑）。そのバルセロナ後になると、金メダルへの期待が大きかった分、ほとんど非国民扱いされましたよね。

小川　思いっきりね！　ホントにヒドイもんだった！

――そのころからスキャンダルの波を乗り越えなきゃならない宿命なんですよね。

小川　でも逆にね、それがあったから、いま生きてられるっていうかね。マスコミには絶対負けない！っていう気持ちがあるから!!

――かなり叩かれましたよね。

小川　叩かれれば叩かれるほど、若者に「頑張ってください」って言われましたけどね。

――ふさぎ込んだりしなかったですか？

小川　ふさぎ込むフリしてましたね。

――ガハハハ！　じゃあ、ふさぎ込んでないんじゃないですか。

小川　要はね（笑）。こういう場合は、やっぱり、ふさぎ込まなきゃいけないのかなと思って。

――やっぱりビッグハートだなぁ。バルセロナ後に、ある種のスキャンダルの波を乗りきって、プロの世界では今年、1・4というスキャンダルを起こしたわけですけど。

小川　『週プロ』にね、「風化させるなよ！」って言ったら、次の週に「小川、マスコミ批判！」なんて見出しになっちゃってね。「まいったなぁ」って思ってね。でも、その次の週は表紙で『週プロ』さんがやってくれましたんで。まぁ、「行ってこい」かなぁって（笑）。



――ああ、「プロ格王」というコピーの号ですね。

小川　この場を借りて、『週プロ』さん、ありがとう！　感謝してま～す（笑）。あのときは、「やったな、『週プロ』！」と思って。

――「さすが、『週プロ』！」だと（笑）。

小川　「俺も変わり身が早えなぁ」と思って（笑）。でも、あの号はわかってくれてる書き方してくれてたんで、よかったですよ。

――小川さんにしてみると、『週プロ』もようやく目覚めたって感じですか？

小川　早いッスね、『週プロ』さんは（笑）。トップですよ！　まぁ、それを言ったら『紙プロ』がトップなんですけどね。

――ウチが一番乗りですよ！（笑）。

小川　一番乗りで、一番危ない！

――やめてくださいよ、いいがかりは（笑）。でも、インターネットや読者の声を聞いていても、風向きはUFOというか、小川選手なんですよ、間違いなく。だけど、3・14の大会は満員にならなかった。そういうジレンマはないですか？

小川　まだUFO自体に認知度がないんじゃないですかね？っていうか、ファンが期待してるのは新日本との抗争になっちゃうのかな？　それはわかってるんですけどね。しょうがないじゃないですか!!（怒）。

――いや、僕は責めてるわけじゃないです（笑）。

小川　俺はニーズに応えたいんですよぉぉ！　俺は叫んでるんだけど、叫べど叫べど音沙汰なしと。ホントに向こうに人がいるのかなっていうくらい。風化させない努力はしてたんですけどね。だからあれだけ吠えたんだけどね。でも、俺もついつい、「いいや」って思って（笑）。

――ガハハハ！　なぜだ！（笑）。スキャンダルと言えば、佐山聡さんのUFOからの離脱問題というのはどうなってるんですか？

小川　どこでそういう噂っていうのが流れたのか。結局は面白おかしくスキャンダルになっちゃうのかな？　これは、言える範囲も言えない範囲もなくて、俺はよくわかんないですからね。でも時間が解決するんじゃないですか？　これは風化させたほうがいいのかもしれない。やめましょう（笑）。

――やめますか（笑）。

小川　でも、こういうことで、ファンが疑心暗鬼になっちゃうっていうのも頷けますよね。でも、もういいんじゃないですか？　これからファンが疑心暗鬼にならないようにすれば。

――じゃあ、佐山さんの話題にはあんまり触れたくない？

小川　触れたくないっていうか、いままでやってきたんですから……。もともとアマチュア志向が強い人じゃないですか。事実、佐山さんもあんまり現役のほうに興味ないみたいなんで。「離脱」って表現もどうなのかなぁ？

――「辞任」とか「解任」という書き方もされましたけどね。

小川　まぁ表現として離脱が当てはまるのかっていったらクエスチョンですよね。取りあえず、自分がチャンピオンになって、いま一段落ついたじゃないですか。

――前々から佐山さんはプロだけじゃなくて、アマチュアのほうもやっていきたいって言ってましたからね。

NAOYA OGAWA

俺は叫んでるんだけど、叫べど叫べど音沙汰なし！
ホントに向こうに人がいるのかなっていうくらい

小川 両立は厳しいんじゃないですかね。でもね、人の考えることですから。遮ることもないし、やりたいものがあればやればいいし。ドロドロしたケンカとか、金銭トラブルとか、そういうのはなんにもないから、どう表現していいかわかんないですね。裏切りでもないし。

——UFO事務所にも顔を出してますしね、佐山さんは。

小川 うん。そんなことより、UFOっていうのは先を見なきゃいけないなと。

——猪木さんが凄いことを言ってたんですよ。環境問題の話をしてたら、「ボランティアの人たちは、『緑をなくしちゃいけない』『緑を大切にしよう』『ジャングルは守らなきゃいけない』とよく言う。確かにジャングルは守らなきゃいけないんだけども、じゃあ今度は逆にジャングルを作りゃいいじゃねえか！」って（笑）。ブッ飛びましたね、あの発想には。

小川 だからね、会長は、「心地よい場所を作ったのがどうのこうの、プライドがどうのこうのってね、そんなの壊しゃいいじゃねえか！ そんなもんがあるから邪魔なんだよ!!」って言うんですよ！ それを聞いたとき、俺もタマげましたけどね。

——ガハハハ、猪木イズムですねぇ（笑）。あ！ そういえば、噂によると小川さんが「『紙プロ』は高い」と言ってたって聞いたんですが（笑）。

小川 高いですよ～。プロレス関係の雑誌で一番高いんじゃない？ 暴利ですよ！

——またヒドイこと言いますね！ でも、『STRONG STYLE』っていう、素敵な某団体のオフィシャルマガジンがあるんですけど、それは900円以上しますよ。

小川 それは……ヘビーですね（笑）。

——ヘビー（笑）。

小川 思うんですけど、『紙プロ』ってサイズがデカイじゃない。あれ、四分割ぐらいにして週刊にしたらいいじゃないですか。

——ガハハハ！ 四つに割って。

小川 全部の記事に「コンティニュー」とか付けて。

——続かせますか（笑）。その場合、値段はどうすればいいんですか？

小川 値段はそのまま！

——そのほうがよっぽど暴利ですよ！（笑）。でも、小川さんの前回のインタビューは（NO15）もの凄い反響で、読者アンケートも過去を含めてダントツの一位。ホントにハガキの量とか凄かったんですよ。

小川 よくラジオ番組とかで、「たくさんのFAXが来て」とかいって、全然来てないのあるじゃないですか（笑）。

——いや、これはホントです。なにせゴマカシのきかない時代ですから（笑）。では最後に、その読者になにかひと言お願いします。『紙プロ』を買うな！」でもなんでもいいです。

小川 う～ん……よし、こうしよう！『紙プロ』を読めばUFOがわかる、UFOの本音がわかる、UFOの方向性がわかる！

——いや、実は、僕もUFOがどこへ飛んで行くのか、まったくわかってませんからね（笑）。

小川 でも、プロレス界全体を敵に回してる『紙プロ』は、読む価値はありませんよ、と。ワーッハッハッハ（笑）。

——実にありがたいお言葉です（笑）。これからも、さらに加速して、「NWO」精神で行ってほしいですね。

小川 は？ なんですか、それ？

——「ニュー・ワールド・オガワ」です（笑）。

小川 ワハハハハ！ それで行こうかな。でも、僕はいまNWAですから。いつ何時でも誰の挑戦でも受ける、ということで。これからも、マット界に渦を起こしていきますよ！

【4月13日／六本木アートセンターにて収録】

このインタビューの3日後の4月16日に小川直也の『PRIDE』参戦記者会見が電撃的に行われたわけである。この後の動きを追ってみると、4・29にはエキシビション参戦、7月に行われる『PRIDE.6』に本格参戦する方向が最有力のようだ。

4・29はヒクソン・グレイシーがホイラー・グレイシーと柔術エキシビションマッチを行うことも決定している。

小川とヒクソンの名古屋でのニアミスは「宿命の出会い」となりえるのかどうか。「ナゴヤのリングで勝負しろ！」ということになるのかどうか。

そして4・29では、小川が対戦表明した高田延彦とのニアミスも避けられない。

いずれにしても、『PRIDE』襲撃で、マット界のなにかが動き出すのは間違いない。

それに加え『PRIDE』以外でもUFOと小川直也の周辺には、まだまだ大きなうねりがありそうな気配がある。

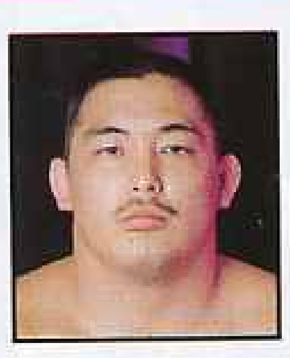
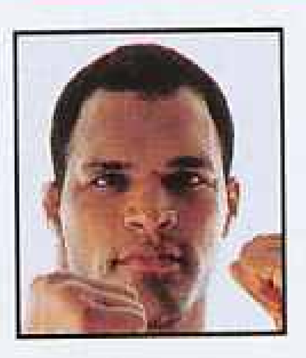
閉塞するマット界を、どこかであざ嗤いながら、大きな渦を巻き起こしそうなUFO。

もしかしたら、この号が発売される頃には、ビックリするような展開が起こっているかもしれない。

いつ、何時、何が起こるかわからない——そんなUFOは、やっぱり抜群に面白いのである。

UFO襲撃と同時に青天のヘキレキ！
エンセンVSケアー延期!!
どうなる「PRIDE.5」

4・29（祝）名古屋市総合体育館レインボーホール
開場15:00　試合開始17:00

佐山聡UFO電撃離脱（?）よりも、ショッキングな出来事が起こった。"ヒクソンにもっとも近い男の座"を賭けて激突するはずだった、エンセン井上vsマーク・ケアー戦が、医師によるケアーの右肘関節遊離体（関節ネズミ）摘出勧告のため延期になった（ケアーは現地時間の4月16日に手術）。

エンセンは当日、違う相手と試合が組まれる予定だが、この試合に賭けていたエンセンの落ち込みようは想像にかたくない。

ほかに二重、三重に好カードが張り巡らされてるから興行的には助かったものの、神様のイタズラがエンセンに向いたことが気になる。めげるな、エンセン！

■『PRIDE.5』は、「SKY PerfecTV!」の「ch.112パーフェクト チョイス」にてPPV放送（視聴料金2.000円／番組）当日17:00より試合終了時まで完全独占生中継！



桜庭

Long Interview

勝っても 負けても 目指すは スーパーサイヤんだ!!

聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／遠藤政文
photographs by Masafumi Endo



和志

Kazushi Sakuraba

4・29『PRIDE.5』で3度びブラジル勢を迎撃!!

相手は“超新生”ビクトー・ベウフォート!!

いまや、ブラジル勢を相手にしても、「ぜ～んぜんへーキ。ノー問題!」という安心感を与えてくれる存在となった桜庭和志。『PRIDE.5』の相手もカーウソン・グレイシー派のビクトー・ベウフォート（UFC初出場、初優勝）というやっかいな相手に決定。が、試合後に読んでもノー問題なこのインタビューを読めば、誰が相手だろうと、「いつ何時でも、桜庭は桜庭」なのがわかっていただけるだろう。つまり、そういうことです（ニコニコ）。

「プロレスラーはホントは強いんです（ニコニコ）」――マット界の歴史に残る名言を桜庭和志が吐いたのは、97・12・21のことだった。高田延彦の〝世紀の敗戦〟から約2ヶ月後のことである。

「プロレス界の救世主」となってから、早いものでもう1年半。その強心臓と技術で世界の強豪を打ち破りつつ、VTでも名勝負は可能ということを証明し、その名を一気に世界に轟かせてきた桜庭。

ところが、昨年10・11『PRIDE.4』では、一転、悔し涙を流すことになってしまった。ブラジル勢とブラジル幻想に一泡吹かせる最大のチャンスだったアラン・ゴエス戦は、1R目こそ見事な〝サク・マジック〟で押しつつ場内を沸かせたが、2R目からはゴエスが勝負に出ずに結局フルタイムドロー。引き分けなのに大喜びするブラジル勢の、あまりにも姑息でプロらしくない姿に桜庭は泣いてしまったというわけだ（本人はいまだにサク・スマイルでごまかすが）。

そして迎える4・29『PRIDE.5』。桜庭はゴエスと同じカーウソン・グレイシー一派の第12回UFC優勝者・〝超新星〟ビクトー・ベウフォートと対戦することになった。

ゴエス戦のときもそうだったが、「今度こそ桜庭は危ないかも……」という声が周囲からは聞こえてくる。「危ないんだぞ、サク！」と思いつつ緊張感を持って道場を訪ねると、そこにはやっぱり変わらないサク・スマイルが華を咲かせていた。

この号が出るころには試合が終わっている地域もあるだろうが、大丈夫。終わってから読んでも、サクが楽しませてくれます、きっと（ニコニコ）。

※

――桜庭さんのゲーム話も、もはやネタとして古くなってきたんで、今日はゲームの話は止めようと思ってるんですよ。

桜庭　（ニコニコ）。

――といいながら聞きますけど、最近は何をやってるんですか？

桜庭　ん～、3～4日前に『桃太郎電鉄7』を。借りたヤツですけど。

――あ、アレク（サンダー大塚）選手もマルコ（・ファス）に勝つ前の日に『桃電7』やってたらしいですよ、1人で（笑）。

桜庭　あれは…… 〝貧乏神〟が頭きますね。思いっきりお金取られますもん。ボクは2人でやるんですけど、必ず1人か2人はコンピューターの弱いヤツを入れといて、〝貧乏神〟はそいつらにつけるようにしてるんですよ。

――ズルいですね（笑）。

桜庭　だ～って、貧乏神ついたら面白くないじゃないですかぁ！

（編集部注：ゲームの説明は面倒なので、各自やること）

――『レガイヤ伝説』は？

桜庭　『レガイヤ伝説』は半年ぐらい前からやってるんですよぉ。もう最後のほうなんですけどね、やってない。

――「やればできるものは、やらない」というか、「気分的に終わってるものはもうや～めた」っていうか、とにかく「答えが出てるもの」には興味がないんですかね（笑）。

桜庭　（ニコニコ）。そうかもしれないです。でも、とりあえず終わらせたいんで、もうすぐ終わらせます。最初は凄いハマってましたけどね。一気にやらなかったんで飽きちゃって。

――で、対ブラジルっていうのはまだ飽きてないんですか？

桜庭　アハハハ。そうきましたか（笑）。

――そう行くんですよ（笑）。

桜庭　飽きてないですよ。面白いですよ。

――じゃあ、まだゴールは完全には見えてないって感じですか？

桜庭　そうですね。

――今度の対戦相手はビクトー・ベウフォートっていうね。

桜庭　若造じゃないですか！（笑）。

――ガハハハ！　若造！　闘う前に「年下だから負けたくない」って言ってたカーロス・ニュートンより、さらに若い。どうします？　また年下ですよ（笑）。

桜庭　またもや。またまた若くてカッコいいヤツですよ！

――しかし、ホントに若くてカッコいい奴には目の色変えますね。

桜庭　5年ぐらい早いんじゃないかというところを見せてあげないと（笑）。

――ヒクソン（・グレイシー）は「10年早いんだぜ」ってゲームのCMの中で言われてましたけどね。

桜庭　ビクトーには「5年」ですね（笑）。

――ビクトーの試合はビデオで見ました？

桜庭　見てないです。ないんですもん……。

――いや、あるとかないとかの問題じゃなくて（笑）。普通、研究のために取り寄せたりとかするじゃないですか。

桜庭　まぁ、見たいですけどね。昔、何回か見たことありますけど。初めにガーッと行って勝つんですよね。

――そうです。一般的に言うと、アグレッシブ・ファイターですよね。

桜庭　始まりだけですよね？　なんか、スタミナなさそうじゃないですか。

――確かになさそうですね。UFCではランディ・クートゥアーに負けてるんですよね。

桜庭　あぁ、殴られて。

――ガード・ポジションの状態で、上になってるクートゥアーに首をガッと引き付けられてスタミナ奪われて、スタンドになってから殴り負けですね。

桜庭　でも、首引き付けられなくてもスタミナないんじゃないですか？　なんか、そういうイメージがあるんですよね。ちゃんとビデオ見ないとわかんないですけど。

――ビクトーは、ボクシングのオリンピック候補になったこともあるんですよね。

桜庭　ブラジルは（ボクシングは）強いんですか？

――わかりません（笑）。

桜庭　（アマチュア・）レスリングはそんなに強くないって話ですけどね。安達（巧）さんに聞いたら「一回戦ブラジルだよ、ヤッター！」って感じの、そのぐらいのレベルだって話だったから。

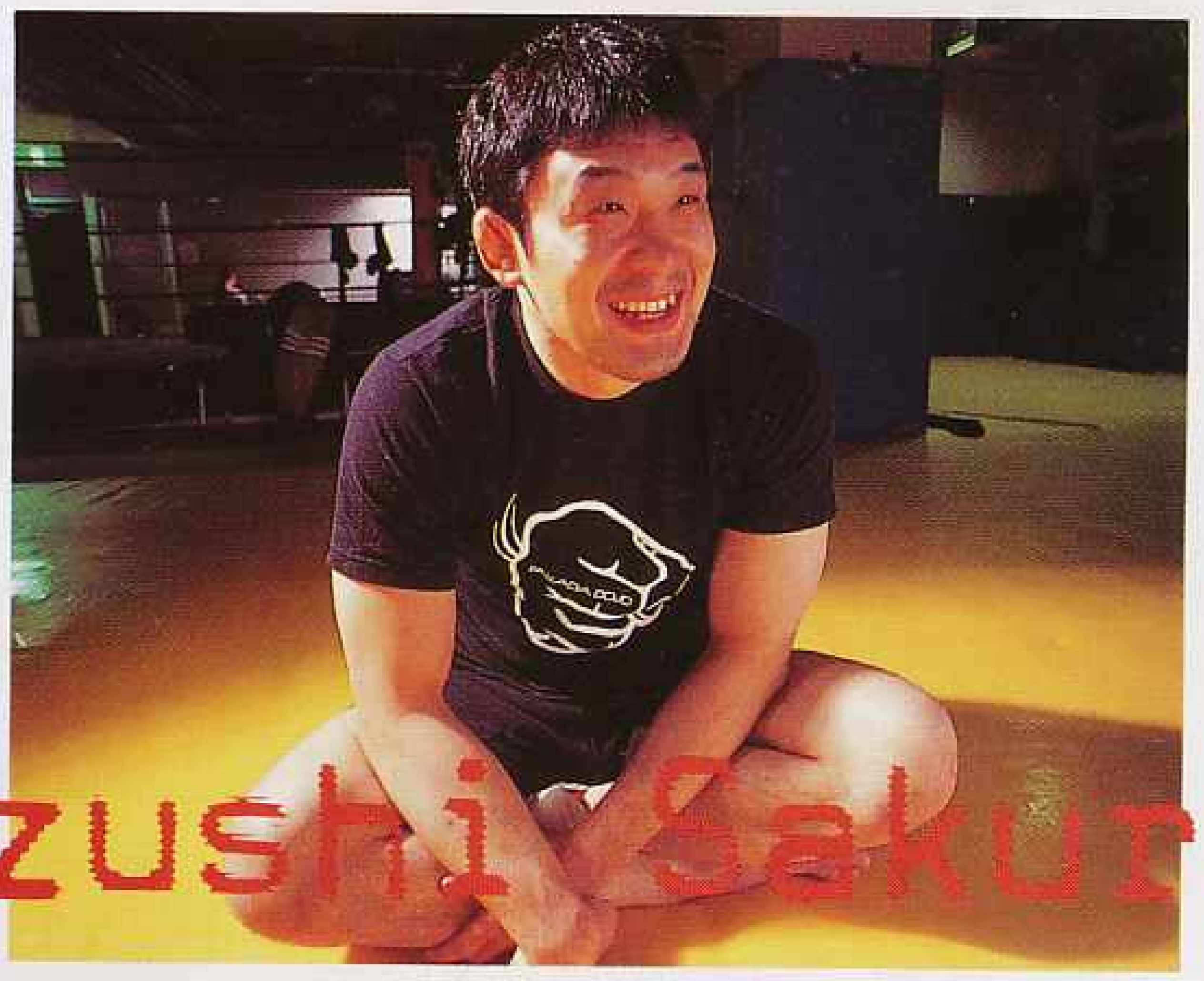
――桜庭さんが優勝した『UFC―J』（97・12・21横浜）にも来日しましたけど、あのとき、会場では試合を見たんですか？

桜庭　えーっと、あれは見てない。ビデオでちょっと見たかな？・？・？

――相手はジョー・チャールズっていう太っちょの黒人だったんですけど。

桜庭　なかなか（ビクトーが）極めれなかったヤツですよね。

――勝ちましたけどね。あのときビクトーはかなり体調が悪いってことでしたね。



スーパーサイヤ人
桜庭和志の対戦相手ビクトーのプロフィールは
P.24へ

桜庭　彼はよく体調が悪いときあるじゃないですか。まだまだケツが青いんじゃないですか！

——ガハハハ！　ホント年下には厳しいですね（笑）。いまの言葉の端々から想像すると、かなり自信アリ？

桜庭　いや～、自信ないッスよ。

——は？　ナンデスカ？

桜庭　だって、始めにガーッと来られたら、ボクもキツいですよ。でも、それに気を付ければなんとかなるかなと思って。パンチも手だけ使っても効かないじゃないですか、やっぱり踏み込まないと。もし踏み込んでくるんだったら、ボクもタックル入れるチャンスがありますんで。踏み込んでくる瞬間って一番タックル取りやすいんですよね。

——そうなると、「一瞬たりとも目が離せない」序盤戦になりそうですね。贅沢な試合ですよ。劇画だと試合開始から2分までで4週分くらい引っ張れる感じですね（笑）。見るほうも緊張感持って見ておかないと、いい場面を見逃しますね。

桜庭　下を見てないフリして足を見てるんですよ。で、ガーッと踏み込んできたときに引っかければベタッと倒れますから。まぁ、そこでパンチもらっちゃったら、やられますし。

——でも年下にやられたら悔しいですよ。

桜庭　まあ、やられそうになったらボクも寝ます。柔術戦法で。

——まるでアラン・ゴエスのように（笑）。

桜庭　寝て、起きるフリしてタックル入る（ニコニコ）。

——ビクトーは、確かに寝技の実力っていう部分ではベールを脱いでないんですよね。

桜庭　全部パンチですか？

——全部パンチ。タンク・アボットにも殴り勝ってますね。

桜庭　じゃあ蹴りますよ。ブルース・リーみたいなキックで。あれやるとパンチ届かないでしょ。

——あ、そうかそうか。ライダーキックは？（笑）。

桜庭　ライダーキックでもそんな感じですよね。

——なにかこう、固いんですよね、寝技だと。

桜庭　ガッチリ抱きついちゃって離さないって感じですか？

——そういうんじゃなくて、動きが固いっていうか。

桜庭　あ、そうなんですか。じゃあ、あんまりウマくないんじゃないですかね。

——そういう感じはあるんですよね。

桜庭　力でやるタイプじゃないですかね。ボクシングでいえばファイタータイプだから、あのモハメド・アリみたいな「蝶のように舞い蜂のように刺す」スタイルじゃないですよね。

——でも黒帯だし、カーウソン・グレイシーが養子にしたいって言ったくらいだから……。

桜庭　「よーし」って感じですね（ニコニコ）。

——ダジャレできますか（笑）。

桜庭　でも、それホントなんですかぁ？

——若き実力者という風評ですよね。UFCに登場したときでも「超新星」と騒がれましたからね。

桜庭　でも、山本喧一がスパーリングしてるじゃないですか。ボクが出た『UFC―J』の前かな。場所がないから練習させてくれ、みたいな感じで来て。たぶん。

——で、どうだったんですか？

桜庭　山本はチカラ・アームロック一回取られただけって言ってましたね。

——は？



またまた若くてカッコいいヤツですよ。5年くらい早いってとこ見せないと（笑）

桜庭　チカラ・アームロック。力で強引にグアーッてアームロック取られただけだと思いますよ。

——ああ。そういえば『UFC―J』でもメッチャメチャ強引なアームロックやってましたね。

桜庭　チカラ・アームロック？

——チカラ・アームロック（笑）。

桜庭　ボクもスパーリングやりたかったんですけど、ボクが来たときにはもう帰ってました。

——そのときは縁がなかったんですね。

桜庭　ちょっと寝坊しちゃって。

——なぜだ！（笑）。

桜庭　「なんだ、もう帰ったのか！」って（笑）。そのときは身体大きかったですよ。110キロぐらいはありましたよね。

——いま95キロ前後ですかね。桜庭さんはいま何キロですか？

桜庭　ちょっと太りましたね（笑）。85～86キロぐらい。

——この間まで83キロくらいで、完全にミドル級でしたからね。体重差っていえば、『SRS』（CX系の格闘技情報番組）で、エンセンとスペシャル・スパーリングでぶつかりましたよね。そのときの体重差が……。

桜庭　15キロぐらいありましたねぇ。

——エンセン、ビックリしてましたよ。「桜庭さん、83キロしかないって言ってたヨ～」って。

桜庭　エンセンさんがデカくなりすぎなんですよ～（笑）。だってボクらがキングダム時代に練習やってたときなんて、ボクが88キロぐらいでエンセンさんが90キロ前後でしたからね。でも、体重差っていうより力の差を感じましたね。強いし。

——パワーの差ですね。エンセンは瞬発力もあるし。でも、あのときの桜庭さんのムーブは実に見事でしたね！

桜庭　いやぁ、ああなると動くしかないで

しょう（照）。

――よくあれだけ力を抜けるなっていう感じですよね。

桜庭　でも力を抜くから動けるんですよ！　力入れちゃったら動けなくなりますよ。

――高田道場で「桜庭和志の脱力教室」でもやったほうがいいですよ（笑）。

桜庭　ヒャハハハ。でも全身を脱力するんじゃないんですよ。例えば押さえ込むときに力を入れなきゃいけない部分っていうのがあるじゃないですか。どこを押さえたら相手が動けなくなるっていうのが。

――ツボですね。

桜庭　そうです。例えば横四方でも、押さえ込むときに相手の肩口を押さえ込んで、ブリッジされないように相手の首の下に手を回して、あと膝を締めるじゃないですか。そしたら相手の身体を締め付けるんですよ。だから動けなくなるんですよ。その部分以外は力いらないじゃないですか。

――ポイントが大事だってことですね。

桜庭　ええ。ポイント、ポイントを押さえとけば、他の部分は力抜いてもいい。

――そのコツを掴むのが難しいんでしょうね。

桜庭　へ、そうなんですか？

――いや、ボクに聞かれても（笑）。

桜庭　だからマッチョな人が多いんですかね？

――ＵＦＣとかには力に頼る人多いですよね。でも、そのツボを掴み取るのって、考えたらモノマネもそうですよね。モノマネする対象の人の面白いツボを掴み取ってデフォルメしていくっていう作業でしょ。そのツボを見抜けない人はやっぱりモノマネ、ヘタですよね。モノマネと比較するのもヘンだけど（笑）。

桜庭　ヒャハハハ。でも、そうですよね。似顔絵とかも。

――だからツボとかコツって大事ですよね。そうすると、今度の相手のビクトーは、そんなに寝技のツボを心得てる人じゃないな、という感覚はあるわけですか？

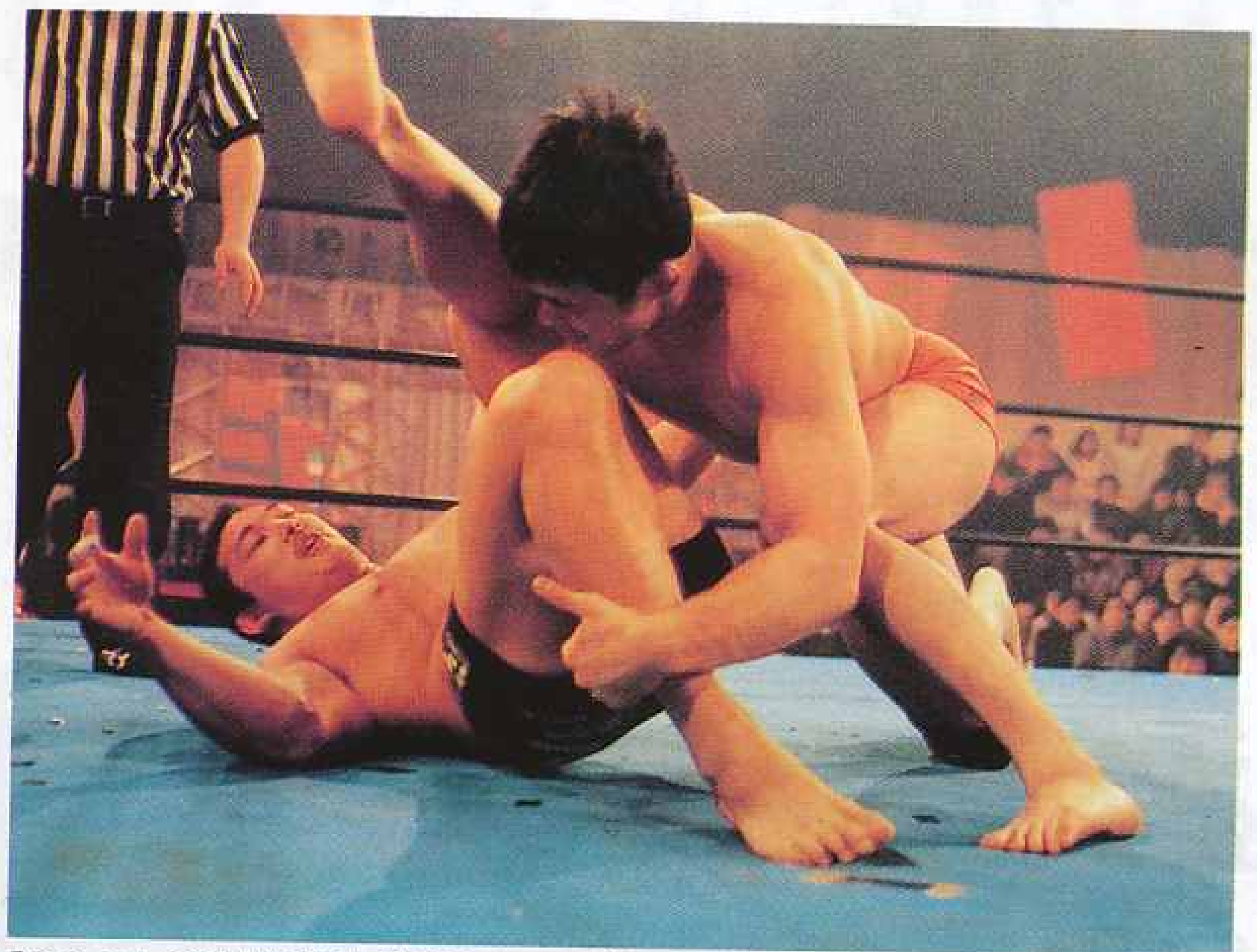
桜庭　ボクには。なんか、そういう感じがありますね。

――頼もしいなぁ。去年のゴエス戦のときも今度のビクトー戦でも、一部は「桜庭は今度こそ危ないんじゃないか」と騒いでるけど、実際、試合前に取材に来るとコレですからね。頼もしくってしょうがないですよ、ホント（笑）。

桜庭　アハハハ。でもツボの話だったら、ゴエスのほうがツボはわかってるんじゃないですか？

――あ、そうですか。ゴエスは強いですよね。でも（守りが）固いですよね。勝ちにいくよりも負けないように闘う。

桜庭　なんで絶対負けたくないんですかね？



『ＳＲＳ』の藤原紀香卒業記念にスタジオマッチとして行われた桜庭vsエンセンのドリーム・スパーリング。打撃なしだったので、桜庭の見事なムーブが際だった。まさに総合系の至宝である

Kazushi Sakuraba

――ガハハハ！　そう言うってことは、桜庭和志は負けてもいい？

桜庭　パーンッ！　と取られたら負けてもいいと思わないですか？

――へ？　だから、ボクに聞いてどうすんですか（笑）。

桜庭　それは、ボクのミスを相手が突いてきて、ウマく取れたんだからいいじゃないですか！　そりゃ、認めますよ。それこそ「侍」ですよぉ！

――なるほど。トンチが効いてますね（笑）。

桜庭　向こうの人も「侍、侍」なんて言ってるけども、そんな侍なんかいねぇゾ、と。負けたら潔く認めないと。

――潔いのが侍だと。しかし桜庭和志と侍の話をするとは思わなかったですね。意外な展開だ（笑）。

桜庭　でも、侍なら潔くなきゃダメですよ。

――そういう意味では、ビクトーは、ブラジルっぽくないアグレッシブさがあるから、なおさら面白いですね。もう、対ブラジルも三度目ですが。

桜庭　それもカーウソン（派）ばっかり。あのオヤジにはちょっと……（桜庭vsゴエス戦では、ゴエスが勝負に出ないままのタイムアップ引き分けだったにも関わらず、セコンドに付いていたカーウソンは試合後に満面の笑みを浮かべてゴエスを称えていた）。

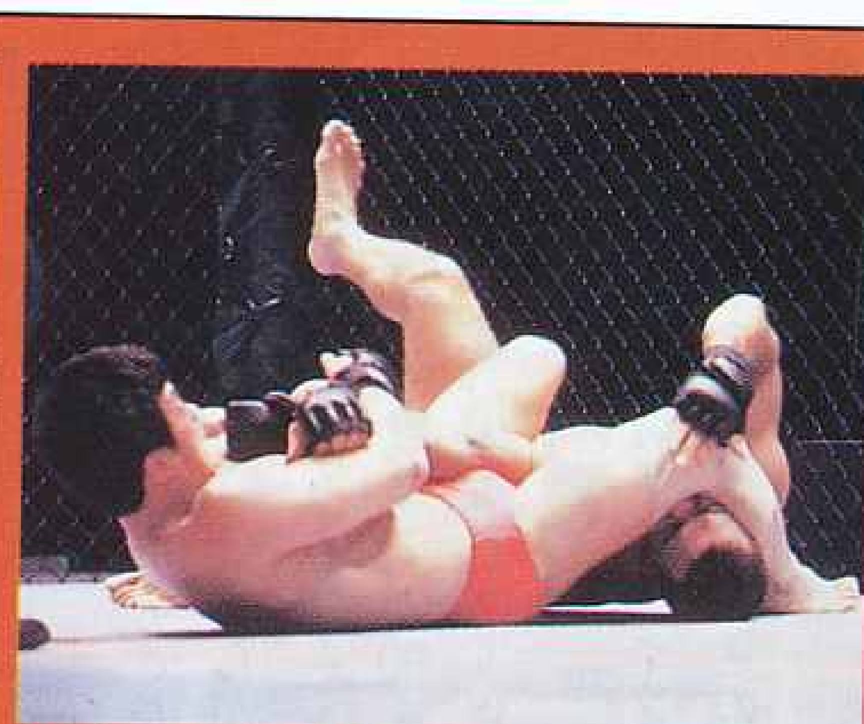
――まだ怒りが収まりませんか（笑）。あ、カーウソン対策として、こっちも腹立つ系の顔したオヤジを1人セコンドに付けるっていうのはどうですか？

桜庭　ヒャハハハ。それ、いいかもしれない。ちょっとプックリした顔の、ホント、オヤジって感じの（笑）。

――対ブラジルっていうのは発憤材料になりますか？

桜庭　う〜ん、特に気にしないです。

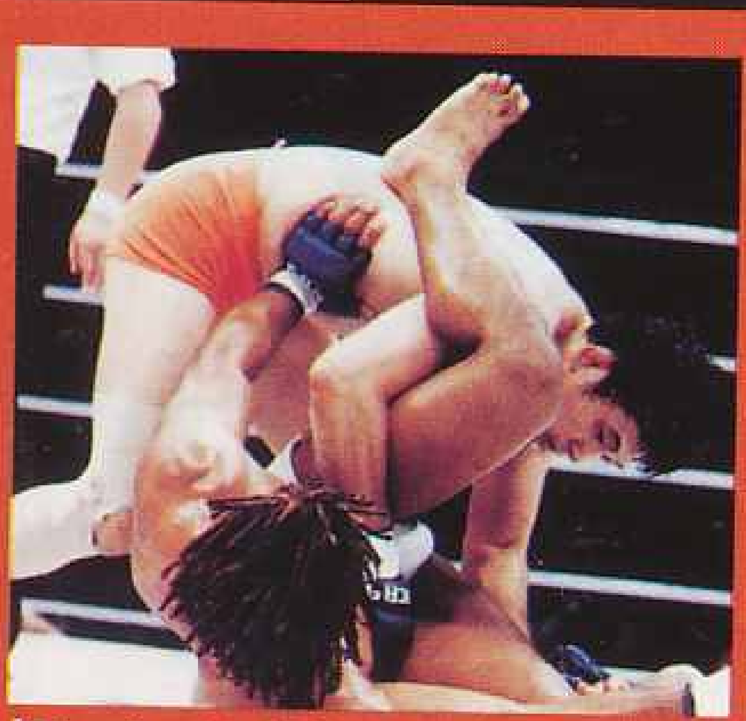
桜庭和志BOUT REVIEW



【97・12・21『ＵＦＣ―Ｊ』vsマーカス・コナン・シウヴェイラ戦】日本人初のヘビー級トーナメント制覇の快挙。ブラジル幻想とヒクソンショックを吹き飛ばした



【98・3・14『PRIDE. 2』vsヴァーノン・タイガー・ホワイト戦】元パンクラシストのヴァーノンの「固さ」に戸惑ったが、最後は逆十字でキッチリとフィニッシュ



【98・6・24『PRIDE. 3』vsカーロス・ニュートン戦】“褐色の宮本武蔵”から１本取った、98ＶＴベストバウト。桜庭の強さとウマさが広く認知された試合である



【98・10・11『PRIDE. 4』vsアラン・ゴエス戦】強いくせに勝負に出る気のないゴエスは、後半、「猪木―アリ状態」の猪木体勢。桜庭は蹴りまくったが無念のタイムアップ

——対カーウソンのオヤジ？（笑）。

桜庭　対オヤジです（笑）。

——（足首に氷を当てる桜庭を見て）アレ？　どうしたんですか、足首。

桜庭　ゴエスとやったヤツ、まだ痛いんですよ。

——蹴りまくって痛めたやつですか？

桜庭　そうです。試合の一番最後。あいつ、立ってこねぇから、「なんだよ、コイツ」と思ってたら「残り5分です」とか聞こえたんですよ。で、「5分間、死ぬほど蹴ってやる」と思って。

——死ぬほど蹴る（笑）。

桜庭　ムカついて！　そしたら自分の足がまだ痛い。やめときゃよかった～（しみじみ）。

——ところでビクトー戦は、この号が出るころには終わってる可能性あるんですよ、地域によっては。で、他の話もしたいんですけど、桜庭さんは、大学でレスリングやってるときは、自分が「スポーツマン」っていう意識はありました？

桜庭　う～ん、ないッスね（笑）。

——あ、ない（笑）。

桜庭　いや、「スポーツマン」っていう言葉自体はどうでもいいやっていうノリでしたから。試合とかでも自分から反則はやらないとか、そういうのは思ってましたけど、やられたら絶対やり返してやるとは思ってました。

——そういうタイプですよね。だから怖いんですよね（笑）。

桜庭　相手がナイフで刺してくるんだったら、オレも刺してやるぞ！って感じ（ニコニコ）。

——キレたら無表情でとんでもないことしでかしそうですね（笑）。

桜庭　刺されても我慢して、取りあえずなんか相手にやり返してやって、それから救急車呼ぶ。それぐらいしないと納得いかないですね。

——桜庭さんが暴発したときは恐ろしそうですね。

桜庭　でも、誰だってやられたらそのぐらいやりたいですよぉ。ただ、自分のほうからはやらないですよ（笑）。



「スポーツマン」でも「格闘家」でもない ボクは「スーパーサイヤ人になりたい」

——一般的に「スポーツマン」っていうと、まだまだ「清く正しく」っていうイメージが先行してるじゃないですか。そういう人になりたいって欲求はあるんですか？

桜庭　ないです（キッパリ）。

——ガハハハ！　ない！　じゃあ、自分では「スポーツマン」というより「格闘家」だという意識？

桜庭　ん～、ボク、「格闘家」でもないですよぉ（笑）。「格闘家」ってキチッ、キチッとしてるイメージあるんですよ。

——ハハハ。従来の「格闘家」のイメージは、ということですね。「格闘家」でも「スポーツマン」でもなければ何なんでしょうね？

桜庭　別にそういうイメージにはこだわってないですよ。イメージは他の人が作るもんだから。

——そこをわかってるとこが凄いですよね。ただ、「スポーツマン」でも「格闘家」でも、従来の「プロレスラー」っていう枠でもないとなると、桜庭和志は何になりたいかってことなんですが。

桜庭　う～ん、やっぱ最終目標はスーパーサイヤ人です!!

——ガハハハ！　出ましたね！

桜庭　あんな感じになりたいですねぇ（しみじみ）。グワーッて自分の気持ちで強くなれる。気持ちだけでも思いっきりガーンッと強くなれる。

——気持ちだけってことないですよ。桜庭さん、いまでも実際十分強いんだから（笑）。でも、そこらへんに桜庭和志を解く鍵があるかもしれないですね。とくると、ビクトー戦でスーパーサイヤ人になるとこを見てみたいですね。

桜庭　でもスーパーサイヤ人ってスタミナなさそうですよね。スタミナなさそうじゃないですか？

——でも"スーパー"なんだから、いざとなるとあるんじゃないですか？

桜庭　あ、そうなんですかね？

——だからボクに聞かないでくださいよ。『ドラゴンボール』の専門家じゃねぇんですから（笑）。

桜庭　やっぱりスーパーサイヤ人は憧れですよ（満面のニコニコ）。

——そういえば、今度、エンセンさんと『笑っていいとも！』に出るんですよね？

桜庭　でもそれ、ほんの一瞬じゃないですか（笑）。

——あ、テレフォン・ショッキングじゃないの？

桜庭　最後に一瞬ポスター持って出るだけですよ！　最後にほんの10秒、20秒やってるじゃないですか。あれですよ、あれ。

※この模様は4月16日にOAされ、格闘技マニアの関根勤に「この2人は日本の総合格闘技のヘビー級のトップ」と紹介され、タモリがエンセンを見て、「首ブッといね～」と驚愕しているうちに「PRIDE5」のポスターを持った2人がひと言も発しないままに番組終了。まさに桜庭の言うとおり、最後に一瞬出ただけだった。しかし、桜庭は終始「桜庭スマイル」で通し、ひと言も発しなくても、やっぱり桜庭だった。

——TVといえば、去年ビールのCMに出ましたよね。

桜庭　う～ん、もう忘れられてますね。

――ときの移ろいは早いですね（笑）。

桜庭　でも秋田に帰ると、妹の子どもがコマーシャルの音楽を鼻歌で歌ったりしてますよ（照）。

――CMに出たっていうのは大きな経験にはなったんですか？　桜庭さん的にはツボは見えました？

桜庭　見えなかったですねぇ。ああいう仕事のツボは。ビール5～6杯飲んで終わりましたからね。

――ゼヒ、マット界を代表して『笑っていいとも！』のツボを掴み取ってきてほしいですね（笑）。桜庭さんは、いろんな局面でツボを取ってきて、全部レスリングに応用してる気がするんですよね。

桜庭　それでいいじゃないですか。レスリングは仕事だから。すべてのものを仕事に応用していく。これですよ！

――ホントかな？（笑）。

桜庭　ヒャハハハ。でも7月で人類滅亡しますからね。

――は？　何を言ってるんだ（笑）。そっち系の話は信用するほうですか？

桜庭　しないです！　でも、もうすぐじゃないですか。

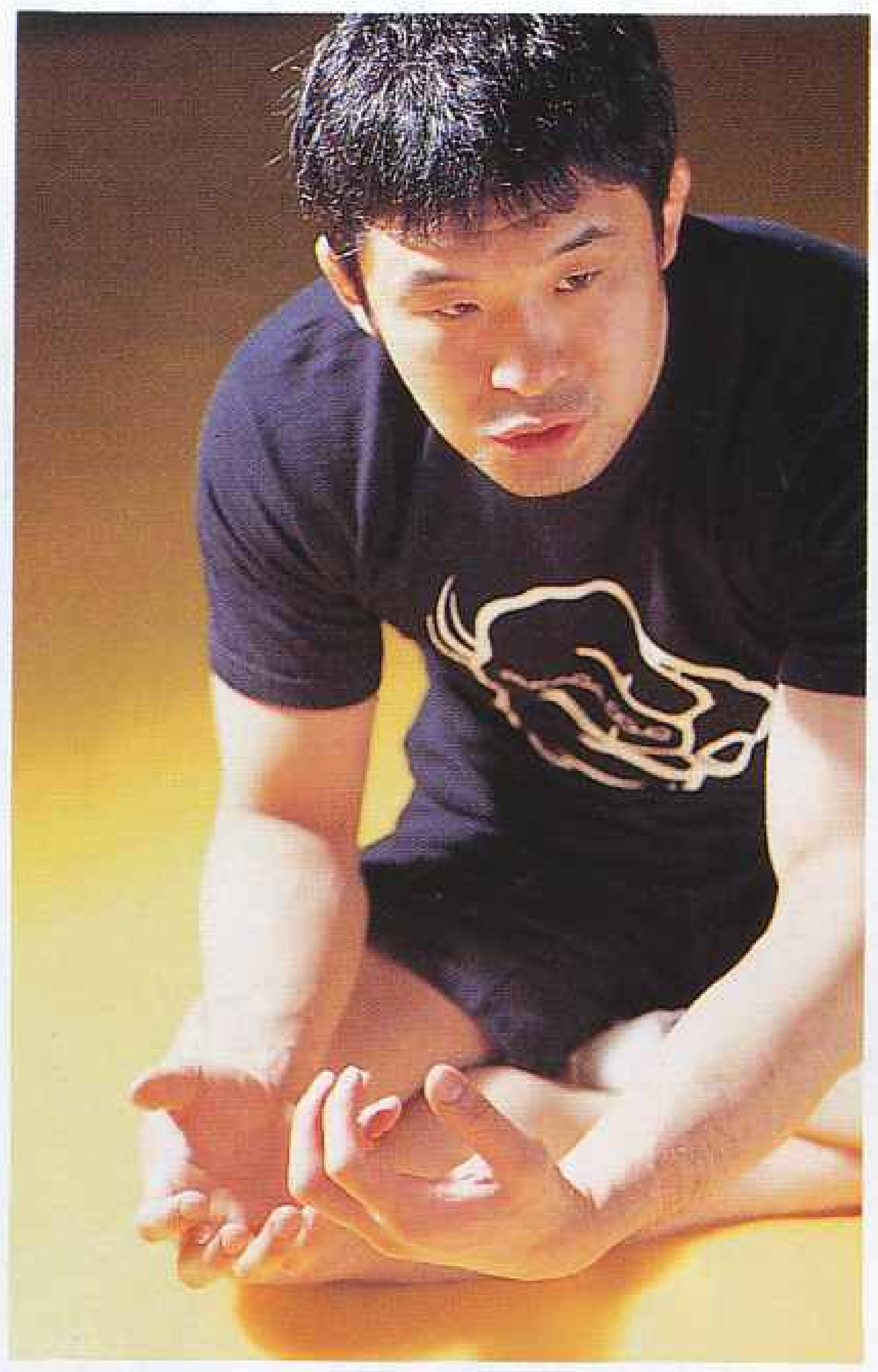
――ドキドキしますかね、7月は？

桜庭　ボク、誕生日ですからねぇ。

――いや、そんなこと聞いてないですよ（笑）。それでね、例えばビクトーのようにラッシング・タイプのほうが、強さって見えやすいですよね。

桜庭　はい。

――例えばエンセンのイメージだと、「強い」っていう単位の次に「ウマイ」。桜庭和志は「ウマイ」の次に「強い」という単位がくるイメージがありますよね。



桜庭　ああ～、はい。ボクとエンセンさんとはまったく違いますよね、タイプが。

――確かに対照的だけど、桜庭和志にも「ウマさ」の先に「強さ」が見える瞬間はたくさんあるんですよね、実は。

桜庭　次（ビクトー戦）は出さないですよ。だって、次にそういうの出したら、やられるじゃないですか。向こうのほうがウマイんだから。

――何がウマイんですか？

桜庭　ガーン、ガーン！って来るのが。

――ガーン、ガーンって来る！　いちいちいい表現しますよねぇ（笑）。でも、「桜庭は優し過ぎるからバーリ・トゥードには向かない」って言ってた人たちも、ゴエス戦をきっかけに桜庭和志の「ハートの強さ」「凄み」っていう部分を認識してきましたね。

桜庭　いつもヘラヘラしてるけど（笑）。でも、そうですかね？

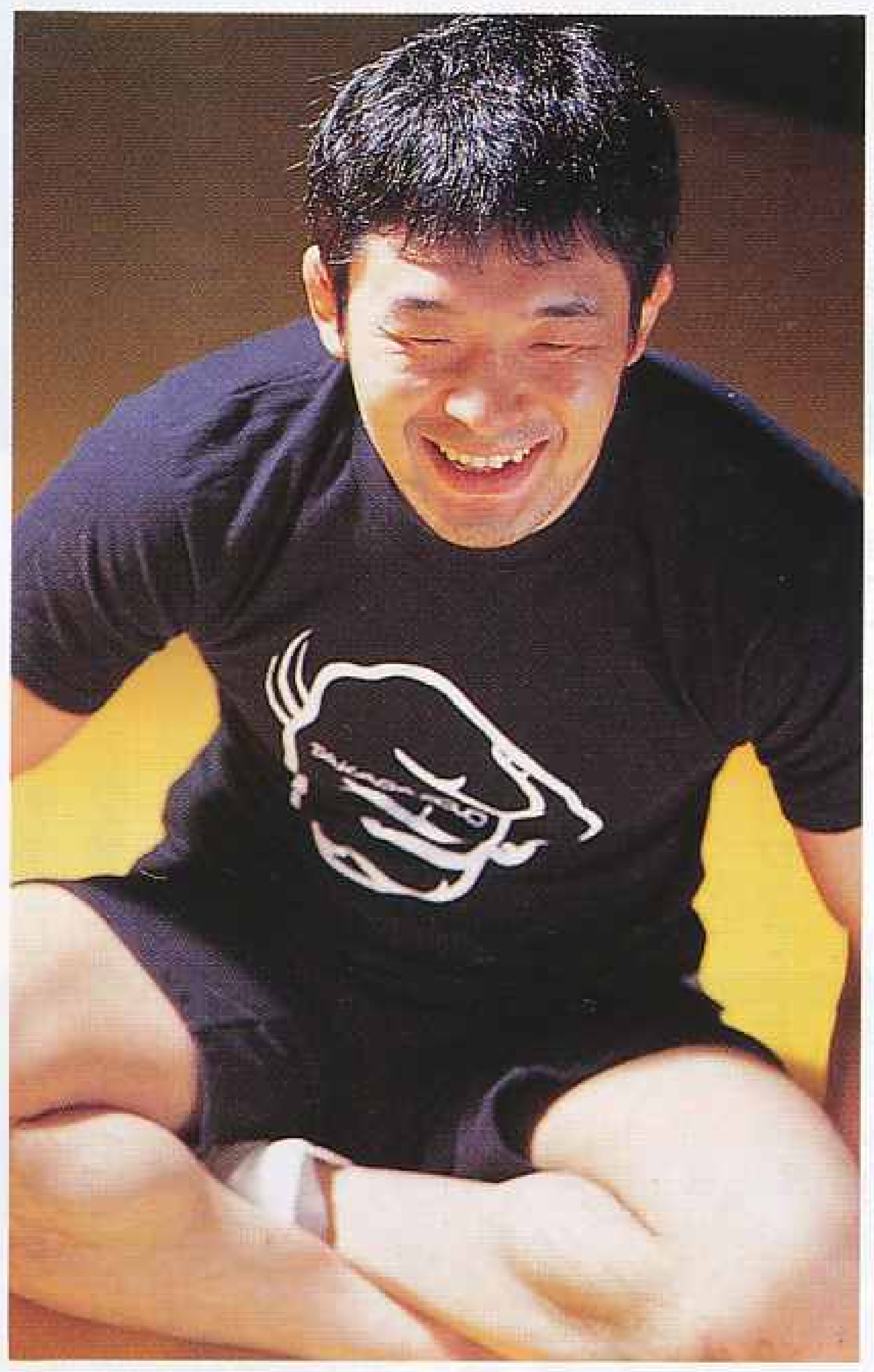
――ま、ボクは見抜いてましたけどね。エッヘン（笑）。

桜庭　ボクも（ジェラルド・）ゴルドーのような怖さを持ったほうがいいですね。見た目が怖いじゃないですか……。

――ガハハハ！　整形しますか。

桜庭　小川（直也）vs橋本（真也）戦のときだって、誰も乱闘のときゴルドーのとこに行かなかったじゃないですか。ああいう怖さ……。

Kazushi Sakuraba



――持ちたいですか？

桜庭　あれは怖いですねぇ。なにも言わずに立ってるだけで（笑）。

――桜庭さんって高校時代、大学時代は喧嘩したことないって言ってましたよね。

桜庭　ないッスよ。

――最近も喧嘩しないんですか？

桜庭　しないッスね。

――奥さんとも？

桜庭　そりゃ、しますよ。それ、口ゲンカじゃないですか（笑）。殴り合ったりはしないですよ。

――ボクは殴り合いますけどね（笑）。でも桜庭さんってホント、不思議な人ですよね。

桜庭　あ、「不思議な人」、いいじゃないですか！

――どんな肩書きなんですか！（笑）。「不思議な人、桜庭和志」。

桜庭　そっちのほうが好きですよ、オレ。「格闘家」なんていうよりも。

――イメージによって枠にはまるのがイヤなんですかね。ところで、ゴエス戦からビクトー戦まで、約半年開きましたよね。もっと試合見たいんですけど（笑）。

桜庭　これからもっと増えるんじゃないですか？　一応予定では4、6、8、10、12月にあるって聞いてますから。よくわからないけど。

――でも、それが全部バーリ・トゥードだったらキツくないですか？

桜庭　でも、パッと勝つときもあるじゃないですか。そういうときとかはダメージも残ってないから楽ですよ。

――ビクトー戦の次は誰とやりたいですか？

桜庭　う～ん、特にない……。

――たまには言ってくださいよ！（笑）。「バンバン・ビガロとやりたいぜ！」とか（笑）。

桜庭　名前があって強い人もいれば、弱い人もいる。名前がなくても強い人もいれば、弱い人もいますよね。ボクは名前があってもなくても、強い人とやりたいです。できればボクと手の合う人。

――カーロス・ニュートンみたいな。

桜庭　はい。まあ、やってみないとわかんないですけどね。

――じゃあ、強いけど試合やってもつまんない人と、弱くても面白い人だったら、どっちがいいですか？

桜庭　弱くて面白い人。

――やっぱり試合を面白くやりたいということですね。

桜庭　手が合わない人とはやりたくないですね。

――たまには手の合わない選手とやってみたくならない？　後学のために（笑）。

桜庭　ああ～。これから試合が増えていけばそういうのもいいと思いますけどね。でも一回経験したら、もう二度とやらないと思いますよ（笑）。

――ゴエスとは、「もう一回やってもいい」って言ってましたよね。

桜庭　もう一回やってもいいですよ。

――ヴァーノン（・タイガー・ホワイト／98・3・14『PRIDE2』で対決）と



試合中に相手から返事が返ってこないと面白くない！

格闘 MAKE JUNGLE
ジャングルを守るよりジャングルを作る!!

は？

桜庭　あれはつまんなかったなぁ。ボクもあのときは練習してなかったから頭回んなかったですけど、やってて面白くなかったですね。返事が返ってこないと面白くない！

——ああ、試合中に相手と会話したいわけですね。肉体言語によって。

桜庭　そうです。返事が返ってこない人とはやりたくないですね。

——膠着しだすとキリがないバーリ・トゥードでも、面白くするための肝はそういう心理的な部分ですよね、デカイのは。今後の大きな目標を聞いても……。

桜庭　ないですね（キッパリ）。あ！　目標は、もっと強くなる！

——強いと言えば、例えばの話、小川直也選手とかには興味ないですか？

桜庭　あの人、一番強いと思いますよ。

——手を合わせてみたい気持ちは？

桜庭　あぁ～、体重90キロ以下にしてくれたら！　それだったらやりたいです！（笑）。

——プロレスの魅力はちっちゃい人が大きい人に勝つというところにもありますからね。

桜庭　え～、そうなんですかぁ（絶叫）！　ウソだぁぁぁ!?

——「柔よく剛を制す」って言葉がある通り、ちっちゃい人が大きい人を倒すという醍醐味もあるわけだし。

桜庭　よく「やれ」って言われますけどね、大きい人と。

——それは見てみたいですよ。桜庭和志vs巨漢。

桜庭　まぁ、そういう機会があったらやりたいとは思いますけど……。

——やるほうは大変でしょうけどね。じゃあ、たまには最後に、『紙プロ』読者にメッセージでも送ってやってください（笑）。

桜庭　ん～～～～～。あ！

——なんですか？

桜庭　『紙プロ』を読んで元気になってください（照）。

——ガハハハ！　なんですか、それ（笑）。でも、本当に今年あと4試合も桜庭和志の試合が見れるとしたら贅沢ですね。

桜庭　あと、できたら他の試合もしたいなって思います。『PRIDE』以外の。できたら、ですよ。

——掌底ルールでもいい？

桜庭　掌底ルールでもいいですよ。あ、こぶ平ルール！　ダハハハハハ（大笑い）。なんとなく言葉が似てないですか？

——ガハハハ！　誰が『空耳』やれって言ったんですか！

桜庭　掌底とこぶ平似てないですか？

——だったら笑瓶のほうが似てるじゃないですか！

桜庭　ウヒャヒャヒャ。そうか。それでもいいですけどね。クックック（こぶ平ルールというのが自分で言ってツボにはまったのか、しばらく笑い止まらず）。で、何の話で……？

——いや、もう話すことは何もありません（笑）。ビクトー戦は、結果がついてきて、なおかつ心躍る、面白い試合になることを期待してます。

桜庭　まあ、負けるとしたらKOだと思うんですけど。（関節を）取られることはないと思うんで。あ！　もしKOで負けたらカーウソンのオヤジのとこまで行って、「今日は負けました。でもそちらの本職の関節は取られてませんよ～」って言ってやろうかな（笑）。

——ガハハハ。そこらへんに桜庭和志のメラメラと燃える青白き焔、みたいなものが見えて実に面白いですね。今日はどうもありがとうございました。

桜庭　あ、『サイレントヒル』のぉ、あの中庭みたいなのが出てくるとこ、どうやってやるんですかね？

——ガハハハ。つくづく不思議な人ですね、桜庭さんは（笑）。

【4月13日／東京・池上、高田道場にて収録】

※

というわけで、桜庭vsビクトーは、「一瞬たりとも目が離せない」という表現が、まさにピッタリとくる『PRIDE.5』屈指の好カードであることが少しはわかっていただけただろうか。それにしても、ブラジル勢相手に、これだけ安心感を与えてくれる桜庭の隠された凄みには、素直に「ビバ！」と叫びたい。

あとは、面白い試合になることと、桜庭完勝と、どこかの国が得意とするドタキャンがないことを祈るのみである。

もしも負けたなら「いつもヘラヘラしてるからだ！」という叱責の声も〝あちら側〟からチラホラと出始めるかもしれない。しかし、本誌は断言します！　従来の「スポーツマン」「格闘家」というイメージから離れ、独特のスタンスを保つ桜庭和志の「スーパーサイヤ人」ぶりを見抜けない人の目は節穴だということです（ニコニコ）。



密林の黒虎

通信
㋍ MAGAZINE

"スーパースター"ビリー・グラハムに、"千の顔を持つ男"ミル・マスカラス、ちょっと新しいところで"暴走戦士"ロードウォリアーズと、"未知の強豪"は常にプロレスファンの心を魅了したもの。

そのインパクトで、プロレスファンでもなんでもなかった僕の心にもいまだに衝撃を残してるんだから、存在感は圧倒的だ。

強くて、光るキャラクターを持った海外の強豪たちはやはりこちらの気持ちをワクワクさせてくれる。

中国の山奥にいる"2メートル99センチの男（UFO所属予定）"の来日もまだまだ先の話になりそうな昨今、バーリトゥードの世界に目を向けてみると、一部の格闘技ファンのみ知っているというのももったいないほど"強くて凄くて面白いヤツ"がザクザクいたりする。

今後のマット界を面白くするであろう『紙プロ』推奨の強豪たちを紹介する新企画『怪物通信』"K—通"と呼んでちょんまげ（ヤスカク調）。

凶悪そうな黒人がオリの中で叫んでいたら誰だって気になるだろう。『UFC19』のオクタゴンの中で闘う、その男のツラは非常にワルそう。まさに、このページの趣旨にぴったりの男が、このケビン・ランデルマンなのだ。

さて、ランデルマンは現在27歳。師であるマーク・コールマンの家の近所に住んでいて子供の頃からコールマンにかなり可愛がられていた様子。その関係で自然とアマレスを始めて、自然とハンマーハウス（コールマン率いるバーリトゥード・チーム）の一員となったのだ。

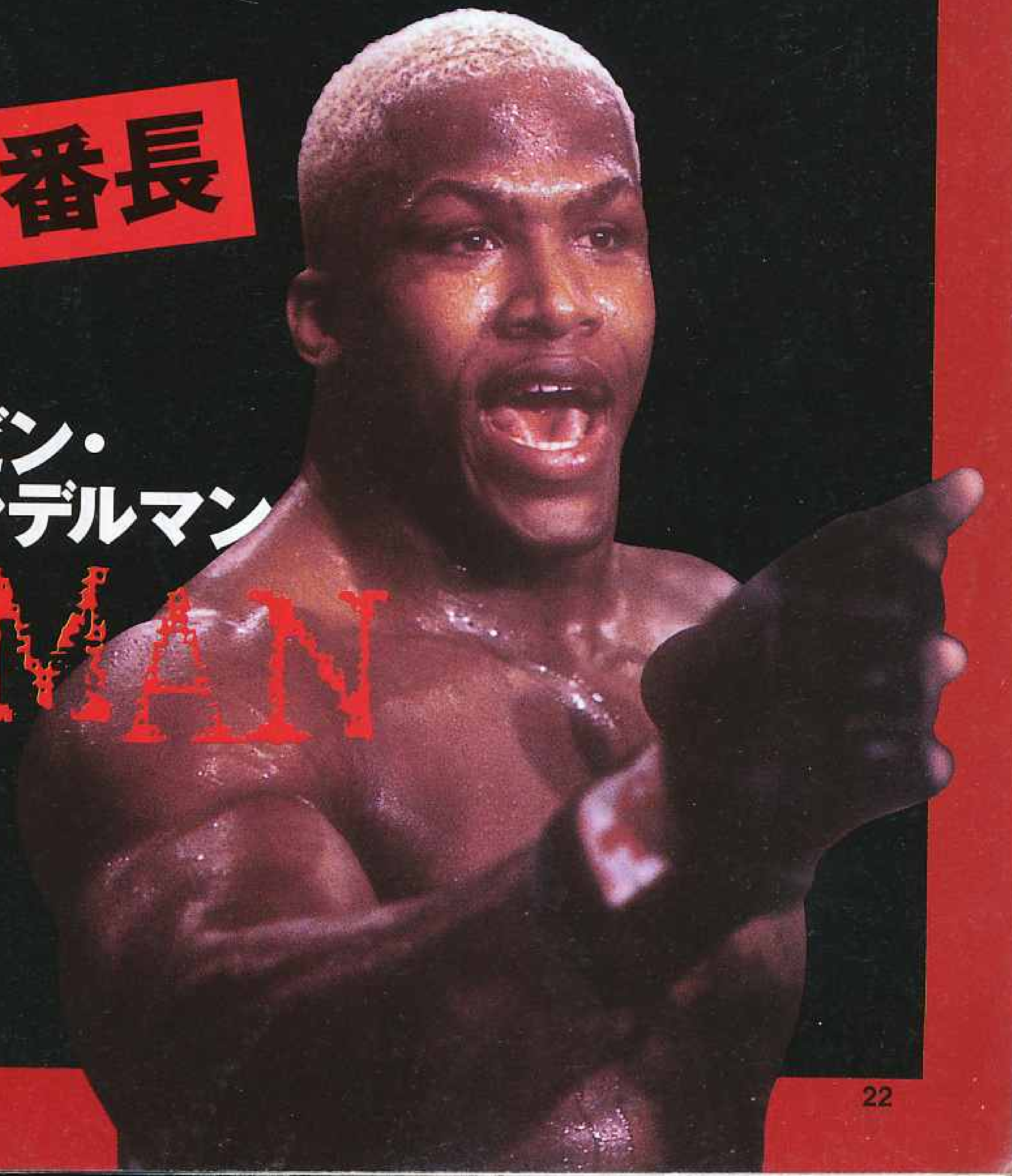
バーリトゥード歴は96年の10月、ブラジルで行われた『UVF4』でデビューし、いきなり優勝を果たしている。翌年3月の『UVF6』では準優勝だが、先日、船木誠勝と対戦した（結果は引き分け）エゼンベール・フォンテス・ブラガと一回戦で当たり、スタンド&グラウンドのパンチで圧倒。まったく危なげなく勝っている。

この試合のランデルマンはとにかく抜群だった。殺伐としたバーリトゥードのリングにウォークマンをしたままリングインするノー天気ぶりも素晴らしいが、試合では一転してノーガードで顔を突き出し、ブラガを挑発。バーリトゥードでここまで相手をナメ切る選手もまずいないだろう。ついでに試合の途中でオープンフィンガーグローブを勝手に外し、セコンドのコールマンまで頭を抱えてしまう見た目通りの天然っぷりも発揮。気持ちいいでしょ。バカで。

ジャングル番長

No.1

KEVIN RANDLEMAN ケビン・ランデルマン

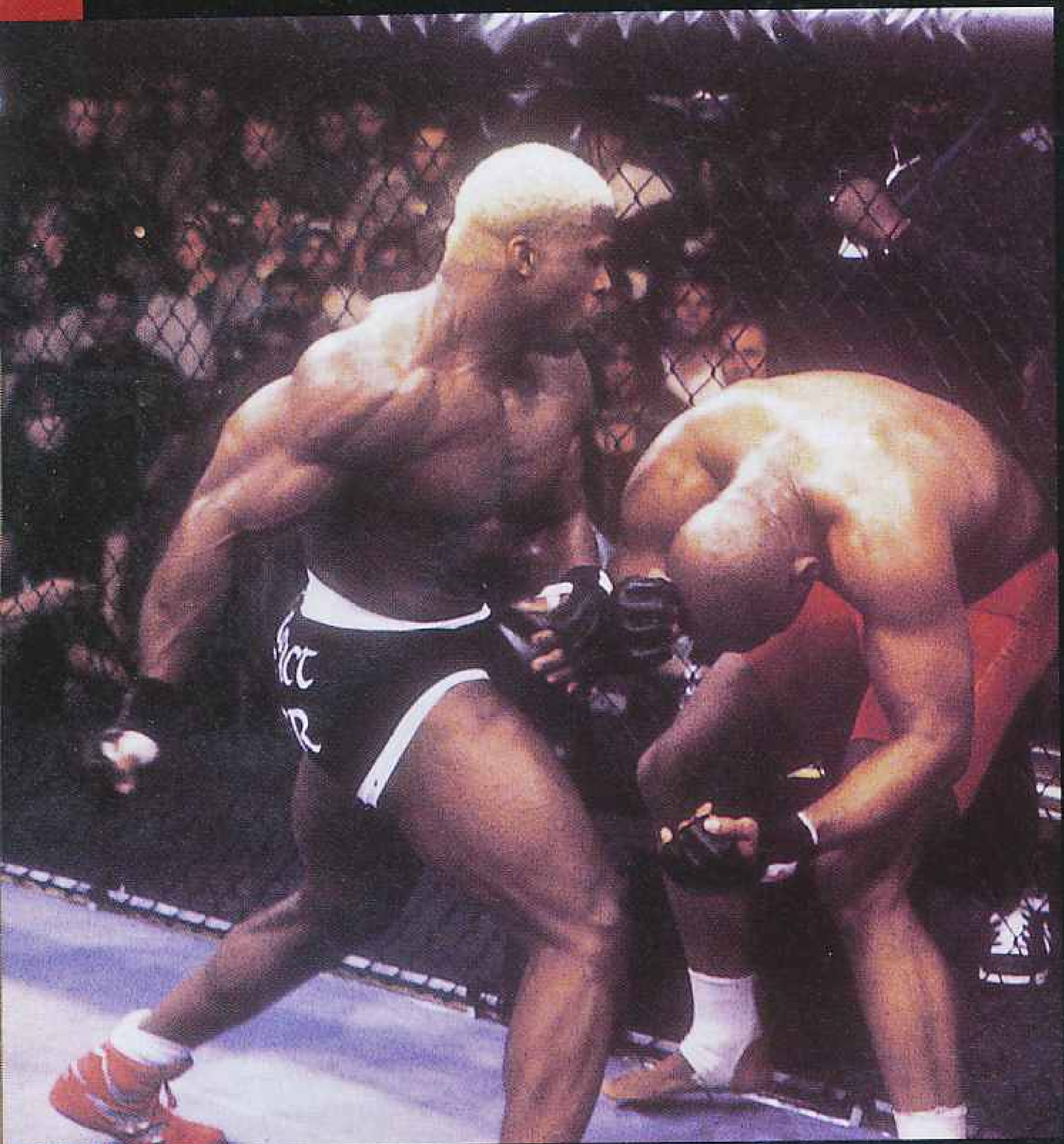


身長178㌢、体重98・9㌔。27歳。マーク・コールマン率いるハンマーハウス所属。高校からアマレスを始めてバーリトゥードには96年に『UVF4』でデビューし優勝。97年『UVF6』でエゼンベール・ブラガを破るも、準優勝。99年『UFC19』においてモーリス・スミスを破り、一躍名を挙げる

怪物

K−通

文／中村カタブツ君
text by Katabutsukun Nakamura



その後、ランデルマンは6月に行われた『第1回ブラジル・オープンファイト』ヘビー級トーナメントに出場。決勝ではアマレス全米選手権で優勝し、97年『ザ・コンテンダーズ』では高阪剛にも勝っているトム・エリクソンにKO負けしてしまうもののコールマンもかなり期待をかけていた。だが、なぜか突然蒸発してしまう。「若い者の考えることはわからない」とまたしてもコールマンは頭を抱えてしまう。

そして2年間まったく音沙汰がなかったわけだが、今年に入って突如としてハンマーハウスに舞い戻り、そこに『UFC19』のオファーもタイミングよく入ったことから、わずか3週間ほどの間にギュウギュウと身体作りの特訓して出場したらしいのだ。

久しぶりのバーリトゥードである。それも相手はあのモーリス・スミスという極めて悪条件の中でランデルマンは見事、勝利をブン取ったのだ。

さて、本誌シアトル特派員、ニンジャ2号さんがモーリスから直接話を聞いてきたので、彼のランデルマン評をお伝えしよう。

「私は試合前に体調を崩していたが、それとケビンの勝利とはなんの関係もないと断言するよ。また、私が闘う上で犯したミスもなかったんだ。すべては彼の驚異的なスタミナと戦略の勝利だったのさ」と絶賛。

当初、モーリスはランデルマンにはスタミナがないと踏んでいたらしいが、その読みは大きく外れたという。ビデオを見てもランデルマンは終始、動き続け、試合終了間際わずか3秒においてさえもパンチのラッシュをかけてモーリスをKO寸前にまで追い込んでいる。しかも試合直後に「アァ〜〜、アァー」とターザンボイスを上げて非常にゴキゲン。試合後のインタビューでも「モーリスの蹴りはあと5発は受けられるぜ」と実に威勢がいい上、「この勝利を子供たち（ボクの英語力では自分の子なのか、世界中の子供たちなのか、ちっともわからない）に捧げるぜ」と凶悪な顔でリップサービス（子供にしたら怖いだけ）。必要以上の力の入れっぷりに、アナウンサーが嫌な顔をし始めるほど、ともかく元気に長々としゃべりまくったのだ。なにをやらせても度を超えていて、もう抜群。

ところがモーリスは、このランデルマンに対して意外な感想をもっていた。

「私はこれまでケビン（ランデルマン）と（ランディ・）クートゥアーと（マーク・）コールマンという3人のアマレス出身者と対戦してるが、試合中に一番恐かったのは実はケビンなんだ。ケビンはレベルが上がっている現在のUFCに適応できるクレバーさを持っている。ケビンは進化してるUFCで確実にトップクラスにいるだろう」

そう、実はクレバーなのだ。しかもノー天気で元気な野獣、ケビン・ランデルマン。これほどの男をUFCの〝置き土産〟（©『格通』）にしとくのはホントにもったいない。ぜひとも日本で見てみたい。



【ケビン・ランデルマン戦績】

▼96・10　UVF4　優勝
▼97・3　UVF6　準優勝
▼97・6　第1回ブラジル・オープン・ファイト　ヘビー級トーナメント準優勝
▼99・3・5　第19回UFC　○対モーリス・スミス（判定）

褐色の恋人

No.2

VICTOR BELFORT
ビクトー・ベウフォート

１９７７年４月１日生まれ。身長１８７センチ、体重97キロ。ブラジリアン柔術。『ＵＦＣ12』ヘビー級トーナメントで優勝。『ＵＦＣ13』ではタンク・アボットを秒殺ＫＯ。『ＵＦＣ15』でランディー・クートゥアーにＴＫＯされる。『ＵＦＣ17』でバンダレイ・シルバを破り、４月29日『ＰＲＩＤＥ５』で桜庭和志と対戦。

4・29『ＰＲＩＤＥ5』のリングで桜庭和志と激突する、柔術界の〝超新星〟ビクトー・ベウフォート。彼の闘いの歴史には煌めきと暗黒が交錯している。『ＵＦＣ12』で圧倒的強さを見せつけ、いきなり優勝。まばゆいばかりの光を放ったビクトー。だが、たった一つの敗戦が評価をガラリと変えてしまった。ちょっと古いが、〝失ったものは取り戻せばいい。〟『ＰＲＩＤＥ5』のリングで、かつて〝超新星〟と呼ばれた若者がなにを取り戻そうとするのか？ どんな闘いを見せるのか？ その闘いの意味を探る。

ブラジリアン柔術の黒帯、ビクトー・ベウフォートは果たして強いのか？

97年2月7日の『ＵＦＣ12』のヘビー級トーナメントにおいて初出場＆初優勝を果たし、しかも柔術家なのにパンチで秒殺（1回戦は1分15秒、決勝は44秒とオクタゴンにいた時間は2分にも満たない）。〝超新星〟の出現と騒がれたのは非常にうなづける。続く同年5月30日『ＵＦＣ13』ではタンク・アボットと対戦。ハードパンチャーの喧嘩屋タンクを相手に真っ向勝負を挑んで、これまた52秒で戦意喪失に追い込んでいる。「寝技を見せようとする前に相手が弱すぎてパンチで倒れてしまう」という、贅沢な悲劇を持つＵＦＣの〝貴公子〟というキャッチ・フレーズもこの時はすこぶる真実味があったのだ。

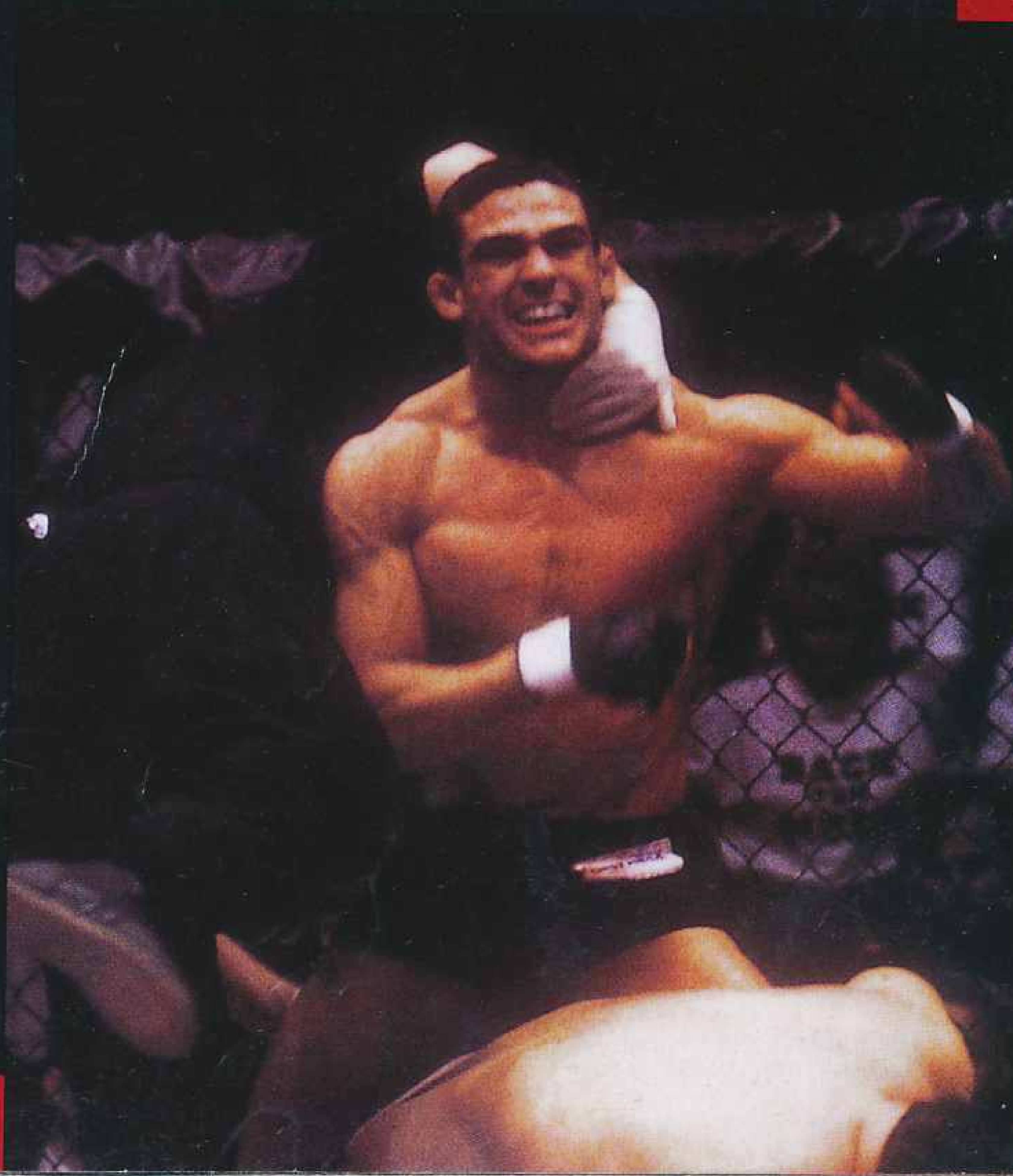
だが、彼に本当の悲劇が訪れたのは97年10月17日『ＵＦＣ15』。アマレスの世界選手権でも優勝しているランディ・クートゥアーとスーパーファイトを闘い、グラウンドの場面があったにもかかわらず、寝技の攻防を出さずに敗北したのだ。

これには期待が大きかった分、名声の落ち方も凄まじかった。

とりわけ厳しかったのはカーウソン派のブラジリアン柔術とは反目するグレイシー柔術の人たち。「ビクトーはボクサーである」ことは誰もが知っている」ととんでもないことを言い出す始末。いくら自派を守るためとはいえ、あまりに無茶な発言だろう。

その風評を払拭するかのように2ヵ月後の12月21日に行われた『ＵＦＣ・Ｊ（アルティメットジャパン）』では、ジョー・チャールズとの試合でパンチを封印。寝技のみで勝負を挑んで4分4秒、腕十字で見事タップを奪い、名声は回復するはずだった。だが、このジョー・チャールズがクセモノだ





紙のプロレス RADICAL

怪物通信

K-通 MAGAZINE

ったのだ。彼はのちにUFOに参戦し、リングイン直後のデモンストレーション（単なる開脚だったのだが）でいきなり足の筋を痛めたというゴキゲンな男。だが、寝技の技術を量る相手では断じてなかったのだ。『UFC・J』の時点でも、でっぷりした身体でオクタゴンに入り、そのダメっぷりは一目でわかってしまったのだから「極めるまでに4分もかかったのか」と寝技の腕前をますます疑われる結果となってしまった。以後、ビクトーはVTを2戦経験し、いづれも勝ってはいるが、やはりパンチでの秒殺だった。

　そして今号の桜庭も発言してるが、ビクトーは一度、キングダム時代のヤマケン（山本喧一）とスパーリングをしている。『UFC・J』直前に来日し、キングダムの道場での練習だったわけだが、ここでも〝カアームロック〟を一回極めただけだったという。〝ビクトーはボクサー説〟は強まるばかり。

　そういうことなので、わかりました。ビクトーはボクサーです。そういうことにしましょう。だが、そうなると逆にビクトーの強さが見えてくる。そもそもボクシングの腕前は五輪候補になるほどの実力を持ち（コーチはWBC世界Jrウエルター級チャンプ、オスカー・デ・ラ・ホーヤを育てたアル・スタンスキー）、パンチ力においては50キロ以上も体重が上のタンクを戦意喪失に追い込むほど強烈なもの。ボクサーとして考えたって、これはかなり優秀だろう、実際。

　加えて寝技のスペシャリストのヤマケンから一本を取れるグラウンドの技術もあるのだ。こうなってくると、これは絶対に間違いなく強い。そういえば、17歳の時にはパンクラスの山田学とハワイのヘウソン・グレイシー道場でスパーリングして圧倒していた過去もある。寝技もかなりできる、ハードパンチを持つボクサー、ビクトー・ベウフォート。こいつは強いだろう。絶対に強い。強いはず……う〜ん。でも、これでいいのか？

　そもそもビクトーは師のカーウソンが養子にしたいと思ったほどズバ抜けた素質があるのだ。加えて22歳と若い。ヤマケンじゃないが、10年経ってもまだ32歳。現在でも充分強いが、まだまだ強くなる可能性はムチャクチャあるわけだ。打撃の強さはもう申し分なく見せていただいた。そろそろ柔術の黒帯の部分をもっと見せてほしい。ファンが望むのは、やはりそこだと思う。

　だが、これも杞憂にすぎないのかもしれない。4月29日『PRIDE5』で対戦するのは、あの桜庭和志なのだ。ビクトーの兄弟子で柔術界屈指の寝技師と呼ばれるアラン・ゴエスを防戦一方にさせた男なのだ。読者がこの号を手にする時にはもう結果が出てるかもしれないが、この試合でビクトーの強さの奥深さの一端は見えてくるだろう。

　『UFC・J』では軽く流しても勝てる相手だったと考えることもできる（失礼！　ジョー）。だが、桜庭が相手ならば、ビクトーも持てる技術のすべてを出してくるだろう。ゴエスに続き、引き分けもしくは負けとなってしまっては柔術の面目にもかかわる一大事。兄弟子を圧倒した男・桜庭を相手に、その底力を見せてみろ！　桜庭が勝つにせよ、ビクトーが勝つにせよ。試合後、マット界に本物の〝超新星〟が誕生することは間違いないだろう。

　ところで桜庭が勝ったら『格通』は桜庭をどうあつかうんだろうか？　そういう意地の悪い想像も合わせて楽しめる、そんな一戦？



ビクトー・グレイシーと入った珍しい名刺。師カーウソン・グレイシーは一時、ビクトーを養子にしようと考え、名刺まで作っていた様子。グレイシー姓を譲りたくなるほどビクトーの素質はズバ抜けていた

【ビクトー・ベウフォート主な戦績】

▼97・2・7　第12回UFC
ヘビー級トーナメント優勝
▼97・5・30　第13回UFC　スーパーファイト
○対タンク・アボット（0分52秒　TKO）
▼97・10・17　第15回UFC　スーパーファイト
●対ランディー・クートゥア（8分16秒　TKO）
▼97・12・21　UFCJ（アルティメット・ジャパン）
○対ジョー・チャールズ（4分4秒　タップアウト）
▼98・10・16　第17回UFC
○対バンダルレイ・シルバ（44秒　TKO）

黒い柔術師





去年はゴメンネ!!
地獄の淵から這い上がろうとする
髙田の〝元気〟(チュ、チュ、チュ!)に注目せよ!!

「オレはやるよ!!」

密着リポート!!

4・29PRIDE.5 直前緊急企画

髙田延彦 in USA特訓

聞き手/坂井ノブ
interview by Nobu Sakai
撮影・現地取材/Snow氏
photographs bySnow-shi



【密着リポート　PART1】

謎のコーディネーター Snow氏インタビュー

高田、地獄からの復活なるか？　4・29のvsマーク・コールマン戦を前に高田が選んだ特訓場所は前田日明も現役最後のトレーニング場として選んだシアトルのモーリス・スミスのジムだった。
そのUSA特訓に密着&コーディネートしたのが今回インタビューするSnow氏である。その素性に関しては日本人であること以外一切明らかになっていないが、英語が堪能でアメリカ、特にシアトル方面に強いパイプを持った人物らしい。一部では『PRIDE』のまわし者という説もあるが、本人は『放浪自由人』だと言い張っている。というわけで高田に密着した2日間をSnow氏に語ってもらった。高田の行動を見守り続けた氏に高田の様子を聞き、そして高田が何をしゃべったのか伝えてみたいと思う次第である。

日本だとあんな髙田さんは見られないと思いますよ（Snow）

【Snow氏？】

―え〜、今回は高田延彦選手がトレーニングをしに、モーリス・スミスのジムに行ったんですが、現地でいろいろと密着してきたというShow氏に……。

Snow 違いますよ！　hじゃなくてn！　Snow（スノー）ですから。

―あっ、ホントだ。Show氏の兄弟かなんかですか？

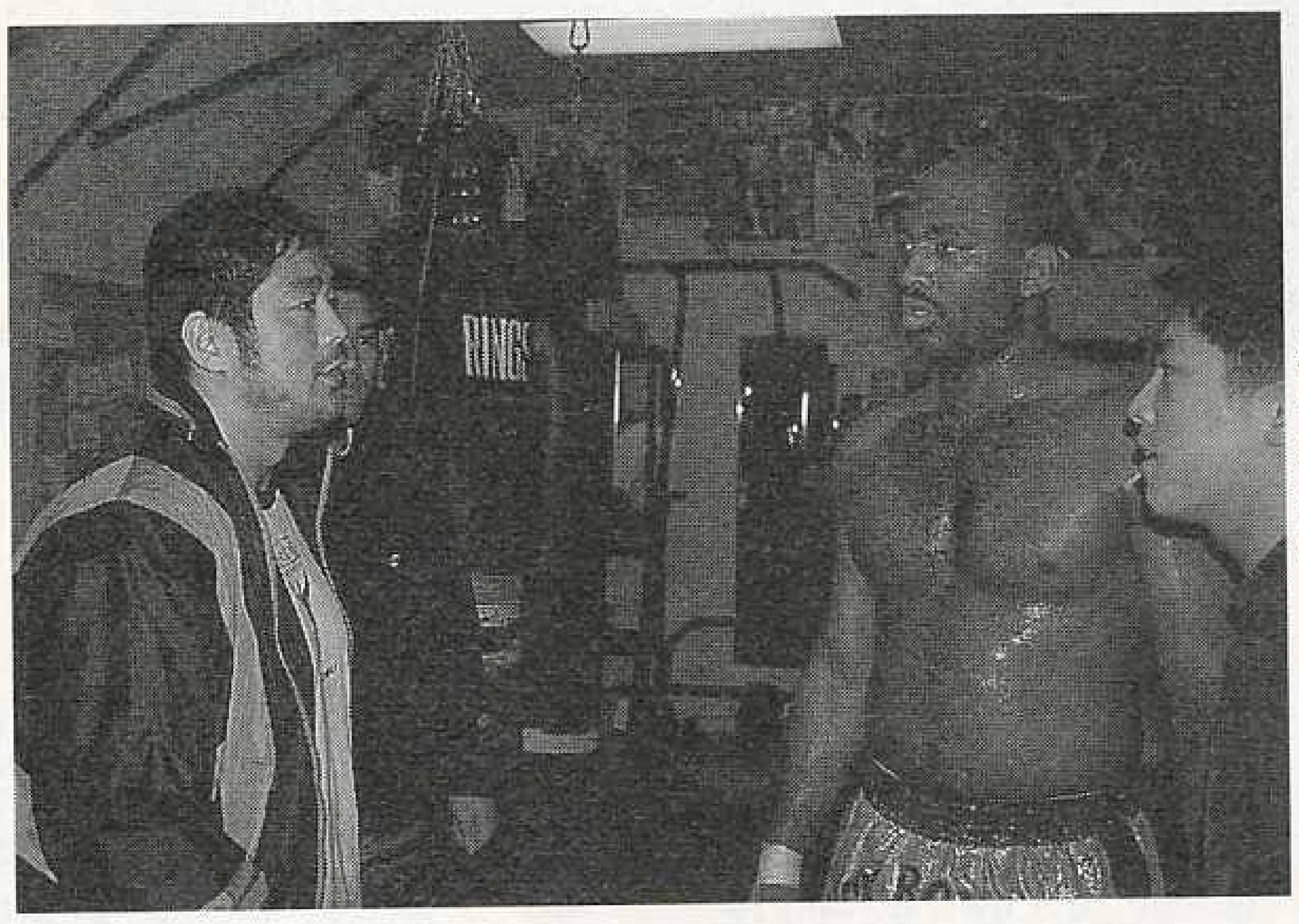
Snow 関係ないよ、まったく。彼は〝格闘技解剖家〟とか名乗ってるみたいですから、ボクは〝プロレス探偵家〟とでも言っておきますよ、は〜い。

―なるほど（笑）。というわけで、非常に声のデカいSnowさんをお迎えしてるんですが、どれぐらいシアトルに行ってたんですか？

Snow 高田さんは1週間くらい行ってたんですけど、ボクは3日間ですね。高田さんが来る1日前に出発したんで、実質的には密着したのは2日間だけですね、は〜い。

―Snowさんは一日早く行って現地で何をなさってたんですか？

Snow コーディネートだね。モーリス・ジムに行ったり、ホテル取ったり、いろいろ手配しなきゃいけないことがありますから、は〜い。



極真のフランシスコ・フィリョ、グラウベ・フェイトーザ、K−1の佐竹、世界のTK、日本の前田日明などなど、世界中の格闘家が集まる重要な場所となりつつあるアメリカ・シアトルのモーリス・スミス・ジム。そこに来た高田をモーリスは「ウェルカム！」と招き入れた

【1日目】

―ズバリ言うとSnowさんの今回の仕事というのは、高田さんのサポート担当だったんですよね？

Snow そうですね。空港まで迎えに行ってジムまでの道を運転してたら、高田さんに「現地人みたいだねえ。オレはこっちじゃパン1個買えないのに」って言われちゃいましたよ。

―アハハハ！　シアトルでの現地の高田さんはいかがでしたか？

Snow 「練習しよう、強くなろう」ということで来てたから、雰囲気は凄く良かったですよ。もう、最高にご機嫌モードで。ボクが現地でスケジュールを立てたんですけど、それにも嫌な顔ひとつせずにその通りやってくれましたからね。

―じゃあ、どんなことをやってたのか具体的にお話をうかがっていきたいと思うんですが。高田さんは到着したその日は何をしたんですか？

Snow・その日はまず、軽く食事を取ってスケジュールの打ち合わせをしに、早速モーリスのジムに行ったんですよ。そしたら立ち技の練習をする日だったらしくて、モーリスと（フランシスコ・）フィリォ（＝極真会館）と佐竹（雅昭＝正道会館）とTKが一緒に練習やってましたよ！

―メチャクチャ豪華なメンツですね。

Snow 練習だけで金を取れますよ!!　で、ボクらを見つけて「ウェルカム！」って声を掛けてきて。

―いいヤツですね、モーリスは。

Snow 凄くいいヤツですよ!!　しかも「せっかく来たんだから練習やってけよ」って話になって、前田（日明）さんもやったチューブ・トレーニングを高田さんもやってましたね。

―ああ、あの足をゴムでひっぱりながらタックルに入る練習ですよね？　あれって相当ハードなトレーニングですよね？　到着早々ムチャしますね。

Snow そうですね。モーリスは過剰に親切ですから（笑）。その後はモーリスとTKと高田さんで、グランド状態での防御法を軽く話してましたよ。「翌日は報道陣が取材に来るから、大事な話はいまのうちに」ってことで、コールマン対策を立ててましたね。

―どんなことしてたんですか？

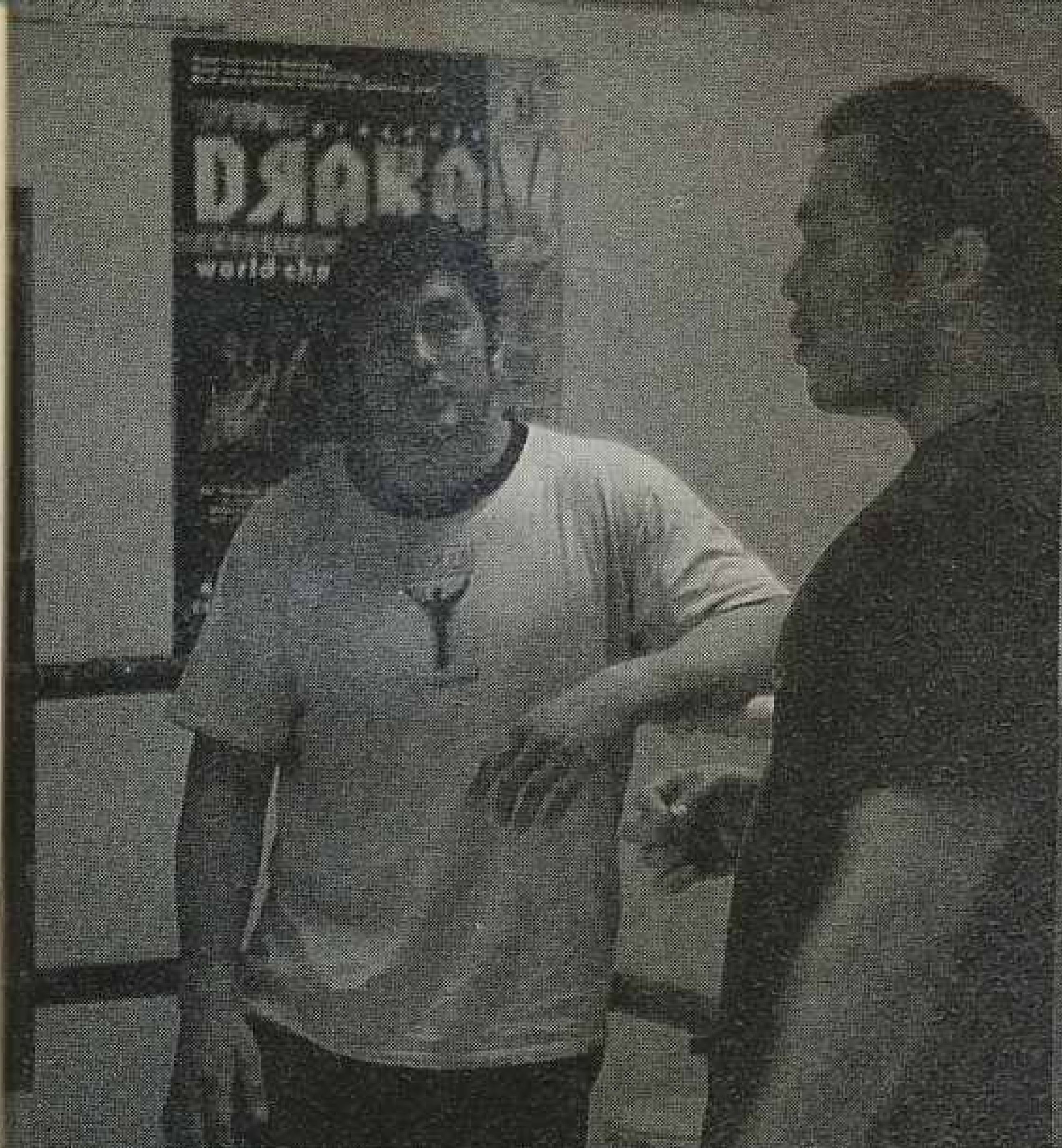
Snow 具体的には言えないねえ。その後は一緒に対策を立ててたTKを高田さんが「メシでも食おうよ！」って誘って、近所のレストランで中華料理に舌鼓を打ったんですよ。

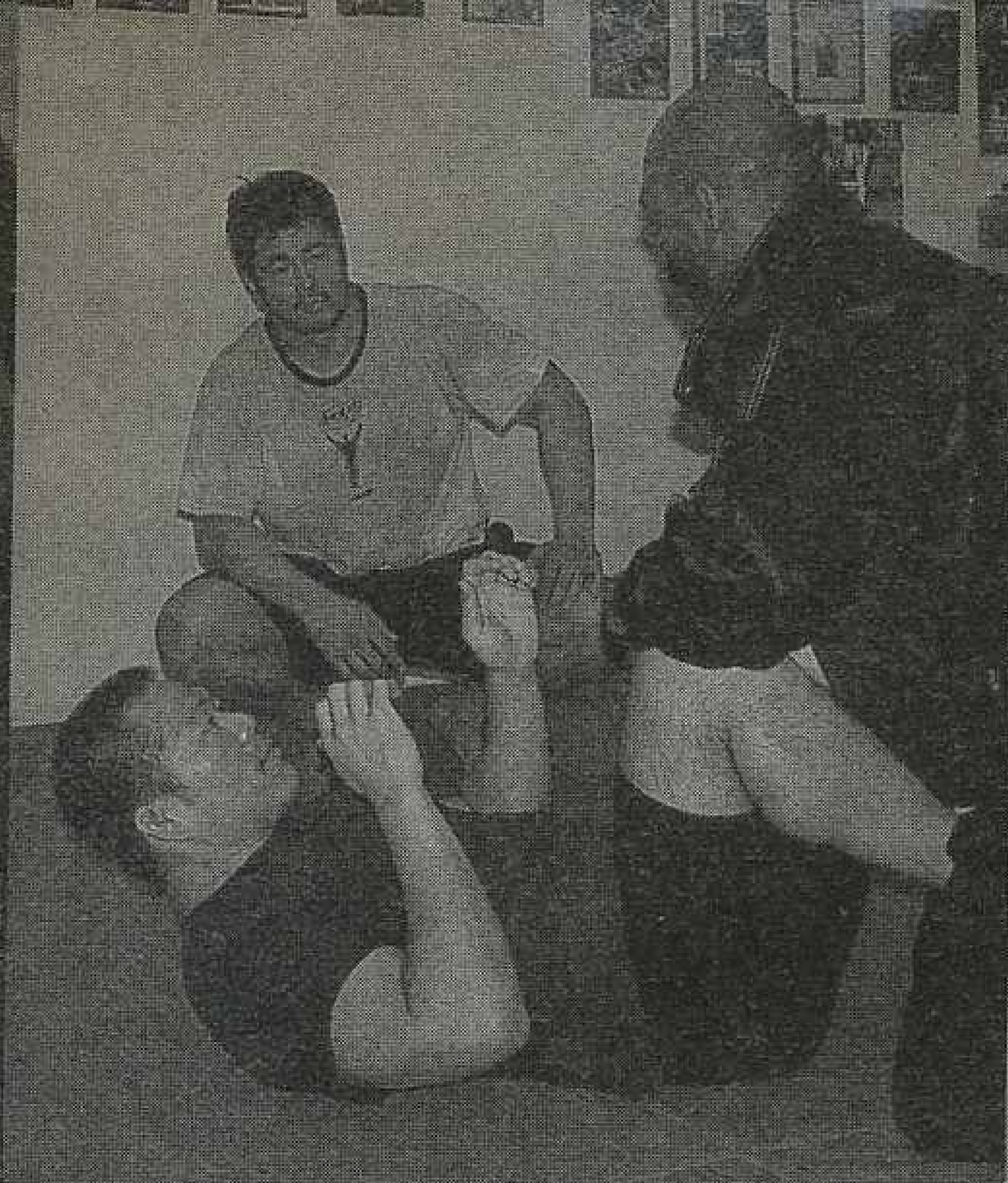
―ほう、高田さんから誘って。食事の最中はどんな話をしてたんですか？

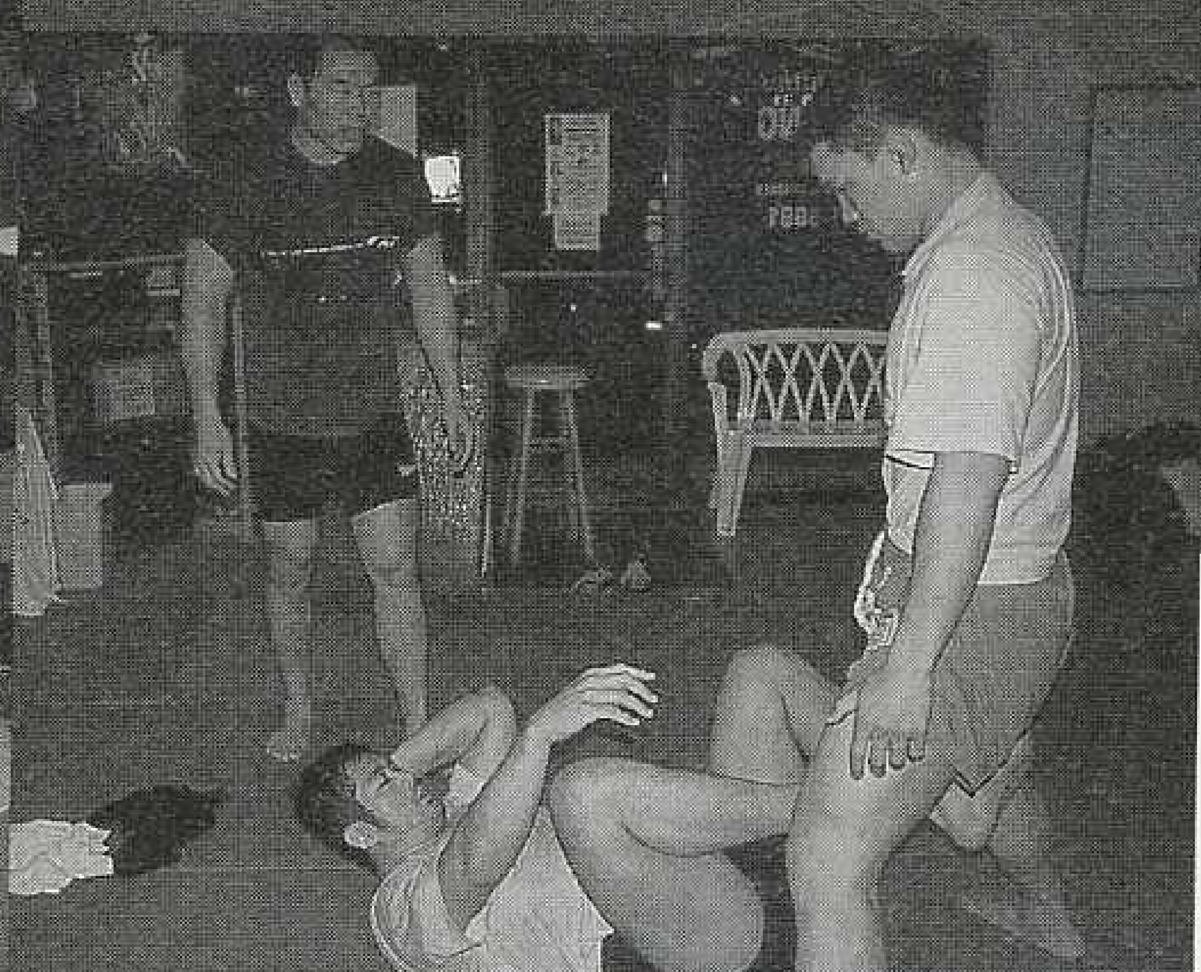
Snow 「TKはいいねえ!!」ってとにかく絶賛ですよ。高阪のことを「TK、TK」ってフランクに呼んでましたね、ずっと。

―お気に入りだったんですね（笑）。そういえば、モーリスのジムにはTK以外の日本人もいっぱいいるんですよね。

Snow ええ。そういう人たちにとって高田さんはスーパースターですよ。でもね、モーリスはスーパースターの横についてる現地の日





（左上）前田の弟子にあたる高阪が、高田にアドバイス。見れば見るほどすごい光景である。こうしたことが出来る高田の懐の深さは素晴らしい（上中）何があっても動じない男たち、モーリス＆ＴＫのアドバイスは高田を勝利へと導くか？（右上）大リーガー養成ギブスを彷彿とさせる、チューブトレーニングによるタックルの練習。これはかなりハードだったようだ。（左下）柔道時代に接点があったＴＫと松井が『チーム類人猿』を結成。ＴＫを立てる松井と、松井が気になるＴＫといった具合でビジュアル的にもいいコンビだ!!（右下）とにかく理詰めの指導がモットーのモーリス。アマレス出身のコールマンが上になることを想定したトレーニングもやっていた。

本人が通訳しながらアドバイスするんですけど、そいつが高田さんにも遠慮なくズケズケ言うヤツなんですよ、若いくせに。「はい、モモ上げて！」とか「それやっちゃダメ！」とか。

――ふんぞり返ってる感じですか？

Ｓｎｏｗ　そう。オレは高田さんに聞いたんですよ、「あんな若いのにいろいろ言われて、オレがガツンと言ってやりましょうか？」って。そしたら「いや、彼の言葉はモーリスの言葉だから。全然構わないよ」って言ってましたからね。

――大人だなあ。

Ｓｎｏｗ　ああいう高田さんは日本にいたら見られない姿ですよ。すごく謙虚な姿勢でした。

【2日目】

Ｓｎｏｗ　モーリスが「せっかく来たんだからハード・スケジュールもいいだろう？」って言い出して、翌朝は8時からスタートですよ!!　あのケビン・ヤマザキさんのいる『ワシントン・インスティテュート・オブ・スポーツメディシン』でウエイト・トレーニングとかランニングをやりました。

――朝がメチャクチャ早いですね。高田さんはどうでした？

Ｓｎｏｗ　「時差ボケで寝られなかった」って言ってましたね。それでも、朝8時からガンガン走ってましたから、コンディションはいいですね。

――ケビンさんのトレーニングは、結果が数値で表れるんですよね。高田さんの結果はどうだったんですか？

Ｓｎｏｗ　良かったみたいですよ、本人もけっこう満足してたみたいですから。「前田さんの言ってたとおり、いいジムだね」って、笑ってましたね。それが終わってからは、ちょっと休憩タイムに入りましたけど。

――観光には行かなかったんですか？

Ｓｎｏｗ　行けないでしょ、そんな時間も体力も残ってなかったと思いますよ。午後は4時頃から日本から記者陣が来て、取材し始めないといけなかったのに……。

――何かあったんですか？

Ｓｎｏｗ　モーリスが長電話してて、ボクらは1時間待ちぼうけですよ!!

――アハハハハ！　すごいヤツですね、モーリスは（笑）。それで結局、そこでは何の練習をしたんですか？

Ｓｎｏｗ　高田さんのリクエストで「コールマン攻略法」の練習ですね。「実際に闘った人間の生の声を聞きたい」ということで。それまで高田さんはvsグレイシー戦を想定して、掴まれないようにキックとか膝蹴りの練習はまったくやってなかったらしいんですよ。

――えっ、そうなんですか!?

Ｓｎｏｗ　でも、それを呼び起こすためにモーリスの元で封印を解きましたよ。久々だったらしいけど、ミットを蹴る音は凄かったですね。

――モーリスはキック・ボクサーだから、そのへんの指導は本職なんですよね。

Ｓｎｏｗ　K－1も出てますからね。高田さんの蹴りがもともと威力があるのはモーリスも知ってましたね。バーリ・トゥード用の蹴りのポイントがあるみたいですけどね。その後はTKも交えて、3人で作戦を考えてましたね。グランドはTKガードとTKシザースが有効になる

オレはやるよ!! 高田道場は元気のカタマリだね（笑）（高田）

ってことを話してたみたいですけど。
——TKシザーズは下のポジションから、回転エビ固めみたいにポジションをひっくり返す技ですよね。TKガードって何ですか？
Ｓｎｏｗ　上に乗られそうになったら、足を張ってガードするんですよ。
——すいません、それだけじゃ全然わかりません（笑）。
Ｓｎｏｗ　まあ、見てのお楽しみですよ。モーリスが勝手に名付けたらしいですけどね。
——またか（笑）。
Ｓｎｏｗ　モーリスは精神的なことも教えてましたよ。とにかく「あせるな！」って。「関節技の技術はお前の方が上で、向こうは極める技なんか持っちゃいない。おまけにコールマンは5分過ぎたら、ハァッハァッハァッハァッと犬のような息切れ状態になるから、そしたらお前の勝機だ」って言ってましたね。
——モーリスは同世代だから高田を応援したいんですかね。
Ｓｎｏｗ　そうですね。「お前はオレと同い年か？　オレは38歳だけど、お前は？37歳か？　フゥ〜、オレの方がオールダーなのか。ワァオ」って言って落ち込んでましたよ。
——ホントにそんなファンキーに言ったんですか？（笑）。高田さんのスタミナ面はいかがでしたか？
Ｓｎｏｗ　凄かったですよ。松井選手も言ってたけど、やり始めると練習が好きだからガンガンやってて、全然終わらないんですよ。適当なところで切り上げてもらいましたけど、あの集中力は凄いですね。
——この日の練習後は何をしたんですか？
Ｓｎｏｗ　『週P』さんのインタビューがあったんですけど。どっかの貧乏雑誌とは大違いで、けっこう豪華な『ハイアット・ホテル』のレストランでディナー取りながらインタビューですよ！
——豪勢ですねえ。
Ｓｎｏｗ　高田さんは「シーフード、いいねえ。シーフード」って言いながら、ローストチキンを食べてましたよ（笑）。
——いいなあ、高田さんも（笑）。それにしてもＳｎｏｗさんも細かいところまで見てますね（笑）。食事中はどんな話をしてたんですか？
Ｓｎｏｗ　いちばん盛り上がったのは剛竜馬さんの話ね。
——へ？（笑）。
Ｓｎｏｗ　最近、新日本プロレスで金本浩二が「小林邦昭みたいにならない！」とか、ケンドー・カシンが「剛竜馬みたいにならない！」って発言して、「〇〇みたいにならない！」ていう発言が流行ってるでしょ。高田さんは知らなかったらしいんだけど、「へえ。剛さん、ブームだねぇ」ってことで剛さんの思い出話をいろいろしてくれるんですよ（笑）。
——それがいちばん盛り上がった、と（笑）。

【3日目】

Ｓｎｏｗ　ボクはその日帰っちゃったんで、後はわからないですね。
——コーディネーターが途中で帰っちゃっていいんですか？
Ｓｎｏｗ　いいんですよ。現地には日本人もいますからね。
——そういうもんなんですか（笑）。全体を通して高田さんの練習を見ていかがでした？
Ｓｎｏｗ　モーリスのジムで練習してるところを見ても、自信が漲ってましたよ。リップ・サービスを含めたとしてもモーリス・スミスはすごく高田さんのことを評価してましたね。「蹴りが重い」って。
——なるほど。Ｓｎｏｗさんは、実質2日間まるまる高田さんに密着してみて、いかがですか？　高田さんはコールマンに勝てそうですか？
Ｓｎｏｗ　「1Rだったらコールマン、2Rにいけばタカダだ」ってモーリスは言ってましたけど。ボクとしては高田さんがシアトルで流した汗が嘘をつかないことを信じてますよ。高田さんも言ってましたよ、「『大変な相手を選んじゃいましたね』って言われるのが屈辱だよ」って。高田さんのそういう気持ちが出れば勝てると思いますよ、は〜い。

【99年4月12日、東京・ダブルクロスにて収録】



密着!! 髙田延彦 in USA特訓

【密着リポート　PART2】

生の声から、高田の"元気"を拾え！
髙田延彦と話したこと

高田がシアトルで再びプロレスラーとしてのスキル（技術）を磨き上げる様子は本文でおわかり頂けたと思う。では、技術面、肉体面で変わったことによって、精神的な面での変化はあったのか？　そんなわけで、謎のコーディネーターSnow氏が高田と交わした雑談の中から高田の"元気"を感じさせる話を拾い上げてみた。

絶えずご機嫌だった高田の話は脱線につぐ脱線でサービス精神おう盛な、高田ならではの話がいくつも飛び出したのだが、その中でも特に興味深かったのは練習についての話だった。その中から高田の格闘頭脳の柔軟性が顕著となる話がいくつかあった。たとえば試合前には、どういった形で作戦を練るのか、といった話になったときは
「試合の作戦は各選手が考えるよ。でも、聞きたい部分は後輩だろうが先輩だろうが遠慮なく聞くからね。」
高田道場に出稽古で来ている慧舟會勢についても、

格闘 MAKE JUNGLE
ジャングルを守るより
ジャングルを作る!!

「素っ裸にして……気持ちのいい人間だからノー問題だね」

ゲッ、素っ裸!?

「人間性をだよ。実際に裸にするわけないじゃない（笑）」

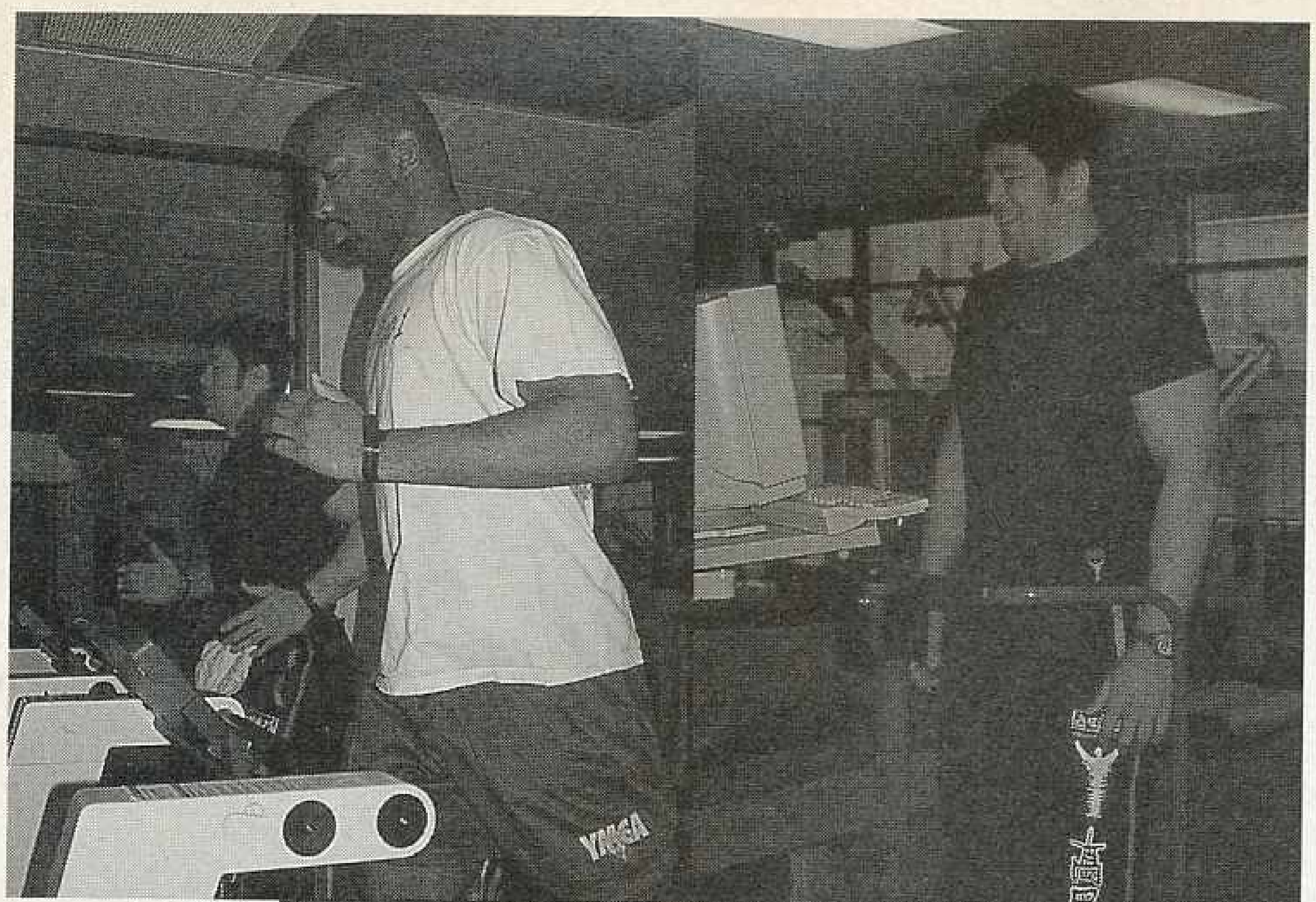
といった具合にジョークをポンポン交えながら、高田はノリノリで練習について話してくれた。「シアトル滞在時も、高田は自分が何をすべきか、何を吸収するのか、どうすれば環境が良くなるのかを最優先で考えて行動していた」とSnow氏が証言していたが、高田自身も

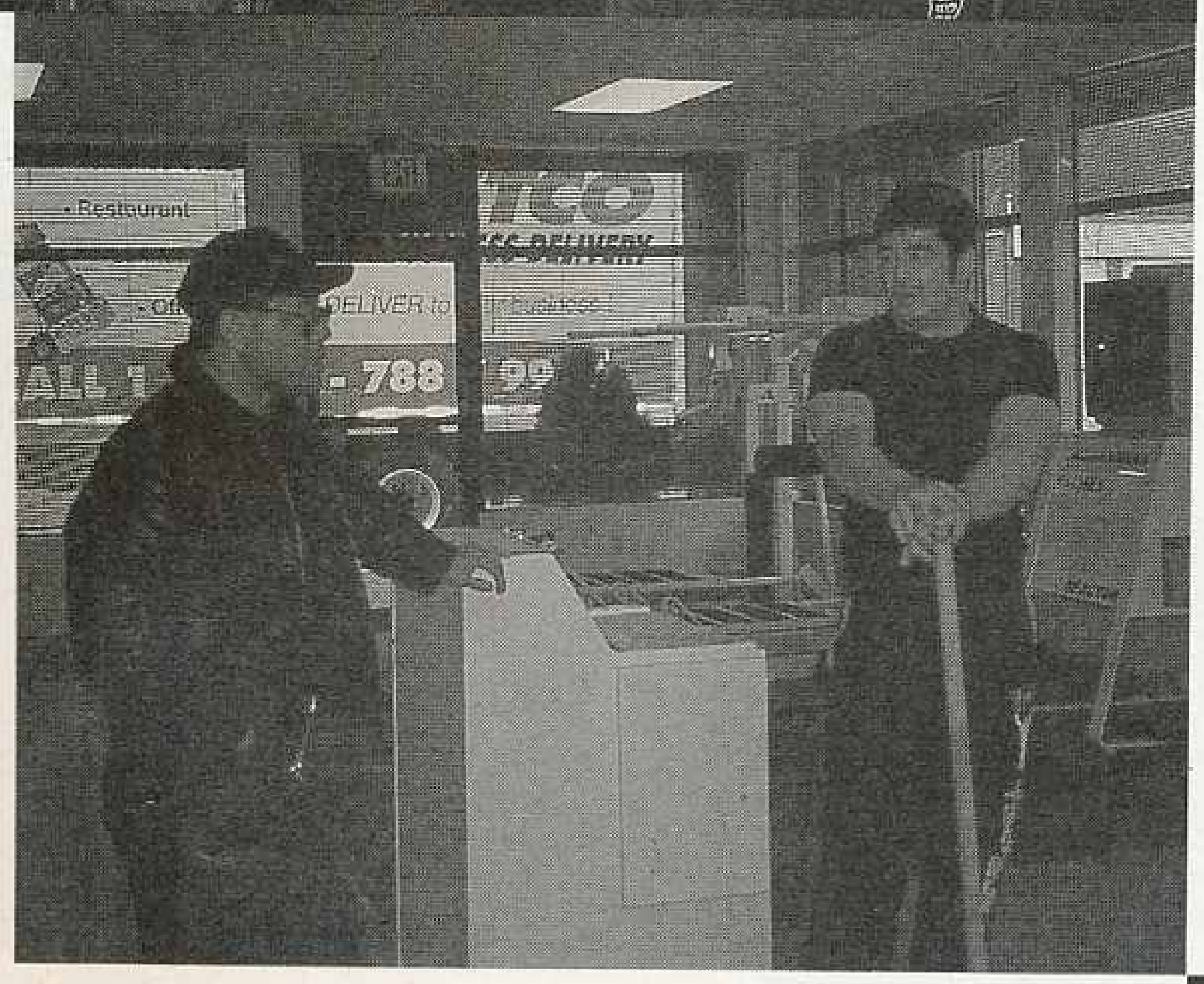
「オレは教えを乞う方だからね。変に先輩後輩の関係を誇示しちゃうのは日本人の良くないところだよ」

シアトル帰りの前田日明が見事に変貌を遂げていただけに、強くなることに謙虚で貪欲な高田がどう変わっているか注目だ。

しかも最近では練習や試合に対する配慮から、大好きな酒も控え目にしているそうだ。それだけ、いまの高田はひとつの試合を大切に考えていることの裏付けである。

「最近はこういう形で試合してるから身体のメンテナンスを気にするじゃない？だからそういう機会はなるべく減らすようにしてる。飲むのは試合が終わった晩だけ」





あの前田日明の肉体を見事に改造して、一躍プロレス界の名伯楽となったケビン・ヤマザキさんの指導でモーリスと共にトレーニングを積んだ。出てきた数値には高田も満足そうに笑顔を浮かべていた



日本人も続々とモーリス・ジムの門を叩いている。これからも日本マット界にとって重要な場所となっていくに違いない

果たして『PRIDE.5』の後に飲む酒は勝利の美酒になるのか、否か？　その後、話は酒にまつわる数々のエピソードが飛び出したが、今回はスペースもあまりないので、最後に高田の決意を感じさせるこんな言葉を紹介しよう。「高田さん、これからもプロレス界を引っ張っていってください」とSnow氏が別れ際に声を掛けたところ、高田は力強く言い放った。

「オレはやるよ……うん、オレはやる!! オレはやるし、桜庭はやるし、佐野もやるし、松井もやるし、豊永もやる……高田道場は元気のカタマリだね（笑）」

そんな〝元気のカタマリ〟が『PRIDE.』をはじめ、パンクラス、あるいはそれ以外のリングまでも、元気に燃えあがらせてくれることだろう。

リバースorダイ!?

高田、試練の再起ロードにアルティメット・ハンマーが立ちふさがる!

『PRIDE.5』

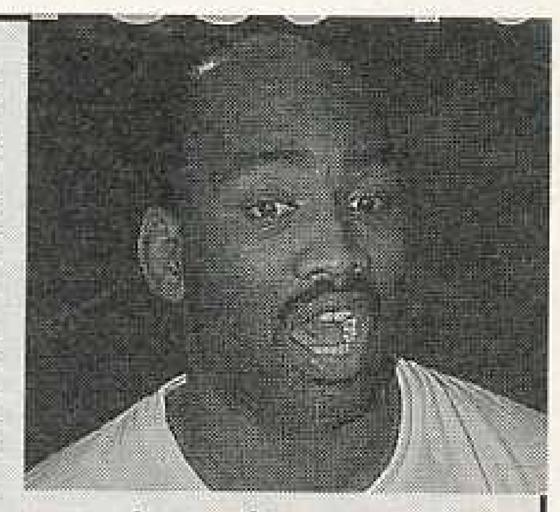
1999年4月29日（祝・木）　開場15:00　開始17:00

愛知県・名古屋市総合体育館レインボーホール

高田延彦（高田道場／日本）**vs**

マーク・コールマン（ハンマーハウス／アメリカ）

なんとっ!!　ヒクソン・グレイシーvsホイラー・グレイシーの柔術エキシビジョンマッチも決定!!



モーリス・スミスの証言

タカダは元々優れたサブミッション・ファイターだけど、もっとオレたちが教えることもいろいろある。大事なのはとにかくメンタル面だよ。リラックスすること。それと自分の感覚で距離を保つことだね。タカダのサブミッションのスキルは優れてるよ。ただ、それは昔だったらそれで勝てたんだろうけど、いまはフリー・ファイトの技術がすごいスピードで進歩してるからね。ただ高田には勝つチャンスが絶対にあると思うよ。

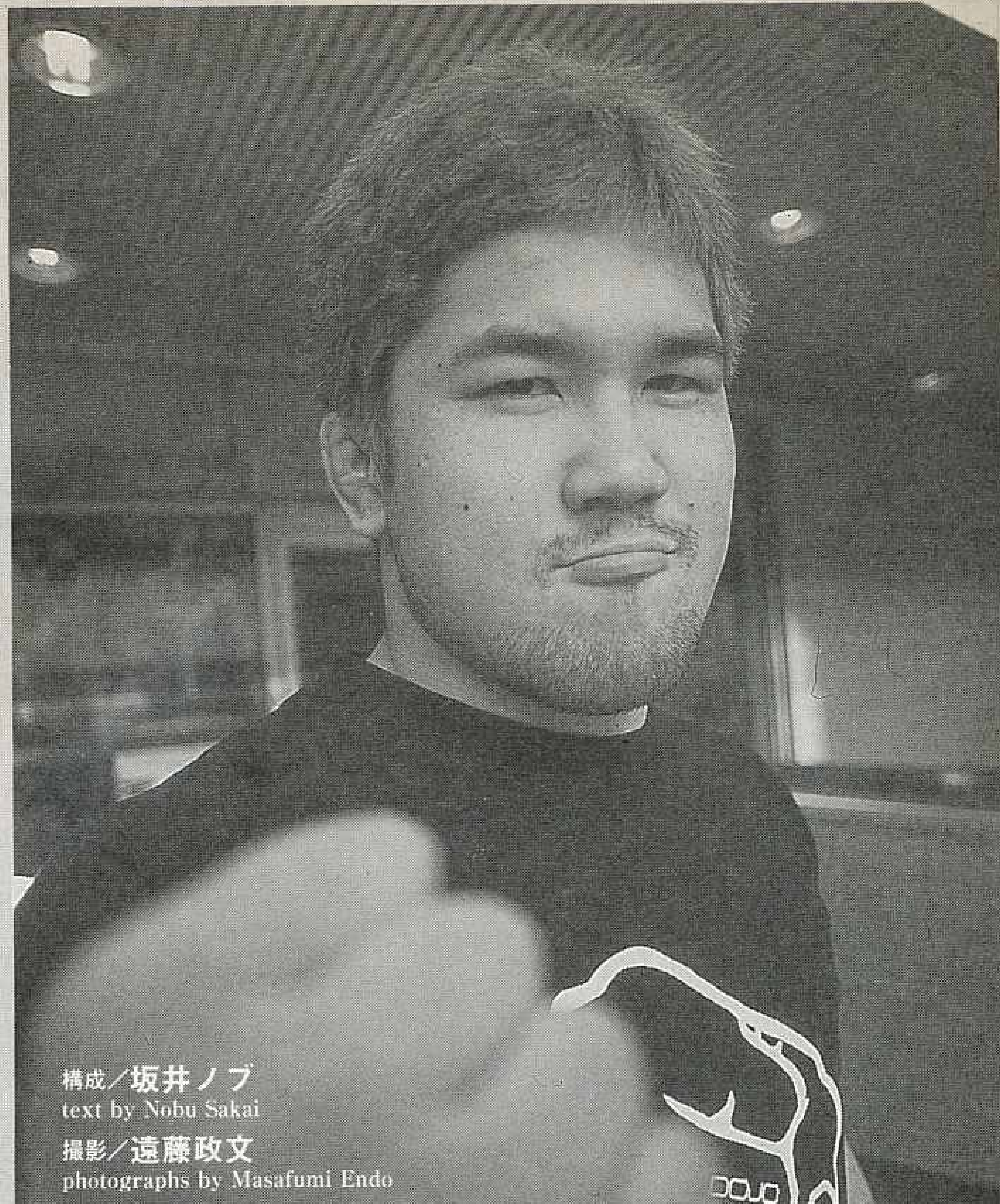
vsイーゲン井上戦直前　鉄砲玉が暴発寸前!!

豊永稔

ミニインタビュー

Uインター、キングダム直系の無骨な顔立ちをしているこの男――高田道場の鉄砲玉・豊永稔である。

昨年はリングスとパンクラスという犬猿状態の両団体に出場を果たしたことで、U系団体対抗戦の切り込み隊長としてその名を轟かせた。そして、今度は『PRIDE.』のリングにも切り込んで行くことになった！　対戦相手は、アドレナリン・ブラザーズこと狂乱の井上兄弟の兄・イーゲン井上である。相当な実力者だが、エンセンほどブレイクはしていない。その秘めたる実力が爆発するか、それとも豊永が、まだ見せたことのない力を見せつけるのか？

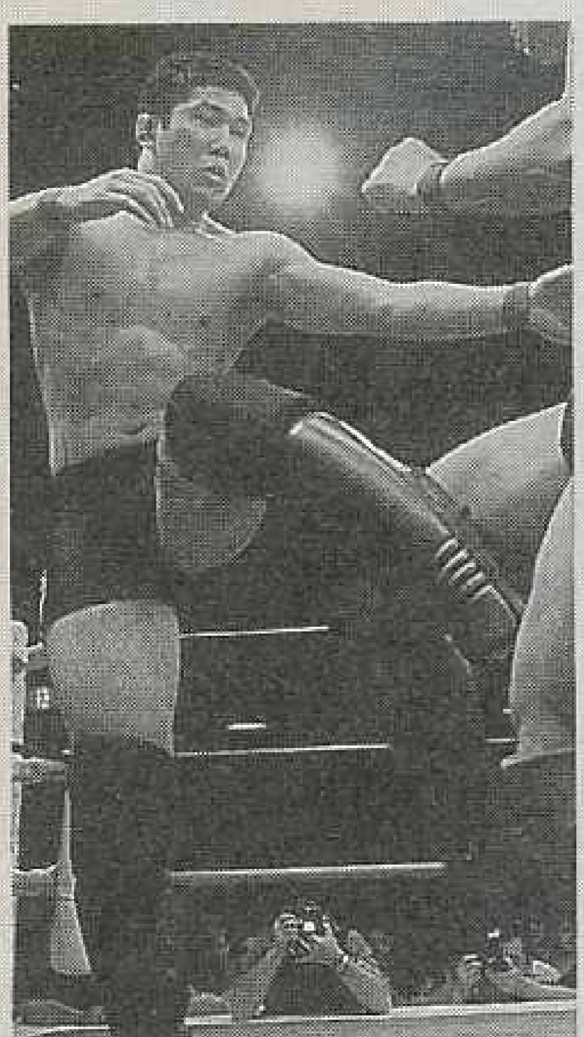


構成／坂井ノブ
text by Nobu Sakai
撮影／遠藤政文
photographs by Masafumi Endo

練習で騙されて、バカにされてストレスが蓄積してきてますね（笑）

豊永は昨年6月にリングス、12月と今年1月にはパンクラスに出場した。いずれも勝ち星を挙げるには至らなかったが、大きな注目を集めた。日頃、闘うリングを持たない高田道場勢の中でも、特に豊永のような若手にはどんどん実戦を経験させたい、という高田の意向もあるようだ。

そして、ついに『PRIDE.5』という大舞台でのビッグマッチが実現した！　エンセン井上の実兄で、先日行われた『アブダビ・コンバット』ではヘンゾ・グレイシーから判定ながら勝利をあげたイーゲン井上との対戦が決まったのである！しかも、エンセン同様キレるたら手が付けられないのは、過去、『VTJ98』でエンセン井上vsフランク・シャムロックの試合に乱入した事件や98年2月のハワイで起こったヘウソン・グレイシー一派との大乱闘事件を見ても明かである。



いきなり大舞台に上がるチャンスを得た豊永は、一体このチャンスに何を狙っているのか？　本人に固い決意と威勢のいい発言でも聞かせてもらおうと試みたのだが、返ってきた言葉は意外なほど力が抜けていた。

「はぁ、（vsイーゲン戦決定は）ビックリしました」

では、対戦相手のイーゲン井上に対してはどういうイメージを持っているのだろう？

「なんていうか……つい最近、ヘンゾ・グレイシーに勝ってますよね。気持ちが熱い人なんでしょうね。エンセンさんと同タイプじゃないですかねぇ、たぶん。で、もっとテクニックっていうか、エンセンさんは結構体格があるからガツンガツンいきますけど、イーゲンさんはもっと嫌～な攻めとかしてくるんじゃないッスかねぇ。ホイスみたいにねっちっこく。例えばグラウンドで思いっきりガツガツ殴るんじゃなくて、バーン、バーンて嫌なところに当ててくるとか、そういうことをしてくる選手だと思いますけど」

見ているポイントはしっかりしている。

そんな豊永は日頃、桜庭と練習する機会が多いというのだが、先輩・桜庭についてどう思っているのだろう？

「強いッスねぇ。まったくかなわないですよ。騙されるんです！　騙すというか、いい言葉で言うとフェイントなんですけど、桜庭さんに騙されないようになりたいです。それが第一目標ですね」

あまりギラギラしたものを感じさせないが、このときばかりは普段の朴訥とした表情も一変した。

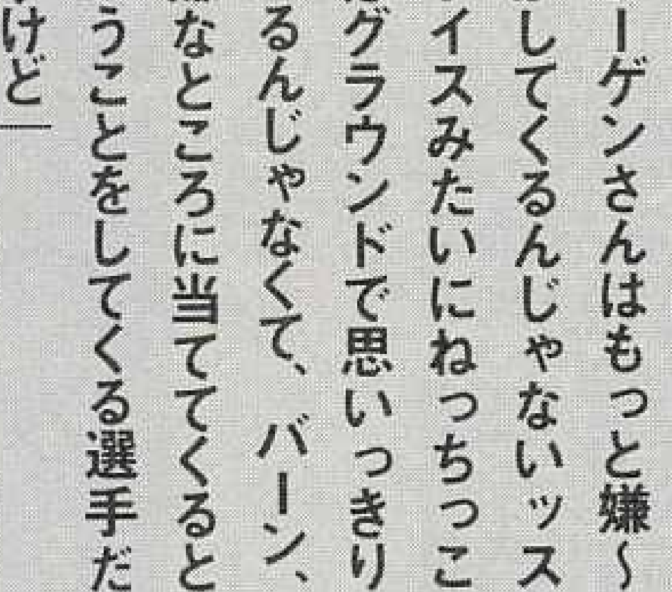
「いつも騙されてばっかで、バカにされてるんで。ストレスが蓄積してきてますね（笑）」

そのストレスが試合で爆発すれば、イーゲンの牙城も崩せるのではないか？

【豊永稔　団体交流戦の戦績】
▼98・6・20　リングス　後楽園ホール大会
△vs滑川康仁　15分フルタイム　引き分け
▼98・12・19　パンクラス　NKホール大会
●vs石井大輔　10分フルタイム　3-0判定負け
▼99・1・19　パンクラス　後楽園ホール大会
●vs窪田幸正　10分フルタイム　3-0判定負け

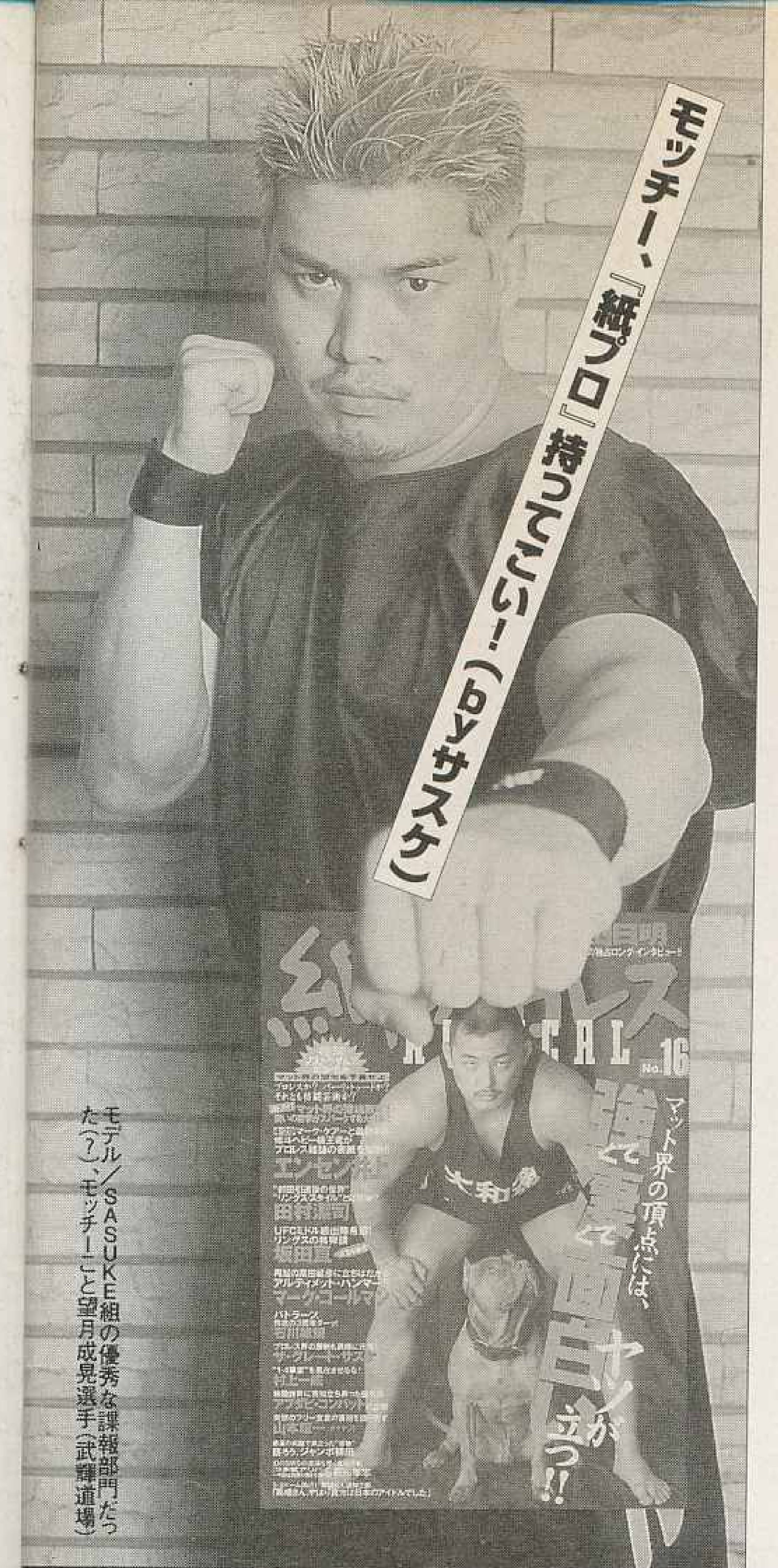
もうひとつの大和魂が炸裂するのか？
それとも若さで暴発するのか？

『PRIDE.5』
豊永稔vs
イーゲン井上
1999年4月29日（木・祝）
愛知県・名古屋レインボーホール
17:00試合開始



紙のプロレスRADICAL バックナンバーのお知らせ

『紙のプロレスRADICAL』創刊号からNo.4までは完売いたしました。乾杯！



モデル／SASUKE組の優秀な諜報部門だった(?)、モッチーこと望月成晃選手（武輝道場）

第5号

★打倒ヒクソン！「最後の刺客」高田延彦ロングインタビュー

◎猪木、Puffy、ガッツ石松ほか有名人33人が高田vsヒクソンを大予想



◎読者人気爆発!!
ストロング・スタイル対ひょうきんプロレスの頂上対決。
伏せ字だらけの超過激対談パート2
ドン荒川vs藤原喜明

◎全てはここから始まった！
開始前から話題騒然の新連載！
前田日明のウルトラ・メガバトル人生相談『人生は語らず』

◎世界格闘技連盟を語りたおす！
食い倒す？『ケーキクェイ』
佐山聡（タイガーキング）インタビュー

◎"活字プロレスの悪魔（ターザン山本）"が語る
高田VSヒクソンの意味！

第6号

★特集「"プロ"と"レス"融合か分裂か！」

◎俺たちが世界を支える！
nWo総帥蝶野正洋ロングインタビュー



◎前田日明の人生相談＆パンクラス問題に日明兄さんブチッインタビュー＆前田のイラダチ頂点に達す!!
リングス大会終了後の共同会見完全再録

◎ゴリさんことアレクサンダー大塚のみちのくひとり旅日記'97

◎TAKAみちのく
毒舌爆発インタビュー

◎高田×ヒクソン戦直後、Puffyに独占インタビューを敢行！

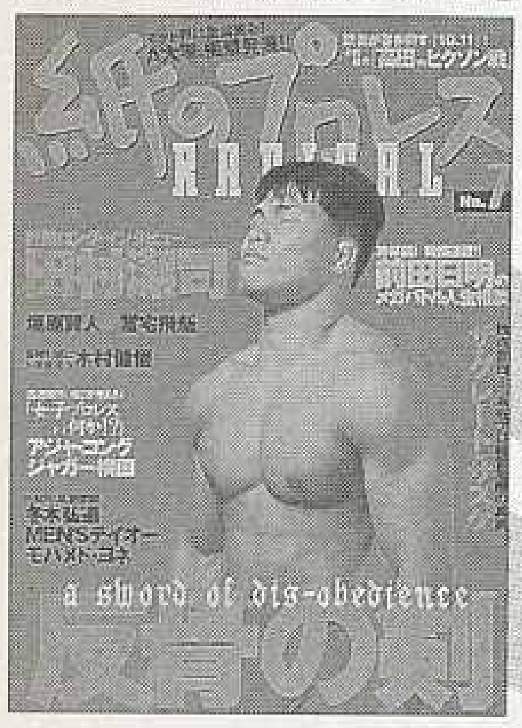
◎打倒！八百長論議！
ザ・グレート・サスケが素人相手にお説教！

◎井上京子／井上貴子／角掛留造／松永高司インタビュー

第7号

★特集「反骨の剣」田村潔司ロングインタビュー

◎読者もシビレまくり！
黒いパンツの心意気・激白木村健悟



◎酒、煙草、男、三禁なんてクソ食らえな大型不良新人！中原奈々インタビュー（現在失踪中）
「凶器しか使わないプロレスをしたい！」

◎みちプロ経営危機の真実をザ・グレート・サスケが独占告白！

◎……ああ、好評すぎて怖い。
寸止めなしの殺戮連載！
前田日明の「人生は語らず」

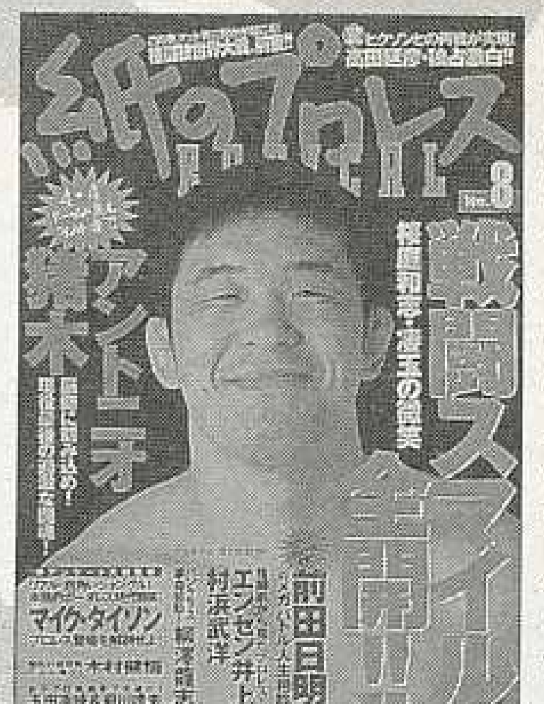
◎祝！　復帰記念
モハメド・ヨネインタビュー

◎ラジカル初登場2連発！
冬木弘道／MEN'Sテイオー

第8号

★特集『格闘技世界大戦前夜!!』

◎戦闘スマイル全開桜庭和志ロングインタビュー



◎アントニオ猪木
「元気」と「気づき」の二つのロングインタビュー

◎ヒクソンとの再戦が決定！
高田延彦の意気込みを聞け！

◎「プロレスラーはホントは強いんです」記念！格闘家から見たプロレス
エンセン井上／村浜武洋ロングインタビュー

◎波動砲！前田日明の人生相談『人生は語らず』

◎必読！黒いパンツの心意気PART2
木村健悟が猪木、坂口から八百長論まで大いに語る！

◎業界内外で話題騒然
吉田豪の書評の星座PART2

第9号

★「アントニオ猪木・闘魂連鎖！無礼講大特集!!」
前田日明／ザ・グレート・サスケ／高田文夫／春一番



久々に大炎上！ターザン山本／燃える情念！石川雄規

◎衝撃のさらばプロレスマスコミ宣言業界病を吹き飛ばせ!!

◎見てみぃ、この面ッ!!
高阪剛ロングインタビュー

◎前田日明ラス前ロングインタビュー＆炸裂人生相談

◎日プロOB吉村道明＆ユセフトルコ＆遠藤幸吉＆駿河海

◎各方面で大反響!!
『格闘家からみたプロレス！』朝日昇

◎大ブレイク！
谷津嘉章ロングインタビュー

第10号

★特集「灼熱の地殻変動'98」
大和魂は連鎖する!!

◎前田日明vsエンセン井上スクープ対談！



◎とにかく元気！
高田延彦ロングインタビュー

◎またもや大爆発！
谷津嘉章インタビュー第2弾！

◎社長＆会長対談・ザ・グレート・サスケ（みちプロ社長）vs松永高司（全女会長）

◎『紙のプレイボーイ』発進!!
ダイアナ＆宮内美穂

◎大噴火!!　ターザン山本のプロレスマスコミ表紙批評!!

◎『紙のプロレス』スーパースター列伝　北沢幹之

◎冬木弘道（金村ゆきひろ＆伊藤豪）ロングインタビュー

第16号

★特集1「格闘ノストラダムス'99」

◎修斗ヘビー級王者エンセン井上、プロレス雑誌の表紙奪取記念ロングインタビュー

◎田村潔司　坂田亘　高阪剛　山本喧一　村上一成　マーク・コールマン　石川雄規　ザ・グレート・サスケインタビュー

★特集2「それぞれの旅立ち'99」

◎マット界の環境問題を語るアントニオ猪木ロングインタビュー

◎前田日明引退後初の独占ロングインタビュー！

◎大好評！「語ろう」シリーズ第2弾！　語ろうジャンボ鶴田

◎大反響!SWSを再検証せよ第7弾　S多重アリバイ　石川孝志

第11号

★特集「格闘Viagra'98」

◎高田延彦vsエンセン井上
エネルギーエクスチェンジ烈談!!



◎前田日明ラストマッチ後・初インタビュー

◎良くも悪くも大反響！
ターザン山本のプロレスマスコミ表紙批評！

◎「格闘か？芸術か？それとも格闘芸術か!?」
佐山聡／スーパー宇宙パワー（木村浩一郎）／福田雅一インタビュー

◎ザ・グレート・カブキ／ダンプ松本インタビュー

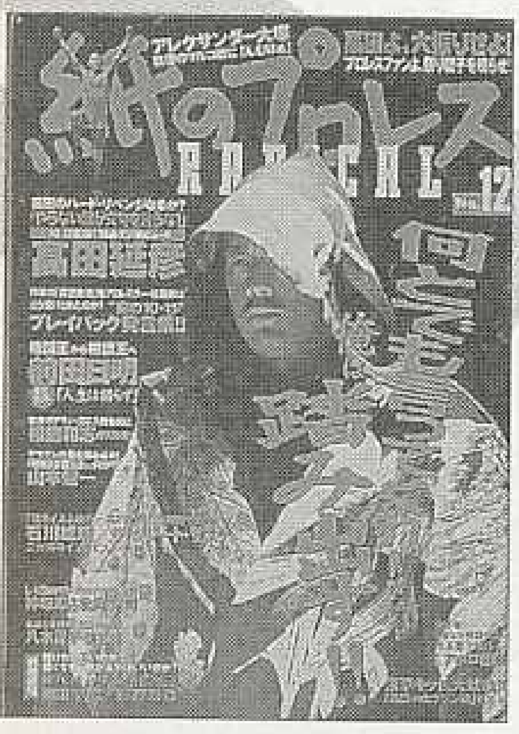
◎バトラーツ両国進出記念特集
石川雄規／トンパチ・マシンガンズ／岡本衛／マッハ純二／土方隆司

◎SWSの真実がいま初めて語られる！『S多重アリバイ』
アポロ菅原

第12号

★特集「格闘TEPODON!!'98」

◎ヒクソン戦直前！
何かが違う高田延彦暴走ロングインタビュー



◎「プロレスファンよ踊れ！そして祭り囃子を鳴らせ!!」
浅草キッド登場

◎人気大炸裂！「S多重アリバイ」第2弾アポロ菅原インタビュー

◎桜庭和志／アレクサンダー大塚／山本健一／神取＆北尾／八木淳子／ダンプ松本／志生野温夫インタビュー

◎猪木イズム世界一決定戦
石川雄規＆ザ・グレート・サスケ

◎格闘王から相談王へ
前田日明人生相談
「人生は語らず」堂々復活!!

◎話題騒然!!
What is プロ格闘家？
菊田早苗＆郷野聡寛インタビュー

第13号

★特集「四角いジャングルRADICAL」

◎実写版『1・2の三四郎』降臨！
アレクサンダー大塚インタビュー



◎『10.11 PRIDE.4』とは何か？
ザマアミロ雑談会!!

◎高田延彦がヒクソン戦後の心中をリアルに語った!!

◎前田日明・エンセン井上が語る『高田VSヒクソン戦』!!

◎谷津嘉章（プロレスラー代表）・島田裕二（レフェリー代表）・浅草キッド（プロレスファン代表）から見た『10.11 PRIDE.4（その他）』

◎大反響！SWSを徹底再検証
『S多重アリバイ』第3弾
ケンドー・ナガサキ

◎ボブ・バックランド／松永光弘／リッキー・フジ／堀辺正史インタビュー

第14号

★特集「格闘DREAM CAST」

◎前田日明独占ロングインタビュー／これがカレリンの発した言葉だ!!／池田美憂・山本聖子vs父・親子ゲンカ!?対談／"人類最強の男"に関する証言ファイル



◎連勝街道爆進中！
金原弘光ロング・インタビュー

◎RADICAL版　ゆく年くる年'98→'99座談会　マット界へ愛をこめて

◎舌好調！谷津嘉章のマット界、目ぇつぶって30秒!!
'98年マット界総括編

◎『高田道場1999！』
高田延彦／桜庭和志／佐野友飛／松井駿介／豊永稔インタビュー

◎幻のSWSを再考察
『S多重トンパチ』第4弾
折原昌夫

◎『虎の尾を踏む男たち'99』
小路晃／4代目タイガーマスク／村上一成／宇野薫

第15号

★特集1「格闘MARS ATTACKS!」
橋本戦の核心を語る小川直也with.S.Sインタビュー／「乱闘？あれはね、強い者イジメ!!」佐山聡／4代目タイガーマスク／UFO襲来緊急座談会



★特集2
「格闘LAST VOYAGE」

◎前田日明USA特訓を直撃！／本物降臨!! アレキサンダー・カレリン／浅草キッドの前田日明熱烈応援文／アニマル浜口親子のハラワタ対談！

◎「馬場さん、目を覚ましてください!!」
ジャイアント馬場追悼特集

◎みちプロ分裂直前SASUKEインタビュー＆デルフィン退団記者会見

◎マサ・サイトー引退記念座談会
『語ろうマサ・サイトー！』

◎夢の団体SWSを徹底検証2連発！『S多重アリバイ』第5弾
佐野友飛＆第6弾　Mr.W

【バックナンバーの購入方法】

●お申込み方法は現金書留と郵便振替の2種類があります（バックナンバーは通販でしか取り扱っていません。書店では買えません）

●現金書留の場合は希望号数を書いた紙を同封し、
〒151－0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3－11－3 －702
(株)ダブルクロス『RADICAL通販』係まで送って下さい。

●郵便振替の場合は用紙裏面の通信欄に希望号数を明記し、
00130－3－769154(株)ダブルクロスまで。
代金は創刊号＝610円　2号＝660円　3号～10号＝680円　11～16号＝780円　送料1冊＝310円　2冊＝340円　3冊～4冊＝450円　5冊＝520円　6冊以上＝700円

●『紙のプロレスRADICAL』バックナンバー常備のえらい店
・アイドール新宿店・新宿ファイター・大山アメリカン・プロレスマニア館・チャンピオン東京・チャンピオン大阪・リングパレス・バディスラム・タコシェ・レッスル渋谷店・レッスル池袋店・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・書泉グランデ・ヘラクレス和歌山駅前店・横浜"AO"CORNER・下北沢バンバンビガロ

紙のプロレス RADICAL

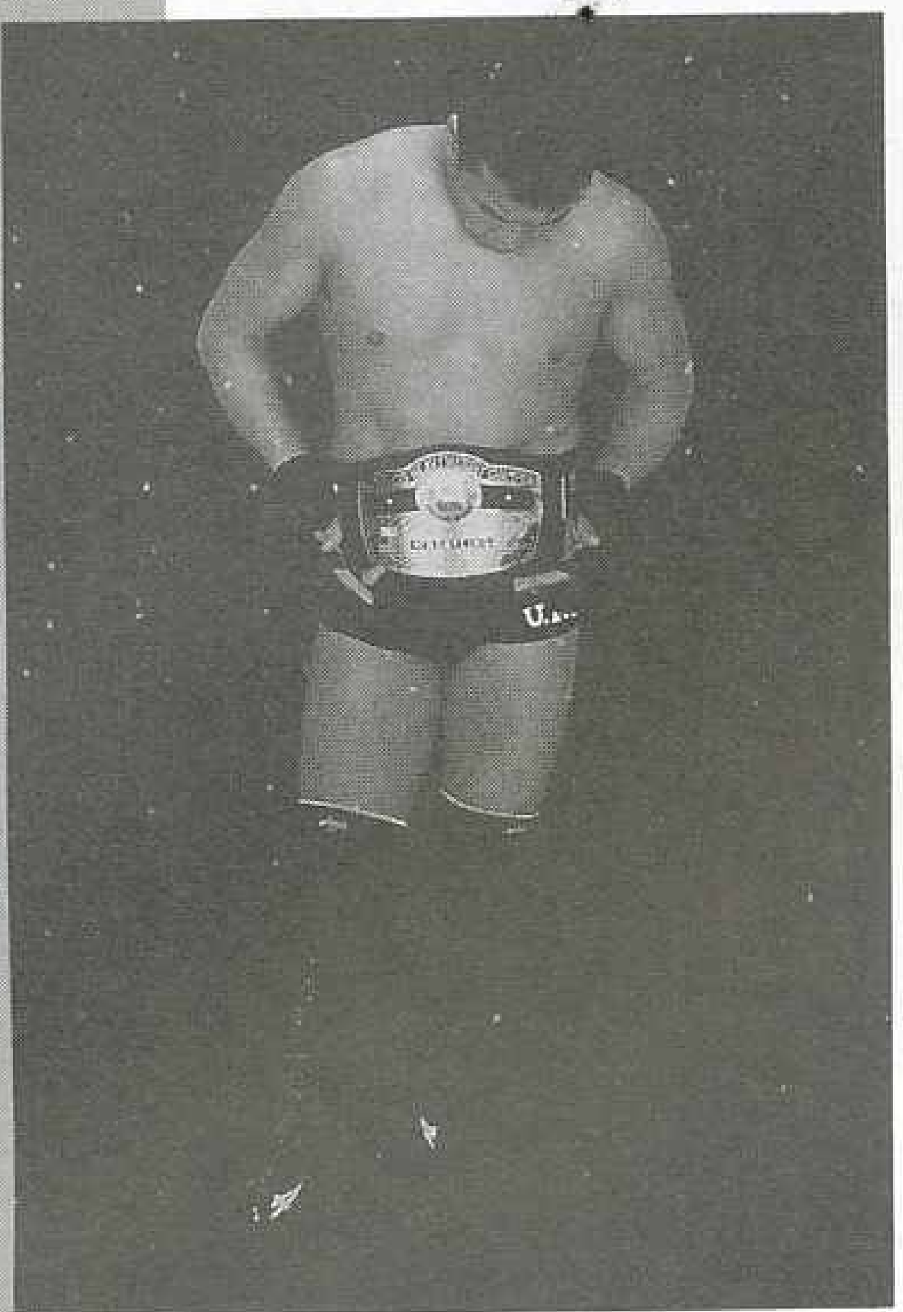
1999 no.17

アミーゴ!!

(鈴木あみに夢中な山口日昇改め
ノビーゴの独り言より抜粋)

紙のプロレス・ラディカル

CONTENTS



●NO.17 MAIN-EVENT

● SCANDAL&SCOOP

● RADICAL FIGHT

● COLUMNS

● ANOTHER

●真樹日佐夫先生の『無比人』、谷津嘉章の『マット界、目えつぶって30秒』、『S～多重アリバイ』は今回お休みで～す。Sに関してはこの号のどこかに担当・ノブの言いわけが載ってま～す。抗議のおハガキ、大歓迎!

※ピンポンパンポーン。『プロレス激本』のみなさん、『プロレス激本』のみなさん、ウチがいつ挑戦状出しましたぁ? ジャイ子よりデカくなってから出直してください。ピンポンパンポーン。

RADICAL特製
★ピンナップ★
落武者発狂記念
浅草キッド路上襲撃事件

RADICAL特製
★ポートレート★
バトラーツ・最初で最後の
中島体育センター大会記念
&五寸釘記念
石川雄規vs松永光弘

Art Director
出田さん●San Ideta
Design / two-three
村松さん●San Muramatsu
ヒサくん●Kun Hisa
マツ●Matsu
セッキー&グッチー●Sekkie&Guttie

表紙モデル/小川直也
撮影/森鷹博
スタイリング/Naoya Ogawa

※「RADICALとは何か?」って、知ってるって、オレが教えるって。「根源的」、「根本的」って意味だって。オレはやるって。

格闘 MAKE JUNGLE 編集部 with T 座談会

『紙のプロレスRADICAL』がよりによって、取材すら出来ないメジャー2団体のことを語る！　いま現在、全日と新日はともに“プロレス”というものを考える題材としては抜群に面白い素材であることは間違いない。新日本は小川vs橋本戦の“1・4事変”によって、全日本は馬場さんの“ご逝去”によって、この両メジャー団体は同時に変革の時期を迎えているからだ。そんなわけで、両団体の内部にうごめく新しい方向性を模索する動きを拾い上げながら、どうなれば面白いかなどということを野次馬根性丸出しで考えてみたいと思います。それと、もうひとつ！　今回は、いままでのノブの目も当てられない司会っぷりに業を煮やした“あの人気者”がはるばる大阪から､自腹を切ってまでやってきてくれました。原タコヤキ君ッ!!　出てこ～いッ!!

ジャングルを守るよりも
ジャングルを作る!!

紙プロが語る 新日本プロレス 全日本プロレス

格闘 MAKE JUNGLE
ジャングルを守るよりジャングルを作る!!

ストロングスタイルなのかアメプロに寄るかっていうのが〝肝〟じゃん（豪）

山口 さ、今日はめずらしいお客さんが来ています。読者のために一応説明しておくと、版型が小っちゃい頃の『紙プロ』のダミー編集長、原タコヤキ君が来ています！（笑）。

タコ 皆さん、お久しぶりでんなぁ。

山口 今日は、毎回毎回ノブの司会のダメッぷりを見るに見かねて大阪から来たんだろ？（笑）。

タコ ええ。見るにみかねて（笑）。実は新日本（4・10東京ドーム）を見に来てね。でも、見てませんけど。というわけで、皆さんに新日本の話を聞きつつ、いまの新日本の現状を浮き彫りにしたところで、全日本と比較するって話なんですけど、比較して、どうなんねん、ノブ！

山口 ちょっと待て、タコ！ お前サビついてるぞ！（笑）

タコ サビついてるもなにも、オレ、話な〜んも聞いてへんねん！

山口 話聞いてないのを円滑に進めるのがお前の芸じゃねぇかよ！ それくらいしか芸ないだろ。手足が小っちゃい以外は（笑）。

タコ ……っていうことで、サラッと感想から聞いていきましょうか（笑）。みなさん昨日の4・10はあんまり面白いと感じなかったらしいですなぁ。どうですか、吉田さんは（笑）。

豪 ちょっとツラかったねぇ。

タコ 全試合？

豪 う〜ん、要所、要所？ 一番印象に残ってるのは客でメチャクチャファッションセンスのいいヤツがいたとか。そういうレベルなんだよね（笑）。

山口 どんなセンスのヤツ？

豪 「DRAGON ZONE」って藤波辰爾のブルゾンの背中に普通のペンで大きく「長州」って書いてて（笑）。

山口 ガハハハ！ やるね。

豪 で、下に「nWo」って。あれは新しい波を感じたね（笑）。

タコ ホンマかいな？（笑）。試合的には引っ掛かったヤツは挙げられへんの？

豪 だって、大仁田に関して言えばテレビで見たほうが面白いわけでしょ？ 流れもわかるし、バックステージまでわかるし。ベシャリは全部聞けるし。TVの構成が面白くなってるから会場行く意味ないなってホントに思った（笑）。

山口 でも、第0試合始まる前は盛り上がってたよ。期待感あったんじゃないの？ オレは、まるでプロレス会場にいるかのような興奮を覚えたもん（笑）。

タコ ということは入場まではよかったんですね？

豪 5時10分ぐらいまでいいね。

タコ そうでっかぁ（笑）。入場がよかったっていうのは全員一致でいいわけ？

ノブ はい、全員一致で。

タコ なんでやねん！ 聞いてみなわからへんがな（笑）。

豪 あと入口でドリンクチェックが凄いんだよ。ペットボトルと缶が持ち込み禁止で、代わりに紙コップ用意されてて。初めてだったわ、そんなの。それって紙コップだったらご自由にお投げくださいっていうことだよね（笑）。

ノブ 観客参加型ですよね（笑）。

豪 ドン・フライにまで投げられちゃってね、可哀想に（笑）。

タコ 紙コップは結構投げられてたん？

豪 怖かったもん（笑）。オレらも座ってて後ろから飛んでくるんじゃないかと思って。

ノブ あれは………楽しいですよね。

タコ ワハハハハ！ どないやねん！ 紙コップが楽しいって？（笑）。

豪 アメプロっていうより、ホントにみんな純粋に「ブー」ってやるじゃん。ただ素直に大仁田が嫌いで（笑）。

タコ 「アメプロ」なん？

山口 いや、まだ完全に振り切れてない。ア、アタタ（ここで山口日昇はイボ痔治療のため、一時退席）

タコ いろいろ話を聞いてみると、アメプロになりきれないってところが、モノ凄いテーマになってる感じやね。

豪 結局それなんだよ。ストロングスタイルなのか、アメプロに寄るのかっていうのが〝肝〟じゃん。

タコ 吉田さん的には新日本のアメプロ化っていうのはどうなん？

豪 もう行っちゃったほうがいいかなっていうのは思う。キングオブスポーツとストロングスタイルっていうのはとりあえずどっか置いて。もしくは二つに分けちゃって、アメプロ派とストロングスタイル派との対立みたいにしちゃってもいいだろうし。蝶野とかがやるアメプロ派の興行だとああいうドーム興行みたいにやってとかさ。



何といっても4月10日の目玉は電流爆破デスマッチであったが、その試合の後のだらけた空気を元に戻せるだけの力量を持ったレスラーも用意しておかなければならなかった。

ストロングスタイルなんていう冠は外しちゃって、本場を飛び越えるものを作れ（山口）

タコ　興行も分けるの？　でもストロングスタイルと、アメプロがない交ぜになってるっていうところで逆に魅力が出たりせえへん？

豪　食い合わせ悪いんだよね。どっちもいいとこ取りしたいんだろうけど。ただ藤田（和之）選手は光ったよ。あきらかに強いなっていうのは会場中に伝わったたし、最近の新日ファンもどよめいていたし。

タコ　チョロはどうなん？

チョロ　ハッキリ言って「アメプロに失礼」っていう部分があるんじゃないですかね。

豪　昨日も大仁田の試合見てて言ってたよね。「これは大日本に失礼」って（笑）。

タコ　それはどういうことなん？

チョロ　昔ながらのストロングスタイルでもない。かといってアメプロっていうのとも違う。選手も「ストロングスタイルか、アメプロか、どっちか選びなさい」って言われたらストロングスタイルを選ぶほうが多いですよね。だからハード面で金を掛けられるっていう部分ではアメプロに近付けるんでしょうけど、選手の質でいうとFMWとかのほうが選手自身も、アメプロやるっていう……。

タコ　意識とか志向がそっちに向いてると。じゃあ新日本がアメプロに行かれへんのは、選手の質と志向やと思っていいわけ？

豪　質は明らかに新日のほうが上なわけで、FMはその隙間を突いて志向をそっちに向けただけでしょ。新日はまだだけど、行きゃあ行けるよ。やっぱり素材は凄いからね、新日って。

チョロ　頭切り替えないと、徹底したアメプロっていうのはやっぱり、ちっと。

豪　ただ、トップの蝶野と武藤がアメプロ志向だから方向性は変えやすいんだよ。で、橋本がいなくなってるっていうのもあるし。

タコ　まさにそうでしょ。選手の質的にも充分対応できるわけだしさ。結局アメプロになって行った必然っていうのはドームでプロレスするようになって「遠心力が必要や」っていうことでアメプロ志向になって行くわけやから。

豪　前座がいらなくなっちゃったんだよね。第1試合から客を掴まなきゃいけないような感じだから。

タコ　ドームプロレスって言われ始めてちょうど10年、時間も充分なわけやん。それでアメプロになりきられへんっていうところはどうなんやろ？

豪　ドームプロレスとして完成はしたわけでしょ。いわゆるマニア的にはあんまり面白くないけれど、一見さんには届きやすいかもしれないっていう形はできたし。それがストロングスタイルよりはアメプロに近い形だったわけでしょ。

タコ　会長（山口日昇のアダ名）はどうなんですか、さっきからアメプロのほうに行ったほうがいいという意見が出てますけど。

山口　俺が、俺が、（ゼェゼェ）イボ痔で何が悪いんじゃ〜！　えー、ただいま私は戻って参りました！（笑）。で、アメプロの話なの？（笑）。いまの新日本の流れだったら悪い意味じゃなくてアメプロに行ったほうが楽しめると思うね、素直に。

豪　みんな吹っ切って応援とかもできると思うよね。

山口　役者も揃ってるわけだし、もっとスケール感出せると思うんだけどね。

タコ　あとはハード面で一番追いつける可能性があるのは新日本ですもんね。

山口　新日本ぐらいしかないでしょ？　インディー団体では資金面で追い付かないし。

豪　大仁田の参戦で、毎週ああやってテレビで煽っていくことが可能だっていうことはハッキリしたわけでしょ。それなら、いくらでもできるよ。

タコ　さっきも言ってたんですけど、選手の質については問題ない。ハード面でも新日本が一番アメリカンプロレスに追いつけると。でもアメプロになりきれない状況がずっと続いてるわけじゃないですか。その原因はなんなんですか？

山口　それはね、ボクはきちんと理論立てて話せるんだけどね、長くなるんだよ。

タコ　聞きたいわぁ（笑）。

山口　いや、ホントに長いから、よしたほうがいいよ。

豪　まだ、考えてないんですね（笑）。

山口　黙ってろよ、この金髪先生！（笑）。これはね、日本の漢字文化に由来することなんだよ、実は。

豪　あっ、音読み、訓読みの話だ。また始まったよ、いつものあれだ（笑）。

山口　あのね、簡単に言うと、脳味噌の一部に角回という組織があって、そこがブチ壊れると失読症というものになるわけですよ。文字が読めなくなる。日本人が失読症になった場合、なぜか漢字だけが読めなくなって、ひらがな、カタカナは読める。だから、新聞とか見てると穴ボコだらけなの（笑）。で、外国の場合はどうなるかっていうと全部文字が読めなくなっちゃう。新聞見てものっぺらぼう、真っ白になっちゃうわけ（笑）。

タコ　アルファベットだけやからですよね。

山口　そう。それで、日本の漢字って音読みと訓読みってあるじゃない。例えば「外」っていう字があったら音読みで……ソト？

タコ「ガイ」ですやん、大丈夫かいな（笑）。

山口　訓読みで「ソト」と（笑）。で、送りがなを付けたら「ハズれる」とか、いろんな読みかたあるでしょ。漢字二文字くっつけて「外道」とかさ。これって漢字文化圏の中でも日本特有のものなんだって。で、その角回っていう脳味噌をフルに使わないと、この漢字文化には対応できないらしいんだよ。脳味噌の構造として。で、アメリカ人はこの角回を漢字文化に使ってない。じゃあ、何に使ってるかというとすべてパフォーマンス。身ぶり手振りに脳味噌の角回を全て使ってるわけですよ。

ジャイ子　吉田さん本棚見てるよぉ（笑）。

※なぜか本棚から幻の雑誌『格闘パンチ』を取り出し眺める吉田豪。

タコ　気になって気になってしゃあないねん（笑）。こっちが一生懸命聞いてるときに。

山口　こうやって人の話の腰骨を折ろうとするんだよ、この金髪のナルシストは（笑）。ちょっと真面目な話するとすぐこれだよ。

大仁田vs真鍋の流れをおさらい

① 98年11月18日



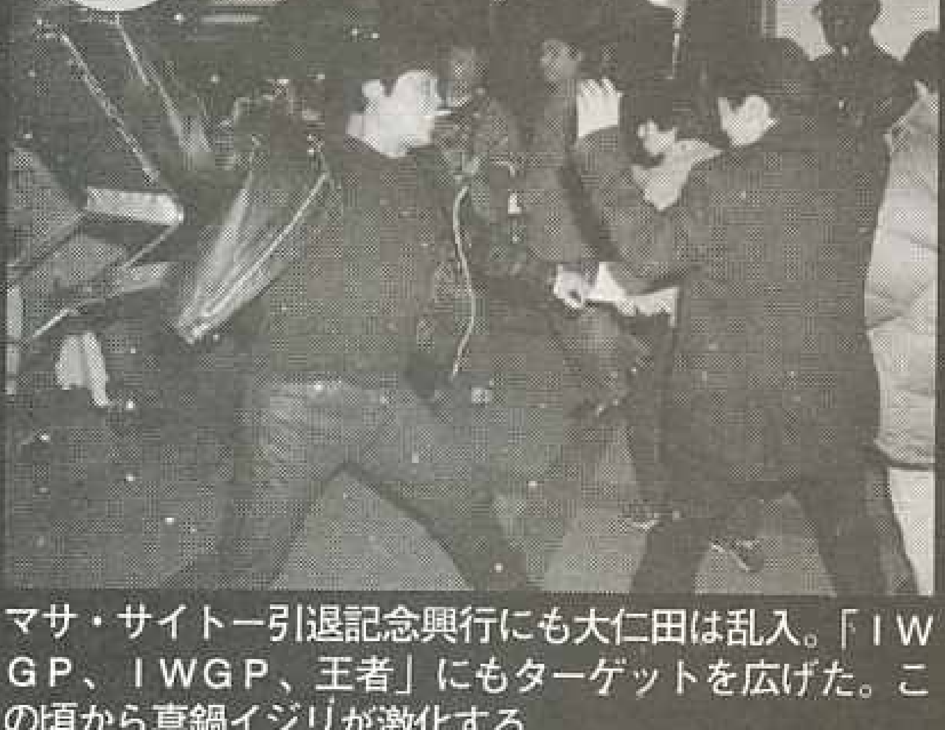
京都府立体育館で行われていた新日本プロレス興行に、大仁田厚が乱入。この頃から、「狙うは長州の首ひとぉ〜つ!!」だった。

② 99年01月04日



闘強導夢大会。「あいつの墓場にしてやるよ！」と言い放った健介だったが、火炎攻撃には勝てず、反則勝ちを拾った。

③ 99年02月14日



マサ・サイトー引退記念興行にも大仁田は乱入。「IWGP、IWGP、王者」にもターゲットを広げた。この頃から真鍋イジリが激化する

格闘
MAKE JUNGLE
ジャングルを守るより
ジャングルを作る!!

豪　これ、『紙のプロレスRADICAL』で一回喋ってますよ（笑）。
山口　いいんだよ、いい話は何度でも（笑）。だから、ことパフォーマンスにかけては脳味噌の容量をフルに使ってるアメリカ人にかなうわけがないんだよ。だけど最近では「日本の若者がアメリカ人化してきてる」なんてよく言うじゃん。でもね、そういう部分は本質的にはかなわないんだよ。
タコ　はっはぁ〜。
山口　キミのうなずき方合格。吉田豪と大違い（笑）。で、漢字の読みかたと一緒で、「プロレス」というものが一つの漢字だとすると、「格闘技」という読み方もあれば、「ショー」という読みかたもある。送りがなをつけたら「プロ格」になったりとか、「ルチャリブレ」になったりとか、いろんな読みができるのが日本のプロレス文化であるわけだよ。で、その角回周辺の脳味噌を使って、いままでプロレスを見てきたのが「プロレス文化」と呼ばれるものの正体なわけだ……（落ちつきのない吉田豪に）後ろ向くな（笑）。
タコ　もう、すぐ気ィ削がれるわ（笑）。
山口　だから完全にアメプロ化したら面白いけど、本質的に追いつきようがないというのはあると思うね。
豪　ただアメリカンナイズされてはきてますからね。
ジャイ子　吉田さんとかぁ？
山口　金髪だからか（笑）。
タコ　そんな理由かい（笑）。
山口　だからパフォーマンスでも追いつきつつあるんだけど、やっぱり本場のWWFとか見ちゃうと金のかけかたからパフォーマンスからさ、どっかしらかなわないじゃない。だから、日本特有の音読みや訓読み、いろんな送りがなをつけたりする中で〝格闘技〟という読み方があったわけでさ。だから、日本特有のプロレス文化をやってきゃあいいんじゃないかなとオレは思うんだけどね。ただ、それはいまの新日本には望まないわけですよ。別のとこに望むっていうことですね。
タコ　昭和の新日本なんかは会長の言ってるようなものなんでしょ？
山口　そうそう。いろんな読みかたができた。
豪　そうじゃなくなっちゃった以上、いっそ飛び越えちゃってほしいなって（笑）。
山口　「ストロングスタイル」という冠なんて外しちゃって、本場を飛び越えていけるようなものを作り上げたら、それは蝶野選手の目指す世界でもあるし、武藤選手の目指す世界でもあるしね。
豪　和製アメプロの完成型をね。それだけの財力からなにから全部あるのは新日しかない。
山口　それが長州力の言う、スケールの大きなスペクテータースポーツにもなり得るわけだし。ファンのニーズもあるだろうし。ただ、そういうファン層だと、4・10では「バトラーツって大したことない」っていうファンの意見があるわけよ。「アレク、ジャイアントスイング回せないじゃん」とか（笑）。要するにそういう画一的な見方しかできないわけだよ。でもボクはいろんな読みかたをしたわけですよ。石川雄規＆アレクサンダー大塚vs山崎一夫＆藤田の試合には。
タコ　さっすがやわ〜（笑）。
山口　でもね、真面目に聞かないから喋りたくない（笑）。
タコ　誰が？
山口　吉田豪！
豪　いやいや、聞いてますよ（笑）。
山口　なんだよ、その嫌そうな言いかたは！
タコ　内紛や（笑）。
豪　ただ、ドームのお客さんっていうのはホントにわかりやすいものを望んでる層だから、わかりやすいものを提供すべきだと思いますよ。
タコ　じゃあ、新日本のファンっていうのはアメプロ化を受け入れる体勢はできてるんや。
山口　だから積極的に参加してるよね。
豪　コップ投げたいわけでしょ、みんな（笑）。
山口　大仁田が出てくればコップ投げて。ドン・フライが出てくればコップ投げて。さしずめコップ・ランドだよね（笑）。
豪　そんな単純な（笑）。
山口　だけどそんな中で藤田の強さっていうのも光ったよね。あれはバトラーツ勢が相手だから光ったんだろうしね。石川雄規と藤田選手のグラウンドの展開は見応えあったよ。タックルとかバックを取るムーブとか！　おい、ムーブだって（笑）
タコ　フミ・サイトーみたいですねぇ（笑）。
山口　藤田選手は新日本の中では能力ほど光ってなかったわけだからさ。
豪　光りましたねぇ。それで、ボーイズが騒いだんだよ（笑）。

④ 99年03月03日



『ハイパーバトル99』開幕戦で蝶野の試合前に大仁田が乱入。しかし、蝶野は一切手を出さない。なぜなら「オレは素人には手を出さない」うまいっ！

⑤ 99年03月07日



真鍋「私は、東京ドームで蝶野選手と大仁田選手のノーロープ有刺鉄線電流爆破デスマッチを見たいです！」大仁田「そうかァァァ!!（バチン！）」今年屈指の名シーンだ。

⑥ 99年03月06日

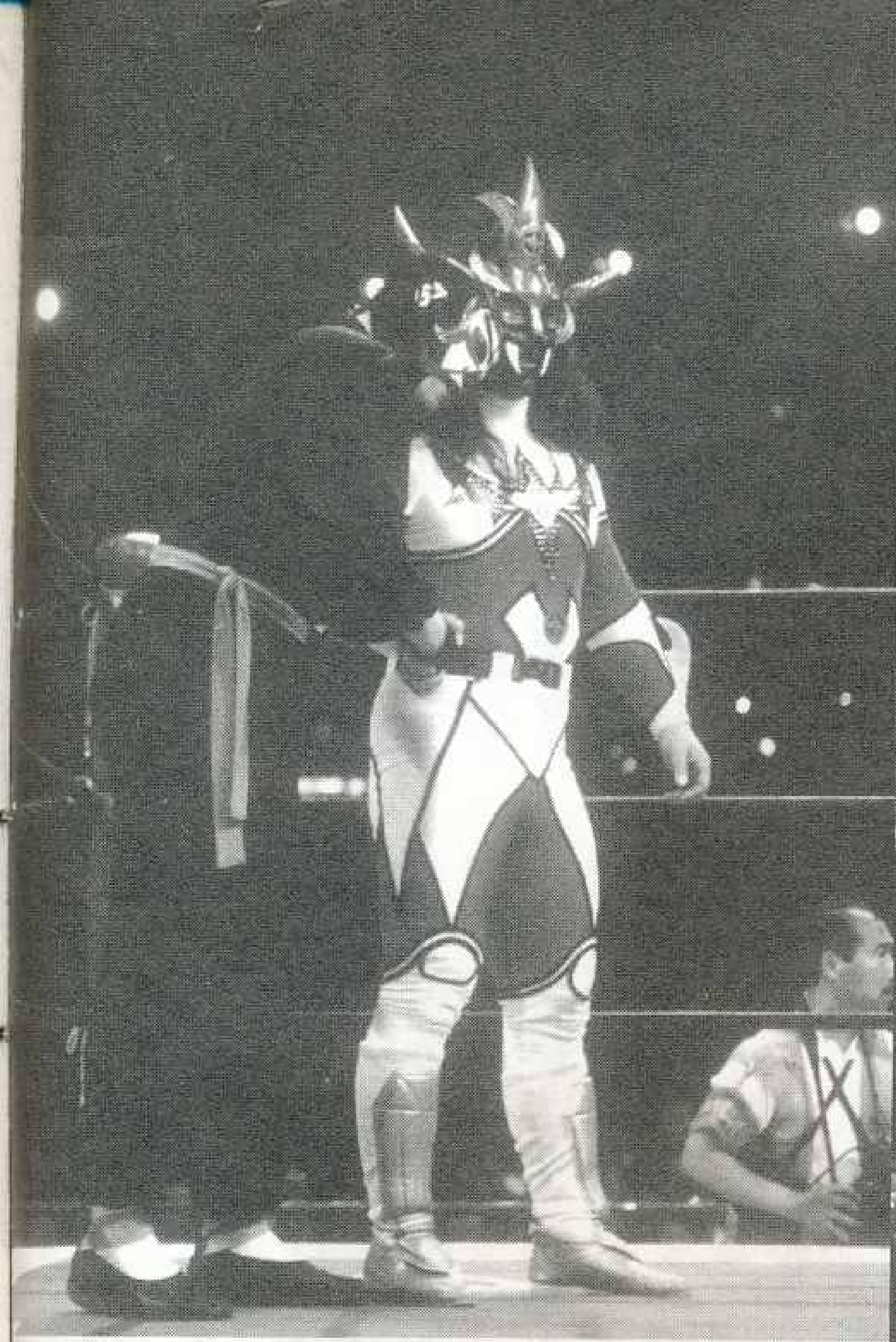


新日本後楽園大会の試合前。永島新日本プロレスリング取締役（＝永島のナマハゲby大仁田）「ウチはそういうの（電流爆破）をやらないのがステータスだと思うので、今回が特例だと思います」と発表。開催地（有明？）、レフェリー（テッド・タナベ？）などなど、問題は山積していた。しかし、当日永島取締役が灰皿を持っていなかったのはいただけなかった（？）

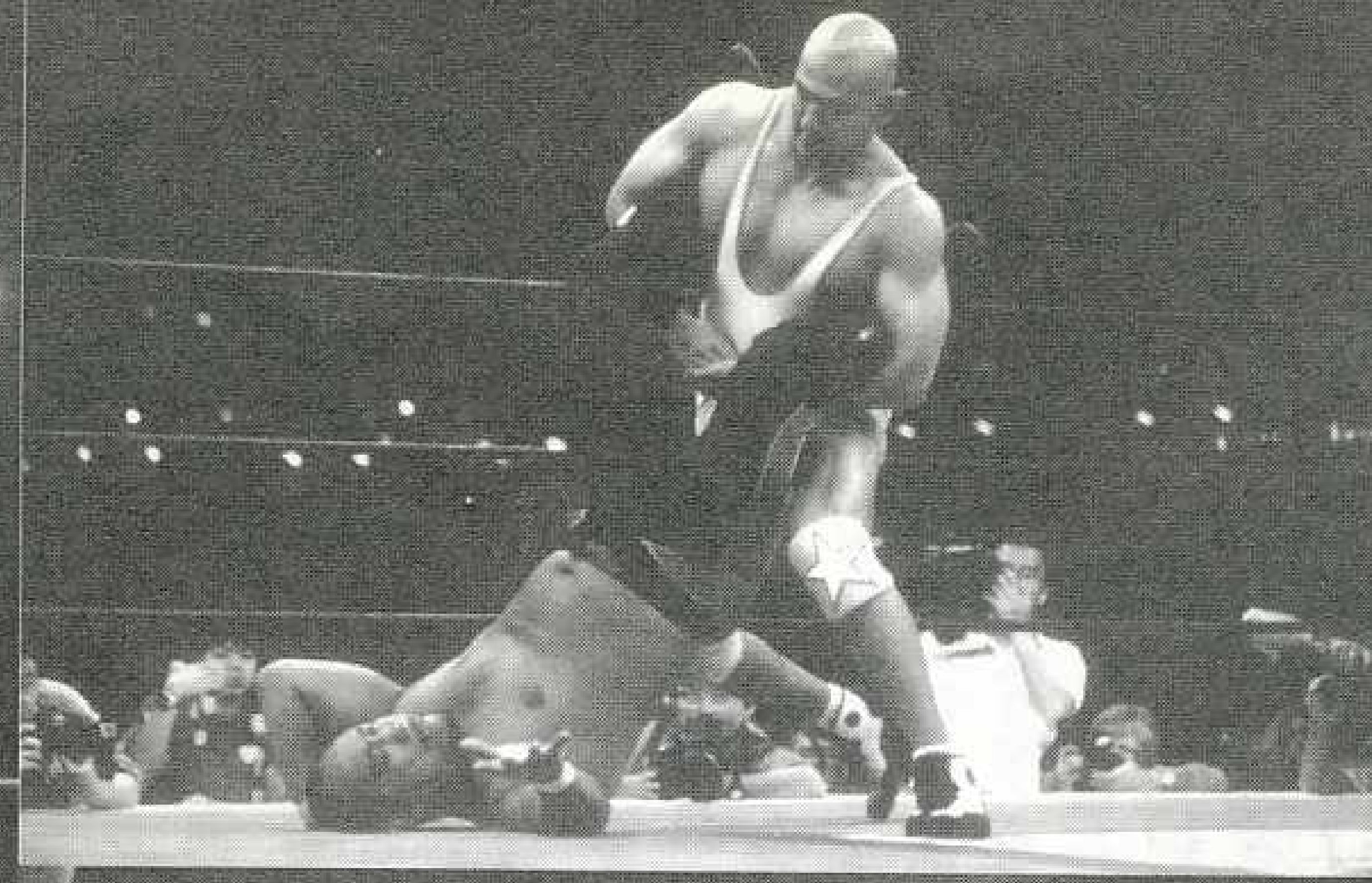
⑦ 99年03月26日

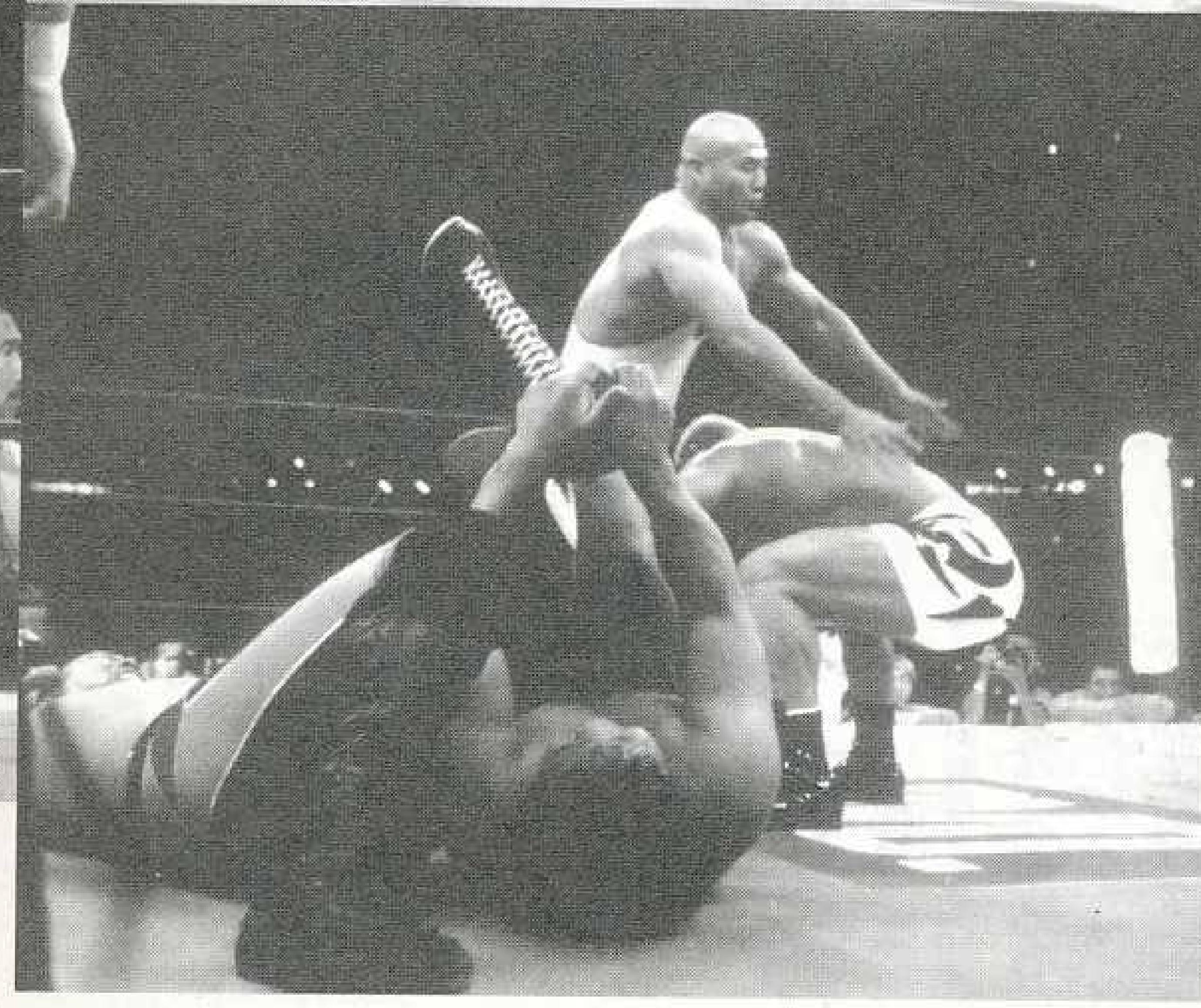


都内某所でスイカを実験台にして爆破のテストが行われた。単純だが、興味を引かずにおかない下世話さで、視聴率を１％をひきあげたという。

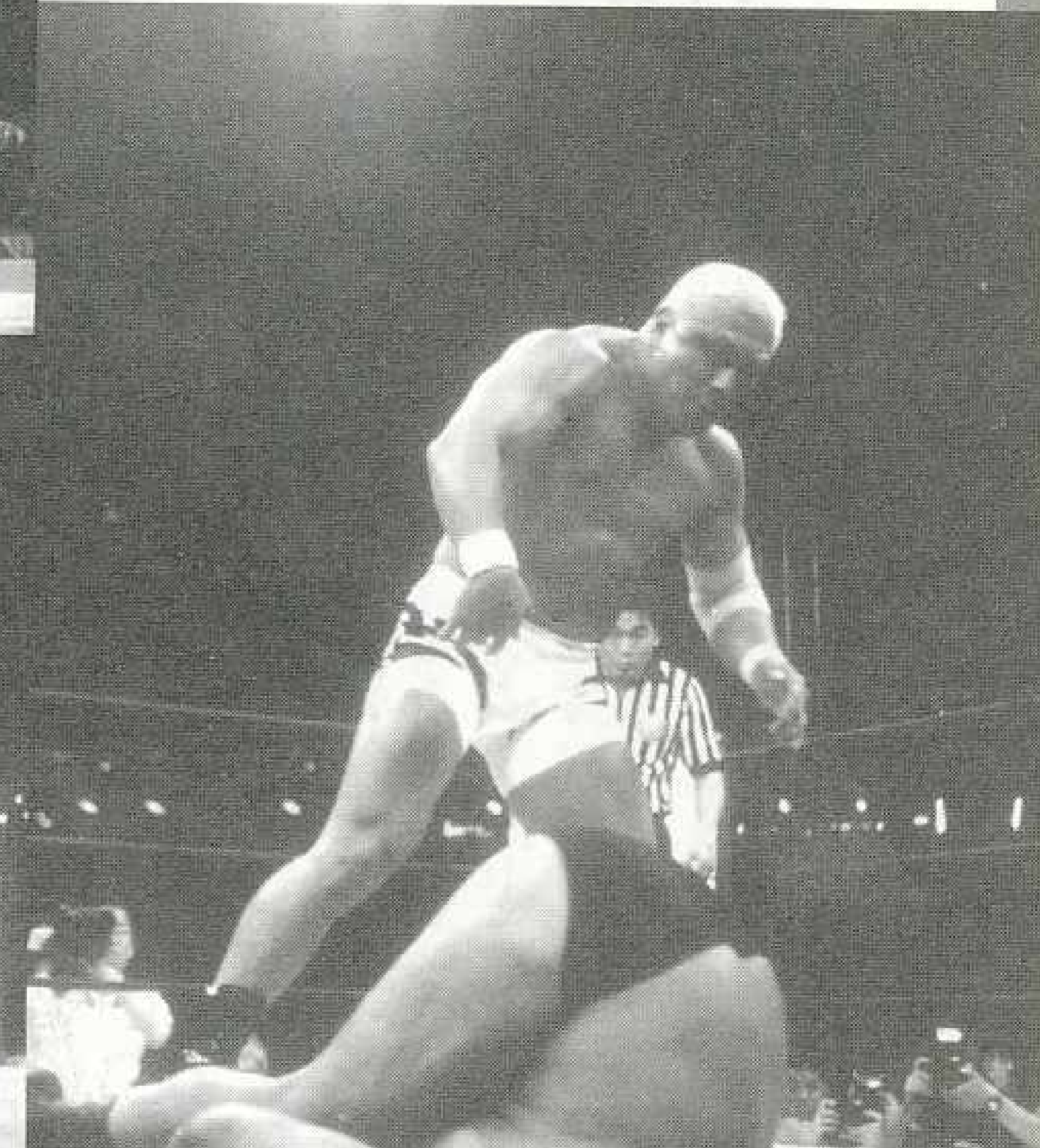


ジュニアのプロデューサー獣神サンダーライガーのファインプレーで、IWGPタッグのタイトルを手に入れたサスケが全日本プロレスの東京ドーム大会に上がることとなった





バトラーツ勢は石川雄規を始めとして、「乗り気じゃない」と言い続けてきた。なぜなら、「いまの新日には、昭和の新日イズムがないから！」だという。ちなみに石川は山崎がエスケープしても関節技を離そうとせず、山崎はカチンときていたという



アマレス出身の藤田が、タックルに入って抱え上げた石川雄規をまっ逆さまに落とした！しかも、非常に危険な落とし方だ！　藤田というレスラーの恐ろしさを感じさせた瞬間だ

タコ　どこまでフミ・サイトーやねん（笑）。

山口　テイキング・バンプはあんまり必要なかったんだよ、あの試合に限っては（笑）。石川雄規は試合のあと報道陣の前で「いまの新日本には猪木イズムなんてない！　猪木イズムを感じたければバトラーツに来い！」って言ったらしんだよね。「そのあと長州さんに殴られるかと思った」って言ってたけど（笑）。

タコ　ちょっとビビりながら言ったんや（笑）。

山口　昨日は石川とアレクの入場シーンと試合にボクは「プロレスラー」を見たね（笑）。ああ、プロレスの会場にいるなって感じがした。

タコ　でも、だけど、会長が喜んでるような要素があるうちはダメやってことですね（笑）。

豪　そういうのは切っちゃったほうがいいよね（笑）。

山口　そう。もういらないんだよ。思いきり針を振ったほうが面白い。

タコ　（携帯がピーピー鳴る）もしも～し。あ！　のものもだぁ（アレクの妻であり、本誌の元編集者or破壊嬢）。

豪　参加してもらおう（笑）。

山口　本日は『紙プロ』オールスターキャストでお送りしてます（笑）。

タコ　のものも、昨日ドーム見た？　感想を聞きたいんですが。

豪　オフィシャルなね（笑）。

タコ　活字になるんで言葉を選んでください。……え？　ほとんど見てない？　ほえ～。

山口　ガハハハハ！　それがオフィシャルか！　ダンナの試合の感想は？

タコ　……あんましわかんないの？　蝶野vs大仁田戦はどうやった？　うん、うん。現場ではわからへんかったわけ？　え、イトって試合の意図じゃなくって、愛ちゃんのイト？　「イトがわかんなかった」って言うから、なにかと思ったら、子どもがギャーギャー言っててわかんなかったって（笑）。ほえ～。

山口　活字化不可能！（笑）。

タコ　じゃあ、愛ちゃん（アレク＆のものも夫妻の愛娘＝愛と書いて「いと」と読む）には届いたわけね。あ、すっげー喜んでたの？

豪　爆破されいだからね（笑）。

チョロ　底辺拡大になりますね。

山口　プロレスファンは子どもから育てていかないと（笑）。

タコ　ということは、いいアメプロやったっていうことでいいんですかね？　遠心力バリバリの世界やったっていう。こんなとこでのものもの感想はいいでしょうか？（電話に向かって）のものも、ありがとう。バイバ～イ（電話を切る）。という感想でした。

山口　的を突いてるね（笑）。

タコ　愛ちゃんが一番喜んでたっていうのが大きなポイントですね。

山口　0歳の子に届くんだからね。

タコ　第0試合だけに（笑）。

山口　石川＆アレクの試合でもう一つ言っとくとね、石川雄規が猪木コールが起こらないように、イノキじゃなくユーキになったわけじゃん。藤原イズム全開で。非常にわかりにくい試合したでしょ。バトラーツ初代営業の芳賀元太の言葉で「わざとらしいことがリアル」っていうのがあるけど、昨日の試合は「わかりにくいことがリアル」って感じがしたね。いまのファンに届いたかどうかはわかんないけど。届かなくてもどうってことねぇんだけどね。

タコ　いまの新日本やったら届かなくていいわけですよね。

山口　アレクはアレクで石川雄規と同じようなネチっこいムーブをするのかなと思ったら、見事なくらいにプロレス的な技を繰り出すわけだよ。飛んだり。自然と陰影がついてるっていうかさ、見事なコンビだね、あれ。昔の新日本だったら凄く生きたと思うよね。それはなぜかと言えば、石川＆アレクのプロレスの中にせめぎ合いがあるからですよ。

タコ　せめぎ合いやで、ノブ。お前まぶた半分閉じてるんちゃうか？

ノブ　ん～……。

豪　無言で頷くなよ、声出せよ！　まったく、座談会で。

ノブ　ん～、あ～、せめぎ合いって言われてもねぇ。まあ、試合の中でってことですよね。

豪　ほかにどこでせめぎ合うんだよ！

山口　ガハハハ。でも、ある意味では、ノブが言うようにリング内でのせめぎ合い、リング外でのせめぎ合い、全ての面でせめぎ合いとかツバ競り合いがあるから、「格闘」を見てるんだよね。他の試合は「プロレスはプロレス」っていう試合でしょ。完成されてるからあんまりツバ競り合いとかは感じないよね。石川雄規の情念が見事に光ったな、オレの眼の中には。だって卍固めに見せかけて逆十字行ったり、コブラに見せかけて膝十字行ったりとかさ、見事にスカしてたもんね。

タコ　やっぱり、スカしたりとか、謎を投げかけるっていうのは昭和新日本ですよね。

チョロ　あ、ちっと、ボクも、海野レフェリーもいつゴーグル掛けるのかなって思いました。

山口　なんでいきなり蝶野vs大仁田の話になるんだよ！

豪　それが謎かけなんだ（笑）。

石川&アレクの「わかりにくい」試合は、バツグンに面白かった いまのファンには届かないけど(山口)

タコ　大っきい謎やなぁ、チョロ！

チョロ　大仁田選手と海野レフェリーのね、ツバ競り合いというか（笑）。

山口　新日のドーム大会に来た最高の冷やかしの客って感じだったね、石川&アレクは。

タコ　ああ、「冷やかし」ってわかりやすいかもしれないですね。

山口　悪い意味じゃなくってね。そのへんを読者には汲んで頂きたいね。それぐらい汲めよ、バカ読者！

一同　ガハハハ！

山口　あともう一つ昨日光ったのは、ライガーのプロデュース能力ね。IWGP（ジュニアタッグ）のタイトルを奪ったグレート（・サスケ）が全日本の（5・2の）ドームに上がるわけだから。これはプロレス界の文脈の中では凄い事件じゃん。グレートは「図らずもタイトル奪ったしまいました」って試合後に言ってたらしいけどね（笑）。

一同　ガハハハ！　図らずも。（同等に）

山口　だから、それはライガー選手がいまの新日本の進む方向とは別枠で、ライガーなりのプロデュース能力を発揮して、プロレス界の見えない壁を内部から壊していこうっていう流れだよね。ライガーは凄いですよ。プロレスラーってプロデュース面と格闘面、両方の性を背負いこんでこそ一流でしょ。そういう意味ではライガーはやっぱり一流だよね。

タコ　なるほど。そろそろ蝶野vs大仁田戦について語りましょう。アメプロっていうたら完成されたものとか、予定調和って捉えがちですけど、そんなことないわけですよね。

山口　その予定調和を崩す作業も必要だろうしね。エンターテイメントとしても頭脳の使いかた？　蝶野はそこらへんを指して「新日本のフロントは腐ってる」って言ったわけでしょ。

タコ　自分が動いてちょっとでもハプニングに見えるような、そういう流れを自分で作ってるわけですからね。

山口　いまWCWよりWWFのほうが全然上だと思うんだよ。

豪　猪木さんも前田日明も言ってましたよね。

タコ　日明兄さんもっていうのはどっからなん？

ノブ　アメリカにトレーニングに行ったとき、ホテルのテレビでたまたま見て、「メチャメチャおもろいな」って思ったらしいです。あそこまでやれば文句言えないっていうか。

豪　「復帰するんだったらここで」って言ってたんでしょ？（笑）。

山口　トンチが効いてるね（笑）。日明兄さんの心を動かしてしまうぐらいのパワーがエンターテイメントとしてあるってことだよね。WCWはどっちかっていうと日本スタイルを取り入れながらやってるじゃない。派閥抗争とかさ。WWFは突き抜けてるからね。だから新日も突き抜ければいいんだよ。蝶野たちが実際問題ストロングスタイルができる、できないっていう次元の話じゃなくって、「ストロングスタイル」っていうものを捨てちゃって、針を振り切っちゃう。でも、昨日の大会名は「ストロングスタイル・シンフォニー」だからね。ストロングスタイルを奏でてどうすんだって思わず突っ込んだよ（笑）。だから、新日本はいま凄い振り幅が狭いとこにいると思うよね。真ん中でブランブランしてる振り子状態。その点、全日本はある部分突き抜けてるよね。

ノブ　あの試合スタイルはどこもマネできないです……。

山口　全日本についてはタコはどう思ってんの？

タコ　全日本については、ここ2年ぐらいテレビも見たことないんですよ。

山口　キミは語る資格すらないね（笑）。

タコ　なんでしょうね、見ないっちゅうのはね。見てたのって天龍選手のときだけですね。「あれは闘いじゃない」っていうボクの親友の柳沢君が言った言葉にハメられてるんですかねぇ（笑）。

豪　ボクの友人の山口君もよくそういうこと言ってるけど。

タコ　あ、あなたの友人の山口君も！　そら奇遇やわぁ。

豪　「格闘芸術とスポーツ芸術の違いがあって」とかね。それがまた長いんだよ（笑）。

山口　ガハハハ。ノブはもともと全日本ファンなんでしょ？

豪　でも、なにが好きかといわれるとなかなか言えないんだよ。

ノブ　やっぱね、オレ、試合込みで考えちゃうんですよ！

豪　みんな試合込みで考えてるよ、バカ！（笑）。

山口　オレたちが試合のこと考えてないみたいじゃねえかよ！

タコ　むしろ新日本のファンなんかかなり比重大きいで。

ノブ　いや、もう凄ェ試合じゃないですか、全日本って。

山口　「凄ェ試合じゃないですか」って、ド素人以下だな、お前（笑）。

ノブ　だ、だって頭から落としたり……。

豪　頭から落とすの好きなんだ。だから女子プロも好きなんだ。

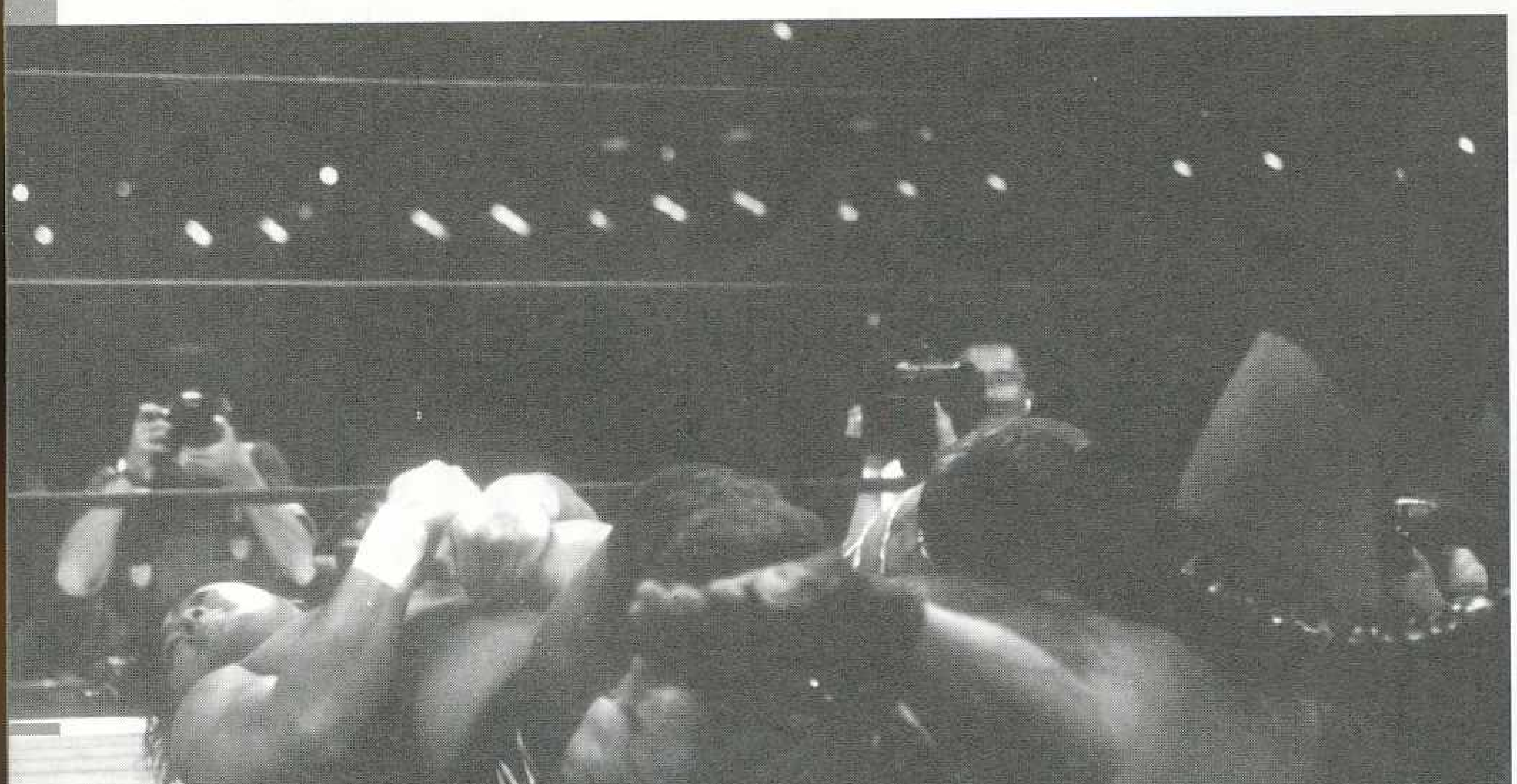
山口　始まった！　ノブ潰し（笑）。

豪　デスバレーボムとか大好きなんだ。

一同　ガハハハ！

タコ　これかぁ。いつも『紙のプロレスRADICAL』で読んでるのは（笑）。

山口　いま、三沢vs小橋とか、三沢vs川田とか、凄く成熟したというか、完



武藤はメインイベントでアルティメット王ドン・フライから腕ひしぎでギブアップを奪った。初めて「ドン・フライに本格的なプロレス」をさせた点が凄い

スポーツ芸術と格闘芸術の違いっていうのは凄くデカイと思うね(山口)

成された全日本スタイルってあるじゃない。あれと今年の全日本っていうのは違ってるの?

豪 やっぱり小川(良成)の存在でしょ。ぶつけ合ってのプロレスとは違うわけでしょ。小川はかわしてチョコンチョコンやるようなね。それまでは天龍イズムっていうか、天龍が革命した以降のプロレスでしょ?

タコ うん、あれの拡大解釈やね。

豪 ガンガン受けて。それの限界をある程度悟ったんだとは思うんだよね。

山口 いまの三沢vs川田とか、三沢vs小橋の三冠戦スタイルは、エゲツない部分をたっぷり含んだツバ競り合いとか、潰し合いとか、そういうものはないじゃない。極力排除した上で凄く洗練されたスタイルとして、完成させていってるよね。

豪 思想じゃないですよね。

山口 スポーツだよね。スポーツ芸術。

タコ オッ、ここで出ましたねぇ(笑)。これ、聞かんほうがエエの? 長い?

豪 いやいや(笑)。

タコ スポーツ芸術って?

山口 それ、今月になって何回も喋ってるから、もう喋りたくねえんだよなぁ(笑)。

タコ いやいや、初めて聞きましたよ、会長! なんッスか、そのスポーツ芸術って?

山口 いい聞きかたするねぇ、キミ! そう聞いてくれるとノリノリになってくるよ! ノブの司会と大違い。オイ……オイ! 横向くなよ!

豪 あ、ボク?(笑)。

一同 ガハハハ!

山口 こないだ世界タッグ選手権ってやってたの。3月6日の武道館で。小橋、秋山組vs三沢、小川組だったんだけど、リック・フレアー的な闘いをするわけだよ、小川良成が。かわしては攻め、かわしては攻めってていうね。テンポのいい。で、三沢と二人でタッチワークを駆使しながら空中技をやってったり、見事にね、強者たちが繰り広げる体操を見ているような感じなの。

豪 悪口?(笑)。

山口 悪い意味じゃないよ、これは。〝洗練された強者たちが繰り広げる体操〟って、これ悪口じゃないよ(笑)。

豪 そういうこと言ってると取材拒否されますよ!(笑)

山口 もうされてるよ(笑)。いや、「スポーツ芸術」という完成されたものを必要とするスタイルはジャンボ鶴田が産み落としたとボクは仮説を立ててるわけですよ。実は馬場さんが全日本スタイルを作ったんじゃなくて、馬場さんは方針として「清く、正しく、美しく」だっけ?

ノブ 「明るく、楽しく、激しい」(笑)。

タコ 全然違うやん!

豪 もともと「明るく、楽しく」だけだったのが、のちに「激しく」が加わったんだよね。

山口 そうだよね。で、もう一つが「清く、正しいプロレス」。それが馬場さんの方針だったわけじゃん。それを試合スタイルとして具現化したのがジャンボ鶴田だったとボクは思ってるわけよ。なぜかというと、その世界タッグを見てると、その解説をしていたジャンボ鶴田が「秋山も小橋も小川も、みんなボクの弟子だ」って言ったんだよね。普通だったら「馬場さんの弟子」って言いかたをするじゃん。

タコ 全日的にはそうでんなぁ。

山口 だけど、「ジャンピングニーパットもボクが伝授しました」って鶴田は言ってるわけよ。要は、「スポーツ」っていうのは、潰し合いとか、エゲツないせめぎ合いとかツバ競り合いとかはないじゃん。前田日明が長州力の顔面を蹴撃したりとか、相手の目ン玉をくり抜く世界なんてないでしょ。それを極力排除して洗練させて、運動能力のある人たちが成熟させてやっていくものが「スポーツ芸術」。で、昔の新日本とかいまのUFOとか、『PRIDE』とかは、やっぱ「格闘」なんだよ。

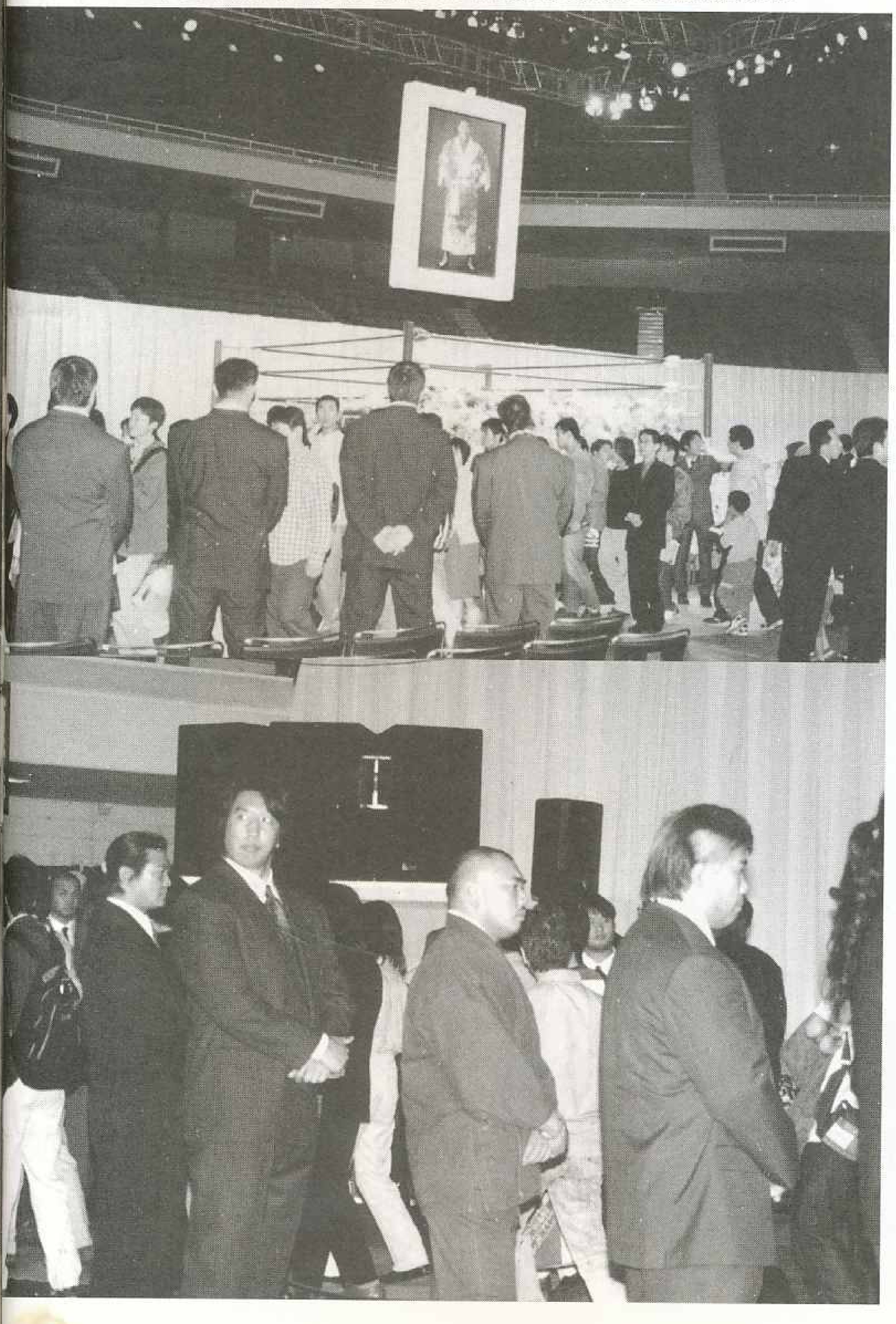
豪 鶴田さんはもともと「明るく楽しいだけ」だった人だと思うんですよ。天龍選手が「激しい」を植えつけたわけですよね。

山口 そうそう。天龍選手は「格闘」の種を落としたよね。だから、そういうグチャグチャッとした潰し合いとか、せめぎ合いとか、リング外の政治的な駆け引きとか、そういったことを一切排除して、清く正しいプロレスをやっていこうというね、これが「スポーツ



サスケ、石川ら小さな団体が懸け橋となり大きな団体の橋渡し役となっていく。この2人はこれからもマット界を席巻していくことだろう。

4月17日に行われた馬場さん追悼セレモニー「ありがとう」。ここに新日本プロレスからは坂口社長が出席。坂口社長は全日本プロレス中継にまで登場して哀悼の意を表した



芸術」だよね。

豪　ヘーシンクが全日入ったときに「プロレスとはスポーツ芸術である」と定義してるんだよね。

山口「スポーツ芸術」と「格闘芸術」の違いっていうのは凄いデカいと思うね。

チョロ　鶴田が「オレの弟子」とか言うのはね、谷津から言わせれば「みんなオレの後輩だから」（笑）。

一同　ガハハハ！

タコ　そうなるんや（笑）。

山口　ジャンボの概念の中には「格闘」ってないじゃない。そういうものを排除しつつ、清く正しく激しいものをやりましょうと。これは予定調和というよりもひと言で言うと「スポーツ芸術」だよね。スポーツマンなの。ジャンボも三沢光晴も馳浩も。猪木さんや前田日明は「格闘者（かくとうもの）」なんだよ。ボクはやっぱり格闘のほうが好きだから。

豪　いや、スポーツでもいいんですよ。それは会長の好みなだけで。スポーツを極めるのもいいことなんだから。

山口　そう、その部分でレベルが高いのが全日本スタイル。昨日の新日本に行っても俺は格闘方面が好きだから、バトラーツの試合が面白いと思ったんだけど、他の試合は「格闘芸術」でも「スポーツ芸術」でもない。だから、ストロングスタイルの幻想で勝負するのか、アメプロ方面か、どっちを取るんだっていう選択を迫られた大会が4・10だったとボクは思うわけですよ。

豪　UFOとのあれ（″1・4事変″）で、まず選択迫られたわけでしょ。「中途半端なとこにいるとまたUFO来ちゃうよ」って（笑）。

タコ　全日本っていうのは第一試合から最後まで一貫したものがあって、「スポーツ芸術」として成立してるわけ？

山口　ほかにもいろんなスタイルはあるんだけど、昔ながらの全日本の初期のスタイル、いわゆる肉体カーニバル路線というかさ、怪物路線というかさ、そういうのも残しつつ、明るく楽しく激しく清く正しいプロレスをメインに持ってきてる。メインでは三冠スタイルが「スポーツ芸術」として昇華してるんだよね。

チョロ　だから、昔ながらの全日ファン、オレなんかは昔の全日が好きですから、物足りなくはありますよね。全日は外人天国、最強タッグ、チャンピオンカーニバルのリーグ戦に組まれなかったヤツの特別試合なんかワクワクしましたよね。子どもながらっていうのもあるんだけど、夢のカードもいっぱいあったし。

豪　コイツ、絵馬に夢のカード書いてたんだよ。奉納してたんだよ（笑）。

チョロ　いまの全日は「スポーツ芸術」って言葉が当てはまると思うけど、「スポーツ芸術」にオレは魅力は感じない。

タコ　オレらみたいな新日本ファンでもさ、昔の全日のほうがよかったよ。

豪　オレも昔の全日派だからね。

山口　馬場さんも肉体カーニバル路線を行ってるころは、流血したり、なんとかデスマッチとかやってたわけだよね。それが、いつのまにかジョー樋口の失神がなくなり、両者リングアウトがなくなり。

豪　もともと、一番胡散臭いプロレスやってたのが「清く、正しい」になっちゃったんですよね。

タコ　あれはあとで完全にシフトされたことなんやな（笑）。

豪　そう、おかしいんだよ。

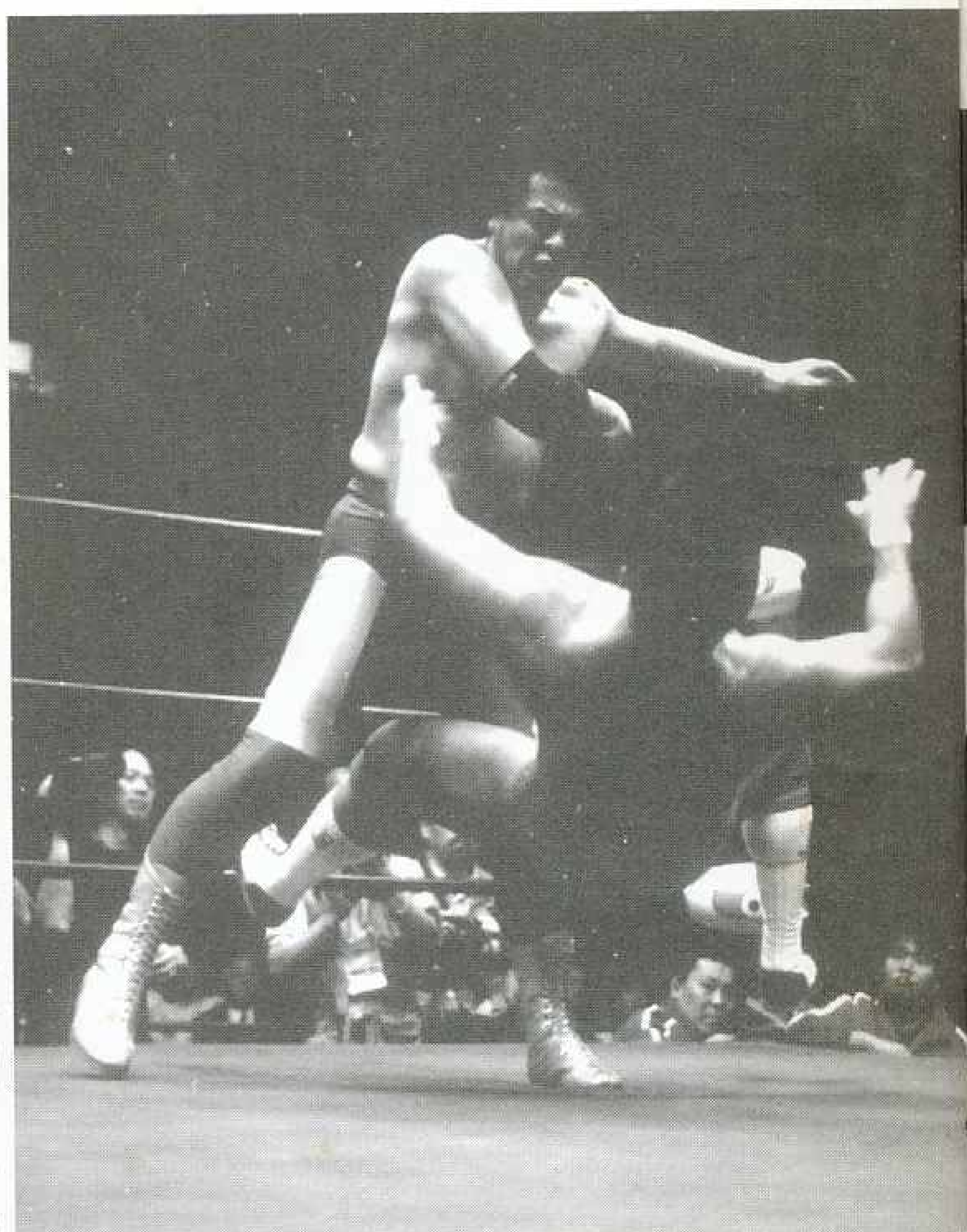
山口　ジャンボが全盛期のころにリング上はシフトしてるよね。馬場さんの思想とも「スポーツ芸術」というのはハマってるし。馬場さんは「スポーツマン」で猪木さんは「格闘者」（笑）。

豪　でも、特に天龍選手がいなくなってから歴史が完全に変わりましたよね。

山口　そうだね。完全に全日本として固まっていったよね。今年の三沢体制になってからは、昔の肉体カーニバル路線を少々取り入れつつあるんじゃないの？

豪　原点回帰したいのはあるんだよ、絶対。

タコ　三沢の志向は原点回帰なの？



三沢が社長となって本格的に会社を動かしていくのは、5・2のドーム大会以降だと言われている。『週刊プレイボーイ』4月20日号では「プロレスを辞めようか」と思ったという三沢が衝撃的に告白している

豪　原点回帰プラス進化でしょ？

タコ　三沢がいま全日本の中でなんかしようとしてるのは、モノ凄くわかりますよね。

豪　現状がダメだっていうことはわかってるわけでしょ？

タコ　新日本の中では蝶野が非常によく考えてて、蝶野が流れを作ってるのと同じように三沢もやってるってことですよね。

山口　いま全日本も昔の路線を復活させつつあるから、新日本も全日本も差別化できないんだよね、実際のところ。三冠スタイルが最高にトップレベルにあったときは、新日本とも多少差別化できてたけど、徐々に時間が経つにつれて差別化できなくなってきてるでしょ。

豪　でも全日は車で入場しないですよ（笑）。

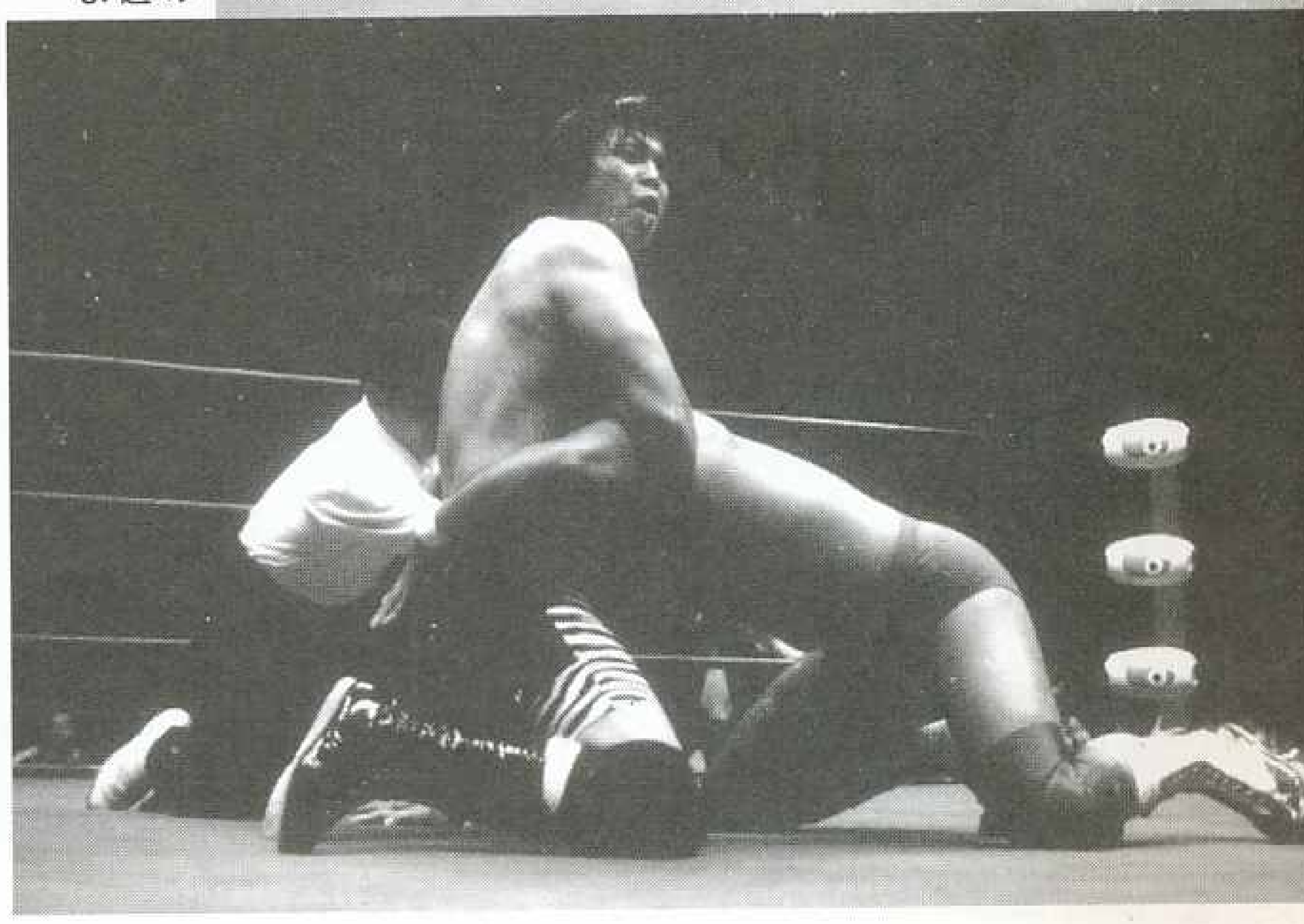
山口　あ、そうか（笑）。

チョロ　昔ながらの新日、全日好きだったヤツっていうのはちょっと離れて、いまだったらUFCとか『PRIDE』とかに未知の強豪が来て、それプラス、会長が言う「格闘」が合わさった形でやってるから、そっちのほうが見てて面白いと思いますよ。

タコ『PRIDE』には昔の新日本と昔の全日本のええとこがあると。

山口　それはあると思うな。

豪『PRIDE』がなぜ面白いのかっていうのは、興行に流れがあるんだよね。



山口　全日本の場合、二年ぐらい前に「スポーツ芸術」としてはピーク迎えてるわけじゃん。こんど三沢たちに変わる世代がそれを継承していくのかな。

豪　ピークは鶴田時代ですよ。

山口　そうかな、「スポーツ芸術」として？　オレは三沢vs川田、三沢vs小橋がピークだと思う。

タコ　確実にそうでしょ。

豪　試合としては完成してても、やっぱりなにかが抜けてるんだよね。

タコ　なにかが抜けてるから「スポー

だから、時代はいま「リック・フレアー」なんですよ、結局（笑）（豪）

ツ芸術」なわけでしょ。

山口　そう、なにかが抜けてないとスポーツ芸術になり得ないから。その〝なにか〟が「格闘」の根っこなんだよね。天龍選手とか輪島は余計な種を落としちゃったからね。

タコ　モノ凄い余計ですもんね。

山口　だからオレらも見れたわけだよ。

ノブは全日本になにを望んでるの？　例えば方向的に原点回帰やったらもっとムダなものを入れてくとか。

ノブ　どんどん来てほしいですよねぇ、ムダなものに。怪しい外人とか。

山口　お前が一番ムダなんだよ！（笑）。

タコ　怪しい外人を呼ぶね。鶴田vs天龍戦以前に戻るのがエエの、ノブ？

ノブ　そうですね、もちろんいまの「スポーツ芸術」の部分を残して。

タコ　チョロはどうなの？

チョロ　やっぱり外人ですよね。

山口　「やっぱり外人」って、サスケか、お前は（笑）。

一同　ガハハハ！

山口　4・10では、サスケの動きもいちいちよかったね。バトラーツとサスケだけ新日本じゃなかったね、試合が。あの場所では新鮮だった。

チョロ　いまね、ベイダー呼んだり、ベイダーみたいのが10人ぐらい来たらいいですけど。

山口　ベイダー10人いたら凄いけど、いいのか悪いのかわかんないなぁ（笑）。

チョロ　「スポーツ芸術」にベイダーがまぎれこんでも、ピンとこない。どうせだったら世界のプロレスみたく、あのぐらいいっちゃったら。だからホントに世界のプロレスは興味ありますよ。

豪　厳選した選手しか呼ばないようになったのはおかしいと思うんだよ。もともと全日は片っぱしから呼んで、よかったヤツをまた呼ぶってやってたんだから。

山口　ダメ外人もいっぱい来てたもんね。

豪　半分ぐらいダメ外人だった。そのパワーがないよね。

山口　マイナス方向にみんな顔向けなすぎるんだよね。

豪　日本人選手が増えすぎたっていうのはあるんだろうけど。

タコ　チョロとかノブが言ってる「昔に戻そう」っていうのは、ファンのニーズもそうなわけ？

豪　マニアのニーズだよね。

山口　「スポーツ」と「格闘」の違いをいま一度考える時期にきてるんじゃないかと、私はそう思うわけであります！（笑）。格闘技って、殺し合いから発展してるものだからね。軟弱なスポーツなんていう概念は超えててほしいんだよね。希望として。

豪　でも、そんなもん、プロスポーツでやられたら困るんですけど。

山口　だから、格闘技を興行として成り立たせるためにはスポーツ化していかなきゃいけない。そういった葛藤が前田日明を試合で暴発させてったわけでしょ。鶴田は暴発しないじゃない。そこがまた面白いんだけど（笑）。でもね、昨日のドーム大会見てて、ホント早く『PRIDE』見たいと思ったよ（笑）。

タコ　でも、いま『PRIDE』が一番面白いッスよね。

山口　昔の新日みたいに〝場〟として機能してるよね。いろんなイデオロギー持ったヤツがグッチャグチャに集まるとこじゃん。そん中で誰が一番強いのかとか、面白いのかとか、決めていく場だからさ。

豪　テーマはハッキリしてるんだよね。プロレスvs格闘技でも、格闘技同士でもテーマはあるわけじゃん。

タコ　でもあれ、プロレス畑の人がやってへんでしょ。もう全然プロレスのことなんてわかってないですよ。そういう人らが集まってマッチメイクするもんが、ボクらプロレスファンにビンビンくるっていうのが。

山口　むしろ、それが要因なんじゃないの？

タコ　っていう気がするんですよ。

山口　なんの先入観もなくやってるから。昔の新日本が面白かったころもそうだったと思うしね。猪木さんが新間寿からプランを聞けば「それ面白えじゃねえか、入れとけよ」って（笑）。誰かが「今度これやろう」ってなったら入っちゃうわけだし（笑）。

タコ　市役所固めもありましたね（笑）。

山口　そうそう。ドン荒川はいるわけだしさ（笑）。だから、極論だけど興行にはプロデューサーって必要ないと思うんだよね。出たとこ勝負でいい。

タコ　でも、いまの流れは全部プロデューサーですよ。

山口　だから、三沢、蝶野がプロデュースしていけば、あるところまではいくけど、ホントにオレらが楽しめる場っていうのはプロデューサーもなにもなくて、いろんなものをグチャグチャにして、かきまわしてポンと出てきたものを楽しむっていうかさ。

タコ　それがホントに、いまボクらが一番楽しめるもんになってるっていうのは面白いですよね。

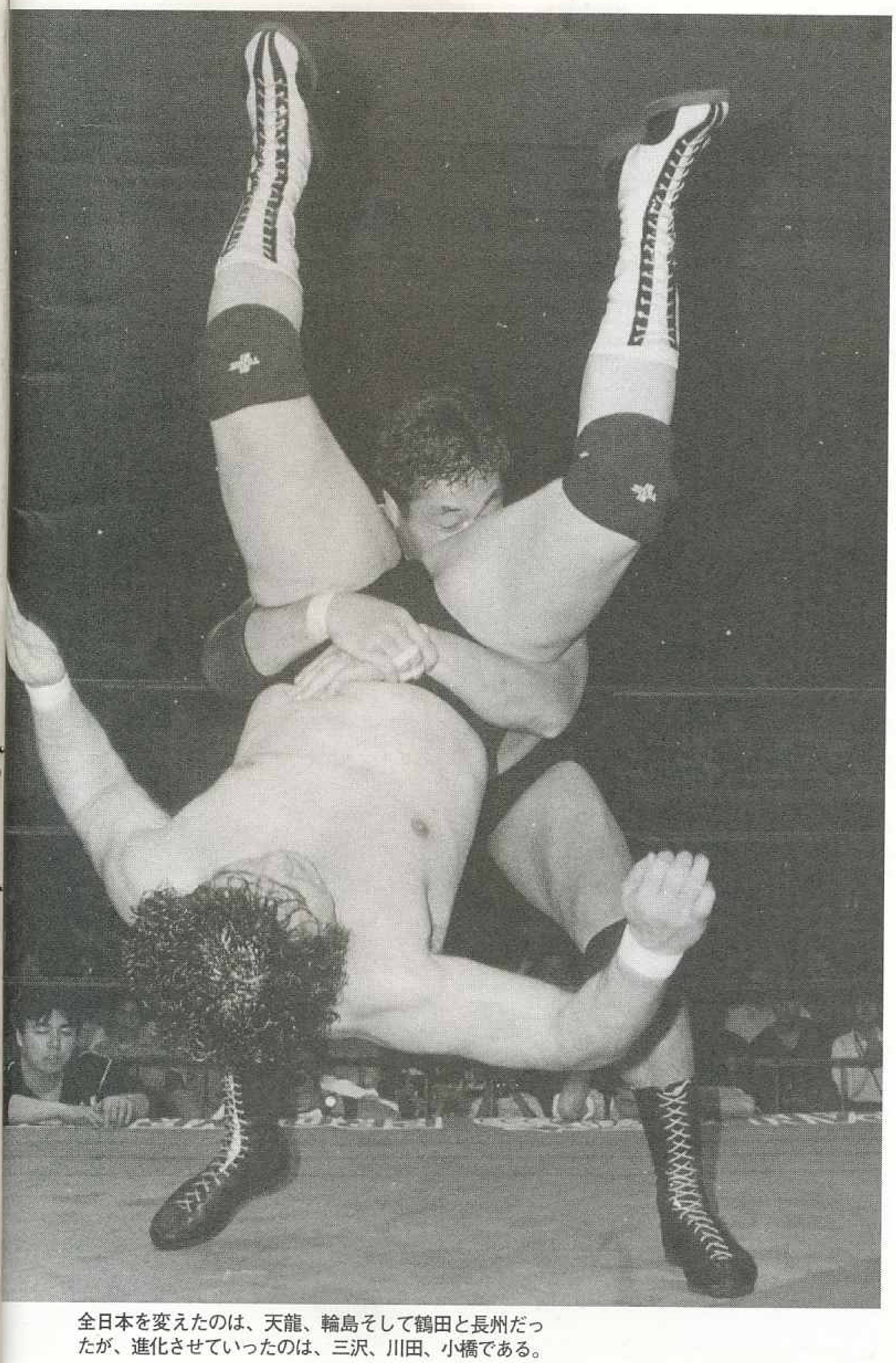
山口　全日本もある意味、馬場さんのご逝去によってゼロからスタートっていう部分では面白くなる可能性あるし、新日本も猪木さんいなくなってね。UFOでは佐山聡もどっかに飛んでっちゃった（笑）。

豪　次々いなくなりますねぇ（笑）。

山口　そういう意味じゃ、また振り出しに戻るチャンスかもしれないしね。

タコ　猪木さんは、最後までずっと素人でしたよね。

豪　UFOもグチャグチャだもんね。



全日本を変えたのは、天龍、輪島そして鶴田と長州だったが、進化させていったのは、三沢、川田、小橋である。

タコ ド偉い素人ですよね。

山口 面白いんだけど、やっぱいまのファンは完成されたものを楽しむんだろうね。

豪 とにかく新日ドームは完成していたと。あ、結局批判だ（笑）。

一同 ガハハハ！

ノブ でもやっぱり、ある程度完成されてないと。単なるグチャグチャだったらつまんないじゃないですか。

タコ 『PRIDE』だって、いまこうやって絶賛してるけど、あれは当たり外れの大きさが凄いやん。やっぱ外れたときは辛いもんな。

山口 完成されちゃったら新日本も全日本も面白くないんだけども、いまのファンは続かないでしょ？　完成されたものをずっと提供されるわけだから。グチャグチャした空間の見方が養われてないんだよ。

豪 完成されたものから入ってきて、ほかのものに流れていくっていう形があればいいわけじゃないですか？　それはあるべきなんですよ。底辺拡大のために（笑）。

山口 でも壊したくなるよね、完成されたものを見ると（笑）。それはしょうがないよ、ボクの個人的な習性だから。

豪 オーちゃん（小川直也）が壊したときはみんな大喜びでしたよね。「壊したー」って。

タコ でも完成度が高いものがちゃんとあるほど壊しがいがあるわけですよね。その完成度が中途半端なもんやったらキバ剥くときでも、こっちも中途半端になるから。それはどんどん完成していいし、バトラーツが光ろうと思うんやったら。新日本なんかアメプロで完成すればするほどいいですよね。

山口 バトラーツなんか絶っ対、なにがなんでも完成しないように足引っ張る（笑）。

タコ アンタ、一体誰やねん！（笑）。

一同 ガハハハ！

山口 完成しそうになったら絶対足引っ張ってやろうと思って（笑）。両国で8888人集めて満足されてたら、たまったもんじゃないよね。それで満足してたら島田裕二をテムズ川に埋めてやる（笑）。でもさ、昔の新日本vs全日本の対立構造っていうのは、図らずも凄くうまくできてたよね。

タコ 激突！　馬場派・猪木派ですよ。

豪 フレアーが新日に行ったあたりでおかしくなった。

山口 そのリック・フレアーが好きな蝶野が新日に入ったころから流れが変わった（笑）。

豪 ケロちゃんまでもがフレアー絶賛してたころですね。だから、新日本の頂点がいま蝶野でしょ。全日は小川良成。ともにフレアーファンなんですよ。だから、時代はリック・フレアーなんですよ、結局（笑）。

山口 いや、全日の鍵が小川なら、新日を襲撃したのも小川ですよ。時代は「小川」なんですよ（笑）。もし、オレらがさっきから言ってるように、新日本がアメプロの方向にガァーッと進んだとして、全日本が全日本スタイルをいままでとは違う意味で極めるとしたら、同じ団体内では対立概念は起こりようがないでしょ。ホントは団体同士対立概念としてぶつかり合えるような流れがあれば一番面白いよね。

豪 それができつつあるわけですね。

山口 図らずもね。作った対立概念じゃなくって、もっと大きなスケールでぶつかり合える対立概念っていうのができれば面白いよね。ファンが語り合えるような。

豪 そして交流戦に結びつくと。田上vs安田とか見たいッスよね。

タコ それって……。その試合はどうなんやろう？

一同 ガハハハ！

山口 ところでノブ、タコの司会術は学んだの？

ノブ はい。これを次回以降の糧として。コツは……。

タコ あのね、考えて喋ったらダメ（笑）。

山口 いや、タコ、今日はいい座談会ができたよ。ひとつだけ言っとくよ。「ありがとよ！」（大仁田調）。

【4月11日／『ストロングスタイル・シンフォニー』の翌日、編集部にて収録】

S多重アリバイ休載のお知らせにかえて……

今回、毎度毎度の大好評だった『S多重アリバイ』ですが、坂井ノブが進行をミスりまくり、勝手に台割りからなくしてしまいました。というわけで、抗議、難癖、イチャモン、文句などは、全て坂井ノブまで！　「誠に申し訳ございません。次回はアッと驚くゲストで、ギャフンと言ってもらいますので待っててください」

（デブ）

月刊化に向けてリニューアル企画第1弾

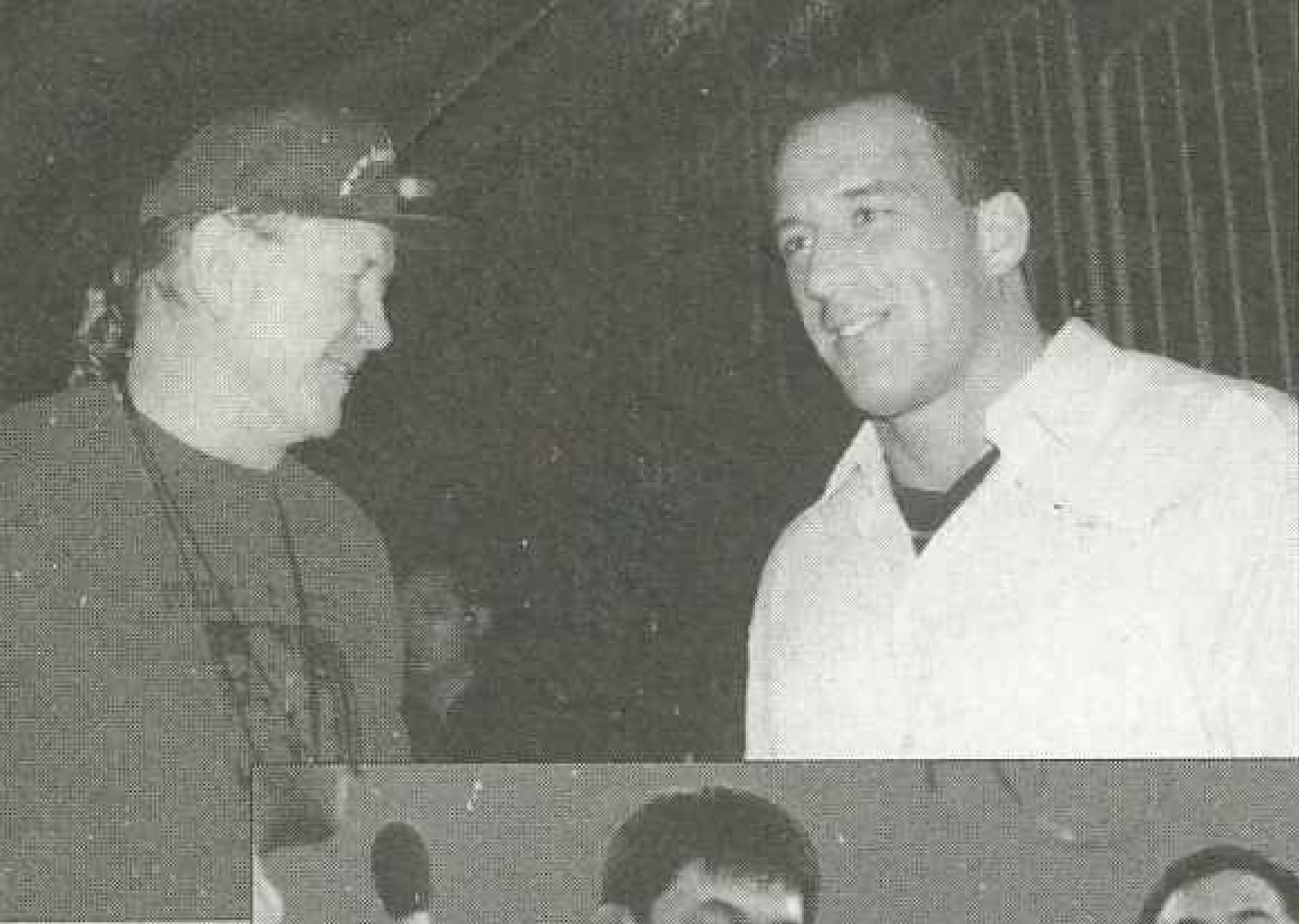
マット界の流れが丸わかり情報ページ

読めばわかるさ!!

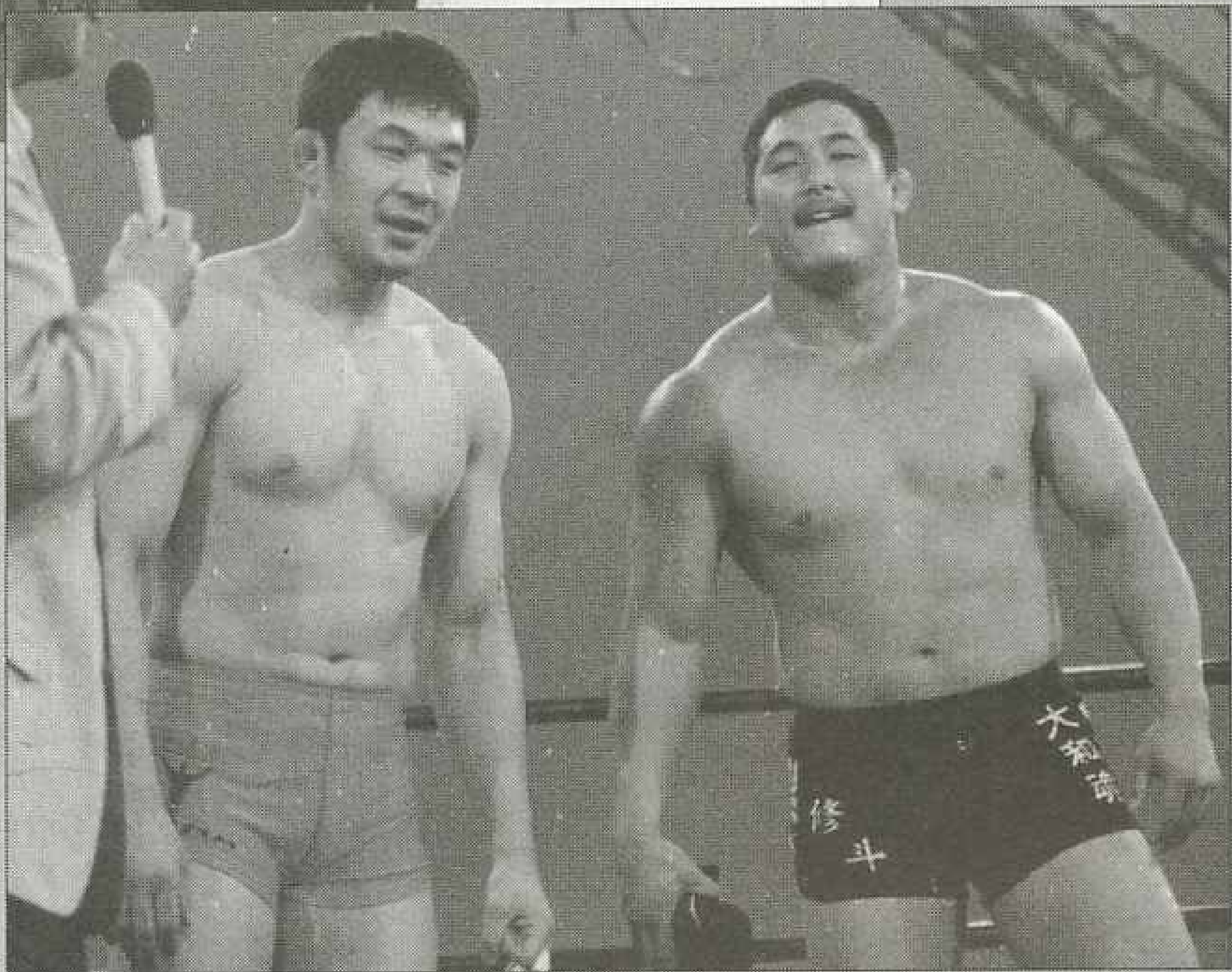
このページを読めば
どうなるものか
危ぶむなかれ
危ぶめば月刊化はなし
読みだせば
その1ページが道となる
迷わず読めよ
読めばわかるさ



ついに『紙のプロレスRADICAL』が読者待望の月刊化に向けて本格的に動き出した！　でも、言っておきますが、月刊化正式決定じゃありません！　いまは月刊ペースですが、逆戻りする可能性もなきにしもあらずっちゅうことですね。旧『紙プロ』時代も、月刊化と言っておきながらさんざん遅れてたという実績があるので気を抜いたら元に戻るでしょう。そんな感じで、これからは発売のサイクルも短くなっていくので情報面も充実、そしてプロ格闘技まで視野に入れつつ、柔術情報も入れたりなんかして柔術で充実！　なんつってね。このページを読むだけで、ここ1ヶ月主な出来事がすべてわかります！　簡単、お手軽、眺めてるだけでマット界オールジャンルの情報を得たい人は要チェック！



3・14UFO旗揚げ第3戦で目撃された衝撃の2ショット！　これは心躍る出会いではないか。ドリーさんとマーク・コールマン。テキサス・ブロンコと、アルティメット・ハンマーの邂逅だ



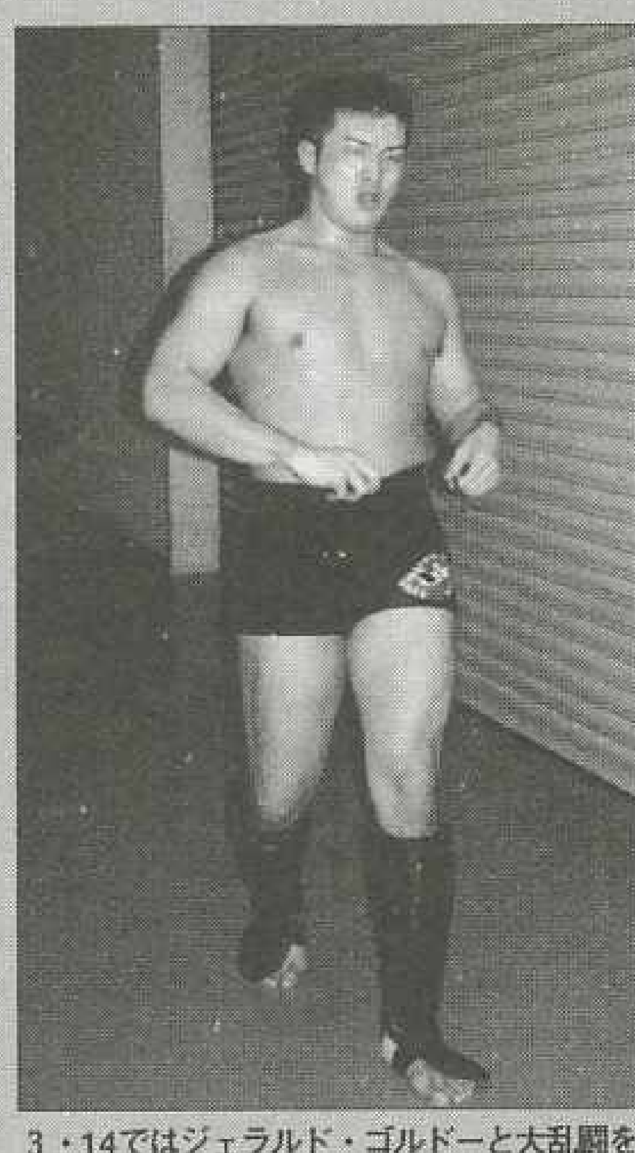
『SRS』藤原紀香FAINAL（3・12収録）さで行われたエンセンvs桜庭のドリーム・スパーリング。この日は紀香の『SRS』卒業を祝って名だたる格闘家たちが集結した。



『SRS』を卒業したなら、本誌編集部（見習い）の巨人・ジャイ子の代わりにゼヒ『紙プロ』で働いてほしい紀香。もう、このケツ……もとい、顔は『SRS』では見られない（オヤジボケ）



リングス3・22NK大会では、田村潔司とメインで相まみえた金原弘光。好勝負の末に惜しくも敗れたが、そのポテンシャルは上昇中。2月にVTで敗れた。柔術怪獣R・モラエスへのリベンジ戦は組まれるか？



3・14ではジェラルド・ゴルドーと大乱闘を繰り広げた村上一成（両者反則無効試合）。乱闘王の称号はもうすぐだろう。1ヶ月後の4・12には、UFOに正式入団。遠慮すっことねぇよ（猪木調）飛べ、村上！



4・16京王プラザホテルで電撃的に行われた「小川直也『PRIDE』参戦記者会見」。その不透明な発表ぶりに報道陣が『PRIDE』側に詰め寄る場面もあった（もちろん詰め寄ったのはデイリーの宮本さん。詰め寄せられあたのは島田氏）

RINGS.PANCRACE UFC.PRIDE.UFO

の流れが丸わかり

チョイスマン　N.Y

3月14日（日）UFO旗揚げ第3戦

「ハマのリングで勝負しろ！」横浜アリーナ

■小川直也がダン・スバーンを破りNWA世界ヘビー級王座を奪取し、ドリー（・ファンク・jr）さんが、その試合のレフェリングで笛を吹きまくったことはご存じだろうが、小幡太郎（JJA）が、ジェイソン・ブレスを破り、プロデビューを飾ったのはあまり知られていない。この日の試合では異質だった小幡の試合は実に素晴らしかった。3大会連続でUFOオープニングバウトを飾ったタイガーマスク（みちプロ）もジャン・ピエール・デビットを破り快気炎！　今年は何かしでかしそうだ……っていうか、しでかさないとダメです。

3月22日（月）RINGS

「RISE 1st.」NKホール

■山本宜久がヴァレンタイン・オーフレイムを破った後に、生涯シバキ合い宣言。「格闘技の原点を追求していく」とマイクで咆吼。イリューヒン・ミーシャはrAwチームの強豪ランディ・クートゥアーにVTで勝利も判定に疑惑。メインのランキング戦は2位の田村潔司が7位の金原弘光にゴツゴツとした実験的好勝負の末に勝利。日明兄さん、試合後、ゴキゲン。

4月12日（月）　UFO

村上一成入団発表記者会見～UFO事務所

■新日本道場から猪木パネルを盗んできたりと、新宿スポーツセンターにおける格闘家相手の練習で怪物的強さを発揮したり、といろんな意味で襲撃三昧を繰り返す小川直也の弟分、村上一成がUFO入団発表。「なんでいまさら」という感もあるが、めでたく「正式」にUFOに乗り込んだ。この日、オーちゃんは、アレクサンダー大塚、村上を引き連れ「他団体無差別襲撃」（By東スポ）を宣言。

4月16日（金）『PRIDE.』

小川直也『PRIDE.』参戦記者会見

■いよいよUFOが格闘技畑を襲撃！　50分近く遅刻し、「困惑している」と言い放った小川直也は、『PRIDE.』ルール・ディレクター、島田裕二を睨み付けた（詳しくはP1参照）。「こうなったら『PRIDE.』vsUFOの全面戦争ですよ！　ウチにはヒクソンもホイスもいますから！」と島田裕二も小川がいなくなってから吠えまくる。でも、島田氏はUFOのレフェリーでバトラーツの広報。「ウチ」でいいのか、「ウチ」で？　結局、小川が『PRIDE. 5』に参戦するのか観戦するのかさえも、正式には発表されなかった。また、この日は、『PRIDE. 5』でヒクソンvsホイラーの柔術エキシビションが発表されると同時に、エンセン井上vsマーク・ケアーという目玉カードの事実上の延期が発表された。

4月16日（金）『PRIDE.』

『笑っていいとも』（CX系）

■エンセン井上と桜庭和志が、揃ってテレフォン・ショッキングに出演……と思ったら、番組最後の宣伝コーナーだった。M・ケアー戦が流れたエンセンも哀しみを表に出さず笑顔、もちろん桜庭も笑顔だった（P14～参照）。

4月18日（木）PANCRASE

『1999BREAK THROUGH TOUR』神奈川県・横浜文化会館

■石井大輔vs高瀬大樹（慧舟會）、渋谷vsライトル、渡部謙吾vsスタインズ、そして船木誠勝vsブラガのパンクラチオンマッチはすべて時間切れ。ブラガはケビン・ランデルマンに敗れた男。船木はかなり押された。ヒクソン戦、遠のく!?　しかし、なんでもありで決着がつかないというのもなにかシックリこない。キング・オブ・パンクラシスト王座決定戦は、近藤有己がセーム・シュルトを破り王座返り咲き。高橋義生はブイシェをプロらしい試合運びで破る。

4月19日（月）UFO

チェアマン・アントニオ猪木（元Mr.ウォーリー？）"来日"！

■"来日"というフレーズを使った東スポ（4／21付）に脱帽！　まさにアントニオ猪木は"未知の強豪"化しつつある。4・29『PRIDE.5』襲撃GOサイン！　東スポには「小川、高田・ヒクソンをテロ襲撃だ」の見出しが踊った。

4月20日（火）『PRIDE.』

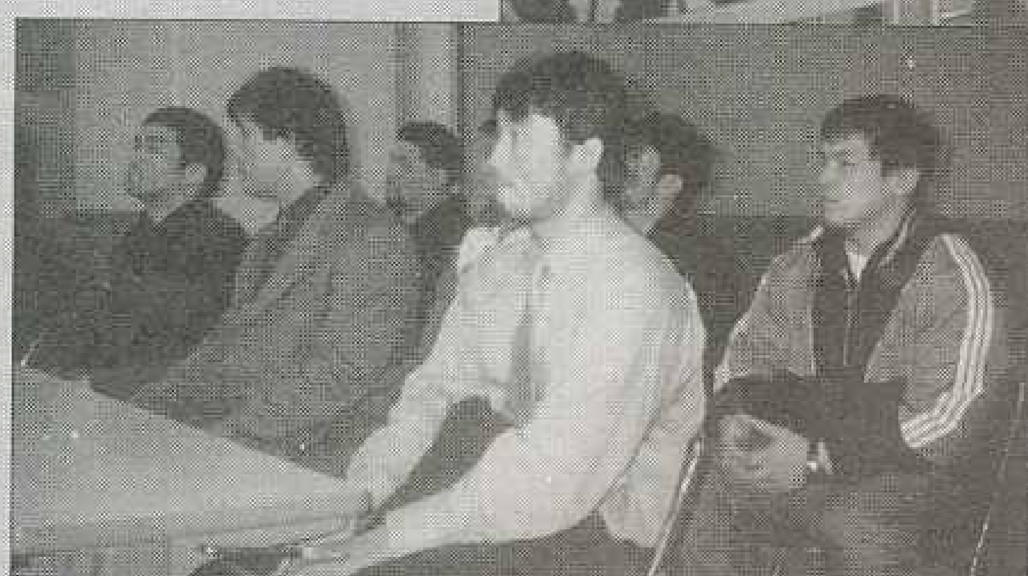
エンセン井上『PRIDE. 5』出場表明

■DSE（ドリーム・ステージ・エンターテインメント）からFAX。エンセンと対戦相手のマーク・ケアーの負傷欠場が決まる。エンセンの無念は計り知れないが、兄・イーゲンと揃い踏み、ヒクソン、高田、小川らとの接近遭遇もあり、4・29はエンセンからも目が離せない。20日時点では、対戦相手は日本の某空手家が有力。ネットでは、「小川vsエンセン」という憶測がバンバン流れ始める。



3月19日、宮戸優光が開設したトレーニング・ジム日本版“蛇の穴”『UWFスネークピットジャパン』の発表記者会見が行われた。ルー・テーズ、ビル・ロビンソンというプロレス界の重鎮が出席し、プロレスの伝統的技術を伝えていくと語った

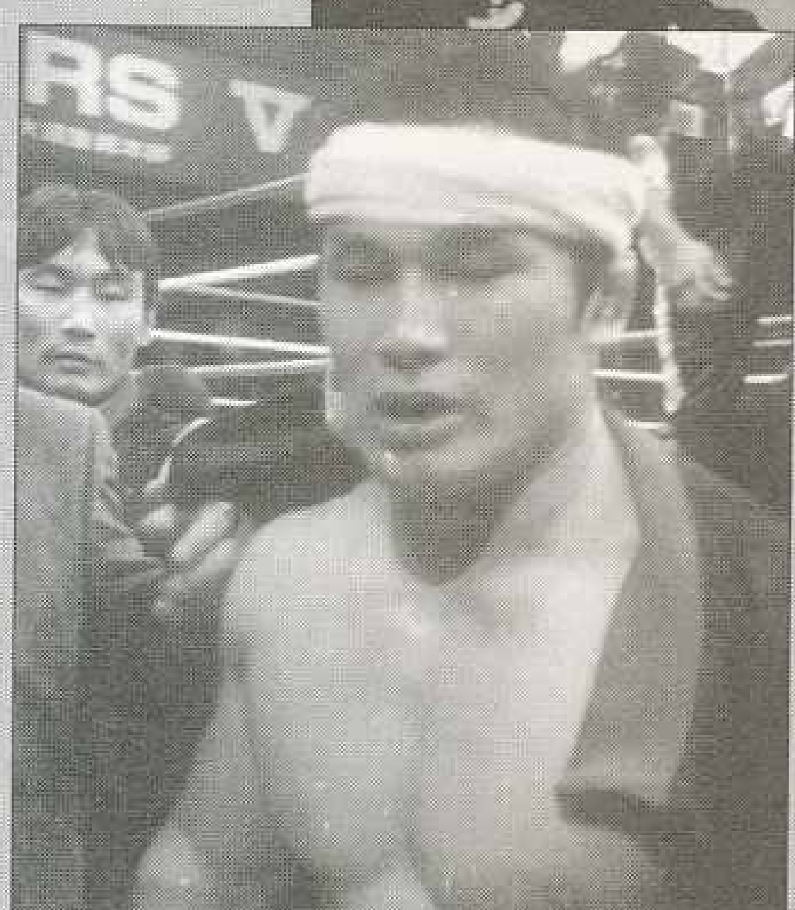




4月4日　五輪アマレスチーム『RJW』の道場開きが行われた。ゲストにはエンセン井上、山宮恵一郎、平直行、本間聡らが訪れ、その交流の幅広さ、風通しの良さがうかがえた。慧舟會との協力態勢は今後とも強化していく模様。



パンクラス、修斗、PRIDEと積極的に団体交流する慧舟會は今後確実にマット界を面白くさせていく存在。ベルトのポーズを取ってマット界制覇をアピールする宇野薫、高瀬大樹、小路晃、廣野剛康（右から）



4月8日　パンクラスの美濃輪育久は額から流血しならがらも頭突きを繰り出し、山崎進を追い込む

宇野薫（左）と佐藤ルミナ（右）は5月29日の横浜文体で修斗ウェルター級チャンピオンの座をかけて激突。人気、実力ともトップクラスの二人だけに白熱必至





修斗&慧舟會&各道場
の流れが丸わかり

チョイスマン　ブチ

3月21日（日）コンバットレスリング

『第5回全日本コンバットレスリング選手権』町田市総合体育館

■修斗の大会をプロモートする㈱サステインの若き専務でもある、格闘技男・佐藤ルミナの出場で注目された大会。1回戦、2回戦は1本を取って勝ち上がるが、3回戦で勢田誠一にポイント負けしてしまった。アブダビで欠場し、その悔しさをこの大会にぶつけようとヒザのケガをおして出場したムリがたたったようだ。5月29日には宇野薫とのウェルター級王座決定戦がある。ケガは心配だがここは踏ん張りどころ。

3月28日（日）修斗

『修斗 The Renaxis 1999』東京・後楽園ホール

■メインはライト級タイトルマッチ、チャンピオン・朝日昇vs巽宇宙。互いに技を出しあわないネガティブ・ファイトに終始してドロー。タイトルの移動はなかったが、不満足な内容に朝日は試合後ボヤきっぱなし。かつて『紙プロ』でプロレスラーのことを“ニセ格闘家”とコキ下ろしていた頃の勢いある発言がそろそろ聞きたいね。（いや、ホント）

3月20日（土）修斗

『総合格闘技大会ゴールデン・トロフィー』フランス

■“修斗のスーパーサイヤ人”桜井速人がミドル級トーメントで優勝。『ドラゴンボール』人気が高いフランスでは「ソンゴクウ」と呼ばれて一躍チビッ子たちのスターに。アブダビでは砂漠の王子に気に入られ、フランスではチビッ子の気持ちをワシ掴み。シッポがあるんじゃねえかと思えるほど強い桜井。次は5月29日横浜文体。この野生児のシッポが見えるかも!?

4月8日（木）大道塾

『格闘空手DREAM THE WARS5』東京・後楽園ホール

■第6試合には中井祐樹と藤本勲が柔術マッチを行い、中井が21ー0という圧倒的なポイント差で勝利。茶帯対青帯なんで結果は当たり前だが、脳ミソを使った攻防は見るより、やってみたいと思った次第。メインの美濃輪育久vs山崎進は終始美濃輪が攻め続けたが、判定がないためドロー。（詳しくはバウトレビューで）

4月18日　パンクラス

『KING OF PANCRASE TITLE MATCH』神奈川・横浜文化体育館

■船木誠勝vsエゼンベール・ブラガのパンクラチオン・マッチ（ノールールマッチ）が注目された大会。船木はマウントパンチを浴びて流血したが、結局ドロー。エゼンベールは強かった。だが、そのエゼンベールを完膚なきまでにブッ倒した男が今回『K一通』で紹介したケビン・ランデルマンなのだ。ますます日本で見たくなった。ほかのパンクラチオン・マッチは渡部謙吾がボブ・スタインズと、渋谷修身がクリス・ライトルと闘い、ともにドロー。また、慧舟會の高瀬大樹も石井大輔と対戦したが、これまたドロー。判定のないこの試合形式は結末を濁しているように感じられて後味が悪い。問題なのはそれだけではないが簡単に直せるルール面ぐらいは再考をお願いしたい。

試合情報

售 5月27日（木）修斗

『Shooter Passion』東京・北沢タウンホール　試合開始PM6：30

■桜井隆多がメインに登場。桜井速人が活躍したフランスの大会では負けてしまったが、修斗ではいまだ負けなしの男。タウンホールの大会は道場対抗戦の一面もあり、後楽園ホールとは一味違ったアツさがある。安くて激しいお得な大会だ。

售 5月29日（土）修斗

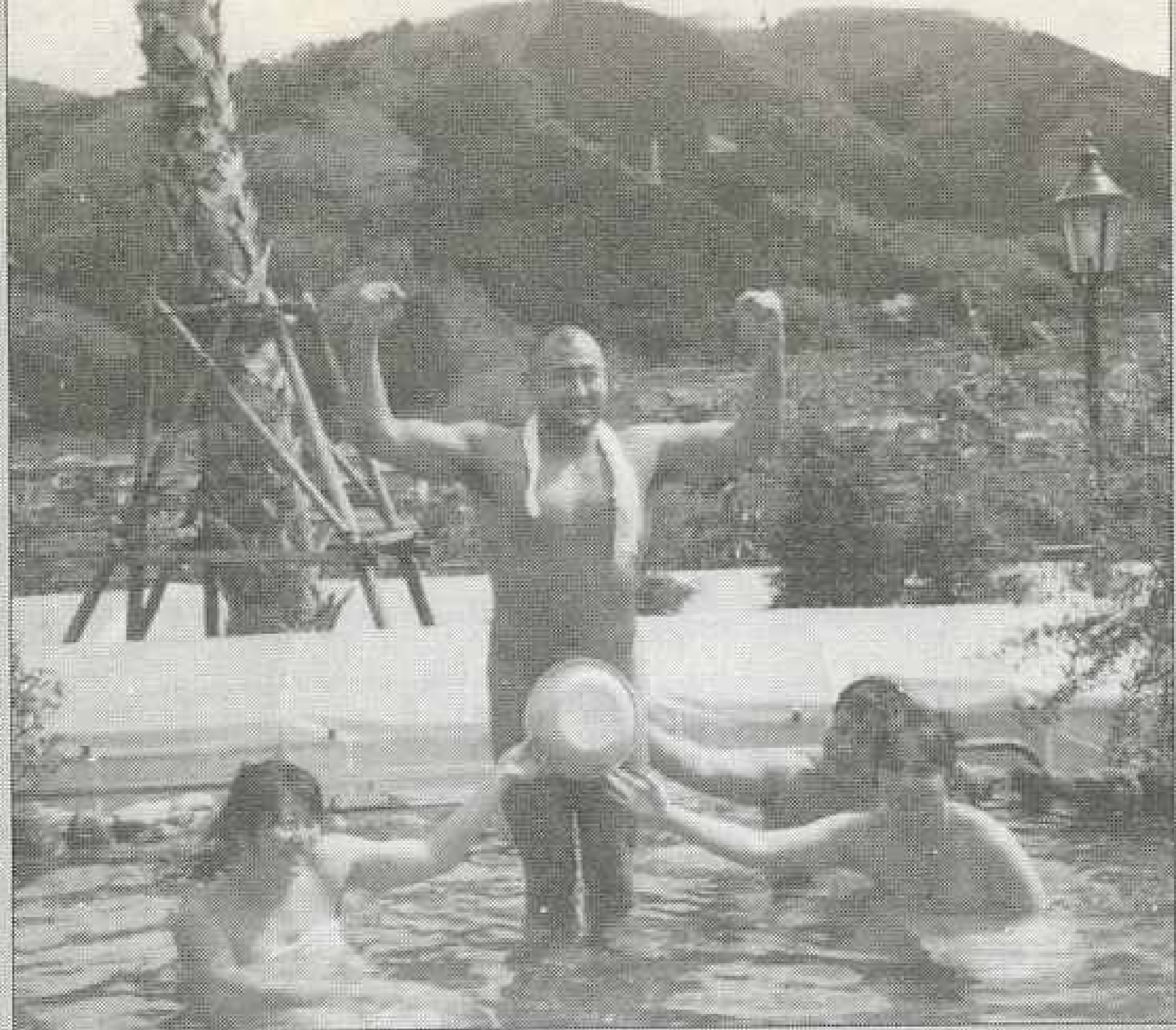
『修斗 The Renaxis 1999 10years anniversary』神奈川・横浜文化体育館　試合開始PM5：00

■雑誌『POPEYE』の表紙もゲットした桜井速人が出場。メインは佐藤ルミナvs宇野薫の修斗ウェルター級チャンピオン決定戦。紆余曲折はあったがよくぞ、このカードを組んでくれた。まさに修斗のドリームキャスト!!　ガンバレ、佐藤専務!!

【道場開設】

●『RJW・CENTRAL』
コンバットレスリングの大会では佐藤ルミナにも勝ったことのある五輪アマレスラー三宅靖志らが所属する『RJW』がジムを設立。レスリングの基本から総合向けの練習までを五輪アマレスラーが教えてくれる。入会金は1万円、月会費は1万円。問い合わせは03(3556)3858

●『UWFスネークピットジャパン』
宮戸優光が主催する日本版“蛇の穴”が開設された。専属トレーナーにはビル・ロビンソンが就任し、ビリー・ライレー・ジム仕込みのキャッチキャンの技を自ら手ほどきしてくれる。プロレス・ファンにはムチャクチャ嬉しい温故知新なジム。入会金は2万円、月会費は1万2千円。問い合わせは03(3337)1889



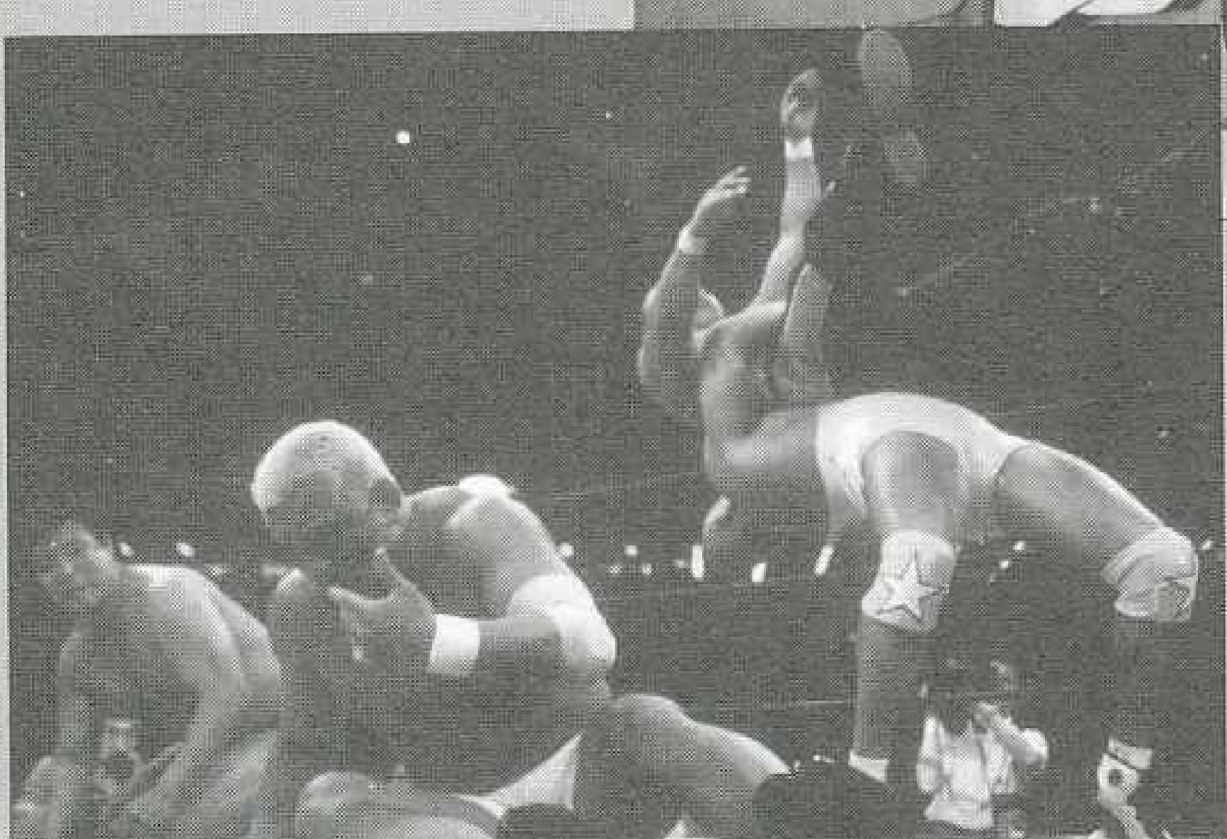
福岡晶は引退しているため、美咲香菜が特別に参加。そこに石川雄規が「家族とたまたま近所に来ててさあ、偶然だなあ」とチン入！ エロ社長に負けじと、アレクも身体を張る。



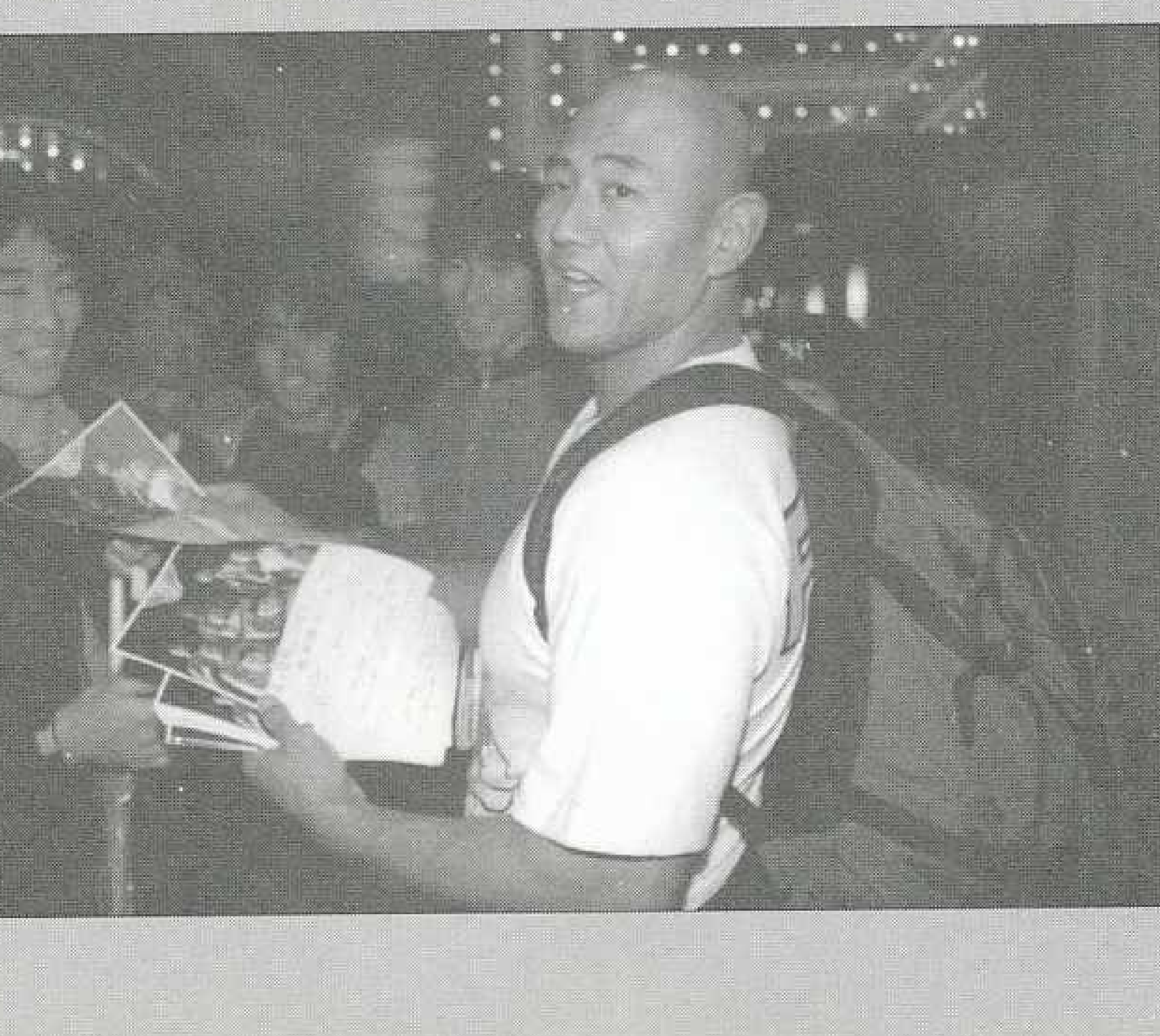


「いきつけの耳鼻科の先生に、軽自動車買うか旗揚げするか、どっちかって相談したんですよ。そしたら『自動車は年を取ってからでも買えるだろ？』って言われて、とりあえず旗揚げしたんだけど」(サバイバル)「そんな軽々しい気持ちで旗揚げされても、こっちも困るんだよ！」(サスケ) 誰がどう困るのかは不明ながら、サスケの目は完全に飛んでいた！

4月27日の『みちプロエイド』には小社も微力ながら絶賛協賛中。全日、ＦＭＷ、ネオ・レディースなども参戦！ チケットも安いので、みんないい夢見ろよ!!



4月10日、新日本プロレスの闘強導夢大会にバトラーツから石川雄規、アレクサンダー大塚、田中稔が参戦。しかし、いずれも敗北。しかし、魂は見せた！（詳しくは座談会参照）



4・10闘強導夢参戦直後、帰りの客を相手に自分たちの後楽園ホール大会のビラを撒いたバトラーツ3選手。とにかく凄い勢いで人が群がり、アッという間になくなってしまった。たくましいの。

みちのく＆バトラーツ＆FMW の流れが丸わかり

チョイスマン NOBU

3月12日（金）バトラーツ
『JJC争奪リーグ戦』東京・TFMホール
■モハメド・ヨネの唇が裂けてしまったために延期になっていた『タッグバトル'98』優勝決定戦で石川雄規＆カール・グレコ組を破りアレクサンダー大塚＆モハメド・ヨネ組が優勝。試合後、「ラヴ・ウォリアーズ」の名前を返上。モハ・ボンバイエ！

3月13日（土）バトラーツ＆JWP
『キング＆クィーン　トーナメント』神奈川・クラブチッタ川崎
■石川雄規が結婚引退を目前に控えた福岡晶にセクハラ攻撃を繰り広げるが敗退。「処○膜と常識とルールは破るためにある！」(by石川雄規)

3月13日（土）みちのく
『ルチャバカ日誌'99』岩手・矢巾町民総合体育館
■ワルSASUKEからいいサスケに戻る。そしてWWFからTAKAみちのくも飛来して、クレイジーＭＡＸと対立。動かないレスラーがいなくなり、みちのくはみんな元気がいいらしいぞ。

3月14日（日）みちのく
『ルチャバカ日誌'99』宮城・白石市勤労者体育センター
■各地で抜群の味を出しまくる“もてぴょん”こと茂木。ちゃぶ台片手に改心したサスケを再び悪の道へ引きずり込もうと画策中。ボクもたまには悪いサスケが見たい！　復活

3月19日（金）FMW
『MAKING OF NEW LEGEND～FMW10周年記念特別興行』
■アジアタッグを取ったハヤブサ＆人生組が田中将斗＆黒田哲広組の挑戦を退けて初防衛。試合を見た渕正信は田中＆黒田を絶賛。この日、シングル二冠を持つ冬木は、リング上から次期挑戦者にターザン後藤を指名。（21日のＳＰＷＦ静岡大会でターザン後藤はＦＭＷへの出場を拒否を表明）

3月20日（土）バトラーツ
『ＪＪＣ争奪リーグ戦』愛知・名古屋市総合総合体育館第３競技場
■Mr.デンジャー松永が牙＆サーベルをフル装備で、石川雄規を急襲。すぐ横の会場でやってる新日本プロレスの客の列の中に突っ込んでいった痛快なプロレスバカ２人。

3月21日（日）バトラーツ＆JWP
『ＪＪＣ争奪リーグ戦』大阪・舞洲アリーナサブアリーナ
■田中稔がＪＪＣ争奪リーグ戦優勝！ ちなみにミックスド・タッグとではアレク＆福岡＆日向あずみが優勝。商品の混浴温泉旅行をゲット！

3月28日（日）みちのくプロレス
『ルチャバカ日誌'99』宮城・ニューワールド仙台
■NWA世界ミドル級のタイトルマッチでサスケがジュードー・スワを破り初防衛に成功！　試合後、TAKAがリングに上がり「みちプロを出ていった奴等を後悔させてやる！」とブチ上げた。

3月29日（月）FMW
『統一機構最強タッグリータッグリーグ戦』
■冬木が再三、「後楽園にに来い!!」と言っていたにもかかわらず、ターザン後藤は姿を現さず。

4月2日（金）バトラーツ＆JWP
『キング＆クィーン　トーナメント』
■優勝商品の混浴温泉旅行を満喫したご一行様。アーッッッッ混浴入りてえ！おんな！

4月7日（水）みちのく
４月27日に行われる『みちプロエイドTOKYO for TOHOKU』のカード発表記者会見の席上、ザ・グレート・サスケ及びみちのくプロレスから埼玉プロレスに対して宣戦布告が行われた。第0試合として、急遽サバイバル飛田vs原始猿人ヴァーゴンの試合が組まれた。サスケはサブレフェリーの要請を拒否、監視人として立ち会うことを約束した。

試合情報

㊟4月29日（木・祝）みちのく
『GWシリーズ』新潟・新潟フェイズ
■入場がムチャクチャ長くなりそうなタッグマッチが実現！
ザ・グレート・サスケ＆マグナムTOKYO＆ケンドー組vs愚乱・浪花＆望月成晃＆ペドロ・マルケス

㊟5月5日（水・祝）FMW
『メイキング・オブ・ニュー・レジェンド～エンターテイメント・レスリング・パワーライブ』
■超理不尽タイトルマッチ、実現！
ＦＭＷ認定二冠統一選手権試合冬木弘道vsハヤブサ＆人生vs黒田＆田中の勝利者

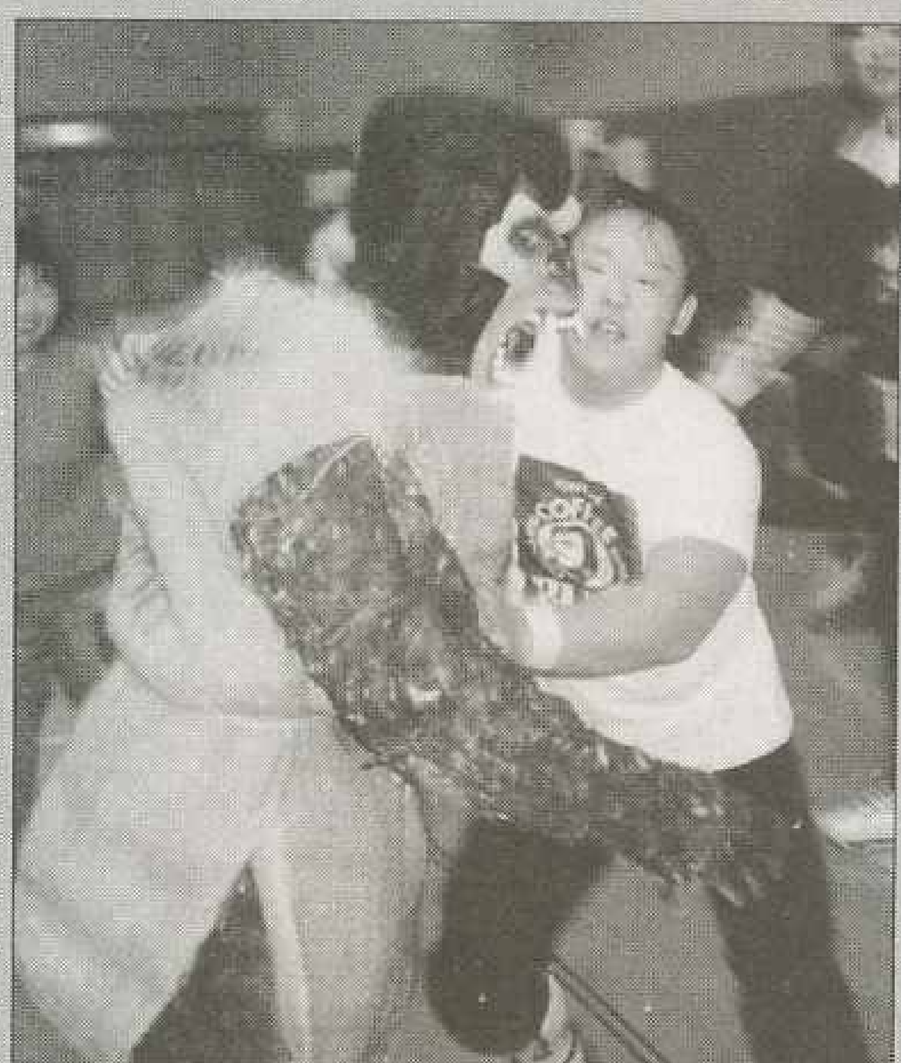
㊟5月14日（金）バトラーツ
『札幌大好き～金曜ゴールデンタイム伝説』
■伝説の五寸釘デスマッチ
石川雄規vs松永光弘
池田大輔vs ボブ・バックランド



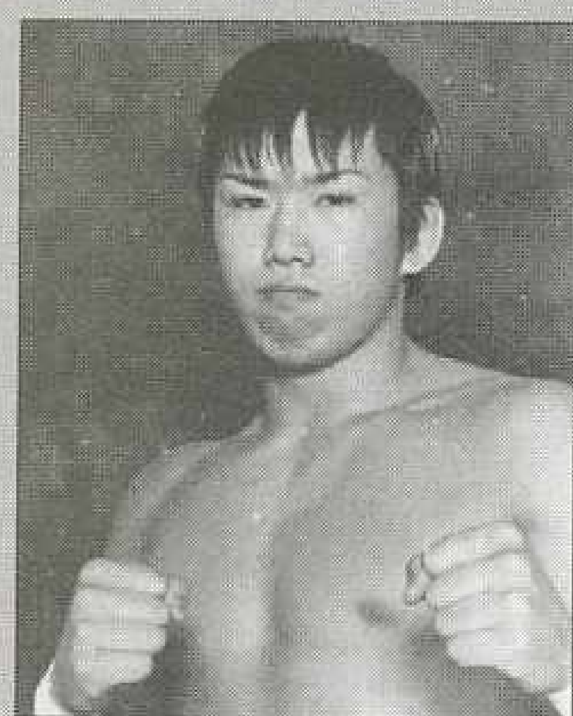
3月31日　ＵＮＷ■セッド・ジニアスが米・バージニア州アーリントンを拠点に活動していくことになった。レスリングスクールを開校するという予定。



3月21日　ＥＷＦ■クラブチッタ川崎。久々に登場のつぼ原人。場内外で手当たり次第に暴れまくった。小坪はつぼプロモーション旗揚げ戦「真実一路」を６月１日北沢タウンホールで開催する。



3月29日　埼玉プロレス■大田区民プラザ。場外で暴れ回る原始猿人ヴァーゴン。ヴァーゴンはやや怒り肩でラガーマン体型である。右手薬指に三日月型の傷有悶絶り。さっそくサスケ社長の目に留まった。



3月28日　大日本プロレス■八王子大会から無断欠場を続ける藤田穣。４月４日、ＮＥＷ　ＮＯＷ駒沢大会の会場に姿を現した。その後、７日の大日本後楽園大会には姿を現さず。

その他団体
の流れが丸わかり

チョイスマン　チョロメ～ン

4月11日（日）キングダム

『Rebirth2nd』浜松町アールンホール
■入江秀忠vsサバイバル飛田の一戦はバーリ・トゥードマッチとして行われた。２分１７秒、入江のルタ式変形絞めで飛田はタップ。

4月12日（月）ミスターデンジャー水道橋店

■４月よりＡＭ１１：２０～ＰＭ１１：００まで途中休みなく営業致しております。なおディナータイムはＰＭ４：００からとなっております（年中無休で営業しております）。
ミスターデンジャー水道橋店
〒101-0061　千代田区三崎町2-15-10
華ビル１Ｆ　TEL.03（3239）2124

4月15日（木）ＳＰＷＦ

■『ＳＰＷＦ道場マッチ』一宮道場の道場で行われた、ノーピープルの道場マッチ、ターザン後藤VS高智政光。大暴れのターザンは、女子レスラーの岩井田をパイルドライバーで全治１ヶ月の重傷を負わす。ＳＰＷＦは道場と看板を奪われてしまう。

試合情報

告 5月8日（土）レッスル夢ファクトリー

『夢一杯・ダブルで！～つなぎ合う手に夢をつないで』埼玉県・所沢サン・アビリティーズ　試合開始13：00＆18：00

告 5月23日（日）ＤＤＴ

『こちら葛飾区金町ホール前ＤＤＴ』葛飾区金町ホール５Ｆ　試合開始19：00

告 5月29日（土）ＤＤＴ

『俺たちＤＤＴ』
■板橋区立産文ホール　試合開始18:00

【お詫び】
インドネシア拳法ペンチャック・シラット武術道場代表・師範のスナヤンさんから『紙プロNO.16』にてＰ42、Ｐ56、Ｐ143で「シラット武術」が「シラット柔術」と全然似ても似つかない別の格闘技になっているという指摘を受けました。どうも申し訳ありませんでした。

女子プロレス
の流れが丸わかり

チョイスマン　ジャイ子

3月26日（金）『東京スポーツ』より

■10年振りのクラッシュ対決を控えた長与千種のコメント抜粋。「飛鳥はただのオジサンだったよ」、「やっと飛鳥ひとりに焦点が合った」ただのオジサンひとりに焦点が合ったって、それでいいの？

3月28日（日）ＪＷＰ

「ROLL OVER!!」東京・後楽園ホール
■福岡晶が引退。結婚おめでとう。第二の人生に幸あれ。
３月31日（水）全日本女子プロレス
■SUN族にて、中西百重がＪｄ’の薮下めぐみとのバーリ・トゥード戦を発表。

4月4日（日）GAEA JAPAN

「The 4th Anniversary of GAEA's birth」神奈川・横浜文化体育館
■注目のクラッシュ対決は飛鳥が勝利しＧＡＥＡの全権がＳＳＵに。次回の興行からマッチメイクをＳＳＵが担当。どんな意地悪するの？

4月7日（水）大日本プロレス

■「Ｂ・Ｊジェネレーション’99」
東京・後楽園ホール
■中野vs市来戦後にシャーク土屋、クラッシャー前泊が乱入。女子部活性化？

試合情報

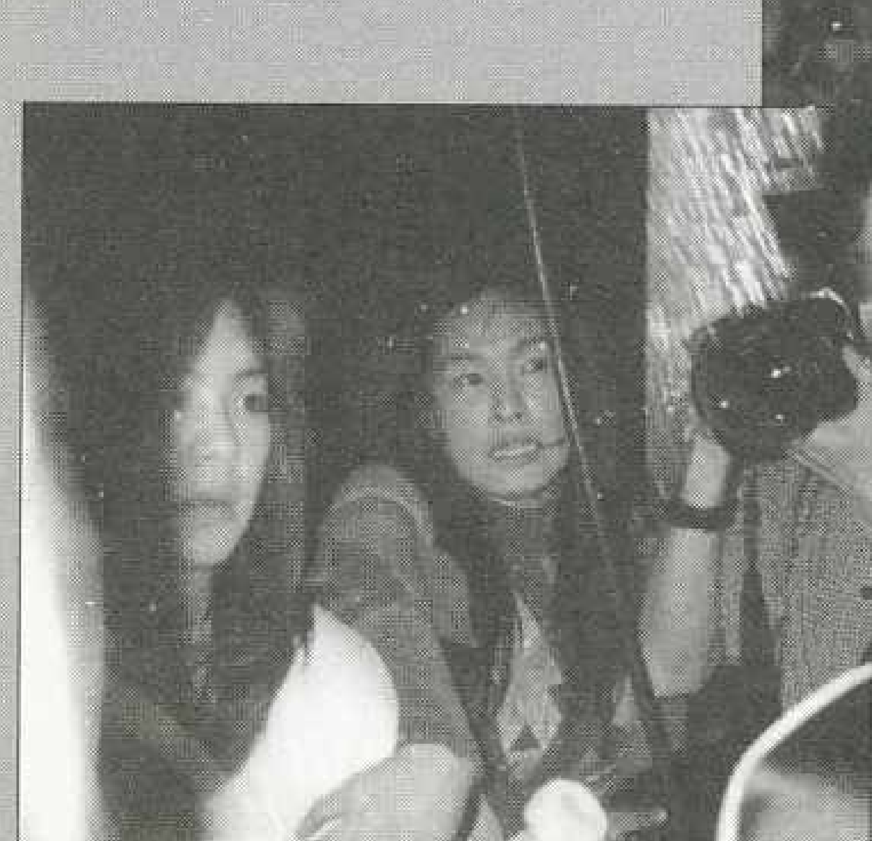
告 5月5日（祝）ネオ・レディース

神奈川・川崎市体育館
■京子vs貴子の一騎打ちがついに実現！４月11日の興行に突如乱入した二瓶組・門田幸子の参戦も噂される。要注目!!

４月９日、試合中のアクシデントで入院中だったアルシオンの門恵美子選手が急性硬膜下血腫のためお亡くなりになりました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。
『紙のプロレスＲＡＤＩＣＡＬ』
編集部一同



３月31日・ＺＡＰvsラスカチョの記者会見。全女の数少ない財産でもあるＳＵＮのテーブルを破壊される。松永会長は大丈夫か？　試合にはZAPの二人は素顔で登場。





写真の２月16日、スタジオマッチでは、貴子が豊田のセコンドに付いただけでブチ切れた京子。嫌いなのはしょうがないけど、まあ落ち着け。豊田も必死だよ、試合後なのに。これで完全に絶縁かと思いきや、５月５日、川崎市体育館で京子vs貴子の一騎打ちが決定。ケンカになるか、プロレスになるか？　石田リングアナのデビュー戦も決定。

RADICAL

活字“電流爆破”を体験せよ!!



プロレス狂の詩





その他団体

こないだの修斗の桑原vs五味に燃えた作文

花くまゆうさく リングの汁 RADICAL



いよいよ『紙のプロレスRADICAL』も、本格的に月刊ペースになってきましたが、ただでさえ書くことがないのにどうするです。どうするといえば高野拳磁のどうする節。あれにはシビれたが、もうだいぶ昔なんですね。あの頃は、ちゃんとマメにインディーも見に行ってたんだなあ……。

そんで今月はやはりプライド5でしょう。今回は凄いですね、エンセンvsケアー決定にビックリしましたが、さらに桜庭vsビクトーですよ。ほんとに実現するんでしょうか、よくビクトーはOKしたと思う。メッツアーとやるより桜庭とやるほうがかなりキツイと思うんですけど。桜庭のこと知らないのかな？ 高田と同じような奴だと思ってるのか？ そんなことないですよね。ゴエスも仲間なんだし、話は聞いてるはずだ。メッツアー戦をケガでキャンセルしてるのに復帰戦でいきなり桜庭戦とは無謀のような気がします。パンチさえ食わなければ桜庭の勝ちは堅いと見た。それともビクトーの底力があるのか？ いずれにせよエンセンvsマーク・ケアー戦とともにイチバン注目な一戦です。

もうひとつ注目な問題試合もありますけどね……（怒）。

あとイーゲンも試合するようですね。バレット・ヨシダもセコンドで来るのかな？ しかし、バレットがイーゲンのところに移ったニュースにはビックリです。バレットといえばハワイにあるヘウソン・グレイシー道場の看板選手ですよ。それがいちばん敵対しているイーゲンとこに移るなんて、それも狭いハワイの中で。日本に例えると、高阪がリングス辞めて、パンクラス入るようなもんですよ。

しかし、イーゲンとこ入ったおかげで、今後バレットが日本で試合する可能性が出てきたのはうれしい。柔術マッチ、修斗、トーナメント・オブ・J、などいろいろ夢が広がります。

個人的にイチバン見たいのは、バレットvs植松直哉（修斗）です。これに矢野卓見（元骨法のウナギで烏合の総裁。彼がいなければ烏合会もワイルドフェニックスも存在しなかった）を加えた三つ巴の試合が見たいですね。大道塾『ザ・ウォーズ』あたりでマッチメークしてもらいたいもんです。

今後、プライドでは小川vs高田戦がウワサされていますが、是非ガチで実現してもらいたいです。谷津vs高田もいいですね、もちろんガチで。

それにしても、小川は強いので楽しそうである。どこへ出向いたって、強いからへっちゃらだ。新日だろうが、UFCだろうが、パンクラスだろうが、修斗だろうが、どこへでも乗り込めてしまう。猪木は最高のコマを持ってしまった。最高に楽しい老後生活だ。

プロレス業界は、小川に冷たくせず感謝すべきではないのか。現在、格闘技界にニラみを効かせてるプロレスラーは、三沢や武藤や田村などではなく、小川と高阪と桜庭であるのだから。

プロレスを救ってんのは小川達でしょ。



はなくまゆうさく■ロープエスケープ取り合い合戦に冷めきってる者として、前号のヤマケン発言はうれしかったです。

魁！裏ビデオ御開帳

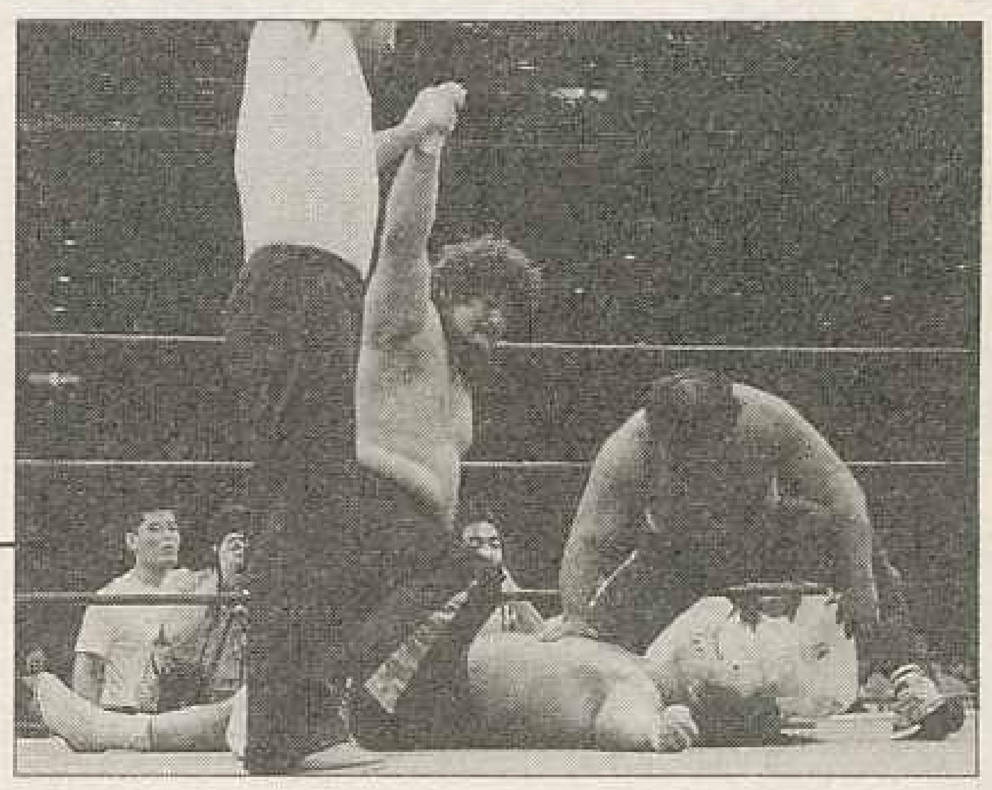
大庭敏幸（「梵婆家」店長）

第三回 91年8月10日 新日本プロレス・両国国技館 **長州力vs橋本真也**

今回は、現在どこで何をしているのやら橋本真也選手に関する裏ビデオを紹介したいと思います。

しかし、復帰戦はどうなるんですかね？ ウチのお客さんから入ってくる情報だと、6月のドームで小川と再戦なんて話もありましたが……気になります。姿を見せない橋本には、手厳しいことを言うお客さんがウチにもたくさん来ます。だけど、個人的には身体を絞って格好良くなって戻ってきて欲しいところです。まあ今回は「立ち上がれ破壊王!!」ということで、格好良かった頃の破壊王の試合と、それに熱狂するファンの声について書きます。

その試合は91年に行われた第1回『G1クライマックス』です。両国国技館で3日連続で行われました。1、3日目はTV中継があったのですが、この試合は2日目に行われたのでノーTV、ボクが持っているのはいわゆる隠し撮りしたビデオです。



この頃、長州vs橋本って評判が悪かったですね。いつも同じパターンで、ラリアットvsニールキックっていう展開だから単調で……。でも、これはちょっと違うんですよ。このG1では長州が引退を匂わせて、初日から負けており、この試合もヘロヘロ状態の長州を橋本がベソかきながら蹴り倒すという、かなりウェットな展開です。結構、見所のある試合だと思います。その見所というのは試合以外の部分だったりするんですが。

カメラのそばのお客さんが、非常に長州が嫌いらしくボロクソに野次を飛ばしまくってます。放送禁止用語を連発しながら気持ちよく橋本に感情移入しているので、こちらも乗せられて「橋本を応援しなければ」と思ってしまう。このビデオに関しては試合よりも、この熱すぎるお客さんの主張に耳を傾けながら楽しむのがオツというものです。

この前の試合までは大人しく観戦していたのに、ひとたび長州が出てくるといきなりのタブーワード攻撃。とにかく噛みついて吠えまくってます。ここでは書けない単語のオンパレード!!

長州がラリアットを入れると「全然、効いてへんやんけ、アホ！」

橋本の蹴りが長州の胸板に入ると「蹴り殺せ！ 顔蹴ったれ！ 顔潰せ！ アホ！」

試合が佳境に入ると「殺したれや！ いてもうたれや！」と、一方的に長州を罵倒していて、あまりの熱さにちょっと引いてしまうほどです。刺激は強いですね。

昔の観客席は熱があったもんなあ。TPG（たけしプロレス軍団）が来たときは、リポビタンDのビン、電池、生卵、どこから持ってきたのかわからないものまで飛び交ってましたから。あの頃の雰囲気はお行儀が良くなくて、気持ちいいですよね。大仁田の試合を見ると、ノリでお客さんがモノを投げてる感じですよね。そうじゃない、怒りでお客さんがものを投げるのが正しい新日ファンだと思いますよ。

ぼんばいえのてんちょう■膨大な量のプロレスビデオ・コレクションを誇る日本一のプロレス居酒屋in明大前。見たいビデオがあるときは、ここに行け！ 新日本プロレスのチケットも取扱中。お問い合せ：TEL．03-3323-5629

プロレス狂の詩

RADICAL

賢い野蛮人エンセン井上のマネージャー日記
もうひとつの大和魂
ブナニ酒井
第3回　エンセン、地獄の練習日記

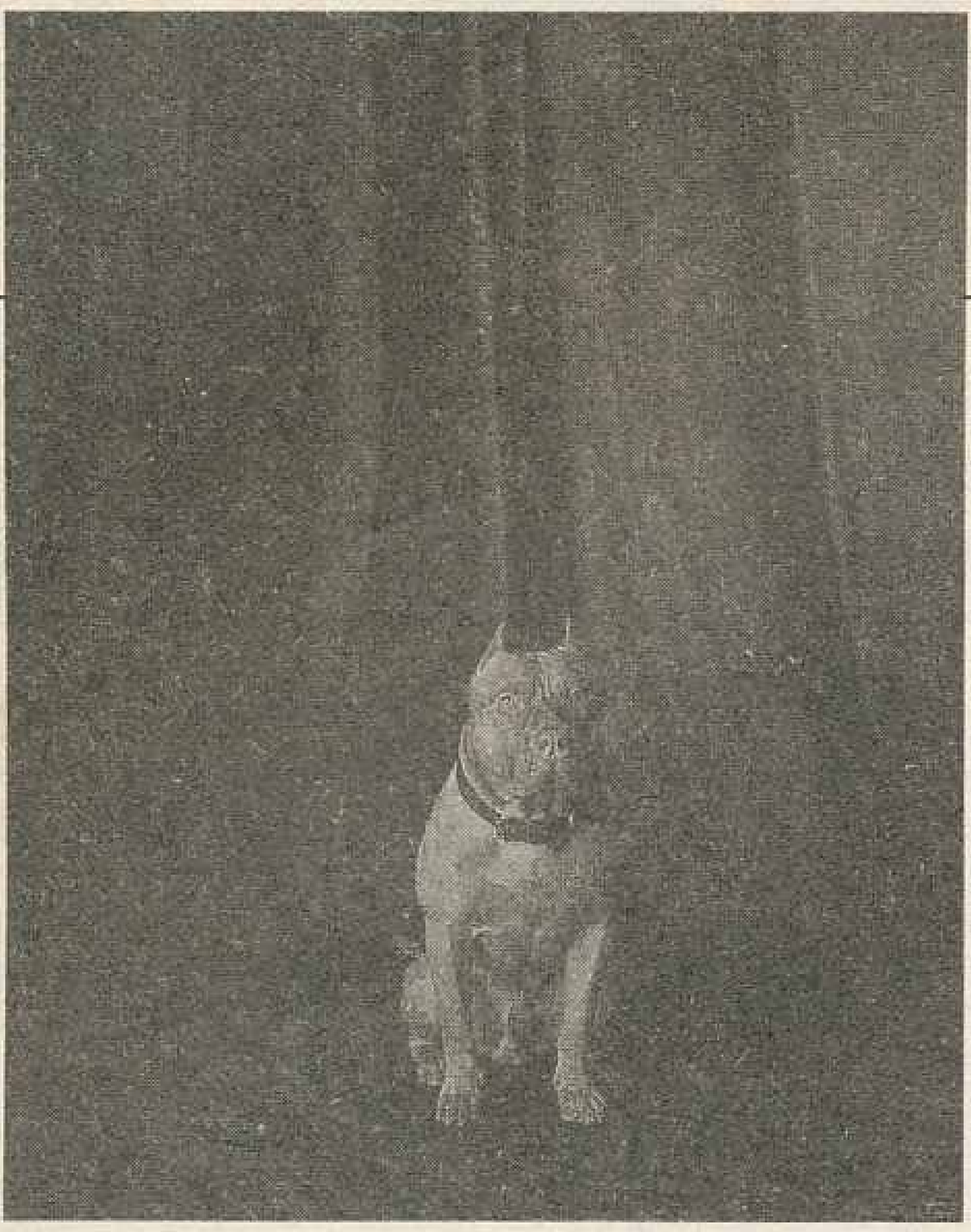
最近のエンセンは、vsマーク・ケアー戦に向けて猛トレーニング中です。とにかく「殴りたい!!　殴り倒したいヨ!!　もう殺しあいネ」と言ってます。あまり六本木にも遊びに行かず、ケンカもしないでトレーニングに明け暮れています。というわけで、今回はエンセンの練習について書いてみたいと思ってます。

エンセンの練習はとにかく大変のひとことに尽きます。試合前などは特に顔が真剣になり、冗談もあまり言わなくなりますね。PUREBRED大宮ジムでは加藤鉄史選手か、アンソニー・ネツラー選手、前号で大イビキをかいていたグアムの弟子ジョン・カルボが相手をしています。アンソニーさんが言ってました、「自分の試合は全然怖いと思ったことがない。だって、試合前のエンセンとの練習の方が比べものにならないぐらい怖いもん」ですって。実際、タップしても関節を極め続けて、骨が折れたり、落ちたりする寸前まで締め続けてますから、試合以上にハードなことをやってるのは間違いありません。グランドでもパンチを力一杯に入れ、ほぼ100%の力でスパーリングしてますから相手が壊れてしまう場合も多々あるので、怖いです。まあいろいろとケガが絶えませんが、大宮ジムで練習することがいちばん多いです。

さらに試合前のエンセンにはもうひとつの苛酷な試練「減量」が待っています。甘いものが大好きなエンセンは、ハワイに帰るとお土産にチョコレートを買ってきて、いつもポリポリ食べています。佐山（聡）先生のことをいろいろ言ってますけど、エンセンも甘い物好きですから。取材で喫茶店に入ったりすると、「パフェ食べるネ」なんて言ってパクパク食べています。これを控えるのが結構辛いらしいのですが、今回はしっかり守って減量に専念しています。しかし、どうしても我慢できないときもあるみたいで、そんなときは、例えば喫茶店だったら、ケーキのケースを開けて、ニオイだけかいで「ヨシ!」と言って納得してます。

あ、そうそう。これを勘違いされている読者の方も多いと思うのですが、エンセンは普段からワゴンで暮らしているわけじゃありません。たまに「エンセン、いいアパート紹介してあげようか?」と言ってくださる方もいますが、一応エンセンはアパートを借りて普段はそこに住んでいます。試合が近くなって忙しくなってくると、キックボクシングの渡辺ジムや青山学院大学のレスリング部に出向いたりするので、移動の時間がもったいないからということでワゴンの中で寝泊まりすることが多くなるのです。でも、最近はその機会も減りましたね。修斗くんもパパになって、これから種付けするSEXフレンドも2匹いるので、あまりエンセンと出歩いてばかりもいられませんからね。え?　エンセンのSEXフレンドですか?　さあ、そこまでは知りません。でも、ワゴンよりは家でやるんじゃないですか、よくわかりませんけど。

【編集部注】大ショック!!　締切直前、エンセンvsケアー戦の中止が決定!!　元気出せ、エンセン、エンセン!!



ぶなにさかい■5月1日〜5日　ラケットボールジャパンオープンが東京調布で開かれブナニ酒井、そしてエンセン井上も出場する。ちなみに前年はブナニ酒井が優勝している

悪循環コラム決定版!!　激突!!　男と女のロイヤルランブル
プロレスを見て女にモテろ!!
文・杉作J太郎
四十八手の三　ストーン・コールドの恋愛論

「いや〜、最近、モテモテでな……」

タマにそんなセリフを切り出してくる男というのがいるが、俺の経験上、その状態が3か月続くことはめったにありませんね。ま、もちろん俺もそーゆー男のひとりなのではないか?　聞くな。自分のことだからよくわかる。ホンマ続きません!　ま、これは男女関係のオモシロイ点なのだが、最初にいきなりモーレツな好意を示す女性。

「私、アナタのことが好きで好きでたまらないの」

みたいなことを言葉&態度でガシガシ示してくる女。これは徐々にクールダウンしていく場合が多いものです。前回会ったときにも抱こうと思えば抱けたがとりあえず貫禄を見せる意味で一度はなにもせずに帰らせた。今日こそベッドインだ!　全身に秘めた闘志と決意をみなぎらせながら出かけてみると、オヨヨ、なんか彼女のムードがおかしい。抱かせてくれるどころか突き放すよーなムードを感じることが多いものです。で、何度かそーゆー体験を繰り返すうちに、タイガー・アリ・シン風に言うならばついに結論が出ました!

初見でモーレツな好意を示すというのは本来ありえないわけで、そこには諸々の錯覚・誤解がある。相手に対して過大評価をしてしまってるわけですね。それが何度か会ってるうちに過大評価の部分が削ぎ落とされて恋心が消失してしまうわけである。つまり減点法なわけよ。で、ホントにオイシイ展開になるのは逆に最初、嫌われてる場合だったりするのであります。なによ。あの人、大ッキライ!

初見でそう思われた場合にはこれもまた悪い意味での錯覚や誤解もあるわけで、会ってるうちに錯覚や誤解が削ぎ落とされる。徐々に加点されてくるわけですね。その加点を女性が恋心と錯覚する場合があるわけなのだ…



…という説を証明しているのがヒールのレスラーのモテモテ現象なのであります!

WWFのストーン・コールドなんてまさにそんな感じであります。最初から好きだと感じてしまった場合には、よく見ればハゲだし、気もきかなそうだし、不潔な感じさえする。どんどんクールダウンしていくはずなのだが、最初の印象が悪かったもんだから見る度にポイントが加算されていつしかハゲや不潔もチャラになってしまっているのであります。

ま、そーゆーことを踏まえて今言えることは、最初からムリしてガンバル必要はないということであります。むしろ嫌われたほうがうまくいく。ああ、全然脈なし……これこそが成功（性交……し〜ん）への近道でないにしても着実な道程なのであります。そーゆー意味で前号の『ハガキ道場』で『トゥナイト2』に出ている俺があまりにもエロだからとブーイングかました16歳の神子佳世さん。年齢的に問題があるから今すぐどうこうとは言わんが、すでに貴女は俺を嫌うことによって逆に俺のスイートルームにチェックインしようとしているわけであると断言しておく。俺の妙技を味わえ!　ジョーク、ジョーク。

すぎさく・じぇいたろう■住んでいるマンションが競売にかけられてしまいました。





その他団体

プロレス狂の詩

シロウト勝ち抜き筆自慢！

PRIDE.0（ゼロ）

前号は空前絶後のデットヒートの中、僅差で真下さんが勝ち抜き、真下さんの3戦勝ち抜きが決定しました。しかし村田クンの『プロレスと生きる』の反響がモノ凄かったため、審議委員会で協議した結果、引き続き参戦ということが決定しました。『PRIDE』では実力、実績に関わらず、面白くてキャラクターのあるヤツをガンガン載っけていきます。

前号の結果発表！	感想
ライセンスナンバー11 **真下純子**さん **『シンデレラと呼ばないでチョンマゲ!!』** **92票**	●「きれいな奥さんということで投票するヤツもいると思うんだが、真下さんの着眼点と文章力は素晴らしいと思う。こんな奥さんを持った旦那さんは幸福者だと思う。」（盛岡市／賀東靖／26歳）●「正しい。でも安○拡○はダブルで間違えています。真理ちゃんは昔からブスです。あべ静江ファンはショックでも仕方ないけどね」（坂戸市／中川雅博／21歳）●「悪意は走る」（横浜市／甲下雅也／29歳）●「写真はピンでたのむよ」（藤枝市／横田賢／31歳）●「他人の正当な悪口は楽しい」（浦安市／宮川美香／28歳）●「きれいな感じのお母さんだから」（世田谷区／石毛力丸／25歳）●「闘いというのは美しいものが勝つ!（by坂田亘）」（佐世保市／小熊晋二／22歳）●その他大勢
ライセンスナンバー15 **村田卓実**さん **『プロレスと生きる』** **81票**	●「荒谷のサクセスストーリーになるのかと思ったら……のくだりに根性を感じました」（千葉県／神子佳世／16歳）●「PRIDE 0」にいままでない作風、凡作かも知れないが、パンクだ!（船橋市／小林慎治／28歳）●「単純明快・理路整然つーかシンプル・イズ・ベスト!　つまりそういうことです。非常に読み易くわかり易い文章でした」（名古屋市／田原和幸／24歳）●「誠実なファンぶりが伝わる文章に共感を覚えました」（川崎市／山内洋子／30歳）●田上大統領を都知事に!さんの「ごはんもりもり」写真に心を奪われましたが、村田卓実くんの「プロレスと生きる」に1票!!　題名もいいし、何より村田くんのその後が知りたい。（一宮市／真下純子／29歳）
ライセンスナンバー14 **田上大統領を都知事に!**さん **『何でもありだが金はなし』** **61票**	●「田村と坂田のインタビューとなんだか通じてるじゃん!と思った」（川崎市／岡崎晶士／33歳）●「鈴木みのるは田村とやって欲しい」（埼玉県／本間徹哉／16歳）●「現在の総合格闘技に必要なのはバーリ・トゥードではなく、共通の「強くて面白い闘い」ができるルールを創りあげること……という所はまさにそのとーりだ!と思います」（札幌市／千葉美紀子／24歳）●「田上のネタで次は書いて欲しい」（江戸川区／西村陽介／22歳）●「いちいちその通り!と頷くことばかりです。鈴木みのるの今後に注目してみようかなと思ってます。ジャイジャイ。」（日野市／秋川智幸／29歳）●その他大勢

3戦勝ち抜き

ライセンスナンバー11

『プロレステラピー』

真下純子（29歳）

私はよく母に子どもを預けて観戦へ行く。大抵は快く預かってもらえるのだが、時々「なんでプロレスなんかを観にいくの?」と小言をもらったりする。そこで、「そんな事言うんだったらなんで母さんは劇団●季のミュージカルなんて気っ色悪いもん観にいくのさ」とか言い返したいところだが、気を損ねられても困るので言わないでおく。

今に始まったことではないが世の人々は「プロレス好き」ということを何かと揶揄する傾向があるようだ。

例えば主婦仲間に「私はプロレスが好き」と言ってみると、かなりの確率で「あらやだ」といった反応をする。

マダムズにはオール・スカンといった趣である。人のシュミなんてものはパーソナルなものだから、人に嫌な顔されても観るのをやめたりしないし、無理に同意してもらわなくても全然かまわないけれど、それにしたってあんまりな反応ではある。

世の中がプロレスを蔑ろにするようになったというのには長い歴史があり、もうどうにもならないところに来てしまってはいるが、私は小さい頃からプロレスが好きだ。考える力がついて、プロレスについての様々な矛盾点にも気がついてしまうようになっても、決して絶望したり反発することなく見続けている。

しかしあんなにも「なんでプロレスなんか」と言われると、「そういやなんでこんなにプロレスが好きなんだろう?」と思わないこともない。私にとって「プロレスの魅力」とはなんだろう、と。

そしてこんな結論を出してみた。

例えば悲しいことや辛いことがあったとき、プロレスを観ると都合がよい。



ビガロの通販で購入、マサT。電話対応がとっても親切で感激。

これは決して「夢をありがとう」系の考えで言っているのではない。パンツいっちょの男達がマットをトタタ、トタタと駆け回り、掴みあい転がり飛んで落ち……なんてのをながめていると、その瞬間だけは確実に自分の現実を忘れていられるからだ。これは私にとって最大のプロレスのチャームポイントなんである。

目の前でバカなことをしている人々を見るのはバカな私にとって最高に心地良いひとときだ。時に負けたレスラーと自分を重ね、煩悶が倍増したりするけどそれもまたよし。

くだらない試合だったらば、塩の味を称した言葉を発してブーブー言うのもまたよし。

これは「癒し」の一種だと思う。ってことは私にとってプロレスは「アロマテラピー」みたいなものなのかもしれない。ハーブなんかのアロマの匂いを嗅いでリラックスしたつもりになっても肝心の身体の中身がどうにかなるわけじゃないってのと、プロレス観てストレス発散した気になっても自分の現実はなんにも変わりはしないって点は似てなくもないと思うのだがどうでしょう?

しかしアロマテラピーに癒しを感じてる人がたくさんいるように、プロレスに癒しを感じている人もきっとたくさんいるはずだ。少なくとも私はプロレスに癒されている。だからいくら矛盾や不条理に満ちみちていても、プロレスはとても魅力的なものなのだ。プロレスを観ることによって少しでも慰安を感じるのなら、これはきっとテラピーだ（言い切られても困ると思うが）。

私はアロマのいい匂いよりも「管理のずさんなサファリパーク」のキッツイ匂いの方に癒されたいのだ。

だからお母さん、主婦仲間の皆さん、ほっといて下さい。

おわり。

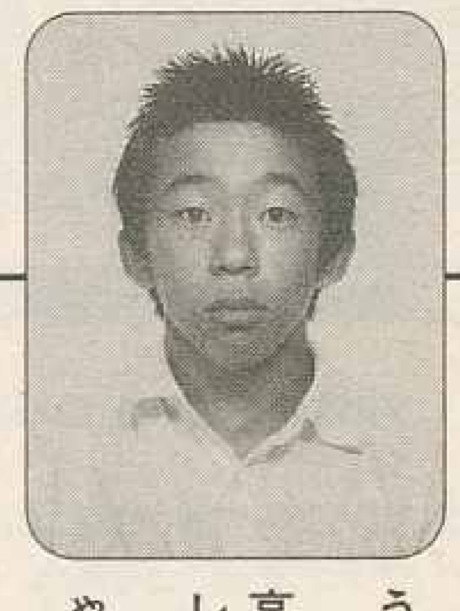
※前号、読プレ内の「『PRIDE.0』の勝者は誰?」のページ数が間違えていたため、谷津嘉章、高田延彦、小川直也、吉田豪、その他大勢に票が集まってしまいました。混乱させてごめんなさい。

RADICAL

審議委員認定特別勝ち抜き

ライセンスナンバー15

『おがわえらい』 村田卓実（15歳）



私は柔道を3年間やりました。

それで出たことは「おがわはえらい」ということです。

その昔、小川はオリンピックに出てました。小さかった私は「えらいなー、この大きい人間は」と思いました。

それから時は過ぎ小川の柔道は勝たなくなり私は成長し高校に入りました。部活は強制でレスリング部がなかったので柔道部に入りました。

私が柔道をやっている間に新日で橋本と試合をしました。それについて絶対プロレスに興味がない（というか見ない）女子の人は「小川、プロレスやるんだよね」と言い、ただの柔道の強いオッサンである先生ですら見たと言っていました(二戦目も)。

そして私は柔道をしながらも修斗に興味をもち、今思い出しても腹の立つ判定負けで柔道を終え、大学に入りそこね、小川は新日マットで大騒ぎ起こしたりしてUFOで頑張っています。

文章の中に小川のえらい所を盛り込んでいこうと思って書いていましたが全部書く前に終わってしまったので全部もう一回書き出します。

オリンピック出ちゃう所

プロレスやって女子高生やオッサンにプロレス見せちゃう所

1・4を面白くしちゃった所

菊田と比べても「ナンボ何でも違う」所（菊田はアブダビでもあっさり負けてこれからどうすんだろう……？）

SRSの出演依頼が来ても「行ってもいいけど何かするよ」って言っちゃう所（シビれた。あとSRSは桜庭対エンセンカットしすぎ）など。

その他は各自調査。

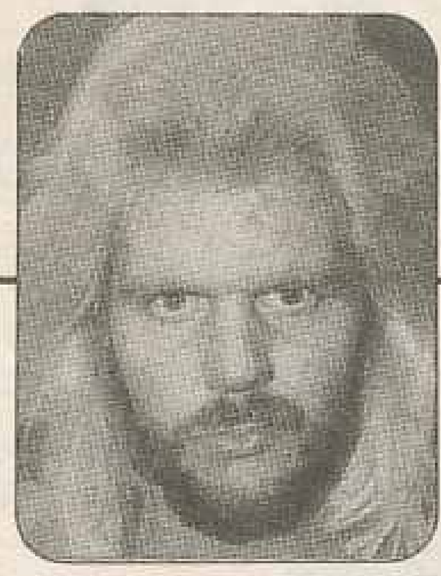
とにかくそれ程の男なのだからプロレスも柔道も興味のない女子高生やオッサンですら興味を引くような試合ができないわけがない。

だからはやくやって、と思いました。

※今回は何を書いてよいのか分からず面白くも何ともない駄文になりました。載せていただいたものを書いた時からかなり時間が過ぎ精神状態も変わっておりお許しください。あまりにひどいと判断された場合は載せないでください。あと、花くまゆうさく先生「労働2号」買いました。「ケンカの花道」そのうち見ます。がんばってください。

ライセンスナンバー16

『武道館観客概論』 キャバクラ冥府魔道（30歳）



全日の武道館に、足を運び続けて早九年。どうにも最近の客層は生真面目というか馬鹿というか……。『笑っていいとも！』とか『躍る！さんま御殿！』で大爆笑している奴を見た時の不快感に近いものを感じて仕方がない。

だいたい何だ、あの大森への声援は。確かに大森はルックスもいいし我体も良い。でも試合はどうにもしょっぱい。センスがまったく感じられん！ 決起軍在籍時の田上以下であると俺は確信しているのだが、ブレイク前の田上に飛んだような激しい野次、ブーイングの集中砲火は大森に浴びせられる事はない。なぜだ！ なぜ大森にみんな優しいんだ？ 今時「アックスボンバーー！」はねえだろ！ 専門誌の評価もなぜか高いので、大森の勘違いは益々エスカレートしているぞ絶対。このまま大森を放置していいのか？ そのうち「エスティーエフ！」とか叫びだすぞホントに。

そして垣原。頼むからテーマソング変えてくれ。まあそれはそれとして、イイ年こいた男が「カッキー！」とか言うなよ恥ずかしいから。先日の武道館、対菊地戦でも「カッキー、付き合うなー」なんて声援が飛びかっていたが、穴があったら入りたいぞ俺は。だったら菊地にも、「ツーヨン、ガンバ（大阪）」とでも言ってみろ！

あと木村に対するマイクコール、百田&永源のチョップ合戦への手拍子等々……。予定調和でウンザリだよもう。寸分の悪意も見えないので余計気持ち悪い。かつて全日武道館では「シャー」「オリャー」の悪ふざけコール、どぎつい野次、トイレットペーパーが飛び交った。その頃が正しいとは言わない。俺も「シャーシャーうるせー！」とか叫んでたクチだ。

その甲斐あってか、いわゆる悪質ファンと呼ばれる連中は、最近の武道館では見る影もない。しかし悪質ファンの消滅と同時に、観客の批判精神、ギャグ根性？ まで消えてしまった気がする。そして『週プロ』プレッシャーズのような、「堅くてつまらない」客ばかり増えた。

そんな事だから、「大森エル・カネック化作戦」とか、「鶴田の引退興行だからロン・バスを呼ぶべし！」なんて話して試合中に大爆笑している俺達って、もしかして悪質ファン？ なんて結論に達してしまうのであった！ 九段下駅近くの居酒屋『鳥げん』で。確かに後ろから前から、冷たい視線をちらほら感じたよ。でもそいつらが何を言っているかといえば、

「三沢も大変だよ、小川のフォローしなきゃいけないから」

「ゲーリーはUインターの頃の強さがない」

「カッキー、キック、キック！」

「エースは関節技が出来ないからイマイチなんだよな」……うんぬんかんぬん……

大きなお世話だ、評論家気取りが！ レディゴンでも読んでセンズリこいてろ馬鹿助！

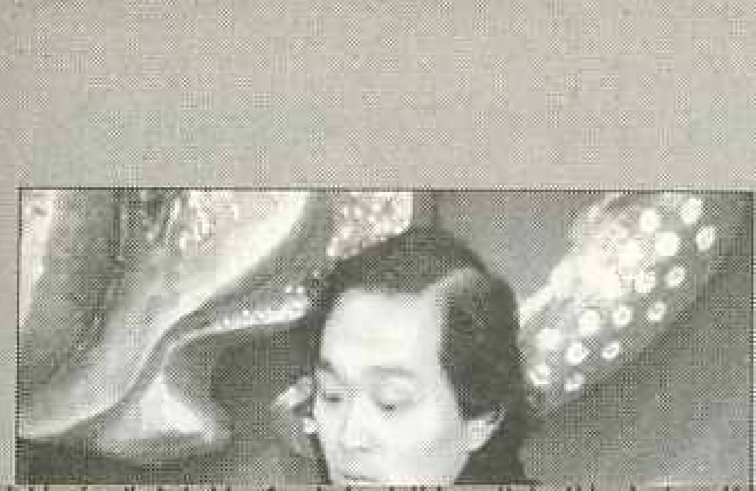
と、こんな事を書き散らしている俺は、プロレス愛が足らないのでしょうか？ よし、キャバクラでエネルギー充填だ～！ ドリャー！ てな勢いで、武道館でシーユーアゲイン！

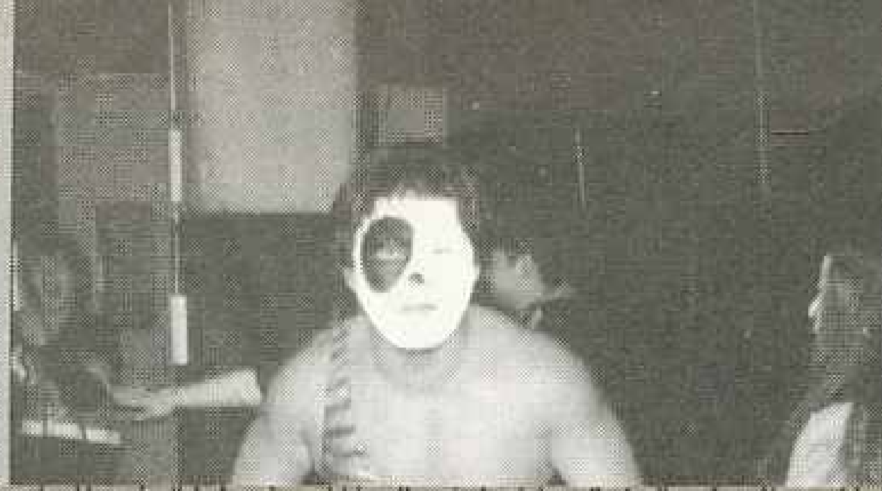
夢の舞台

君もDREAM STAGEにあがってみないか?

今回のプライド・ゼロはいかがだったでしょうか。今回の3選手の中から一番良かったと思う作品と簡単な理由を書いて投票して下さい（応募方法はP144参照）。一番得票を集めた選手、及びに今回の村田クンのようなブレーキの壊れた投稿者はノー問題で引き続き次号も参戦してもらいます。とにかくおもしろきゃなんでもいいんです！ 無闇に熱い投稿、大歓迎です！ 次号の掲載者全員にはイカしたチョロデザイン特製プロレスTシャツ（限定3枚）を差し上げます。参戦希望選手は、400字詰原稿用紙1～5枚程度（内容はマット界についてのことであればなんでもOK!）、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、ついでに顔写真（イラストでも可）を同封の上、

〒151－0051東京都渋谷区千駄ヶ谷3－11－3－702（株）ダブルクロス『紙プロ』編集部「エイプリルフールは盛り上がった?」係まで。ただし、ページの都合上、文章を一部変更、割愛することもありますので悪しからず。●締切は5／15まで。（命の弟チョロ）





その他団体

椎名基樹&せきしろの ザ・検証

[今回のテーマ] 検証モンスター~~ファクトリー~~ファーム

誰が一番強いのか？　そんなことを考えすぎて夜も眠れなくなったり、あるいは人生を棒に振ってしまった読者も多いことだろう。しかしもうご安心あれ。今回の『ザ・検証』では、プロレスや格闘技のことばっかり考えて人生が狂ってしまった読者を一時的に救うべく、最強を決定します。救われた人は、とりあえず職安行くとか高校に再入学するとかして人生を立て直してみましょう。

資料協力／吉田豪

【決勝REPLAY】

全日のモンスターはスエゾー（ピンキー）。一方の多聞はゲル（ピンクジャム）。今回トーナメントにエントリーしたモンスターの中ではどちらも強い部類に入るだろう。初期パラメーターはほぼ同じ。強いて言えば多聞の方が「丈夫さ」が高い。

早速決勝開始。いきなり全日が全日らしい攻撃、「つばはき」で先制。その後お互いが攻撃を仕掛けるがうまく当たらない状態が続く。お互いにけん制し合う中、多聞の「つきさし」が3連発ヒット！　全日の





ぜんにち		タモン
97	ライフ	83
115	ちから	104
176	かしこさ	165
153	命中	156
126	回避	112
84	丈夫さ	118

ルール
1. 対戦は1P、2PともAUTOで行う。
2. モンスターの育成はしない。ナチュラルな強さを競う。
3. あとはプライドがルール



佐竹雅昭
GAN GAN
ご存じ元気ロック。正に元気ロック。



みちのくプロレス
ザ・グレート・サスケvsスペル・デルフィン
名曲セパラドスをニワトリを絞め殺したような美声で熱唱!!



井上貴子
奇跡の扉
L－1のとき、オレの後ろの席で貴子選手が神取の入場の時「かっこいい～!!」と身をよじってました!!　出てきたキャラも夢見る女の子でした。



佐山聡
S・V・S
（サヤマ バーリ・トゥード シューティング）
今回、もっとも一人よがりなプレスリー節がサクレツする酔いどれ盤。出てきたキャラは木の陰からのぞき込むうさぎちゃん。さすが趣味のぞき。



大山倍達
空手バカ一代
さびし気に遠くを見つめるキャラが印象的でした。



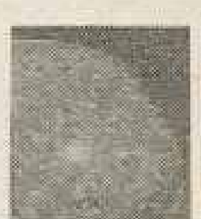
ザ・グレート・ムタ
新日本プロレス
鈴木ヒロミツのようなキャラが本人同様堂々としてました。



全日本女子プロレス
Deep Up!
ポスト付近のぬまっちが痛い。



全日本プロレス
THE BEST OF THEME MUSIC
アルシオン旗揚げ戦のようなセミヌードジャケがプレミアもの。





さたけ		みちのくプロレス
134	ライフ	185
52	ちから	70
97	かしこさ	23
110	命中	97
108	回避	129
92	丈夫さ	83



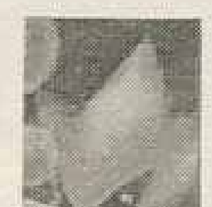


たかこ		さやま
107	ライフ	96
24	ちから	135
141	かしこさ	128
120	命中	143
113	回避	196
30	丈夫さ	45





おおやまますたつ		ムタ
60	ライフ	65
112	ちから	76
129	かしこさ	177
198	命中	143
162	回避	172
59	丈夫さ	104





ぜんじょ		ぜんにち
126	ライフ	97
108	ちから	115
71	かしこさ	176
35	命中	153
56	回避	126
186	丈夫さ	84

『モンスターファーム2』というゲームソフトが発売された。ご存知の方も多いと思うが、音楽CDやROMを読みこませることによってモンスターが誕生し、それを育成し戦わせるゲームである。ゲームくらいしかすることがない私は早速入手し、部屋中に積み上げられたCDを片っ端から入れてみた。そして誕生したモンスターを闘わせて一人遊びにふけっていたのだが、その時ふと思った。格闘家のCDでモンスターを誕生させ、それを闘わせることによって、非常に間接的ではあるが誰のCDが一番面白いのか、ではなく誰が一番強いのか決定できるのではないだろうかと。私は色めきたった。初めて普段の暇つぶしが仕事に結びついたのだから。しかもゲームを使って最強を決めるなんて、ファミコン世代の読者にも大受けであろう。私は飽きてしまう前に早速実行に移ることにし、手持ちの格闘家CDをリストアップし、足りない分は万引きで補いながら、次々とモンスターを誕生させ、湿気の多い、日の当たらない部屋に闘いのリングを用意したのである。

トーナメントの組み合わせは作ったモンスター順に当てはめていったのだが、これが偶然にも予想を上回るほどの夢のカードが実現した。猪木vsくどめ、佐山vs井上貴子という夜のリングでも実現しそうに無いカードに始まり、全日vs全女の対抗戦、大山倍達vsムタの異色対決……。中でも反選手会vs船木であろう。最近ノールールに挑戦し始めているらしい船木であるが、反選手会もある意味ノールール。後藤のふてぶてしさ、小原の気合い、青柳の人柄、息の合った合体プレーなどなど、どの攻撃をとっても「目潰し・噛みつき以外」の〝以外〟に当てはまる。ただ〝以外〟という部分を広く捉えたものばかりではあるが、そんなことはお構いなし。船木がマウントを取ったってすぐさまカットしてしまうのだ。きっと船木も苦戦するだろう……、と、いうかぜひ反選手会に勝ってもらいたい。なぜなら私は反選手会（維震軍）が大好きであるからだ。このたび越中が本隊に戻ったが、あれはスパイ行為で本隊を内部からぶっ潰すための作戦なのだと信じて疑わない私が反選手会を応援しないわけが無い。そんな並ならぬ私情を挟みながら、いよいよトーナメントをスタートした。

RADICAL

ライフを削る。多聞優勢か!? 間髪入れずに再び「つばはき」攻撃。これが3発ともヒットし、多聞瀕死状態に。多聞、起死回生の「ムチ」で攻撃するもかわされ、逆に全日の「しっぽアタック」をくらい、KO負け。全日が優勝を決めた。

ところで多聞のモンスターは気持ち悪い。Tの遺伝子（多聞の遺伝子）を受け継いだのであろうか?







募集＆検証結果

■第二回大会予告

いまだ欠場を続ける橋本。次回の参戦はあるのか!? また大仁田の参戦は、そして冬木の参戦はあるのか!? そして藤波vs鶴田は実現するのか!? すべては私がゲーム本編を進め、モンスターを全種誕生させられるようにするかどうかにかかっています。乞うご期待。

●検証の結果、最強は全日（のCD）と私的には残念な結果に終わりました。おめでとう全日（のCD）！ 残念、反選手会！

というわけで、今回の結果に納得いかないキミ、次回の大会に参加してみないか? キミの好きな選手（＆団体）のCDから作ったモンスターをメモリーカードに入れて、CDのジャケットを同封して（株）ダブルクロスまで送って下さい。ただし、育成は一切しないように。また、モンスターファームのソフトを持っていない人はCDをそのまま送ってくれても結構です。坂井君が責任を持って返却してくれるはずです。





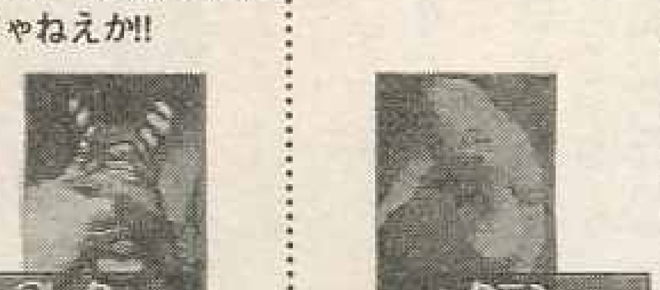
（ディスクレヴュー・椎名基樹）



青西高嗣
AO CORNER
ファス戦と共にアレクサンダー大塚をプチスターに押し上げた名曲。しかしプチスターが引退したカリスマ（猪木）に対戦を迫るのはどう考えてもカン違い!! 一回勝っただけじゃねえか!!



V.A.
（本田多聞率いるTAMONES収録）
HEY HO LET'S GO '97
チャイニーズ・ロックは名曲だなあと、ただ思うだけの内容。本人同様気色悪いキャラがいいね。



アレク		タモン
89	ライフ	88
147	ちから	104
179	かしこさ	165
126	命中	156
151	回避	112
124	丈夫さ	118



反選手会同盟
新日本プロレス7
本隊はブッ潰せなかったが、出てきたキャラはライオン。よかったネ。



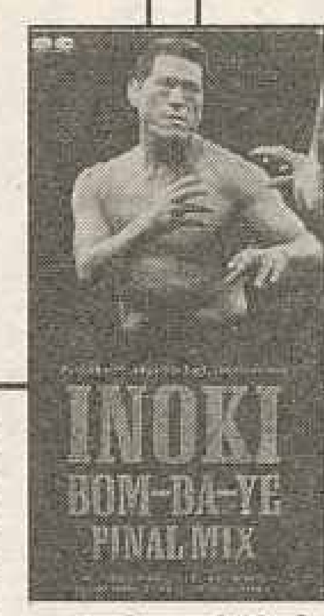
船木誠勝
サイレンサー
布袋、尾崎豊などカッコイイとされそうなイメージを貼り合わせたような歌詞。でも出てきたキャラは暗〜いお花。



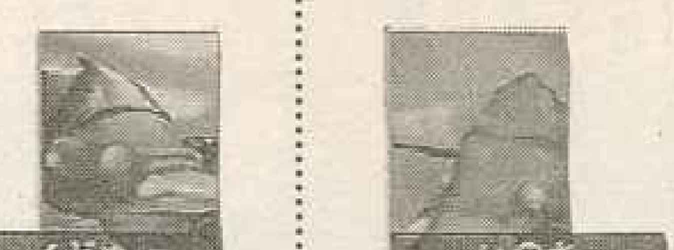
はんせんしゅかい		ふなき
104	ライフ	167
98	ちから	47
138	かしこさ	153
139	命中	110
128	回避	106
55	丈夫さ	84



工藤めぐみ
KEEP ON RUNNING
カラオケ気分のクドメ節サクレツ。



アントニオ猪木
INOKI BOM-BA-YE 〜FINAL MIX〜
どこがクラブミックスなのかわからないが、さすが名曲。「ボンバイエを超えるものを作ってみろって言ってんだ!!」
（橋本）



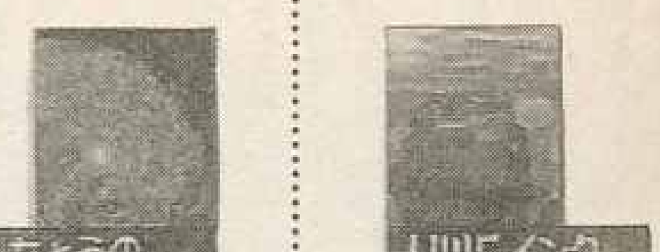
くどめ		いのき
199	ライフ	148
129	ちから	115
96	かしこさ	153
110	命中	123
92	回避	96
99	丈夫さ	105



蝶野正洋
21世紀への序曲
最近の「SLで石炭をくべる人」みたいなコスチューム……真鍋はどう思う? アイム・チョーノ!!（突然）



UWFインター
WINNERS
95・10・28安生vs蝶野が行われたインター代々木大会の後、立ち寄った原宿のロッテリアにUのテーマが大音量で流れていた。



ちょうの		UWFインター
149	ライフ	102
63	ちから	124
82	かしこさ	153
90	命中	166
120	回避	149
102	丈夫さ	150

これがまた1回戦から波乱の連続。猪木、佐山が女子に敗退、ムタの悪のインサイドワークは大山倍達には通じず、ムタのKO負け。AUTO対決であるから私には手出しが出来ない。ただただ画面をもどかしく眺めるだけであったが反選手会の勝利、アレクの敗退には思わずほっと胸をなでおろした。

続いてすぐさま2回戦を行い、順調に進んでいくゲーム画面を眺めていたのだが、なんとも悲しいことが起きてしまった！ 我らが反選手会が多聞に判定ではあるが負けてしまったのである。これで私のやる気は一気に失せてしまった。反選手会が優勝した時にテレビに向かってぶっかけようとしていたお祝い用のシャンパンを私は涙を拭きながら片付けた。反選手会が敗退した今、仕事としてこのトーナメントを進めるしかない。さっきまでの盛り上がり（自分の中だけの）が嘘のようだ。そして以後の対戦はまるで工場の流れ作業的に淡々と消化されていった……。

しかし、このやる気の無さがかえってトーナメントの進行を早め、いつしか闘いは準決勝となっていた。カードは全日vs佐竹、そしてくどめvs多聞。反選手会は仕方ないとして、このカードには好きな選手や思い入れのある団体は一つも無し！ この時ばかりは何度もリセットボタンを押そうと思った。が、そんな不公平は許されない、そんなことをしたら毎回このページを読んでくれている読者を裏切ることになるのではないのだろうか！ なんてことは一時も考えず、ただ最初からやり直すのはさすがに面倒だという理由から、しぶしぶ私は準決勝をスタートした。

まず全日がプロレスの懐の深さを見せてか見せずにか佐竹に勝利。続いて多聞がアマレスのバックボーンを武器にかどうかは知らないが、引退した女子レスラーに容赦ない攻めで勝利を挙げた。これで決勝のカードが決定。なんと全日vs多聞という、個人的には全く興味のない、しかも団体vs所属選手一人という意味不明の対決になってしまった。しかし、決まってしまったものは仕方が無い。私は「もうすぐ仕事も終了だ」と自分に言い聞かせ、眠い目をこすりながら決勝戦をスタートした！（決勝の模様は別記参照）

（せきしろ）





その他団体

ジャイジャイ日記



埼玉プロレスの会場で原始猿人ヴァーゴンに襲われちゃったよ。でも、これってもしかして求愛？ 犬に強姦され、猿人に求愛される巨人。ジャイ子、モテモテじゃん。もしかして武井社長（本誌15号参照）のおかげ？ ありがとう、社長。

4月4日

む～、キャプチャー見たいよぉ！ キャプチャーにすっかりハートを奪われたジャイ子は勢いで九州上陸（もちろん自費）！ みんなに「ジャイ子は会場行っても取材になんないから無駄」って言われたけど、そんなことないもん。キャプチャーの魅力をバッチリ伝えちゃうよ。ジャイ子、記者っぽい？

ジャイ子がなんでこんなにキャプチャーが見たいのかっていうとね、う～ん、こないだ見たときに面白かったから。あれ、それだけだったっけ？ わかんなくなっちゃったぁ。今日の会場、ベイサイドプレイス博多埠頭は、小洒落た船着場とショッピングモールとホールの複合施設みたいなとこで、このへんではデートスポットになってるみたい。でもジャイ子はひとり……。

しょんぼりしてる場合じゃない、まずは北原光騎選手にご挨拶。「ジャイ子ですぅ～」と名刺を渡すと「え、ジャイ子って男じゃなかったの？」と意外にもジャイ子を知ってる様子。グフフ。ジャイ子、有名人？

試合はバウトレビュー参照で～す。休憩時間のトークコーナーは北原選手とモンゴルマンのおふたり。どうやら北原選手は移動中に寄ったドライブインでモンゴルマンが大人気だったのがお気に召さない様子。チクチクいじめてました。そのあと、全選手参加のサイン会では一番人気のモンゴルマン。みんな同情してんのか？



北原選手に「しゃべりがヘタ」と太鼓判を押されたモンゴルマン。その証拠にしりとりがバツグンに弱いとの情報を入手（情報提供・WAR石井選手）

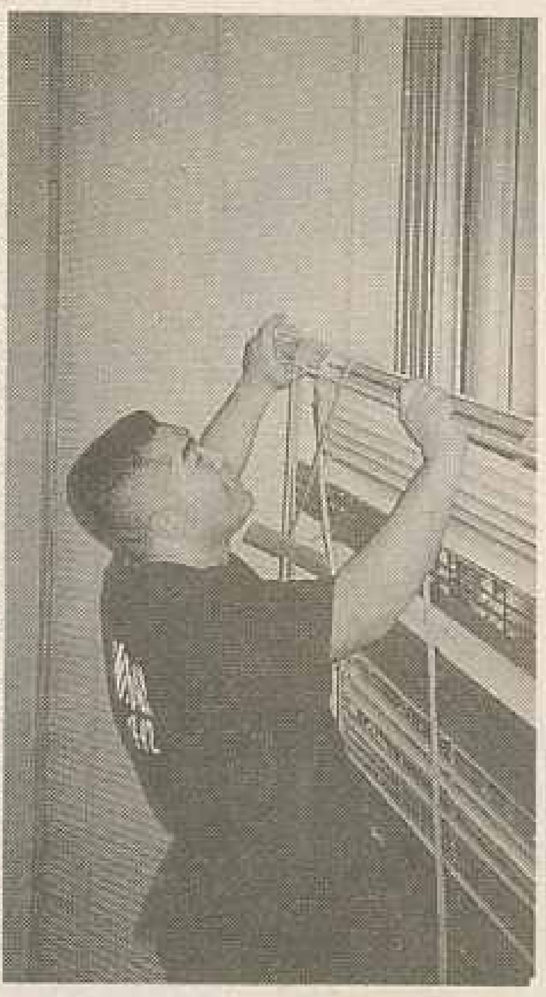
さて、試合も終わり、前日一睡もしてないジャイ子は博多名物のラーメンを諦めてホテルに直行、爆睡してたの。そこへ、酔っぱらった某選手から「みんなでカラオケに行こう」との電話。選手と飲みに行ったなんて編集部にバレたら「おまえは巨大なグルーピーか？」って怒られるけど、言わなきゃいいや。

ここでもすごかったよ、モンゴルマン。試合で割った額からダラダラ血を流しながら「燃えろいい女」を（もちろん♪ナツコのとこはジャイ子に変えて）熱唱、カラオケボックスのお兄さんにキズドライを何度も吹きかけてもらうていたらく。しらふのジャイ子は思いっきり引いちゃいましたぁ。

（出張後記）

博多の写真の現像が上がってビックリ。まともに撮れてない！ おまけに選手と飲みに行ったことがカタブツ君にバレるし。ジャイ子ピンチ！ 嘘つき＆ダメ呼ばわりだよ。でもジャイ子が言ったのは「打ち上げには行ってない」っていうことだけ。ジャイ子が行ったのは打ち上げ後の飲み会だもん。ね、ジャイ子ウソしてないでしょ（エンセン風）。

あれぇ？ キャプチャーのことってあんまり書いてない？ でも、キャプチャーってとってもキャプキャプ。む～、それくらいしか書けないジャイ子は記者失格、追っかけ合格？ ジャイジャイ。



壮絶な試合のあとにもかかわらず、撤収作業に積極的に参加、おまけに会場を破壊する元気いっぱいの石井選手。

6・1旗揚げ決定！ 小坪弘良プチインタビュー

6月1日北沢タウンホールにて旗揚げ戦が決まったつぼプロモーション、所属は小坪弘良選手ただひとり。どうすんの？ ジャイ子、無理矢理捕まえて聞いちゃいました。

ジャイ 小坪さ～ん、ちょっといいですかぁ？

小坪 ちょっと待って。トイレ行かないと誰かみたいに膀胱炎になっちゃうから。

ジャイ む～。

小坪 （1分経過）お待たせ～。

ジャイ 6月1日旗揚げってことですけど、所属選手って小坪さんしかいないんですよねぇ？

小坪 そう、ボクだけ。かつて偉大な格闘王、前田日明がたった一人でリングスを旗揚げしたように歴史は繰り返すと。

ジャイ 世界に広げる気ですか？

小坪 いまね、あちこちから電話が来て、「つぼプロオランダ」とか、「つぼプロナイジェリア」とか。

ジャイ グフフ。なに言ってるんですかぁ？

小坪 全部ホントだよ。オレは嘘言わないよ、九州男児だから。玄界灘の荒潮を浴びて育ったんだよ。

ジャイ 失礼しました。ジャイジャイ。じゃあ、これからオランダとか行かなきゃならないんですね。

小坪 大変なんだよぉ。

ジャイ つぼプロモーションって実際なにするとこなんですかぁ？

小坪 つぼプロはね、なんでもやるんだよ。別名「プロフェッショナル小坪組」だから。なんでもやるプロなんだよ。プロレス、芸能、リング撤収、会場整備、不良債権の回収まで、全部。

ジャイ オランダでもそれやるんですか？

小坪 オランダでも不良債権回収するよ。いまユーロが統合されたからね、向こうも大変みたいで、オレも忙しくって寝てないんだよ。ゆっくりしたいんだけど時代が許してくれないんだよ。

ジャイ なんか石川社長と喋ってるみたい。同じ血が流れてるんですかね？

小坪 世界を統合するのは同じ血なんだね、やっぱり。DNAは一緒なんだよ。

ジャイ ところで旗揚げ戦はどういう内容になるんですか？

小坪 いろいろあるんだよ、プランは。このアイデア貯金箱のオレの頭ん中に。いま考えてるのは、自分のとこではクソ真面目にいこうかな、と。いままでよりも厳しく、ときにはハードコアに（けわしい顔で）。

ジャイ いちいち顔作んないでください（笑）。これからの野望とかってありますか？

小坪 う～ん、楽しく生きていければね。地球上のみんながね。

ジャイ え～、そんな大きいことなんですか？ 「オレの野望」を聞いたんですけど。

小坪 オレは自分の私利私欲のために動いてないからね。世界のために。あそこあるでしょ。なんだっけ？ 天然ガスで儲かってる国。あそこでプロレスやりたいんだよね、儲かりそうでしょ？

ジャイ グフフ。メチャメチャ金のためじゃないですか。身近なことでなんかないんですか？

小坪 まずは「ザマアミロ」って言いたいね。出発したばっかりだけど、出発する前から「大丈夫かよ」って声があるわけですよ。そこはね「このオレが失敗するか、アホ！」って。

ジャイ また石川社長みたいなことを（笑）。「6万人並ばせる」とか言い出すんでしょ。

小坪 オレは並ばせないよ！ 入れるよ、6万人。もったいない！

ジャイ これからは自分で興行やりつつも他団体に出ていくんですか？

小坪 うん、お呼びがかかれば。でもオレ、試合つまんないじゃん。

ジャイ グフフ。そんなことないですよぉ。お呼びがかかったとこから選んで参戦って感じなんですか？

小坪 どこに上がってもプロレスなんだから一緒だと思うんだけどね。でもオレが夢ファクトリーに上がるときみんな止めたんだよ。オレは夢ファクトリーに上がったおかげで全日本にも出たし、チャンピオンベルトも巻いたし、無我にも出れたしね。なにが善でなにが悪かってことですよ。

ジャイ 「なにが善で、なにが悪か」ですかぁ？ さすが、つぼだけにツボを心得てますね。ところで善ってなんですかぁ？

小坪 （無視して）まぁ、オレ流に言わせてもらえばね、二つ道があって、こっちを選んで失敗したヤツはもう一方に行ったとしても失敗してるんだよ。

ジャイ グフフ。ジャイ子それ、ついこないだ石川社長に言われましたよ！

小坪 え～、そうなの？ ダハハハハ！ でもね、最近一人でよく考えるんだけど、一人でこういうこと始めたわけだけど、別に始めなくってもいいわけだよね。

ジャイ そんな、身もフタもない（笑）。

小坪 こんな不況の最中にね、チケットだって売れるかわかんないし。こうやってキャプチャーとか無我とかも試合させてくれてるんだからね。無理しなくてもええんちゃう？ とかふと思ったんだけど。逆に、だから面白いんじゃないかと。



ジャイ そうなんですよぉ！ そう思ってジャイ子は九州まで小坪さんに会いに来たんですよ。

小坪 ガハハハ！ たまたまオレがいただけだろ！ 「あ、ツボおるやん」って。

ジャイ なに言ってんですかぁ！ つぼプロ旗揚げって聞いて、いてもたってもいられなかったんですよぉ！

小坪 ここでなんにもやらないっていうのも面白いよね。さんざんアドバルーン揚げといて。「なんだ、なにもねえんじゃん」って、そういうのもいいっしょ？ そういう、期待を裏切ることもプロレスには必要なんだよ。そう思わない？

ジャイ あえてそうする必要はないじゃないですかぁ。

小坪 そうなんだけどね。まぁ、行けばわかるさ。

ジャイ 興行は定期的に打つんですか？

小坪 9月に福岡でやるのは決まってるんだけど。そうやってさぁ、ニコニコして話聞いてるけどさぁ、ホントは「早く終われよ、トイレ行きたいんだよ。また膀胱炎になっちゃうじゃん」とか思ってんでしょ。

ジャイ む～。そんなことないですよぉ。

小坪 ホント、誰も信用できないよね。なにが善で、なにが悪か、わかんないよね。北原さんじゃないけど、この業界「後ろ向いたらファックユー」だから。

ジャイ ファックですかぁ？ グフフ。

小坪 ボクは後ろむいたらお辞儀したいけどね。

ジャイ ジャイ子も後ろ向いたらファックした～い。あ、間違えた。

小坪 テメエ、セクハラで訴えるぞ！

ジャイ だから、間違えたんですよぉ。ジャイ子もお辞儀しま～す。

つぼプロモーション興行日程
●6月1日北沢タウンホール
●9月19日福岡大会決定

チョロ助がインターネットでジャイ子の名を発見！ ジャイ子「PRIDE.5」の待ち合わせ場所にされてましたぁ。責任重大だ、さらに巨大化して行きま～す。

RADICAL BOUT REVIEW
紙プロ的観戦記

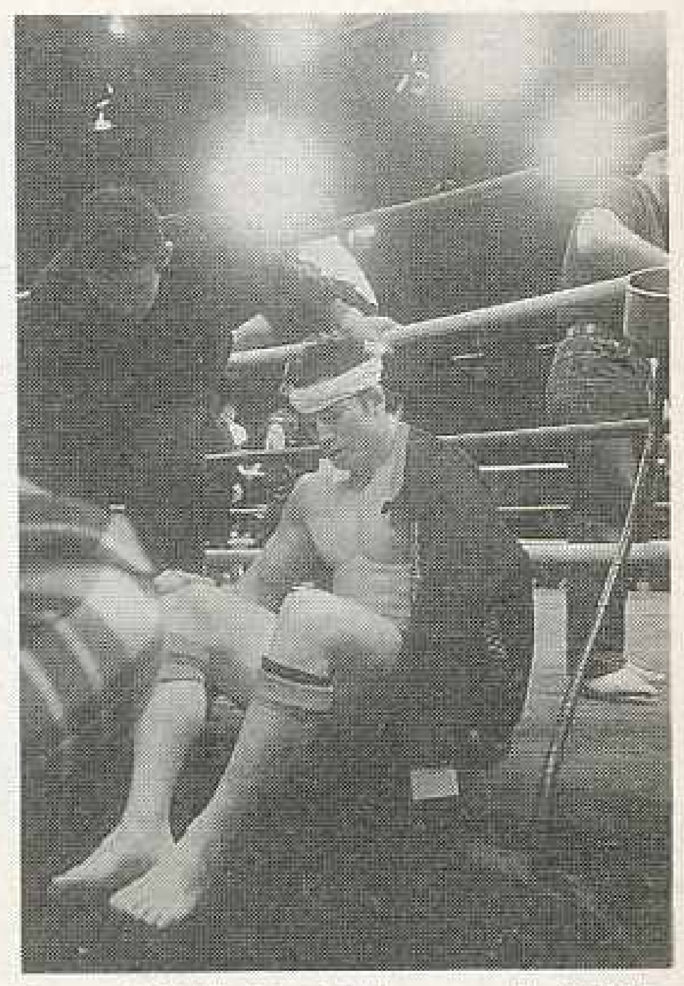


見てみぃこの足っ!!

『格闘空手DREAM 1999 THE WARS 5』

4／8（後楽園ホール）

大道塾



極私的ベストバウト

1位　美濃輪育久vs山崎進

2位　太田和博vs金子裕己

3位　中井祐樹vs藤本勲

この日は良かった。だが10日後の…。ヒントは引き分け続出（シッシー調）。

オレが昔所属し、緑帯までいただいた大道塾という空手の団体が主催したこの日の興行で、パンクラスの美濃輪育久はメインをきっちり締めた。対戦相手は大道塾の昨年のチャンピオン・山崎進。観客は大道塾及び空手ファンが大半で、当然山崎への声援のがはるかに多い。美濃輪にとってはリング内外敵だらけ。

そんな中で美濃輪はエプロンサイドに倒れる山崎を殴りにいくのだから、いい根性してる。反則なんだけど。当然、ブーイングが飛ぶわけだが、美濃輪は決して臆すところはなかった。それだけ、試合に集中していたということだ。

パンクラスにはいままでこういうムキ出しの感情が見えにくい部分があった。それがパンクラス・スタイルなのかもしれないが、感情が見えなければ見てる方も入れ込めない。この日の美濃輪には確実に感情の起伏が試合から立ち昇ってきていた。

最近のパンクラチオン・ルールの闘いによって、パンクラスは通常のパンクラス・ルールの闘いでもアグレッシブになってきている。すぐに目につくところでいえば、グラウンド時での掌底を繰り出すようになってきたこと。これまではルールで許されていても使う選手は少なかったが、パンクラチオン・ルールの試合がイイ意味で刺激になっているのだろう。

さて、この日、美濃輪は自らの頭突きで額を切ってしまった。だが、大量出血をしながらも大木金太郎ばりに頭突きを打ち続けたのだ。他流試合、しかも相手は空手のチャンピオンとは言え、アマチュア。勝って当然。それ以上のなにを見せられるかだ。

こういう試合をしてくれれば、いくらでもプッシュします。それではまた取材申請しますので、よろしく！

（ブチ）

『THE CAPTURE 福岡大会』

4／4（ベイサイドプレイス博多埠頭）

キャプチャー



極私的ベストバウト

1位　石井智宏vsタノムサク鳥羽

2位　北原光騎vs你好

3位　你好vsタノムサク鳥羽

大人げない闘いはハートがないとできません

私事で恐縮ですが、ジャイ子はよく「大人げない」と言われます。すぐ泣く、道に迷う、主食がお菓子、プレイスポットはサンリオショップ、など思い当るフシはたくさん。

ジャイ子と並べて語るのもおこがましいけど、キャプチャーのマットに上る選手も相当大人げない。無闇にムキになるし、すぐキレるし、意地っ張り。本来なら唯一の大人であっていいはずの主宰・北原光騎からして若手相手にすぐキレるんだから他の選手がそうなっていくのも自然なこと、かなぁ？

この日、その大人げなさを一番わかりやすく体現したのが夜興行のセミ、WAR・石井智宏vsジャンクスワット（二瓶組の別ユニット）・タノムサク鳥羽のグローブマッチ。約20キロ重い石井を鳥羽が殴りまくってダウンを奪い、立ち上がった石井はパンチ一発で鳥羽をダウンさせる。そんな場面が何度となく繰り返される……って、アンタたち、何回繰り返せば気が済むのよ！　この意地っ張り！　お互いフラフラでヨレヨレなのに、鳥羽はニヤニヤして立ち上がり、石井は石井で平気な顔して、鳥羽がダウンしてる間、スクワットを始める始末。気が狂ったの？

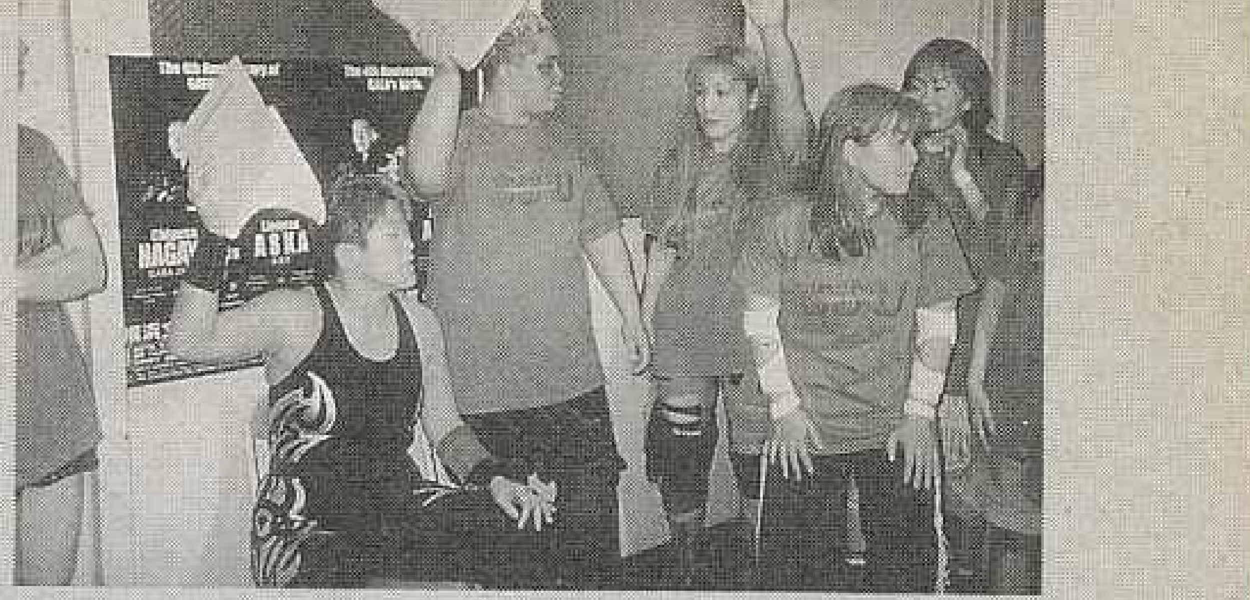
結局、4Rまでろくにガードもせず延々と打ち合い、石井のKO勝ち。一生殴り合ってたらどうしようかと思ったよ。この二人ならやりかねないし。

ビックリするのは、こんなになっても選手が口を揃えて「キャプチャーの試合は楽しい」って言ってること。それも意地？

全試合終了後、フラフラの鳥羽はわざわざ客席に出てきて倒れてました。広い控え室があるのに。そんなに目立ちたいのか？大人げない。

（ジャイ子）

チョロ助がインターネットでジャイ子の名を発見！　ジャイ子「PRIDE.5」の待ち合わせ場所にされてましたぁ。責任重大だ、さらに巨大化して行きま〜す。



『The 4th Anniversary of GAEA's birth』
4/4（横浜文化体育館）
GAEA JAPAN

極私的ベストバウト
1位　長与千種 vsライオネス飛鳥
2位　里村明子、加藤園子 vsアジャ・コング、尾崎魔弓
3位　山田敏代、KAORU vs下田美馬、三田英津子

長与と千種が闘ってチハルの勝ち!!（試合直後のオレの勘違い報告）

三田英津子ファンクラブのタレ幕には「エッちゃんを応援してる時の自分が好き」と書かれている。この日の客の感情をズバリ言うとこれだろう。

解散から約10年目のクラッシュ対決は、かつてのファンを大量に引き戻し、横浜文体は超満員。それにしても目の当たりにする、そのパワーは圧倒的。なにしろ、興味のない新人の試合は、おしゃべりとかしてまったく無視。肩入れするレスラーには試合の出来不出来を超越してともかく応援と、その割り切り方というか、切り捨て方は見事の一言。試合よりもファンに目がいってしまった興行だった。

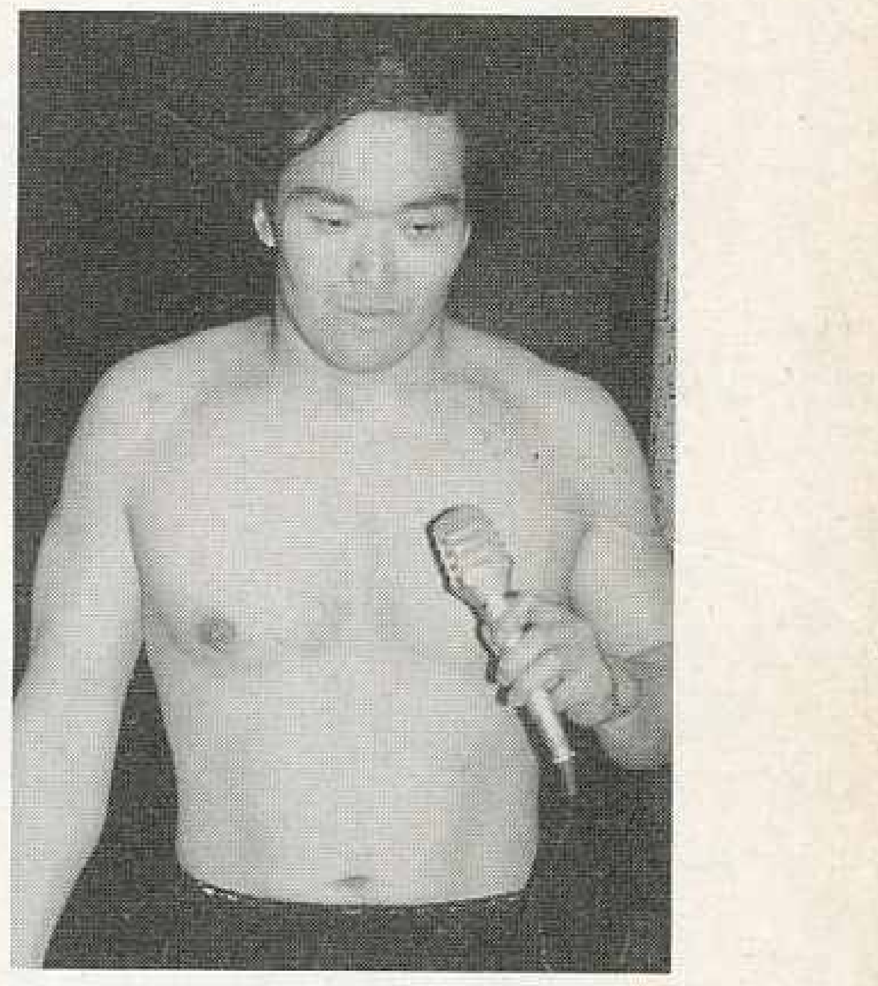
ビューティーペアにしてもそうだが、クラッシュギャルズの人気で女子プロレスが一気に爆発し、引退によって一気にどん底となったのもうなづける。女子プロレス・ファンの女子が異常にアツイのは、応援してるのが実は自分だったりするからだ。

ところで、僕の元女房は昔、女子プロレスの会場に行くのがいやだと言っていた。応援してる女子が嫌いだというのだ。たぶん、女子なら全員持ってる、ある意味あさましい自意識の存在を強烈に意識させられてしまうからだろう。幸か不幸か、僕にもそういうあさましい感情がある。千種や飛鳥を応援する女子たちを見て妙に気持ちがザワザワしたのはそのためだ。

選手もファンも感情をムキ出しにするのが女子プロレス。男子プロレスとは違った奥深さはこの辺にある。好き嫌いは別として、一度は見てほしい。最初は違和感があるが、その違和感こそが魅力だったりするわけだ。「炎の聖書」（クラッシュのデビュー曲）じゃないが、夢の入り口はいつも嵐ってやつ？

（ブチ）

『あの4・4幻の猪木戦から1年……「水車の理論」……』
4/4（大田区民プラザ）
UNW



極私的ベストバウト
1位　ジニアスの一大決心のマイクアピール
2位　セッド・ジニアス vs鴨居長太郎
3位　アイアンマン4試合目・内藤恒仁vsキャノンボールKAZU

悲しき天才 また逢う日まで!?

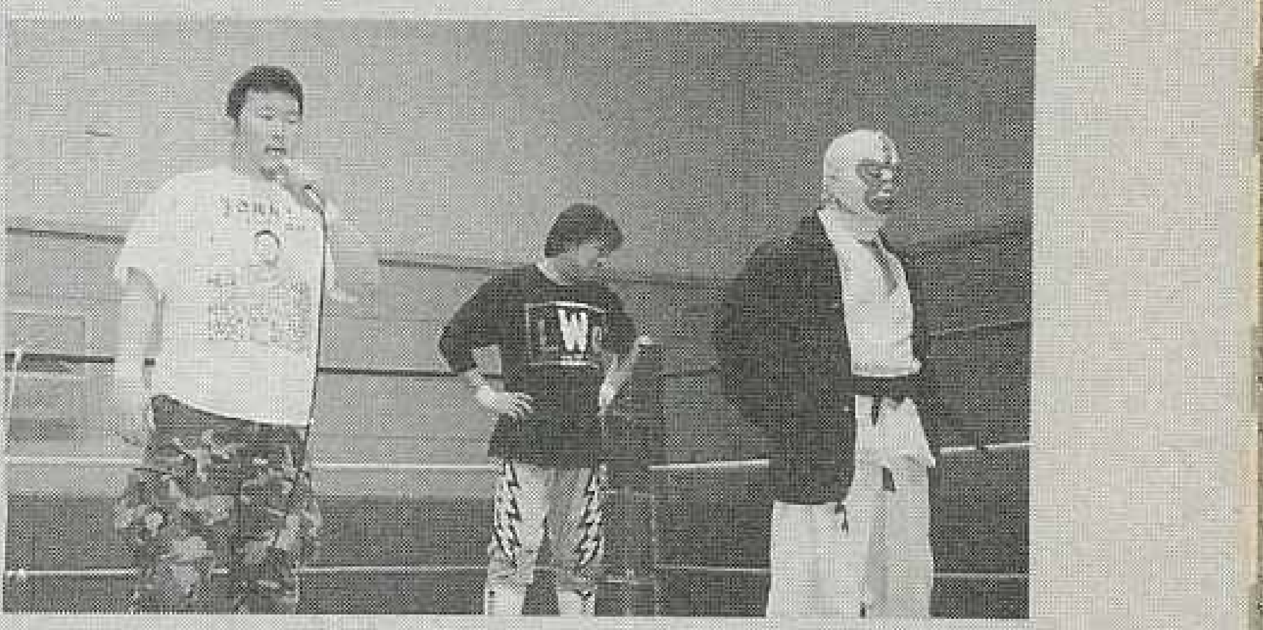
『無い道を行けば　どう成るものか　危ぶむ無かれ　危ぶま無くとも道は無し　踏み出せば　その一足が仇となり　その一足が凶となる　迷わず行けよ　行けば自爆さ』右のタイトル部分に入りきらなかった今大会の正式タイトル名である。参考までに。

ジニアスが幻の猪木戦を行ってから丸一年。この日は、ガイアでのクラッシュ対決から、NEW NOWでリングアナ復帰のプリティ長嶋、ジャイ子はキャプチャーを見に福岡まで飛んどるやん。といった具合に日本各地で興行合戦が繰り広げられていた。特に関東近郊は近場での興行が重なり、客の食い合いが予想された。そんな中、平成のジニアス番を自負する私チョロは「迷わず行けよ　行けば自爆さ」とブツブツ言いながら会場に向かった。

会場に着き体育室に入ると、目ぇつぶって30秒で数えられるほどの観客しかいなかった。無念！　相変わらずの動きのいい内藤恒仁、この日アイアンマンに輝いた幸村剣士郎、大車輪キックを出すなど軽やかな動きのジニアスを始め、一定のレベルは軽々とクリアしているだけに、余計客入りの悪さが気になった。

『UWFスネーク・ピット・ジャパン』設立に伴う、ルー・テーズ&流智美氏の来日。『ナイタイスポーツ』での自殺未遂報道、『BUBUKA』誌上での死亡報道等々。ジニアスの周りにはスキャンダルが渦巻いているのだ。これを利用しない手はない。

「スキャンダルを経営に結びつけられない経営者は失格だ！」そういうことです。この日の興行前、取材で会ったタイガー戸口の説得力十分のセリフをそのままジニアスに送りたい。「プロは客を呼べてナンボ」。アメリカを拠点に活動するならなおさらである。あなたの頭脳なら「やればできるさ」なのだから。（チョロ）



『埼玉プロレスリングカンパニー（SPWC）旗揚げ戦』
3/29（大田区民プラザ）
埼玉プロレスリング

極私的ベストバウト
1位　原始猿人ヴァーゴン vsサバイバル飛田
2位　第一試合のXがIWA・山下義也だったこと
3位　ギルギルガンのJr.のマスク

この際、埼玉で一切やらないっていうのはどうでしょう？

グフフ。見ちゃいましたぁ、埼玉プロレスの旗揚げ戦、大田区民プラザ。「埼玉じゃねぇじゃん！」もう皆さんツッコミ済みかとは思いますが、念のため。

まず、カードを見て驚いた。この日は「総合格闘技ダイハード・トーナメント」というなんだか大袈裟なタイトルのトーナメントがあったんだけど、参加選手はたったの4名。にもかかわらずご丁寧に3位決定戦まであるの。バカバカしいけど、画期的。

おまけに3位決定戦に出るはずだった国際プロモーションのトシ森谷が負傷のため、代わりに同門の佐野直が登場！　これって佐野が勝ったら佐野は3位？　いいの？　佐野が負けたいまとなっては愚問なんだけどさ。お客さんはみんな喜んでたし、よくわかんないけど、たぶんいいんだよね。ちなみに優勝は二瓶組のカモイチョウタロウ（この日はなぜかカタカナ表記）でした。

そしてメインは原始猿人ヴァーゴンvsサバイバル飛田。ジャイ子ね、普通のマスクマンで顔が猿の人が出てくると思ってたの。まさかホンモノの原始猿人（この言葉も初めて聞いた）だとは。わざわざ中国から連れてきたんだって。

そんなヴァーゴンはただ勝手に走りまわってただけでしたぁ。猿人だもんね。ジャイ子も一緒に走ったよ（写真撮影のため）。それにしてもヴァーゴン、何歳ぐらいなんだろう？

後日、みちプロのサスケ社長の怒りを買ったサバイバル飛田。結局みちプロに参戦決定（withヴァーゴン）！　でもね、サスケ社長、勘違いしてるんじゃないかと思うんだけど。だって埼玉プロレスって地元にまったく根付いてないよ。埼玉で試合する予定もまだないみたいだし。

（ジャイ子）

申し訳ございません。
体重はなかなか落ちないのに
原稿を落としてしまいました。
次号は頑張りますのでごカンベンください。(デブ)



『B・Jジェネレーション99』

3/28(八王子マルチパーパスプラザ)
大日本プロレス

極私的ベストバウト

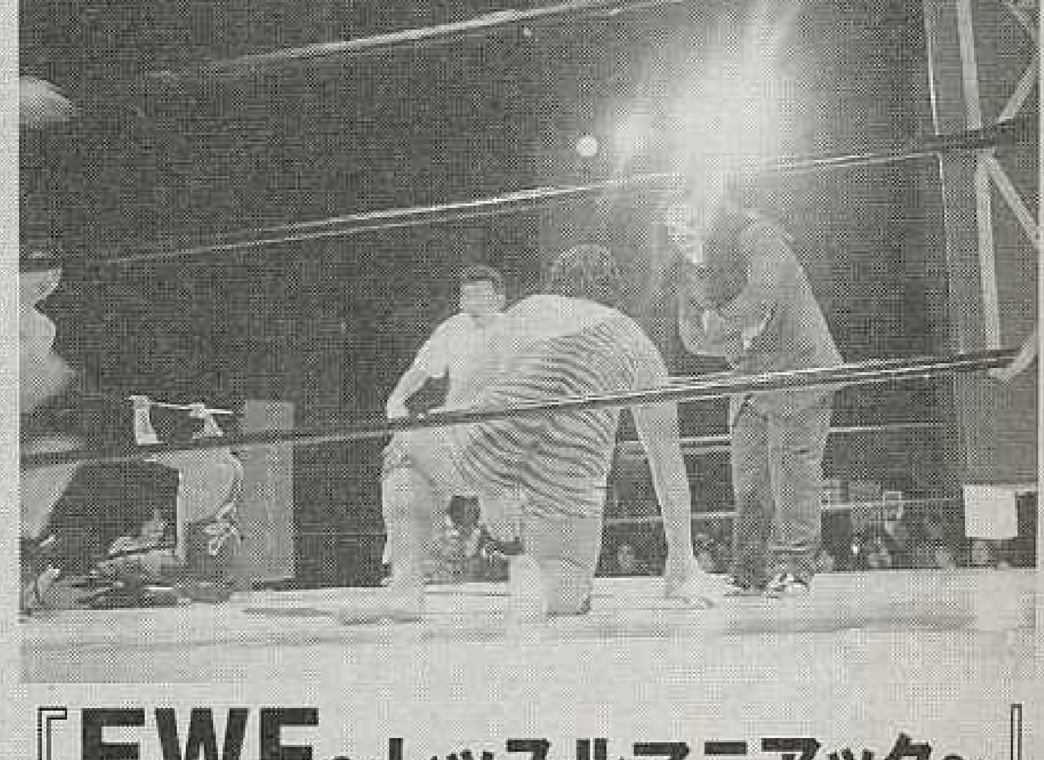
1位　本間朋晃&Men'sテイオー&シャドウWXvsA・J・小林&大黒坊弁慶&A・T・ブッチャー
2位　日高郁人&ドラゴンGK vs茂木正淑&ジ・ウィンガー
3位　なし

『馬鹿モン!! 文句あっか!』なhWoに「文句あり!」

まず驚いたのが午後2時試合開始にも関わらず、開場が1時30分だということだ。さらに驚いたのがチケットのもぎりを小鹿社長がたったひとりで行っていたこと。札(千円札だが)を勘定する極道社長という、シャレにならないぐらいハマり過ぎたシチュエーション。しかし、いくら何でもひとりでは無理がある。試合開始時刻を過ぎても行列が続いていた。しかし、やっぱりもぎりは小鹿社長ひとり。開始時間に試合が始まらないことについてとやかく噛みつくつもりはないし、こうしたのんびりしたところがあるとホッとする。しかし、そうとばかりも言ってられない。まずカードに藤田稔の名前がない。しかも、3月の野外興行のわりにはメチャクチャ寒い。それでも試合は始まらない。まさに小鹿社長の著書『馬鹿モン! 文句あっか!!』なアティチュードが興行全体を支配するhWoな展開だった。

この日の目玉は何と言ってもテリー(Men'sテイオー)とブッチャーの激突だが、この試合には「文句なし!」

「文句がある!」としたら全試合終了後だ。2月の後楽園ホール大会でのポーゴ乱入で試合をブチ壊された藤田が怒りの行方不明になっていることが山川の口から告げられたのだ。「4月の後楽園ホールまでは風邪で欠場と書いてほしいんですけど、別に書いちゃってもいいですよ」とのこと。控室のない会場だから、トイレの前のちょっとしたスペースでの緊急発表だったのだが、そんな場所だからファンに丸聞こえ。みんな驚きの声を上げていた。そんな香気なところは応援したいが、いい選手が多いのに報われないのが残念でしかたがない団体だ。(ノブ)



『EWF~レッスルマニアック~』

3/21(クラブチッタ川崎)
EWF

極私的ベストバウト

1位　ロイヤルランブル(20選手参加)
2位　入江秀忠 vsモンゴルマン
3位　佐野直β&佐野直γ

サスケ社長、ヴァーゴンの次はハワイアンゴリ1号!

全くノーマークだったE・W・F! ノーマークって言っても、ボクは見に行ってるからノーモンダイ! アメプロ&インディー好きのネット仲間から情報が入ってきたんでギリギリセーフ。「レッスルマニアック」ってタイトルに賭けてみよう。

この日の興行はキングダムとネオ・レディースとの昼夜興行という発表から一転、W★ING興行と変わり二転、最終的に落ち着いたのがEWF。オイオイなんだよEWFって。エクストリーム・レスリング・フェデレーション? なんか自信ないから、正解は各自調査。ほとんど告知もされなかったから、会場行くまで不安だったんだけど、迷わず行って大正解。行けばわかるさ。やっぱりメジャー団体の選手より、インディーの選手の方がアメプロには理解がある。現在のWWFを意識したかのような、バーリ・トゥードも織りまぜつつメインに突入!

ハイライトは何といっても20選手参加のロイヤルランブル! これに尽きる。アメプロ&インディーファンで見逃した人は残念でした。アメプロ好きのボクも大満足! スケールうんぬんはこの際オイといて、リング上には、教師、原人、刑事、幻、怨霊、死神、三四郎! アメプロを日本風に解釈したらこうなるんだろう。

本場のランボーよろしく3分ごとにドンドコドンドコ(吉村道明調)入場してくる、ご機嫌なレスラー、怪しいレスラー、胡散臭いレスラー大集結。日本にこれほどのキャラクターが揃っていたなんて! 一足早いドリステの発進! なかでも佐野直βまたは佐野直γは抜群でした。まさに『PRIDE.0』って感じで、入場即退場。最後はホームタウンデシジョンを自ら宣言して優勝した二瓶組長! さすが大人だ!!

(マグナムPTA)



Professional Wrestling S.P.人W.F.

聞き手&撮影／チョロ
Interview & Photographs by Choro

プロレスは愛だ!!

インディーはオレが守る！

神格闘十字軍教祖

矢口壹琅

キミは神格闘十字軍教祖・矢口壹琅を知っているか？　俺は知ってるゼ！　インディーマット界では文字通り神格化されるほどの存在なのである。神を愛し、プロレスを愛し、そしてロッケンロールな男である！　お前らにもその愛を与えてやるゼ！

――矢口さん、今日は「プロレス愛」について語って頂きたいんですが？

矢口　いいですよぉ（笑）。

――矢口さんとプロレスのファーストコンタクトっていつぐらいになるんですか？

矢口　自分が見始めたのは、まだ日プロ（日本プロレス）、国際（プロレス）の時代ですね。でもプロレスも見てたけど、俺らの子供の時はもう格闘技ブームだったんですよ。『柔道一直線』とかね。

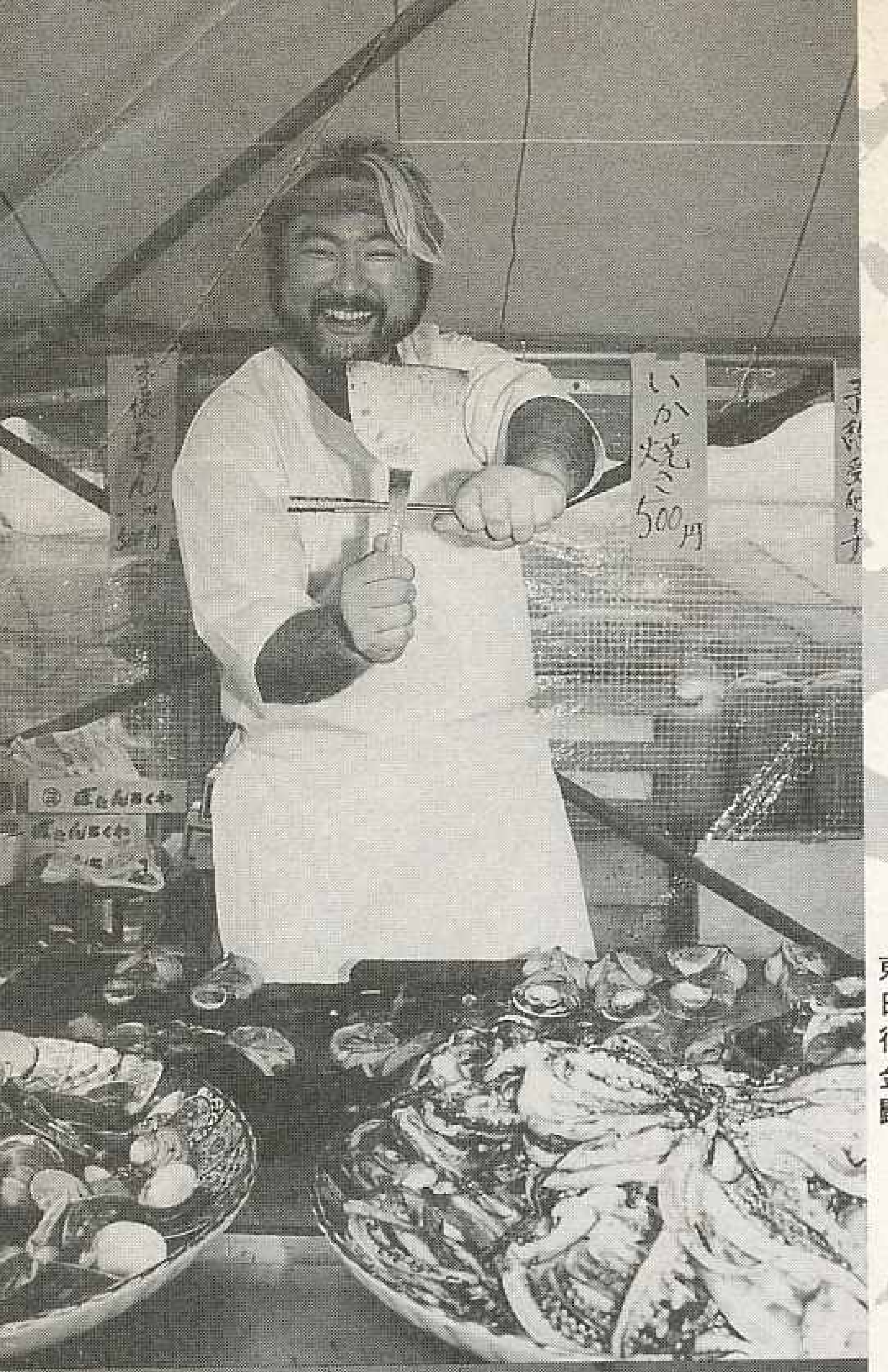
――『空手バカ一代』直撃世代ですか？

矢口　そう。あとは『キックの鬼』とかね。それで中学になって柔道やり始めた時に、猪木さんが異種格闘技戦をやったんですよ。それからは猪木信者になりましたね。中学、高校と一番多感な時期に。

――多感な時期に（笑）。

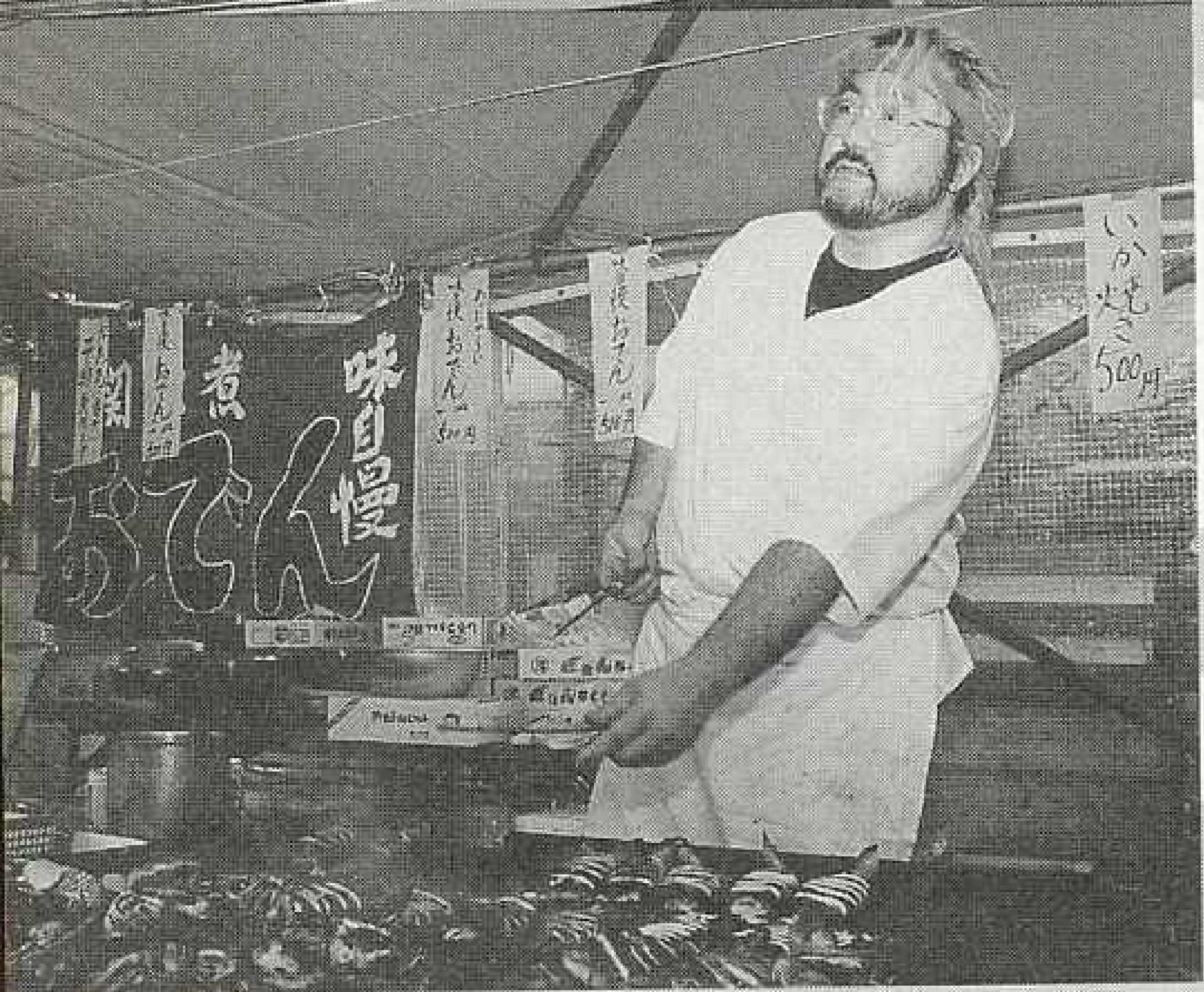
矢口　蔵前（国技館）で暴動騒ぎあったじゃないですか？　ホーガンにノックアウトされて。あん時も自分は最後まで残ってたクチで（苦笑）。

――暴動に参加してましたか（笑）。



東京ではお花見シーズンの真っ盛りだったこの日。取材場所として指定された「上野公園」に行くと、公園内のテキ屋でやたらと体格のいい金髪の男がイカを焼いていた。その男こそ神格闘十字軍教祖・矢口壹琅様であった。





矢口　参加してましたね（笑）。何十人かズ〜ッと帰らなかったんですよ。「頼むから帰ってくれ！」って言われて家の住所とか書いて帰ったんですよ。

――住所を書かされましたか（笑）。

矢口　あとから坂口（征二＝現・新日本プロレス社長）さんから、タオルと詫び状みたいなのが届いてね。

――それはビッグな詫び状ですね（笑）。矢口さんは、どっちかっていうと全日よりは、新日って感じだったんですか？

矢口　全日はやっぱり鶴田さんですよね。鶴田最強説を自分も唱えるクチですから。

――アハハハ！　鶴田最強説を唱えてましたか（笑）。矢口さんは、プロレス修行ならぬ音楽修行で渡米するんですよね？

矢口　そうです。どうしても音楽やりたくて、アルバイトして金貯めて、22の終わりに、自分はアメリカに旅立ったんですよ。

――アメリカに行ってからは音楽三昧だったんですか？

矢口　いや、もともとアメリカンプロレスが大好きだったんで、ちょうどハルク・ホーガンの全盛期の頃で、ＷＷＦとかよく見に行ってましたね。あとはＩＣＷとか……。

――どんな人が出てたんですか？

矢口　ケビン・サリバンとか、オックス・ベーカーとか出てて、そこに、（ブルーザー・）ブロディも出てたんですよ。ホントちっちゃい学校の体育館とかでやってるんですよ。まさに今でいうインディーですよ。そういう会場で、ブロディが「ワーッ！」と出てきて、日本でやってる試合と、おんなじ試合をやるわけですよ。それで俺はこ〜れがやりたいなと思っちゃったんですよね。あの感覚を覚えちゃったんで……。

――俺もやってみたいと思ったわけですね。

矢口　そうですね（笑）。でもその頃は、まだ日本にインディーなんかなかったですからね。だから、アメリカでプロレスやりたいなぁって思ってて。まぁ音楽の勉強で行ったんですけどね（笑）。でも、ズ〜ッと格闘技も趣味でやってたんですよ。

――アメリカでも何か格闘技をやってたんですか？

矢口　柔道場があったんで、そこに行ってサンボの練習したりしてましたね。

――新宿スポーツ会館だけじゃなくアメリカでもサンボ？　矢口さんはアメリカンプロレスも好きで、一方ではサンボであったり柔道であったり格闘技も好きだったと。

矢口　そうそう。格闘技は格闘技で昔っから好きですからね。それで自分で、もしやるんだったらアメリカンプロレスをやりたいっていうのがありましたね。格闘技は純粋に好きだったからやってただけですから。

――アメリカンプロレスをよく知らない人は、どうしても日本のレスリングの方がレベル高いって思い込んじゃってる人が多いですよね。団体のフロントや選手も含めて。ボクもそう思ってたし（笑）。

矢口　そうそう。そうなんですよ。

――いまは衛星放送とかの普及でアメプロにハマってる人って結構いますから、アメプロの凄さを理解している人も増えてきましたよね。やっぱりスケールからなにから日本とはケタ違いですからね。

矢口　そうなんですよ。俺なんかが見てたのはアメリカンプロレス全盛期ですよ。やっぱり向こうは、お客さんと一体になってるわけじゃないですか。エンターテイメントっていうものの見方をアメリカのお客さんはわかってるんですよ。それでやっぱり洗練されてるんですよ、全てに対して。エンターテイメントの部分を理解してますからね。

――猪木信者だったのが、すっかりアメリカンプロレスの魅力にハマっていったと。

矢口　まぁ、猪木さんもアメリカンプロレスなんですよ。

――猪木さんもアメプロ？（笑）。

矢口　っていうか、プロレスはアメリカンプロレスなんですよ。

――プロレス＝アメリカンプロレスですか。

冬木（弘道）さんなんかも、ホントに「プロレスっていうのはアメリカンプロレスのことだ」って言ってますよね。

矢口　そうですよね。だから、大体インディーっていう響きだって、実際プロレスって、昔は、土地、土地に団体があって、ヒーローがいて、それが例えばＮＷＡっていう協定で結ばれてて、ルーテーズみたいなチャンピオンが、土地、土地を回ってベルトの防衛戦をやるワケじゃないですか？　要は、プロレス＝インディーなんですよ。

――プロレス＝インディー？

矢口　だから今の日本ではインディー＝マイナーっていう風に捉えられちゃってるのは、絶対新日本なりの策略だしね。インディーって名前がついてるんだからマイナーじゃな



いんですよ。だから、自分なんか音楽やってるから、インディーズレーベルとかの、ああいう考えがすぐわかっちゃうんですよね。

――ポリシーを持って、メジャーから話がきてもメジャーでは絶対やらないっていうバンドもたくさんありますからね。

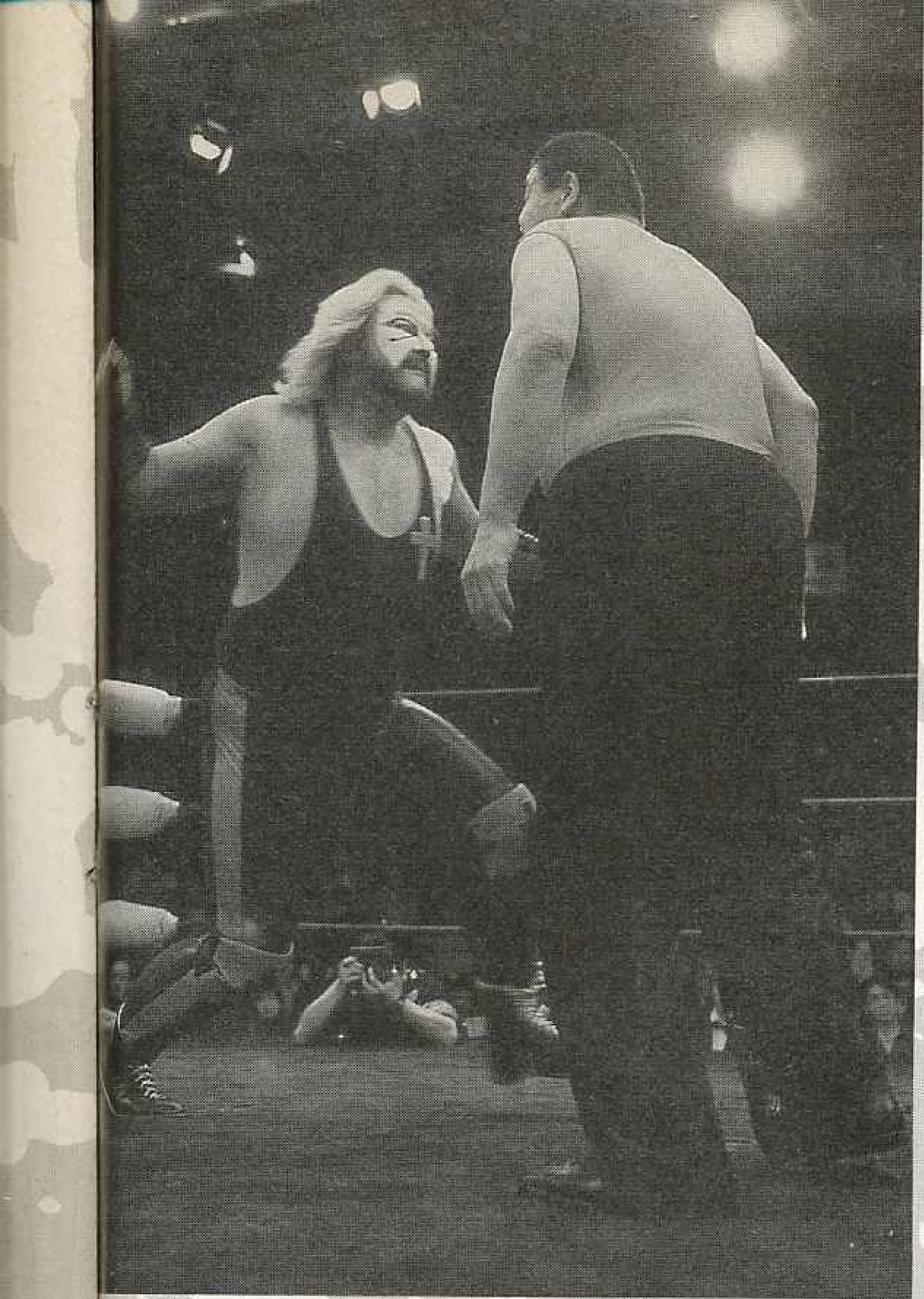
矢口　そうそうそう。自由奔放に、自分がやりたいことができるっていうのもインディーの魅力だし、そういう意味ではインディーは凄いパワーを持ってると思うしね。そういう凄いマグマがグツグツしてるのがインディーじゃないですか？　それがインディーの面白さじゃないですか？

――全くその通りだと思います。メジャーと違ってインディーは規制が少ない分ホントにやりたいことができますからね。音楽界もそうだし、ＡＶ界もそうだし（笑）。

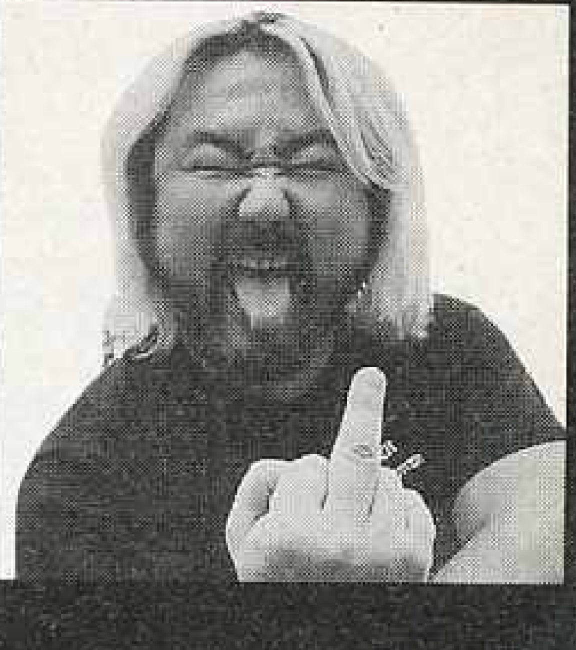
矢口　ハッハッハッ！　でもホントそうなんですよ。

――ただ音楽界ではインディーズっていうのは、やりたければ誰でもできるワケじゃないですか。プロレス界も同じようになったら、ちっとまずいなとは思うんですよ。やっぱりプロレスっていうのは選ばれた者しかできないモノであって欲しいんですよね。

矢口　それはそうですよ。だからその辺は自分なんかも歯痒いところがありますね。やっぱり一緒にされたくないレスラーも中にはいますからね。でも、だんだん日本のファンも目が肥えてきてるし、いろんな情報も入るし、アメリカンプロレスももちろん見てるし、そういう面でわかってきてる部分があって、他じゃ物足りないからインディー見てるってファンもいるし、インディーしか見ないってファンもいますからね。



3月7日、後楽園の大仁田厚興行「邪道参上」■サンボ浅子との“サンボマッチ”に出場した矢口。あえてサンボ色を消した試合をした矢口は、試合後「サンボが見たかったらスポーツ会館行ってくれよ！」とアピール。



ホントに目が肥えてるのが インディーファン なんですよ

――インディーファンってよく言われますけど、インディーしか見ないっていう意味でのインディーファンってそんなに数は多くないですよね？

矢口　多くないです。プロレスとか全部知ってた上で最終的にインディーを見てるっていう、だからホントに目が肥えてるのがインディーファンなんですよ。

――ボクもそう思います。中には技を失敗したのを見て喜んだりする、タチの悪いファンもいますけどね（笑）。

矢口　彼らは、そのバカにしたりなんだりっていうのも含めて、試合に参加してるわけですよね。だから、自分もあえて参加させるんですよ。そこで面白い空間になるわけじゃないですか。それは、僕の見てきたアメリカンプロレスのスタイルだしね。でも俺もやっぱりアメリカで試合したいですよね。現役は、あと2年って一応自分で決めてるんですけど。

――世紀末の使者としては、現役は今世紀までと決めてるんですよね。

矢口　だから今年1年は、ＳＰを盛り上げようと思ってますね。それは俺の意地なんですよ。

――意地でも盛り上げてやると。

矢口　意地なんですよ！　今までもいろいろといい話はあったわけですよ。これは負け惜しみでもなんでもなくて、やっぱりそれをドンドンドン利用して、ステップアップするのがプロレスラーだと思うんですよ。俺のレスラーになった時のキッカケもそうですし、俺は人間的に人を裏切りたくないっていうか、カッコいいこと言うようだけど、そういう部分で生きてるから。他のプロレスラーが考えてることと、俺が考えてることとは、多分違うと思うんですよ。俺はもっと大きな形で、大きなところで、プロレスっていうモノに恩返ししたいと思ってるんで、だから今年は、とにかくＳＰを盛り上げるっていう、盛り上げられなかったら、俺の実力がなかったということだし。来年は現役最後の年だし、自分のやりたいことやろうかなって思ってますからね。

――ＳＰでは、この間4年振りに後楽園大会（3・11）を開催しましたけど、矢口さんは「みんな俺から離れていくのか？　俺はボロカスかもしれねえよ。でもなボロカスでも夢は見るんだよ！　神は俺を見捨てたのか？　お前らが俺を必要としないなら、俺を破壊しろ！　俺を抹殺しろ！　俺を殺せ！　お前が俺を殺すまで、俺はお前を愛してみせるぞ！　いくぞーッ！　イッチ、ニーッ、サンッ、愛ダーッ！」って、すいません、資料を棒読みしちゃいましたけど（笑）。

矢口　ハッハッハッ！

――でまあ、非常に自虐的なマイクアピールをしたわけですけど（笑）。

矢口　アレは谷津嘉章に対してであったり、自分のプライベートな問題の相手であったり……。

――プライベートな叫びも含まれていたと？

矢口　まあその相手に頑張れよっていう意味であったり、いろんな意味が含まれてるんですよ。でもアレは自分の本心だし、またそれがプロレスのリアリティーだと思うし、それを見せるってのがプロレスだと思うし。プロレスは試合がうまくできるかどうかって問題じゃないと思うし、人間のドラマだと思うし。そこに味があって、そういうのを見せられるのがインディーだと思うし。ホントにアレは魂の叫びでしたね。

――やっぱりメジャーでは、人間ドラマって見せにくいものなんですかね。

矢口　だからまあ、メジャーはメジャーでいいんですよ。メジャーのプロレスをやってもらって、俺らインディーは、なんでもできるわけじゃないですか。自分の意見がポンって通ったら、できるわけじゃないですか。それを活かして、プロレスの範疇を超えないで、ある時は超えて、なんか可能性を掴んでいかないと。インディー＝マイナーって言う状態に捉えられちゃったら終わりだと思うし。

――矢口さんは、プロレスって言うのはＫ―1だとかバーリ・トゥードに比べて、もっと大きなもの、意味があるものって言ってますよね。

矢口　例えばＫ―1だって、要はキックボクシングなわけだから、キックボクシングでレスラーが勝てるわけないですし。負ければ負けたで「プロレスが負けた」とか言われるじゃないですか。

――それをそのまま受け取っちゃうファンも



実力が知られていないだけで、ヒクソンに勝てるレスラーはいますから

いますからね。「なんだプロレスは弱いじゃねえか」っていう。

矢口　そうなんですよ。K—1とかバーリ・トゥードは、結局プロレスラーを使わないとアソコまで大きくなれないんですよ。その辺のことを、みんな分からないっていうのが、俺は悔しいところですね。

——バーリ・トゥードと言えば、矢口さんは松永さんのセコンド（UーJAPAN・対ダン・スバーン戦）に付きましたよね。

矢口　あの時だって所詮無理な話ですよ。カードが決まってから試合までたったの一週間ぐらいですよ。一週間か10日そこらで、やれって言ってもね。

——矢口さんがスパーリングパートナーとなって特訓したんですよね？

矢口　時間もなかったし、ガードポジションだけ教えてね。とにかくそれで秒殺だけはされないようにと。だけど（ダン・）スバーンはそれを上回るパワーでね（笑）、それにプロレスラーだけあって見せますからね。まあ、もちろん真剣勝負なんですけど、ホントにパッと極めれば極められるところを、バンバン投げて圧倒しちゃいましたからね。

——そうですよね。ガードポジションごと持ち上げて叩きつけてましたからね。

矢口　いろいろと必殺技とか考えてたんですけどね（笑）。やっぱり実戦では無理でしょうね。でも意地で出たっていうか、あの時ね、有刺鉄線鉢巻きと有刺鉄線バットと、あとサソリも持って行ったんですよ。

——えっ！　サソリも持ってたんですか？

矢口　そうなんですよ（笑）。あと火も吹こうかって言ってたんです。全部隠してあそこの入口まで行って、さすがにサソリはマズイよって言ってね。でも俺は、松永さんの意気込みっていうのは凄い感じてたしね。あの人は、どインディーを守ってる人なんですよ。

——松永さんはインディー界ではある種カリスマ的なところがあるし、矢口さんと同じようにインディーに凄いこだわりを持ってますよね。でもサソリを持っていったっていうのは、インディー魂というかプロレスラーの鏡ですよね（笑）。

矢口　でもやっぱりプロレスはいろんな意味で、バーリー・トゥードとかK—1に対して、勝たなきゃいけないんですよ。実力がみんなに知られてないだけで、ヒクソンに勝てるレスラーはいますからね。プロレスってもっともっと大きなモノだし、もっともっと奥深いモノ、全然面白いモノでしょ。それで、ホント世界的に認められてるものですよね。せっかくそういうプロレスをやってるんだから、プロレスに対して恩返ししないと。

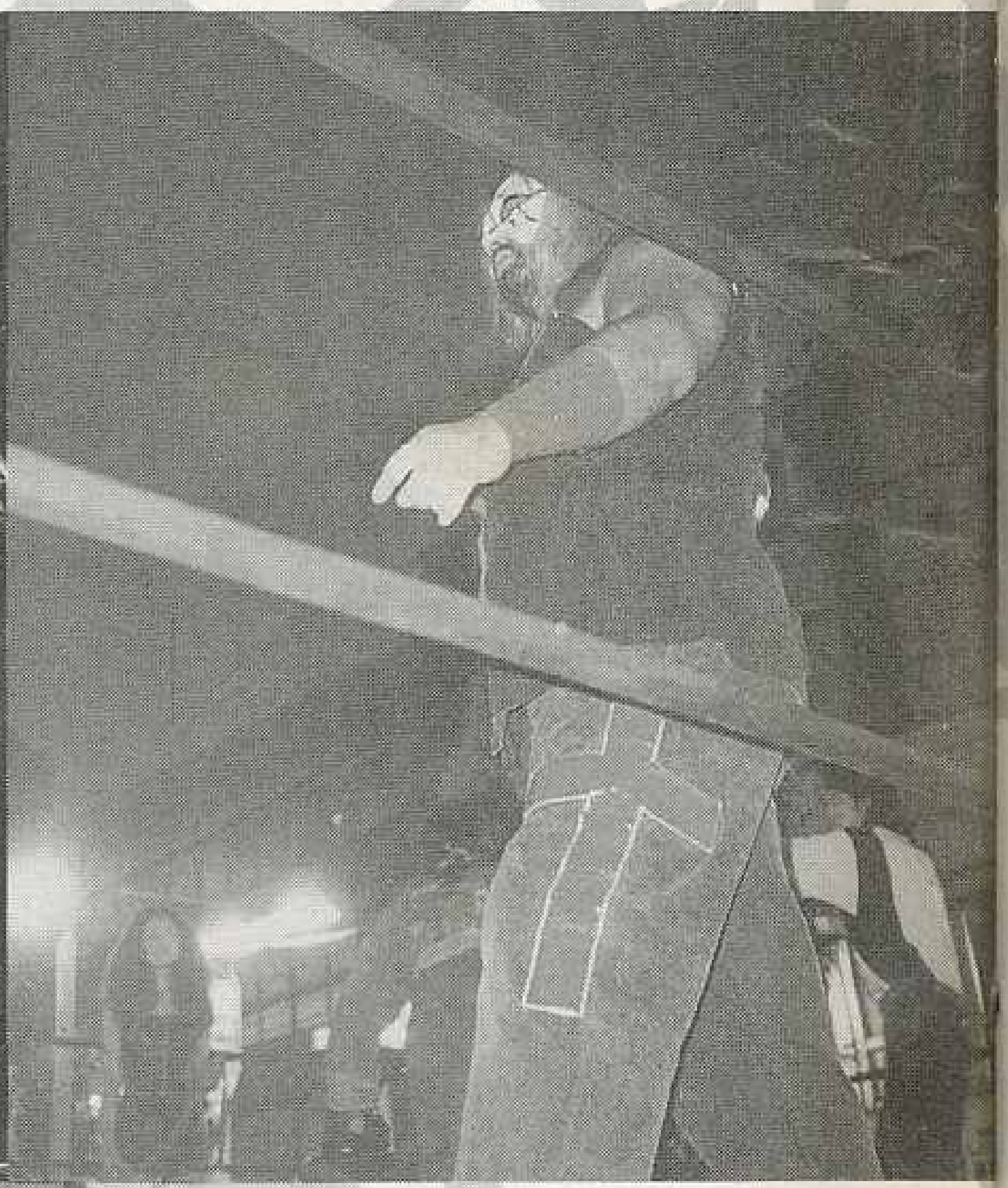
——プロレスに対する恩返しですか？

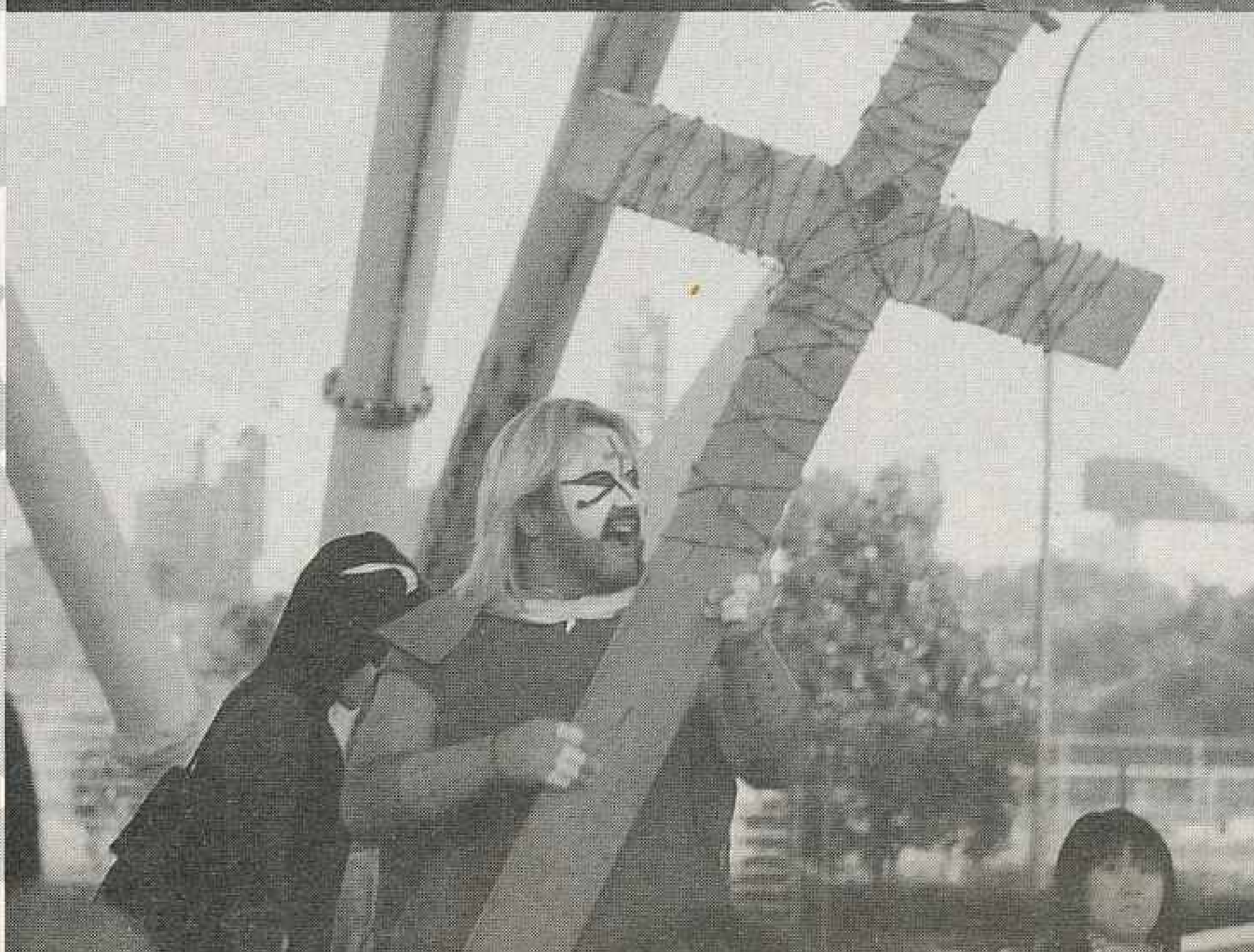
矢口　気持ち的に落ち込んでいる時に、自分を復活させてくれたのはプロレスだったしね。それで自分がプロレスラーになって、今度は自分が恩返しする番だと思うし。そうするとやっぱり何の仕事やっても、例えば音楽やっても、テキ屋でイカ焼いてても（笑）、楽しいし、何をやっても全力投球するっていうか。そこで、いかに美味しいモノを作るか、いかに売るか……。

——イカを食べるか（笑）。

矢口　ハッハッハッ！　でもホントいかにお客さんと会話するかとか、いろんな楽しみ方があるじゃないですか？　プロレスもそうなんですよ。一緒なんですよ。プロレスやって、いい試合して、綺麗な技やって、お客さんが「ワーワー」言って、拍手が「ワ〜！」って。それだけでいいのかって言ったら、俺はそうじゃないと思うし。この世の中で、特に自分はアメリカンプロレスプラス自分の人生観みたいなものを出して行きたいしね。そういう部分を見せるプロレスラーが一人いても、面白いんじゃないかなって思ってるんですよ。プロレスはもうホント、馬場さんじゃないですけども、（シュートサインを作り）これを超越した、（シュートサインを天に向け、Lの形を作る。LOVEのLつまり愛！）これなんですよね。愛っていう言葉は凄いクサくて日本人は誰も言えないと思うから。俺のキャラクターだったらできちゃうかなって。クリスチャンは愛の宗教でもあるしね。ロックミュージシャンだったらLはラブソングなんですよ、ラ



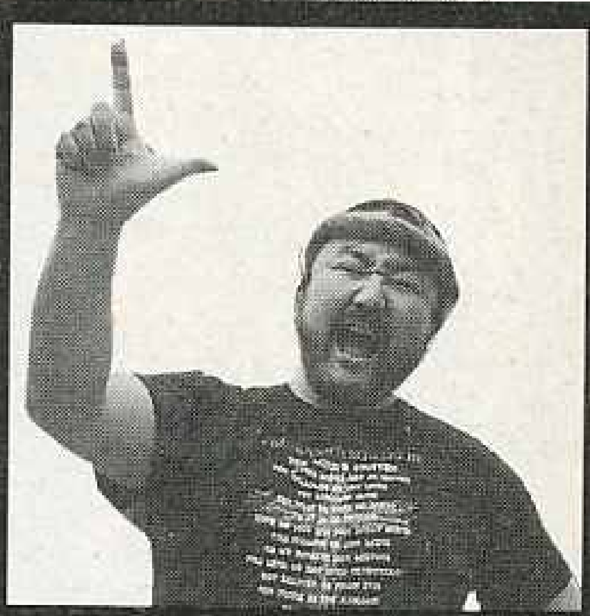




プロレスラー以外にも様々な顔を持つ矢口。自身のバンド・SUPER RABBITのライブ風景（写真・左上）。RABBITといえばウサギちゃん。矢口の後ろに写っているウサギの耳の付いた帽子を被っている女性は熱狂的な矢口信者である（写真・左下）。見えづらいかもしれないが、矢口様ごしに今はなき超大型女子マネージャー、ジャイコル・バスの姿が確認できる（写真・右）。



俺たちプロレスの武器ってなんだと思います?





テキ屋スタッフとともに記念撮影。いろいろとご馳走してもらい、ありがとうございました（チョロ）。

ブ&ピースなんですよね。

——ボクも酔っ払わないと「愛」とか「LOVE」とか言えないですからね（笑）。

矢口　それを自分は平気で言えるキャラクターだからね。やっぱり自分はインディー界を盛り上げたいっていうのがあるし、インディーが盛り上がれば、絶対プロレスが盛り上がる。インディーレーベルでガンガン盛り上ってるから、今のヒップホップブームや、例えば宇多田ヒカルにしても、スピードにしても、バンバンCDの売り上げがあるわけでね。プロレスだってそうだと思うし。

——インディーが盛り上がれば、メジャーだって負けられないですから、相乗効果でプロレス自体も盛り上がりますよね。

矢口　そうでしょ。俺は、音楽とプロレスを通して世界平和って、猪木さんじゃないけど、訴えることはできると思うんですよ、実際。それをやらなければいけないと思うし。世紀末っていう言葉だけで、人々の心の中の不安があると思うんですよ。

——確かに不安はありますね。

矢口　自分は、世紀末の使者っていうキャラクターでやってますから、それはギミックじゃなくて、俺は本心からやってるわけだし、実際クリスチャンだし、この20世紀中に何かをしないと愛するプロレスを21世紀に残せないと思うし、そのためには全力で、自分の頭で考えてやらなきゃいけない。だから20世紀まで、21世紀になったら引退するって言ってるんだけども。その中で人気が出て「ワーッ！」と客が来るようになれば、それでいいんです。でも、プロレスの奥深さっていうのは、やっぱりアメリカンプロレスを知っている人は、わかると思うしね。

——やっぱり、プロレスラーを名乗っていてもプロレスを知らないレスラーって……。

矢口　知らない選手多いですよ。やっぱり、ホントにプロレスっていうものをちゃんと教わらずにレスラーになっちゃってる選手がたくさんいるわけでしょ。知らない選手が新弟子を教えてるわけだから、要はバンバンバンバンと攻めて、お客さんが「ワーッ！」となれば、それでOKとしてるんだったら、俺はそれは違うと思いますよ。

——取りあえず攻めて攻めてっていうレスラーが増えてきてますよね。間を大事にするレスラーは少なくなってますよね。

矢口　ホントそうなんですよ。でも俺は、他団体に行って、「これこれはダメなんだ」とは一言も言いませんけどね。俺は自分で自分のプロレスをやるだけですから。メインじゃなくても第一試合でも、メインを内容で超えればいいことですからね。いかに相手の力を引き出せるか、自分の中ではそれで満足していますから。だから、「今のインディーはダメだダメだ！」って、よくベテランの選手は自分に言うんですよ。「ああいう奴等とは一緒にやりたくないんだ！」「プロレス知らないじゃないか！」って。

——それはもしかしてアポロ（菅原）さんですか？（笑）。

矢口　ハッハッハッ！　どうですかねぇ（笑）。とにかく俺は中間に立たされて上から言われるんですよ、いろいろと（苦笑）。

——気分は中間管理職（笑）。

矢口　下の選手からは、「動けないのに、ギャラばっかり高くて使えないよ！」って話をされますから（苦笑）。でもそこをうまく取り持って、プロレスの面白さをみせられるのはSPの様な気がするんですよ。

——矢口さんの予言は当たるっていいますからね。ホント今年のSPには期待してますよ。矢口さん、最後に例のヤツお願いできませんでしょうか。最近、プライベートな問題で「愛」に飢えてるんですよ。

矢口　『アルマゲドン』って見ました？

——いや、ちっとまだ見てないですね。

矢口　アレは隕石が地球に落ちてくるんですよ。地球が滅亡するかもしれないって時に人間は何をやったか。敵対する国を潰そうと思って作っていた核ミサイルを、核兵器を、天空に向けたんですよ。迫ってくる隕石に向かって、K-1だなんだって言ってるけども、俺たちプロレスの武器っていうのはなんだと思います？

——愛です！

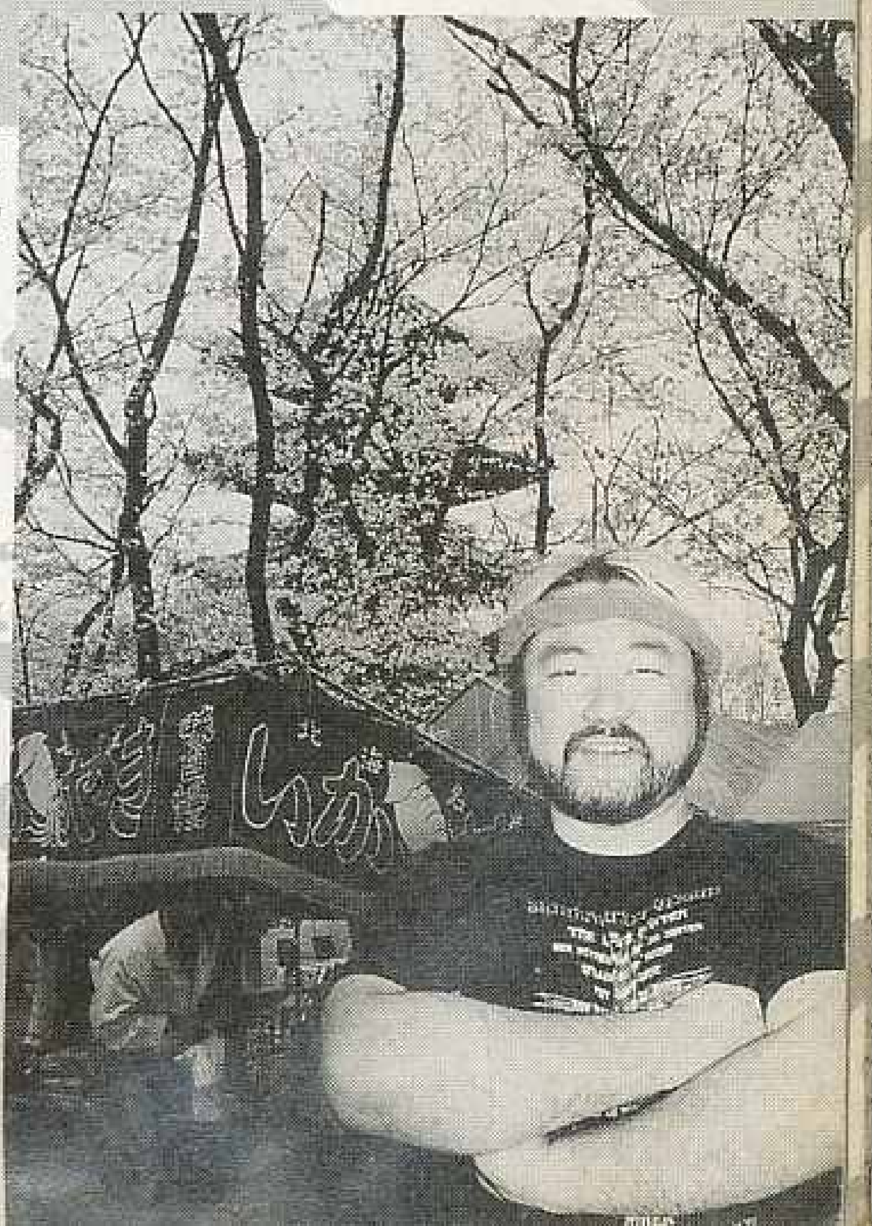
矢口　そうなんですよ。

——行きますかーッ！

矢口　イーチ、ニーッ、サーン、

二人一緒に　愛ダーッ!!

【4月5日、花見客で賑わう上野公園にて収録】



矢口壹琅【本名・矢口一郎】S37・9・20、東京都台東区出身。血液型・A型。高校時代は柔道とともに音楽活動も展開。米・バークレー音楽院卒業後はサンボを学ぶ。オリエンタルプロレスに入団。新格闘プロレスなどを経て、現在はSPWFにて神格闘十字軍の教祖として世界中に愛を伝導している。同時に作曲活動も行い、ゲームソフトのテーマ曲なども手掛ける。



21世紀のRINGSは一体どんな“場”になるのか？


リングス・スタイルか？ バーリ・トゥードか？ 「スポーツ」か？ 「格闘」か？

ブチ抜き23ページ
大特集

新生リングス
Bone & Blood!!

CONTENTS

Uスタイル死守宣言、生涯シバキ合い宣言、UFC出陣宣言——リングスの周辺がザワつき出した。U系の危機、忍び寄るバーリ・トゥードの影。世紀末にリングスはどの方向に転がっていくのか。肝、意地、熱。いまや失われた格闘の根っこが埋もれている四角いジャングルは、いつ息を吹き返すのか？　いま目を離すと後悔するぞ



前田日明

一回、真っ白にしなきゃいけないんだよ、真っ白に

聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／森鷹博
photographs by "Takahiro "Yakupon" Mori

――いや、あらためて長い間の現役生活、お疲れさまでした。でも、組織の長として、これからも先頭走っていかなきゃなりませんね。

前田　でも俺はホントはね、先頭切って走るより二番目くらいで先頭に立ってるヤツの肩に隠れてさ、たまに先頭のヤツの頭を叩きながら「コラ、早く行かんかい！」とかやるのが好きなんだよね。

――ガハハハ！　タチ悪いな。後ろからド突いて急がせる。

前田　ほんでな、バカなのが向かってくると盾にしてね（笑）。

――それ、一番ラクじゃないですか（笑）。

前田　そう、一番ラク。そういうのがホントはいいんだよ（笑）。

――誰だってそうですよ（笑）。それに前田さんの盾になれる人なんてそうそういないし（笑）。ところで前田さんの引退試合のとき（2・21）に田村（潔司）選手が「Uスタイル、リングスタイルはボクが守って行きます」とアピールしましたけど、その発言に関しては率直なところどう思ってますか？

前田　どうなんかなぁ？　いや、凄く嬉しいんだけどね。嬉しいんだけど、いまの状況っていうのを考えたら、いま各団体がアルティメットに対してどういうふうに答えを出すかっていうのを迫られてるじゃない。

――バーリ・トゥードですね。

前田　そう。その部分に対して、もう見過ごせないような状況になってきてるからね。それに対して「そういうのには参加したくない」っていう意味だったらどうなんかな？　と。まぁ、それは俺の深読みなんだと思うけどね。

――田村選手は、「参加したくない」という意味だけでは言ってないですよね。

前田　だからね、みんな簡単に「プロレスのプライドを守る」だとかなんだとか言うんだけど、本当に「守る」っていうのは、難しいし、もっとシビアなもんなんだよ。必ずなにかと引き換えなんだよね。なにと引き換えかって言ったら、プライドとは違う名誉の部分。人には理解されない、賞賛されない部分。頭で考えて「守る」って言って、みんなに賞賛されても、そういうのは誰でもわかるし、誰かがやるもんなんだよ。誰が見ても危機で、みんなが「俺がなんとかする」って言える状況は本当の危機でもなんでもない。それどころか飛躍のチャンスだよ。逆に、誰も立ち上がりにくい状況での危機っていうのが一番ヤバイ危機でしょ？

――はっはー、誰も立ち上がりにくいときが一番ヤバイ。

前田　でしょ？　本当の危機っていうのは、一歩引いてみて初めてわかるような危機。でも、中の人間は全然気付いてなかったりとか、「恥かくのヤダからやりたくないな」とか、そういう状況のことなんだよね。

――いま話に出たバーリ・トゥードですが、ズバリ言ってどう思ってるんですか？

前田　バーリ・トゥードっていうのはね、ハッキリ言ってね、ひとりよがりなんだよね。

――ひとりよがり！　それは言い得て妙ですね。

前田　一個の法則があって、例えばオクタゴンでやるんだったら、フェンスを背にしちゃダメだとか、下になったらこう、上になったらこうって、ある程度「枠」の決まったようなとこがあるんだよ。

――「なんでもあり」といえども。

前田　オールフリーだと、かえってそうなっちゃうんだよね。逆に「枠」ができてきちゃう。なんでルールを作るかっていうと、「闘いやすくする」ために均一化してきたわけでしょ。試合する場所の、ある部分で優劣があっちゃならないっていうんでロープに触れたらブレイクだとかさ。

――それなりの理由づけがあったわけですよね。

前田　例えばコーナーで詰まっちゃうと攻められてるほうは出れなくなる。一方的になる。だから一方的にならないように、場所とか全部取っ払って、試合に出る人間の持ってる技術だとかパフォーマンス……「能力」という意味でのパフォーマンスね。それが出やすいように設定していくわけでしょ。



――大仁田厚みたいなパフォーマンスじゃないわけですね（笑）。

前田　あんなん、猿回しとか、チンドン屋見習いみたいな感じやんけ！

――ガハハハ！　チンドン屋見習い。現役を退いても、斬れ味たっぷりなボキャブラリーですね（笑）。

前田　チンドン屋さんにも素晴らしい人はいっぱいいるけど、大仁田は、「（大仁田厚の口調で）いまごろ長州は血のしたたるビーフステーキを食ってんだろうが、でも俺はハンバーガーが好きなんじゃ～」とか言ってハンバーガー食ってるだけでしょ。「なに言ってんだ、このアホ！」と思ってたら、車が写ってて、乗ってるのはベンツのゲレンデワーゲンやんけ。アホか、お前！　ベンツでハンバーガー食ったらオシャレやんけ！　アホのオッサンみたいなこと言ってて生活できるんだから、お前が一番極楽トンボやんけ、このボケ！

――極楽トンボ。さ、気を取り直して話を戻しましょう（笑）。バーリ・トゥードが2月に2試合（金原弘光vsヒカルド・モラエス、坂田亘vsショーン・アルバレス）、3月に1試合（イリューヒン・ミーシャvsランディ・クートゥアー）ありましたね。これをどう評価しますか。

前田　技術的な内容は別としてね、バーリ・トゥードでもなんでも、「またあれをお金払って見に来たい？」「ハァーイ、また見たいでーす」「じゃあ、それでいきましょう」ってなったらOK。簡単な話ですよ。何人の人に支持されるんか。支持されるってどういう意味かって言うと、お金を払って見にきてもらえるのかっていうことでしょ。そこを考えなきゃいけないんだよ。

――「プロ」として、ということですよね。

前田　そうそう。そういった部分で「さあ、ロープに飛ばしました～。そこでドロップキ～ック」とか、『底抜け脱線ゲーム』みたいに有刺鉄線飛び込んで、お客さんが来てくれるんだったらいいよ。俺らはそうじゃなくて、技術とか試合内容を評価してもらうためにやってるわけでしょ。そうしたら、ルールを触るしかないんだよね。だから、いままでの経験から言うと膠着したらダメ。止まったらダメなの。

――バーリ・トゥードで膠着がズッと続くと、ファンだけじゃなくて、勉強のために行ったはずの選手まで寝てますよ（笑）。いまは、UFCでもすぐにブレイクかけるし。

前田　だから、一番最初にUWFでエスケープをなんで作ったかっていうと、当時は従来のプロレスからの脱皮というテーマがあったでしょ。当時のプロレスの試合っていうのはだいたい12分から、長いので30分。15分前後っていうのが平均で、UWFのよ

試行錯誤があったからU系はある「骨」を残したいんだよ、「骨」を！

うなルールでやってしまったら短くならざるを得ない。それをどうやって伸ばすか。イベントとしての価値観をプロレス以上のものにして、かつ、なにを見せるかってなったときにできたルールであって、そのときはそれがベストだからやっただけの話なんだよ。でも、考えなきゃいけないのは、バーリ・トゥードだろうがなんだろうが、現実とちゃんと接点を持ってないと誰も飯食えませんよ、と。一人でコツコツ道場かなんかやって、練習はそこでだけやって、年に1回、UFCだかバーリ・トゥードだかに出るって言っても、実績のないヤツは誰も呼んでくれないからね。売り込めば出してくれると思ったら大間違いだよ。でしょ？　そういうヤツがルールに対してね、どうのこうのって言うのは卑怯なんだよ！

——卑怯！　なにを指して卑怯なんですか？

前田　「ロープエスケープがあったらエンターテインメント」とかね。

——え、それはヤマケン（山本喧一）の発言ってことですか？（前号参照）

前田　ヤマケンとか、誰がっていうんじゃなくて、そういう考えをすること自体が卑怯だってこと。そういうのは「時間というカンニングペーパー」を見ながらしゃべってるだけの話なんだよ。

——「時間というカンニングペーパー」！

前田　時間なんかカンニングペーパーじゃない。でしょ？　タイムマシーンがあったらカンニングペーパーだと思わへん？　例えば、タイムマシンで10年後を見て「大仁田消えておれへんやないか」って確認して、また10年前に戻って「大仁田、あと10年経ったらお前なんか消えてしまうからな」って言ったら、それで終わりやろ。

——なるほど。「時間というカンニングペーパー」。実にいい言葉ですね。

前田　だからね、カンニングペーパーがないとこで、どうするかって話でしょ。それを、いまやってる連中は、過去いろんな人間の横で考えて、作り上げて、対応してさ。いろんな問題にぶつかって、悩んで、そうやって作ったものに乗って、「この土台はおかしいやんけ」って言ってるわけでしょ。

——現状の土台が最初からあったわけじゃないですからね。



前田　ロープエスケープにしたって、あれ一つで試行錯誤したしね。あのころ藤原（喜明）さんに「こんなことやってられるか、アホらしい！」とか言われて、なだめすかしてレガース一つ履かせるのに「藤原さ～ん」「師匠！」とかいろいろおだててさ。ムズがる子をあやすみたいにしてね。そんなの誰もわかんないじゃない。その試行錯誤があったからU系ってできたわけでしょ。そんなん、問題あることくらいは誰でもわかるよ。でも、解決するために「こうしたほうがいい」っていうのがなければ無責任なんだよ。「じゃあどうするか」って考えると、UFCとかアルティメットっていってもダメなんだよ。なんでかって言うと、どういう選手を連れてきても動員に結びつかない。KRS（現ドリーム・ステージ・エンターテインメント）見てみぃ。ヒクソンと高田がやっても満員になんないじゃない。でも高田以外だったら、ハッキリ言ってあの半分も入んないよ。

——それは事実でしょうね。

前田　じゃあ、どうするか？　俺らがやりたいのは打ち上げ花火じゃなく、残っていくもんなんだよね。そうでしょ。骨と血ですよ。骨を残したいの、骨を。



前田日明なき後（byＴＫ）のリングスを引っ張っていく田村潔司と山本宜久。この２人は格闘技観は水と油ほど違うかもしれないが、意外と根っこの部分では共通の血が流れているような気もする。バラバラの価値観がせめぎ合う、バイタリティあふれる“場”

——バーリ・トゥード系の選手は「一本取ったら勝ち」、つまり「一本勝ち」というルールを支持してますよね。前田さん自身もカレリン戦のときに「負け惜しみを言わせてもらうと、最初にエスケープを取ったのは俺やで」って言ってましたし。

前田　だから「負け惜しみだ」って言ったやんけ！

——逆に、高阪（剛）選手のように、「バーリ・トゥード熱がひと通り終わったら、ウチらのスタイルが再び浮かび上がってくるはず」っていう意見もあるわけです。

前田　でもね、ウチらの本体を強くするためにも「一本勝ち」っていう部分のシビアなものを経験する必要があると思うよ。明治の幕末のころに日本刀の刀鍛冶の職がなくなったんだよね。刀鍛冶の一部が大工の使う金槌だとか、カンナの刃だとか、ノコギリだとかの道具鍛冶に転職したんだよ。その中に名人のオッサンがいて、その人の作ったカンナで、うまい大工の人がカンナで削ったら、カンナ屑の厚さが0．1ミクロンだとか0．2ミクロンの、薄～い屑になったんだよ。

——0．1ミクロン？？？……よくわかりませんけど、とにかく薄いんですね（笑）。

前田　そういう技術も入るし、道具の手入れだとか釘の打ち方、切るにしてもどういうふうに切っていくか、どういうふうに木を接合したら強度が出て、なおかつ形も綺麗で保ちもいいか。それプラス材料費をできるだけ押さえてくれって施工主に頼まれる。こういう地盤の上にはこういう基礎を作らなきゃいけないとか、いろんなことを要求される。ホントは、そういう部分にこだわって全部経験させちゃうことなんだよね。だから、若いうちにいろんなこと経験してほしいんで、ちょっと嫌がるヤツもいるかもわかんないけど、ケツ叩いて経験させるしかないなっていうのはあるんだけどね。

——リングス旗揚げ当初は限定版でルール改正とかやってましたからね。

前田　いろんなものを取り込むためにはしょうがないんだよね。だから基本的にね、相撲だとか野球だとか、あのへんぐらいまでみんなの知識が肥えて、底辺が広がったら別になにも付けなくていいよ。素足で殴り合って蹴り合ったらいいじゃない。投げて、

極めて、グラウンドでパンチしたいんならパンチしてもいいよ、顔面でもなんでも。それをやるためには、技術的な部分で膠着するということに観客の理解が得られるかっていう問題がある。選手のダメージっていう問題がある。そのダメージという部分の上に選手層の問題がある。選手層の問題の上に経営の基盤として、最低でもひと月に一回興行を打たなきゃいけない。収入のある基盤がないと最終的に動けなくなっちゃうからね。それをどうするか。微妙な危ういバランスを保ってやってるのが俺たちマッチメーカーでしょ。だから、意見してくれるのはいいんだけど、そういうことを全然無視したような意見だったら、ちょっとダメだよね。「おかしいじゃないですか」って批判するだけやったら、そんなもんイジケた寂しいオカマの会話だよ。おぼっちゃま君だよ。

――ヤマケンは「U・イズ・デッド」とか「月1回の試合じゃ強くなれない」とか刺激的なことを言ってますよね。僕はヤマケンみたいな意見があってもいいとは思うんですけど、どうですか。

前田　ヤマケンは「21の原点」だね。21歳の到達点！　要するに俺の側から言わせてもらうと、やることに対して十分な資金があるかって言ったら、ハッキリ言ってそれさえも自分たちの興行の中で生み出していかなきゃいけない状況なんだよ。ネットワークっていってもまだ構築の最中。オランダ、ロシア、イギリス、オーストラリアって順調に回ってきたけど、まだ日本みたいに年間に10試合とかいう感じにはなってないしさ、アマチュアもできてない。その中で、だからルールはこうなるんだよ、毎月やらなきゃいけないよ、資金が足りないからこういうこと続けなきゃならないよ、だからギャラはこうなるんだよっていう話をすると、みんな黙るんだよね。



前田日明

――黙りますか（笑）。「それはボクたちとは関係ない」って感じなんですか？

前田　関係ないっていうより、「それを言っちゃおしまいじゃないですか」って顔をするんだよ。

――「そんな夢のない話をしないでくれよ」みたいな。

前田　ジャンケンでいきなりグーチョキパーいっぺんに出されたときみたいに「それは禁じ手ですよ」みたいな顔してね。でも、それが現実じゃない。そこからどうするかって話でしょ。田村はジムやりだして、そういう話もだいぶわかるようになってきたけどね。でもさっきも言ったように「守る」っていうのは凄く大変なことなんですよ。まわりに対して真っ正面に立ってムキになって「守ろう」とすると相当大変だよ。格好悪いとこ見せなきゃいけないし、やりたくないこともやらなきゃいけないし。田村はどこまで考えて言ってくれたのかわかんないけどね。そういうことを全部考えてくれてたら嬉しいな、ウッフン。女だったら●マ●コさせちゃうみたいな感じやね（笑）。

――ジャパン勢は、総じてバーリ・トゥードルールのほうがいいっていうわけではないんですよね？

前田　いや、みんなはリングスルールでしょ？　オランダなんかはキックボクシングを経験して、「グラウンドもやりたい、強くなりたい」っていうヤツが多いから、必然的にグラウンドに対してエスケープなしの一本勝負。わかりやすいよね。オランダは他流試合をするっていうとまずキックの選手なんだよね。そういうヤツらを相手にするためのルール改正っていうのは、「自分が取ったのに、なんでブレイクしなきゃいけないんだ？」ってなってくるよね。ヤツらなんてグローブ付けて顔面ムチャクチャにやってるじゃん。いまのところ実験的にやってるみたいだけどね。

――U系というのはそもそも実験の場ですからね。だから、ベーシックなリングスルールがよりいいものへ変化していく苦しみは仕方ないですよね。

前田　でも、ハッキリ言っちゃうと、バーリ・トゥードルールっていうのはやりやすいと思うよ。

――それは金原選手やUFCに出たパンクラスの高橋（義生）選手も「普段やってるルールのほうが難しい」って言ってましたよね。じゃあ前田さんは、バーリ・トゥード一色でリングスを固めるということは考えてないわけですよね。

前田　ないない。バーリ・トゥードっていうのは、結果出たら終わりやん。「勝てば官軍」ですよ。「お前らよかった」で終わりやん（笑）。

――4～5年前に『猪木とは何か？』という本でインタビューしたとき、前田さんは「厳密に定義すると格闘技はスポーツの中に入れない」って言ってましたよね。

前田　入れないよ。

――元をたどれば殺し合いも含まれてくるわけですしね。

前田　「格闘技」っていうと範囲が広すぎるんだよ。

――それを現代で成り立たせていく過程で、格闘技のスポーツ化を進めなければならないというのはわかるんですよ。

「格闘」の根っこは何かっていうと ムキになってるか、なってないかだよ

前田　そのときはわかってなかったやんけ。なんか、もうひとりおったデブチンもわけわからん質問してきてな。コップ投げつけてやろうかと思ったよ。コップ当たったたくらいだったら傷害罪にならないだろうし。

――立派な傷害罪ですよ（笑）。

前田　そうなったときは「しょうがいない」って言えばいいんだよ、「しょうがいない」って。へっへっへ。

――ダジャレできますか（笑）。めちゃめちゃ怒られましたからね、あのときは。でも僕のケツも蒙古斑点の面積が少なくなりましたんで、あらためて「スポーツ」と「格闘技」、あるいは「スポーツ」と「格闘」の違いについて伺ってよろしいでしょうか（笑）。

前田　よろしい。いいでしょう（笑）。

――なんか、「スポーツ」と「格闘」の違いの部分に、ファンが見たがってるものが潜んでるような気がするんですよね。

前田　だからスポーツの管理なんだよ！　管理できるかできないか。格闘技っていうと基本的にはどんなもんでも対応できるわけじゃない。殺し合いのようにね。

――エゲツない、ツバ競り合いも含まれますよね。

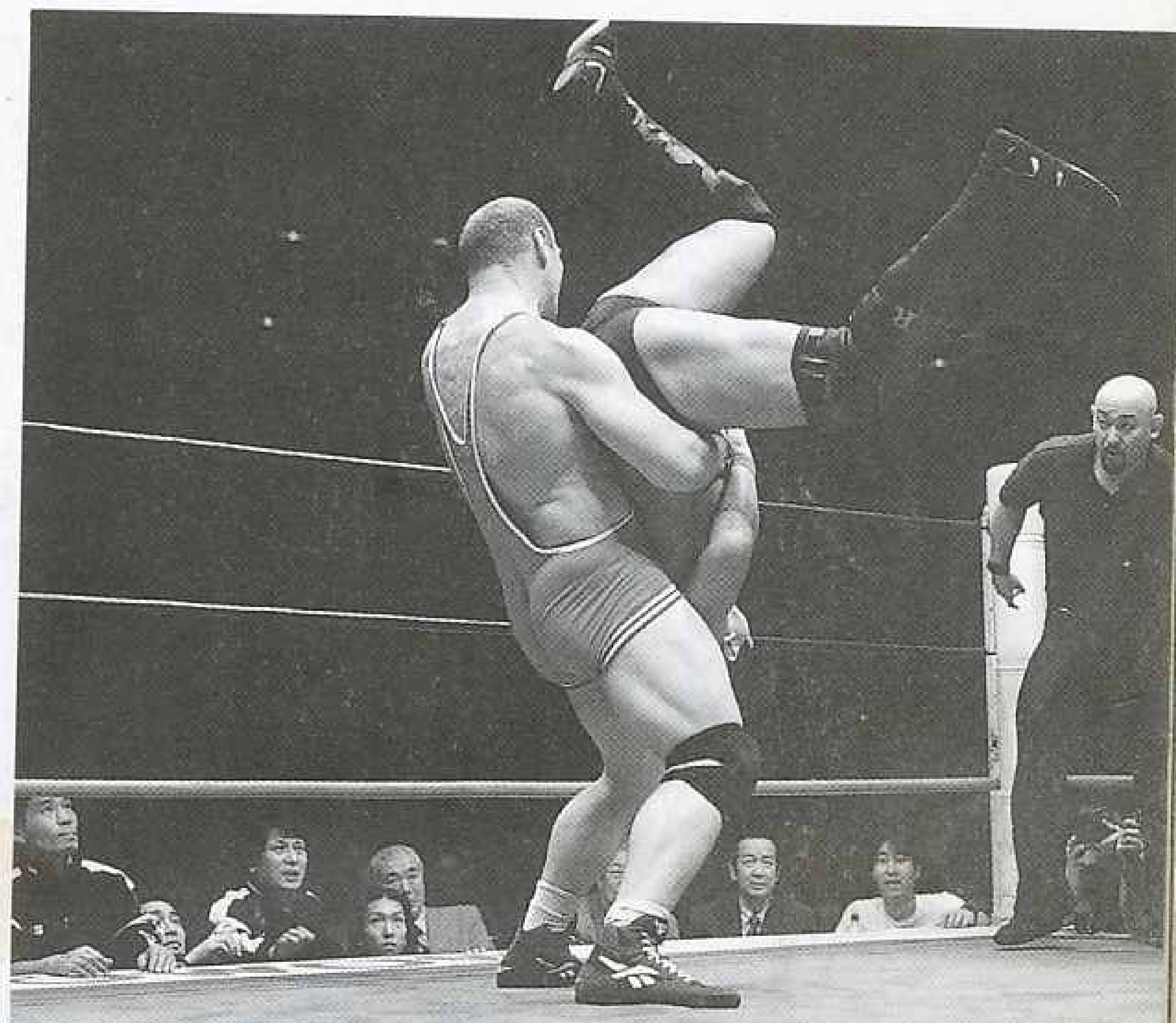
前田　相手を行動不能っていうか戦闘不能にするだけの技術があるわけでしょ。戦闘場面で「俺は空手やってたから空手の技で来てくれや」ってそんなバカな話ないでしょ。だから全ての場面に対応したルールを作ればいいんだよね。全ての場面を管理できるルールを。でもそれだけだったらつまんなくなるから、そのためにどういうふうにスポーツ化するのか、イコール、ゲーム性を持たせるかってことでしょ。ボクシングなんて完璧にゲーム化してるじゃない。ローブロー打っちゃいかんとか、あ、あのグローブって、あれクセ者でさ、あれで悪いことって簡単にできるんだよ。親指での目突き。グローブでやったらもっと簡単に入るよ。

――ボクシンググローブでですか？

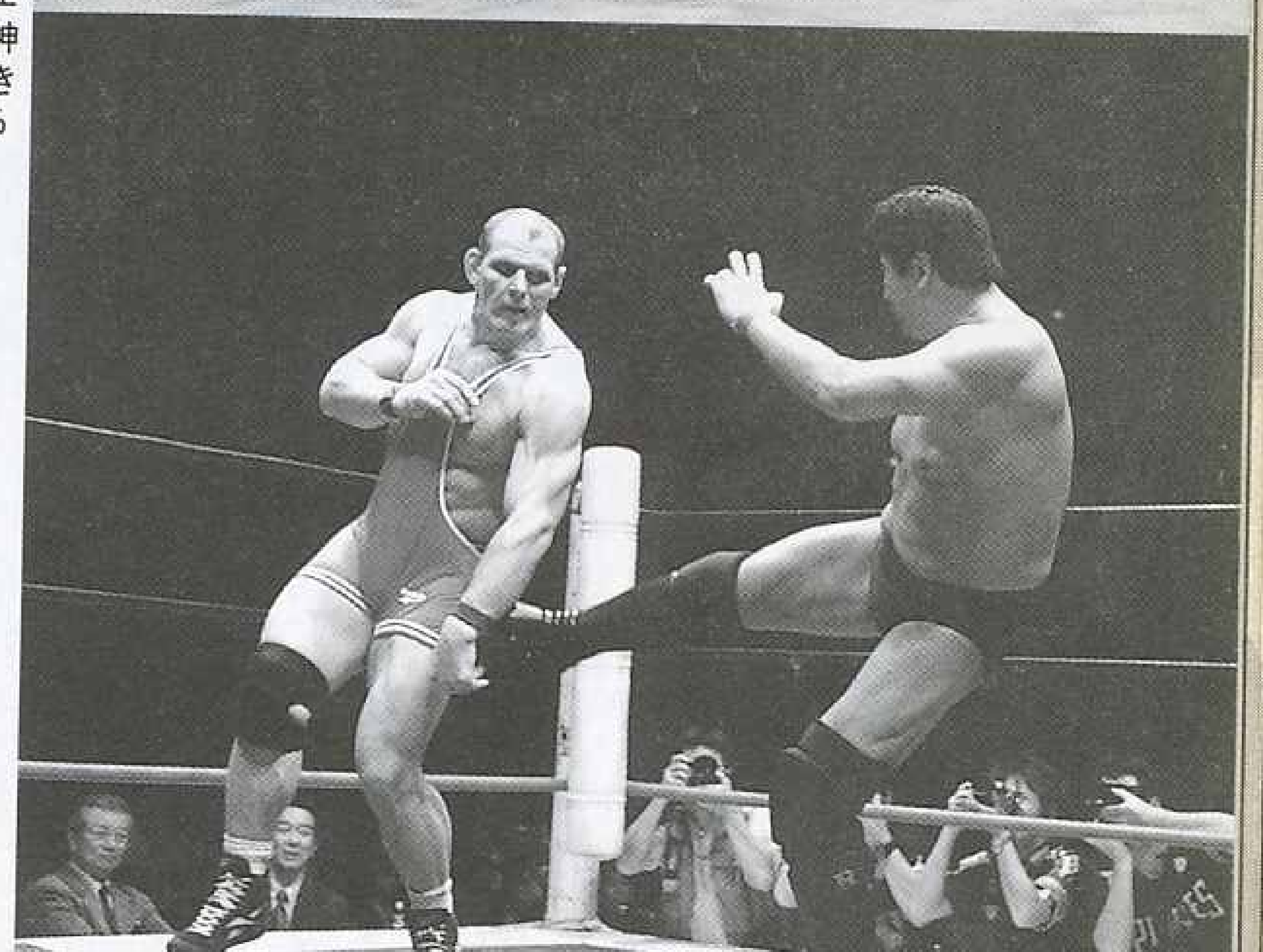
前田　そう。指立ててね。ほんで太いでしょ。バンテージ付けてるから、余計にバーンッて入るんだよ。

――また嬉しそうに（笑）。でも、ボクシングってルールを徹底的に縛ってるから、競技人口も増えるわけですよね。

前田　あそこまで縛れたっていうのは層が厚いっていうのと、選手人口が多くなったからあそこまで縛れるんだよ。それでも評価する人がいっぱいいる。一般的にはつまらん試合でもさ、ちゃんと物語にしてくれるんだよ、いろんな人が。ウチらの場合はそういう人さえいないでしょ。



2・21横浜アリーナ。"人類最強の男"アレキサンダー・カレリンと引退試合を行った前田日明総帥。リングを降りても気の休まる日はないようだが、チーフ・エグゼクティブ・オフィサーとして、肉体と肉体、精神と精神、哲学と哲学がぶつかり合う、スケールの大きなネットワークをつくりあげていってほしいものである



――で、「スポーツ」と「格闘」に違いがあるとしたら、どんなところだと思いますか。

前田　そういう意味での「格闘」の試合とはなにかって言うとね、簡単な話、ムキになってるか、なってないかなんだよ。それが根っこでしょ。そのやってる選手の"温度"の違いでさ、温度の低いヤツがいくらやってもね、寒気がするだけなんですよ。

――その"温度"を体現できる選手がリングスにはたくさん揃ってますよね。そこで前田さんの言う「ゲーム性」って言葉が、ファンに引っ掛かっちゃってるところはあると思うんですよね。「格闘技はゲームじゃない！」って（笑）。

前田　ゲームっていう言葉をね、どういう意味で使ってるかっていうのをよく考えないと。こないだね、カレリン戦の前にこういうこと言ってきたヤツがいるよ。「なんでカレリンなんですか？」って。「コイツらアホか」と思ったよ。カレリン出てきて動き出したらな、ヒクソンなんか吹っ飛んじゃうよって。現に吹っ飛んだもんね。でさ、次になに言うかと思ったら「アマチュアレスラーといったらタックルが凄い優秀だと思いますが、カレリンのタックルに対してどういう対策取りますか」って言うんだよ。「グレコローマンはタックルないはずなんですけど」って言ったらさ、下向きやがってさ。全然勉強してないんだよ。リングスでもUWFでもそうなんだけど、一個のもんを信じさせようと思ったら、俺、千回ぐらい言わなアカンねん。

――千回！　うわ～、それは飽きますね。

前田　毎回同じこと聞かれて、それに答えて。

――それぐらいやんなきゃ伝わんないってことですよね。

前田　言ってもみんな聞いてないんだよ。ボーッとしてて。

――ボクなんか「ルールをデザインしていく」っていう言葉だけでピーンと来ますけどね、頭いいから（笑）。

前田　ホンマかいな（笑）。

――だからいまのマット界が冷えてる原因の根本は、ルールの問題だけじゃないと思うんですよ。要はその試合でなにを見せてくれるか。"肝"の部分、精神的な根っこの部分が見えるか見えないかなんですよね。

前田　ムキになればいいんだよ！　もっと激しくてもいいと思うよね。

――だから2・21は、実際にバーリ・トゥードが2試合あったにも関わらず、前田さんと田村さんの試合、つまりリングスルールの方が湧いた。ルールに関係なく温度が伝わったから面白いわけですよ。

前田　うん。

――でも、去年の12月のパンクラスの大会では船木（誠勝）さんたちのノールールの試合が湧いて、通常のパンクラスルールの試合は、盛り上がらなかったんですよね。

前田　それはウチとパンクラスのゲーム性の差っていうのもあるかもしれないね。

——あらためて聞きますけど、UWFっていうのは、プロレスをスポーツ化しようとする方向性だったわけですよね。

前田　プロレスをまっとうなスポーツにする。ヤクザなスポーツからまっとうなスポーツにする運動やね。プロレスというものをスポーツとして表現するためにちゃんとした正当な技術を使うっていうね、文化大革命みたいなもんだよ。

——文化大革命！（笑）。でも、そのスポーツ化していく中で、前田さんの試合がなぜ観客を熱くさせたかっていうことですよね。ルールや技術やスポーツ性というのは当然重要な要素だけど、そういう言葉に捕らわれないで言うと、ボクらが見たいものは、前田さんが言うように意地であり、肝じゃないですか。

前田　でもそういうのを解説できる人っていないでしょ。マスコミもついてきてないんだよね。置いてきぼり喰らってるからさ。

——もっと豊饒でコクのあるものなんですよね、格闘技をやったり見たりするという行為は。

前田　そうそう。100人いたら100人の感想があっていいんだよ。

——前田さんは、リングで闘うことによって、なにを人に伝えていけばいいと思いますか？

前田　カッコよく言えば、「男ぶり」ですよ！

——男ぶり！

前田　いまチャンスなんだよね。思いっきりムキになったら簡単にカリスマですよ。みんなムキにならないんだもん。俺らのときなんて、ムキになってたよ。試合中に野次られたからって試合を途中で放っぽらかして、会場中追っかけまわしたりとかさ（笑）。

——ガハハハ。やってましたねぇ。観客怒鳴りつけたりとかね。後にも先にも客に「表に出ろ」ってケンカ売ったのは前田日明ぐらいしかいないですね（笑）。

前田　そんなわけのわからんこといっぱいあったよね。「ロープに飛ばなくて面白いの？」とかそっからでしょ。隅から隅まで重箱の隅突っつくようにムキになったよ（笑）。

——3カウントがないということですら、何年もかけて浸透させていったわけですからね。ムキにならないと、伝わらないですよ。

前田　でも、いまのヤツって「できない、できない」って話ばっかりするんだよね。「できない」って思ってやったらね、余計つまんない長引いた試合したりとかになるんだよ。試合数が多いとか、マッチメイクが弱いだとかキツイだとかさ、そういう話ばっかりしてんねん。ケガしても休めるのが当たり前みたいになってるんだよ。それは当たり前に考えたらそうですよ。休まなきゃいけないよ。ひと月に1回試合するのも大変ですよ。それこそ10年20年もつ選手寿命がもっと短くなるよ。俺がそうだったんだから。だけど、それをやらないとできない。それをわかって入ってきたんだから、それで嫌だったら、わかった瞬間に辞めればいいんだよ。無理を承知のヤクザ稼業ですよ。「バカじゃなきゃ男になれねぇ」ってね（笑）。

——「なんの因果の素手ゴロ稼業」ってヤツですね（笑）。でも、前田さんやエンセン系のムキになり方じゃなくても、田村さんは田村さんなりのやり方でムキになってると思うんですよね。だから田村さんの試合は伝わるわけですよ。綺麗で華麗でスポーツ的なスタイルの試合がダメと言ってるわけじゃなくて、どこまでいっても〝肝〟が見えるか見えないかなんですよね。

前田　そんで、「年食うとほかのプロスポーツの選手みたいにレフェリーとかになれないとおかしい」とかさ、わけわかんないこと言うねん。向こうは読売グループだとかなんだとかで資金は潤沢にあって、選手層もウチらの何百倍もあってやってるんだよ。同じものを望むんだったらテニスでもなんでも競技変更しろ！　ハッキリ言ってね、リングスが世界で一番ちゃんとやってると思うよ。UFCよりもどこよりも。どこに1年近くも試合休んでるヤツに病院代出して、おまけに毎月年棒の12等分のギャラをちゃんと出すとこあんの？　世界中のどこにあんの？　なあ、どこにあんの？

——それが当たり前の世界って考えられたらたまらないですよね。

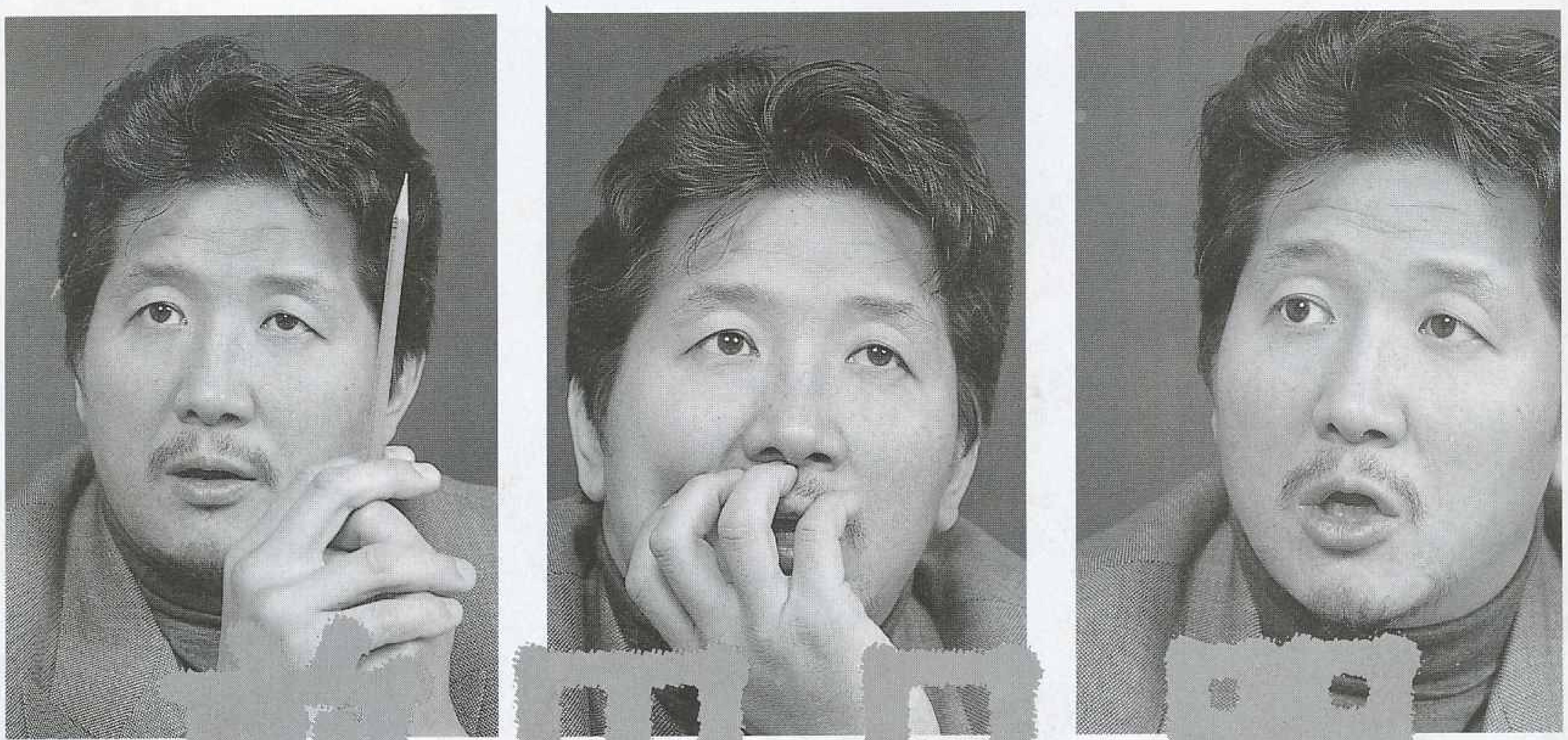
前田　いまね、テレビに出てるヤツもそうだけど、なんであんなに賢くなりたがるの？　ほんでなに言うかと思って聞いてみたらさ、聞いてる俺らが顔真っ赤になってしまうようなさね。コイツはアホか、と思うんやけど。

——恥かきたくないんでしょうね。

前田　恥かきたくないなんて言ってると、いまにもっと大恥かくよ！　でね、「らしさ」がない。20代前半らしさとかさ、あるやんけ、なんか。

——「〝らしさ〟なんていう、古いフォーマットにははまらないぜ～」みたいに思ってるんですよ（笑）。

前田　フォーマットにははまらないでいいんだけど、現時点の自分さえちゃんとしっかりできないヤツがなんで経験したことない年齢のことを体現できるわけ？　サギやんけ。あのさ、年齢ごまかしてる芸能人と同じやんけ。みんなね、結局、人に頼ってんだよ。甘えてんの。「誰かがやってくれるだろう」みたいなさ。



前田日明



原点に戻るとかアホらしいこと言わないけどルールから運営方法から過渡期だよね

――かといって前田さんがズッとそれを言ってても、愚痴を言ってるようにしか聞こえなくなってきますからね（笑）。

前田 なんかね、女々しいんだよ！

――ガハハハ！ 出た！ それ前回のインタビューでも言ってますよ。

前田 なんかさ、しょうもないことでジクジク言ってさ、俺らも若いときジクジク言ったと思うけど、やるときはやったよ。

――またもや人生相談みたくなってきましたね（笑）。

前田 そういえば人生相談やらないじゃん。

――次号からやりますよ。では、リングスに期待するファンに、ここらで一発……前田さん、いまの肩書きなんでしたっけ？

前田 なんだったっけ？ 横文字いい加減に並べてたからなぁ。

――あ、チーフ・エグゼクティブ・オフィサーですね。

前田 そうだそうだ（笑）。

――前田CEOから、「これからリングスはこういう方向に行くゼ」っていうのをバシッと言っていただきたいんですが。

前田 そうだね。原点に戻るとか、アホらしくてそんなの言わないけど、ちょっと、一回真っ白にしなきゃいけないんだよね、真っ白に。みんなその気になりすぎてるんだよ。見てるファンもそうだし、やってる人間もそうだし。ファンがわかった気でいすぎるし、やってるほうは一人前になった気でいすぎるし。だから、いまルールから運営方法から過渡期なんだよね。昔の自分の発言読んでビックリしたのがさ、ちょうどいまから1〇年くらい前に、そのうちポコンと未知の格闘技が出てくるって言ってるんだよ。知らず知らずの間に柔術系とかグレイシー系のことを予言してるんだよね。これからあるとしたら散打だね。怖いのは競技人口ね。やっぱり縄文文化よりも黄河文明ですよ。

――縄文文化よりも黄河文明ですか。

前田 人口が違う。縄文文化は推定25万人と言われるけど、揚子江文明は何百万人とか何千万人でしょ？ 人が多いということは人数分だけ脳味噌があるんだから、違いますよ。だから、ヒクソンがどうのこうのとか言ってるときに、カレリン持ってきてビックリさせたみたいに、散打持ってきてやろうかなと思ってね。なんかね、見るほうもやるほうもね、頭で考えるのが多すぎるんだよ。テコンドーがメルボルン・オリンピックの公開競技になったやん。散打にもその可能性はあるでしょ。そのうち中国行って見てくるよ。

――いまは、そういう大きな変化がないとダメかもしれないですね。

前田 あっちこっちで、なになに斑みたいな感じでやってるからね。チマチマと。

――全部いっぺんに入れてドーンとランキング作るぐらいじゃないと勢い出ないですよね。無責任な発言ですけど。

前田 曲がりなりにも、もう十何年やってるから、その蓄積ですよね。そういった面で言うと、もう先に向かって走り出しますよ。最近は遠くを見てるからさ。

――さすがですね（笑）。

前田 エッヘン（笑）。

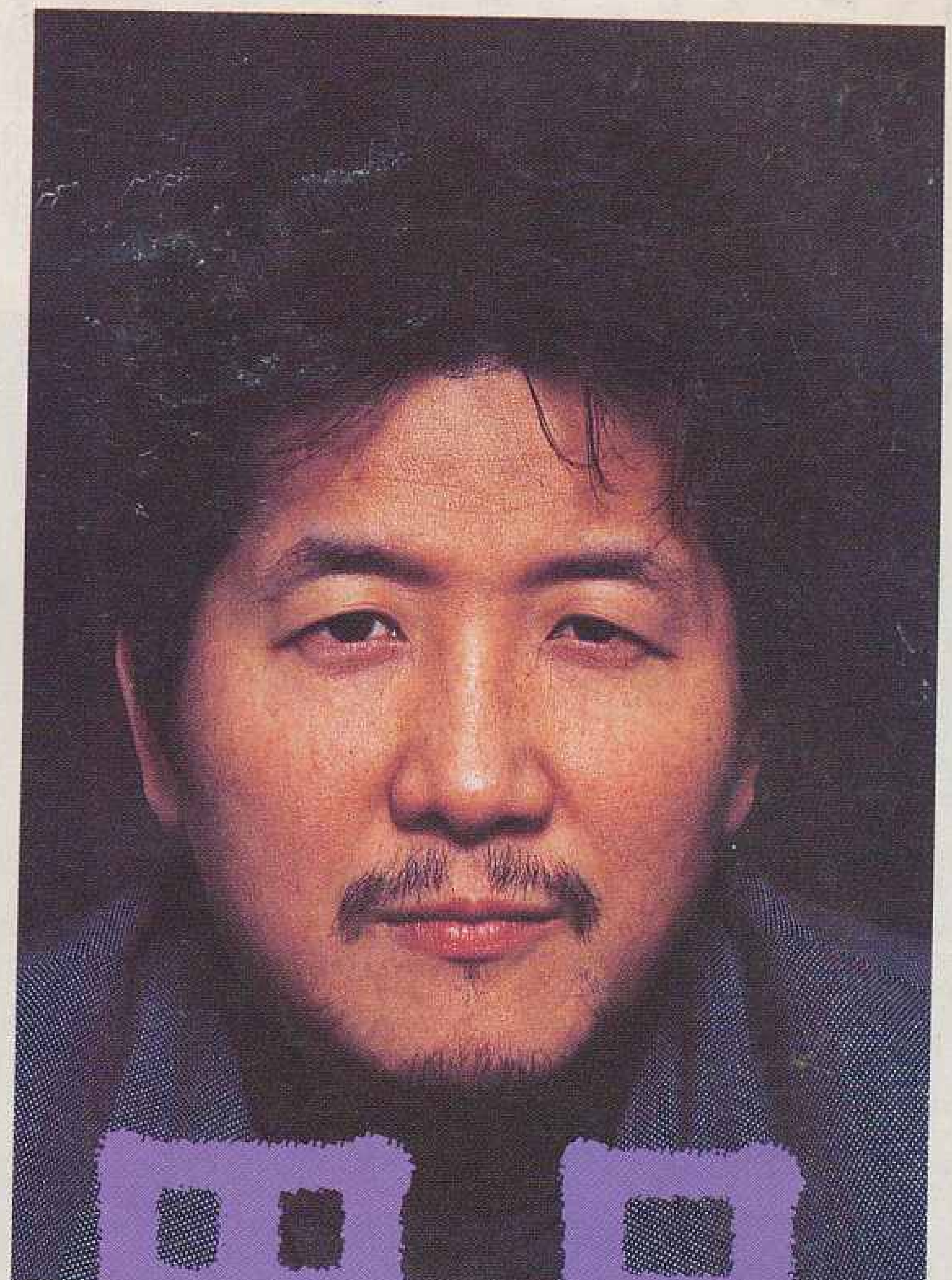
――前田さんは「マット界を全部統合してやるゼ」っていう気はないんですか？

前田 統合ね……グレート、と、統合。なんてね。へっへっへ。


――冴えてますね（笑）。悪役レスラー、グレート東郷。「血はマットに咲く赤いバラ」ってやつですね（笑）。

前田 選手だけだったらいいんだよ。そのまわりで上がりを狙ってるゴロツキがいるでしょ、この世界。それがあるからどうなるかわかんないけど、まあ、エッチラオッチラやっていきますよ。

【3月12日／東京・渋谷／リングス事務所にて収録】



前田日明



誰が相手でも俺は妥協しない！殺るか殺られるか壮絶な試合を見せます!!

聞き手／チョロ
interview by Choro
撮影／モーリー
photographs by Morry

RINGS JAPAN

山本宜久

『紙プロ』さんの感性と、ボクの感性が違うんでしょうね

リングス総帥・前田日明がアレキサンダー・カレリンとの一戦を最後に現役生活にピリオドを打った。そして3月のNK大会から、ファイター前田日明のいないリングスが動き出した。
山本宜久はヴァレンタイン・オーフレイムを相手に、掌底掌底掌底、最後はマウントからの腕十字で目の覚めるような勝利をあげた。山本は力強いガッツポーズをキメると、マイクを握り観客に熱く語った。
「前田さんが引退されましたけど、自分は妥協せずにバチバチのシバキ合いを、格闘技の原点を目指し、これからのリングスを自分のスタイルでやっていきます！　そして、自分は1位以外興味ありません。頂点を目指して頑張ります!!　ありがとうございましたッ!!」——
山本宜久の考える「前田日明」「格闘技の原点」「シバキ合い」「リングススタイル」「バーリ・トゥード」とは一体何なのか？　そして山本宜久は『紙プロ』をどう思っているのか？　たっぷり教えていただきました。

山本　今日は何を聞くんですか？

——今日は、「前田日明引退後のリングスはこれからどうなっていくんだろう」っていうことを聞こうと思ってます。

山本　フハハハハハハ！

——ちっと小耳にはさんだんですけど、山本さんは『紙プロ』にはそんないいイメージがないということなんですが（笑）。実際のところどうなんでしょうか？

山本　（ちょっと呆れて）いいとか悪いとかってそういうのはないんですけど、なんていうのかな。それは……、『紙プロ』さんには試合のことが載ってないですからね。ボクらは試合が全てなんで、そういう練習風景とか試合とかを記事として扱って欲しいわけですからね。選手が試合までにどういう練習してるかとか、コンディションはどうだとか、そういうことを読者に伝えることによって、試合の見方も違ってくると思うんですよ。確かに試合が全てなんですけど、それまでのストーリーとかを読者に伝えると、より一層見てて面白いと思うんですよ。

——勉強になります。でも練習風景や試合のこと以外にも、プロレス観であったり、格闘技観であったり、選手のナマの声を知りたいっていう声もあると思うんですよ。プライベートなことも含めて。

山本　ん～～、プライベートね。どうなんでしょうね（笑）。やっぱり感性の違いでしょうね。

——……感性ですかぁ。

山本　『紙プロ』さんの感性と、ボクの感性が違うんでしょうね。そういえば『紙プロ』さんは取材しなかったですね、俺のこと。

——えっ！　いつですか？

山本　俺も前田さんと一緒にシアトル行ってたんですけど載ってなかったですよね。

——いや、ちっと、ウチで取材に行ってる時は山本さんは風邪でダウンしてたって話でしたよ？

山本　そうかそうか。ちょうど風邪の時だったんですね。なんか縁がないッスね（笑）。

——あい～や。ちっと、そんなこと言わないで下さいよ（笑）。

山本　でもホント風邪引いちゃって、2日か3日寝てたんですよ。大変でしたよ。

——大変だったらしいですね。実際どうでした、シアトルでの前田さんは？

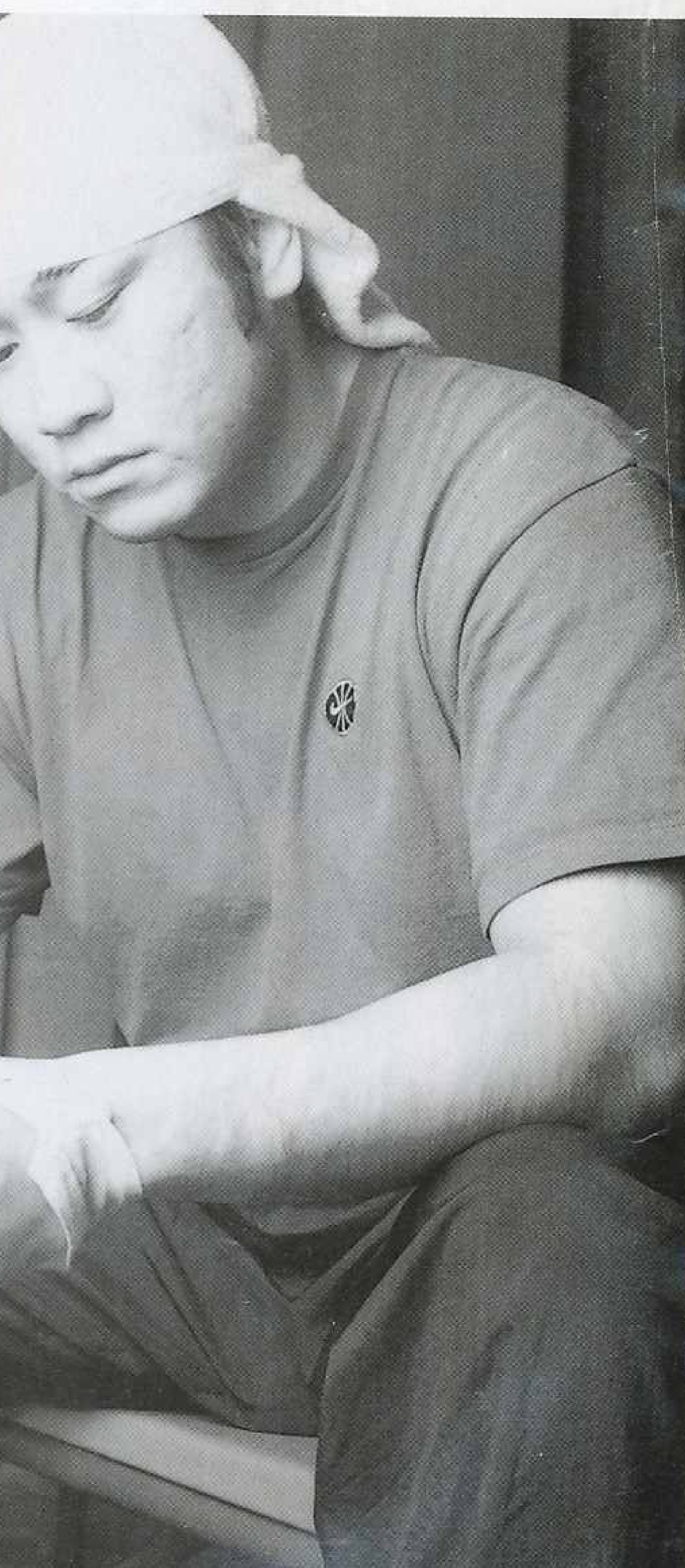
山本　日本にいる前田さんと、シアトルにいる前田さんは別人のようでしたよ。日本にいる時の前田さんっていうのは、会社組織の長ですから、いろいろ練習以外のことをやらなきゃいけないじゃないですか？

——そうですね。確かに前田さんは社長業もありますから大変でしょうね。

山本　そういうのを抜きにして、今回のシアトルは練習だけのためですから。

——ファイター前田日明としての最後の渡米だったわけですよね。

山本　今回はそれだけのために行きましたからね。練習中、前田さんの目が爛々としてるんですよ。あんな嬉しそうな前田さんっていうのは初めて見ましたね。





——えっ！　初めてですか（笑）。

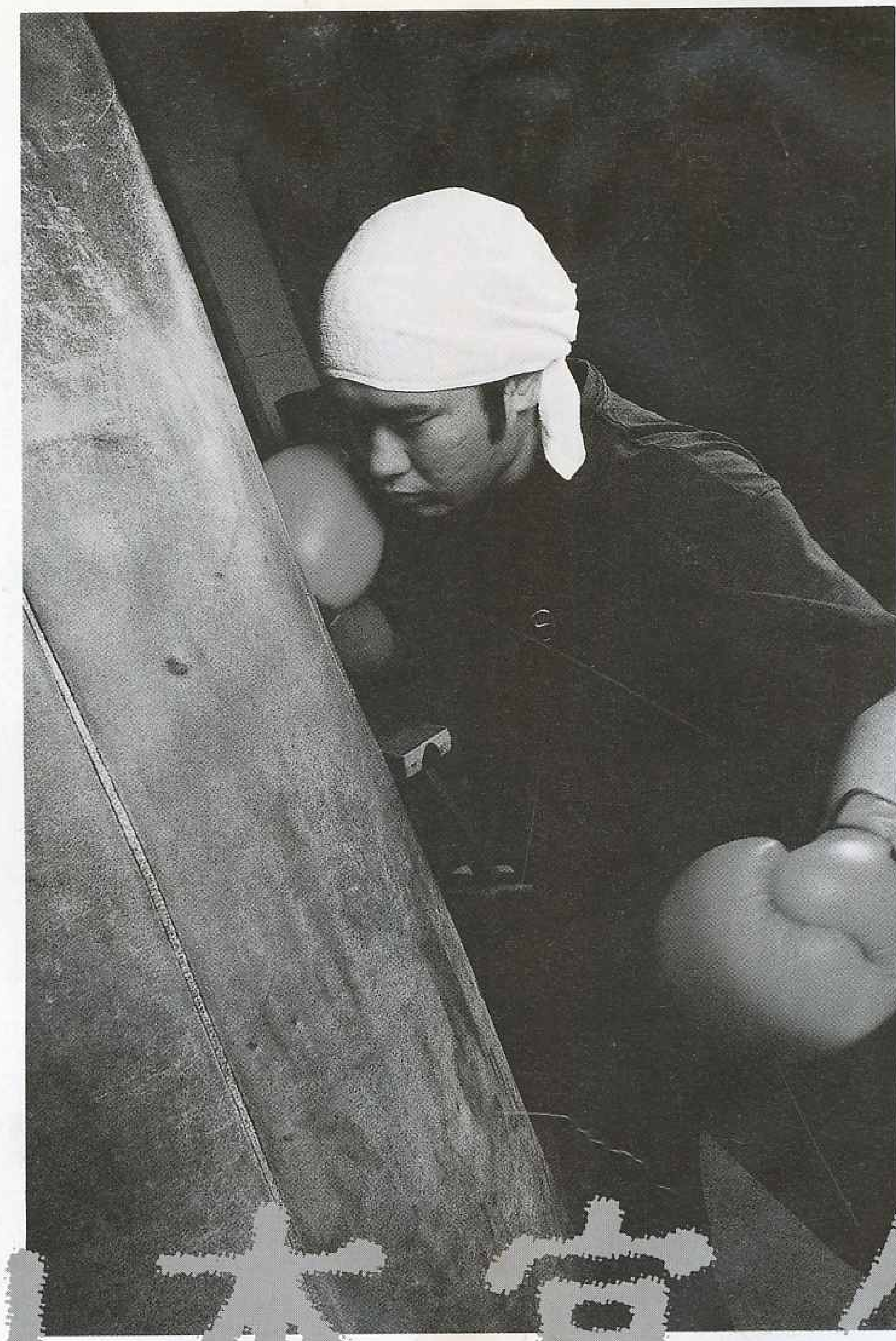
山本　初めてですね、充実した練習をして疲れてる前田さん。いつも練習以外の部分で疲れてる前田さんを見てきましたんで。

——山本さんがリングスに入門した当初から、前田さんは選手以外の面でやることがたくさんあったわけですよね。

山本　やっぱりあの頃は選手があまりいなかったんで、どうしても会社と選手を両立しなきゃいけなかったじゃないですか？　だからどうしても練習以外で疲れてるんですよ。でも今回練習だけに取り組んでいる前田さんっていうのは凄く輝いてましたね。ホント練習して凄く楽しそうなんですよ。それで前田さんって膝を痛めてからずっと走れなかったんですよ。

——それが走れるようになったんですよね。

山本　そうなんですよ。何年振りかに前田さんがランニングする姿を見て、「前田さん、走れるようになりましたね」って言ったら、「俺も走れると思わんかった」ってすっごい嬉しそうに話すんですよ。普通の人が聞いたら当たり前のことなんだけど、今まではそれができなかったんですよね。そういう当たり前のことが前田さんにとっては自信に繋がっていくんですよ。だからキツイんだけど、どんどん練習しちゃって、もう3日目ぐらいでオーバーワークになっちゃったんですよ。



山本宜久

——なんかまた足を痛めたみたいですね。

山本　やっぱり今までのツケですよね。練習もボクらと同じ内容でやってたから、どうしてもオーバーワークになっちゃうんですよ。年齢的にもそうなんですけど、回復能力が遅れるし、どうしても身体の方が言うこと聞かなくなるんですよ。それでオーバーワークになってて、足も痛めてるんだけど練習をやりたがるんですよ。ケビンさんも驚いてましたね。現地の人は、ちょっと風邪ひいたり、ちょっと痛かったりすると、とっとと帰るんですよね。「なんで日本人は這いつくばってまで練習したがるんだろう？」」って。

——根性っていうか大和魂ですかね（笑）。

山本　でもホント前田さんは充実してましたね。やっぱり向こうは変な雑念とかもないし、そういう環境で練習できたっていうのが良かったんじゃないですか。そういう意味で最高のトレーニングだったと思いますよ。

——山本さんは、カレリン戦では前田さんのセコンドとして一緒に入場してきましたけど、やっぱり感慨深いものがありましたか？

山本　ボクは入門して、旗揚げ戦の時にセコンドとして前田さんを先導したんですけど、あれから8年ぐらい歳月が経ってるのにそれを思い出して、やっぱり感無量っていうか、なんとも言えなかったですね。だから自分の復帰戦が終わって、ホントは自分の復帰戦を気にして不安にならなきゃいけないんだけど、当日は前田さんのことの方が不安でしたから。自分の復帰戦がもう少し遅れても良かったなって思ってましたね（笑）。

——試合をしてる場合じゃないと？

山本　自分自身は試合をしたいんですけど、自分は器用な人間じゃないから、なかなか切り替えができなくて、どうしても前田さんのことが気になっちゃうんですよ。それで試合が終わったらすぐに着替えて、前田さんの控室に行ってシャットアウトしたんですよ。とにかく前田さんを落ち着かせようと思って。まあ前田さんはキャリアが長いんで、その辺は全然問題ないと思ったんですけど、会場入りしたとき前田さんの顔が凄く青冷めてたんですよ。なんか気が抜けたような感じだったんで不安だったんですよ。とにかく前田さんに自分たちの力っていうか、気を全部あげたいっていう気持ちでいましたからね。でも、入場式での前田さんは引き締まった凄くいい表情をしてて、それになんかオーラじゃないけど前田さんから出てたんですよね。

——試合直前、仁王立ちで入場を待つ前田さんはホントにいい表情をしてましたね。

山本　そうですね。前田さんは戦場に行くような顔してましたんで、これはイケるなと思ったんですよ。サムライみたいな顔してましたから。これはもう大丈夫だと思いましたね。

——実際、カレリン戦はどっから見てもいい試合っていうか凄い試合だったわけですけど、山本さんは前田さんの試合を見て何か感じるものはありましたか？

山本　まあ格闘技的視点で見たら、結果は負けなんですけど……、やっぱり前田さんがいた時と違って、自分たちの試合は技術的にもっと進化してるんですよ。でもあのカレリンと前田さんの試合っていうのは何年経っても色褪せないっていうか、ズーッと語り継がれるような試合だったと思いますよ。ホント結果はともかく凄くいい試合でしたね。

——山本さんがよく言ってるような格闘技の原点というか、誰が見てもあの試合からは凄さが伝わったと思うんですよ。

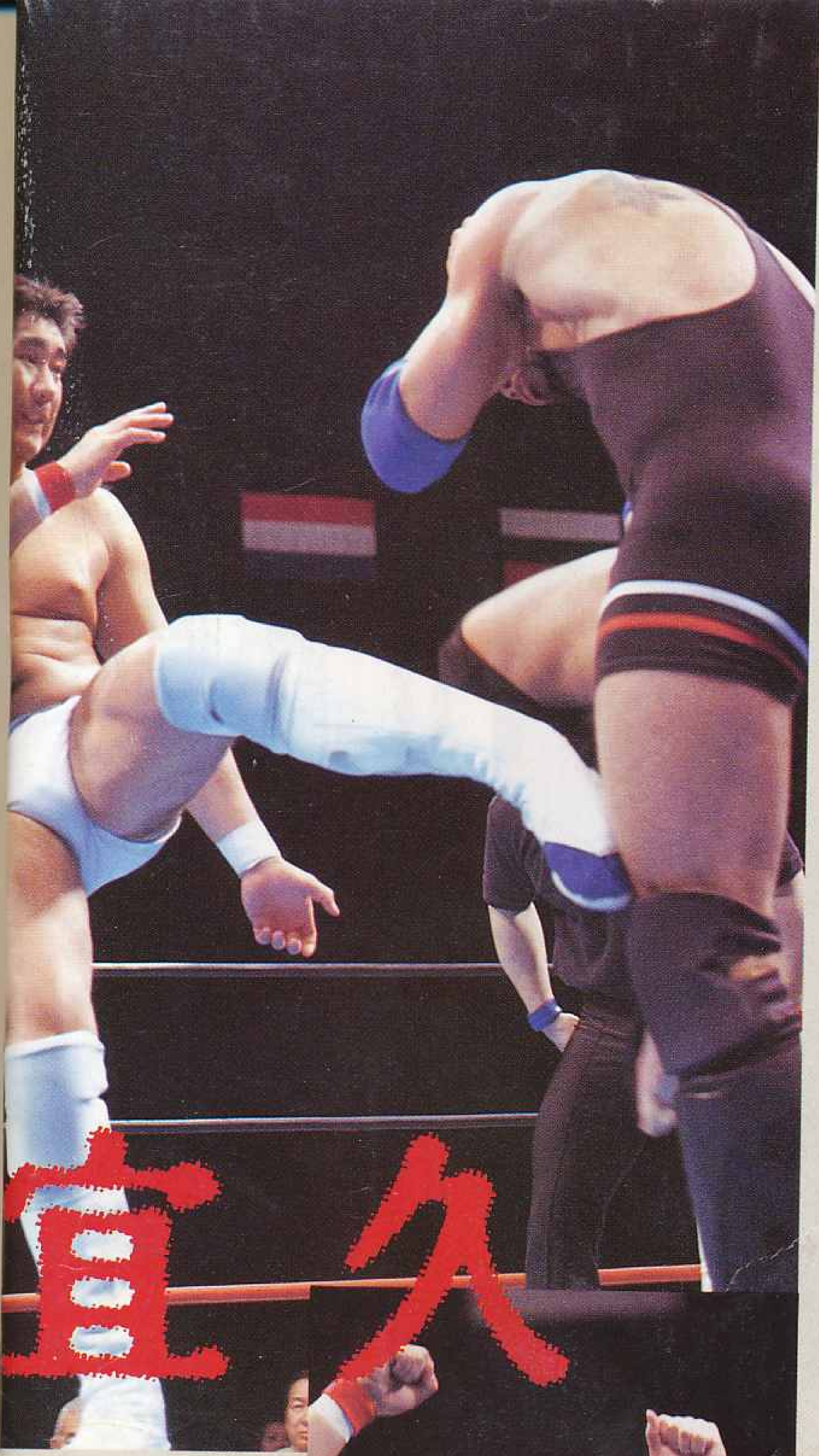
山本　前田さんは一生懸命やってたじゃないですか。だから前田さんがよく言うような（笑）、決してカッコいいものじゃなかったじゃないですか。前田さんが操り人形のようにブン投げられて。

——あんなに軽々と振り回された前田さんは初めて見ましたからね。

山本　ですよね。前田さんは一発目に投げられた時に首イッちゃったらしいんですよ。それでもカッコ良かったじゃないですか。這いつくばって、なんとか立ってまた向かっていくっていう闘い。カッコいいッスよね。だから前田さんが良く言ってるけど、「カッコ悪いんだけどカッコいい」っていう。それを凄く教えられたっていうか、見てて熱くなるものをもらいましたね。

——残された選手に対する、ファイター前田日明からの最後のメッセージだったんでしょうね。

山本　そうでしょうね。だからあの試合を技術的にどうかって言われた時にはなんとも言えないんですけど、とにかく熱くなるような試合でしたね。二人だけの空間で、それを覆



殺気立って、唸り声を上げながら練習してますから。野獣ですよ！

ってるファンのみんなとかセコンドの自分たちも全部一体化しましたね。あの空間は前田さんにしか作れなかったと思いますよ。

——これからは山本さん達が、あの試合の様な一体感を作り出していかなければならないわけですよね。

山本　もちろんそうですよ。

——一時期、前田さんが長期欠場してた時に、山本さんがエースとして任されていた時期がありましたけど、その時と違ってこれからはもう前田さんは戻ってくることはないわけで、そういった意味での心構えは以前とは違うものがありますか？

山本　だって俺はリングスで育った人間ですから。リングスがある限り、やっぱ自分がトップに立ってやっていきたいっていうのが当然ありますよ。

——山本さんは頂点しか興味がないって言ってますよね。格闘頂点ですね。

山本　やるからには、もちろん一番しか興味がないですよ。

——それでこの間のNK大会（3・22）では、「自分は格闘技の原点を追求し妥協せずにやっていく」っていう山本さんのアピールがあったわけですけど、田村さんの「Uスタイル、リングススタイルは俺が守る！」っていう発言を意識したところはあるんですか？

山本　誰ですか？　ボクですか？

——はい、山本さんです（笑）。「リングススタイルは俺が守る」なんて言われたら、山本さん的にはカチンと来たりするんじゃないかなって思ったんですけど（笑）。

山本　いや（苦笑）、子供のケンカじゃないんだから。そういうんじゃないんだけど、（しばし考え込む）……どうなんでしょうね。そういう風に言われるとコメントしづらくなりますよね。でもやっぱり一人一人が責任感持たないといけないと思うんでね。だから、なんて言うんですかね。前田さんがいなくなったあとで、どういう方向で、どういうスタイルでやっていくかっていうのをファンは一番知りたがってると思うんですよ。

——山本さんは、自分の方向性というかスタイルを宣言しただけだと？

山本　だからボクは、ボクのカラーで、ボクのスタイルでこれからリングスを盛り上げていくと宣言しただけですから。ボクは格闘技の原点じゃないけど、攻撃的な試合をして、様子を見るとかそういうんじゃなくて、最初から全力でぶつかり合ったら結果が出るのは早いんですよ。その中で内容が濃い試合をファンの人に伝えていきたいんですよ。（マイク・）タイソンもそうじゃないですか？　それでいて迫力もあるし。そういう風に、殺気と迫力があって、なおかつ技術が詰まった試合。ただ長けりゃいいってもんじゃなくて、太く短く内容の濃い試合をボクは見せていきたいですね。

——そういう試合だったら文句無しです！

山本　だからあとはファンの人達が、どのスタイルに共感っていうか共鳴するかっていうのは、それはもうファンの人達の自由だと思うし、ボクはもう妥協せずにそのままいきたいですね。

——山本さんが言っていた、「格闘技の原点」っていう意味では、これまでの試合でいうと誰との試合が理想に近いわけですか？

山本　理想ですか？　どうなんでしょうね。まあリングスも初期の頃はいろんな流派の人が上がってたじゃないですか？

——上がってましたよね。

山本　正道会館と絡んだ頃とか、あとロブ・カーマンもそうだし、あの頃の闘いって凄く……、面白かったですよね。面白いっていうか凄かったでしょ、試合が。

——どっちがいいかは別として、あの当時は殺気というか緊張感というか、凄かったですよね。セコンドもピリピリしてましたし。

山本　殺気にしろ、やっぱりああいう闘いがいいッスね。まあ当時は当時として、ボクはあれ以上のものが今はできるんでね。今は、あの頃と比べればレベルも全然違うし、それ以上にもっと凄いものができるんじゃないかと思ってますから。それとやっぱり前田さんがいない初めての興行で、日本人は全員負けちゃいけなかったんですよ。その中でインパクト出さなきゃいけない大事な試合であって、やっぱり自分をアピールする舞台なんだから、全員勝たなきゃいけなかったんですよ。

——山本さん自身は（ヴァレンタイン・）オーフレイム戦は「満足がいく試合」って言ってましたけど。

山本　あの時は満足してたんですけど、ビデオ見たらちょっと（苦笑）。まだ一分間に百発掌底出してないんで。

——アハハハ！　試合後に言ってましたよね「一分間に百発掌底を打つ」って。一分間に百発掌底をブチ込むっていうのは、練習段階では完璧にマスターしているんですか？

山本　練習だと百発打ててますよ！

——「一分間に百発打てれば、ガードもできないし、相手も攻撃できない」っていう（笑）。



3・22、NKホールでのV・オーフレイム戦。ゴングと同時に怒涛の掌底ラッシュで攻め込んだ山本は、途中エスケープを一度喫したものの、マウントからの腕十字で一気にフィニッシュ！　試合後、マイクを握った山本は、「自分は妥協せず、バチバチのシバキ合いを、格闘技の原点を目指し、これからのリングスを自分のスタイルでやっていきます！」と力強くアピール。観客からは大歓声と大拍手が送られた。山本はいつだって妥協しないぜ!!

新生リングス

Bone & Blood!!

確かに一分間に掌底百発打ったら、相手もガードどころの騒ぎじゃないですよね（笑）。

山本　フハハハハ！

——それはお客さんも期待しますよ！　山本さんはシバキ合いだったら誰にも負けないっていう自信があるんですか？

山本　全部ですよ！　トータル的に自信ありますよ。ボクは今、トレーニングにしろ練習にしろね、もう殺気立って、唸り声を上げながらやってますからね。野獣ですよ！　ホント動物園かと思いますよ。

——アハハハハ！　それじゃあ入園料払わなきゃいけないですね（笑）。そういう練習するようになったのは最近なんですか？

山本　最近ですね。いろいろ考えることあってね。だから一度、道場での練習を見に来られたら分かると思うんですよ。とにかく一試合一試合に懸けてますからね。だからもう死に物狂いでね、練習にしろブッ倒れるぐらいまでやってますから。

——凄いッスね！　なにかそのキッカケというか転機はあったんですか？

山本　転機はあるっていうか、ないっていうか、なんでしょうかね。まあいい意味で、前田さんと3週間シアトルで、練習も食べるときも寝るときも一緒だったんで、そういうのが凄くプラスになってますね。そこから考え方も少しづつ変わってきたと思うし、あとはいろんな人との出会いですよね。

——前田さんも「格闘技の原点」じゃないですけど、山本さんと同じ様に「リング上は意地をぶつけ合うところで、意地のないヤツはプロとしてはダメなんだよ。ファンが何を見るかっていったら技術じゃなくて意地を見に来てるんや！」って言ってましたね。

山本　それはボクの考えと全く一緒ですね。やっぱり最後はスタミナ切れて、ドロドロになってどっちが先にブッ倒れるか、どっちが先に極めるか、腕一本ダメになったら逆の腕を使えばいいし、足を引きずってでも相手をブッ倒すっていうか、そこまでの覚悟がないとダメですからね。

——やるんだったら徹底的にド突き合い、シバキ合い、ツバ競り合いって感じですか。

山本　まあ相手がブッ倒れるまでやりますね、起きあがってきたら何回でもブッ倒してやるしね。グラウンドだったら何回でも極めてやるし。

——何回も極める（笑）。でも田村さんなんかは対称的で、シバキ合いよりはテクニックの応酬を魅せたいっていうタイプですよね。

山本　だから、どうなんでしょうね。田村さんが言ってることも、凄く……、まあ田村さんは田村さんなりの思想でいろいろ考えて、ああいうスタイルでっていう、そういうのもあると思うんですよ。う〜ん……、難しいですね。遺伝子が違うわけですからね。

——「U」で育った田村さんと、「R」で育った山本さんの違いってことですか？

山本　そう。ボクはリングスで育った選手ですから、そういう意味で遺伝子が違うと思うんですよ。だからまた、そういう……、難しいッスね。あんまりこう（苦笑）、あんまり突っ込むとね、悪く言うとアレなんで（笑）。

——いやいや別に悪く言わせようとしてるわけじゃないんですけどね（笑）。

山本　フハハハ！　まあでも田村さんのスタイルも素晴らしいと思いますね。

——遺伝子が違うだけで（笑）。

山本　そう（笑）。だから要は、お客さんが満足してくれれば、それは間違ってないんですよ。だから田村さんがやりたいスタイルも間違ってないし、ボクがやるスタイルもお客さんが満足してくれるんだったら間違ってないと思うんですよ。だから相反するスタイルなんだけど、やっぱ一緒なんですよ。お客さんが満足すればいいわけですから。お客さんがすべてなんです。

——途中経過は別として、目指すべきゴールは一緒ということですよね。

山本　そうです。お客さんがすべて。だから最終的に考え方は一緒なんですよ。道は分かれるけどゴールは一緒なんです！

——シバキ合い、ド突き合いっていう山本さんが言ってるようなスタイル的な意味で、共感という共鳴する選手ってどなたかいらっしゃいますか？

山本　どうなんでしょうね。いないんじゃないんですか。ボクは一子相伝ですから！

——一子相伝なんですか！

山本　フハハハ！　ボクのスタイルはボク一代限りですから。他の人は他の人でそういうのを考えて、お客さんを満足させるようなものを完成していけばいいんじゃないですか。

——山本スタイルは一子相伝で一分間に百発掌底をブチ込むと（笑）。いいですねぇ。素晴らしいです！

山本　フハハハハハ！

——それで今のリングスはバーリ・トゥードとかも取り入れてるじゃないですか。rAwチームも参戦してきましたし。

山本　そうですね。

——山本さんは、高阪さんと同じように、リングス内ではバーリ・トゥードはやりたくないって言ってましたけど。

山本　ボクですか？　言ってました？

——言ってました（笑）。

山本　どうなんでしょうね。今はジャンルとかは関係なしに、とにかく一番強けりゃいいんですよ。

——山本さんは昔から一貫して言ってますね。最終的に一番強い男になれればいいと。リングスでも「最強の男はリングスが決める」って掲げてますからね。

山本　だから極端な話ね、今はルールがどうあれ、自分が一番、一番が一番ですよ。一番強けりゃなんでもいいんですよ。

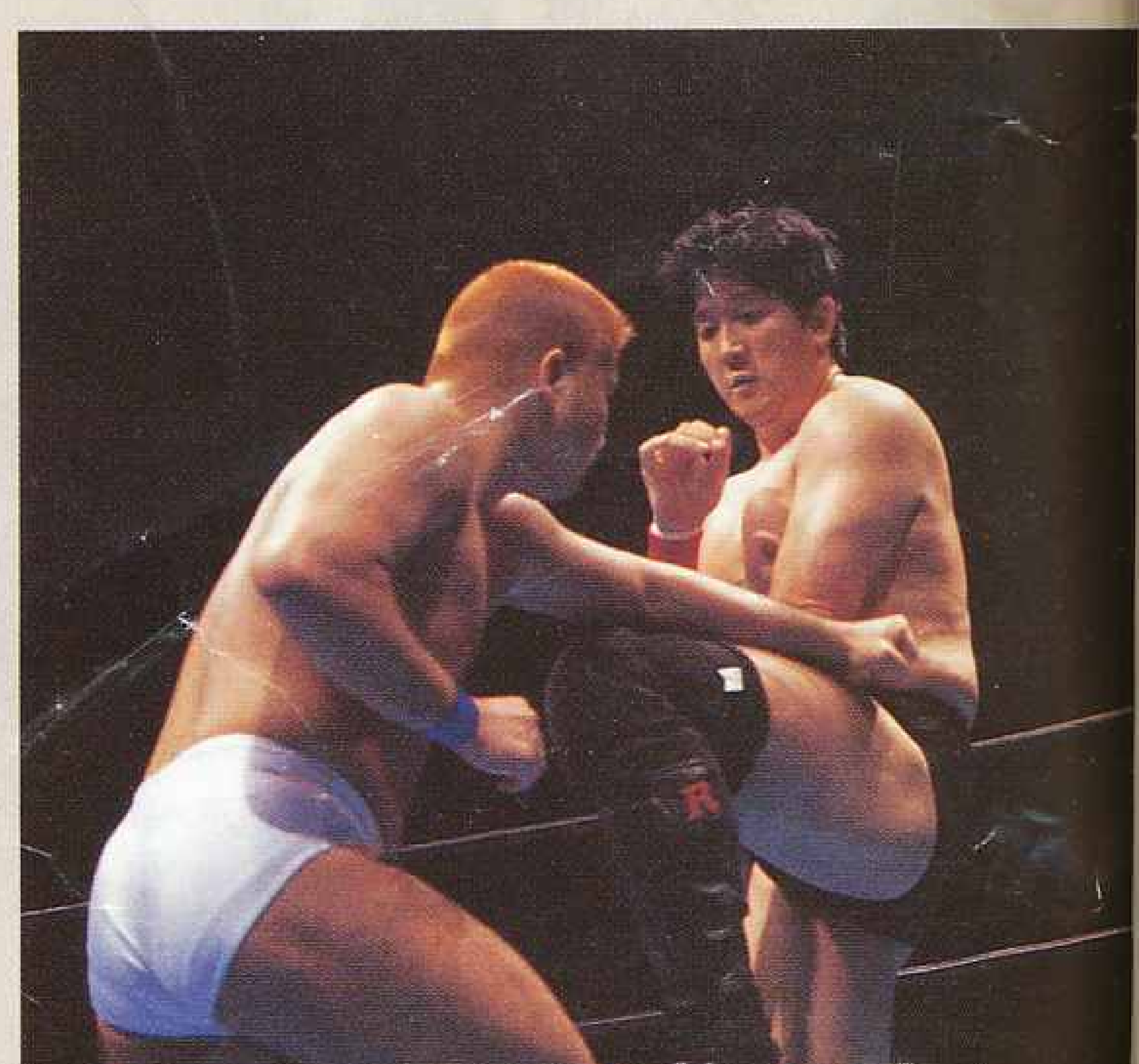
——それは一番わかりやすいですね（笑）。

山本　細かいことを気にせずにね。そういうことなんですよ。だから最近の、バーリ・トゥードに勝ったからこの選手は凄いんだっていう、そういう見方をされるのが嫌ですね。

——そういう風潮はありますよね。

山本　だからリングスで勝つことが凄いんだと。そういう風に見方を変えていきたいですね。今はみんなバーリ・トゥードの方に目がいっちゃってると思うんですよ。だからみんなも「やりたいやりたい」って言って。なんて言うんですかね、自分たちのやってることにもっとポリシーを持って、俺たちがやってることは凄いんだと、もっともっと世間にしろ、そういうことをアピールしていかなきゃいけない時期だなって最近思いますね。

——それはリングスの他の選手も言ってるように、リングス内での試合の価値を高めて、



98・7・20に行われた前田日明リングスラストマッチ。山本が迷うことなく顔面に掌底をブチ込むば、前田もそれに応えて打ち返す。互いに妥協することのないシバキ合いは、まさに「格闘技の原点」と呼ぶにふさわしいものだった。



し「これからのリングスを自分のスタイルでやっていきます！」と力強くアピール。観客からは大歓声と大拍手が送られた。山本はいつだって妥協しないゼ!!

——「一分間に百発打てれば、ガードもできないし、相手も攻撃できない」っていう（笑）。

強いって騒がれてるヤツがいたらブッ倒すしかないですから！



山本宜久【やまもと・よしひさ】S45・7・4、山口県下松市出身。190センチ、100キロ。リングス第1回入団テストに合格。H4・5・16、有明コロシアムでの成瀬昌由戦でデビュー。椎間板ヘルニアの治療のため長期欠場していたが、昨年7月の前田日明リングス・ラストマッチで復帰を果たす。が、その後ヘルニアの再発により再び欠場。前田日明引退試合でのアンドレイ・コピィロフ戦から完全復帰。これからの山本の試合からは目が離せない、というか、離すな！

最終的にリングスのタイトルマッチだけでお客さんを呼べるようにしたいってことですね。

山本　そうしていきたいですね。強いって言われるヤツがいたらソイツをブッ倒せばいいわけだから！　今は、バーリ・トゥードの方が世間に騒がれてるからそれをやるっていう考えはないですね。ボクは自分がリングスでやってることに誇りを持ってるし、それがやっぱり一番強いと思ってるし。その中で世間一般の認識とか価値を高めていきたいですね。ただ、その中で強いって言われるヤツがいれば倒していきたいですし、前に立ち塞がるものはブッ倒すしかないですからね。

──具体的に山本さんはブッ倒したい人はいるんですか？

山本　具体的にっていうか、強いって言われるヤツはジャンルとか関係なくブッ倒したいですね。ホント思考回路が消滅するような！　フハハハハハ！

──アハハハ！　山本さんはバーリ・トゥードをやりたくないっていうんじゃなくて、要請されたら相手次第で考えてもいいと？

山本　ボクが昔、ヒクソンとやりたいって言ったのは、バーリ・トゥード界で一番強いとか、柔術界でナンバーワンとかね、世界最強とかほざいてたじゃないですか（笑）。

──ですよね。400戦無敗とか450戦無敗とか言われてましたからね。

山本　だからボクは挑戦しただけなんですよ。そういう風に、強いって騒がれてるヤツがいたらブッ倒すしかないですから！

──ヒクソンと闘ったときはデビューからまだ3年目ぐらいでしたよね。

山本　そうですね。

──当時は「あのネックロックは極まってない」とか「ロープを掴んで」とかいろいろ言われましたけど、実際ヒクソン相手にあそこまで攻め込んだ選手ってほとんどいませんからね。体格の違いはありますけど、デビューから3年であそこまでやったわけですから、当然今やったらいけるんじゃないかなっていうのはありますよね？

山本　そうですね。そういう意味ではヒクソンとやりたいですよ。あの頃の弱い自分と今の自分は天と地の差があるんで。彼は現状維持じゃないですか？　技術は現状維持で、体力は坂道を転がってるじゃないですか？　ボクは技術はドンドン上がっていって、体力も上がっていってるんですよ。そういう意味じゃ、ねぇ？（笑）。

──「ねぇ」って言われても（笑）。やっぱりリベンジして欲しいですけどね。

山本　でもそういうので倒しても悲しいかもしれないですね（苦笑）。やっぱり全盛期で一番強いときに倒すっていうところにロマンがあるわけじゃないですか。それをヨボヨボのオッサン倒したってね。

──アハハハ！　ヨボヨボのオッサン（笑）。よくヒクソンって相手を選ぶって言われるじゃないですか。今となっては選んでもらえないかもしれないですね。

山本　相手を選ぶうんぬんっていうのは他のヤツが言ってるだけで、ヒクソンは実際に試合をやってきっちり結果を出してるわけだから。周りの意見はどうかなって思いますよ。でもヒクソンは試合するんですか？

──今年中に一回はすると思いますよ。喋ったこともないですけどね（笑）。山本さんは今となっては、それほどヒクソンに対するこだわりはないんですか？

山本　ヒクソンですか？　こだわりはありますよ。借りがありますからね！　ただねぇ、ヒクソンはお金がネックじゃないですか？

──そうですよね。一説には一億とも言われてますからね。

山本　ねぇ。高いですからね（苦笑）。でもそういうチャンスを頂ければやりますよ。

──やっぱり山本さんがリングス内でいえば一番手に入れたいものは、チャンピオンベルトってことになるんですか？

山本　……（考え込む）。

──そっか、山本さんは欠場してたから、ベルトより先に今はランキングに入らなきゃいけないんですね。

山本　あぁ、ランキングね。すぐチャンピオンとやらせてくれればいいんですけどね。

──アハハハ！「面倒臭せー！」って感じなんですかね（笑）。

山本　フハハハハハ！　でもどうでしょうねぇ。今の（ビターゼ・）タリエルっていうのは、どうでしょ？

──「どうでしょ？」って言われても（笑）。でもタリエルは単純にバカ強いと思いますよ。

山本　でもタリエルって現状維持じゃないですか？

──でも今やったら間違いなく見応えのあるシバキ合いになると思うんですけど。

山本　でもやっぱタリエルとやってグラウンドで勝ってもしょうがないんですよ。やるからには相手の得意分野で勝たないと。タリエルのハンマーみたいな掌底を打ち負かしてKOを狙う。これがロマンですよ！

──まさに男のロマンですね。

山本　タリエルをKOしたら面白いでしょ？

──山本さんの掌底百連発でKOしたらメチャメチャ盛り上がるでしょうね。

山本　でもタリエルは動きが遅いですからね。ボクが百発打てば、たぶん50発ぐらいで倒れちゃうんじゃないですか？　どんなヤツでも50発もやりゃあ倒れるでしょ（笑）。もしタリエルとやるときは、蝶のように舞い、蜂のよ

新生リングス

Bone & Blood!!

ブッ倒すしかないですから！

山本宜

たこともないですけどね（笑）。山本さんは今となっては、それほどヒクソンに対するこだ

50発もやりゃあ倒れるでしょ（笑）。もしタリエルとやるときは、蝶のように舞い、蜂のよ

うに刺してやりますよ！

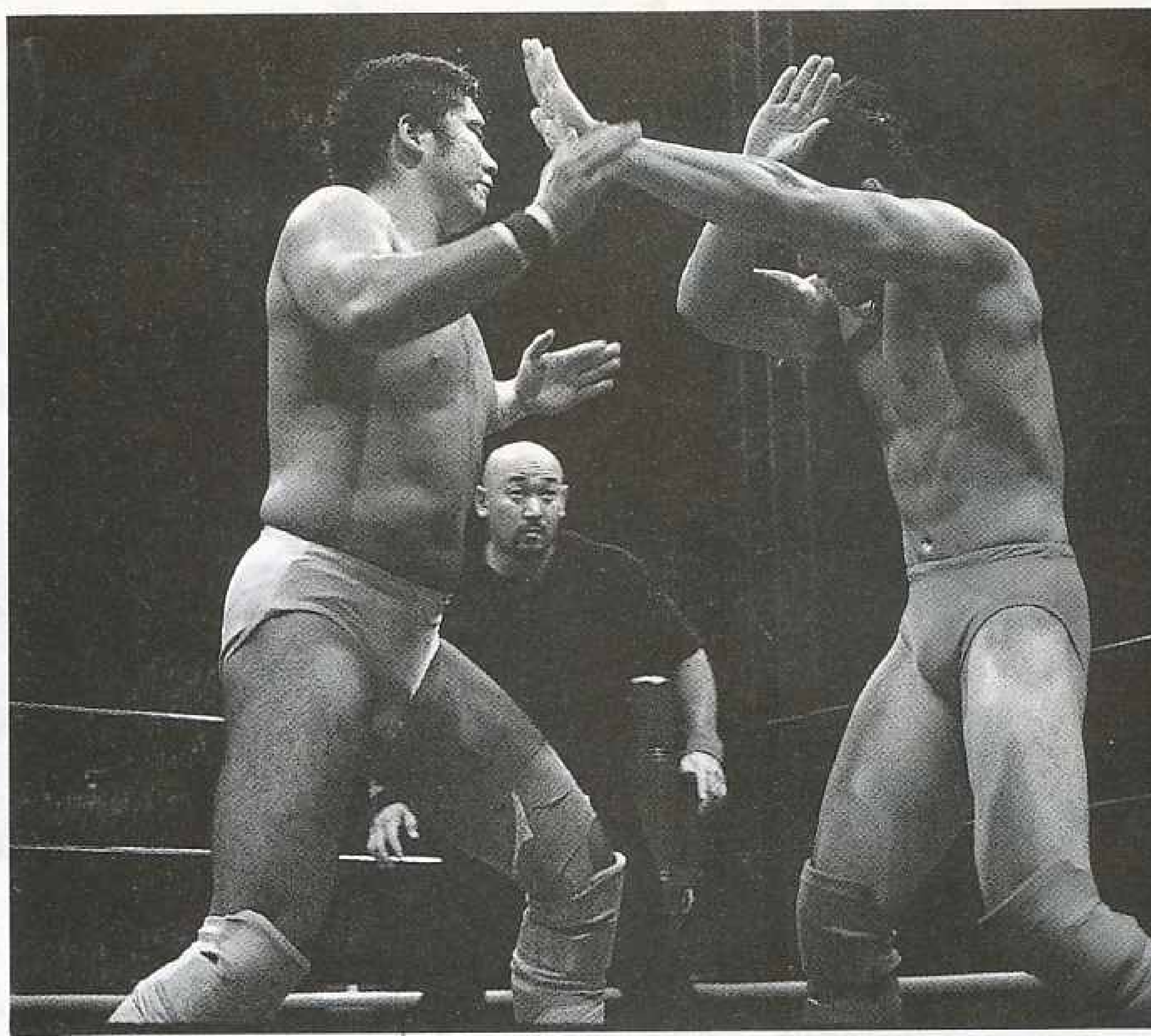
――アハハハハハ！　でも話を聞くと、山本さんのこれからの試合はＫＯかギブアップかって感じですね。

山本　判定とか引き分けってつまんないじゃないですか？　持久走みたいで。やっぱり勝つか負けるかそういう試合をしたいですね。もうしょうもない試合はしたくないですね。

――しょうもない試合はしない（笑）。話は変わりますけど、山本さんは、前田さんから一番影響受けたことってなんですか？

山本　前田さんの影響ですか？　前田さんの生き方っていうか、どんな困難に陥っても怯まないじゃないですか？　だからホント、不撓不屈の精神でここまでこられた人なんで。そういう意味では、ボクは間近で育った人間ですから、そういうのは凄く感じますね。不撓不屈の精神を受け継いでいきたいですね。

――山本さんは性格的に、前田さんと似てる部分があるってよく聞くんですけど。



98・9・21、横浜文化体育館で行われた、山本vs田村の一戦。開始早々からアグレッシブに動きまくった両者。一瞬たりとも休むことなくダウン、エスケープを奪い合う文句無しの好勝負となった。最後はフロント・ネックロックで田村が勝利を収めた。

山本　俺ですか？　そうなんですか？

――前田さんはよくトンパチって言われますけど、どうやら山本さんもトンパチらしいっていう情報が耳に入ってくるんですよ（笑）。実際はどうなんでしょうか？

山本　いや～、ボクはトンパチじゃないんじゃないですか。ボクはクレイジーじゃないですか（笑）。

――アハハハハハ！　いつからクレイジーになったんですか（笑）。

山本　よくわかんないですけど（笑）。でもホントのこと言うと、ボクは親鸞上人の生まれ変わりですからね。仏教ですから。

――えっ、親鸞上人！　すいません、それは知りませんでした（笑）。

山本　いやこれは真面目な話なんですよ。ボクはホント親鸞上人の生まれ変わりですから。

――それは、いつ頃から自覚されてたんですか？

山本　昔からの言い伝えですよ（笑）。

――そう言われて育ってきたと（笑）。

山本　そうそう（笑）。もともと仏教っていうか、お坊さんっていうのは子孫を残しちゃいけないんですよ。それを誤って子孫を残してしまってこうなったんですよ（笑）。

――アハハハハ！　誤って生まれてきたのが山本さんなんですね（笑）。

山本　そうです（笑）。

――掌底百連発で蝶のように舞い、蜂のように刺し、クレイジーで親鸞上人！　抜群ですね（笑）。ホント今後のリングスは山本さんが面白くしてくれそうですね。

山本　フハハハハハ！　でもホントに面白くなるのはボクがベルトを獲ってからですね。ベルトを獲ってから、「このベルトが欲しかったら俺に噛みついてみろ！」とか言いましょうか？

――そんな無理に言わなくても（笑）。でも言ったら面白いですけどね。

山本　フハハハハハ！　今はまだベルト持ってないからお腹が寒いんですよ。まずはとにかく一番を目指してね。

――前に「今はまだボクにはベルトが似合わない」って言ってた時期もありましたけど。

山本　誰ですか？　ボクですか？

――山本さんです（笑）。

山本　でもボクしかいないでしょ、ベルトが似合うのは（笑）。

――今ならもれなく前田さんがベルトに宝石をたくさん付けてくれるらしいですよ（笑）。

山本　えっ、そうなんですか？

――なんだっけな？　サファイアとかムーンストーンとかスペシャルなんとか。

山本　それ持って逃げたら怒られますかね（笑）。

――それは怒られますよ！　時価ウン千万って言ってましたから（笑）。

山本　じゃあ金庫買わなきゃいけないですね、ベルト獲った暁には。でもまあベルトを獲れば一番ですからね。

――山本さんが今一番欲しいものはチャンピオンベルトってことですね。

山本　ベルト……、ですね。金も欲しいですけど（笑）。借金だらけなんで。フハハハハハ！

――俺と一緒だ（笑）。

山本　でも掌底だけじゃないんですけどね。

――他には？

山本　掌底だけじゃなくて、1分間に20回タックル入ればいいんですよ！

――アハハハハハ！　それも新しいですね（笑）。

山本　確かに1分間に20回もタックル入ったら防ぎようがないですからね

山本　そうでしょ。フハハハハ！　蹴られても蹴られても、どんどんタックルいけば相手はブッ倒れるじゃないですか！

――お客さんも度肝を抜かれますよね。タックルタックルタックルで（笑）。

山本　フハハハハ！　1分間に百発の掌底と1分間に20回のタックル！　無酸素運動！　そういう試合やればお客さんもあくびをしてる暇もないでしょ。釘付けでしょ。俺から目を離すと相手は倒れてるから（笑）。

――アハハハハ！　一瞬たりとも山本さんから目が離せませんね（笑）。

山本　これから俺の試合はコマ送りで見ないとダメですよ。

――コマ送りって、それじゃあ会場にお客さん来ないじゃないですか（笑）。

山本　フハハハ！　そうッスね（笑）。

――「読者の皆さん、ゼヒ会場まで足を運んで下さい」と、山本さんが言った。

山本　フハハハハ！　そうッスね（笑）。

【99年4月7日、前田道場にて収録】

新生リングス Bone & Blood!!

RINGS JAPAN

成瀬昌由



本誌初登場

成瀬満開！最高潮!!
バーリ・トゥード出場宣言！

聞き手／チョロ
interview by Choro
撮影／森鷹博
photographs by Takahiro "rAw" Mori

3・22NK大会の試合後、「マスコミにお願いしたいのは、自分たちは月イチの興行で試合時間は10分程度です。道場で必死に練習しても、ページは白黒とか1、2ページです。ファンに伝えたいメッセージはいっぱいあるんで、取材に来て下さい。ボクは煽られればなんでも喋りますから（笑）。ページをいっぱいくれ！」と言って会見を締めた成瀬。わかりました！　成瀬さん、取材行きます。ページ取ります。煽ります。なんでも喋って下さい！

——成瀬さんとしては一度も対戦することなく前田さんが引退してしまったわけですけど、やっぱり悔いはありますか？

成瀬　悔いは……まあありますよ。やりたかったですけどね。でもやっぱり、カレリン戦の時の体調の前田さんとやれるんだったら良かったけど、それ以前の前田さんの体調だったら逆にやりたくなかったっていうのがあるしね。だからボクとの勝負を避けたと勝手に思ってますよ（笑）。

——避けられちゃいましたか（笑）。

成瀬　ハハハハ！　でもホント、この業界だけですからね。上司を平気で殴れるっていうのはね（笑）。

——その上、お金までもらえるという（笑）。ホント至れり尽くせりですね。

成瀬　そうですね（笑）。もちろんこっちも殴られるけどね。でもカレリン戦見たら、前田さん、まだまだやれるじゃんって思いましたけどね（笑）。

——前田さんに限ってそれはないでしょうけど（笑）。話は変わりますけど、この間のNK大会（3／22）の（デイヴ・）ポパイ（・デフェーン）戦後に「マスコミ関係の人にお願いがあるんですけど、ボクらは1ヶ月苦しい練習をして試合時間は7分とかで、ページは白黒か1、2ページしかもらえないんで、これからいろんなところに挨拶回りに行きたい」って言ってましたよね（笑）。

成瀬　言ってましたね（笑）。まあオレは現実主義だから、まあ観念主義でもあるけど、物事に問題があったりしたら、絵空事っていうか理想だけ語るヤッているでしょ。でもナンボなんでも取り上げる団体の偏りが凄い雑誌とかあるじゃないですか。

——ありますよね。まあそれはリングスファンなら誰もが感じてることですよね。

成瀬　まあ、こっちにも原因はないとは言えないから、今までのこと水に流せとは言えないけどね。

——まあでも一番リセットしやすいタイミングではありますよね。

成瀬　そうそうそう。俺はそれも言いたかったんですよ。確かに前田さんの持ってる権限とか影響力はまだまだ強いけど、実際今後のリングスのベクトルというか、リングスを動かしていくのは俺らですから。そういうマスコミとかとの関係も持ちつ持たれつの部分がありますからね。実際俺も無理なことを言ってるかなと思いますから。マスコミさん一人一人にも持ちページ数とかあるじゃないですか。担当記者的にはページ割きたいけど、編集長的にはいけないとか。そういうのあるじゃないですか？

——アハハハハ！　それはありますからね。

成瀬　だからまあ、言うだけはタダかなって感じで言ったんだけどね。あと、最も大事なのは、記者の人達にも、いい試合だから、凄い試合だからページを割こうと思わせるのも必要だから。あとは結局対戦相手にもよるんですよね。いくらオレがページ数をくれくれって言っても、（グロム・）ザザと試合やったら絶対ページなんて



まあ田村さんは、
I LOVEリングススタイルなんで

割かないだろうし（笑）。

——それはザザさんに失礼です（笑）。でもザザさんにしてもバーリ・トゥードで（ヒカルド・）モラエスとやったりしたら扱いも大きくなりますよね。

成瀬　そうなんですよ。だからボクは近いうちに、バーリ・トゥードやりたいんで、会社の方に頼んでるんですよ。

——そうなんですか！　成瀬さんはリングス内でバーリ・トゥードをやることに対しては抵抗はないんですか？

成瀬　もう全っ然！

——全くない、と。でも今のリングスはジャパンの選手だけを見ても、ある意味バラバラじゃないですか。

成瀬　そう。ひとりひとり個性有り過ぎっていうかね（笑）。

——それを不安に思っているファンもいるでしょうけど、ボクはそのバラバラさ加減が非常に面白いと思ってるんですよ。例えば、山本（宜久）さんや高阪（剛）さんはリングス内ではバーリ・トゥードはやりたくないって言ってますよね。

成瀬　そうですね。まあ高阪はアメリカでそれをメインでやってるのに、日本でやったら自分でやってることの安売りになるわけじゃないですか？　だからそれはポリシーを守るべきじゃないですか。

——そういう考えもあるでしょうね。逆に田村（潔司）さんなんかは、絶対にやらないということですよね。

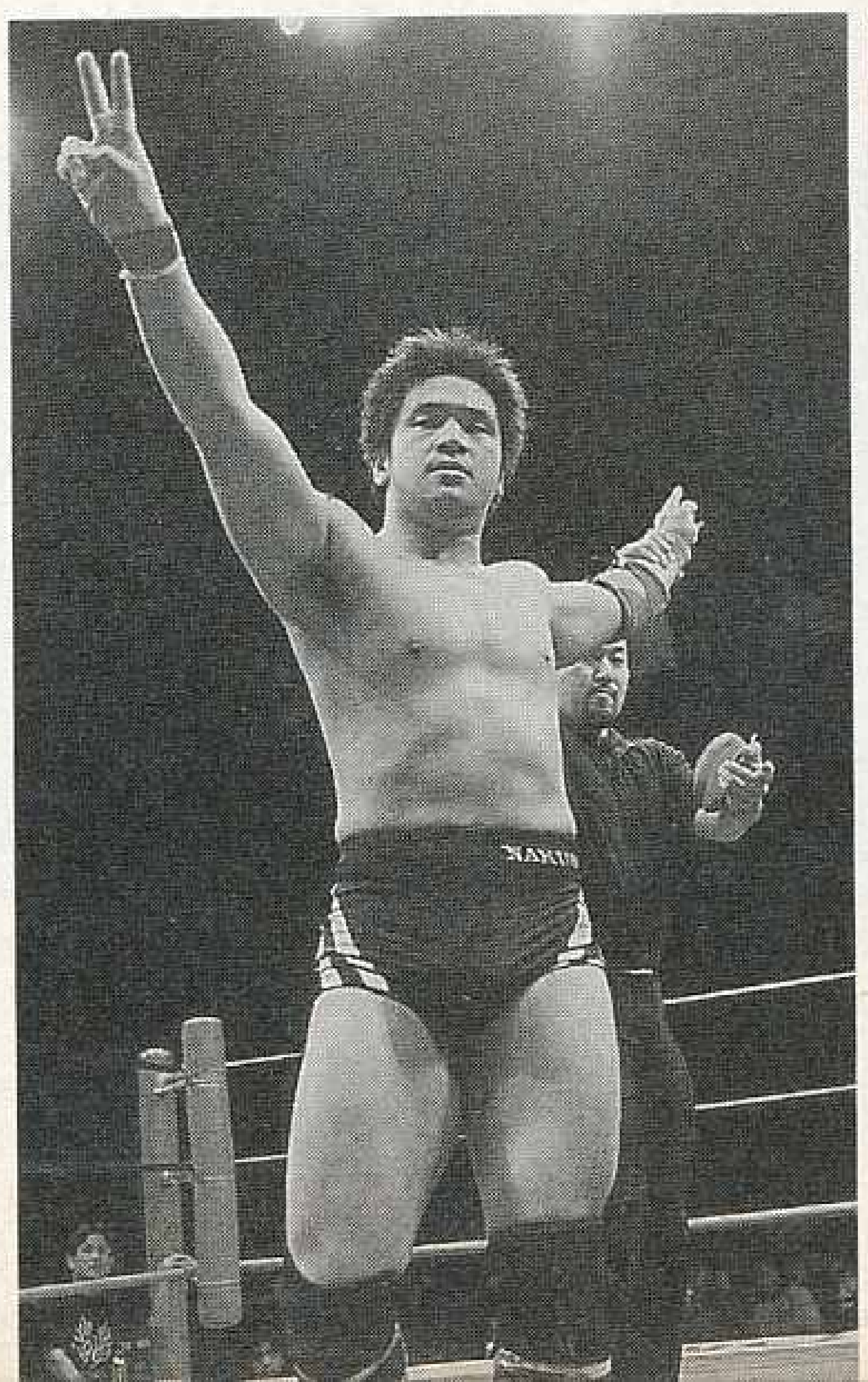
成瀬　まあ田村さんは、ＩＬＯＶＥリングススタイルなんで。

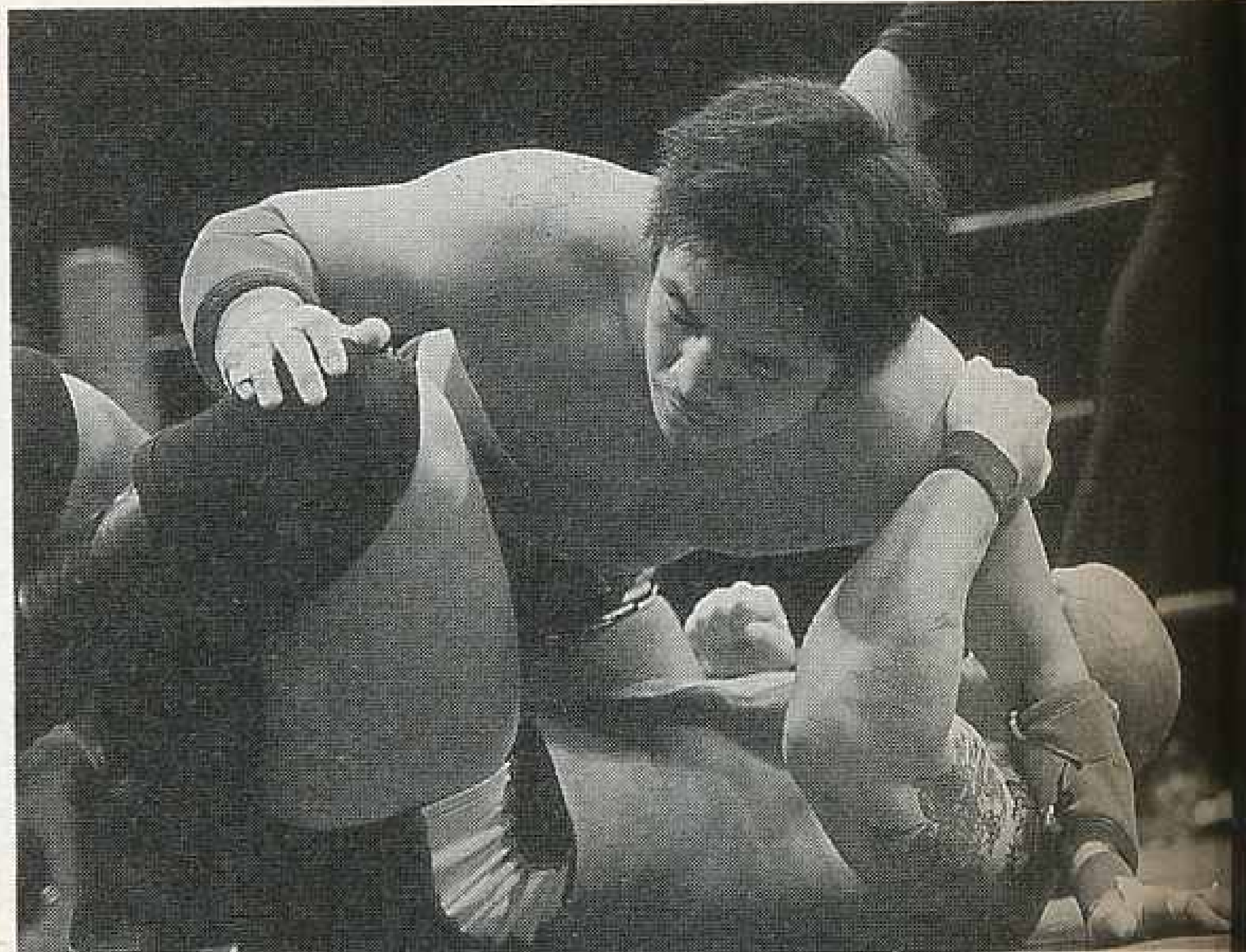
——アハハハハ！　ＩＬＯＶＥリングススタイル（笑）。成瀬さんはリングスの生え抜きですし、それこそＩＬＯＶＥリングスなんじゃないですか？

成瀬　えっ！　俺、ＩＬＯＶＥなの？ＩＬＯＶＥであるべきなの？

——「べき」なのって言われても（笑）。「べき」だと思います。でも当然、リングスに愛着はありますよね？

成瀬　もちろん愛社精神はありますよ。やっぱりボクが活躍することによってリングスも評価されるっていうところがあるし。他流派の人とやって勝てばリングスの成瀬が勝ったっていうのもあるし、成瀬が所属しているリングスって団体は強いんだなっていうところもあるし。まあファンの人は、個





99・3・22、NKホール大会。ポパイをアキレス腱固めで破った成瀬は満足げに勝利のアピールをキメた。試合後は「もっとお客さんにいろんなものを見せてあげたかった」と少々不満顔だった。

成瀬昌由

人とチームっていうか会社っていうのは別個には考えてくれないですから。選手は全然別と考えてますけど。まあボクとしては今のところ失うモノは何もないんで（苦笑）。

——何もないって成瀬さんはベルト（トーナメント21）持ってるじゃないですか（笑）。

成瀬　ベルト？　あぁ、あったねぇ。もちろん俺は95キロ以下級のチャンピオンだから、95キロ以下の選手とやったら絶対負けちゃいけないっていうプライドはあるけど。でも95キロ以下の田村さんに負けてるんで、本当は田村さんにチャンピオンベルトをあげたいんですけどね。

——それは問題発言だ（笑）。でもあのベルトは、いろんな意味で重いらしいですからね。

成瀬　身動き取れないくらい重たいですから（苦笑）。もう日を追うごとに身動き取れなくなってますね。

——身動き取れない？　なんだかよくわからないですけど大変そうですね（笑）。

成瀬　全然わかんないでしょ？　オレもまだ言えないこともあるから、うまく伝えられないと思うけど。ボクの選んできた道、チョイスしてきた道ってつらい方へつらい方へ来てると思うんで。でも自分ではつらいとは全然思ってないんですよ。毎日楽しくってしょうがない。でも客観的に見たらつらいことばっかってよく言われるからね。だから、「クスリでもやらなきゃやってられないでしょ？」ってよく言われるけど（笑）、俺はクスリ使わなくてもハイでいられるから。

——常にナチュラルハイ（笑）。

成瀬　ハイ（笑）。

——話は戻りますけど、成瀬さんは、UFCでも高阪さんのセコンドに付いたりしてましたし、早い時期からバーリ・トゥードには興味を示してましたよね。

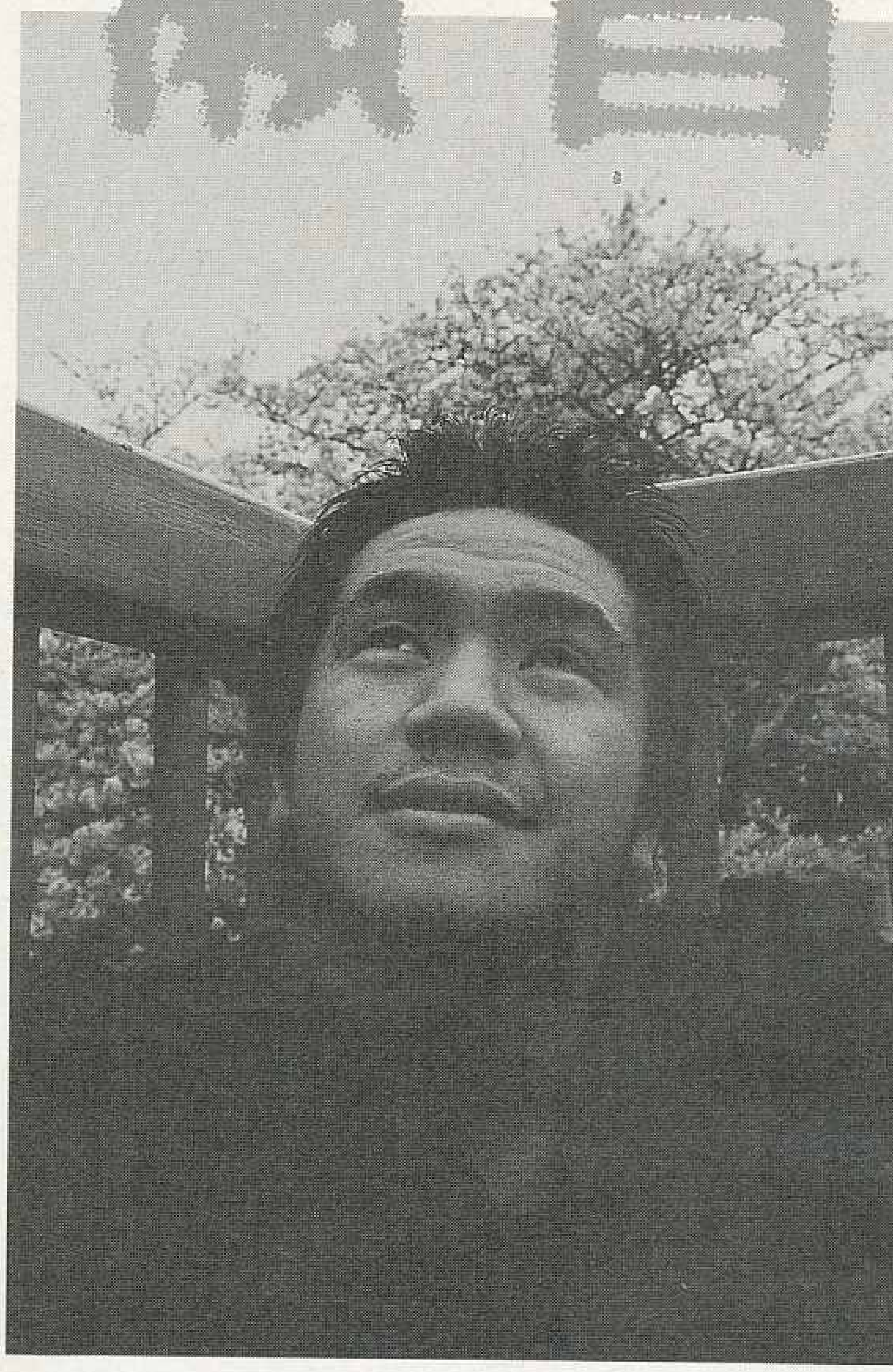
成瀬　そう。興味があったし、だから見に行ったし。でもボクはまだ26歳だけども70戦もしてるじゃん？

——若きベテランですからね（笑）。

成瀬　そうそうそう（笑）。だから身体もちょっとだけガタ来てるし、勝った瞬間もうこのまま死にたいって思うような試合をしたいですね。

——燃え尽きて白い灰になると？

成瀬　そうそう。1試合1試合これが最後だと思って最近は試合をしてるんで、だから今度の試合が最後、引退試合、引退試合ってそういう頭で考えて、覚悟を決めてやってるんで。実際身体がポキッて折れて、何もできなくなるかもしれないし、闘う魂が燃え尽きていないのに身体が動かないなんて、そんな悲しい状況はむかえたくないから。でもなかなかそんな試合には巡り会えないし、そんな相手には巡り会えないしね。だからバーリ・トゥードとかで強い外人とやれば、そういう気持ちになれるんじゃないですかね。もし決まったら、次の日ハルマゲドンが来てもいいぐらいの試合をしたいですね。



——モノ凄い覚悟ですね（笑）。

成瀬　この仕事は自分自身が納得するためにやってますから。でもなんか……、おかしいんですよ、頭が！

——いきなり何を言ってるんですか（笑）。

成瀬　ホント考えてることがおかしいんですよ。人に言えないっていうか、言ったら引かれちゃうし、まあ選手同士ではそういう内面的なことは言わないですからね。だってつまんないじゃないですか、今の世の中って。何でも満ち足りてるっていうか。

——ボク的には満ち足りないものも多いですけど、世の中的には満ち足りてるんでしょうね。

成瀬　アハハハハ！　でもこんなこと言ってると、どうしちゃったのって言われそうですけどね（笑）。

——そんなことないですよ（笑）。

成瀬　でも、この時代の中ではホントに貴重な生き方してると思うし、ここで、もっと磨きをかけて誰にもマネができないような道を選びたいですね。それがボクにとっての常識だし。今の時代ではおかしいって言われそうですけど、時代が時代ならそれは普通だと思うしね。第一こんな平和な時代の日本で格闘家やってる時点でおかしいんだから。格闘家っていうのは人を殺したりできる技術を持って生きてるわけだから、まあ、護身術はあるけど、結構この時代には無用のモノではあるからね。それに社会に対して存在意義がないわけじゃないですか。

——いやいや、そんなことないです。武道としての礼儀とか精神は凄く好きなんですけど（笑）。押忍押忍押忍押忍！

成瀬　まあ俺たちの試合を見て普段の生活の糧にしてるとか、勇気をもらったっていう人はいるけど、それは二次的な効果であって、日本は治安が悪いわけでもないし内戦があるわけでもないから、別に格闘家はいなくてもいいモノだとは思ってるんですよ。そこで自分の存在意義を求めたら、結局もう自分の自己満足に至っちゃうんですよ。だから燃え尽きるような試合がしたいんですよ。例えばエンセン井上のファイトも守りに行くよりは、殴り合ってギャンブルしてるじゃないですか？

——エンセンさんはリスクを背負っても攻撃に徹してますからね。

成瀬　そうそう。でも今の人達って、リスキーなことしないじゃないですか？　まあ中にはする人もいるけど。でもオレらなんかがやってることはプロスポーツの中でも危険度でいったらナンバーワンだと思いますからね。F－1とか登山とかもスポーツって言えば危険は危険だけど、人間が人間に関節を壊されたりとか、人間が人間の力で靭帯を壊されたりとかっていうのは凄い屈辱もあるし恐怖もあるし、味わう敗北感とか、それ以外にも達成感とかを比べたら、たぶん格闘技がナンバーワンだと思うんですよ。1対1でリングで闘犬のように噛み合うわけですから。見てる方は人間性なんか求めないわけですよ。そういう残酷さも全部比べたら、危険度は一番だと思いますよ。

——成瀬さんは、野球、サッカーとかといったプロスポーツと、自分がやっている格闘技と比較した場合、同列にあるものと考

成瀬 そう 興味があったし だから見に
行ったし。でもボクはまだ26歳だけども70

人とやれば そういう気持ちになれるんじ
ゃないですかね。もし決まったら、次の日

だから。格闘家っていうのは人を殺したり
できる技術を持って生きてるわけだから、ま

ったプロスポーツと、自分がやっている格
闘技と比較した場合、同列にあるものと考

新生リングス
Bone & Blood!!

えているんですか?

成瀬 いや一緒にされたら困るっていうのがありますね。ていうかいろんな意味で一緒にできないですよ。金も違うし、プロレスや格闘技っていうのはマイナーの中のメジャーであって、新聞とかには報道されないじゃないですか?

——まあ、この間の前田vsカレリン戦は一般紙にも出ましたけどね。

成瀬 まあでもアレは一回こっきりだと思うし。だから他のプロスポーツとは一緒にはされたくないっていうか、全然上のことやってるっていうポリシーはありますよ。

——でもいろんな意味で格闘家は恵まれてないですよね。いつの時代もそうですけど。

成瀬 そういう意味でのもどかしさはありますけど、それはしょうがない。そんなことで駄々こねてもタダの駄々っ子。やったスポーツ間違ったって言われるだけですから。それはしょうがないと思うしね。要はやることやってれば見てる人は見てるし、底辺拡大……。オレは実も味もないことは言いたくないんだけど、でもやっぱり……、これを言ったらちょっとヤバイ(笑)。

——なんですか、教えて下さい(笑)。

成瀬 いやこれは言えない(笑)。でも総合系で今のリングスって割と蚊帳の外じゃないですか。今はパンクラスと慧舟會だっけ?

——提携を結びましたね。

成瀬 それに大道塾も交流してますよね。そういう意味ではリングスって蚊帳の外になっちゃってるんで、その垣根を飛び越えて交流ができれば、今の総合系も世間に認知される大きなものになると思うんですけどね。なんか『東スポ』(東京スポーツ)にパンクラチオンをギリシャ大会で復活させるとか書いてあったけど(笑)。

——猪木さんが五輪監督にっていうヤツですね(笑)。

成瀬 あれは『東スポ』っぽいけど(笑)。でも将来的にそういう"場"ができれば、例えば修斗系は軽いクラスで選手を出せばいいし、U系は重いクラスの選手を出せると思うし、そうやって手を結んでいければいいと思うんだけどね。まあそれは現時点ではかなり困難なことだけどね(苦笑)。

——スグには無理でしょうけど、この世の中、何が起こるかわからないですから。世紀末も近いし、それこそハルマゲドンがくるかもしれないし(笑)。

成瀬 そうですよね(笑)。でも前田さんも引退しましたし、その下の世代が上に立ってやっていけば可能だとは思いますけどね。

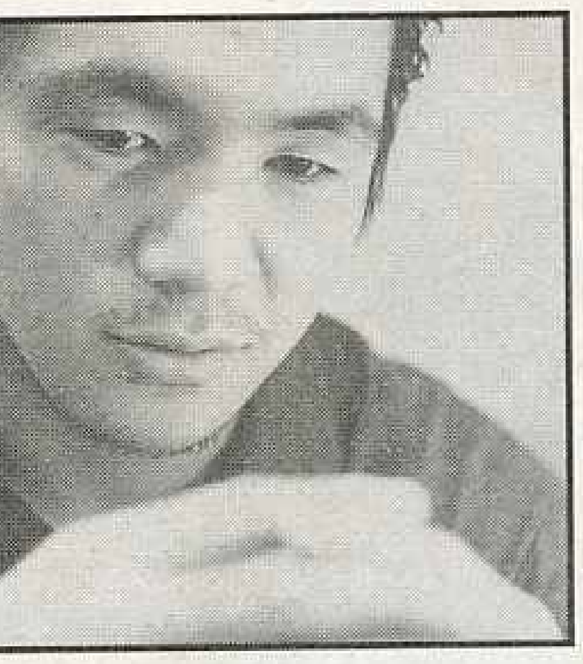
——下の世代の選手同士にはなにも含みはないでしょうからね。

成瀬 そうそう。ないんですよ。会場で会っても普通に話してるし。桜庭(和志)さんとか高山(善廣)さんとかも、金原さんのために道場とかにも練習に来るし。あとはホント誰が舵を取るかですよ。

——そうですよね。みんなが「俺が、俺が」って言ってたら、まとまるものもまとまらないですからね。

成瀬 そうですね。だから幕末の頃の西郷隆盛みたいに、私心を捨てて世のために全部を捧げるようなヤツがいて、引っ張ってくれる人がいればっていうのがありますけどね。選手はみんなプレーヤーの方だから頭脳がないじゃないですか。そういうプロデューサーの方はやりたくてもできないですから。

——プロデューサーとかスーパーバイザーとかを名乗りたいって人はいっぱいいるんでしょうけどね(笑)。



次の日ハルマゲドンが来ても いいくらいの試合をしたいですね

そういえばNK大会の時に、「金原選手は、業界の中で強さを認められている選手だから自分の業界の中での位置を計るにはいい選手だと思う」って発言してましたけど。

成瀬 金原さんは素晴らしい選手じゃないですか。だからU系の選手の凄さっていうのを、格闘技雑誌だけを読んでるファンとか修斗系のファンは割と知らないんですよ。

——リングス情報がほとんど載ってない格闘技雑誌もありますからね(笑)。逆にウチはリングスの雑誌かって言われることもあるんですけど(笑)。

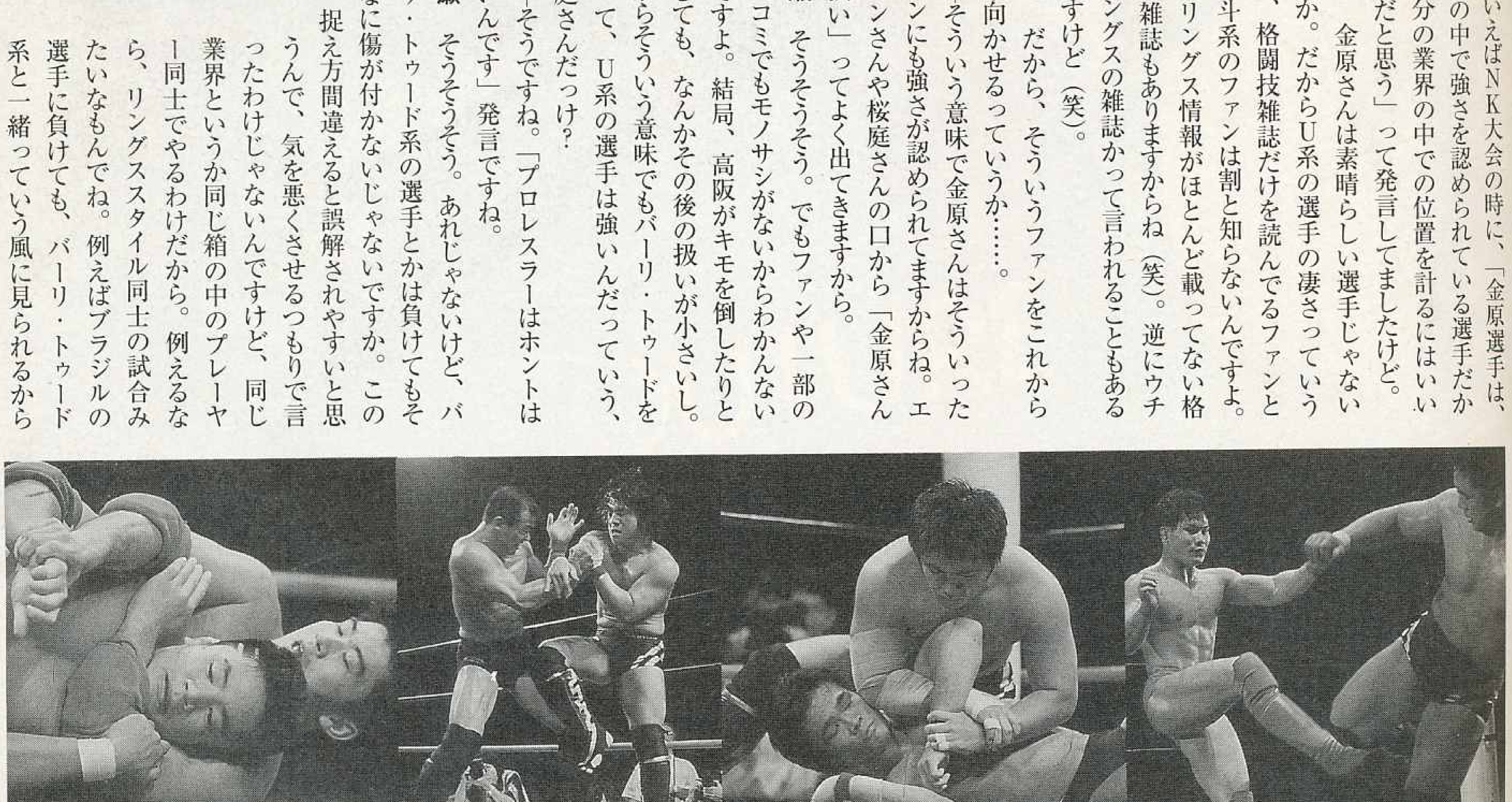
成瀬 だから、そういうファンをこれから振り向かせるっていうか……。

——そういう意味で金原さんはそういったファンにも強さが認められてますからね。エンセンさんや桜庭さんの口から「金原さんは強い」ってよく出てきますから。

成瀬 そうそうそう。でもファンや一部のマスコミでもモノサシがないからわかんないんですよ。結局、高阪がキモを倒したりとかしても、なんかその後の扱いが小さいし。だからそういう意味でもバーリ・トゥードをやって、U系の選手は強いんだっていう、桜庭さんだっけ?

——そうですね。「プロレスラーはホントは強いんです」発言ですね。

成瀬 そうそうそう。あれじゃないけど、バーリ・トゥード系の選手とかは負けてもそんなに傷が付かないじゃないですか。この辺、捉え方間違えると誤解されやすいと思うんで、気を悪くさせるつもりで言ったわけじゃないんですけど、同じ業界というか同じ箱の中のプレーヤー同士でやるわけだから。例えるなら、リングスタイル同士の試合みたいなもんでね。例えばブラジルの選手に負けても、バーリ・トゥード系と一緒っていう風に見られるから



H6・8・20、横浜文体での本間聡戦は判定で本間の勝利。その後、K－1のリングで再戦するも惜敗。成瀬にリベンジのチャンスは訪れるか?(写真左)。H・8・24、有明での対イーゲン井上戦。緊張感溢れる好試合もイーゲンの顔面パンチにより成瀬の反則勝ちとなる。試合後エンセンが乱入(写真左から2枚目)。H・10・6・27、NKホールでの山本健一戦。ベルトを賭けて行われた一戦は、アームロックで成瀬の勝利。(写真左から3枚目)。H・10・8・28、新潟での対田村潔司戦。成瀬の掌底で田村が鼻を骨折すれば、ヒザ十字で成瀬もヒザを故障するという壮絶な一戦となった。最後は田村がアキレス腱固めで勝利を飾る(写真右)。

成瀬昌由

ね。逆にレスラー系は負けたら「プロレスが負けた」みたいな言われ方するじゃないですか？　普段、バーリ・トゥード一本でやってる選手とそうじゃない選手がいつもと違うルールでバーリ・トゥード系の選手とやるのとでは周りの見方も違うし。

——ホントそうなんですよね。

成瀬　だからプロレスラーは強いっていう先入観があるからこそ、そういう風に見られるわけだし、昔だったらプロレスラーが勝って当たり前っていうのがあったかもしれないけど、今はU系というか、プロレスラーが勝ったら「勝った！」って大騒ぎされるけど、なんかどっちもどっちっていうか、この業界はホント独特なんですよ。

——そうですよね。確かにファンもマスコミも判断基準は様々ですからね。

成瀬　そうですよ。ホント強さっていう部分でナメられてる部分があるみたいなんで、そういう意味でもバーリ・トゥードをやって強さを証明したいです。なぜ俺がリングスのマットでバーリ・トゥードをやりたいかっていうのは、ただ単に一番乗りしたいだけ！（笑）。ジャパン勢の中で一本勝ち、KOでも関節技でもいいからね。まだその席は空いてるから。早いもん勝ちじゃないですか？　それを狙ってるんですけどね。

——誰かに先を越される前に（笑）。成瀬さんが考えるリングスの目指すべき方向性っていうのをお聞きしたいんですが？

成瀬　ボクの考え方は昔っからニュートラルで、わかりやすさがないんですよ（笑）。でも最近思うのは、内面的な自分の自己満足じゃないけど、俺が満足できたらお客さんも満足できると思ってるんですよ。だからもし俺がバーリ・トゥードやるんだったら、相手は誰であれグランド無視でやれたらなと思ってますよ。その方がお客さんも見てて楽しいと思うし。

——あとは、そういうアグレッシブな気持ちを持った選手が対戦相手として選ばれればいいんですけどね。

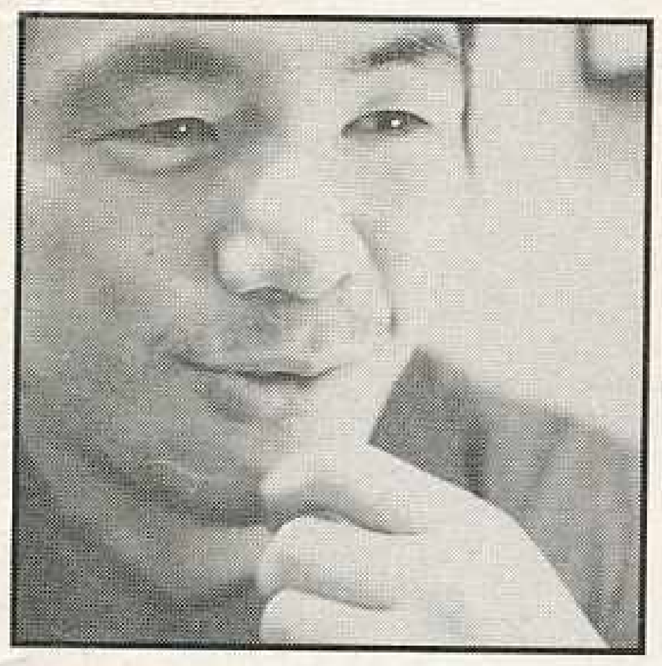
成瀬　それがベストですね。でもボクはやっぱりリングススタイルっていうのは、本当に世間一般に認められるファイトスタイルっていうかスポーツスタイルだと思いますし、バーリ・トゥードなんかより受け入れられやすいと思うしね。確かにバーリ・トゥードはバーリ・トゥードで素晴らしいと思うけど、つまんない試合はつっまんないじゃないですか？

——そうですよね。一方の選手でも、負けたくないって気持ち強く出ると、動きの少ないつまんない試合になりますからね。

成瀬　この間の、モラエス対金原さんと坂田とアルバレスの試合もそういうところがあったし。それはリングススタイルでも言えるんだけど、リングススタイルはエスケープとかブレークがある分展開があるじゃないですか。だから俺はリングススタイルを支持してるファンの方が多いと思うんですよ。ただリングスの興行の中でのバーリ・トゥード戦も勝てば官軍で、勝てばたぶん盛り上がると思うんですよ。今そんなに盛り上がってないのは日本人選手が勝ってないからなんですよ。面白い試合をしてないからなんですよ。そういう意味でボクは、負けてもいいから拳を握って殴り合いたいですね。だからボクもこのインタビューで明言しとけばもう逃げられないから。

——会社も組まざるを得ないってわけですね。カットされなきゃいいですけど（笑）。

成瀬　そうそうそう（笑）。会社もそうだし、オレも逃げられないし。これだけ言っといて試合でカメになったらね。「オマエ言ってることとちゃうやんけ！」って言われるけどさ（笑）。



なぜ俺がリングスのマットでバーリ・トゥードをやりたいかっていうのは……

——アハハハハ！

成瀬　でもこういうこと言ってから試合に臨むっていうのがリスキーじゃないですか。それでケツまくってタックルにいったらそれまでだろうし。

——やっぱりファンも選手のそういう発言を聞くと、そんなに自信満々に言うんだったら見に行こうってなると思うんですよ。

成瀬　そうそう。でも、バーリ・トゥード自体もあと1年後、2年後とかどうなるかわかんないですけどね。以外と1年後になくなってるかもしれないし、まあルールはドンドンドンドン変わってくると思うんですよ。それが今は淘汰されていってるってことだと思うんですけど。

——そういった時代だからこそ成瀬さん、これからのリングスに期待してるんですよ。

成瀬　はい（笑）。ただホントに今後リングスの置かれてる立場は面白いと思いますよ。リングスってヒールにもなれるし、救世主にもなれるし、どっちにもなれるニュートラルな位置にいるんですよ。どっちに付いていいかわかんないファンもいるから、ドサクサじゃないけど、ここでリングスがチョイスするところを間違えずに選択していけば、ホント官軍になるか賊軍になるかわかんないけど面白くなると思いますよ。スッゲーつまんなくなるか、スゲー楽しくなるかどっちかだと思うし。中途半端はないと思うんで。

——それは期待できそうですね！　リングスのジャパン勢はケガ人が続出してますけど、成瀬さんは体調はバッチリなんですか？

成瀬　体調は最高潮ですよ（笑）。近年稀にみる最高潮。絶好調！

——絶好調ですか（笑）。どうもありがとうございました。

成瀬　最後に一言いいですか？

——なんですか？

成瀬　年老いた豚には理解できない狼の苦しみ。わけわかんなくてすいません！

——はぁ？　ありがとうございました（笑）。

【99年4月5日、九段下・カフェ・ル・グランにて収録】



成瀬昌由【なるせ・まさゆき】S48・3・15、東京都杉並区出身。173センチ、96.7キロ。リングス第1回入団テストを受ける。身長が規定を下回ったものの、たまたま目の前にあった鉄柱に頭突きをブチ込み、見事身長を4センチ伸ばす。そのガッツが認められ合格となる。H4・5・16、有明での山本宜久戦でデビュー。デビュー7年目ながらリングスでは一番の試合数を誇る若きベテラン。トーナメント21（中量級）初代王者でもある。

らなと思ってますよ。その方がお客さんも見てて楽しいと思うし。

らね。「オマエ言ってることとちゃうやんけ！」って言われるけどさ（笑）。



いと思いますよ。リングスってヒールにもなれるし、救世主にもなれる

——はぁ？　ありがとうございました（笑）。

【99年4月5日、九段下・カフェ・ル・グランにて収録】

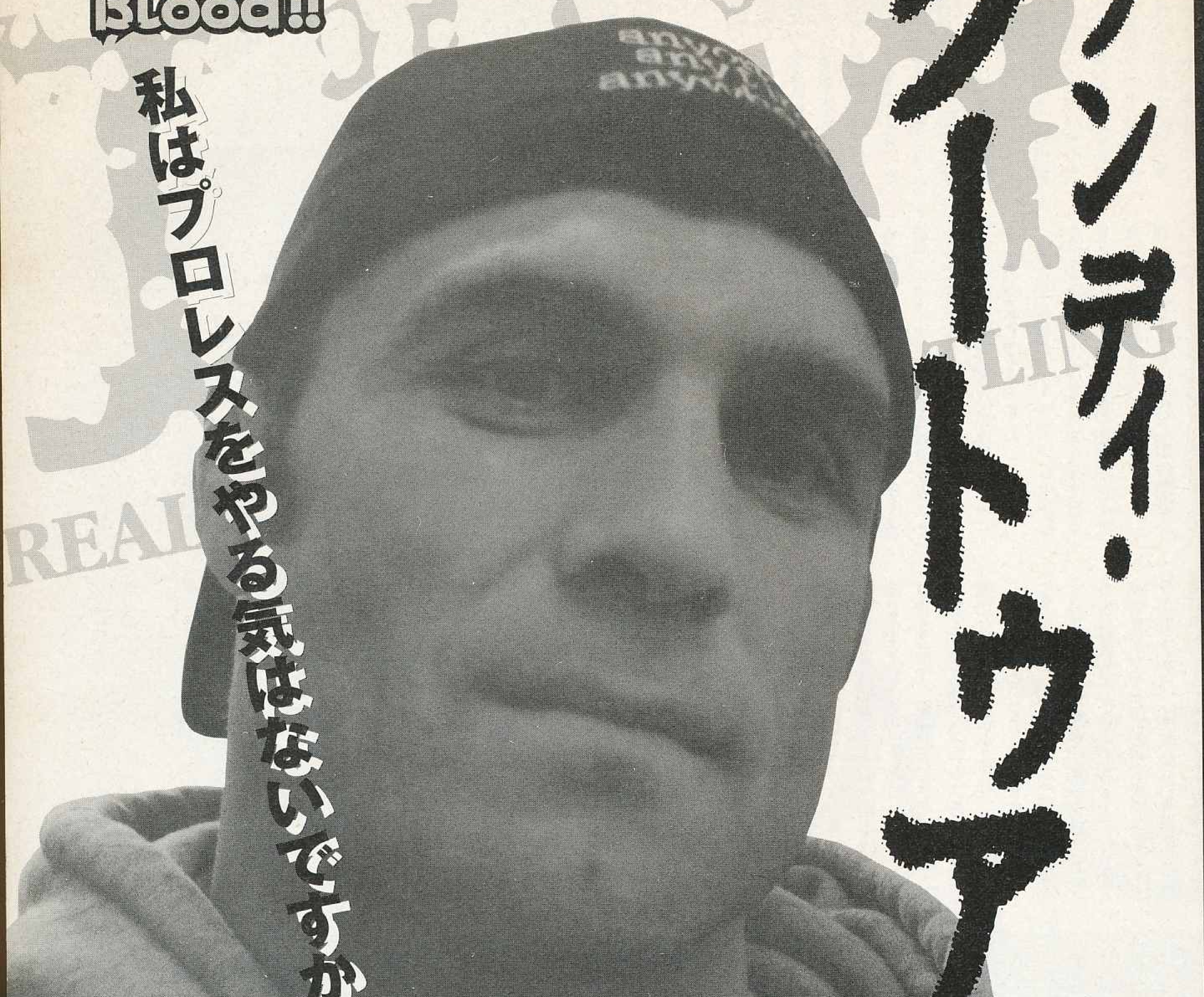
新生リングス Bone & Blood!!

【UFC第13回覇者、UFC第3代ヘビー級チャンピオン】

ランディ・クートゥアー

私はプロレスをやる気はないですから

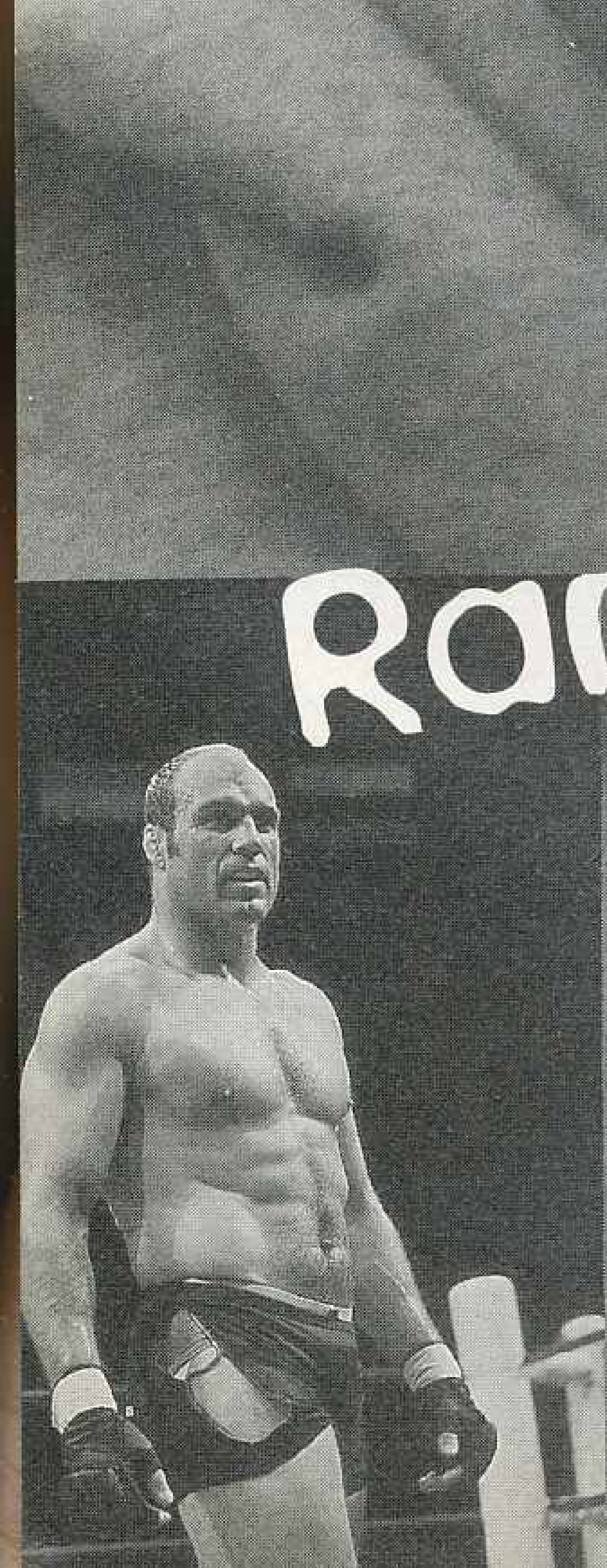
Randy COUTURE

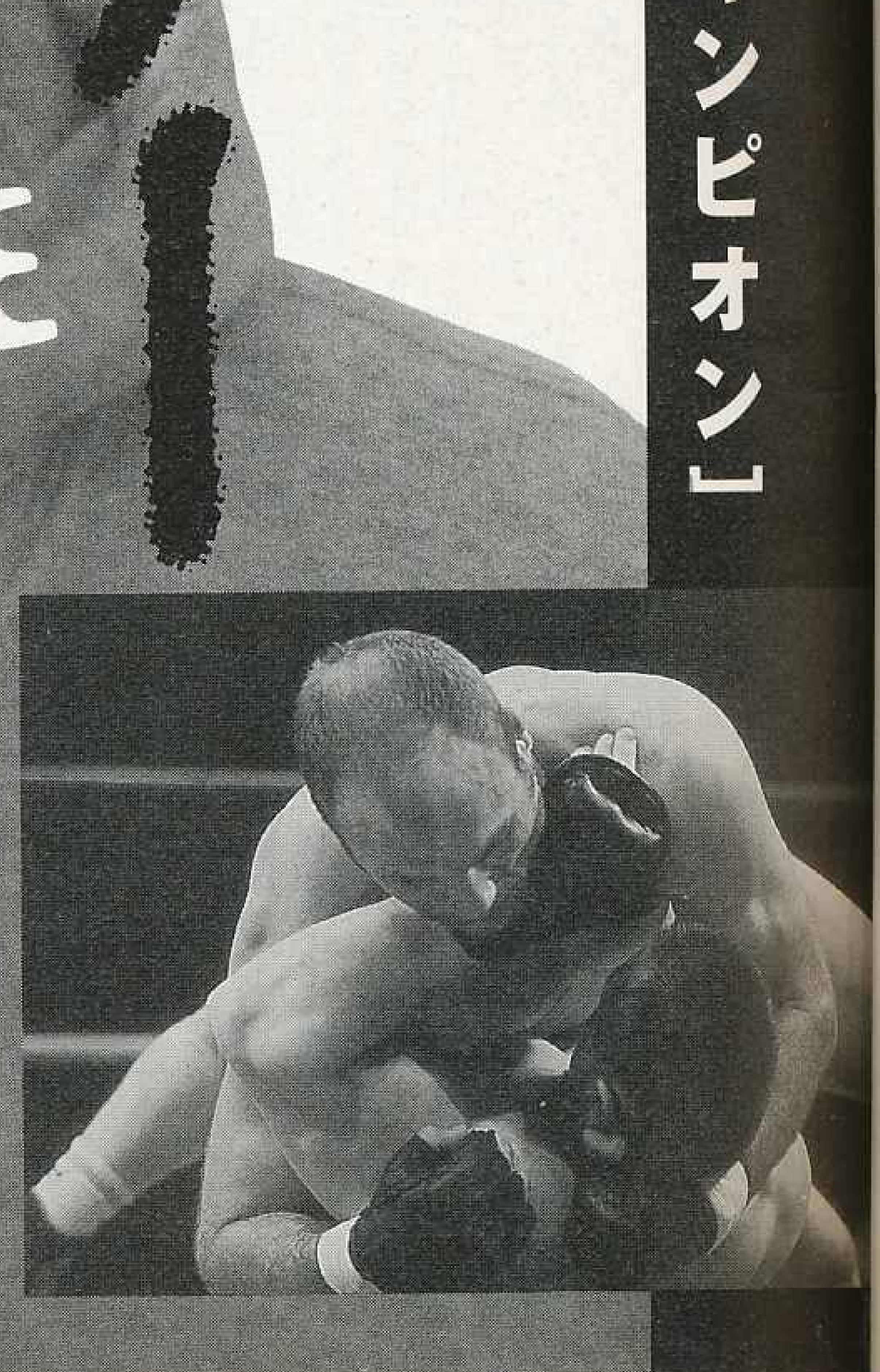


リングスマットに、エリート・アマレス集団「ＲＡＷ ＴＥＡＭ」が参戦してきた。エリクソンをはじめ強豪揃いの「ＲＡＷ」より第一の刺客として送り込まれたのがクートゥアー。『ＶＴＪ'98』でエンセンに破れ、3・22リングスＮＫ大会ではミーシャに敗戦を喫した。

精彩を欠いた感があるクートゥアーだが、クートゥアーの実力は、まだまだあんなモンじゃない。これからが始まりだよ！　というわけで、ミーシャ戦直後の「ＲＡＷ ＴＥＡＭ」控室を直撃！

聞き手／チョロ
Interview by Choro
撮影／ヒロ
photographs by Hiro





――どうもどうも、『紙のプロレス』のチョロと申します（とクートゥアーに名刺を手渡す）。今日の試合は残念でしたねぇ。

クートゥアー （話も聞かず名刺をしげしげと眺め）アナタの会社は『ダブルクロス』っていうんですか？

――そうなんですよ。

クートゥアー ハッハッハッ！ジャパニーズジョーク？

――いやいや、ジャパニーズ本気（マジ）！（笑）。（『ダブルクロス』の意味が分からない人は各自調査）クートゥアーさん、残念ながら今日は（イリューヒン・）ミーシャ選手に敗れてしまいましたが、昨年同じ会場（10・25、ＶＴＪ98）で闘ったエンセン（井上）さんとミーシャさんでは、どちらから先にリベンジするつもりですか？ 試合直後になんですけど（笑）。

クートゥアー ノーノーノー！ 私はリベンジするつもりはないですよ。

――そっか、リベンジじゃないか。リマッチは当然考えてますよね？

クートゥアー ＯＫ、ＯＫ（笑）。私はエンセンでもミーシャでもどちらが相手でも構わないですよ。

――どちらでも構わないと。今日闘ったミーシャ選手は昔からリングスに出場してるので、声援は圧倒的にミーシャ選手の方が多かったじゃないですか。「ミーシャ！ ミーシャ！ ミーシャ！」っていう。やっぱり気になるものなんですか？

クートゥアー それは別に気にはなりませんよ。でも次の試合からはきっと「ランディー！ ランディー！ ランディー！」と声援してくれると思いますから（笑）。

――アハハハハ！ ランディーコールに変えてみせる自信があるんですね？

クートゥアー もちろんそうです（微笑）。

――頼もしいですね！ 今日はバックステージから熱心に観戦してましたけど、誰か目に付いた選手はいますか？

クートゥアー みんな素晴らしいものを持ってると思いましたね。ただ私は選手一人一人のサブミッションの技術を見るので一生懸命でしたから。次から次へとテクニックを出してくるので付いていくので精一杯でしたね。だから特に目に付いた選手っていうのはないんですよ。しいてあげれば目が疲れましたね（微笑）。

――アメリカンジョークですね（笑）。今日はバーリ・トゥードマッチでしたけど、クートゥアーさんはリングスルールで試合をする気はありますか。充分対応できると思うんですが？

クートゥアー そうですね。ゼヒやってみたいですね。

――あっ、でもリングスルールではクートゥアーさんの得意の顔面パンチは反則になっちゃうんですけど？

クートゥアー う〜ん、（頭の中でシュミレーションをする）ＯＫ、ＯＫ！

――リングスルールもノー問題！ ノークエスチョン！

リングスルール？ ゼヒやってみたいですね

クートゥアー ノークエスチョン？ 質問がなかったら、終わりにしましょうか（笑）。

――ちっと、そうじゃなくて（笑）。

クートゥアー でもリングスルールにはトライしてみたいですね。

――今日の1試合だけで判断するのは難しいとは思いますが、クートゥアーさん的には、ＵＦＣとリングスマットではどちらがやりやすいんでしょうか？

クートゥアー まあ慣れもありますけど、オクタゴンの方がリラックスして試合ができますね。オクタゴンは今日みたいにロープ際でもつれるっていう問題がないですから。でもその点を除けば全然問題はないですよ。

――それで、（マーク・）コールマン選手やマーク・ケアー選手とかバーリ・トゥード系で活躍している選手が、ＷＷＦを始めとするプロレス団体からオファーを受けているみたいなんですけど、クートゥアーさんにもプロレス団体からの誘いはあるんですか？

クートゥアー そういう話もないことはないですね（微笑）。

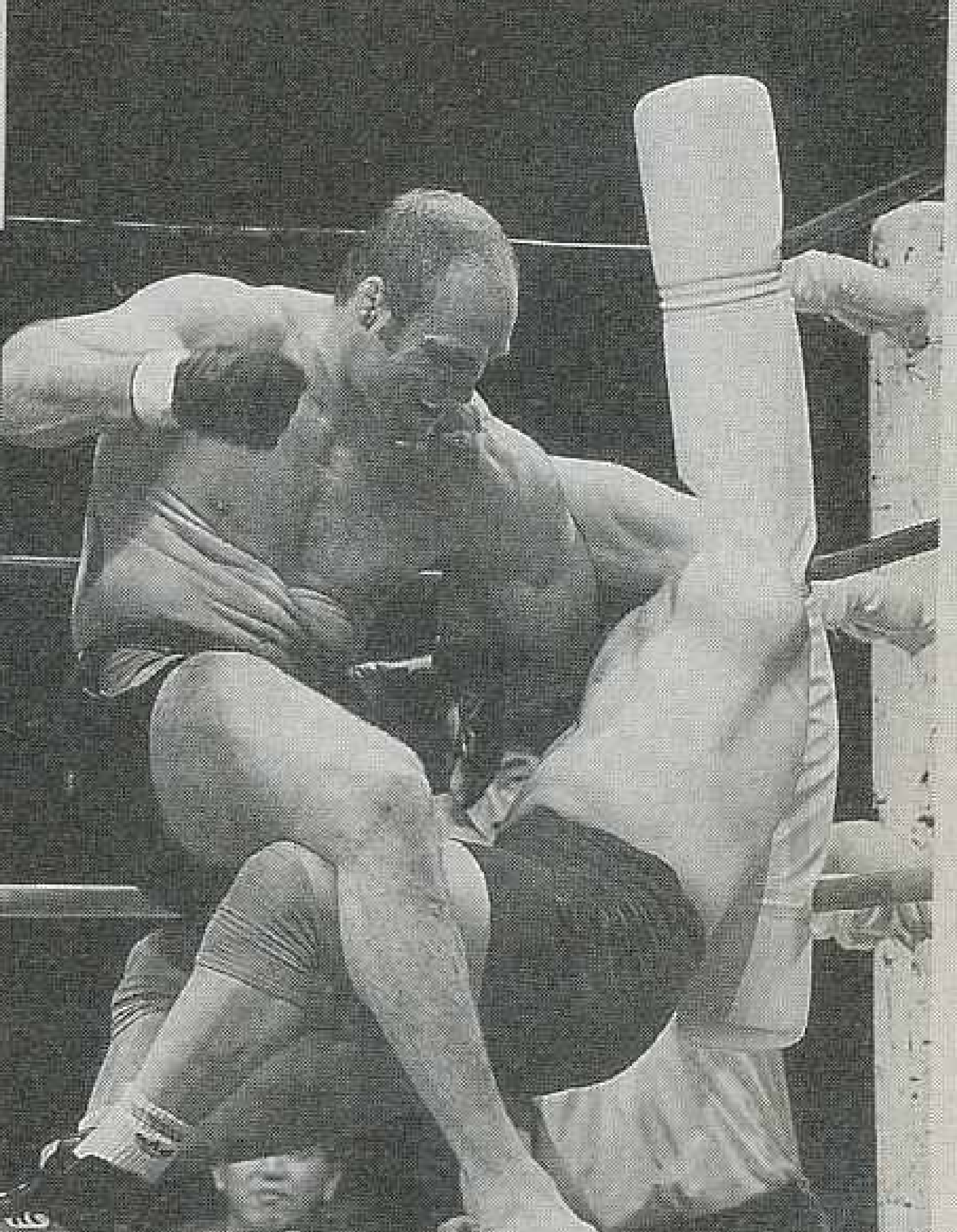
――クートゥアーさんはプロレスに興味はあるんですか？

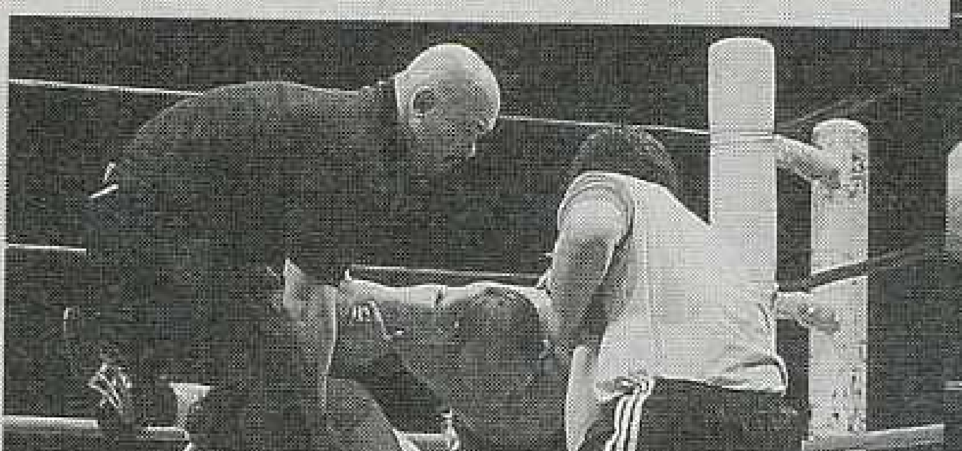
クートゥアー 興味というか、私個人に関して言えば、プロレスをやる気は頭の片隅にもないですね。私はプロレスはあまり好きではありませんから（キッパリ）。確かに金銭的には潤うとは思うんですけど、プロレスっていうのは結局エンターテイメントだと思ってますからね。私はアマチュアレスラーですから。基本的にお金を目当てにエンターテイメントの世界に行きたいっていう考えはないですね。

――そうなんですか。クートゥアーさ

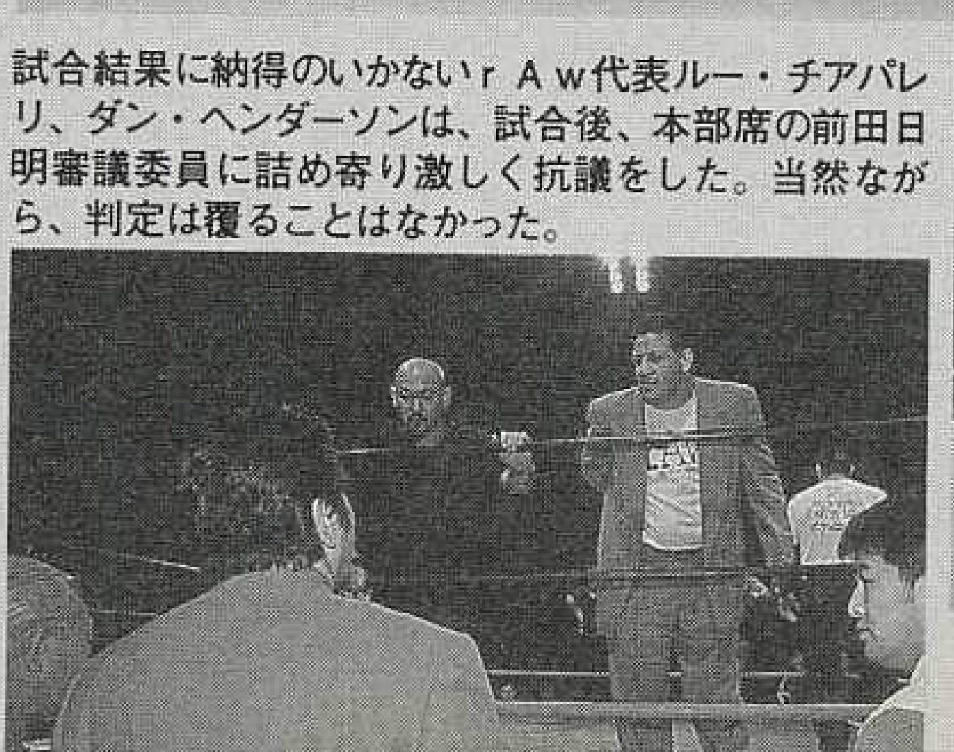
3・22リングスNKホール大会
スペシャルマッチ（20分1本勝負）
○イリューヒン・ミーシャ（7分43秒・腕固め）ランディ・クートゥアー●

スタンドで試合を優位に進めていたクートゥアーはコーナーまでミーシャを追い込み、パンチを振り下ろそうとしたが、ミーシャに左腕を取られてしまう。ミーシャはそのままグラウンドに引きずり込み、問題のフリーズシーンへと移行する。





試合結果に納得のいかないｒＡｗ代表ルー・チアパレリ、ダン・ヘンダーソンは、試合後、本部席の前田日明審議委員に詰め寄り激しく抗議をした。当然ながら、判定は覆ることはなかった。



ランディ・クートゥアー、リングス初戦の相手はイリューヒン・ミーシャ。

20年以上ものレスリングキャリアを誇るクートゥアーと、15年以上ものサンボ及びにコマンドサンボキャリアを誇るミーシャの激突。

「米露バーリ・トゥード戦」となったこのスペシャルマッチ。

序盤からクートゥアーがロー、ヒザ、パンチで攻め込めば、ミーシャも左ストレートでクートゥアーをグラつかせ、気が付けばクートゥアーのコスチュームが破れるほどの、スタンドでの激しい攻防が繰り広げられた。

コーナーに追い込まれたミーシャはクートゥアーの腕を持ったままグラウンドに引きずり込み、ロープ際でもつれるとレフェリーからフリーズが掛かった。

両者をリング中央まで移動させ、ミーシャのアームロックがほぼ極まりかけの状態で再開となった。すぐさまアームロックが極まりクートゥアーがタップ（クートゥアー自身はタップは認めず）し、ミーシャの勝利が告げられた。

笑顔でポージングをキメるミーシャを尻目に、レフェリー及びに前田審議委員に怒りの抗議を行った「ｒＡｗ ＴＥＡＭ」の面々。一足先に控室へと戻ったクートゥアーはしばらく経つといつもの温厚で無口な男へと戻っていた。

このまじゃ、観客も納得がいかないだろう。もちろんクートゥアーも。ミーシャも。そしてボクも。もう1回やれや、もう1回！ でしょ？

クートゥアー　それは別に気にはなり

ノークエスチョン！

——そうなんですか。クートゥアーさ

ートゥアーの腕を持ったままグラウンドに引きずり込み、ロープ際でもつれると

や、もう1回！　でしょ？

新生リングス

Bone & Blood!!

んは年齢的なものを考えて、将来的にエンターテイメントの世界へ行こうっていうのも一切ないんですか？

クートゥアー　私も年齢的なものを考えると、あと何年か経てばもう肉体的に疲れ切っていると思うので、その様なことをやる余裕はないと思います。

——今度、コールマン選手と高田選手が闘うんですけど、ご存知ですか？

クートゥアー　もちろん知ってますよ。同じ日にケアーとエンセン（井上）も対戦するみたいですね。（その後、ケアーの負傷により、このカードは延期となる。無念）

——詳しいですね（笑）。高田選手とコールマンの試合はどのような展開になると思いますか？

クートゥアー　それもまた難しい質問です（苦笑）。ただ私はどちらかといえば、ミスター・タカダの方が有利だと思いますね。

——それはどのような理由でですか？

クートゥアー　コールマンはスタミナ面での不安があると思いますから。おそらく、2、3分でスタミナが切れてしまう可能性が高いと思います。その時間を乗り越えられれば、ミスター・タカダが有利でしょう。

——コールマンのパワーはモノ凄いですが、その反面スタミナを危惧する声はありますからね。

クートゥアー　3、4分が勝負になると思います。コールマンがその時間内でダメージを与えるかもしれませんが、そこを乗り切ればミスター・タカダに勝利の女神がウィンクすると思いますよ。

——ウィンクですか！　チュッ♡って感じですね。よくわかんないけど（笑）。それと、ヒクソンについてはどのような印象を持っていますか？

クートゥアー　私は基本的にヒクソンは好きな選手ですし、いい選手だと思っています。ただ、みんなが騒ぐほど強い選手とは思ってないですけどね。

——というと？

クートゥアー　今までの彼の試合は、相手の力にクエスチョンが付くところがありましたからね。彼がもう少しレベルの高い選手と闘ったらどうなると思います？　私はそういった選手との試合を見てみたいですね（微笑）。

——見てるだけじゃなくて、クートゥアーさんもやって下さいよ（笑）。

クートゥアー　それは面白いですね（微笑）。チャンスがあれば是非やらせてもらいたいと思ってますけどね。

——相当自信あるみたいですね。

クートゥアー　みんなが「ヒクソンが一番強い」と言ってヒクソン神話を作りあげていますけど、それは結局作られたものだと思いますからね、きっと（微笑）。確かにヒクソンは素晴らしいテクニックとスキルを持った選手だと思いますし、評価できる選手ですけどね。例えば、私が彼と試合をして負けても、私には失うものは殆どないわけですよ。いつでもやっていいですよ、いつでも（微笑）。

——静かなる闘志を感じます。ゼヒまた日本に来て下さい！

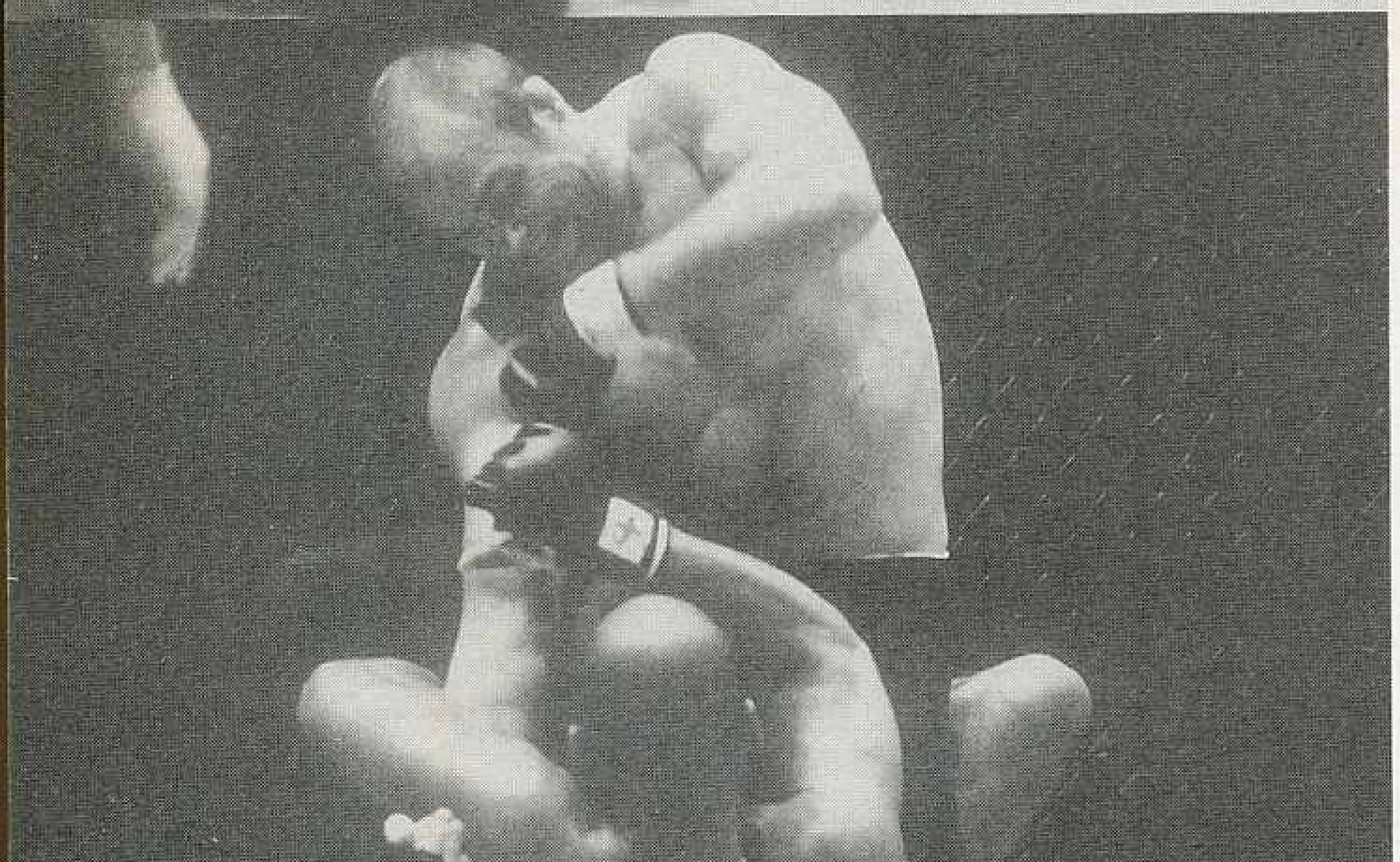
クートゥアー　それは約束します。その時は是非「ランディーコール」をお願いしますね（微笑）。

——OK！　ランディー!!

【3・22、東京ベイNKホール内・rAw TEAM控室にて収録】



97・5・30■『UFC13』にR・モラエスの代打として出場したクートゥアー。一回戦では、リングスでもお馴染みのT・ホームを秒殺すると、続くS・グラハムをパンチでKO。初出場で初優勝をキメた。

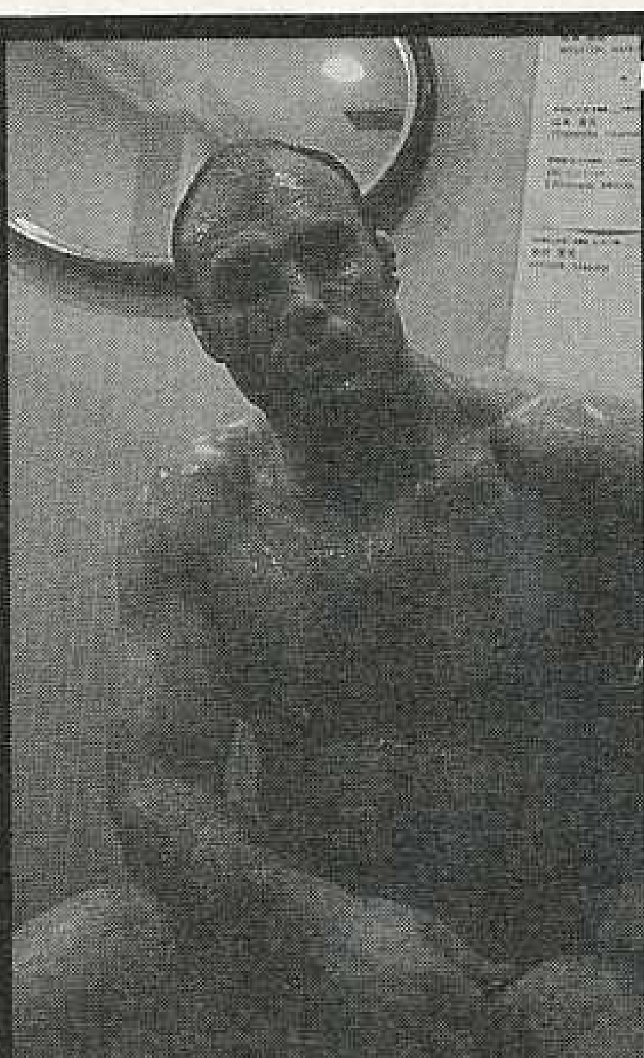


97・12・21■『UFC・J』ではモーリス・スミスの持つヘビー級王座に挑戦。グラウンドでの闘いに終始し、盛り上がりに欠ける試合に。判定ながらスミスを下したクートゥアーは第三代王者に輝いた。



ランディー・クートゥアー■1963年6月22日、米・オレゴン州在住。185センチ、102キロ。グレコローマン・レスリングにおいて数々の優勝経験（現在もVTと並行して活躍中）を持つ。『UFC13』に急遽参戦し初出場で初優勝を飾ると、『UFC15』では、V・ベウフォートを撃破する。その後、『UFC・J』でM・スミスを下し第三代UFC王座に輝く。『VTJ98』ではエンセンと闘うも腕十字で破れる。3月のRINGS・NK大会に参戦。

3・22 NKホール大会、ミーシャ戦後のランディ・クートゥアーのコメント抜粋



——試合後、抗議していた内容からお聞きしたいんですけど？

クートゥアー　コーナーからリング中央まで戻されてたんですが、あの時はアームロックは極まってなかったんです。そのままの状況からスタートすれば良かったんですけど、ミーシャ選手が用意できていないうちに私の腕を背中に回してアームロックを極めたということを抗議してたわけです。

——対戦相手のミーシャ選手の印象は？

クートゥアー　非常にいい選手だと思います。しかし、私のパンチのいくつかが効いたようで、彼は疲れてきていたと思いますし、攻撃に行こうと思っていた矢先にこういうことになってしまい残念です。

——リングスのマット自体の感想は？

クートゥアー　リングスは選手も環境も素晴らしいと思います。ただ……、リングスのマットという質問を、本当のマットと解釈するならば、マットはもう少し大きい方がいいんじゃないかと思います（笑）。

——持ってるモノはすべて出せましたか？

クートゥアー　最初の私が抗議したところまでは非常に良かったと思いますし満足してます。ただレフェリーがフリーズをした時の状況のまま試合が再開されなかったことは問題だと思いますね。あとは非常にいい試合だったと思います。

——今後の予定は？

クートゥアー　リングスだったら、いつ来てもいいですし、誰とやってもいいです。ただそれは（rAwチーム代表ルー・チアパレリを指し）この人が決めることですから（笑）。誰と闘いたいかといえば、ミスター・マエダですね。彼が引退からカンバックして、そして私とファイトしてもらうというのが希望です。……冗談ですけどね（笑）。

突如大荒れ!

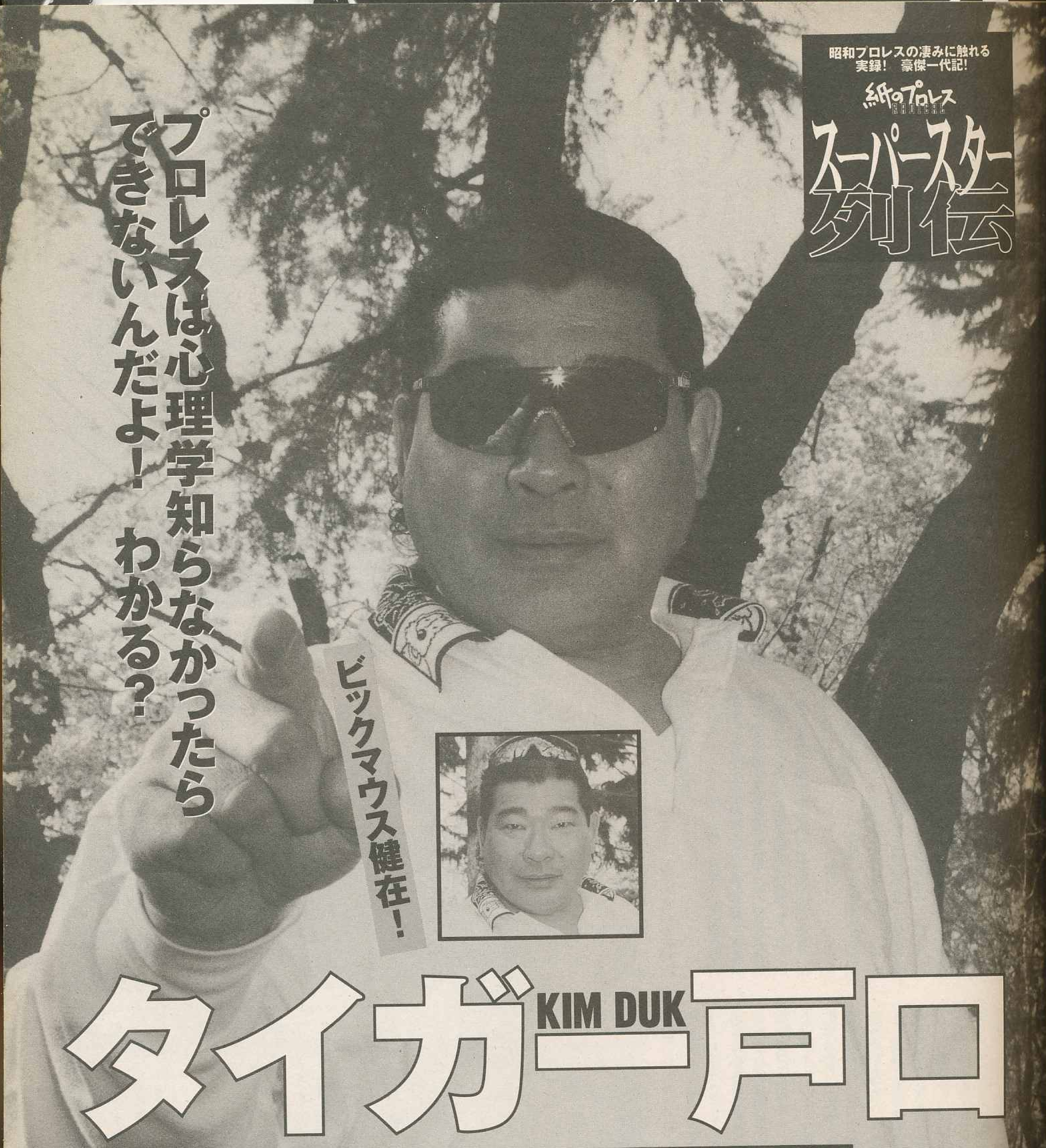
本誌・吉

『悶プ

昭和プロレスの凄みに触れる
実録! 豪傑一代記!

紙のプロレス

スーパースター列伝



プロレスは心理学知らなかったらできないんだよ! わかる?

ビックマウス健在!

タイガー戸口 KIM DUK

とある昼下がり、私・チョロはマヌケ面で電車に乗っていた。そこへ流暢な英語を操る一人の大男が乗り込んできた。その男の名はタイガー戸口(またの名をキム・ドク)! どこから見てもレスラーにしか見えない説得力十分のボディーにボクは圧倒されながらも、しっかり“ダブルクロス”と入った名刺を渡した。「ちっとちっと」と声を震わせながらインタビューのお願いをしたところ「OK!」と快諾してくれた“ダブルクロス”タイガー戸口。WWF、AWAをはじめ世界各国のマットを渡り歩き、また日本マットではジャンボ鶴田のライバルとして名を轟かせ、ある時はアントニオ猪木に挑戦状を叩きつけ、またある時はハリウッド映画に出演していたりもする。ビッグマウスと呼ばれた男の真実が今ここに明かされる。

聞き手&構成/吉田豪
interview by Go Yoshida

撮影/ちょろ(スーパーバイザー)
photographs by Choro(SV)

5.

決定

6.

お問い合わ
リングス名

リングスRISEシリーズ

——いや〜っ、しかしいまでもホントにいい身体してますよねぇ（笑）。

戸口 あー、もうダメよ、ガタガタだよ。そんなことねぇよ。（こちらが集めた資料に没頭し）写真ねえかな？ この写真とか。

——（キラー・）カーンさんと一緒に写ってるやつですか？

戸口 いや、カーンなんかいなくてもいいんだけど（キッパリ）。

——ダハハハハ！ （その後も資料に釘付けになっている戸口を見て）……あの〜、そろそろインタビューに入ってよろしいでしょうか？ 馬場さんが亡くなられたとき、テレビを見ていたらいきなり海外にいるはずだった戸口さんの姿が出てきたから、みんな驚いてたわけなんですけど。

戸口 だって、俺はそれまで日本に帰ってきてないんだよ！

——あのときは偶然、日本にいたんですか？

戸口 3ヵ月前からいるんだけど、俺はあんまり人の前に出ないから。だって人の前に出たってしょうがないでしょ？

——それが馬場さんが亡くなったっていうので、とりあえず表に出てきたわけですか。

戸口 字幕（ニュース速報）で見たから、テレビ見てたら。そのとき自分は相模原にいたんだよ。やっぱり馬場さんにこれだけにしてもらったんだから。キム・ドクっていうのとタイガー戸口って人間を作ってくれたのは馬場さんと大木（金太郎）さんなんだから。それは義理立てしないといけないでしょ？

——たとえ過去に何があったとしても、義理としては顔を出すべきだと。

戸口 いや違うよ！ みんなね、「なんかあった」って言うんだけど、内容を知らない人多いでしょ？ たぶん奥さん（元子夫人）も知らないと思うよ。だって俺、馬場さんには会ってるからね。

——ああ、全日を離脱した後にもですか？

戸口 直接会ってはいないけど、偶然の出会いっていうのが何回かあるんだよ。去年の11月か12月かなぁ？ 恵比寿のウェスティン・ホテルでバッタリ会ったんだよ。それでチョコッと話して、それっきりだったんだけどな。昔のことは関係ないんだからさ。死んだ人にはちゃんとお線香でもあげなきゃいかんなと思って行ったら、奥さんのとこでいろいろあって。わかる？

——あのときは関係者しか自宅の中には入れないというスタンスでしたからね。

戸口 まあいいや、自分は行ったんだから。義理立てしたんだからね。それでそのまま帰ってきちゃったの。あそこでいろんなこと言ったらいいんだろうけど、死んだ人間に言うこともないし。だから黙って出てきちゃった。死んだ人間にいろいろ言うヤツもいるけど、あれはいけないなと思うよ。ただね、俺は馬場さんには感謝してますよ。俺、馬場さんに一回詫びの手紙入れてるんだから、ニューヨークから。

——あっ、そうなんですか！

戸口 そしたら馬場さんが俺の知ってる人に、俺を使いたいようなこと言ってたみたいでね。そしたらある人間が反対したらしいよ。まあ、誰だかわかってんだけどさあ。わかる？

——ダハハハハ！ まあ、それもあえて言うようなこっちゃないと（笑）。

戸口 言うような人間じゃないよ、相手にもしたくない、あんなの。バカが！

——ダハハハハ！ プロレス雑誌なんかの報道だと、全日離脱の理由は金銭トラブルだとか書かれてましたよね。

戸口 金じゃない、金じゃない！ 金じゃなくて、俺はアメリカに家族がいたから。長い話になっちゃうけど、簡単に言うと、馬場さんが「日本に家族を連れてこい」って言ったわけ。馬場さんは辞めるから、「鶴田とお前とで新しいもん持って行け」っつって。

——えっ！ つまり、馬場さんが辞めてそういう体制になるって話があったんですか？

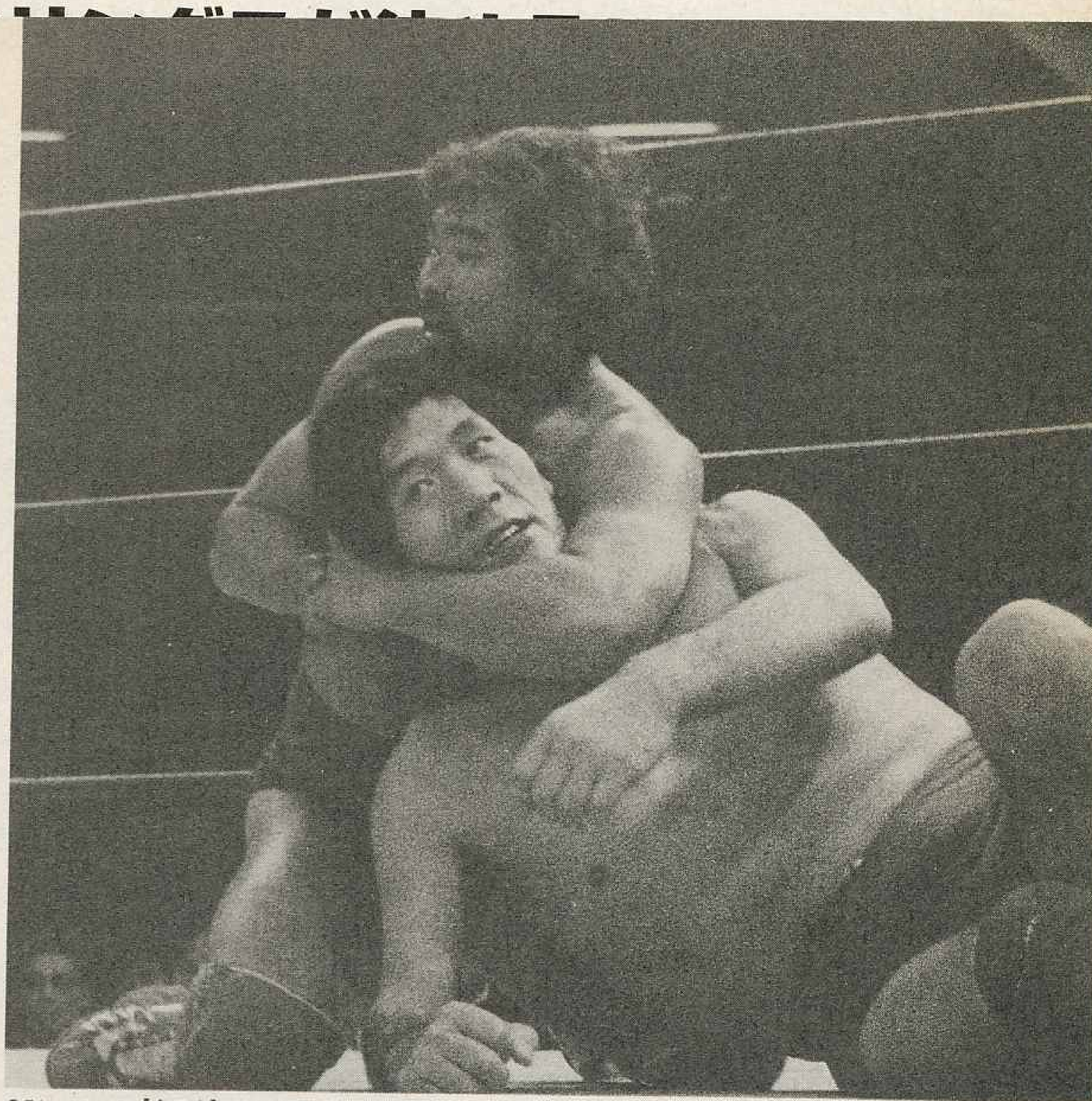
戸口 馬場さんがそう言ったの、俺に。それに「ハワイの興行権も買うから」って。それが途中から話がずれてきたわけよ。「おまえ家族はどうすんだ？ 連れてこい」って言うわけよ。「連れてくって言っても、いまのギャラじゃ無理ですよ。飛行機代も払えないですよ」って言ったら馬場さんは出してくれるって。それで俺は前の女房に用意させたんだけど、結局は馬場さんが「自分でやれ」って言うから、俺はケツまくったんだよ。金銭トラブルじゃないよ。馬場さんが言ったこと守ってくれないから、だから馬場さんに砂かけただけであってね、馬場さんが守ってくれてりゃあんなことも起きないし、そのまますんなり行ってたのに。

——そのまま鶴田、戸口体制になってたわけですね。夢のような光景ですよ、それ（笑）。そうなってれば、馬場さんも生涯現役を貫くこともなかっただろうね。

戸口 なかっただろうね。だから、俺が辞めてアメリカ帰ったときに天龍（源一郎）がノースキャロライナにいたんだよ。そこに馬場さんから電話があったみたいだね「人が辞めたからお前帰って来い」って。そしたら天龍、俺に文句言ってたもん「誰だよ、辞めたヤツ！」って（笑）。そんなこと言ってもしょうがないだろって、俺は家族こっちにいるんだから。ただ天龍は当分帰りたくなかったみたいだよ。

——馬場さんの話だけでもいくらでも盛り上がりそうなんですけど、戸口さんのプロレス入りの動機からお聞きしたいと思います。戸口さんは柔道でも実績があったみたいですけど、どうしてプロレスを選んだんですか？

戸口 いや、俺はプロレスは昔っからやりた



S51・12・9【全日本】日大講堂、大木金太郎＆キム・ドクvsジャイアント馬場＆ジャンボ鶴田戦。インターナショナル・タッグを巡る全日本師弟コンビと韓国師弟コンビの対戦は初期全日本プロレスを支えるドル箱カードとして何度となく行われている。数年後、全日本に入団したキム・ドクはファン投票によりタイガー戸口と改名した。

た戸口さんの姿が出てきたから、みんな驚いてたわけなんですけど。

れは義理立てしないといけないでしょ?

——たとえ過去に何があったとしても、義理

とか書かれてましたよね。

戸口　金じゃない、金じゃない！　金じゃな

ど、どうしてプロレスを選んだんですか?

戸口　いや、俺はプロレスは昔っからやりたいって思ってたんだよ。小学校のときから、もうプロレスラーになるんだっていう頭があったからね。

——そうなんですか。それで戸口さんは日プロ入りするわけですけど、中から見たプロレス界っていうのは、それまで考えてたものとは違いました?

戸口　違うね！　やっぱりプロとなると、俺らが今まで学校で遊び半分でやってたのと違うよ。違う違う！

——まず、なにが違ったんですか?

戸口　う～ん、なんつったらいいのかなぁ。それまでも先輩、後輩はあったけど、それ以上のものがあると。高校でもレギュラーと駆け出しの差があると。もうひとつは、スターと補欠のヤツの差があるけれど、そんなもんいくらでもどうにかできるわけよ。だけど、プロの場合はそんなのできないもん。入ってすぐスターにできるか?　そんなもんできるわけないよ！　わかる?

——プロレス界は序列がありますからね。

戸口　だろ！　柔道も学校でもそうだけどな、例えば柔道なんていうのは強くさせようと思ったらそいつだけ練習させりゃあいいんだよ！　俺は1年の時は補欠だったんだよ。それが2年から俺はレギュラーだよ！

——でも、プロレスではそうはいかないと。

戸口　そういうのがあるじゃん。なんで俺がアメリカに行ったかっていうとね、日本の場合は年功序列だけど、アメリカの場合は違うんだよ。アメリカの場合は実力！

——売れる存在になればいいわけですよね。

戸口　売れるっていうか、客が呼べればいいんだよ！

——客さえ呼べればスターですからね。

戸口　うん。それがスターだよ！　それで上に上がれるんだよ。編集者だって人が書いたもの読めなきゃダメなんだからな。そうだろ?　経理とかっていうのはすぐなれるの！　その上に位が付くじゃない、部長とか課長とか。そういう人はそれをまとめなきゃいけないだろ、それが難しいんだよ。

——当時のプロレス界っていうのは、本当にシャレにならない世界だったっていうのは聞いてますけど。

戸口　凄い大変だったよ！

——道場内でも、相撲用語で言うところの「かわいがり」（シゴキ）みたいなことがシャレにならないぐらいあったって言いますよね。

戸口　あるよ、バンッバン！　いじめられたもん。

——道場では、いわゆるセメントの練習みたいなものをされたわけですよね。

戸口　俺、だって、入ってから韓国に半年行ってたもん。韓国でもガチンコの練習やってんだから！　でも最初はそんなもん知らなかったよ、ガチンコの練習なんて。

——韓国で初めてそういう練習をしたと?

戸口　初めてだよ。向こうで半年やって、それで帰ってきて。あんなもん大体わかってるけど、全然基礎ができてなかったよ。それで、あとから（カール・）ゴッチのおっさん呼んで、みんなリキパレスの下でガチンコの練習やってたんだ。それまでは、練習なんかあんなもんだよ。

——そういうガチンコには、柔道の技術で結構対処できるものなんですか?

戸口　柔道の技?　いや柔道の技ってのはそうでもないよ。柔道なんて受け身しかないんだから、プロレスで使えるって言ったら！　ハッキリ言って一から出直しよ。受け身はできても。習うことは一から出直し。新しいことやるんだからな。そうじゃない?

——ええ。そうでしょうね。

戸口　ある程度の繋がりはあってもさ、やっぱり全部違うんだよ。そばの味とうどんの味は違うし。そうでしょ?　東京と関西とも味が違うし。それと同じよ！

——はあ！　まるでリングスの田村（潔司）さんみたいなことを言われますねぇ（笑）。

戸口　それができない人間は絶対に出世しない！　わかる?

——ダハハハハハ！　そばからうどんに変わってもそばにこだわり続けるとダメなわけですよね。共通する部分はあっても、やっぱり別モノだっていう概念がないと。

戸口　そうだろ?　やっぱりプロとしては、自分の個性っていうのが重要なわけだよ。

——他人との違いを出さなきゃいけないと。

戸口　そうそう！

——そういう意味で、戸口さんは他の選手とどんな違いを出されたんですか?

戸口　いや、別に……。わかんねえ！（キッパリ）。自然的に出てきたもんだから。

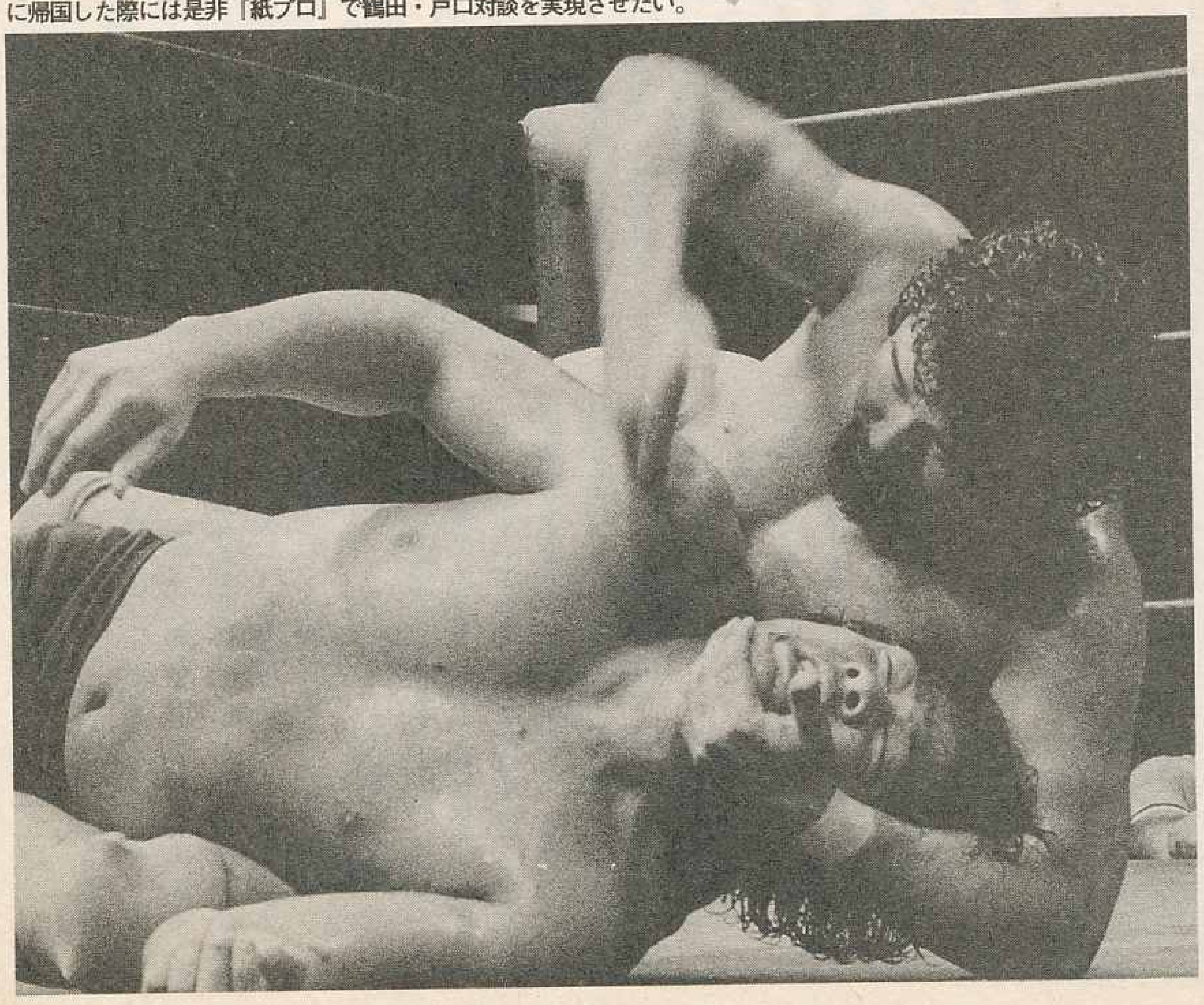
——ダハハハ！　ナチュラルで（笑）。



「鶴田とお前で新しいもん持っていけ」って馬場さんが言ったわけ

昭和プロレスの凄みに触れる 実録！ 豪傑一代記！
紙のプロレス
スーパースター列伝
タイガー戸口

タイガー戸口（＝キム・ドク）のライバルといえば、なんと言ってもジャンボ鶴田！　S53、54年に行われたUNヘビー級選手権2連戦ではトータル2時間5分の死闘を繰り広げたが、結局勝負はつかなかった。残念ながらジャンボは、戸口と入れ替わるようにアメリカへと旅立ってしまったが、日本に帰国した際には是非『紙プロ』で鶴田・戸口対談を実現させたい。





S56・9・23【新日本】田園コロシアム。　ド迫力の肉弾戦が繰り広げられたアンドレvsハンセン、ラッシャー木村の「皆さん、こんばんわ！　ラッシャー木村です」事件、タイガーマスクのキラーぶりが見られたソラール戦など話題満載だった田園コロシアム大会。この伝説の大会のメイン（vsアントニオ猪木）を務めたのがタイガー戸口なのである（惜しくも敗れはしたが）。



鶴田との絡みなんか関係ない。俺の方が実力あるんだから！

戸口　でも、こんなこと言ったらアレだけど、俺の試合の仕方っていうのは、ハッキリ言うけど人のマネで言ったらね、ハーリー（・レイス）みたいな試合だったんだよ。

――あっ、それは非常によくわかりますね。

戸口　わかるだろ？　そんな感じでしょ。（ドリー・ファンク・）ジュニアとか、テリー（・ファンク）みたいな試合はできない！

――戸口さんの試合スタイルってドッシリしてますもんね。非常に重厚な。

戸口　だから、ああいう試合の仕方っていうのはいくらでもできるのね。俺はアメリカでああいう試合もしてきたから。日本でも最初からしてたんだから。ただ俺はパッパ、パッパ動く仕事はできない。なぜかと言うと身体が大きいから。ハッキリ言ってさ、藤波（辰爾）が俺みたいな試合してたらどうしようもないんだよ。「なんだアイツちっちゃいのに動きが遅いな」って思われちゃうんだよ。

――ええ（笑）。身体に合った個性を出すってことですよね。

戸口　だからメキシコの連中がそうだよ。試合でポンポン動くから「凄いな」って思われるんだよ。あれでドシドシした試合してみな。「あれはなんだ」と思われちゃうわけだよ！

――そりゃそうですけどね（笑）。それで、入門早々に韓国に行かれたってことですけど、それは大木さんのラインなんですか？

戸口　そう。大木さんのラインですよ。

――それが後の師弟関係に繋がっていったと思うんですけど、当時は馬場さん派と猪木さん派があって、大木さん派が……。

戸口　あったんだよな。

――そこで戸口さんが大木さんを選んだというのは、プロレススタイルとして大木さん的なものが良かったということはあるんですか？

戸口　そんなのはないんじゃない？　俺は俺のスタイルがあるんだから。大木さんみたいな、あんな固いレスリングしないもん！

――ダハハハ！　確かに固いですよね（笑）、大木さんの試合スタイルは。

戸口　固すぎるよ、お前！　冗談じゃない。あんなんだったらアメリカで金稼げないよ。言っちゃ悪いけど。やっぱりプロなんだからさ、金稼げないと。そうでしょ！　じゃあ考えてみろよ。なんでプロって言うんだよ！　プロっていうのは人から金を貰って見せるってことだろ？

――そうなんですよ。ただ強いだけだったらアマでいいわけですからね。

戸口　そう。わかってるじゃん！（笑）。

――ダハハハハ！　その辺はちゃんとわかってますよ（笑）。

戸口　でも、そういう難しい試験やんないでよ。言葉が出てこなくなる。

――試験ですか（笑）。

戸口　そしたらあの人バカじゃないかなって思われちゃうからな（笑）。

――それで、戸口さんが日プロに入ったときって、猪木さんはもう東京プロレスをやられてたんでしたっけ？

戸口　え～と、まだ分裂する前だ。

――戸口さんは、日プロが崩壊する予感みたいなものはまったく感じてはいなかったんですか？

戸口　俺はアメリカにいたけど、そんなのわかってたよ。でも自分はアメリカ行っちゃえばいいと思ってたから。

――アメリカに行っちゃえばいい（笑）。

戸口　いや、行っちゃえじゃなくて、1月の3日から仕事が入ってたんだから、ロサンゼルスで。だから行かなくちゃどうしようもなかったんだよ！　それで12月の30日にサンフランシスコ経由でロス行って、サンタモニカに半年いたわけ。それでずっと転々として、その間に馬場さんがロスへ来て、電話で話したんだけど、「お前の会社なんか知らないよ」って言われたの。

――言いますねえ（笑）。

戸口　俺は「わかりました」って言って電話切ったよ。そしたらあとで俺がノースキャロライナにいるときに馬場さんが来たわけよ。そこで「日本に来い」って話してたから、俺は「日本に行きたくない」ってハッキリ断ったの。そしたら馬場さんが怒ったわけ。

――怒りますねえ（笑）。

戸口　日テレの人から「馬場ちゃんが怒ってるよ」って聞かされたんだけど、俺は「馬場さんが怒るも怒らないも関係ないじゃないか」って言ったの。俺は馬場さんの会社に勤めてるんじゃないんだから。別にあのとき俺がピシッと断ってりゃ、鶴田と俺の絡みもなかった。ハッキリ言うけど、鶴田との絡みなんかないよ！　考えてみな？

――といいますと？

戸口　俺、アメリカにいたらメシ食えるんだから。鶴田を持ち上げることないんだよ。大木さんに「タッグ組もう」って言われたから、だから帰って来たんだよ。関係ないよ、鶴田なんか！

――関係ないですか！

戸口　それにうまく混ざって、鶴田と俺の世界になっちゃったんだから。

――偶然、上手いこといったわけですね。

戸口　鶴田との絡みなんか関係ない。俺の方が実力あるんだから、ハッキリ言って！

――ダハハハハハ！　ハッキリ言いますね（笑）。実力は上だったと！

戸口　あん時、あの時点ではな！

――あぁ、なるほど（笑）。

戸口　わかる？　あの時点では、俺はアメリカ行ったらいくらでもメシ食えたんだから。関係ないよ！

――プロレスのキャリアが全然違うと。ちなみに、その頃から戸口さんはビッグマウスと呼ばれてたんですか？

戸口　知らない！　その前からだろ？

――昔からなんですか（笑）。

戸口　あれだよ、（グレート）小鹿が付けたんだよ、あの野郎、ふざけんなって！　灰皿みたいにどこでも顔出して!!



突如大荒れ!

本誌・吉
『悶
プ
リ



S56・9
シャー木
たソラー
めたのが

戸口 そんなのはないんじゃない? 俺は俺のスタイルがあるんだから。

よ」って言われたの。
——言いますねえ(笑)。

戸口 あれだよ(グレート)小鹿が付けたんだよ、あの野郎、ふざけんなって! 灰皿みたいにどこでも顔出して!!

タイガー戸口

——ダハハハハハ! 物騒なので話を戻しますけど、海外の水は相当合ったって感じですか、戸口さん的には?

戸口 うん。俺は合ったね、アメリカの水にはね。あっちこっち行ってるけど、ドイツも行ってるし。やっぱり、いいっつったらドイツもいいんだけど、ドイツのプロレスっていうのは長いのがないわけよ。1年中やってないわけ。だから金の話でいったらアメリカに比べてだいぶ低いもんね。

——アメリカのマット界は実力主義だったわけですよね。

戸口 でもヨーロッパは違うよ、ヨーロッパは決められちゃってるから面白くないの。「お前、一晩いくらだよ」って決められちゃってるんだもん。だから客が入ろうが入るまいが関係ないわけよ。俺らにしてみれば。

——それで、ビジネスに徹するような感じになっちゃうわけですか。

戸口 だから、アメリカみたいにするんだったら、客を一杯にした中の何パーセントはお前の分だよと。トップ取ったらね。そういうのがあるわけよ。わかる?

——ええ。それなら、やる気も出ますよね。

戸口 ハッキリ言ったらな、会場に五百万円入ったとすんだろ。五百万の8パーセントっていくらだよ! 40万だろ! 一晩40万もくれるんだよ! 日本じゃくれないよ、そんなもん! 考えてみなよ!

——そりゃあ、確かに帰りたくもなくなりますね(笑)。

戸口 だろ? 当たり前だよ、お前! わかる?

——ダハハハハ! 非常によくわかりました(笑)。試合のスタイルとかでは、あんまり違和感もなかったんですか?

戸口 ないない! ただヨーロッパはラウンド制で、時間が短いから面白くない。アメリカみたいに長～く、10分なら10分、15分なら15分ダーッってやってくんないと。ラウンド制だと、途中いいとこで休まなきゃいけない、またやり直し。だから(頭を指差し)これがないとダメなんだよ。わかる?

——まあ、そうでしょうね。

戸口 続きなんてできないんだから。いっぺん書いたものを消して、また続き書こうったって書けるわけないんだから。だから頭が良くなきゃプロレスラーはダメだっていうんだよ! みんなプロレスラーはバカみたいに考えてるけど、とんでもないよ!

——いいですねえ(笑)。そういえばマサ斎藤さんはアメリカで素人の挑戦を受けたそうですけど、そういう経験はありましたか?

戸口 あるよ! 何遍もあるよ。

——何遍も! それで危ない目とかには合わなかったんですか?

戸口 猟銃で撃たれそうになったことあるよ。クリントン(大統領)の生まれたアーカンソー州のリトル・ロックってところでな。

——それはリング上で素人をやっちゃってからってことですか?

戸口 試合が終わったあとね。終わったあとで控室に帰るときに、お巡りがいたから良かったようなものの、いなかったら撃たれてた。死んでるよ!

——じゃあ、リング上では危ないことはなかったわけですかねえ。

戸口 リング上ではないね。

——全部、日プロなりで習った技術でこなせたということですか?

戸口 うん。大丈夫、大丈夫。ドイツでやったときに酔っぱらいが挑戦してきたもんな。それで「やってやる!」っつったら来なかったもんな。100マルク賭けてな。顔蹴っ飛ばしてブッ飛ばしてやろうと思ったんだけどな。面白いことあるよな、やっぱり世界中回ったら。

——昔のレスラーって、やっぱりそういう意味での覚悟が違いますよねぇ。

戸口 そりゃそうだよ! やっぱり受けて立たなきゃ。そんなもん受けて立たなかったら、プロレスなんてやんなきゃいい。根性なかったらやらなきゃいいんだよ。だから「憎まれっ子、世にはばかる」っていうの? 俺なんか、やっぱり憎まれっ子だから世にはばかったんだと思うよ。

——ダハハハハハハ! 憎まれてましたか(笑)。そうやって楽しく海外で過ごしていたところで大木さんに呼ばれたわけですね。

戸口 そうそうそう。アメリカでNWAの会合があったのよ。そんときに大木さんに「オイ、お前、帰ってこい!」って言われて。「まだ帰りたくないですよ」って言ってやったの。

——言ってやりますね(笑)。

戸口 そのときちょうど新日本からも誘いがかかって。「金出すから来い!」って言うから、「やだ!」って言ったの。金出して貰っても、潰されたらアホみたいなもんだからな。一番稼いでるときだったから。あんときなんかノースキャロライナでワフー(・マクダニエル)とやってた頃だから、週7～8千ドル稼いでたんだよ。あの当時でだよ! 1ドル200円で計算してみな? 一週間でいくらだよ、140万だぞ。誰がくれるよ、そんな金!

——日本じゃくれないですよね(笑)。

戸口 くれないだろ。わかる?

——わかりますよ(笑)。それで、戸口さん的には全日に戻って来てどうだったんですか?

戸口 なんて言うんだろうな。全日は俺に合ったよね。馬場さんがああいうスタイルだからね。そりゃやっぱり合うよ。わかる?

——わかります、わかります(笑)。

戸口 でも、新日本に行ったときは合わなかったな。スタイルが違うから、やり方が違うから。猪木さんの考えるやり方と俺の考えるやり方と違うから、やっぱり合わなかったよ。

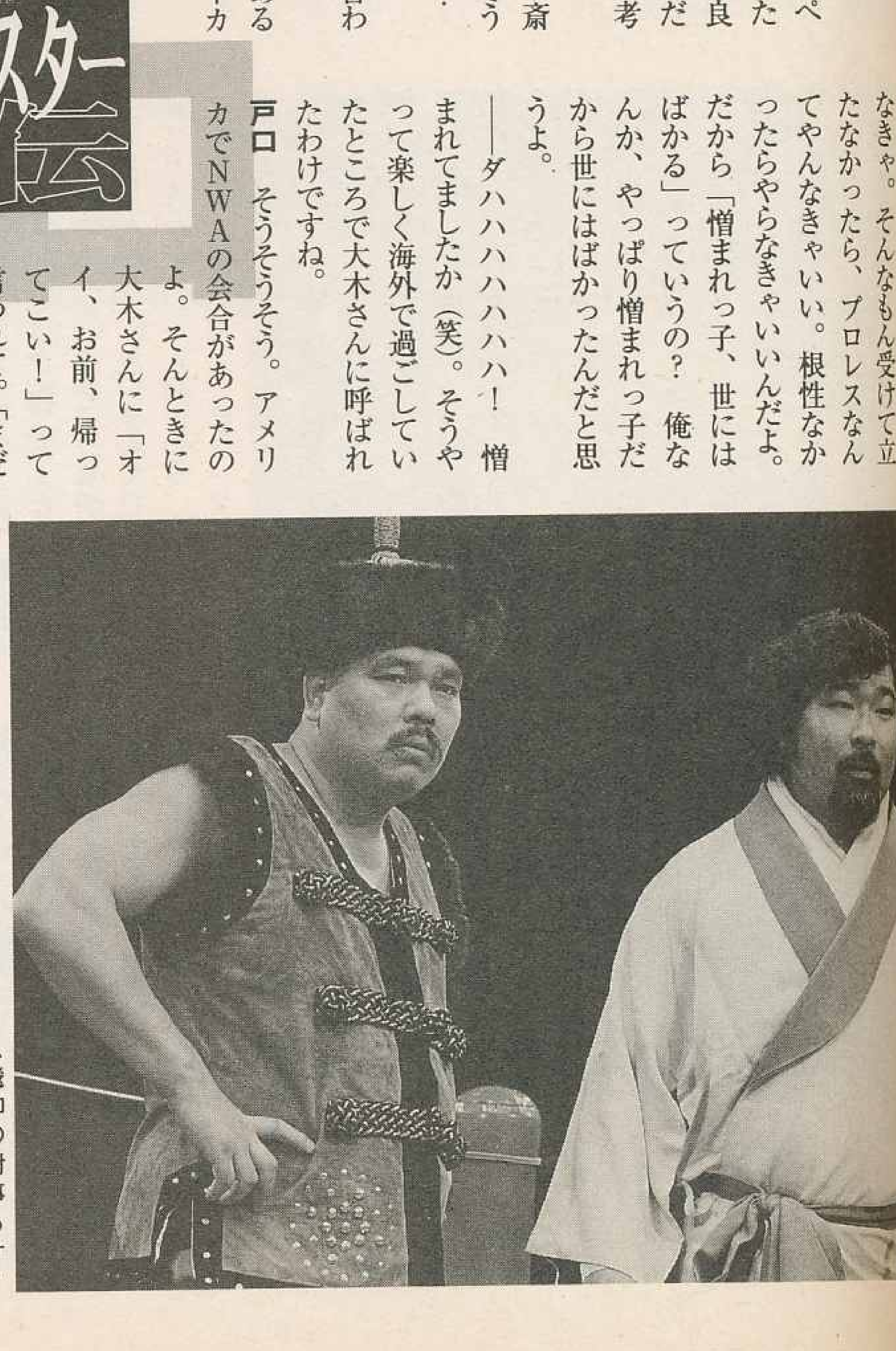
——だからこそ鶴田さんとスイングしたと。

戸口 鶴田とやったのはその前じゃない?

——いや、それもわかってます(笑)。

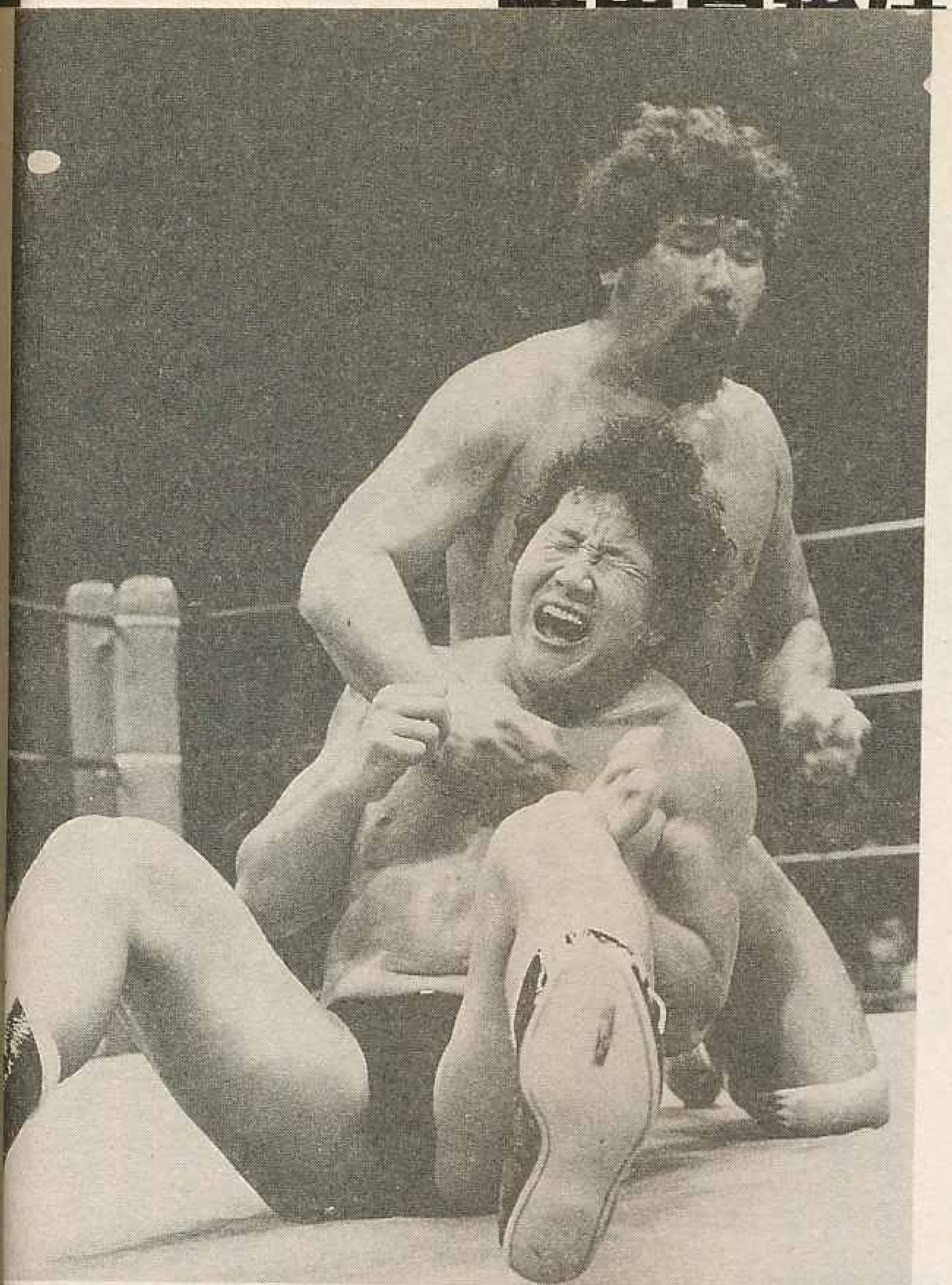
戸口 だから家族のことで馬場さんと揉めなければ、俺は新日には行かなかった。プロレスじゃなくたってメシ食っていけたんだから。そんなに楽な生活はできないかもしれないけど、そんなもん食うんだったらいくらでもできるんだからな。ただ自分でプロレス辞めたくないって頭があったから。自分でトップ取ってきた以上はね、人に負けたくないし。負

昭和プロレスの凄みに触れる
実録! 豪傑一代記!
紙のプロレス
スーパースター列伝



S57・12・10【新日本】蔵前国技館、第3回MSGタッグリーグ戦。荒鷲&飛龍、狂犬&流星仮面ら並いる強豪を抑え、決勝まで進んだのが戸口&カーンのコンビ。決勝では猪木&ホーガンと対戦、最後は猪木の卍で敗れはしたが見事準優勝に輝いた。このツーショットからは全米マットで一時代を築いた男達のオーラがプンプンと感じられる。わかる?

リングスRISEシリーズ



S58・7・7【新日本】大阪府立体育館。試合前から「前田みたいな若造に負けるはずがない」とタカをくくっていた戸口だったが、前田のニールキックで場外へ吹っ飛ばされ、あわやリングアウト負けかというところまで追い込まれてしまった。しかしそこは百戦錬磨の戸口。場外から巧みに足を引っ張り込み両者リングアウトに持ち込んだ。

けたくなかったら簡単にパッとやっちゃえばいいんだから。

—それでパッと新日本に行っちゃったため、戸口さんは「ダブルクロス」と呼ばれるようになるんですよね。

戸口　どうかなぁ?（笑）

—そこでとぼけますか（笑）。

戸口　本とかに書いてるとおりだよ（笑）。だけど俺がダブルクロ～スしたんじゃないんだよ、ハッキリ言ったら。馬場さんがダブルクロ～スしたんだぞ。わかる?

—バッチリです（笑）。つまり、戸口さんに言わせれば約束は破らなかった、と。

戸口　契約不履行にはならないよ。俺、弁護士使ったんだから。50万も払ってんだもん。それで馬場さんは「それでいいから、そのあと2年間は日本で試合しないでくれ」って契約書を持ってきたわけね。だからそれは「関係ない!」って言ってブン投げたんだから。そんなテメエの甘い水なんて選ぶかよ! 俺だって生活してんだからな。

—そのゴタゴタさえなければ、全日でやっていけたわけですかね。

戸口　やってるよな。馬場さんがちゃんとしてくれたら家族も連れてきて、アメリカンスクール行かせりゃいいんだから。

—ちなみにライバルだった鶴田さんは人間的にどうでした?

戸口　鶴田とは仲良かったよ。ハッキリ言うけど。鶴田とは仲悪くないよ。

—鶴田さんも非常にアメリカンナイズされた人ですもんね。

戸口　あれはやっぱりしょうがないよ。でも鶴田の考え方っていうのはアメリカンスタイルもあったけど、やっぱり日本の考え方もあったよね。半分ずつぐらい。中途半端じゃないよ！　人間的には中途半端じゃないけれど、自分の主張は通したよね、アイツも。鶴田も俺には言わなかったけど、人には見せないように考え込んでたこともあったしな。俺はわかってるけど言わないよ!

—言うようなことじゃない、と（笑）。

戸口　これはアイツの個人的なことだから言わないけど、そういうこともあったよ。でも俺は鶴田にはハッキリ言ったもん「俺は辞めるぞ」って。俺は人に隠し事しないからな。

—取りあえず言っちゃうわけですね。

戸口　言っちゃうよ!　なに言ったたっていいじゃん!　文句あんなら来いってんだよ!!

—ダハハハ!　男らしいですねぇ（笑）。

戸口　俺は一歩も引かないよ!　冗談じゃない!!　俺はいつ死んでもいいって頭があるから、関係ないよ。右翼みたいなもんだよ!

—ダハハハハ!　それで新日に参戦されるわけですけど、それまで鶴田さんがライバルだったから、新日では例えば藤波さんなり、長州（力）さんなりと絡むのが多分ポジション的にはしっくりきたと思うんですけど、そこで猪木さんに行ったっていうのは?

戸口　だから猪木さんに相手がいなくなっちゃったからじゃないの?　簡単に考えたらそういうことだろ?

—まぁ、その通りなんですけどね（笑）。

戸口　時代的に言ったらそっちの言ってることが合ってんだけど、あまりにもヤツらが小さすぎるからダメなんだよ。俺に合わない!

—小さすぎますか!

戸口　だって背が小さいじゃん!　ハッキリ言って。わかる?

—藤波さんはジュニアヘビーですからね。

戸口　だから、そうやって考えたら当然そうなっちゃうんだよ。合いそうなのは坂口さんか猪木さんだろ?　坂口さんていうのは、あんまり光らなかった人間だから、残るは猪木さんしかいないんだよ。そういうこと考えなさいよ、アンタ。わかる?

—わかるんですけど、いま冷静に考えると当時は「俺たちの時代」とか言われた流れがあったわけじゃないですか。

戸口「俺たちの時代」っていうのはね、ハッキリ言うけど猪木さんより一つ下の世代のことなんだよ。

—ええ、そうですよね。

戸口　馬場さんと猪木さんっていうのは抜けないんだからな。そしたら藤波と長州で持ってったかもわからんし、俺と鶴田で行ったらどっちが勝ったかっていうのはわからないよ。そのときに頭のある人間が勝つんだよ。わかる?　最後はプロレスの心理学をわかってるヤツが勝つ!　わかる?

—プロレスの心理学ですか!（笑）。

戸口　いや、笑ってるけどね、プロレスは心理学知らなかったらできないよ!

—あっ、そういうものなんですか?

戸口　プロレスってなんだかわかる?

—いやぁ（笑）、あらためてそう言われると、よくわかんないですね。

戸口　わかんないだろ!　みんなわかってないんだよ!

—じゃあ、ぜひとも教えて下さい（笑）。

戸口　教えて下さい?　じゃあ教えてやろっか（笑）。

—お願いします!

戸口　これ、よく聞いといた方がいいよ。プロレスっていうのはバカじゃできないんだよ。なぜかっていうとね、プロレスのリングに上がると、ひとつは目があるだろ?　これで客の反応が見れる。もうひとつは耳を持ってるだろ?　これで客の反応が聞こえる。最後に口があるだろ?　客に悪いことも言えば、いいことも言えるんだよ。わかる?　これが日本の3つの心理学っていうんだよ!

—3つの心理学ですか!

戸口　アメリカの場合はこれにテレビでインタビューできなきゃダメなんだよ。わかる?　その他にもうひとつ、客受けしなきゃならない。日本で言えば3つよ。アメリカだと5つ。これができないヤツはダメだよ。

—ダメでしょうねえ。

戸口　学生プロレスじゃないけど、タイツ履いてプロレスの靴履いて、リングに上がってプロレスのモノマネやってりゃいいと思ったら大間違い!　だからケガするんだよ。わかる?　自分で考えてやらなきゃ絶っ対ケガするって!　人は助けてくんないんだから。他人に自分の身体を預けんだぜ!　考えてみな!　ボディスラムで投げられるとき預けんだよ、自分の身体を!

—プロレスは信頼関係がないとできないわけですよね。

戸口　そんなの壊そうと思えば、頭から落としたらいいんだから。悪く言えば!　だろ?



突如大荒れ!



言っちゃ悪いけど、橋本なんか屁みてぇなもんだぞ!

でもそれじゃあプロじゃないんだよ。わかる? その「プロ」っていうのをわかってるヤツがあんまりいないよ。

——いま、誰がわかってると思います?

戸口 いまで言ったら誰かな……、まあ、新日本で言ったら武藤(敬司)と蝶野(正洋)ぐらいだな。わかる?

——あぁ、あの2人はわかってますよね。前に武藤さんにインタビューしたとき、戸口さんと同じようなこと言ってましたよ。

戸口 だろ? 武藤はわかってるもん。俺、武藤の考えはわかってるから。武藤はね、WCW行って苦労してきてるから、プロレスの心理っていうのをわかってるよ、アイツは。

——武藤さんは、英語でインタビューできない分を埋めるため、喋らないムタってキャラを生み出したって言ってましたね。

戸口 そうだろうな。だからあいつはもっと伸びてもいいんだけど、伸びないんだよ。上から押さえられてんだかなんか知らんけど、伸びないんだよ。あいつはもっと伸びてもいい男だからな。言っちゃ悪いけど、橋本なんか屁みてぇなもんだぞ!

——ダハハハハ! 屁ですか(笑)。

戸口 ホント、武藤に比べたらな。

——まあ、確かにプロレスセンスで比べれば違いますよね、圧倒的に。

戸口 俺はハッキリ言うけど、順番で言うと、武藤、蝶野、橋本、この順番だよ! 橋本なんか一番ペケだよ!

——ただ、橋本さんはプロレス以外の面で幻想があったんですよね。

戸口 プロレスなんかねえじゃん。なにができんだよ! 空手のバカみたいなことやって。デブで!

——空手のバカ(笑)。

戸口 そうだろ! そうじゃない?

——いや、橋本さんには「強さ」の幻想があったんですよ。

戸口 ないよ! そんなもんないよ。

——まあ、小川(直也)さんに負けてそれがなくなっちゃったんですけどね。

戸口 じゃあ遊んでないで、もう少し練習すりゃいいんだよ。あんなデブデブしてないで。わかる?

——遊んでないで(笑)。まぁ正論ですよね。

戸口 自分でどのぐらい自重してるかだよ、責任持ってるかだよ。責任感のない男がトップに立つことなんて絶対ないんだから。プロレスはそんな甘いもんじゃないよ! 野球だったら、ホームラン打ったり、打率を上げたりすれば人気が出てくるんだよ。プロレスはそうじゃないから。だろ?

——プロレスは結果よりも内容ですからね。

戸口 そう。人が見て、目にパッと止まったら人気が出るけど、止まんなかったら一生ないからね! それが自分の頭、脳の中にどれぐらいあるか。それが心理! わかる?

——よくわかりました(笑)。

戸口 難しいんだよ、プロレスは。あんまり簡単に考えちゃダメだよ。

——それは戸口さんがアメリカで学んだことなんですか?

戸口 アメリカに俺、30年いたからね。だから俺はこんなにして遊んでられるんだよ。バカやってな(笑)。なんでもそうだよ。プロレスだけじゃないよ、映画もそう。どうやってこの周辺の人を活かしてやろうかっていうのを考えないとな。死ぬようなのは俺の役目なんだから。ヒールなんだから。わかる?

——ええ。わかります、わかります。

戸口 このキャラクターを出してやらないと。たとえば、あのディズニーだってミッキーマウスを立てるのは犬とかさ、ドナルドダッグとかいるじゃない。だからミッキーマウスってのは光るんであって。アレがいなかったら光んないよ! それと同じよ。わかる?

——プロレスでも、誰かがトップの人間を光らせなければならないわけですよね。

戸口 そうそうそう。光らせてくれる人がいるから上ができるんだよ。だろ? みんな、下の連中に対して「なんだアイツら、駆け出しなのに」って思ってたら大間違い! ヤツらがいなかったら上の連中、誰もいないんだから。そういうプロレスの考え持ってるヤツがいない。バカばっかりで! ホントだよ。

——昔のプロレスがうまくいってたのは、そういう「光らせる」っていう構造がハッキリしてたじゃないですか。トップが1人いて、周りが支えるっていう。でも、いまはトップに4人、5人並んでますからね。

戸口 でしょ。だから競り合いすりゃいいんだよ、競り合いを! 会社がバカなんだよ!

——バカですか(笑)。

戸口 ホントだよ。俺が会社の社長だったら「お前らみんなトップにしてやるから、客呼んで売り上げをアップさせたヤツに何パーセントかボーナス付けてやる」って言うよ。そしたらみんなやるよ!

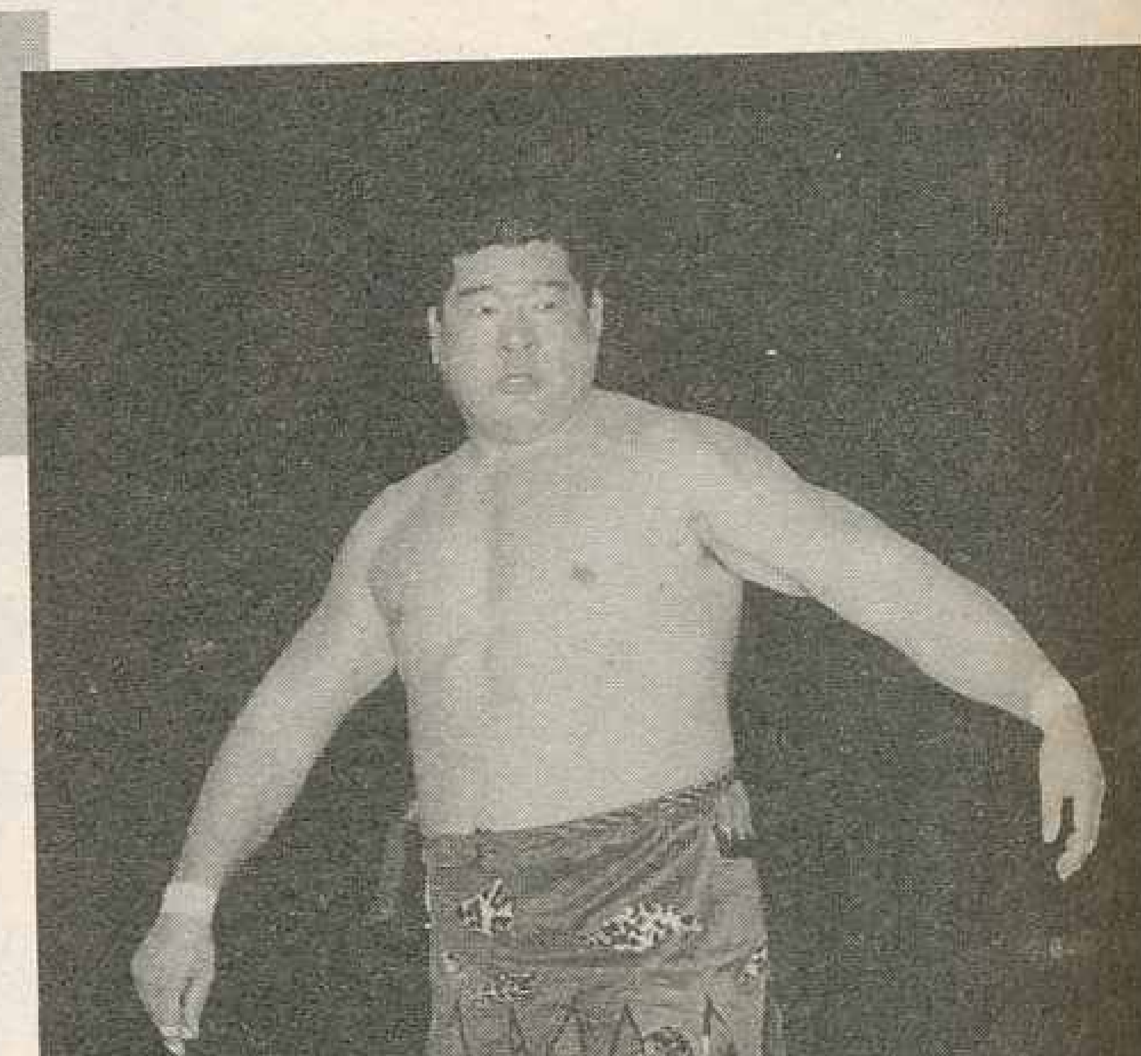
——そりゃ、凌ぎ合いになりますよね。

戸口 そうよ、あったり前だよ! バカなんだよ、やり方が。だから客入んないんだよ! わかる? だから、それがプロレスの心理だって!

——心理学は深いですね(笑)。

戸口 誰かを押したってダメなんだよ。やらせなきゃ! やらせる人間がどこにいるっちゅうんだよ! (テーブルをガンガン叩き)トップにそれだけ頭の切れる人間がいなきゃできないんだから。いま世の中に頭の切れるヤ

昭和プロレスの凄みに触れる実録! 豪傑一代記!
紙のプロレス
スーパースター列伝



H6・12・4【WAR】両国国技館。戸口はプエルトリコ軍としてW★INGで暴れたのち、スタンガンという斬新な凶器を手に青鬼としてWARに登場した。試合後、自ら青鬼のマスクを脱ぎ捨て正体を明かした戸口。その後、戸口は石川敬士率いる東京プロレスに参戦したのちマット界からは距離を置いてはいるが、今だ衰えぬその肉体で、もう一花咲かせて欲しいものだ。

昭和プロレスの凄みに触れる実録！ 豪傑一代記！

紙のプロレス スーパースター列伝

タイガー戸口



予告なんかしたら出来レースだよ。冗談じゃないよ！

ツはいないだろ？　だからって俺に「やってくれ！」って言ったってやらないよ、俺は。

――ダハハハハ！　やらないですか？（笑）

戸口　やらないやらない。そ～んな頭痛くなるようなことやりたくないよ。血圧上がるだけだもん。な？　高血圧になってな、心筋梗塞で死んだら大変だよ。

――それは大変ですね（笑）。話は変わりますけど、新日に移籍してから、全日と新日に対戦表明書を持っていかれましたよね。それで「両天秤にかけた」とか当時のプロレス雑誌で批判されてたわけですが。

戸口　でも結局、挑戦状出したけど誰も来なかったじゃない！　俺は一匹狼だよ。猪木さんに出したのも鶴田に出したのも、誰も返事寄こさないよ！

――あれは、最初に「行くぞ！」ってアピールもなく、いきなり会場に行っちゃったんですか？

戸口　あったり前だよ！　いきなり行ったよ。そんな、予告なんかしたら出来レースだよ。冗談じゃないよ！　根性あんだったらいくらでも来いって!!



ナネット夫人、娘のマルテスさんとのスリーショットをプロレスマスコミ初公開！（おそらく）。奥さんと娘さんは、父のレスラー時代のファイト写真を初めて見たらしく、「オ～、ブリーフ！」と大笑いしていた。

――カッコいいですねぇ。そしたら反応がなかったと（笑）。それで、しょうがないから海外に行っちゃったわけですか？

戸口　そうだよ、それでずっとアメリカ行って帰ってこなかったんだよ。

――そこで映画とプロレスと平行させていくわけですね。

戸口　お金稼がせてもらいましたよ。

――『レッドブル』（アーノルド・シュワルツェネッガー主演）とかですね？

戸口　そうそうそう。だから人をあんまりバカにしちゃダメだって。ね？　頭がある人間はなんでもできるんだよ。そうでしょ？

――結局は頭の問題、と。その後、日本でまたプロレスを軽くやるわけですけど。

戸口　うん、少しやったでしょ。W★INGかなんかでね。そんなもんだよ。

――そういえば、戸口さんにはSWSからの誘いとかはなかったんですか？

戸口　なんか、天龍が探してたらしいよ。あの人から聞いたんだけど、（三遊亭）楽太郎さんから。楽太郎さんと天龍は仲がいいから。「いや～戸口さん、探してたよ、天龍さんが」って言ってたけど、俺はあんとき誰にも電話番号教えてないから連絡できなかったんだよ。誰も知らなかったんだから。

――SWSはお金もいいし、戸口さん的にはいいんじゃないですか。

戸口　いやいや、金なんか関係ないけど、天龍が助けてくれって言ったらやってたな。そんな金なんか関係なしにね。友情と金とは別だから。本人が一生懸命やろうとしてるときに助けてやるのが友達であって、金っていうのはビジネスだから。わかる？

――はい、わかります。

戸口　まぁ、貰うもん貰って、助けるもん助けてっていうのがいいんだけどな。

――それは問題なしですね（笑）。

戸口　それができないのが日本人の悪いとこ！　島国感覚だからな。

――お金のことは言えないようなムードがありますからね。あと最後に、鶴田さんの引退についてなにか一言いただきたいんですけど。

戸口　ホントのこと言ったら、俺ももう引退と同じようなもんだけど、鶴田ともう一回仕事したかったね。引退する前に。引退試合でもよかったしね。それだけだよ。あとはなんにもない。

――鶴田さんも頭がいい人ですよね。

戸口　鶴田は頭がいいよな。たま～にバカみたいなこと言うけどな（笑）。

――ダハハハハ！　鶴田さんはバカのフリしますからね（笑）。ところで、戸口さんはもう引退されたと考えていいんですか？

戸口　まだやるよ、俺は！

――やりますか！

戸口　わかんないな、やんないな。もういい、もういい。

――どっちなんですか（笑）。最後にバシッとやってくださいよ！

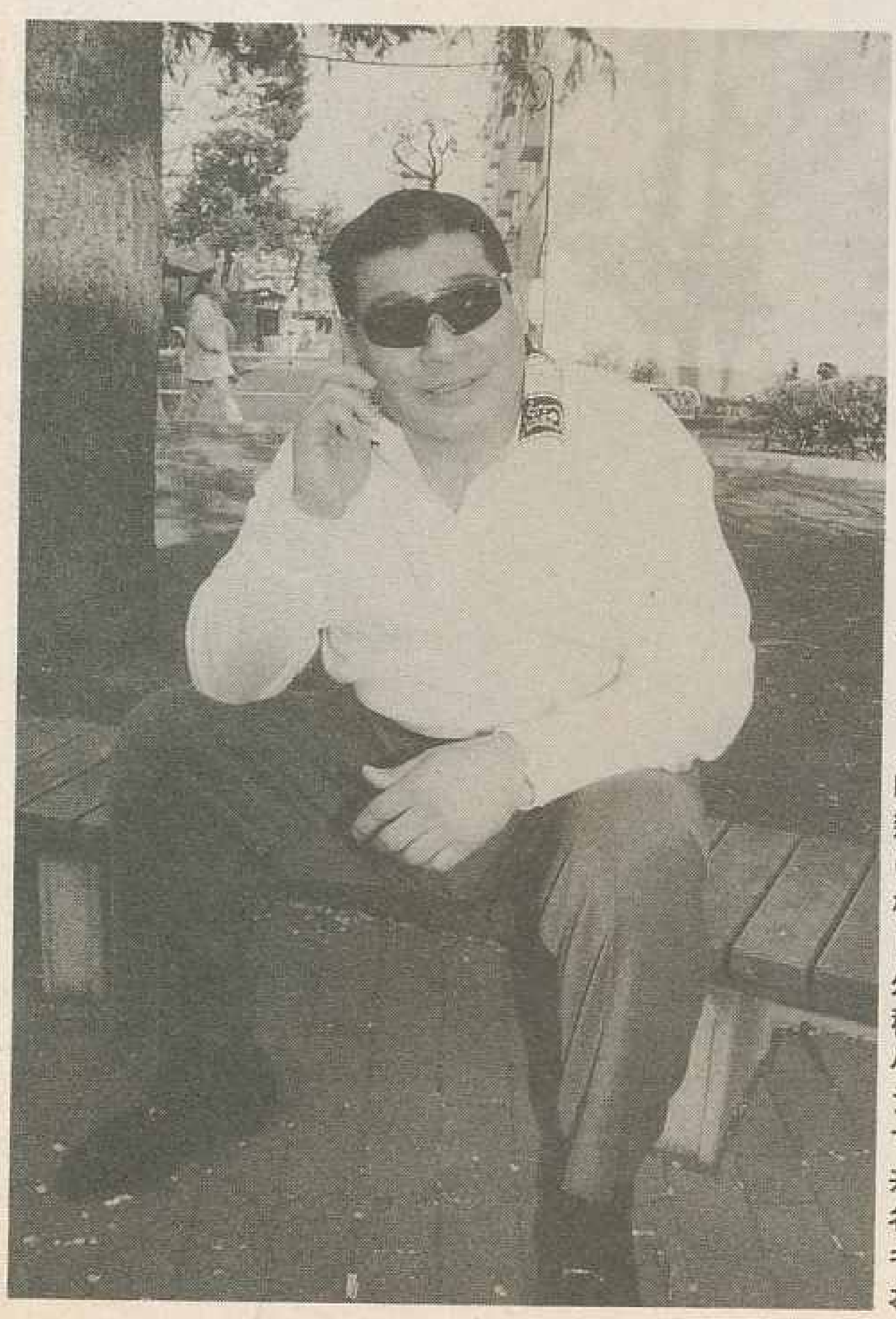
戸口　やだやだ。やだやだや～だ（笑）。やりたくないよ。やりたくたってできないよ。

――でも、その発想を活かさないのはもったいないですよね。

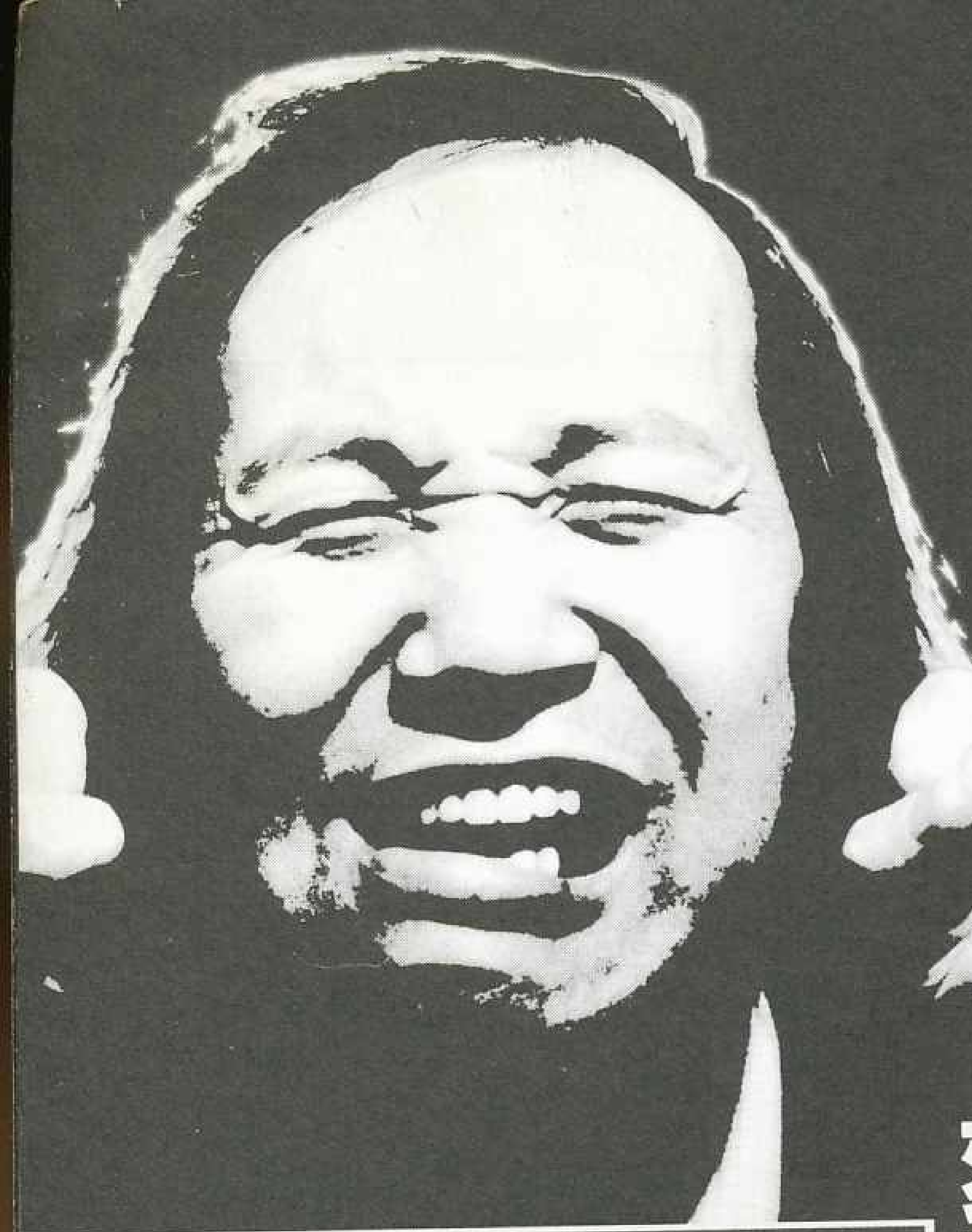
戸口　だからハッキリ言って鶴田とはやりたかったんだよ。馬場さんに言おうとしてたんだけど、亡くなっちゃったからどうしようもないんだよ。それだけ。あとはなんにもない。わかる？

――わかりました（笑）。

【99年4月4日、小田急線沿線某駅近く、パスタと南欧料理の店パンコントマテにて収録】



タイガー戸口（キム・ドク）■本名＝戸口正徳。昭和23年2月7日、東京都葛飾区生まれ。193センチ、135キロ。昭和43年8月、柴田勝久戦でデビュー。関取時代、力道山と兄弟弟子だった父親の関係で幼い頃から日プロ道場に出入りしプロレスと親しむ。高校時代は柔道で活躍し、卒業後、日本プロレスに入門。その後は海外マットを中心に全日、新日、各種インディーとマット界を縦横無尽に闊歩。さらに、アーノルド・シュワルツェネッガー、エディ・マーフィー、ショー・コスギらと共演し、ムービースターとしても名を馳せる。携帯の着メロはミッキーマウスのテーマという意外にお茶目な一面も持つ。



本誌・吉田豪プロデュース！『悶プロ』発売記念&馬場さん追悼イベント「馬場さん、目を覚ましてください」が4・4「ロフト・プラスワン」で開催された

突如大荒れ！

「ターザン山本さん！目を覚ましてください!!」

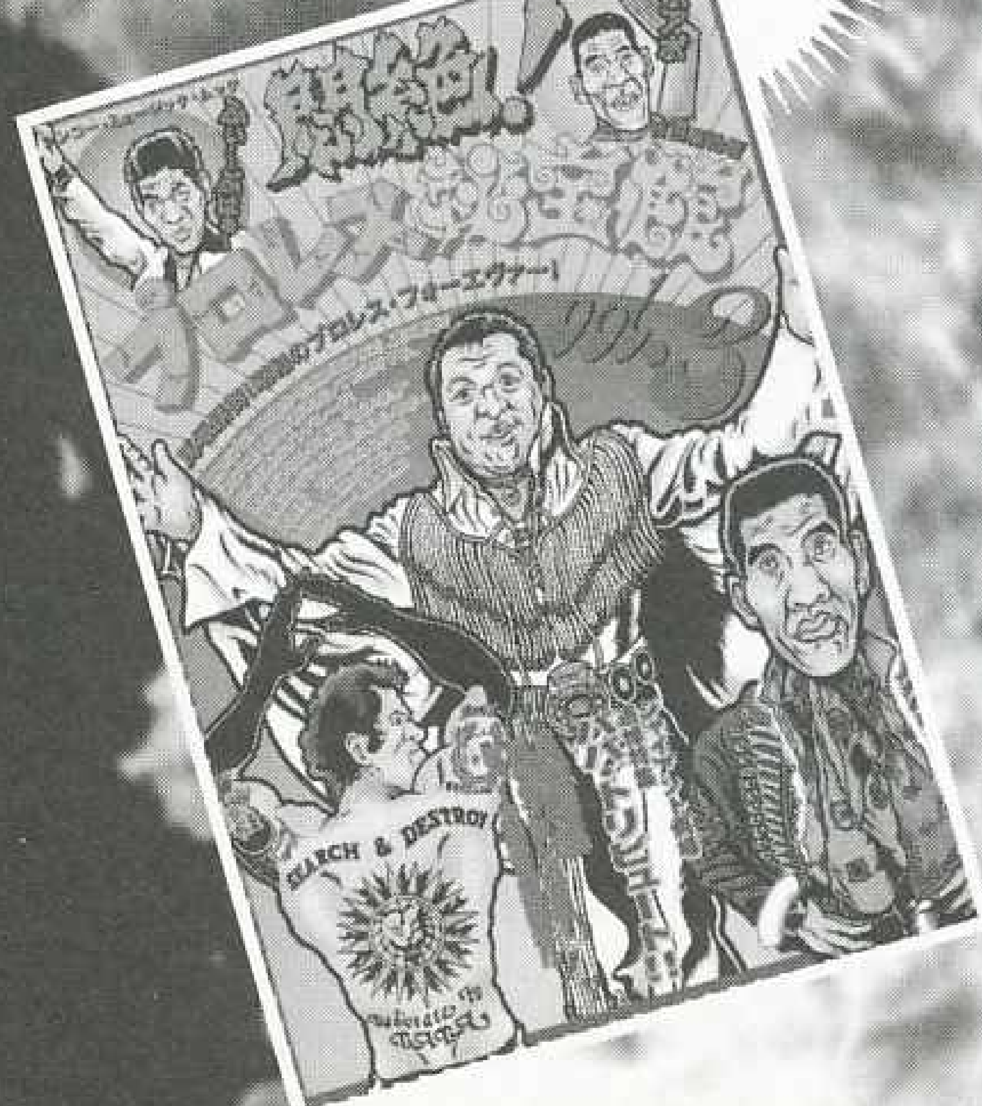
に変更記念

炎上鎮火ドキュメント!!

本誌主催『青空プロレス道場』で彼女をゲットしたものの、見事にフラれた〝冬の恋人〟ターザン山本が本誌スーパーバイザー吉田豪プロデュースによるイベントに出演。『紙プロ』チェアマン山口日昇の参加及び秘蔵のラジャ・ビデオの提供により深味を加えたこのスーパーイベントの模様を誌上再録する!!









当初、ジャイアント馬場追悼&『悶絶プロレス秘宝館3』の発売記念になるはずだったこのイベント。ところが『悶プロ』の発売が遅れて編集者は欠席、ライターは海外逃亡中。やむなくターザン新刊発売記念イベントにしたのだが、こんなときに唯一人、呑気だったのがゲストのターザン山本。

イベント開始1時間半も前から『ロフト・プラスワン』に到着し、控え室で元彼女（詳しいことはターザン著『G・馬場二つの心』を参照）への恨みツラミを、本誌・吉田豪を相手に散々ブチまけて早くも炎上していたらしい。

さて、イベント前半は『悶プロ』ライター植地毅&吉田豪が本の宣伝も兼ねて『韓国鉄頭決戦』と題する秘蔵ビデオを上映。〝鉄頭〟とのタイトル通り、大木金太郎の特訓シーンなどを集めた韓国限定発売ものだ。だが、その中身はといえば砂漠を走る大木を望遠で長回しにしたり、砂に足を取られて急斜面を転がり落ちるシーンを大木がフレームアウトするまで垂れ流しにしたりと作り手側にやる気の欠けらもない代物。それ

山本さん、いつまで続ける気ですか。あのつまんない『激本』――（日昇）

でも大木は常に笑顔で、2枚重ねのレンガを頭突きでスローモーかつ特撮チックにブチ割ったりするわけだ。

この後、植地氏と入れ代わりにターザン山本がいよいよ登場。ビデオの流れから『プロレス激本』での金太郎取材を語るわけだが、出てくる話はホテルを取ってもらって嬉しかったこととか、焼肉をおごってもらっておいしかったこととかゴッチャン話ばかり。挙げ句は女まで紹介してもらって「これがプロレス心ですよォ～」と、すっかり上機嫌。結局、ターザンのいうプロレス心とは食欲と性欲を満たすことらしい。

トーク中には馬場さん出演のTV番組をまとめたビデオ（編集・吉田豪）も上映。どこへ行っても人間扱いされない馬場さんがキラーなトークを爆発させた部分だけをつないだ編集ぶりに、ターザンは「このビデオは凄いよ！　豪ちゃんは天才だ！」と炎上しまくり、突然、「豪ちゃんとは気が合う。一緒に漫才コンビを組もう」とまで言い出す始末であった。なんでだよ。

さすがの吉田も一瞬絶句させるほど熱くなったターザン。お客さんも十分あったまっている。そして痔で寝込んでいた山口日昇も到着した。まずは猪木の異種格闘技戦に対抗して行った馬場唯一の格闘技戦で

あるラジャ・ライオン戦のビデオを上映。身長2メートル26センチという馬場よりもデカい衝撃的ビジュアルを持つ、バンドー空手の使い手として当初、紹介されたラジャ。だが、試合前の公開練習で見せたスローな蹴りたった一発で全日ファンの夢をくだいてしまうほどの衝撃的破壊力をも持つ男であったのだ。

ところが、そんな相手との試合もいま見れば、繰り出した自分の蹴りでコケるラジャの姿にしろ、どこが極ってるかよくわからない馬場の腕ひしぎにしろ、十分に楽しめるから不思議。試合後の馬場の発言も抜群で「オレが胸を張って踏ん張ったからアイツは倒れたんだ」と夢のよう。結局、ラジャは、空手さえ使わなければ素晴らしい空手家であることを確認しつつ、ビデオ終了。

そうして『馬場さん！　目を覚ましてください』改め、『ターザン山本さん！　目を覚ましてください座談会』スタートである！（都合によりしばらく早送り。ジャイジャイ）

※

ターザン（その直後）わかったっ！

吉田　わかりましたか（笑）。

山口　よくわかりますからね、このオヤジは（笑）。

観客　拍手!!

ターザン　異種格闘技戦は猪木さんが馬場さんを否定するためにやったもんだけど、それを馬場さんがやることで猪木さんの役目をまたひっくり返したんだよ。

吉田　あれこそ「シューティングを超えたものがプロレスである」っていう（笑）。

ターザン　だから、馬場さんは一回どこかで異種格闘技戦をやる必要があったんだよねぇ。

吉田　こうやってとことんバカにしきった異種格闘技戦を（笑）。

ターザン　いや。バカにしきってるわけじゃないんだよ。プロレスを〝シャレ〟と〝冗談〟でやってるわけよ。

吉田　そうだったんですか（笑）。

■ここでしばらく山口&吉田が〝格闘芸術〟〝スポーツ芸術〟について議論。ノケモノにされていらだつターザンは突然「お前たちの言ってることは全部間違ってる!!」と絶叫。ところが「何が間違ってるのか」と聞いても「あとで書く」とか言ってちっともはっきりしやしない。

山口　さ、山本さん、お待たせしました（笑）。その〝シャレ〟と〝冗談〟の部分を〝明るく〟〝楽しく〟に変えて体現していたのが鶴田選手ですよ。

吉田　鶴田さんは最高ですよ（笑）。

山口　カレリンはアマレスを始めて4年でオリンピックに行ってるんだけど、鶴田選手は3年だもん（笑）。

ターザン　3年じゃないですよォ！　はじめはバスケットボールをやって、アマレスのヘビー級の選手がいないからアルバイト的にやってたらオリンピックにいったんだもん。

吉田　で、鶴田さんが言うのは誰でも3年やればオリンピックに出れますよと（笑）。

ターザン　そういう意味じゃ、鶴田というのはとんでもない運動神経を持ってたよね。

吉田　ボクは鶴田さんの実家に行ったんでわかるんですけど、あそこに住んでれば力はつきますよ。山梨の山の中。あんなところを走り回ってれば、そりゃ力はつきますよ（笑）。

山口　スポーツマンって枠を超えてるよね（笑）。

吉田　本人はスポーツマンのつもりなんだけれど枠が桁違い（笑）。

ターザン　いや、スポーツマンは練習するけど、あれは練習しないもん。だからこそ気持ちいいっていうか。

吉田　いやいや、高校時代にたっぷり練習したんですよ（笑）。本当にカレリンとやりたかったみたいですからね。

山口　だから、鶴田選手が外人だったらカレリンみたいな扱いですよね。まさに〝人類最強の男〟ですよ。

吉田　それでいて休日にはフォークギターを弾いて（笑）。しかもそれがすべてキルケゴールに影響されてという（笑）。

山口　新日本にはないセンスだね（笑）。

吉田　実存主義者キルケゴールの影響で、人生は短いんだから好きなことをやらなきゃダメだっていう（笑）。

山口　恐ろしい（笑）。馬場さんが亡くなってから、鶴田再評価がオレの中では高まってるね。やっぱり馬場さんよりも凄いんじゃないかっていう（笑）。

ターザン だから、新日本が「誰の挑戦でも受ける」とか、ああいうツッパリがなくなった時点で馬場さん的なものが浮上したんだよね。新日本はツッパリきらなきゃいけないんですよ。ヒクソンが出てきたらすぐにやっつけるとかさ。

吉田 武藤さんはやったじゃないですか、オタービオと（笑）。

観客A あったあった。

ターザン あんな、寸止めアルティメットをやっちゃいけないんだよ！

吉田 いや、あれは抜群でしたよ。アメプロ的なアルティメット（笑）。

ターザン あれは馬場さん的世界だったもんな（笑）。

吉田 昔、ボクが武藤さんにインタビューしたとき「あの試合は評判悪かったですね」って聞いたんですよ。そしたら「そうなの？」って。わかってないんですよ（笑）。

ターザン 武藤はナメきって試合してるもんな（笑）。

吉田 で、「武藤さんにプロレスのセンスがあることはわかるんですよ。だけど、感情が伝わってこないですよね。猪木さんも言ってたじゃないですか」ってズッとネチネチ突っ込んでたんですよ（笑）。一時間ぐらいして「オレって感情出てないのかなぁ」って上向きなきがら涙ぐんで（笑）。だから考えたことがなかったじゃないですか、そういうことを。

山口 知恵熱が出ちゃったんだね（笑）。武藤選手に考えさせる豪ちゃんが大人げないね（笑）。

吉田 だけど、たまに考える武藤さんっていうのも面白いですよ（笑）。

山口 そりゃ武藤選手がライブで知恵熱だしたら抜群に面白いよ（笑）。

ターザン だけど、それが武藤特有の逃げなんだよね。そうやってポーズとるからね。ホントはあいつは考えてるからね。

吉田 考えてます？ ボクが見た限りでは何も考えてなかったですよ（笑）。

ターザン 考えても、コレといった結論が出ないんだよ。

吉田 ダハハハハハ！ それは考えてないのと同じですよ（笑）。

ターザン でも、あいつは名言を吐いたんだから。「プロレスとはゴールの見えないマラソンだ」って。

吉田 それって名言ですか？ だって蝶野さんを呼んで「ｎＷｏって何だっけ？」って聞いてましたよ（笑）。

ターザン でも、「蝶野、蝶野」って呼ぶことによって武藤は蝶野より格上になるんだよ。そういうことだけは武藤は一流だよ。いまの話を聞いてオレにはわかった！

吉田 いや、たぶん何も考えてない行動ですよ（笑）。

ターザン そういうことを本能的にやるんだよ。さすがだよ。何も考えてないっていうのはウソだァァ！

山口 ウソでもホントでもいいんですよ、この際。



本誌主催の『青空プロレス道場』の道場主も多数詰めかけた。酒が入ったためか内容といい、タチの悪さといい、破壊力倍増!!

吉田 偶然そうなってるだけですよ（笑）。

ターザン だから、武藤は豪ちゃんの前で芸を見せてるわけだよ。完全に豪ちゃんは、いっぱい食わされたァァ！

吉田 ダハハハハ！ 武藤さんは芸で泣きましたか（笑）。

ターザン その涙を信じた豪ちゃんは真面目だよ（笑）。君は修業が足らん。それを鬼の首を取ったように言った君は最悪だァァ！

吉田 ダメでしたか、ボクは（笑）。

山口 いやぁ、山本さんは面白い（笑）。なんでライブだとそんなに面白いのに、『プロレス激本』みたいなつまんない本を作ってるんですか？

観客 バカ受け（欽ドン風）

ターザン （思わず息が詰まり）いやぁ……。あれはオレが作ってるんじゃないんだよ！ 黒須田さんと須田さんが作ってるんだよォォ！ だって、あの……じゃあ、『紙プロ』にオレを載せろよ！

山口 どういう売り込み方だ（笑）。

ターザン おまえが使ってみろよ！

山口 「使ってみろよ」って（笑）。

吉田 しかも、さっきは大仁田よりオレのが強いって言ってたんですよ、この人（笑）。

ターザン 大仁田よりオレの方がプロレスやったら強いよ！

吉田 ダハハハハ！ プロレスをやったら（笑）。

ターザン 電流爆破だってやってやるよォォ！ あいつより先に四面全部爆破してやりますよォォ!!

観客 拍手!!

吉田 ダハハハハ！ 爆破しますか（笑）。

山口 インターネット時代のいまじゃ通用しないんだよ、こういう、根拠のない言い切りは（笑）。

ターザン あのね、物事は断定して言い切らないと絶対に伝わらないんだから。

山口 それはわかりますよ。過剰に断定した方が伝わりやすいんだけど、最近の山本さんはシューターを装ってるフェイク野郎だからなぁ（笑）。山本さん、いまはネットで素人からシュート、フェイクって言葉がポンポン出てくる時代なんですよ。

ターザン 別にいいじゃない（憮然）。

吉田 別にいいじゃないって、そんな投げやりな（笑）。

ターザン いいじゃない、ワークしようが何しようが。面白きゃいい。面白くて凄くて本気で最高であったらいいんだよ！

吉田 そりゃそうですよ。最高であればいいですよ、何でもそりゃ（笑）。

ターザン だから、一番大事なのは本気でやってるか、だよね。それが最高のモノで凄くて面白かったら、史上最強ですよ、これは。

吉田 はぁ？ じゃあ、それは誰なんですか。

ターザン いままでだったら猪木だよね。

吉田 いまは？

ターザン いまはいないよ。

吉田 山本さんなんですか（笑）。

ターザン ……オレ？（フリーズ!!）

吉田 凍らないでくださいよ（笑）。

（なぜか山口に救いのまなざしを向けるターザン。絶賛、思考停止中）

山口 いや、オレの顔を見られたって、どうフォローしていいかわかんないですよ（笑）。

ターザン ……しかし、今日は凄い熱気だねぇ。（エスケープ!!）

吉田 なんですか、それ。誤魔化さないでください、いきなり（笑）。

ターザン こんな白けた時代に。

吉田 白けた時代（笑）。みんな山本さんの話を聞きたいんですよ（笑）。

山口 山本さんが来るから、こんだけ客が集まるんですよ（笑）。

観客 大拍手!!

ターザン （いい笑顔で）嬉しいねぇ～。オレは寂しい人生を生きてきてるからねぇ。

吉田 特に最近寂しいですもんねぇ、彼女を失って（笑）。

ターザン 寂しいねぇ。この寂しさ

はなんとも言えないよねぇ～。

吉田　でも今日は〝冬の恋人〟を巻いてましたよね（笑）。

観客　？

ターザン　……（再びフリーズ!!）

吉田　彼女に貰ったマフラーと手袋のことをターザンは〝冬の恋人〟って呼んでるんですよ（笑）。

ターザン　ボクは過剰な愛を注ぎ込んだんだよォ。でもね！（ド～ン！と机を叩き）

吉田　叩いた！　炎上しましたよ（笑）。

観客　拍手&歓声

ターザン　（興奮して）恋愛というのはね、相手に対して過剰な気持ちをもってるから恋愛なんだよォォォ！　相手を評価する気持ちがあるわけよ、過剰に！　だからのめり込んでくわけよォォォ！　過剰でないものは愛情とは言えないんだよォォォ！！！

吉田　山本さんはボクらがやってる青空プロレス道場に対抗してミッドナイト道場っていうのを旗揚げしたんですけど、旗揚げした理由っていうのが、実は彼女を潰すためだったらしいんですよ。単なる個人攻撃でイベントやってたっていう（笑）。

ターザン　彼女は青空道場に行ってるわけですよ。その青空道場っていうのは合コン道場なんだよォォ！

観客　（ブーイング!!）

吉田　だけど、あそこで女を作ったのは山本さんだけですよ（笑）。

山口　誰が青空道場のゲストに来て彼女を作れって言ったんですか（笑）。

吉田　それで、半年で逃げたって怒ってるんですよ（笑）。

ターザン　いや………まぁ～～凄くいい体験したね。やっぱり人間っていうのは失恋したり、離婚したり、裏切られた時に自分を知ることができるんだよ！

吉田　猪木さんも何度も裏切られて自分を知ってきたと。

ターザン　そう。それをネガティブパワーとしてリングで叩きつけて、イランに行ったり、ソ連に行ったり、巌流島で試合したりとか、メチャクチャやるわけよ。

吉田　馬場さんもSWSの時にそうしたわけですね。

ターザン　完全に裏切られてバーッと本気になったわけよ。

山口　だけど、馬場さんはリング上では出さないんだよね、そういう感情を。

吉田　裏側に隠しておくんですよね。

ターザン　だから、馬場さんの方が陰険だということですよ。許す猪木さんの方がハートが弱くて、許さない馬場さんの方がハートが強いってことだよ。許してしまうってところに猪木さんの弱さがあるわけよ。あれは寛容な精神じゃない、猪木さんの弱さが出てるんだよ。

吉田　つまり山本さんは陰湿で強いわけですかね（笑）。

ターザン　……（フリーズ!!）

山口　豪ちゃん冴えてきたねぇ（笑）。

ターザン　……確かに陰険だよねぇ。

吉田　認めましたか（笑）。彼女に絶縁状まで出してるんですからね（笑）。

ターザン　ちょ、ちょっと待て！

吉田　しかも「手紙書くのはもうやめる」って言ったあとで（笑）。

ターザン　だからぁぁぁ……。

吉田　しかも仕事場にまで出してるんですよ（笑）。

観客A　キモチわる～。

観客B　このキ●ガイ!!

ターザン　あのぉ……。（開き直って）幸せはな！　長続きしないんだよ！　恨みとか怨念は継続するんだよ。そこがいいわけよ!!　怨念がパワーを与えるんだよォォ!!

吉田　失恋でまたパワーが出たわけですか、タチ悪いですよね（笑）。

ターザン　ホントにオレはタチが悪いよぉ（しんみり）……。

山口　タチ悪いし、陰険だしね（笑）。

吉田　ダハハハハハハ！

山口　思い出したけど、芸文社から出した『ターザン山本の天国と地獄』。これはもともとオレが企画したんだよ。

ターザン　タイトルもそうだよ。

山口　タイトルは違いますよ。もとは『極悪編集長』だったんだから（笑）。オレは山本さん自身の自叙伝みたいなものを書いてもらいたかったわけよ。シッシーとの関係とかさ、そういうことも含めて。だけど、最初にきた原稿がつまんないんだよ。

ターザン　………（フリーズ!!）。

山口　で、もう一回書きなおしてもらおうと思ったら、この男は芸文社に電話して「山口っていうのは金を払わないんだよね」とか言ってるんだよ。条件面もなにも決まってないのに金を払うもなにもないじゃん。オレはそれを聞いてカチンっときてね。

ターザン　………（フリーズ!!）

山口　それで頭きたから、オレはもう降りるってことになって、こういうくだらない本になったんですよ（笑）。

吉田　またひどいことを（笑）。

ターザン　（再び開き直り）友達というのは裏切りの関係なんだよ!!

吉田　山本さんは裏切り過ぎ（笑）。

ターザン　その裏切りの中に真実があるんだよ！　イエスとユダみたいなもんだよ。イエスとユダは一番仲が良かったから、ユダはわかって裏切ったんだよォォ!!

吉田　じゃあ、山本さんは常にユダであると（笑）。

ターザン　………（フリーズ!!）。

山口　たまにはイエス的なことをやった方がいいですよ（笑）。

吉田　じゃあ、ハリツケにしますか（笑）。

観客　大拍手!!

ターザン　お前ら！　今日は馬場さんの話じゃねえのか!!（逆ギレ）

吉田　これは馬場さんにも通じる話ですよ（笑）。

ターザン　……もしも～し（突然、携帯に出る落ち武者）。

吉田　携帯に出ないでくださいよ、こんな時に（笑）。

ターザン　あ！　切れた。

山口　切ったんじゃん！

ターザン　……作ってしまって、できてしまったら、これはもうオレの本じゃない！

吉田　ダハハハハ！　そんな言い訳しなくても（笑）。

ターザン　違うんだよ、本というのは作るでしょ。作った途端に自分が最大の批評家になるから、「しまった」と思うんだよね。「しまった」と思うから、次のヤツでフォローしなきゃいけないって思う。それがモノを創る人間だから。

吉田　じゃあ、この『G・馬場二つの心』についてそれでフォローしたんですね（笑）。

ターザン　だけど、『G・馬場二つの心』もまた否定するというか、それの繰り返しよ。だから、書き続けるしかないわけよ。

吉田　ゴールのないマラソン（笑）。

ターザン　そういうことだよ。

山口　ターザン山本はイコール武藤敬司だと（笑）。髪型も近いし（笑）。

芸文社刊　1600円＋税
【問い合わせ】03（5992）2051

本の中の懲りない面々がつくる『プロレス激本4』だよ～ん



ターザン山本がスーパーバイザーを務める世紀のダメ本の最新刊。それに比べて本誌スーパーバイザー・吉田豪は素晴らしい（のか？）ちなみに『激本4』の内容は大木金太郎の巻頭なのだが、巻末にはうちへの挑戦宣言みたいのがあったりする（変なの）。こちらから挑戦状なんて出してませ～ん!!　でも死ぬ気でやるなら受けてやるぜ!!（往年の猪木調）



ゲストのターザンを無視したり、挑発したりと好き勝手にいじりまくる豪＆日昇

ターザン　そう。

吉田　イコール何も考えてないと（笑）。

山口　ガハハハハハ！

ターザン　違うんだよォ、芸をやってるんだよォォォォ！

山口　で、次に出るのが『プロレス激本』ですが、アレは？（笑）

ターザン　あぁ～……そうね。これは7月にもまた出るから。



山口　どんな本になるんですか。

ターザン　なんだったかなぁ～。

山口＆吉田　「なんだったかなぁ」って（笑）。

ターザン　あぁ～。

吉田　「あぁ～」って（笑）。そういえばさっき山本さんに聞いたんですけど、山本さんが前田さんに取材しようとしたら、「取材するにはまずおまえが詫び状を書け」と言われたそうです（笑）。

観客　大拍手!!

ターザン　何をオレが悪いことしたのかねぇ～。

山口　それを話し合えばいいんですよ。とりあえず詫び状だけ書いちゃえばいいじゃないですか（笑）。

ターザン　「人に謝れ」なんてオレみたいな一介の根無し草によく言うよなぁ。

山口　都合のいい時だけ根なし草になるよね（笑）。

ターザン　オレなんかなんの価値もないんだから。

山口　都合のいい時だけ、価値がなくなるんだよ。そういうところに前田日明は腹が立つんだよね（笑）。

ターザン　……（さらに開き直り）はっきり言って！　前田よりオレの方が強いよ!!　だって、オレは失うもんなんか何もないから。殺されてもいいよォォ！　そしたら前田は殺人者になるんだから。そこまで覚悟してるよォォォッ!!

吉田　はいはい。でも山本さんには、なんとか前田と対談してほしいですよね。

山口　してほしいよね。だから、詫び状書きましょうよ（笑）。

吉田　いまここで書きませんか、詫び状（笑）。

観客　（〝書け〟コール!!）

ターザン　詫び状じゃなくて謝罪文にしてほしいよねぇ……。

吉田　なんでもいいですよ（笑）。

ターザン　オレは前田には感謝してるんだよなぁ。引退して島流しにされてるオレのことをボロクソに言って、ボクの名前が出るもんねぇ。

吉田　そうやって光らせてくれてると（笑）。

ターザン　そう。前田選手にはそういう意味でボクのパブリシティになってるよねぇ。……だから前田選手は偉いよぉ。

山口　「ターザンが彼女に106通のラブレターを出したみたいですよ」って言ったら、「文章の書き方を教えてやるから、オレのところに来い」って言ってましたよ（笑）。

ターザン　（さすがにムカつき）自分の守備範囲を超えたところまで口出しして余計なことを言う、あの勘違いが前田のいいとこですよォ。自分を全知全能だと思ってるからね！

山口　じゃあ、文章を直させましょうよ。謝罪文を書きましょう（笑）。

ターザン　…………（フリーズ!!）。

吉田　ここで凍んないでくださいよ（笑）。ホントに書きたくないんですか？

ターザン　……書けないよねぇ～。書いたら終わりだもん。

山口　だって、取材できたって、すぐに仲悪くなるんだからいいじゃないですか（笑）。

吉田　一旦謝ったといた方が得ですよ（笑）。

ターザン　あ～ぁ（深いため息）。

山口＆吉田　ダハハハハ！

ターザン　もう帰らなきゃいけないんだよねぇ～。

吉田　別に家に誰がいるわけじゃないんだから、いいじゃないですか（笑）。

ターザン　明日までに原稿を書かなきゃいけないんだよ、インターネットの。

吉田　大丈夫ですよ、そんなもん（笑）。

山口　全然平気ですよ（笑）。

ターザン　いやぁ……今日はどうもありがとうございました……。

吉田　なんでそこでまとめるんですか（笑）。まだ、早いですよ（笑）。

ターザン　いやぁ……、みなさんホントに元気だねぇ～……。

（元彼女には平気で絶縁状を書くターザンだが結局、日明兄さんには詫び状を書かず。はっきり言って女々しいんや＝前田調）

構成／中村カタブツ君（36歳）

いまここで書きませんか、前田さんへの詫び状——（豪）



芸文社刊　1600円＋税
【問い合わせ】03（5992）2051

山口日昇が「つまらない」と言った『天国と地獄』担当者・Y氏が証言するターザン山本

この『ターザン山本の「天国と地獄」』という本は素晴らしいですよ。執筆に10ヶ月もかかってますし（笑）。山口編集長は山本さんに文才がないとか言ってたそうですけど、とんでもないですよ。山本さんは天才ですよ。何しろ1時間で読めますからね、この本。普通240ページの本を1時間では読めないですよ。それだけスピード感溢れる文体の持ち主だってことですよ。山本さんは。1時間で読める本を10ヶ月かけて書いたという、1秒のシーンに途方もない時間をかけるハリウッドの特撮のごとき贅沢な本ですよ。これは。

最近の山本さんは「一緒に風俗行こう！」ってうるさいんですよ。何でも取材だっていうんですが（笑）。『噂の真相』あたりに「年下の彼女にフラレたターザン山本が風俗狂いの噂」とか出たりしないかって心配です。まあ小説もいいんですけど、山本さんはやっぱりプロレス業界を挑発しつづける語り部であるべきじゃないかと。この本の出版をきっかけにして山本さんにはプロレス業界へのへのリベンジをきっちり果たしてもらえるんじゃないかと期待しているんです。

必読連載 第15回

石川雄規の『闘いの美術館』

あるいは「格闘探偵団バトラーツ『はじめの一歩』」

『いまどこ？ 出てこない？』携帯電話にでると、いつもの声が聞こえた。株式会社住商の代表取締役、佐藤正春氏は地元越谷でいつも飲みに誘ってくれる。そう、バトラーツのリングマットに描かれている、あの『住商』の社長である。

東武伊勢崎線『新越谷』駅の西口ロータリーから暫く歩き、グリーンベルト沿いにあるいつもの店『にしな』に行くと、佐藤社長はカウンターに座りにこやかに私を迎えてくれる。これもまたいつものパターンだ。早いもので、社長とはもう5年くらいのお付き合いになる。出会いは藤原組時代、私が足立区の大谷田から南越谷のマンションに移り住んだ頃にさかのぼる。私が購入したマンションが住商のすぐ近所であることから、誘っていただいたのがきっかけで今日にいたっている。

社長は秋田県能代市の出身で、上京してから波瀾万丈の末、南越谷で不動産業を営んでいる。格闘技が大好きで昔からプロレスを見続けており、私は藤原組に在籍していた縁でそんな社長と知り合うことができた。ちなみにリングスのリングドクターの野呂田先生は住商の社長にプロレスを見に連れていかれたのがきっかけでUWFに縁をもったそうだ。二人が出会ったきっかけがまた偶然で、野呂田先生がかつて不動産物件を探しにたまたま入った不動産屋が住商で、たまたま物件を案内したのが社長自らであり、お互いが能代訛りであったことから同郷であることが発覚したという。さらには同じ高校の出身であったのは奇跡に近い偶然であった。人の縁とは不思議なもの。そんな不思議な縁に導かれるように、バトラーツは旗揚げに向けて歩きだした。

荷物をまとめ、藤原組を出てから3日ほど経った頃であろうか。何もすることがなく、ボーッとしていたのだが、ふと思い立って住商さんに相談することにした。団体をつくるにあたってまずは道場を探さねばならなかった。そこで不動産といえば住商！ そんなわけで電話をしたのだが、本音を言えば社長と飲んで、何でもいいから話がしたかった。快く会ってくださることになり、その夜、私は社長に事の次第を説明した。

『そういった事情なら、やるしかないよな。うん。俺は、男達が己の夢や野望を求めて闘う姿が大好きなんだ。雄ちゃんはまさに今、戦国のプロレス界に狼煙をあげるわけだ。俺も昔どん底の状態で独立した時、今の雄ちゃんとちょうど同じ年だった。なんだか嬉しいじゃない。頑張らなきゃな』社長はそう言って私の右手をがっちりと握ってくれた。

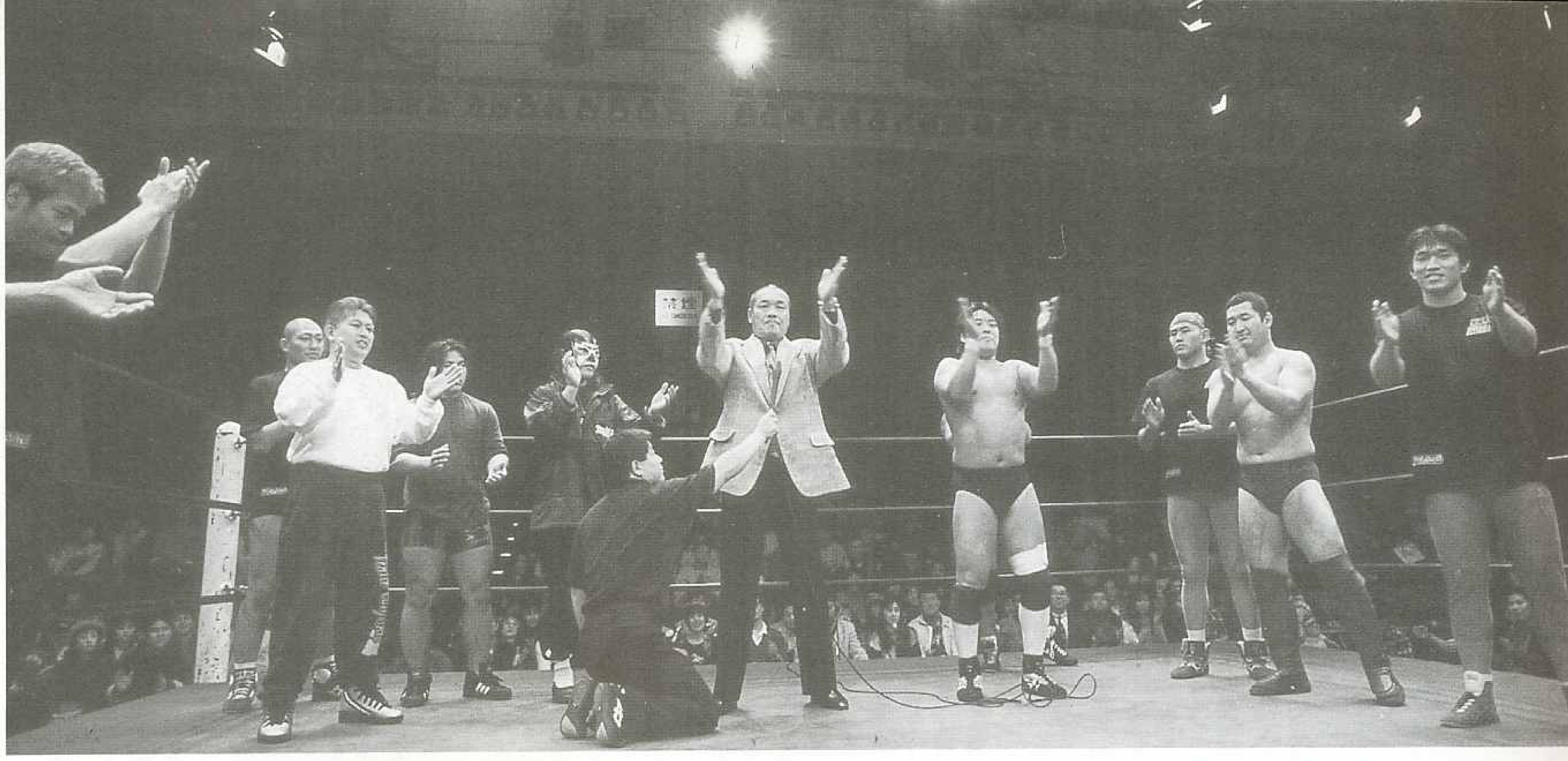
それから2日後、社長から電話があった。良い物件が見つかったという。越谷駅から徒歩10分、住宅街の中にある倉庫であった。それは社長のご友人、木村さんが経営する不動産会社（有）アーバンハウスの管理物件であり、嬉しいことにその家主さんは我々に非常に好意的に理解を示して下さった。物件も最高だったが、何より初めて紹介された木村社長の人柄がとても好きになった。そんなわけで、悩むことなくその日のうちに決めてしまい、そしてこの決断が後に我々に次々と幸運をもたらしてくれることになるのであった。

何もないガランとした倉庫。まずリングを調達しなければならなかった。そこで島田がその顔の広さと情報網を駆使して某団体で余っているリングを見つけだした。破格の安値、しかも分割払い。そして、ついでと称して一緒においてあったサンドバックやアマレス用のマットなど、使えそうな物品を片っ端から譲り受けた。先方も始末に困っていた折、ただ同然の安値とはいえ喜んでくれたのが幸いであった。応接セットは家主さんが余って置き場所に困っているものを譲ってくれたし、ロッカーもどこからともなく譲り受け、気づいたら充分な数が揃っていた。巨大な冷蔵庫もどこかで始末に困っていたものをもらえた。あとはトイレとシャワーの設営のみがお金がかかっただけで、あまりにも効率良くあっという間に道場の設備が整った。さらには藤原組が足立の道場を引き払う際、要らなくなったリングをまた格安で買い取った。こうして我々は旗揚げ前、早くも2つのリングを入手したのだった。

スポンサーもおらず、興行もいったいどこまでできるのか皆目見当がつかなかった当初、まず我々の城である道場をいかにして維持していくかが大切な問題となった。家賃は黙っていても出ていく出費であるので、なんとかして黙っていても収入できるようにしたかった。そこで考えたのが道場の有効活用、アマチュアジムの開設であった。例えば家賃が25万円であった場合、月謝1万円で25人集めれば大丈夫だ。25人なら決して無理な数字ではない、きっとなんとかなる。みんなの意見がまとまり、ジムの開設が決定した。

みんなの持ち金を集め、有限会社を設立することにした。登記が完了したのが12月の中旬。暮れも押し迫った頃であった。思えば、11月20日に藤原組を出てからまだ1ヶ月しか経っていなかった。何もないところから新体制立て直しまで、まさに奇跡的なスピードといえる。道場での餅つき大会を終え、我々はとりあえず無事に新年を迎えることができた。





我々は何かにとり憑かれたかのように
思い切り殴り、蹴り、投げ、
そして関節を極めた

年明け、バトラーツという名前ができてから初めての試合をすることになった。後楽園ホール、アルファジャパンプロモーション主催の『初夢バトル』という大会への一同参戦。そのメインでは現在のバトラーツのバチバチタッグの原点となる試合を見せることができた。フリーエスケープ、フリーノックダウン、過激なカットプレー。我々は我々の感情を当たり前にぶつけ合っただけだが、それが観客の興奮に火を付けたようであった。幸先の良い評価を得た我々は、4月の旗揚げに向けて団体としての第一歩を踏み出した。

運命とは不思議なもの。積み重ねた夢が壊れた瞬間、新しい可能性が展開し始める。

11月19日、横浜文化体育館。我々はリング上に過去の全てを還した。人は年齢を重ねるごとに臆病になる。自分の過去と未来の重さを比べる術を身につけてしまう為であろう。裸で生まれた我々が服を身につけることを覚え、いつしか裸になることに臆病になってゆく。これは実に恐ろしい現象である。特に〝プロレスラー〟という非現実の世界を生きる我々にとって、それは致命的なことだ。バトラーツの面々は、全てを脱ぎ捨てて〝RONIN〟になることにした。幕末の歴史を変えた脱藩侍〝浪人〟である。どこの藩にも仕えず、どこの誰にも仕えず、カンパニーなるものをつくり歴史の風雲に乗り込むことにした。何故かって？　それは何だか非常に面白そうだからである。

明日何が起こるかわからない。これほど楽しいことはない。はったりなどではない。世にいう常識をくつがえすため逆境に立ち向かう度、越えようとする壁が高ければ高いほど楽しくなっていった。敵が手ごわければ手ごわいほど楽しくなっていった。そして〝非現実〟を〝現実〟に変える度〝勇気〟を手に入れてきた。歩き始めた赤ん坊が転ぶことを恐れるだろうか。なに、大の大人が転んだってたかが知れてる。とにかく歩いてみなけりゃ始まらない。そう思ったら怖いものなんてなくなった。

平成8年4月13日、神奈川県小田原市川東タウンセンター・マロニエホール。格闘探偵団バトラーツが、各々の人生の宝物を探すための果てしない道程へ記念すべき第一歩を踏み出した。私の故郷ということもあり、支援してくださる人々のおかげで観客は500人満員。盛大な旗揚げ戦を迎えることができた。

先日ふと記憶の糸をたぐってみたところ思いがけない偶然を発見した。思い起こせばこの旗揚げの日からちょうど7年前、奇しくも同じ4月13日。それは当時22歳の私がフロリダ州オデッサに住む〝神様〟を訪ねて、世にいう〝無謀〟という言葉を背負い〝希望〟という宝物を探しにアメリカ本土に旅立ったその日であった。

旗揚げ戦の喜びさめやらぬまま、翌日は地元越谷での旗揚げ第2戦に突入した。この大会はなんと結婚式場で行われたのだ。越谷市ではなぜか体育館が使えない。プロレスには貸してくれないのだ。それでもどうしても越谷でお披露目の大会をやりたい我々の意向を汲んでいただき、アーバンハウスの木村社長が地元の結婚式場を紹介してくれたのだった。地元の方々のお陰でこの大会も大成功であった。

そして1日おいて初めて何の馴染みもない土地での興行、浜松大会をおこなった。結果は惨敗。客席はガラガラ、閑散としていた。そこからが我々の闘いの本当の始まりであった。地方に行く先々、100人前後の観客数は毎日が絶望感との闘いであった。しかし、その絶望感が快感に変わるのに時間はかからなかった。不思議なことに観客が少ないほど燃えてくるのである。より過激な闘いを求め、我々は何かにとり憑かれたかのように思い切り殴り、蹴り、投げ、関節を極めた。その日会場に来た人全員の心にバトラーツの闘いを刻み込むために。そしていつしかバチバチファイト、B系ファイトなる言葉が生まれた。それでも依然我々を無視し続けるマスコミの方が多かったが、『いつか見ていやがれ！』我々はいつも心の中でそう叫んでいた。

世間が俺たちを認めるのが先か、それとも俺たちの体がぶっ壊れるのが先か。『世界征服』の野望を掲げ、我々は夢を勝ち取るまで闘い続ける覚悟をした。

書評は平和ではない
書評は戦いである
武器のかわりが毒舌であるだけで
それは地上における最も激しい厳しい
自らを捨ててかからねばならない
戦いである——（ネール元インド首相の娘への手紙）

吉田文豪人生劇場
書評の星座 PART2

前号で『激本』の書評を載せ忘れていたことを、『青空プロレス道場』の打ち上げで道場生に指摘されて、初めて気付く。失礼。ついでに前号のマサ本書評でのミスも『紙プロ応援団』HPの掲示板で指摘されて、初めて気付く。再び失礼。そういうわけで、マサの肛門に指を突っ込んだ日プロの選手が誰なのか気になってしょうがない、オリジナリティ皆無な書評コーナー。



必殺！ プロレス激本3（双葉社）

読もうという気にはさせられても読む度に毎回ガッカリさせられるという、不思議なシリーズ。

彼らのコンセプトだという**「つまらなかったものは遠慮せずにつまらなかった、と書く」**に従うならやっぱり「つまらない」だけでしかないが、なぜか**「『激本』もプロレスマスコミじゃないからメチャメチャ叩かれてる」**などと執筆チーフの須田君とやらは勝手に被害妄想を抱いているから、本当に不可解なのだ。

須田君は**「プロレスマスコミの中に、ターザンは生かしたい、須田と黒須田は利権を侵害する奴らだから叩いてもいい、というコンセンサスができているような気がする」**とまで言い出している。2人を名指しで叩いたのはこの書評ぐらいなので、もしかしたらこのボクこそがプロレスマスコミなのだろうか？

ターザンは生き物として面白いから生かされるが、2人はつまらないから叩かれる。そんな簡単なことにすら、まだ気付いちゃいない彼氏。

ギャグでも何でもない、**「それこそ『激本』なんかシナリオのヒントになりそうなことを書いてると思うけどなあ」**などと、ただ単に増長しただけのことを言い出す須田君が、**「ヒールがベビーをキャメルクラッチにとらえて乳首コリコリ」**する**「エロ・プロレス旗揚げを考えて欲しい」**という、誰もが「つまらない」としか表現できないヒントを提唱してちゃしょうがないのである。

殊更に業界外ぶりをアピールしているが、業界外ならではのエゲツなさもないために、『週プロ』などの業界誌を批判しても説得力はまったくない。

『激本』が出る度に「あれ、見た？ ひどかったねえ！ 叩いといてよ！」などと各地から電話がかかってきて、なぜか具体的な批判をいちいち聞かされるボクの身にもなってほしいのだ。

まあ、冒頭の**「僕ら、こんなに嫌われちゃいましたぁ」**とかいうコーナーで、**「ほとんどがブルシットでしかないという本当にとんでもない稀代のダメ本」「裏表紙は須田君と黒須田君のブサイクな似顔絵」**というボクの書評を引用し、**「すんません、ブサイクで」「（反論は）まったくございません」**と黒須田君は完敗宣言しているので、とりあえずノー問題（4号目では「ブサイクデブ」を名乗るし）。問題は須田君だけである。

最新号でも前田対カレリン戦を太田章が絶賛したことを指して、須田君は**「ブサイクとかなんとか言う前に、紙プロさん、突っ込むならこういうところですよ。いや、マジで」**などと言い出しているが、それはプロレスに興味もない太田章から「プロレスはショーだ」というスポーツマンらしい感想を引き出して「敵か味方か!?」と無闇に煽ってきたキミたちの仕事でしかない。

最初から「太田章は敵でも味方でもない。単なる別の業界の人間」だと主張してきたボクが突っ込むのは、やっぱり須田君のダメっぷりでしかないのである。以上！

ジャンボ鶴田・第二のゴング（黒瀬悦成／朝日ソノラマ）



これは、まったく面白味のない地味な表紙のイメージをいい意味で裏切る、プロポーズを断られれば**「トイレに駆け込んで泣いた」**（夫人・談）りする鶴田の類稀なまでの呑気さと、完全に常識外れのプロレス観を忠実に描いた、最初で最後の名著である。

なにが呑気だって、医師に**「何をしても無駄」**とサジを投げられたため、**「点滴の向こうに誰かの顔が見える」「壁が迫ってくる」**などとあの鶴田が幻覚を見るまでに追い込まれて死を覚悟した「B型肝炎」という大病ですら、やっぱり呑気に語ってみせるほどなのだ。

肝炎に感染した理由を、鶴田は**「ブッチャーのせいだと思うんですよ。彼とはいつも派手に流血戦を演じましたからね」**と言い張り、死にかけたことも**「入院して間もなくして、クリスマスになったんですよ。隣が教会だったんです。その教会の女生徒らしい方が、ミサに来るんですよ。てっきりお迎えが来たのかと思いました（笑）」**と呑気に笑い飛ばす。

ついでに夫人も同時期に出産したら鶴田が倒れたため、**「私も出産後だったからいたわってほしかったのに、まったくなんちゅう人かと思いましたね」**と呑気にボヤく。

さんざん『図プロ3』でも書いたのだが、この2人は猪木&倍賞美津子に匹敵するプロレス界で最強・最後のベストカップルなのである。

しかも大病を経てプロレス続行を断念した鶴田は、大学院に進学するときでさえ夫人に**「私立大は授業料が高いから、行くんだったら国立じゃなきゃ駄目よ」**と言われれば国立にあっさり合格し、**「2年間で取得する履修科目33単位を、最初の1年で取得」**。**「しかも成績はオールA」**だったというから、もはや学業方面でも怪物と言うほかない。完璧である。

こうして鶴田は教授になっても教室で全盛時の自分の試合ビデオを上映し、**「相手に技をかけられ、不利な局面にあるシーンは早送りして学生らの笑いをとる」**という呑気な授業スタイルを貫き、やがて**「あっちは洋服も大きなサイズがいっぱいあって選ぶのに苦労しないし、レストランでも出てくる食事の量が多いし。永住したっていい」**との理由で渡米するまでに至るわけなのだ。

そう、「元気が売り物」だった猪木とは対称的に、鶴田は「呑気が売り物」だった。

それゆえ**「バックランドやハンセンの身上が男性的な強さだとすると、私の場合は女性的な美しさが先に立っていた」**などと呑気で不思議なプロレス観も顔を覗かせたりするのだが、この著者はこれまで表に出ることのなかった部分にまで光を当てていくのである。

理由は簡単。

著者の黒瀬氏は、数年前に読売新聞紙上で鶴田から「プロレスも年に数回真剣勝負をやって、あとは大相撲の花相撲みたいな地方巡業でもいいんじゃないか」「プロレスにも芸術点があっていいと思うんですよ。技が綺麗だとか、技と技の繋ぎが上手いとかでも評価してほしい」などの問題発言を引き出した張本人なのだ。

そのとき、鶴田はこう言い切ったという。

「プロレスはね、力と力の本気のぶつかり合いの部分と、ショー的な部分の線引きがね、はっきり出来ないと、つまりどこまでが演技でどこまでが勝負なのか線を引けるところがないと、学問的に言ってスポーツとして認知できないんですよね」

現役時に「演技」という表現を使っただけでもとんでもないが、そもそも鶴田にとっての名勝負とは、「試合において個性的な名人芸・演技力を発揮できた」ものでしかないのだ。

そして、演技力を発揮しつつ**「常に〝より強く〟を志向してゆく世界を目指すべきなのだと思う。どこかの団体がそれを突き詰め、質を高めてゆけば、他のプロレス団体も追随を始めるかもしれない」**と、プロレス界全体のため根底にあるべき強さまでキッチリと重視しているから、文句なんてあるわけもない。

最高に強くてショーアップされたプロレスを、鶴田は目指したわけなのである。まあ、いまで言えばUFOみたいなものだろうか？

さらに、将来的にはこんな興行形態まで企んでいるから、さすがと言うしかない。

「鶴田の構想では、プロレスの一日の試合を三部構成にする。第一部は、古代ギリシャのレスリングの型を儀式的に披露する。第二部は、楽しさを全面に押し出したエンターテイメント・レスリング。そして最後に本格的な格闘技の試合を持ってくる」

これが鶴田にとって理想の全日だとしたら、もし鶴田が実権を握っていたら想像を絶する世界が実現していたこと確実なのだ。

ついでに**「アマレスのルールも、ある程度関節技とか絞め技が出やすいように変えて、一瞬の決着を巡る攻防を楽しむようにする。いわば、プロレスの要素を加えてみればいいんじゃないか」**という変革も提唱したりで、ここまでくるともはや現役選手（取材時）の発想とは思えないのだが、ボクが『Ｎｕｍｂｅｒ』で取材した際、鶴田は自分の発想についてこう言い放ったものなのである。

「おかしい人がそんなこと考えるんですよ。いち抜けた〜っ、ですから（笑）。なんてったってア〜イド〜ルだもん、ボク（笑）」

つくづくふざけた男だが、挙げ句の果てには馬場までこんなことを言い出す始末。

「みんなは格闘技だというが、プロレスに優るものは絶対にない。マスコミでも絞め技、関節技を凄い技のように言うが、プロレスでは、それも一つである。K・1が強いとか、格闘技が強いとか、やったらどっちが強いとか、そんなものはプロレスラーが強いに決まっている。どっちが強いとかは、角が立つから言わないだけだ」

言ってんじゃねえか、と突っ込みたくなるが、「死んだ人間にいろいろ言うのはいけない」（byタイガー戸口）のでノー問題！

馬場はともかく、明らかに強くてデカかった鶴田ならではの独自な発想の数々には誰もが震えること確実なのである。必読！

プロレス1999年鑑（東京スポーツ新聞社）

なんと71年版（傑作！）以来、28年振りに発刊された東スポのプロレス年鑑第2弾。

総ページ数の半分が1年間の試合結果コーナーだし、売りのはずだった形態着メロ集にしても単なる楽譜だしで、読み甲斐のなさにはちょっとぱ

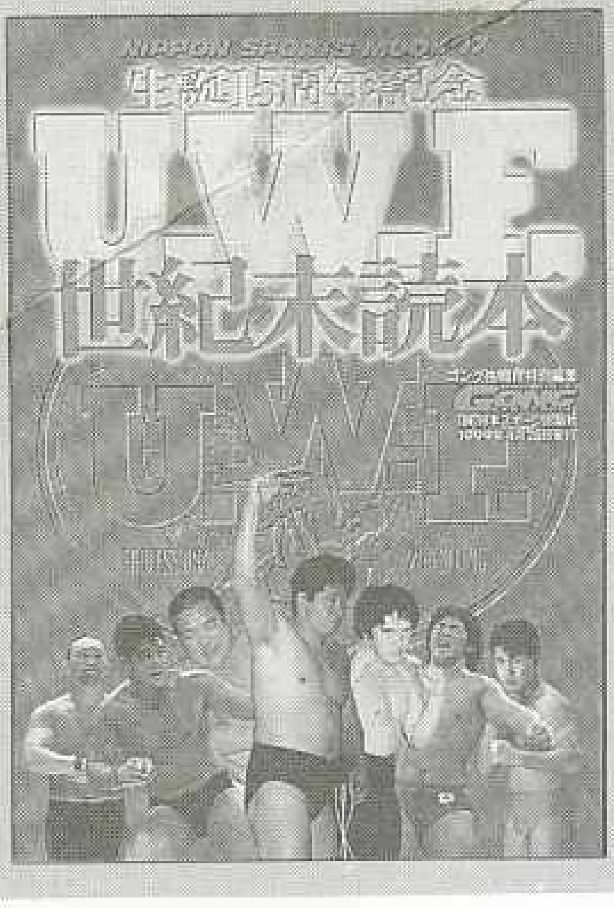


かりガッカリしたのだが、さすがは東スポ。

まるで旧『紙プロ』の『プロレス用語大辞林』を思わせる、**「所用欠場」「民主党23位」「やるって節」**などの項目も含んだ**『プロレス新用語事典』**は、本当に最高だったのである。

たとえばIWAの**「浅野オーナー」**の項目を**「語尾に『~よ!』と付く、オーナー節は本紙のIWAジャパン関連記事でもおなじみ。日本マット界では『メジャーに越中の〝やるって節〟インディに〝オーナー節〟あり』と言われている」**などと意味ありげに表現するセンスは、まさしく東スポ流。

高木圭介記者全面支持(ちなみに柴田記者も顔は全面支持)のボクとしては、これだけで「マスコミは東スポだけあればいい」と長州が断言する気持ちも非常に理解できた次第なのである。



生誕15周年記念・UWF世紀末読本
(日本スポーツ新聞社)

世紀末で読本で中身はU多重アリバイ系という非常にShow氏チックな一冊だが、中身は明らかにこっちの方が上。確かに掴みも締めも中途半端な構成ながらも、クマクマンボ熊久保&渋澤啓介コンビが知られざるいいネタを聞き出しているだけで、もう合格なのである。

たとえば、北沢(幹之)さんが一試合だけマッハ隼人に化けて試合したことや、現在52歳のカト・クン・リーが**「日本でも米国でもバーリ・トゥードの話があれば出場する」**と豪語していること。現・修斗コミッショナーの浦田(昇)さんの眉毛が異常に長いことなど衝撃的なネタも多いのだが、やっぱり重要なのは前田の衝撃発言に尽きるだろう。

デビュー戦の直前にプロレスの**「仕組み」**を佐山に教えられた前田が**「ビックリしちゃって」**泣いたこともいい話だが、なによりも本誌別冊『紙の前田日明』で「ちょっと問題があったんですよ。折をみてまた話します」と語っていたムーヴィー・スターのこととしか思えない、**「俺とずっと一緒にいた大阪のT」**が起こした「問題」の数々が遂に活字化されたのが問題なのである!

旧UWF時代から**「前田の親父はヤクザで、組のカネをくすねて狙われてる。殺されるかもしれない。前田自身も借金の返済で困ってる。約1千万円ぐらい必要だ。それを出してくれないと前田はユニバーサルに戻れないんですよ」**と裏で言っては金をくすね、他にも**「前田のためにカネを貸してやってください」**と各地で涙してはやっぱり金をくすね、返済を求められると**「前田は在日韓国人だし、片親でほったらかしにされて育ったどうしようもない人間だから、そういうことがわかんないんです。僕の友情に免じて許してやってください」**とまた泣いてごまかしてきたという、大阪のT氏。

実際、この辺りの話はボクも聞いてはいたし、これまで前田がいくら語っても事務所サイドで削ってきたはずなのだが、いまになってオープンになったのは前田引退による制限の緩和なのか、それとも『噂の眞相』の一行情報通り、単なる「事務所サイドのチェック機能の低下」ゆえなのか。

どっちにしろ読者にしてみれば謎が解けてラッキーなだけだし、UWFにおける金銭問題や分裂騒動はすべてT氏の悪事が発端だと仮定すると、全ての合点がいくようになるわけである。

こうして前田がオープンに衝撃事実を語ったためなのか、なぜかいきなりミスター鎖国こと船木までオープン化してしまうのであった。

久しぶりに**「初めて学んだ打撃技が骨法でした」**と公言し、欧州遠征中には**「プロモーターのオットー・ワンツや選手のトム・マギーらでボクシングやりました。グローブつけた骨法ですね」**と、いきなり長州との爆笑異種格闘技戦で知られるボディビル系ダメ外人なんかと「グローブ骨法」で対戦していたことまで男らしく認めてしまう船木。

この唐突な原点回帰にボク内では船木再評価が一気に高まったのだが、よく見るとこれだけ6年前の『ゴング格闘技』再録記事なのであった。

やっぱり船木の中でUWFは抹殺?

ターザン山本の天国と地獄
(ターザン山本/芸文社)

長州&天龍&前田に喧嘩を売るかのような表紙ながらも、中身はターザンがこれまでの編集人生を振り返る一冊(企画立案のみ山口日昇)。



正直に言えば『ジャイアント馬場・二つの心』よりも楽しめる内容で、随所に絶妙な恨み節が織り混ぜられているのである。

たとえば**「私は佐藤(正行)に『お前は性格的にマスコミの人間に向いていない』と何度も言い聞かせた」**だの**「後継者を作ることがいかにむずかしいかは、私と谷川氏がいずれも後継者作りに失敗した事実をみれば明白である」**だのという、なぜか不思議と説得力のある新生『週プロ』&『格通』批判。

そしてターザンがSWSから**「年収3千万円でベースボール・マガジン社から引き抜き」**を図られていたこともカミングアウトし、**「若松さんがSWSを作る際、私に相談していたらSWSは今頃、プロレス界に君臨していた」**とまで断言してみせたりと、勢いだけは無駄に感じられて、とにかく最高なのだ。

それでも『週プロ』離脱以降は**「働く気はなかったし、家でゴロゴロ」**するだけの**「粗大ゴミ」**と成り果てたため、**「カミさんは逃げ」**、ついでに彼女も逃げ出してしまうのだが、ターザンは決して死なない。ここでも**「芸能界こそプロレスのライバル」**と言い切るだけあって、なぜか浅草キッドへと牙を剥き始めたのである!

『浅草お兄さん会』への乱入や新宿伊勢丹前襲撃事件などについては『TV Bros』連載『お笑い男の星座』(作/浅草キッド)などに詳しいが、タレントとしてのターザンは確実に彼が書く原稿なんかよりも面白いのだ。

断言しよう。ターザンの発言を盲信する必要も、スーパー・バイザーとしてありがたがる必要もまったくない。だがターザン批判を繰り返す頑固な方々も、とりあえず生ターザンのパワフルな壊れっぷりを体験すれば、その魅力をわかっていただけるはずなのである。

烈闘生・増補改訂版
(武藤敬司&蝶野正洋&橋本真也/幻冬舎)

小林和朋氏の構成ゆえゴング色(または新日パンフ色)は強いながらも、武藤の呑気さや蝶野の計算高さ、そして橋本の下ネタ愛好家ぶりを濃縮させた名著に、99年収録の最新インタビューを追加収録した文庫版が、なぜかアウトロー文庫入り!。

nWo入り以降**「やっぱりムタっていうのは、そう何カ月も持続できなかった。案外、エネルギー使うんですよ」**と武藤が語る理由が**「巡業行ってペイントしてっていうのを毎日、続けてたら面倒臭くなってきてね」**というだけだったり、飽くなき賃上げ闘争を続ける蝶野が**「ロッドマンを目玉にしてこっちで興行をやることを本当に計画してた」**ことまで語っていたりと期待を裏切らない内容ではあるが、やっぱり小川に破壊された橋本による「栄光への独白」にはシビレること確実なのだ。

マッチメイク批判によりフロントから無期限出場停止となっても、決して懲りることなく相変わらずのフロント批判を続ける破壊王。

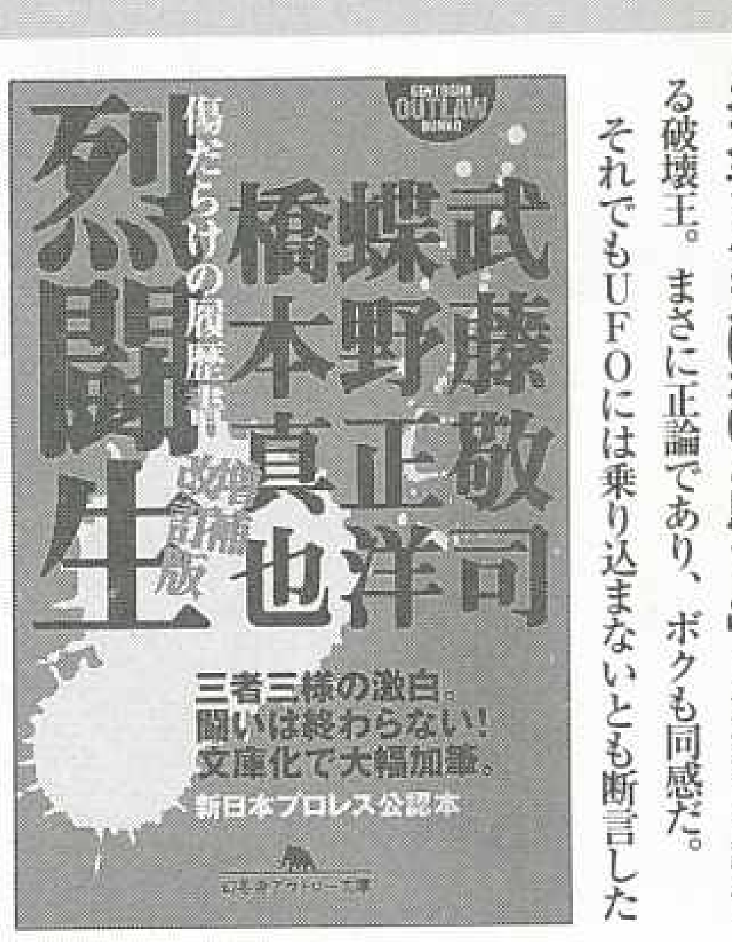
97年の異種格闘技路線にしても**「一・五軍」**の**「K・1戦士」**相手ゆえ、**「格闘技戦を組むストーリー的なお膳立てとか、試合へ向けての宣伝とかが何もなかったから、それが何より不満だった」**と憤慨し、生涯初のG・1優勝を果たしても**「G1の後のシリーズは、G1優勝者が主役になるものだと思ったら、全然、別の方向性でカードが組まれてたしね。『俺が優勝しちゃいけないのか?』って」**と激白。

さらには、**「若い選手も、会社の組んだカードに従ってるだけじゃなくてね」**などと、若手の決起まで無闇に煽っていくのである。

そんな橋本にとっては、1・4の小川戦の結果も必然であり、**「簡単に言えば〝見せしめ〟でしょうね。なんとなく『危険分子は潰しちゃえ』というようなものを感じたし」**と結論付けると、試合が壊れた原因も**「試合を組んだ会社側、ブッカーの配慮が足りなかった」**ためだと、会社批判に結び付けていくのであった。

やっぱり蝶野があのとき叫んだように「ウチの会社(=新日)は腐ってる!」のだろうか?

当然、会社の復帰要請に対しても**「このまま何食わぬ顔して試合ができると思う? 俺は今、リングに立ったとしても、手も挙げられないよ」**とあっさり否定し、**「そもそも、なんでウチの会社が退いちゃったの? 俺は当事者だけど経営者の立場で考えれば、こんなビジネスチャンスはないと思うよ」**と再戦を主張する破壊王。まさに正論であり、ボクも同感だ。



それでもUFOには乗り込まないとも断言したりするから、さすがは異種格闘技戦に関して「みんな中途半端なこと言うから揚げ足取られるんだ。俺は(新日マットの)外には出ない、出る必要がない!」と言い切った男なのである。

橋本は来るべき復活の日に向けて、**「自分をもう一回、鍛え直して、自分を見つめ直して、ない頭を最高に絞って、プロレス界の話題の中にまた飛び込もうと思ってます」**と誓うのだが、やっぱり頭より身体を絞らないと説得力は出ないはず。デルフィンの復帰同様、見た目がとりあえず変わってさえいれば、どうにかなるものなのだから。痩せて幻想を取り戻すか、あの体型のまま冬木系のマッチョバディ・キャラに転身してプロレスに関しても冬木チックに開き直るか、いっそ逆に大増量して200キロぐらいにしてみるか。いまこそ、その重要な岐路なのである。

G・馬場二つの心
(ターザン山本/同文書院)

馬場の死去と自分の失恋という、同時期に勃発した以外には何の共通点もない事件を完全にシンクロさせて**「私が彼女のことで苦しんでいた1月、馬場さんはガンと闘っていた」**と勝手に炎上しまくる冒頭は個人的に大絶賛できるのだが、その後の馬場論には異常なまでに説得力がない不思議な一冊。

馬場を誉めるために猪木が引き合いに出されているのだが、ターザンが自称・猪木であるために、皮肉にも馬場を誉めれば誉めるほど逆に自分の首を絞めてしまうのである。

思えば、ターザンの元彼女は「あの人、本当はプロレスが好きじゃない」とまで発言していたものだ。まあ、好きじゃないとまでは言わなくても、明らかに馬場よりも彼女に対する壊れた感情の方が本物であり、有無も言わせぬパワーがあるのは事実だろう。

なにしろラブレターを100通以上出したかと思えば、失恋すると彼女の自宅と職場に**「思い切り彼女を罵倒し、中傷する」**〝絶縁状〟を送り付け、**「〝絶縁状〟を出すと気持ちがいい」**と男らしく言い切るほど異常なまでに振り幅の広い彼氏。

この本でも**「友人のひとり」**としてボクが登場し、**「山本さんって、現代ではめずらしい人ですね。恋愛に愛はあっても、憎しみの感情は今の若者たちの間にはないものなんです。それでは女性とうまくいきませんよ」**と語ったことが出てくるのだが、ここまで見事な壊れっぷりを見せてくれる53歳なんて、もはやターザン以外にいるわけもないだろう。

そんなことを本人に伝えると数時間後、編集部に電話をかけてくるなり「人間は壊れているのが正常なんですよぉぉぉっ! それに俺は気付いたよぉぉぉ!」と大炎上し、すぐに「はい~」と電話を切ったほどに壊れているターザン。

つくづく面白い生き物なのだが、ラブレターの書きすぎゆえかちょっとばかりポエムの多いこの本は、正直言ってあまり面白くないのである。



ハガキ獲得枚数の多い方が新担当に就任!!

ハガキを集められない編集者は無能なり!!――というわけで、読者ハガキを数多く集めた方が生き残るサバイバル戦争が始まった! 前号ではあまり、この分裂を煽らなかったせいか、『ハガキ道場』にハガキが集中。まずはノブの作戦勝ち。しかし、このまま7月まで、どこまでも脳天気な男と、どこまでも狡い男の好対照な激突が、この読み飛ばされがちな後半モノクロページを熱く燃えあがらせる!!

ルール 7月発売号が出た後までの総ハガキ獲得枚数で雌雄を決する。右の表は現在の両者の獲得枚数だ。そして8月発売号からは新担当者が新しい読者ページを作っていくのである。さあ、ハガキを出してキミの声をページに反映させるんだ!

(平成11年4月16日現在)

ノブ	283枚
チョロ	192枚
抗議	10枚 「みにくい争いは即刻ヤメロ」（愛知県　藤山高男・32歳・♂）等9通

POST CARD
151-0051
渋谷区千駄ヶ谷
3-11-3-702
(株)ダブルクロス
ハガキ道場行

ハガキ道場
SAKAI NOBU



ハガキ道場

俺の中でチョロは抹殺!!

俺はやるよっ！　俺はやる、俺はやるし、俺もやる。ハガキ道場は元気の塊!!

構成／NOBU S.K.I.

個人的に『PRIDE.5』はかなり楽しみです。もう後がない高田がどのような闘いを見せてくれるのか、そしてマットの上で結果を見せてくれるか、楽しみは尽きません。(中略)ドリステには修斗くんと前田日明を噛んだアナコンダの対戦を期待します。

(大阪府　初投稿です。浪速の爆笑王・ヒロ清原をよろしく　♂) 5点

☆原タコヤキ兄さんが、自分のこと"人気者"って書いてたけど大阪人ってホントに凄い、とハマッ子的には思います。読者元気っ!!　いいねっ!!

いまNHK見てんですけど、回虫の話なの。話してるオッサンの腹の中には12メートル級のきよみちゃんちゅーのがいるんだって。

(北海道　佐々木裕　23歳　♀)

☆洗濯の合間に煎餅食いながらTVを見てるババアのようなテンション、大歓迎です。最近、全然TVを見てないから、ちょっとした笑いに対する免疫が低下して困っています。

ノブさん!!　前号で『夢のハガキ』なんていうセンスのカケラもないようなふざけたコーナーが出来ましたが、気にしないでください!!　ハッキリ言ってボクはノブさん派です。何なんだよ、あのチョロとかいうクソガキは!!　心配しないでくださいい!!『夢のハガキ』なんかにハガキ出すヤツなんかいるわけない。たとえノブさんが太ろうが、たとえチョロが実力つけようが、ブルドッグはいつだってノブさん派だぜ!!

(石川県　ブルドック［二枚舌でも可］20歳　♂)　4点

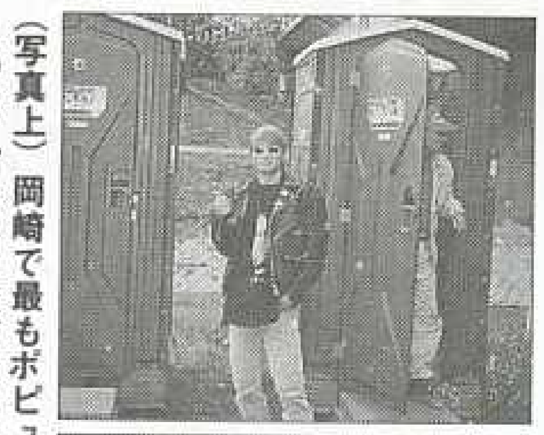
☆「ブレーキの壊れたハガキ職人」ことブルドッグ。こんなダメなボクへの応援メッセージは水たまりよりも深い愛と、北極海よりも暖かい思いやりを感じます。といった具合で、毎度毎度、ボクとチョロさんで、「こいつは俺が発掘したんだ！」「これは俺の女だ！」と取り合い&殴り合いをしながらやってます。チェケ！

なんだよ、小川vsスバーンは"お笑いプロレス"じゃないか。ホント、通常のプロレスでもあれだけ笑えないよ。というか、テレビ中継を見て久々に笑った。もちろん、ドリーの笛がおもしろすぎたのだが、スバーンも思いっきり勝つ気なし。何から何まで中途半端だった。でも笑えたから5点はあげる。小川のキックもひどいね。結局橋本には通用したけどガチンコのできる本物には通用するかどうか。(無記名)

☆T・J・シンがA・猪木を路上で襲いかかった「新宿襲撃事件」が時空を超えて蘇ったのが、小川の「新宿スポーツ会館襲撃事件」でしょう。浅草キッドも蘇らせましたけどね。あそこで笛を吹いたドリーはプロ。そしてエンターテイナー。

謹啓毎度格別のお引き立てを戴き誠にありがとうございます。本日は「大和魂Tシャツ」当選のお礼に、つまらないものではございますが、地元の特産品「八丁みそ」を送らせていただきます。みそ汁はもとより、サバみそ、みそおでん、どて煮、みそ鍋等にお試し下さい。お口に合いましたら幸いです。尚、同封の写真は愛知県岡崎市内のみそ工場を見学したときのものです。

(愛知県　キャプテン名倉　♂)　謹言　5点





(写真上)岡崎で最もポピュラーなみそ蔵。市内にはこのタイプのみそ蔵が無数に点在する。蔵から出てきたのは工場長の坂本茂吉(仮名)さん。毎日、大量の良質な米みそを生産する達人。(写真下)何故か子供ウケを狙ったキッチュなみそ蔵。

☆オウ、シット!!　エクセレントなお味噌がキャプテンから届きました。前号で「ジャイ子一日デート権」のプレゼントすると書いたところ「くれくれくれください!!　ぜひ!!　いやぁ〜、いい人だぁ!!　ノブ、バンザイ!!　男前!!」という返事でした。わかりました、わかりました。男前で、いい人、そして太っ腹なボクが都合のいいときにジャイ子をブッキングしましょう。ジャイ子は暇な日には『サンリオ・ピューロランド』に一人で行く寂しい女なので、それに同伴する、なんてのはいかがですか？「イエ〜イ、行く行く！」とバカ丸だしではしゃぐジャイ子。あとは、若いもん同士でな……。

先日、朝日新聞でリングスのチケットプレゼントがありました。4枚応募したら4枚とも当たってしまいました。次の有明大会は必ずリングサイドの席を買って見に行きます。また、日明兄さんの引退記念日2・21ということでナンバーズを買ったら当たってしまいました。このお金はリングスと『紙プロ』のためだけに使います。

(東京都　高島有治　29歳　団体職員［つぶれそう］)　4点

☆その金でまずは、ハガキ道場に20枚ハガキを出してください。



(熊本県　山崎英紀　33歳　♂) 5点
前代未聞の勃ッ起ン表紙が話題を振りまいた本誌前号。修斗くんにはSEXフレンドが2匹もいるらしい。モテる男はいいねえ。

(東京都　山崎雅幸　19歳　♂) 2点
似てるよね、エンセンと修斗くん。詳しくは書けないけど修斗くんも喧嘩好きらしいからね





(愛知県　キャプテン名倉　29歳　♂)3点
このハガキに添えられたメッセージがありました。「ブルドック君を手下3号に任命します」とのこと。喧嘩するのも、仲良くなるのもいいけど、『ハガキ道場』でよろしくっ！

就職資料希望　大学3年生　(奈良県　楠田卓生　大学3年生　♂)　1点

☆前号で腹を公開したらメチャクチャ反響でかかったです、ボクの腹。『パワー・オブ・ドリーム』のヤマケンまで驚いていた模様。光栄です、っていいのか、俺？

『紙のプロレス』という誌名であるならば、全日本プロレスの選手にインタビューしてみてはどうでしょう？　この誌面から交流戦が実現するかもよ。

(大阪府　宮脇博司　29歳　♂)　4点

☆思いっきり真っ正面から建設的なご意見が届きました。やりたいけどねえ？　三沢革命の波がここまで届いてないんですよねぇ。新日、全日に取材のお願いに行ってるけど、いろいろ難しいことがあるみたいで、広報の人も大変そうです。交渉がんばりま〜す。

おもしろかった記事はジャイジャイ日記。つまらなかった記事はUFO軍団のところ。格闘家は紳士じゃないといけないと思うから。

(岡山県　小野昌晃　23歳　♂)

☆紳士といえば、昨年『フロムA』で紳士に選出された山口日昇。今号の入稿時期に、カレー食った日に酒を飲んだもんだから15年来患っている痔が激化！　取材2本(しかも前田&桜庭!!)をすっ飛ばして自宅療養中です。一度、その痔を撮影した8ミリ(そんなもん撮るなよ)というお宝ビデオを見たことがありますが、ほとんど地球外生物ですね。希望があれば、次回7月からの『青空プロレス道場』で上映しましょうか？



(埼玉県　中川雅博　21歳　♂)4点
バーバリアンがバーバリーのマフラー巻いてます。カラーのイラストだとわかるんだけどね。中川画伯のイラスト、いつかピンナップで使いたいなあ。

ジャイ子の膀胱炎の原因はキタナイ手でいぢったためじゃ！　なぁ、真鍋！　これがインディーの魂じゃー！

(熊本県　山崎英紀　33歳　♂)

☆前から後ろから、下半身の乱れまくった雑誌だね、ホントに。ちなみにジャイは完治したそうです。

また載せていただき、ありがとうございました。住所は隠れていたのでよかったです。いたずら電話は困るよね？　でも私は小6のとき変質者に遭いました。綿棒とマキロンを渡され、「消毒してくれ」と言われました。そういえば試合後のカレリンは小走りで、小便をガマンする小学生みたいでドキドキしました。万歳!!　キング・オブ・アキラ!!　あと……ノブさん、私のこと嫌いですか？　なんとなく。何でもないです。

(千葉県　神子佳世　16歳　♀)

☆前号で「二代目武田いづみちゃんを目指す！」と力強く宣言、センス溢れるハガキを書いてくる上に、杉作J太郎先生からもレスポンスが帰ってきたスーパー女子高生・神子佳世ちゃん！(息を切らしながら)俺は、俺は、好か〜ん!!……じゃなかった、腹一杯の気持ちで、好きなんじゃ〜!!　っていうか、ホントにホント、ハガキの裏に貼ってくれたプリクラもかわいいし、ハガキ道場にハガキくれるし。ハガキをくれる読者がボクの恋人です！



(東京都　伊藤智彦　28歳　♂)2点
けっこう凄い顔してた王子。『K通』に載ってた半笑いの表情がボクのお気に入りです。

読者はやるよっ!! 俺はやるし……、読者もやるし…… ハガキ道場は元気の塊っ!! な募集

今回は勝ったけど、ハガキ道場のトップランカーなのに中川画伯がよりによって『夢のハガキ』にTシャツ出しちゃったばっかりに、こっちのハガキ少なくなるのは目に見えてますな。さて、どうしよう？ というわけで、次回からあっと驚く新展開を画策中。引き続き、ハガキ道場ではご意見、ご感想、素敵なイラスト、壊れたイラスト、読者のみなさんのハガキなどを募集します。発売間隔が1ヶ月なので、載せたいハガキは早め早めで送ってください。宛先は〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷3・11・3・702 （株）ダブルクロス『ハガキ道場スネークピットジャパン』行で。合言葉は「たんがからまないまくり」です。よろしくぅ～。

前号の人気投票 紙プロ RADICAL No.16 御意見番

1位 前田日明引退直後インタビュー



●いつも貴誌での前田インタビューは楽しくてしょうがない（埼玉県 北山弘人 38歳 男） ●他誌では引退試合が終わった途端に日明兄さんの姿が消えてしまった やっぱり前田ネタは 紙プロである（北海道 田中正 32歳 男） ●このために 紙プロを買った!!（八代市 長江義男。19歳 男）

1位 エンセン井上インタビュー



●いままでエンセンに興味なかったけどインタビューを読んでとても好感を持てる人物になった（岡山県 藤田美洋 25歳男） ●キレてる 大和魂は別にしてムチャクチャ怖い（大阪府 山内義久 30歳 会社員） ●ステキ! 私が抱かれてもいい男NO.1です（千葉県 コング金子 22歳 女）

3位 村上一成インタビュー



●歯に衣着せぬ発言ですね（新潟県 西倉栄光 35歳 男） ●ゴールドジム行徳に通ってるんですけど、一度も話したことがないのに、挨拶してくれた礼儀正しい村上さんは最高!（千葉県 桑田秀幸 21歳 男）

4位 坂田 亘インタビュー



●坂田の口からルミナ、マッハの名が出るとは思わなかった リングスジャパン勢の修斗観をもっと詳しくききたい（東京都 鈴木淳 22歳 男） ●リングスももっと交流してほしい（愛知県 陸浦達也 26歳 男）

5位 語ろうジャンボ鶴田

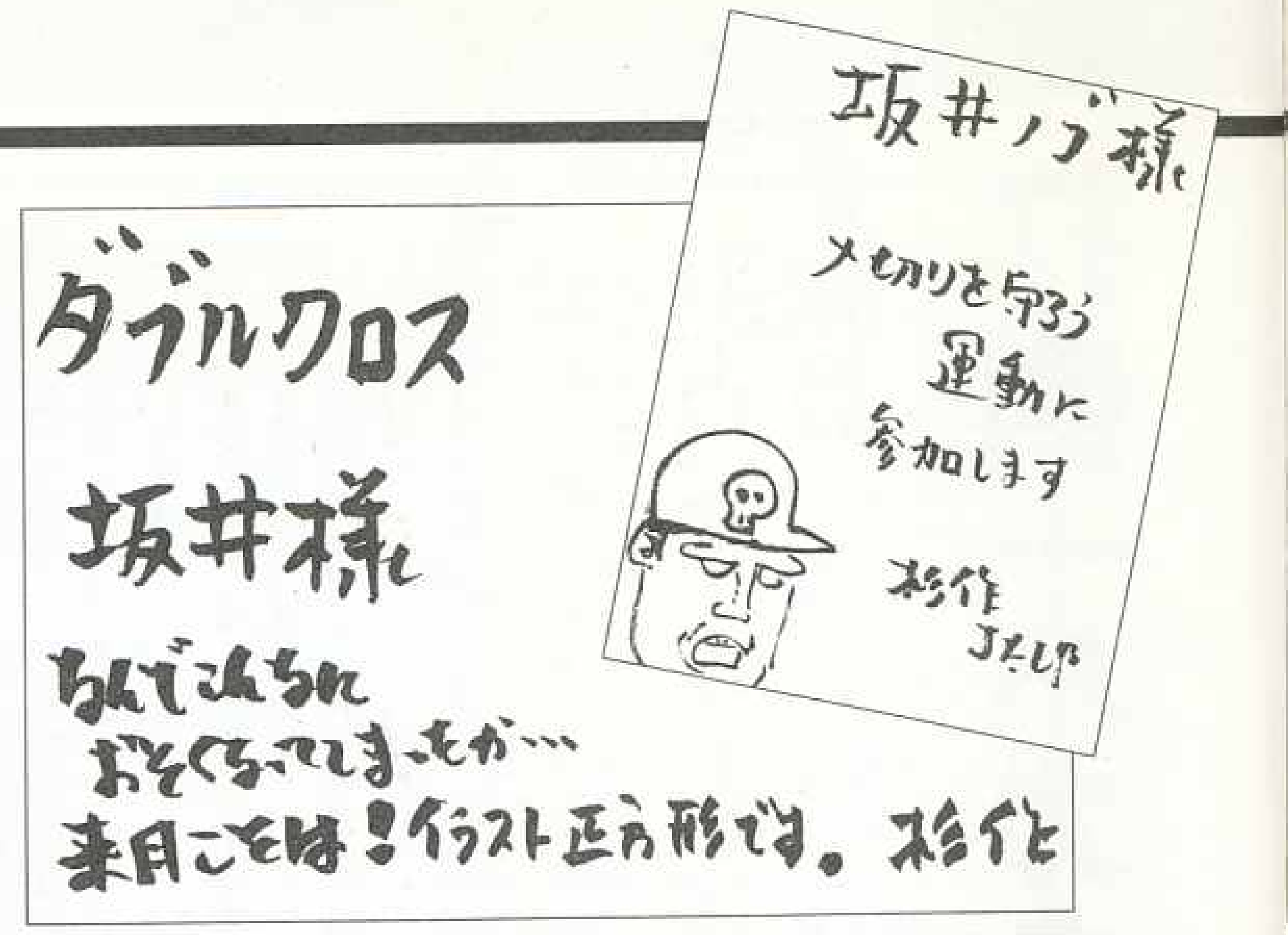


●「紙プロ」は全日やらないけど、こういう企画を待ってたんですよ ジャンボはリアルに強かった!（神奈川県 デビル西川 22歳 男）

※締切の都合上、ハガキの少ない段階の集計でこの順位になってます。最終的には、わずかな差で日明兄さんが単独1位でした。強えェ!!

祝・月刊化! 杉作J太郎先生からのFAX紹介!!

2、3、4月と連続で出して、5月にも出るというとんでもないスケジュールの『紙プロ』。連載の先生方にも事情を説明しました。そしたらFAXで来たのが右のFAX。目が死んでるイラストなので、怪しいかなと思ったら……やっぱり。さあ、今月も頑張りましょう!! 神子佳世ちゃんを振り向かせましょう!



イラストで見る 本誌バカ軍団







（愛知県 キャプテン名倉 29歳 男）3点
これ、ジャイ子? 最近、「ジャイ子はかわいい」といった類のハガキが増えてますね。本人は、最近メイク時間がなぜか倍増中。

（石川県 ブルドッグ 20歳 男）各1点
さすが、吉田豪の魅力を語らせたら右に出るものはいないね。さすがブルドッグ。ポージングもバッチリだ。みんなそこそこ似てるのに、山口日昇だけいい加減なのは、なんか理由があるの?







常連さん、行く人 来る人 どんな人？

ここに挙げた方は『ハガキ道場』の常連さん。あと、中川画伯、キャプテン名倉もだけどね。さあ、この人たちが『ハガキ劇場』に移るのか? ここに残るのか?

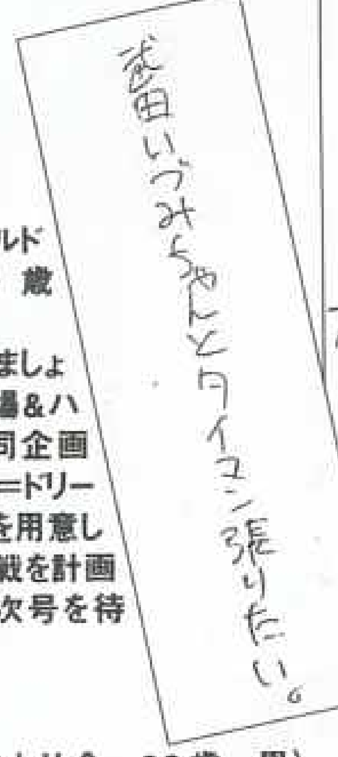


（山口県 またあうヒマで 18歳 男）5点
常連中の常連の彼が「引退します」とハガキに書いてきました。プロレスラーに一生引退がないように、ハガキ職人にも引退はない! というわけ大仁田ばりの復活期待してます。

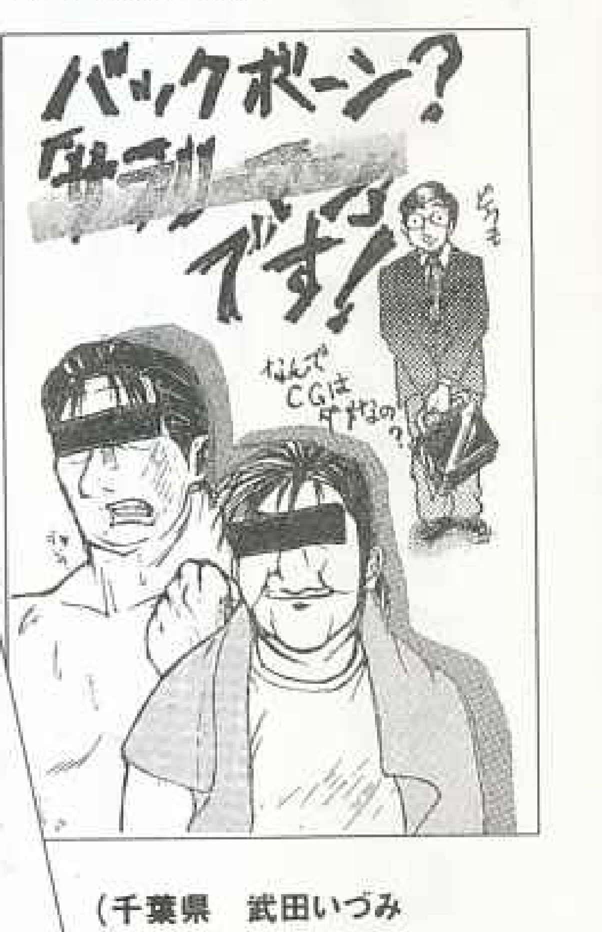


（山口県 アホクサッ 18歳 男）5点
50歳になっても、鶴田が最強だといい続けていたいですね。セックス、ドラッグ、ローリング・ドリーム!

（山口県 bakatare@me!.ne.jp 18歳 男）5点
ウチの雑誌はカタブツが空手、ボクがアメフト、山口昇がヤクザ、チョロが痴漢、ジャイ子が180センチ90キロのデブ（本人は否定）とよりどりみどり。



（石川県 ブルドッグ 20歳 男）4点
マッチメイクしましょう。ハガキ道場&ハガキ劇場合同企画で「夢の舞台=ドリーム・ステージ」を用意して、団体対抗戦を計画中。詳しくは次号を待て!



（千葉県 武田いづみ 18歳 女）5点
入試の結果は、こっちが入稿した後にチョロが入れたから、こういう行き違いになりました。その他、誤植、ミスに関してはホントごめんなさい。みんな愛想つかして、ハガキ劇場に行っちゃうんだろうね。いづみちゃんには、こっちに残って欲しいですが。

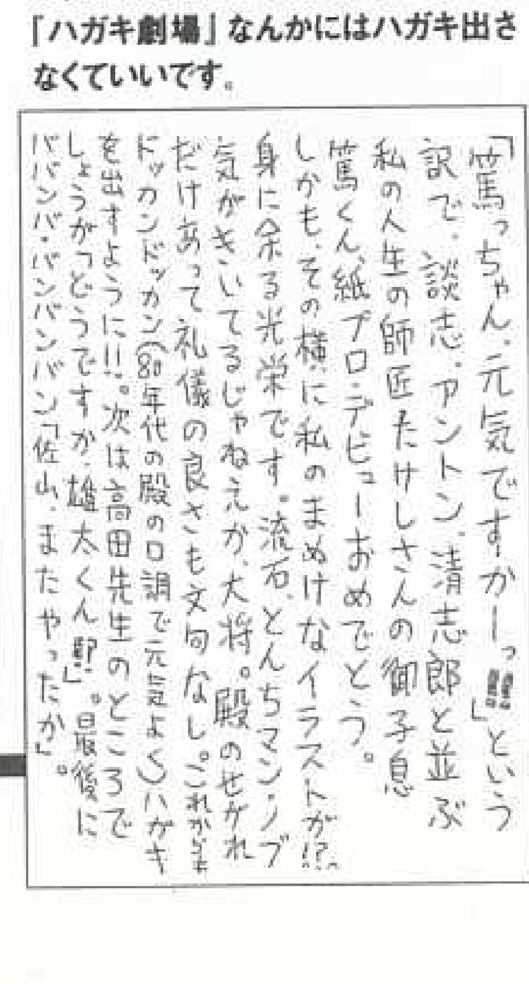
（富山県 なっ!ちゃん 19歳 男）5点
相変わらず壊れてるなあ。ガラクタ軍団長・なっ!ちゃん。「ハガキ劇場」は君のイラストでTシャツ作りたいね。

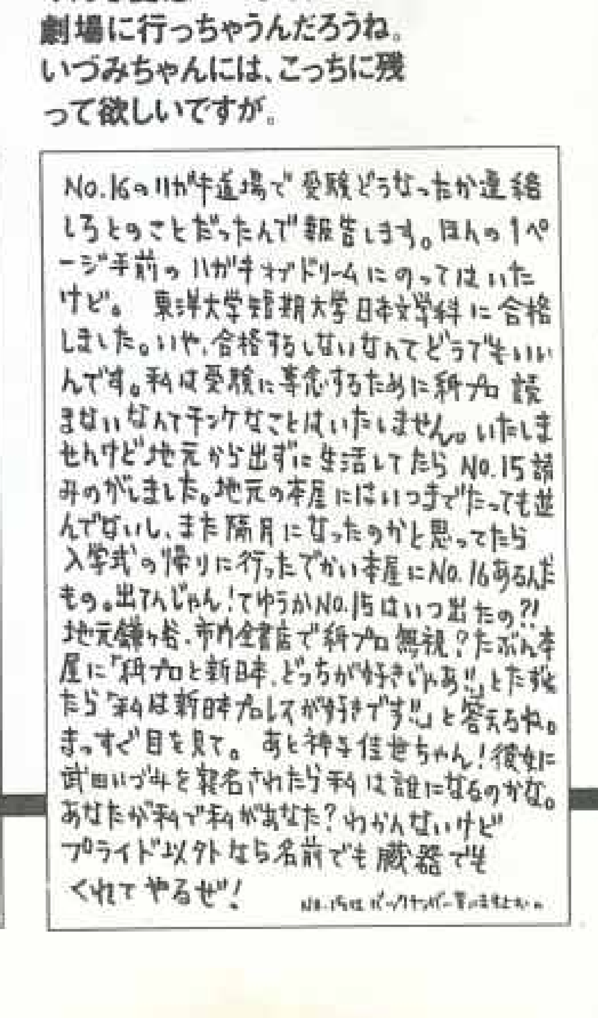




（富山県 なっ!ちゃん 19歳 男）5点
すべて好きです、アナタのイラスト。なっ!ちゃん自身は「中川画伯の画集が出たら5冊は買います」とのこと。

（熊本県 塩本祐介 33歳 男）3点
お礼のハガキが塩本のダンナから。いや、こちらこそ、ハガキ道場はアナタのような常連さんで支えられているので、「ハガキ劇場」なんかにはハガキ出さなくていいです。





ドスコイ ハガキ道場番付表

1位	中川雅博	P	76点
2位	またあうヒマで	P	71点
3位	塩本祐介	P	67点
4位	キャプテン名倉	P	47点
5位	武田いづみ	S	28点
6位	ブルドッグ	S	25点
7位	今井麻実		20点
8位	うしえもん		18点
9位	英和直純		15点
9位	神子佳世		15点

Pはプロフェッショナル・ファイター（40点以上）
Sはシニア・ファイター（20点以上）の略です。
掲載されたらプレゼントあげるカモン、ハガキ!

HAGAKI OF DREAM改め
(ヤマケンさん申し訳ない。あい〜や)

ハガキ劇場

打倒「ハガキ道場」！ 狙うは坂井ノブの首ひとつ!!（ホントはあんまりほしくない）

ノブに喧嘩をふっかけた理由？ 俺は停滞気味だったノブが動けば良かった。誌面が活気づけばそれで良かった。そう思いケツを叩いてやろうと『ハガキオブドリーム』を発進させたわけだが、ノブからは立ち直る気配すら見えない。1週間で携帯を2度落とそうが、もはや驚きすら感じなくなってしまった。このまじゃ『紙プロ』読者の底辺拡大もままならない。もうデブデブ太ってる時代じゃないんだよ！ ノブ・イズ・デッドですわ。ヤマケンさんには悪いが今回はノブの大好きな大仁田ギミックを使わせてもらう。ノブにこびりつくファンよ。俺はお前らに胸一杯指を突き立ててやる！『ハガキ劇場』開演じゃあ！



（金沢市／ブルドッグ／男／20歳） 5点
ミネラルで満ち足りた表情のアントン。さすが「ハガキ劇場」界の救世主・ブルドッグ君。今度一緒にライオンタマリンと遊びに行こうぜよ！（語呂悪し）。

意見、要望、感想じゃ〜

チョロ兄ィ!! 待ってました!! 最高のネーミングじゃないですか!! 「夢のハガキ」か。シビれるぜチョロ兄ィ!! 大体何ですか、あのノブとかいうデブ野郎は!! ブクブク太りやがってなめてんのかコノヤロウ!! TVのリモコンでカチ殴るゾ。バカヤロウ!! チョロ兄ィ、僕はあなたと一緒に歴史を築いていきたい!! いくぞー、イチ、ニ、サン、愛〜や!!
（金沢市／ブルドッグ［二枚舌でも可］／男／20歳） 5点
★坂井ノブは、好か〜ん！ おいブルドッグさんよ、相変わらず勢いがあっていいじゃねえか。二枚舌でも三枚下でも関係ないんよ。にっちもさっちもどうにもブルドッグ！ 俺は、お前が好きなんじゃ！

「HAGAKI OF DREAM」って最高!! だってヤマケン・パクリ企画だから。金本さんをTVで見てファンになった私ですが、生ヤマケンファンになったかわいい私です。ヤマケンって最高!!
（東京都北区／金崎菜菜子／女／23歳） 5点
★ヤマケンは最高じゃ！ 俺もそう思う。だがな今回から「ハガキ劇場」なんよ。金崎さんよぉ、アンタは俺と坂井ノブどっちが好きなんじゃ。いいから黙って俺について来い！ 俺は、絶対に、絶対に、お前らを裏切らん！ 底辺拡大するんじゃあ！



その格好を見る限り、キッドさんも「ハガキ劇場」派だね。北野クンも、アッシ繋がりってことでハガキは「ハガキ劇場」に。

「夢のハガキ」はオレが乗っ取る!!（田村調）
（金沢市／ブルドッグ／男／20歳） 5点
★お前の言葉よ〜く受け取った。それはお前の本心じゃな!? 一人の男でもな、全責任を負わねばならない時がある！ それがお前の本心だな！ オイお前ら、力がなかろうと一瞬だけでも胸いっぱいになろうぜ！ 宛先は「ハガキ劇場」に決定（欽ちゃん風に）

編集部のみなさん、PRIDE5の取材には来られるんですよね？ 私は先日チケットを取りました。（A席6000円だけど）ジャイ子ちゃんに会えたら、「色紙いっぱいの手形」もらいたいな〜（って怒る？）みなさんをお見かけしたら、こっそり写真をとって「投稿写真DELAX」に送りまーす!! 席は2階●30列5番でーす。きっとろくに見えやしないよ！
（愛知県／真下純子／女／29歳） 5点
★よ〜し席はわかった！ 真下純子さんよ、待ち合わせ時間、午後5時！（カメラ目線で）

あのねぇ松澤チョロくん、オタク問題ありますよ。林〝ヘックション〟一枝さんへ宛てたハズの手紙を勝手に自分のコーナーに流用しないように!! 名前出されっとマズいんだようっ 友人・知人の前で日頃エレガントかつフェミニンを装ってきた私の本性がバレちゃったじゃんようっ『紙プロ』編集部に気を許したのが間違いだったとでもいうのか。このイメージ破壊王!! まぁしかし、猪木さんのインタビューを読んでのち、ミネラル麦茶をゴクリと飲み干しみれば、怒りも鎮まってしまったからアラ不思議。うっかりすると読者まで足元をすくわれかねない油断のならない奴、それが松澤チョロくんなのでありましょう。ミネラル足りてる？
（福岡県／Y・A／女／?歳） 10点
★本当に悪かった。確かにミネラルが足りなかった！ アンタも素人なら、俺も素人！ 素人をナメたらあかんぜよって事がよ〜くわかった。今度は俺の邪道パーティーに招待してやるぜ！ 参加の有無は『ハガキ劇場』まで！



（熊本県／塩本祐介／男／33歳）5点
ポテチンも含めたものが、含めたものが、俺の生き方じゃ〜!ってそりゃないぜ!

『紙プロ』さんお願いです。真鍋アナにぜひインタビューして下さい。彼はサイコーのエンターティナーだ。
10点希望（富山県／福原統／男／19歳） 10点
★なに10点希望？ そんなバカがいるとは思わんかった。プロレスが好きなんだな。よ〜し、わかった。10点やろう！ 俺は素人にやさしいんじゃあ!!



（愛知県／タコ／男／31歳） 5点
祝ってくれてありがとよ! 入学したのはいいけどよ、部活なにやろうかな? アマレス? それとも柔道? やっぱり演劇部がいいよなぁ。



（逗子市／笹原晋／男／23歳） 4点
国境を越えた夢のシェイクハンド!『紙プロ』にも手を差し伸べてくれないかな。



（青森県／青木雄大／男／23歳） 5点
今回はちっとお休みの「目ぇつぶって30秒!!」。その間にこんなステキな商品が！ 飲みたいなっ！

ゴールデンエイトの正体はターザンかっかっかっ。好か〜ん。色気づいた吉田豪は好か〜ん。奇しくも『週プロ』に女々しいとだけ書いたハガキにて、サスケのチャブ台とイワシとマスクをゲット！ しかしマスクはバカスケマスクじゃなくて、レギュラーマスクでした。サンキュー。でも、まだサスケはバカスケマスクに未練があるのでしょうか。
（福井県／西澤ゆみ恵／女／27歳） 5点
★ゴールデンエイトはターザンじゃないんじゃあ!! 正体はみちのくプロレスのテッド・タナベ！（USO）。それと、サスケ、サスケ、ドームでは解説ありがとよ！（って俺もサスケ組なんだけど）

1枚目・プロレス狂の詩の表紙タチ悪いですね〜。2枚目・「戦国！山口日昇!!今田耕司読本」3枚目・今、30枚目を書いています。壊れてるんだね、きっと。4枚目・真鍋ェ〜!! モーリスのチンポって一体何センチあるんじゃ〜!! 5枚目・「一歩踏み込めば、あとは極楽」座右の銘にしよう思います。6枚目・壊れました。
（金沢市／ブルドッグ／男／20歳） 各3点・計18点
★前号で10枚以上もハガキを送ってきてくれたブルドッグ君。今回はなんと30枚突破！ ありがとよ！ 今回は同じ日に来た大量のハガキの中から6枚を紹介するんじゃあ!! って大丈夫か？

面白かった記事

「坂田亘インタビュー」ぜひ大仁田戦（ヴァーリ・トゥードで）を実現してほしい。現役高校生の大仁田に世間の厳しさを教えてほしい。
（青森県／藤原大作／男／17歳） 3点
★高校生で何が悪い!? 俺なんか中浪してるんじゃ！ 合格しただけで凄いんじゃあ!! お前ら、高校生をナメたらあかんぜよ！

「語ろうジャンボ鶴田！」この間、バンバンビガロへ通販のお願いをしようと電話しました所、マスクド店長さんに大変親切に対応していただきました。それは置いといて「鶴田は毛糸」というのは超賛同です。もちろん手編み。
（愛知県／真下純子／女／29歳） 5点
★マスクド店長はビガロを辞めてしまったんだじゃ。5万円で作った自分の会社から飛び出した俺と似てるんよ。それが男の生き様じゃ！（俺は誰？）

「エンセン井上インタビュー」エンセンがどーして強いのかわかった様なわからない様な、とにかくこんな危ない奴は普通の試合はさせれないって気がします。バーリ・トゥードやアルティメット用に生まれた男、これーなったらエンセンのプライド5の次の舞台は政界、猪木でも馳でもできない政治改革をこの男に期待します。
（香川県／正木浩二／男／19歳） 4点
★例えエンセンだろうが電流爆破なら受けてたつ！ 第0試合で結構！ 政治家エンセンかぁ？ 力ずくで政治改革してくれそうだな。確かに期待できる。ホント大宮市長にでも立候補しないかな。世界最強の政治家の誕生じゃあ！

「村上一成インタビュー」あの太った人の正体が分かり、夜グッスリ寝れました。は〜い。
（山口県／田中アヤ／女／20歳） 5点
★平成の門番・米屋さん、アナタへの憧れなのか、坂井ノブは日増しにアナタへ似ていくばかりです。ホント見てるだけでお腹いっぱいなんじゃ！

「マーク・コールマンインタビュー」中村カタブツ氏は英語が得意なんですね。
（岐阜県／西脇心／男／19歳） 3点
★カタブツ君が英語できるわけないんよ！ 通訳の名前を入れ忘れただけなんじゃ〜！

「前田日明インタビュー」あきら兄さんかっこ良すぎ!! マジなのかフザけてるのかよくわからないところが可愛すぎました！ 結婚しないで下さい、私のタメにって感じ♡
（仙台市／千葉裕美／女／14歳） 4点
★俺も14歳の女の子から可愛すぎって言われたいんじゃ。ハガキ出して下さい、ボクのタメにって感じ♡

つまらなかった記事

「『HAGAKI OF DREAM』と『ハガキ道場』」似たような事をするならいちいち二つに分けないで一つにしろ。あと編集者同士でくだらない争いをしているヒマがあったら、読者の事を考えたもっとよりよい雑誌作りに時間を使え（命令口調ですいません）。（青森県／藤原大作／男／21歳） 5点
★確かにくだらない争いかもしれん！ だがなノブが嫌いで何が悪い！ 奴のイビキはうるさいんじゃ！ 奴とは、もう3週間も口きいてないんよ!!

「ちょうの出来事」チョロがキライだから。
（富山県／橋本美代子／女／32歳） 2点
★嫌いならスパッと殺してくれ！ だがな、嫌い嫌いも好きのウチなんじゃ〜！ ついでに言えば今日の晩メシは幕の内なんじゃ〜！ 以上。

「プロレス道場レポート」書いたノブさんに恨みはありませんが個人的に山本さんの出現しているページは読むと破り捨てたくなるほどムカツクので。失恋で誹謗中傷の手紙を送りつけたり、受講拒否する男らしくない人は嫌いです。
（浦安市／匿名希望／女／28歳） 5点
★暴走失恋戦士ターザンからこれまで一方的に言われっぱなしだった元彼女からの返答じゃあ！ アンタは男らしい人が好きなんじゃな!? アンタみたいな人は、男樹溢れる「ハガキ劇場」までどんどんハガキを出してくれ！ 酔った勢いで触らないように気を付けるから。あん時はありがとよ！

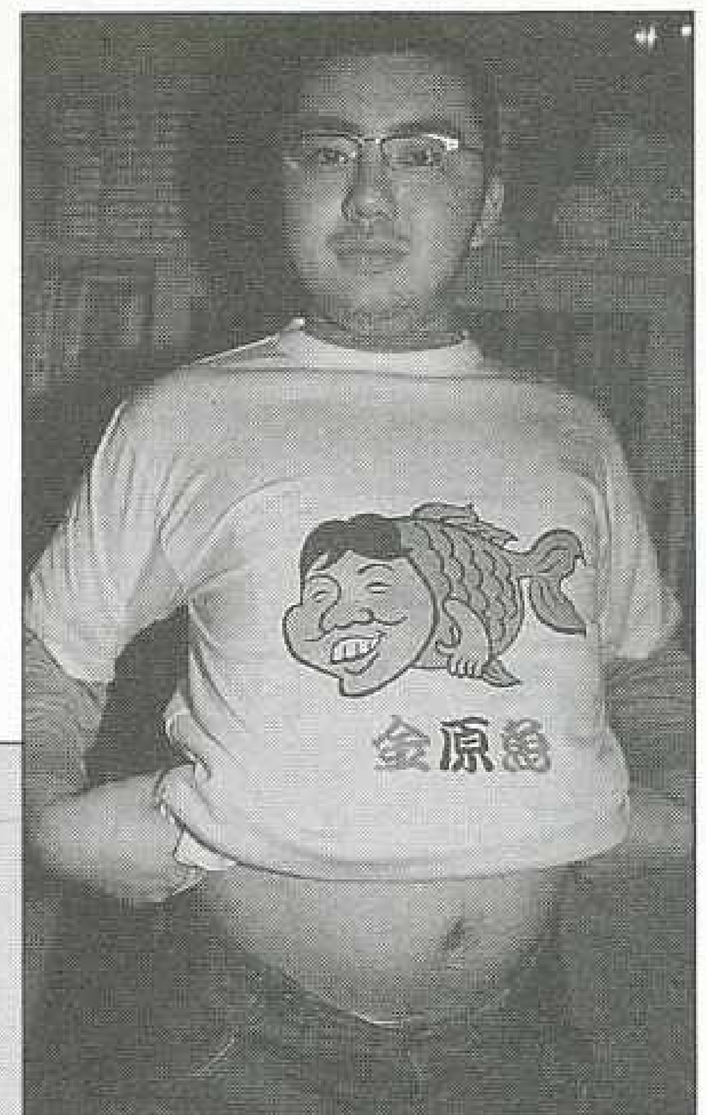
「ジャイジャイ日記」素人だから
（福生市／山崎雅幸／男／19歳） 2点
★言いたいことは良くわかる！ だがな、新聞も週刊誌もチケットも「紙プロ」も、買う人は全部素人なんよ。素人をナメたらあかんぜよ（いくらナメたってジャイ子はイケないけどな）。ジャイ子も性病を克服した立派な尿道者なんじゃ！ 間違えた、邪道者じゃ！ ジャイ子ネタは「ハガキ劇場」で待ってるぜよ！ ジャイジャイじゃあ!!

オイッ！ オイッ!! オイッ!!!「ハガキ劇場」からはな、マサ・ナカガワデザインTシャツをプレゼントするんじゃ。これが俺のやり方じゃ～!!



マサTシャツ

シンプル・イズ・ベスト！ ゴー・フォー・ブロック！なマサTシャツ。精一杯マサに成りきろうとしたものの、これじゃただの泥棒男だ。俺も監獄に入らないように気を付けなきゃな。でも、なんだか急に女が欲しくなってきた……。



金原Tシャツ

前号でのエンセンの発言をもとに、忠実に作り上げられた金原魚Tシャツ。せっかくグッドデザインなこのTシャツもモデル次第でこんなになってしまうとは……。颯爽と着こなしてくれるアナタにプレゼント致します！



ハローにゃんまげTシャツ

日本最大級のキティラーとして知られるジャイ子もヨダレを垂らして欲しがっている「ハローにゃんまげTシャツ」。「ジャイ子も『ハガキ劇場』に応募するから頂戴。ジャイジャイ」なんて言ってるけど、みんなも応募するんじゃいじゃい！

「中川画伯のぬりえが欲しい」「中川画伯の画集が欲しい。俺は5冊買う準備がある」など、読者からも絶大な評価を得ている中川画伯。前号で、「マサ・ナカガワデザイナーにもマサTデザインをしてもらいたい」とお願いしたところ、ホントに送ってきてくれたんよ。画伯のご厚意により、読者の皆様にプレゼントするんじゃあ！（限定各1枚）希望商品を明記の上、「ハガキ劇場」までご応募下さい！「ハガキ道場」なんかに出しても当たりませんよ！（中川画伯に30点さしあげます）

ありがとうよ（大仁田風に）マサ・ナカガワ！

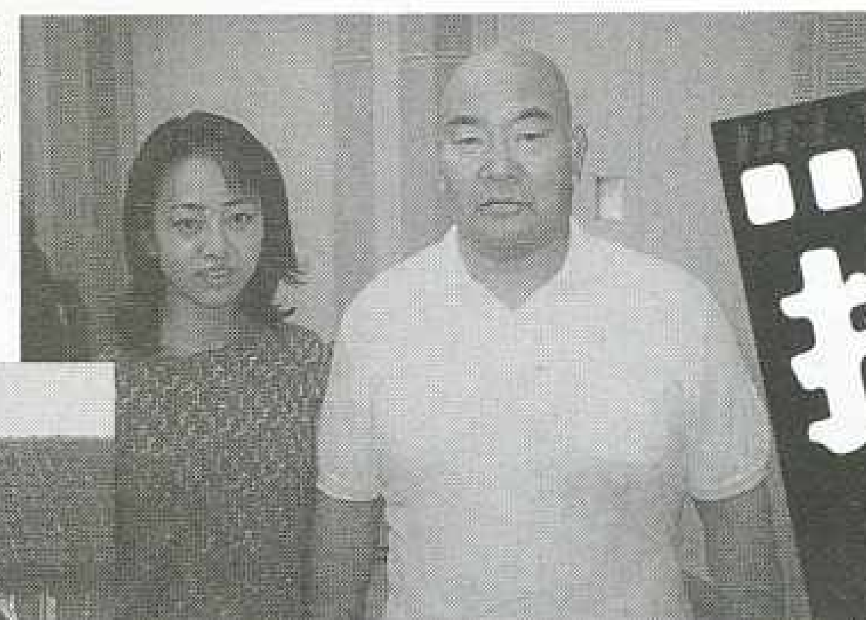
投稿写真 デラックス

お前ら、レスラー・格闘家と撮った写真をどんどん「ハガキ劇場」まで送ってきてくれ！ それと写真と一緒に説明文を忘れるなよ！ しか～し、応募作品は一切返却せん！



ちっとちっとチョロです。街をテクテク歩いてたら、写真を撮られてしまいました。それが『クール・トランス（5月号）』に見事掲載されました。これで俺もオシャレ有名人！ 悔しかったらノブも載って見ろ！（俺だってホモ雑誌に載ったことあるよ・ノブ談）　（世田谷区／チョロ／27歳）5点

★いつだか忘れてしまったけど、新日のイベントにて、とりあえず誰でもいいって言えば良かったので山本小鉄さんと一緒に撮ってもらいました。親子のような微笑ましいナイスショットです。
（横浜市／佐藤恵美／25歳）4点
★オイッ！ オイッ！ オイッ！ 自分で言うな！





先日、ゴルドーさんのドージョーカマクラへ修行に行ってきました。するとゴルドーさんは温かくむかえてくれた上、毎日2人でマンツーマンの稽古をつけてくれました。しかもいろんな所へも連れていってくれて最高でした。ニコ・ゴルドーさん（兄）もいい人でした。それにしても奥さんきれかったー！
（住所不定／男／？歳）5点
★ゴルドーと2人きりでいろんなところに行ったという勇気あるお兄さんよぉ。この写真を見たら連絡をくれ！ 名前が書いてないんじゃ。

国際プロレス最高！ 埼玉プロレスに今度行きたいと思っています。
（横浜市／三輪盛行／24歳）3点
★毒ガスマスクはサバイバル飛田に続いて大ブレイク間違いなしじゃ！



ハガキ劇場オフィシャルランキング

1位	ブルドッグ	43点
2位	中川雅博	35点
3位	真下純子	25点
4位	吉田豪（オシャレ有名人）	15点
5位	Y・A	13点
6位	武田いづみ	10点
6位	福原統	10点
8位	藤原大作	8点
8位	タコ	8点
10位	笹原靖	7点

本誌SV（スーパーバイザー）吉田豪が鶴田vs藤波戦に向け水面下で暗躍中？



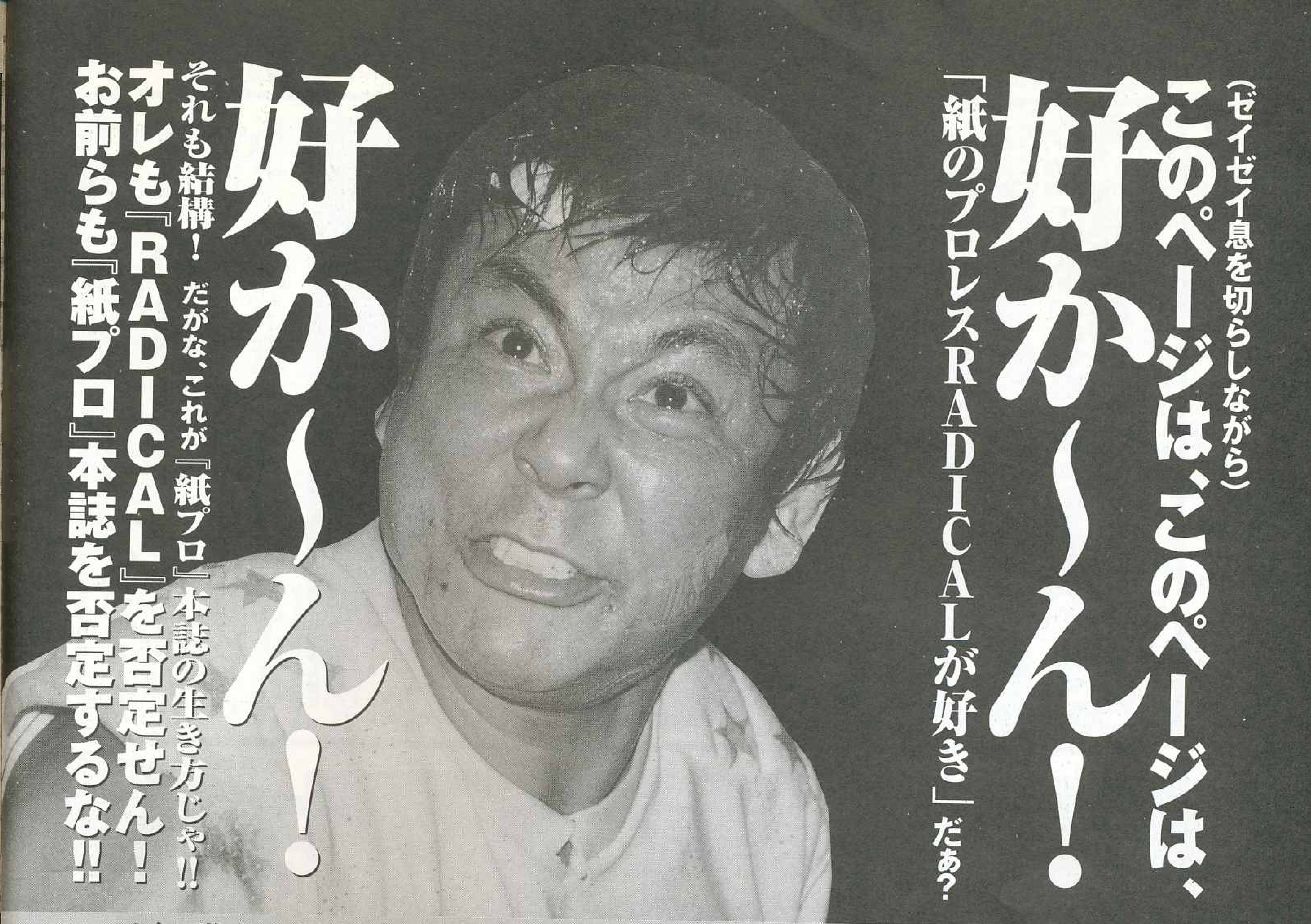
『ナンバー』での取材時に撮影（撮影場所はジャンボの嫁のお姉さんの豪邸）。イエモンのライブ帰りのジャンボは、いろんなわけのわからないポーズをとりまくり終始ご機嫌だった。
（練馬区／吉田豪／28歳）8点

越中にフォール負けされたドーム大会の翌日、暗い表情でガッツ石松パーティーに呑気に現れた藤波と一緒に撮りました。
（撮影・かおり夫人）
（練馬区／吉田豪／28歳）7点



俺は何を求められているのか自問自答しながらハガキ募集

俺と坂井ノブとの抗争が読者に伝わっていなかったため常連の読者は「ハガキ道場」に投稿してしまったようだな。むなしいね。だがな、オイッ!!　オイッ!!　オイッ!!『紙プロ』はお陰様で発行数も伸び、新たな読者も着々と育ってきてるんじゃあ!!　お前らの力を俺に貸してくれないか!ということで「ハガキ劇場」では、本誌へのご意見、ご感想、愉快なイラストたち、街で見かけたプロレスラー&格闘家、武田いづみちゃんや真下純子さん、もちろんブルドッグ君や神子佳世ちゃんなどからのハガキも大募集してるんじゃあ！　北野篤君も大歓迎！　宛先は……　〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702（株）ダブルクロス「ハガキ劇場」係まで。
合言葉は、合い言葉は、「失恋ショッカー」まで!!　じゃあじゃあ言ってるけど彼女にふられちゃって俺もさびしいんじゃあ!!　合い言葉を明記するのを忘れるなよ！　でもホントこのキャラも大変だぁ（チョロ）



（ゼイゼイ息を切らしながら）
このページは、このページは、
好か〜ん！
「紙のプロレスRADICALが好き」だあ？

好か〜ん！
それも結構！　だがな、これが『紙プロ』本誌の生き方じゃ!!
オレも『RADICAL』を否定せん！
お前らも『紙プロ』本誌を否定するな!!

涙の洪水!!　爆笑の嵐!!　現在、発売中の『紙プロ』本誌＆『紙プロ』公式読本リスト

5号：特集「たたかいグランプリ」特別寄稿鈴木邦男、杉作Ｊ太郎、竹本幹男／ロングインタビュー馳浩／デビル雅美vs氏神一番／脅威の連載陣！　高田文夫、ナンシー関、浅草キッド

8号：特集「さらば新日本プロレス」ワイド座談会／初登場ザ・グレート・サスケにロングインタビュー／セメントインタビュー関根勤／恐山でジンギスカンを食い、八戸で仮面貴族を見た

11号：特集「狂気とは何か？」怒涛の6人インタビュー堀辺正史、Ｔ・Ｊ・シン、西村知美、佐野量子、ガッツ石松、糸井重里／プチ特集「『週刊プロレス』とは何か？」初代編集長独占手記

12号：特集「色気とは何か？」村松友視が前田日明を語る！／「前田日明が某格闘技雑誌編集長を女子便所説教」事件勃発記念座談会／蝶野正洋も登場！／色気王Ａ・猪木も登場

13号：特集「道場破りとは何か？」安生グレイシー道場破り失敗事件記念企画山本小鉄＆上田馬之助に緊急インタビュー／サブ特集「ファミコンプロレスとは何か？」デルフィン登場

14号：特集「神秘とは何か？」佐山聡、大槻ケンヂ、プロボディーガード・清水伯鳳、鈴木みのるが神秘を語る！／遠藤幸吉、高田文夫にロングインタビューを敢行！

15号：特集「インディペンデントの逆襲」インディーレスラー10人斬り十大物インディー３人　高野拳磁、ポイズン澤田、中牧昭二／巻末特集「K-1とは何か？」石井館長インタビュー

16号：特集「新日本凸門大学校」『紙プロ』的昭和新日総力検証　マサ斉藤、キラー・カン、田中ケロ、破壊王、後藤達俊インタビュー／必読!!　ユセフ・トルコvs由利徹対談

17号：特集「実況パワフル北朝鮮」猪木×永島のナマハゲ対談（©大仁田）、村松友視がミーハーヒロイズム宣言!?　ブル中野、破壊王も登場／巻末特集「藤原組の逆襲」

18号：特集「高田延彦さんへ愛をこめて」引退宣言の読み方座談会／サブ特集「すてきな奥さん」大山倍達、サスケ、ライガー、石川雄規の嫁が登場！／新間寿恒ヒザ蹴り事件勃発！

19号：特集「さようなら紙のプロレス」『紙プロ』の廃刊騒動の顛末。新編集長誕生！／サスケ×高野拳磁『紙プロ』を偲ぶ座談会ミスター・ポーゴ、山崎一夫インタビュー

20号：特集「劇的格闘技」真樹日佐夫、角田信朗、大槻ケンヂ、村松友視の四大インタビュー／山口昇と東京シュガーベイブ結成記念　ユセフ・トルコ、上田馬之助、遠藤幸吉が登場

21号：特集「幻的格闘技」古武道を通じてプロレスを考えよう！　前田日明も登場！　スクープ・寛水流空手二代目会長の世古典代氏登場！／高田文夫、ユセフ・トルコが登場

22号：特集「この人が喝っ!!」／巻頭インタビュー・ジョージ高野／プロレス雑誌を斬る!!／高阪剛、セッド・ジニアス、小佐野景浩、熊久保英幸インタビュー／Ｍ・マスカラス宣言号

猪木とは何か？　スキャンダルにまみれていた時期の猪木を直撃！　どうってことねえよ！／村松友視、立川談志、告発仕掛人・仙波記者が登場！　新間のＰＫＯ発言を誌上再録

極真とは何か？　不撓不屈の極真魂が溢れる16人を直撃！／松井章圭館長、磯部清次南米支部長、Ｆ・フィリョ、黒澤、ニコラス・ペタス、某格闘技雑誌編集長らインタビュー

パンクラス公式読本〜矛〜　97年夏当時、横浜道場にいたパンクラシストたちを中心に構成！／なぜか突然、佐山聡が登場！／故・長谷川悟史インタビュー収録

パンクラス公式読本〜盾〜　97年夏当時、東京道場にいたパンクラシストたちを中心に構成！／偶然か、必然か？故・G馬場がパンクラスを語っていた!!

〈　申　し　込　み　方　法　〉

※現在は１号〜４号、６号、７号、９号、10号、『大山倍達とは何か？』『猪木とは何か？　キラー編』は完売しました。残念でした。
※定価は『紙のプロレス』5、8号は700円、11号〜22号は780円となります。
※『猪木とは何か？』は1320円、『極真とは何か？』は1530円、パンクラス公式読本『矛』『盾』は1260円となります。
※送料は１冊＝310円、２冊＝340円、３冊〜４冊＝450円、５冊＝520円、６冊以上＝700円となります。
※10号、『大山倍達とは何か？』は書店やプロレスショップで探せば若干残っているはずです。頑張りましょう。
※希望号数を明記の上、送金して下さい。入金が確認とれ次第発送いたします。

●現金書留
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
（株）ダブルクロス
「本誌バックナンバー係」まで

●郵便振替
00130-3-769154
（株）ダブルクロス



現代に蘇った"ヘビの穴"
UWFスネークピット・ジャパン設立記念&
青空プロレス道場最終回スペシャル

宮戸、衝撃発言!! 「シュート」と「ワーク」の相互関係

宮戸優光 INTERVIEW

構成／坂井ノブ
Interview by Nobu Sakai

昨年の秋から全10回に渡って、エンセン井上、ザ・グレート・サスケ、ユセフ・トルコ、アポロ菅原、谷津嘉章などなど『紙プロ』が自信を持ってお薦めする強くて、凄くて、面白い男たちを講師に招いてお届けしてきた『第2次青空プロレス道場』も、今回をもってひとまずの最終回を迎えることとなった。

その掉尾を飾るのはUWFインターナショナルのブレーンとしてえげつない仕掛けを連発、新日本vsUインターの泥試合では先頭を切って過激な発言を繰り返して長州を激怒させた、あの宮戸優光である。最近の読者はご存知ないかと思うが本誌はUWFインターナショナルをバッシングしまくっていた経緯がある。その旧『紙プロ』が展開したUインター批判に対して一番怒っていたといわれている、宮戸優光氏本人が今回のゲストである!! 客を入れた場所で、いきなり本誌編集長と初対面という何が起こるかわからない危険なシチュエーションで講座はスタートした!! そこでは何が起こったのか——本来ならば、講座に来たお客さんだけのお楽しみなのだが、今回に限って特別に誌面を割いて、宮戸が語った一部始終をお伝えします。※臨場感が出るように場内の描写つけましたので、会場内の異様な雰囲気も込みでお楽しみください。

プロで活躍中の選手もお忍びでいいから来てほしいですね

元プロレスラーがプロレスの「シュート」と「ワーク」について語った!! いままで誌面上で語られることのなかった、この両者の相関関係についてプロレスを守る側のはずだった宮戸が突如として語った! プロレスの中でもタブー視されていた部分である。しかし、宮戸は語る! 『プロレス』っていう言葉がズタボロにされないためには、こうするしかなかった」と。その宮戸が、なぜルー・テーズ、ビル・ロビンソンを擁して『蛇の穴』を復活させたのか? このマット界に対する宮戸の覚悟を読み込んで欲しい!! 迎え撃つのは本誌編集長・山口日昇&スーパーバイザー・吉田豪の黄金タッグだ!!

山口　さあ、宮戸優光さんの入場です。

（生の宮戸が姿を現すや否や、驚きの声が上がり、場内拍手の中を宮戸が入場。しかし、ノブがラジカセ操作を誤り、せっかく用意した『UWFのテーマ』がかからない）

山口　すいませんね、テーマ曲鳴らなくて。UWFのテーマ流そうと思ってたんですけど（笑）。

宮戸　いえいえ。

（この後、なぜ宮戸がUスネークを設立に至るまでを熱く語った！ そして、宮戸自身が言っているように堅苦しいテーマで話が進んだが、ころあいを見て『紙プロ』軍団が話をほぐしにかかる！）

宮戸　そうですね、こうやっていま僕が喋っちゃうと非常に堅苦しいテーマなんですけど、5歳ぐらいの子供にも教えていきたいと思ってるんです。要するにちびっこレスリングですね。これはいまオリンピックに出場された方が何人か候補が挙がってて、

（場内〝オォォ〟と驚きの声）

宮戸　その方に任せようと思ってます。立ち技は大江慎に任せて。その横でプロのスタイルを、ロビンソンさんが教えることになります。

山口　いいなあ。ビル・ロビンソンにプロレスを習いたいなあ（笑）。

宮戸　いまではアマチュアレスリングとプロレスリングっていうのはあまりにもスタイルが違ってましたよね。これはもともとは一緒のはずなんですよ。それがいまのプロレスリングとアマレスリングに分かれていったものだと思うんですね、歴史から言えば。ただプロが極端に奇形していっちゃったんで。

山口　奇形ですか！（笑）。

宮戸　奇形だと思うんですよ。

山口　現在プロで活躍中の人にも教えていくわけですか？

宮戸　プロを育てたいっていう気持ちも正直あります。それプラス、いま現在頑張ってる人たちの中でね、そういうものになにか感じるものがあるかたはね、お忍びでもいいですから、本当に学んでもらいたいなと思いますね。この問いかけに何か感じてくれたレスラーがいるんであればね。

山口　レスラーに限らず格闘家でもいいわけですよね。

宮戸　そうですね。

豪　『PRIDE.5』のために高田（延彦）さんが来たらいいですね（笑）。

山口　面白いねぇ。

豪　ちなみにセッド・ジニアスが行くっていう噂がありますけど。

（会場笑）

山口　宮戸さんはセッド・ジニアスってご存じですか？

宮戸　知らないんですけどね。

山口　インディーのトンパチ・レスラーなんですよ（笑）。アメリカのルー・テーズの道場に行ったんですけどそこでお金のトラブルがあったらしいんですよ。

宮戸　あぁ、聞いたことありますね。

山口　それをいまだに根に持って「ルー・テーズは許さない」って言ってるんですよ。それが……？

豪　体験入門しに行くとか言ってるらしいですよ（笑）。

山口　体験入門（笑）。どうしますか、宮戸さん？

宮戸　本当に学びたいっていう気持ちがあればね

（真顔でキッパリ）。

（会場笑）

宮戸　それは僕もわかりませんから（真顔でキッパリ）。

山口　下世話な話をしちゃうとプロのレスラーなり格闘家がお忍びで来たら宮戸さん儲かんないじゃないですか。

宮戸　そうですかね？ まあ一般の方にも来ていただいて、その中でいい素材の人がきっかけを掴んでくれればいいと思います。まぁ健康だけの目的の方でもそれはそれでいいと思いますしね。とにかく続けていけるぐらいの範囲で来ていただければ僕は満足なんですよね。これでビジネスにしようなんて、いまのところ思ってませ

※『蛇の穴』　藤波辰爾主宰の『無我』も日本に紹介しようとしているイギリスにあった〝ランカシャー・レスリング〟の道場。ビリー・ライレーという人物が主宰していた。ここはビル・ロビンソン、ルー・テーズ、カール・ゴッチらシュート・レスラーを数多く輩出した名門道場である。



3月19日東京・飯田橋のホテル・エドモントで突如、設立記者会見を開いた宮戸率いるUスネーク。何よりもビル・ロビンソンが日本に住むというのが、ヤル気を感じさせた。

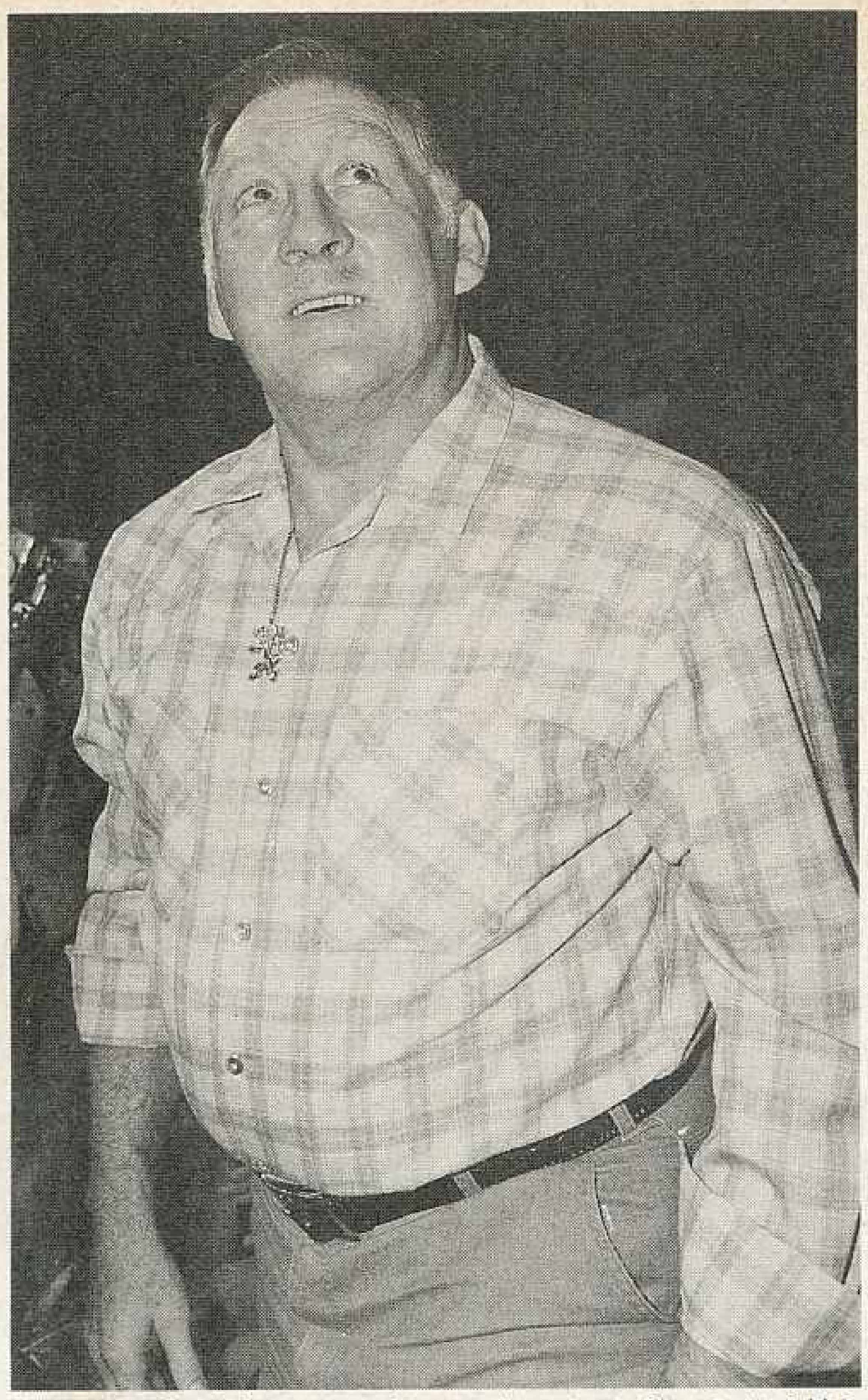
宮戸優光

Yuko Miyato

んから。

豪　宮戸さんもスパーリングしたりするわけですか？

宮戸　そうですね。僕自身もロビンソンさんに一から教わりたいんですよ。僕が辞めたときも本意ではなく辞める形になりましたんでね、Uインターそのものには未練はありませんでしたけど、辞めたあとも「ロビンソン先生にもう一回教わりたいな」っていう思いだけは常にあったんですよね。そういういろんなことが今回一つの形にできたかなっていう部分は満足してます。



とにかく日プロ時代からコーチとして日本にストロング・スタイルを植え付けたゴッチの指導について認めつつも疑問符を投げかける宮戸。

豪　現役復帰は考えてるんですか？

宮戸　いやいや、そういう中途半端な形では考えてないですね。そういうことは現役の人に失礼ですから。

山口　宮戸さん、Uインター辞められて、この業界から離れてる間に他団体から声が掛かったりとかは？

宮戸　ホント見事に全くなかったです！

山口　インディーから声掛かったりとかしなかったんですか？

宮戸　全くなかったです！

山口　なんででしょうね？

宮戸　なんでなんですかねぇ？

（会場笑）

山口　みちのくプロレスのグレート・サスケあたりが声掛けるかと思ったんですけど。「宮戸さんすいませ〜ん、マスク被って出てくださ〜い」とか言って（笑）。宮戸さんていうのは怖がられてるんですね。

宮戸　そうなんですかね？

山口　宮戸さんほど、「プロレス」というものを真剣に考えてる人がいないんだと思いますよ。いまプロレスの源流をもう一度見つめ直すなんて言ってる人は実際に宮戸さんの周りにいないじゃないですか。

宮戸　いま現役でやってらっしゃる方はどういう受け止め方してるかわからないんですけど、テーズさんよりさらに先輩の、いろんな、もう亡くなられた先輩がたも今回の道場の設立を喜んでくれてるんじゃないかと思います。

山口　そういえばビル・ロビンソンっていうレスラーは「フッカー」と呼ばれてましたよね。「フッカー」というのは凄く簡単に言っちゃうとシュートが強いというような定義でいいんでしょうかね？

宮戸　そうですね。「フッカー」と「シューター」って（ルー・）テーズさんは使い分けますけどね。ロビンソンさんからは「シュート」っていう言葉しか出ませんけど。「フッカー」っていうのは、おそらくテーズさんの感じで言いますと「関節技のうまい人」で、「シューター」っていうのは「ハート面、技術面、それからラフ、喧嘩も強い人」というような意味でしょうね。「フッカー」というのは技術的な部分を指しての言葉ですね。

山口　なるほど、勉強になりますねぇ。じゃあ、Uスネークは日本に「フッカー」の技術を伝承していくジムだと考えればいいわけですか？

宮戸　レスラーもレスリングの練習をしないで柔術の練習してる状況ですからね、柔術の練習を否定はしませんけど、キチッとレスリングの核があってですね、そこに吸収するという形に変えなきゃいけないと思うんです。レスリングというものを大事にやってもらいたいなってことへのきっかけになればと思ってます。

豪　ところでビル・ロビンソンさんは宮戸さんの家に居候するんですか？

宮戸　いやいや（笑）、年齢がいかれてるんで、プライベートな時間は大事にして欲しいと思いますんで、高円寺近辺に一人住まいしてもらいます。



92年10月26日、雑誌で「高田さんと闘いたい」と発言した蝶野発言を聞き逃さず、すかさずテーズを引き連れて新日事務所に突撃、挑戦をぶち上げた。大仁田の事務所突撃とは、スケールが違う。





立会人、後見人、日本プロレス界のハクとして、最近のテーズは元気に日本とアメリカを往復していた。

「ワーク」って言葉を表に出さないと「プロレス」がズタボロになる！

豪　単身赴任だ（笑）。

山口　夢があるなぁ。高円寺にビル・ロビンソンが住んでんのか（笑）。

（会場笑）

豪　居酒屋ごっちに行っちゃったりするわけですよね、ロビンソンが（笑）。

山口　それでときどきルー・テーズさんも来るんですよね（笑）。恐ろしいなぁ（笑）。

豪　あの辺をぶらついてるパンクスとかと擦れ違うわけですよね（笑）。

山口　素朴な疑問なんですけど、ビル・ロビンソンさんっていうのはもちろん喧嘩方面も強いわけですか？

宮戸　どうなんですかねぇ？　そのへんまでは僕も想像でしか言えなくなっちゃいますよね。ただ、掴まれた瞬間の怖さがありますよね。握手した瞬間「指をこのまま持ってかれちゃうんじゃないか？」とか、そういう怖さっていうんですかね？　ありましたよ。

山口　実際カール・ゴッチさんにコーチを受けた宮戸さんから見てもビル・ロビンソンの凄さっていうのはハッキリとわかるんですか？

宮戸　ゴッチさんにコーチ受けた方はロビンソンさんに一回受けて貰いたいですね。テクニックが全然違いますね。教え方の差かもしれませんけど、少なくとも僕と安生（洋二）の意見は同じだったんですね。ただ、ロビンソンさんともゴッチさんとも関係ないんですけど、ロビンソンさんに「スネークピット時代のゴッチさんはどうだったんだ？」っていう話しましてね、「スネークピットで当時誰がナンバーワンだったんだ？」て聞いたら「ビリー・ジョイスって人がいたんだ」って。それがロビンソンさんの代の師範代みたいな人だったらしくて、その人のことはいまだに言いますね。カール・ゴッチ、ロビンソンを含む6人を相手に5分だか10分だかを1人ずつ、それを3周して息も切らさなかったと。とてつもないシューターがゴロゴロいた時代っていうのがあったんですよね。

山口　本来だったらシューターはゴロゴロいて欲しいですよね（笑）。

宮戸　そうなんですよ！　プロレスってものはもともとシュートしかなかったと思うんです。でもその中で……（一瞬ためらって）今日はぶっちゃけて話をしちゃうんですけど……。

山口　ぶっちゃけてね！（観客に向かって）こういうときは拍手するんだよ!!（笑）

（場内大歓声＆大拍手）

宮戸　テレビとかメディアが出てきてから急激に、シュートだけでは食っていけない状況になってきたんでしょうね。いま「シュート」って言葉の対語には「プロレス」って言葉が使われてますけど、そうじゃなくって「プロレス」っていうのはもっと大きいもの、原点みたいなもんなんですね。その中に「シュート」があり、「ワーク」ってものがあるんです。

（場内静まり返る）

宮戸　「シューティング」の対語は「ワーキング」なんですよね。だから、例えばロビンソンさんに「今度、誰と誰が試合するんだよ」って言うと「シュートorワーク？」って聞いてくるわけですよ。きっとそういうやり取りはロビンソンさんたちの時代にもあったと思うんですよね。プロレスの中にそういったものがあるということなんですよ。いま「プロレス」と「ワーキング」っていうのは同じ言葉みたいに使われてますけど、僕はここで「ワーク」って言葉を表に出さないと「プロレス」っていう言葉がズタボロにされちゃいましてね、「八百長」だとか「ショー」だとか「ワーキング」とイコールにされちゃうという危惧があるんです。じゃあ、はたして「ワーキング」とはなんなのかっていう問題が出てくるわけなんですけど（笑）。

山口　いまは「プロレス」＝「ワーク」になっちゃってるんですよね。「プロレス」＝「八百長」っていうような意味ですね。それで、「格闘技」＝「真剣勝負」。でも、もともとその二つを含んだものがプロレスだったわけですよね。

宮戸　大もとで言えばシュートだけだったと思うんですけどね、その中で「ワーキング」って分野ができたと。そしてその「ワーキング」って分野で非常に素晴らしい才能を発揮する人たちが出てくることによって、そしてプロモーターやテレビがそういう人を大事にすることによってシューターが追われて行っちゃったのがいまの状況だと思うんですよね。

山口　「ワーキング」で一番進化したのがいまの大仁田厚みたいなタイプですかね。

宮戸　けどね、テーズさんなんかに言わせると、あれは「ワーカー」にも入らないんですよ。「レスラーじゃない！」って言うんです。要するに、彼らの認める「ワーキング」っていうのはあくまでもレスラーという前提があるわけなんです。だからその「レスラー」じゃないヤツが「ワーキング」しても、そういうものに対しては「サーカス」って言いますね、彼は。

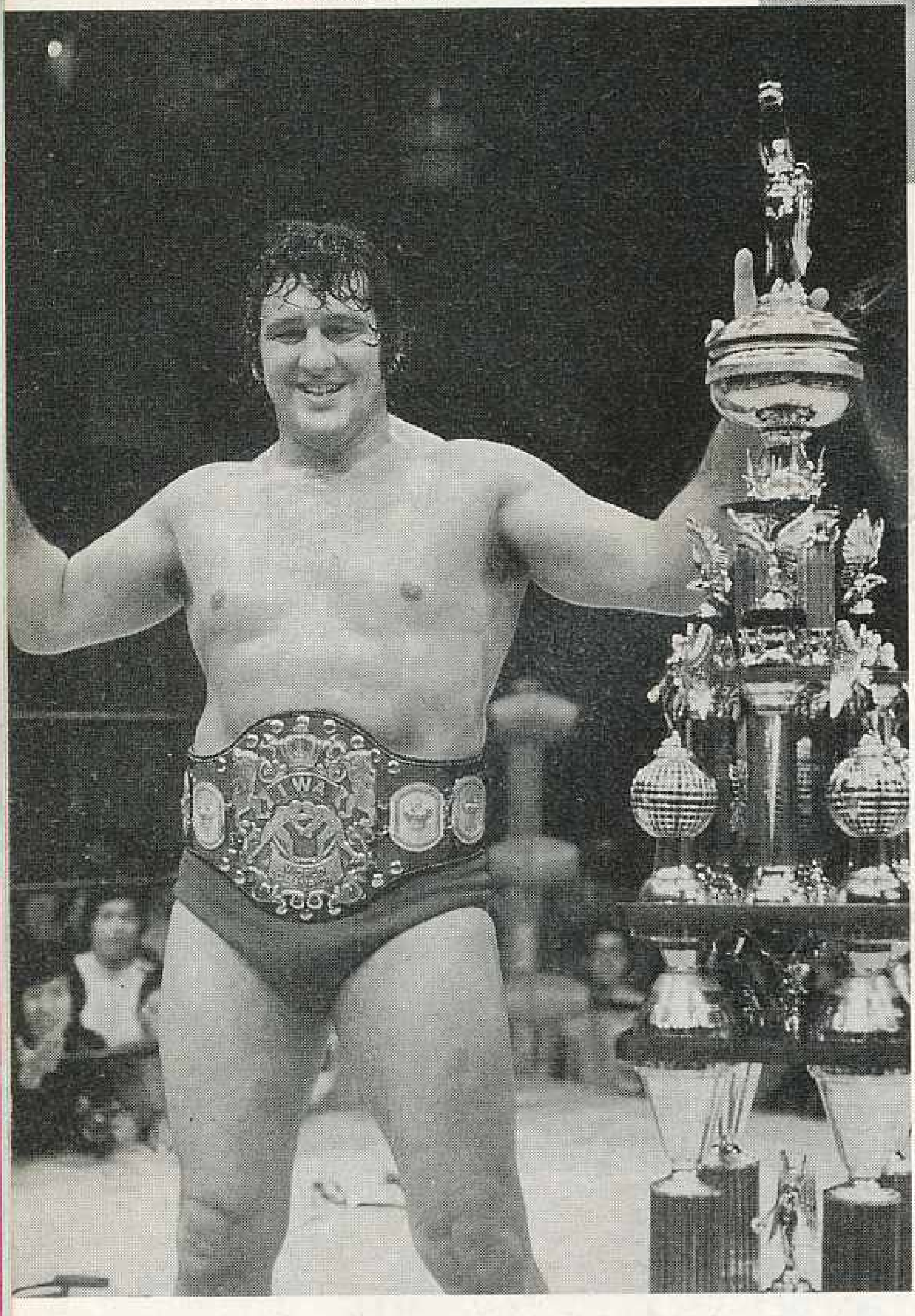
（場内いっせいに笑）

宮戸優光
Yuko Miyato

宮戸　だからいまのプロレスっていうのはテーズさんたちの頭の中では語れる範囲じゃなくなっちゃってるんですね。ですから「ワーキング」ってものが一人歩きして違う分野を作り上げてますから。テーズさんたちの時代の「ワーカー」っていうのはレスリングのできる、要するにあくまでもレスリングの基本を持った人間がやるお仕事のことを「ワーク」というわけですよ。それができない人間がいくら「ワーク」をやっても



昭和50年12月11日、蔵前国技館で行われたA・猪木vsビル・ロビンソンは本誌編集長のこころの名勝負でもある。格好良さの面影は……なきにしもあらず。



これは「ワーク」にさえならないということです。

山口　そうするといまの日本のマット界の現状では「ワーク」にすらならない「ワーク」をしてる人たちがかなり横行してるっていうわけですか？

宮戸　僕はそういうものとは別に、肌で知った彼らの凄さだとか、あるいはそこで僕が学んでみたいものを守りたいってだけのことですからね。

山口　例えば1・4の小川vs橋本戦っていうのがありましたよね。あれを見てどういう感想を抱きました？

宮戸　そうですね、小川選手っていうのは才能的に素晴らしいんだなって、あの試合でわかりましたよね。こないだちょうど、ターザン山本さんの『プロレス激本』ですか？　その第4弾の取材があったんですけど、その中で「今回他に誰が出るんですか？」って聞いたら「大木金太郎さんだ」と。大木金太郎さんが昔テーズさんとやったときに、再三画策してやっとタイトルマッチを実現したらしいんですよ。そこで芳の里さんだか豊登さんだかが「絶対タイトル取って来いよ」とハッパをかけてリングに上がったら、ルー・テーズさんに返り討ちにあったというね。それが血だるまで入院させられたっていう事件になってるんです。その話を聞いたときにね、1・4の話は何度も語る必要すらないなと思ったんです。テーズさんは「リングに上がった瞬間、ヤツの気持ちはわかったから」と言ってましたね。リングに上がってしまえば、なにが起こるかわからないっていうのが正直なとこなんですね。だから僕らがリングに上がるときっていうのは、いつも「闘う」って気持ちで上がってましたし、先ほどの「ワーク」の話で言えばね、「ワーク」とはこうあるべきっていうルールがないわけなんですよ。ロープへ振ったからって帰って来ますけど、べつに帰って来なくたっていいんです、極端な話。

（場内拍手＆笑）

宮戸　ただ、僕なんかも僕も新日本に上がらせてもらいましたけどね、1回帰らなかったことがあったんですよ。そしたらそのまま3ヶ月試合がなかったわけなんです。

（場内大きくタメ息）

山口　要するに干されちゃうわけですね。

宮戸　だから、それが怖くなければ、こうしなければいけないなんていうものはリングの上にはないんです。ですからそういう意味で誰のせいにもできないのがリングの上なんですよね。だから試合後の橋本さんの言葉はね、ちょっとアレだなと思いましたけどね。

山口　極端な話、いまの新日本プロレスに限らずマッチメイカーなりプロモーターなりが「みんな好き勝手にやっていいぜ！」ってなったら好き勝手に闘えるわけですよね。

宮戸　闘えますね。

山口　ただロープに振ったら帰って来ないことを気に入らないプロモーターがいる限りは、当然そういうルールになっちゃうわけですよね。

宮戸　でも僕はUインター時代は、なにをやってもいいと思ってましたよ。

山口　たしかにUインターは、ある意味なにやってもよかったですね（笑）。

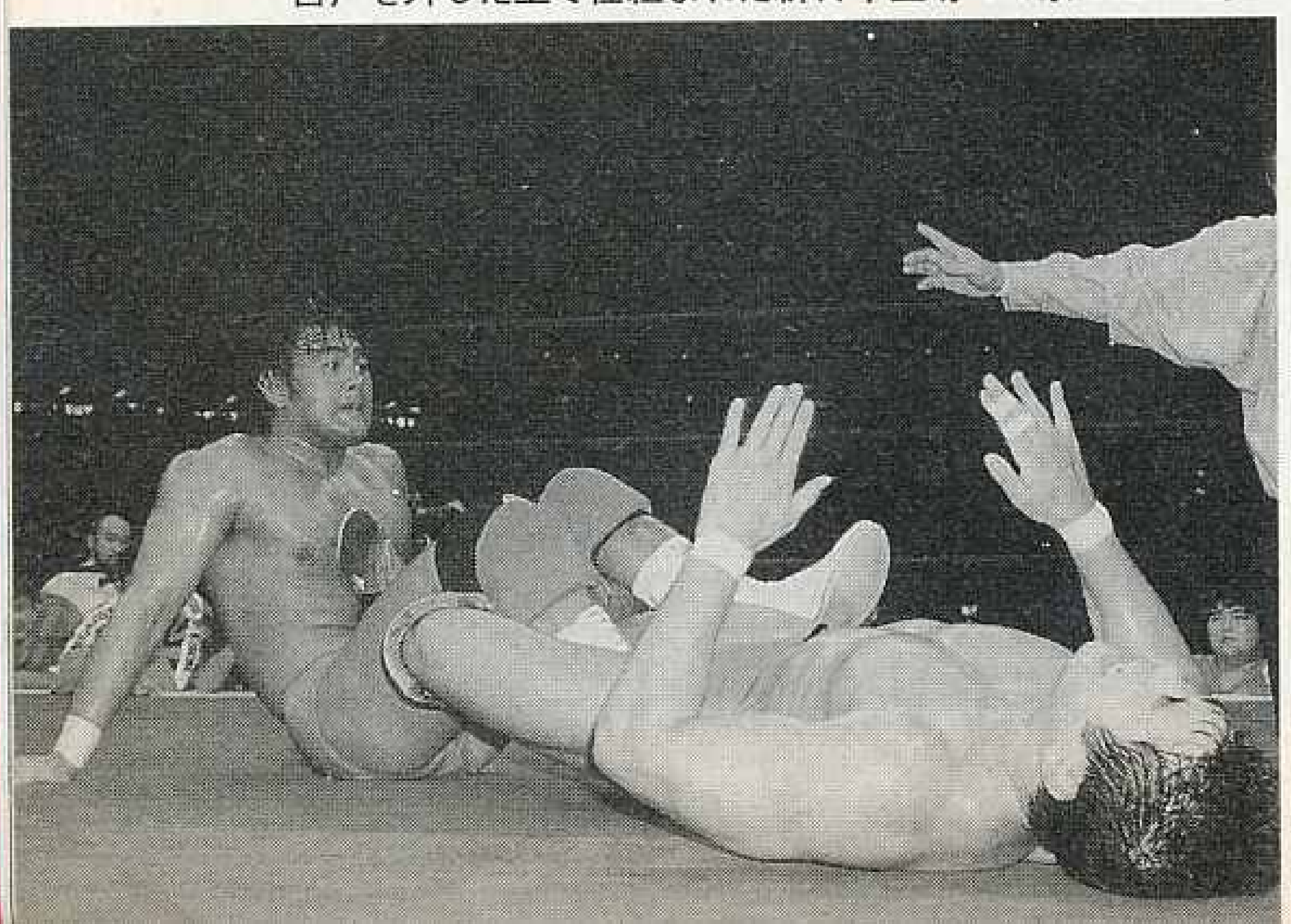
宮戸　そのレスリングという枠を出ない限りはですね。ただし、その結果お客さんにまたもう1回見に来てもらおうっていう気持ちを抱かせられない者は、たとえなんであっても自慢にはならないよって言ってたことはありましたね。それが正しいかどうかは知りませんが。

山口　僕の宮戸さんに対する印象は本当にプロレスというビジネス、あるいはプロレスという「プロ」の部分をいかに守っていくかというのを考えてる人だという印象なんですよ。プロレスというビジネスというと、ビジネスばっかり浮かび上がっちゃうけれども、プロとしてどうやってアマチュアと線引きしていくのか、どうやって興行を成り立たせていくのか、そういうのを真剣に考えてるのが宮戸さんだと思うんですよ。最近はそのへんのことも真面目に考えてる人が少なくなってきましたね（笑）。

宮戸　なにも考えられなくなっちゃってるんじゃないですかね。みんなゴチャゴチャしちゃって。どういうことをしたらいいのかわからないっていうのが、みなさんプロモーターたちの置かれてる状況じゃないかなと思うんですけどね。

山口　とりあえず200人、300人入ればいいやっていう世界で

95年10月9日、闘強導夢で対戦した武藤敬司vs高田延彦。宮戸を外した上で仕組まれた新日本主導のお祭りだった。



ロープに振られて帰らなかったら3ヶ月試合がなかったわけなんです

宮戸優光

Yuko Miyato



みやと・ゆうこう■昭和38年6月4日、神奈川県中郡出身。昭和60年9月6日、UWF後楽園大会vs星名治戦でデビュー。Uインターの頭脳として、辣腕を振るっていたが、失脚。久しぶりに公の場に姿を見せたと思ったら、UWFスネークピット・ジャパンを設立。177センチ、93キロ、O型。

すよね。

宮戸　いまバーリ・トゥードっていうのが流行りだから、それに遅れちゃいけないみたいな感じで。

山口　ところで宮戸さん、Uインター時代って『紙のプロレス』のことをどう思ってたか聞かせてもらえませんか？

（場内拍手＆笑）

宮戸（小さい版型の『紙プロ』本誌18号を手に取って）この本は、見てますね。

山口　宮戸さんが『紙プロ』に対してメチャメチャ怒ってるって話を聞いたことがあるんですけど。

豪　特にいま宮戸さんが持ってる「高田、やめるな」っていう表紙の号ですね（笑）。それで「高田さんと宮戸さんが怒ってる」って、山崎（一夫）選手が言ってましたね。

（場内笑）

宮戸　まぁ、あの人（山ちゃん）と会話することなんてないから、知ってるわけないんですけどね（キッパリ）。

山口　冷たいですねえ（笑）。じゃあ『紙プロ』に対しては特になんてことはなかったんですか？

宮戸　なかったですね。逆に辞めてから本屋さんとかでよく見ましたけど。

山口　本屋さんで（笑）。最近の『紙プロRADICAL』に関してはどうですか？

宮戸　面白いですね。エンセンさんとレスラーの対談とか。興味深く読んでますよ。

山口　宮戸さんは他の格闘技の選手がプロレス雑誌に載ってるっていうことにはどういう感想をお持ちですか？

宮戸　例えばエンセン井上選手なんていうのは、僕の目で見ると彼はレスラーだよなっていう思いがありますね。ただ「プロレス」って枠で括られるとね、彼らの方が、さっき言った「ワーキング」の部分の印象があまりにも強くて嫌がるかも知れないですけど。

山口　宮戸さんは「シューティングもプロレスの一部だ」という言い方をしてましたよね。


宮戸　ルーツが一緒だと思いますから。シューティングで使われてる技っていうのは佐山（聡）さんがやられてたってこともありましてね、僕らが使ってる技術と共通してるわけですよね。それぞれの道で色がついてきたと思いますけど、大もとは一緒ですからね。そういう意味ではWWFの人とシューティングの人を比べた場合、どっちに血の繋がりを感じるかって言ったらシューティングですよね。

山口　そこで宮戸さんが「俺の血の繋がりが濃いのは、実はシューティングよりWWFだぜ！」って言ったら、それは面白すぎますよ（笑）。

★どうだろう、宮戸の覚悟は伝わっただろうか？本気で少しずつプロレスを誇りの持てる姿へ変えていこうとする、宮戸優光の草の根運動は果たしてどこまで波紋を呼ぶのか？プロレスファンよ、プロレスの原点回帰をライフワークとする宮戸の闘いに刮目せよ！

【99年3月24日、東京・池袋コミュニティカレッジ『青空プロレス道場』にて収録】

格闘 MAKE JUNGLE
ジャングルを守るより
ジャングルを作る!!



池田大輔

恐怖の大魔王

バトラーツを憂う
脱バチバチ!? インタビュー

聞き手／坂井ノブ
interview by Nobu Sakai
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

昨年のバトラーツは、まさに快進撃の1年だった。

石川雄規は猪木化して大ブレイク!! アレクサンダー大塚は、バーリ・トゥードの強豪マルコ・ファスを破って一躍スターダムへとのし上がった!! この2人を中心に『紙プロ』は創刊以来、バトラーツという小さな団体を大きく取り上げてきた。

自分の夢、野望、そして狂気をバトラーツに目を向けようとしない人々に対して発し続けてきた石川雄規に比べると、池田大輔は対称的に言葉を非常にため込んでいるという印象を受ける。しかし、取材をしてみると、のらりくらりと質問をかわしながらも言葉の端々にはしっかりと「怒り」が詰まっていた。

そして、その「怒り」の矛先は、どこに向けられているのか、じっくり読んでもらいたい!!

——今日はバトラーツ旗揚げ3周年記念ということで話をうかがいたいんですけど。池田さんの目から見たバトラーツの現状ってどうなんですか? 楽しいですか?

池田　そうですねえ……。『紙プロ』は最近つまんないですね。

——あれっ、『紙プロ』の話ですか(笑)?

池田　あの～、ラーメンの特集やってた頃は良かったんですけどね。

——へ? それは雑誌の『Rintama』じゃないですか! まあ、うちの会社で作ってましたけど。

池田　そうか(笑)。大きくなってからは、興味のない分野の話が多いから読んでないなあ。読者プレゼントのページぐらいですね。

——以前は、『紙プロ』もバトラーツも楽しめてたんですよね?

池田　そうですね。『紙プロ』は知らない格闘家の人とか、興味のない人が多いですから。バトラーツでは言い方は悪いかもしれないけど、チャンスをもらってる人もいれば、もらえない人もいるわけじゃないですか。

——アレク(サンダー大塚)選手は昨年、すごくいいチャンスを掴んでものにしていきましたよね。『PRIDE.4』でマルコ・ファスに勝ったのを見たりすると、ジェラシー感じましたか?

池田　別にないですよ。ヒクソン・グレイシーを倒したらジェラシー感じるけど、マルコを倒してもジェラシーはないなあ。「アイツは強い!」って万人が認める選手に勝ったらジェラシー感じますよ、確かに。でも、マニアの間で「あの人は強いらしいよ」とか言われてる選手に勝ってもさ……。例えば、お爺ちゃん、お婆ちゃんがいっぱい来てる地方の会場でオレがマルコ・ファスと試合したとするじゃないですか? オレが勝っても、全然盛り上がらないと思いますよ。

——それは一理あるんでしょうけど、でもビッグ・ニュースになりますよ!

池田　いまの格闘技ブームって東京と大阪で盛り上がってるだけでしょ? プロレスラーの目から見たら「おいしくないな」って思いますね。

——「おいしい」って、どういうことを指しているんですか? 名前が売れるってことですか?

池田　まあ、そうですね。収入面を含めて、総合的にですね。ただ、シングルマッチではオレはアレクに負け越してるんで、それだけは悔しいですよ。

——この号の発売日に行われる後楽園大会(99年4月26日)で対戦しますね。

池田　「何でいまオレとアレクのシングル戦なの?」っていう気持ちはありますよ。そこで、オレはもがくわけですよ。そのもがいた部分を試合でアレクにぶつけますから(笑)。

——そういうもがきとかイライラした部分がバトラーツってモロに出ますよね。

池田　出ますねえ。それが燃えるんですよ!! 一生懸命やってれば、必ず道は開けてきますから。

——会社に対して不満があるというわけではないんですか?

池田　バトラーツは石川さんが社長だけど、みんなが石川さんが思ってるようにはならない部分もあるんでね。

——石川さんは「うちの団体は分裂しない。なぜならみんな仲が悪いからだ」って言ってましたよ。

池田　うわぁ、そんなこと言ってるんだ?(笑)。

——どんなことで衝突するんですか?

池田　オレに関していえば、新弟子のことですね。

——社長のやり方だと、そういうレスラーが育たないということですか?

池田　そういうわけじゃないんだけど、「アイツはUっぽいバチバチ志向のヤツにするんだ。大輔はどこに行っても食っていけるだろうけど」とかよく言ってて(笑)。でも、オレの考え方からすると「Uっぽいバチバチしたヤツ」でメシ食えるんですか? って思っちゃう。

——バトラーツの選手はみんな他団体に積極的に出ていってますから、それぞれがバチバチ以外の部分も必要になってきますよね。

池田　バチバチしかできなかったら、バトラーツでしか試合できないじゃないですか。プロレスラーっていうのは、ひとりの職人さんなんですよ。手に職を持ってどこでも食っていけるようにした方がいいでしょ? そのまま一生貧乏でいいのかって問題ですよ。オレだって、アメ車乗って、葉巻ふかして、でかい家に住みたいですから。だってオレ、もう31歳ですよ(笑)。

——"大ちゃん"と呼ばれてはいるが31歳! 夢もデカいですね!

池田　チョンガーな身の上だけど、車も買っちゃいましたからね。ミニクーパーだけど。







(写真左) 95年9月5日、FMW札幌大会で組長と組んで世界ブラスナックルタッグ王座をゲット! この年、池田は去年、アレクが取り逃した『東スポ』の新人賞を獲得した。(写真右) バトラーツ内では重い打撃で、社長やアレクの頭をボコボコに蹴りまくる。愛と憎しみがあればこそ、ここまで出来るのである。(右2枚 撮影:遠藤政文)

——でも、最近のインディー団体の選手は普段、仕事を持ちながらプロレスやってる人も多いんですよ。「プロレスで食う」っていう部分が少し揺らいで来てると思うんですけど、バトラーツは道場と合宿所があるから寝食は保証されてますよね。

池田　そうはいったって、上を目指していかないとダメじゃないですか。

——もちろん当然、そうですよね。まあ、バトラーツの場合は寝食は保証されてるとはいえ、チャンスをものにしたアレク選手にしてもいまだにリング設営部長やってるんですよね(笑)。

格闘 MAKE JUNGLE
ジャングルを守るより
ジャングルを作る!!

池田　オレもファンクラブ会報の編集長やってますよ（笑）。

——ジムではインストラクターもやってましたよね。選手によっていろいろコースがあって、池田さんは何を教えてるんでしたっけ？

池田　ケンカ!!

——アハハハハ！

池田　ホントですよ。ジム生に拳立て（拳を握ってやる腕立て伏せ）やらせてますから。

——バトラーツのジム生はアマチュア大会で活躍してますよね。アマチュアといえば最近、シューティングとか慧舟會とかアマチュアの格闘技が充実してきてますけど、プロレスラーを意識した発言をしてますよね。

池田　なんか、『紙プロ』チックな質問スね（笑）。『紙プロ』はそこが「つまんねえなあ」って思うんですよ。

——そうですか？　でも、現に菊田（早苗）選手とか、エンセン井上選手とかプロレスについていろいろ発言する格闘技の選手は増えてるんですよ。

池田　『紙プロ』はオレがプロレスと格闘技のスレスレのところでやってるから、インタビューしに来るんでしょ？

——池田さんは「プロレスラー」と「格闘家」って区別してるんですか？

池田　プロレスラーって格闘家なんじゃないの？

——完全に分けて考えてる人もいますよね。

池田　完全に分けてる人は、自信がないんだと思いますよ。ケンカしても勝つ自信がないヤツ!!　格闘技でいちばん大切な部分はハートですからね。

——そういう志向を持ってるから藤原組に入ったわけですか？

池田　そうですね。もともとオレはUWFみたいなプロレスが好きだったんです。だけど、一回冷めちゃった部分があって……。

——いつ頃ですか？

池田　まだ、この世界に入る前ですよ。その頃、新日本プロレス学校にいたんですけど。ちょっとプロレスに対して冷めちゃった部分があって。

——どんなところに冷めちゃったんですか？

池田　それは言えない！　それまではオレ、「プロレス命!!」で、ホントに命を懸けてたんですよ。

——誰かに何かされた、とか？

池田　いやいや、オレがいけないんですよ。

——それでU系への興味が薄れて、FMWや全日本に興味が出てきたのはどうしてなんですか？

池田　忘れもしない、FMWの札幌中島体育センター大会（95年9月7日）で、藤原組長と世界ブラスナックル・タッグ王座を取ったときですよ。「もう藤原組もダメかな」っていう時期に控室で組長にポツリと言われたんですよ。「レスラーはジプシーなんだから、好きなことやって生きていけ」って。オレはその言葉をいつも胸に秘めて闘ってるんですよ。

——それって、逆に言って「お前はひとりでやっていけ」って言われたようなものですよね。不安になったりしませんでした？

池田　いや、逆に嬉しかった。オレはあんまりそういうことを藤原さんに言われたことがなかったから。どっちかっていうと、いつも殴られ役ですよ。鈍くさいんで（笑）。

——その頃はFMWや、みちのくプロレスに出場するのも抵抗はなかったんですか。

池田　オレの通る道だから、そんなものあるわけない（笑）。

——逆にここだけは通れないなと思う道はありました？

池田　（考え込む）う〜ん……。

——昔、1回だけリングスに出たこともありましたよね。

池田　いまじゃ〝世界のTK〟高阪（剛）選手に負けました（笑）。

——リングスには抵抗なく行けたんですか？

池田　あのときは引かれたレールの上を走るのに精一杯だったから。バトラーツになってからは、自分の道でやりたいことをやってますけど。そのレールの上で、「オレは引かれたレールの上を走ってるんじゃねえんだ！」ってあがいてるっていう感じですよ。

——バトラーツになってからは、池田さんはFMW、みちのく、全日本っていういわゆる純プロレス団体に上がることが多いですよね。意識してU系、格闘技系を遠ざけているんですか？

池田　おっ、またU系話だ（笑）。

——でも実際に上がってないですよね？

池田　リングスに上がらないのは、前田さんに何度も自己紹介するのがイヤだからです（笑）。

——アハハハ！　ウワサによると前田さんは人の名前を覚えないらしいですからね。

池田　お会いするたびに「名前は？　身長ナンボや？　体重は？」とかね（笑）。まあ、それは冗談ですけど（笑）。プロレスに対する考え方が、オレとは違うなと思いますよ。

——どんなところが違うんですか？

池田　プロレスも格闘技も基本はケンカじゃないですか？　「ロープエスケープ3回やったら負け」とか、そういう競技っぽいのが苦手なんですよ。プロレスって、やっぱり曖昧なところがあったり、「あっ!?」っと驚くようなことが起こるじゃないですか。見ると燃えてくるものがあったり。

——じゃあ、さらに池田選手の嫌いな系統の話を続けますけど（笑）、U系団体に出るか、バーリ・トゥードに出るかって言われたら、どうしますか？

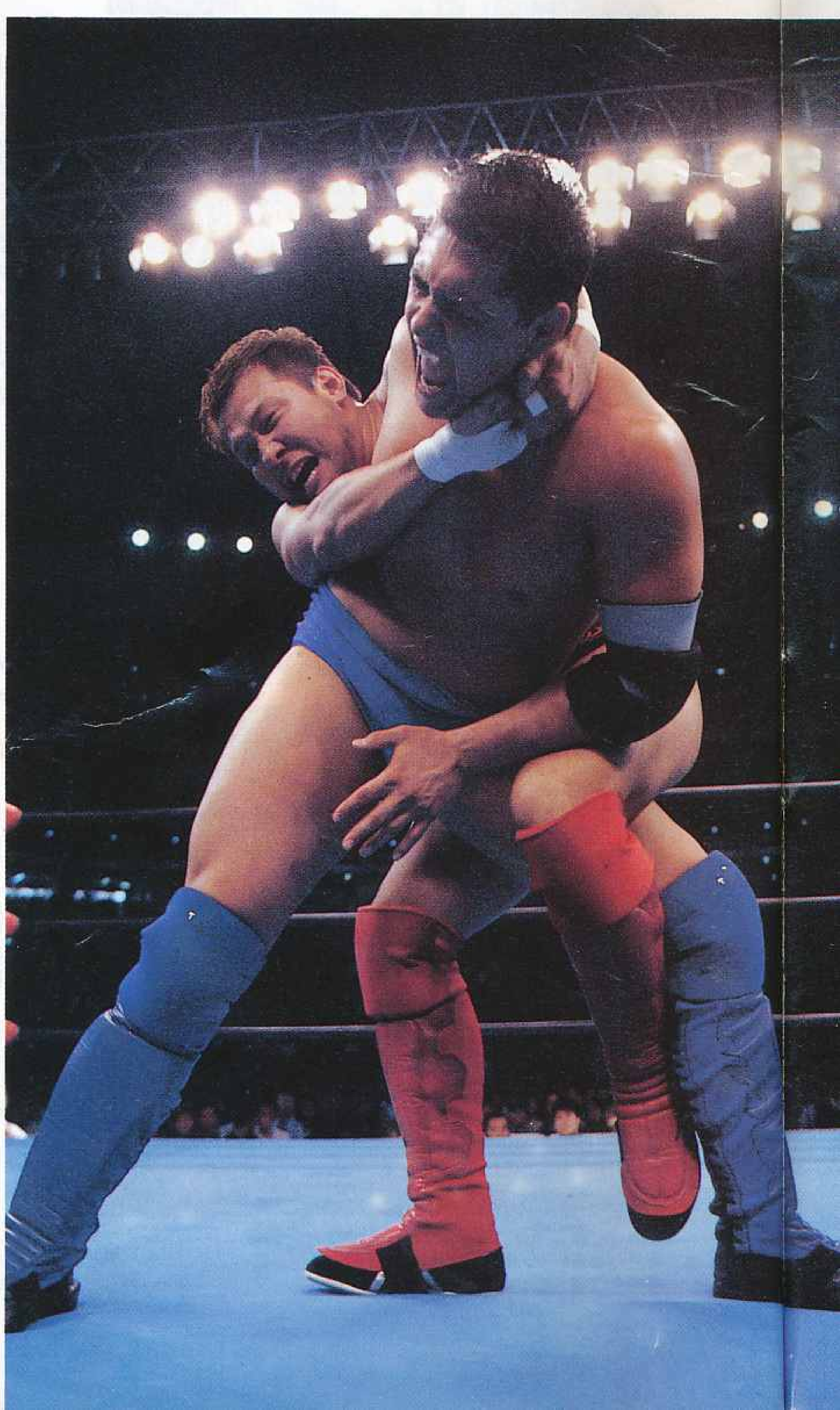
池田　どっちかっていったらケンカっぽい方がいいから、バーリ・トゥードですね。

——アレク選手がマルコ・ファスに勝った後ぐらいですか、池田さんと立ち話してたときに「オレ、プロレス要員って思われてるんですかね？」って呟いてたのが凄くボクは印象に残ってるんですよね。

池田　自分としては「それだけじゃねんだよ」っていう気持ちはありますよ。そういうフラ

プロレスラーは格闘家でありエンターテイナーなんですよ!!

Daisuke Ikeda



98年5月1日全日本プロレスの東京ドーム大会では「馬場さん、見てないだろうから」と、バチバチな試合を展開。ドームの客に火を付けた。（撮影：平工幸雄）

全日本に上がったことで「明るく、楽しい」部分を学びました

Daisuke Ikeda

ストレーションは試合でぶつけてるつもりですから。

——バトラーツは、いわゆるプロレス的な遺恨とか抗争がなくても、試合はメチャクチャ激しいですよね。逆にいま池田さんが出てるFMWは軍団抗争とか遺恨の世界ですけど。3月29日のFMWの後楽園大会の試合後に池田さんは「エンターテイメント・プロレスとケンカ格闘プロレスじゃ全然違う。オレたちが勝って当たり前」っていうコメントを出してましたよね。

池田　まあ、プロレスラーはエンターティナーじゃないといけないとは思うんですよ。エンターテイナーじゃないと、何も生まれないし。

——さっき「プロレスラー＝格闘家」だっていう意見が出ましたけど。

池田　格闘家であり、エンターテイナーじゃないといけないんですよ。だからたとえばオレが、こんなでっかいナリしてミニ・クーパーに乗ってるのもエンターテイメントなんですよ。

——は？　全然意味がわからないんですけど（笑）。

池田　オレがそんな車に乗ってる絵を見ただけで笑えるじゃないですか（笑）。でも〝エンターテイメント・プロレス〟って言っちゃったら楽しいだけでいいのかって話になりますよね。

——バトラーツ初期のキャッチ・フレーズは「ケンカ格闘プロレス」ですから、感情むき出しのバチバチした試合になりそうですね。

池田　う～ん。でも、バチバチやれば、いいのかっていう問題もあるんですよね。そうやってバチバチマッチと普通の試合って分けて考えてないんですよ、オレは。結局、プロレスはひとつだから。同じもんですよ。だから、オレは「自分たちのバチバチプロレスをFMWのリングで披露したい」っていうんじゃないんですよ。ガキの頃『空手バカ一代』を見て熱く燃えたように、お客さんの闘争心に火がつくような試合がしたいですね。

——じゃあ例えばの話、『空手バカ一代』とはかけ離れた空気の全日本のプロレスって、率直な感想としてはいかがでした？

池田　オレの友達ってプロレスファンの人は少ないんですけど、そういう人たちに「オレ、ジャイアント馬場とタッグを組むんですよ」って言ったら、プロレスのこと何も知らないから「ええ？　馬場ってまだやってるの？」とか「大ちゃんのプロレスとは全然違うんじゃないの？」とかいろんなひどいことを言うんですよ。「オレ、プロレスラーなんだけど（怨）」って言いたくなるような（笑）。

——ひどい話ですねえ。

池田　でも、馬場さんが亡くなった後、そいつらに会うと「惜しい人を亡くしたねえ」とか言ってる。世間が思ってるプロレスってそんなもんですよ。オレは馬場さんとタッグを組めて光栄でした。

——石川社長って、そういう偏見とかに対して「プロレスを見ないヤツの首根っこをひっつかんで、こっちを向かせる」という情念がありますよね。

池田　オレはそういうんじゃなくて、一生懸命頑張ってれば誰かが見てくれてると思うから、ホントに一生懸命頑張るんですよ。

——でも、基本的には石川社長と同じ動機を持ってますよね。自分の好きなものを否定する世間とか大人に対して、「いまに見てろよ」って心意気で。ちょっと表現方法は違うけど、その部分は繋がってますね。

池田　社長は、「猪木命‼」っていう人だから……。

——ああいう人を見てると、池田さんはどう思うんですか？

池田　虫酸が走る。「アンタはイノキじゃなくて、ユーキだよ」って突っ込みたくなっちゃう（笑）。控室で、肩にタオルをかけてアゴを出しながら「だんだん似て来るんだよね」とか言ってるのを見ると悲しくなってきますから（笑）。

——そうですか⁉　面白いじゃないですか。「インチキ」とか「ニセモノ」とか言ってるファンもいますけど、それを黙らせてやろうという「情念」が。

池田　そもそもアントニオ猪木って、誰もやろうとしないことを実現させてきた人でしょ？　でも、猪木のモノマネなんか、誰もがやってることじゃないですか。

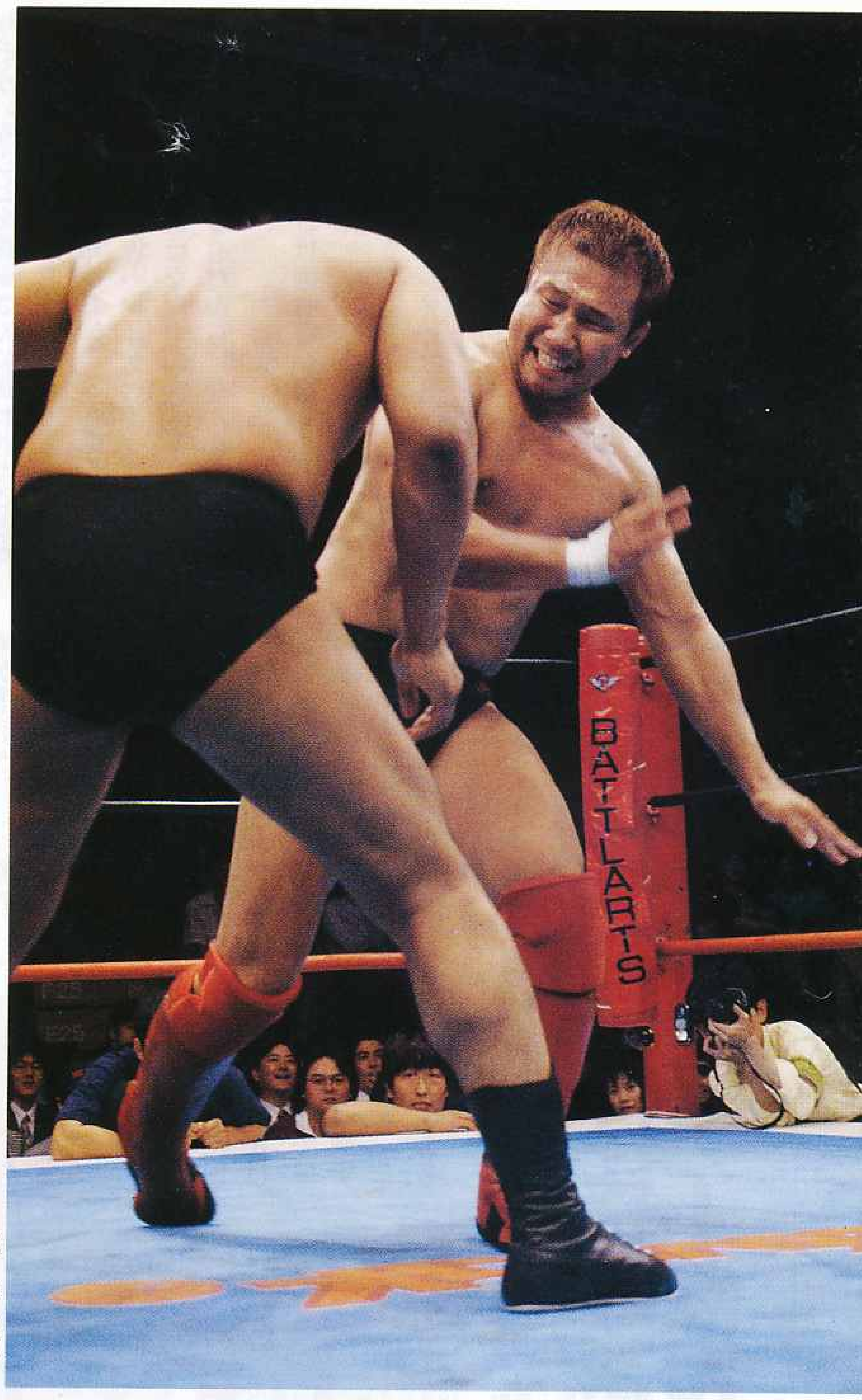
——でも、「TOKYO FMホールに6万人の行列を作る！」とか、言ってますよね。

池田　それは〝猪木の石川さん〟じゃない、〝石川さん〟でしょ。だから、オレは石川さんは好きなんですよ。

——なんか話を聞いてて思ったんですけど、2人は似てるからこそお互いが憎いんですかね？　どうなんでしょう？

池田　たまに、初めて行くスナックとかで「お2人は兄弟？」とか言われますからね（笑）。似てるかもしれない。

——たとえば池田さんは、狂ったように「あ



石川社長の"猪木イズム"ほどではないが、池田の中にも確実に王道プロレスの遺伝子が組み込まれた。分かりにくいが、池田の主張は確実に昨年11月23日両国国技館大会以降のバトラーツを変えつつある



ミスター雁之助らと対戦しても、バトラーツ勢は一方的に大ブーイングを浴びせられる。池田とモハメド・ヨネはバトラーツでのバチバチとは違う方面で潜在能力を開花させつつある

あいう人間みたいになりたい」って思ったことはないんですか？

池田　う〜ん……坂本龍馬ですね。海援隊のライブを見てると、武田鉄矢が坂本龍馬の話をしてるんですよ。「どういう人なんだろう？」って興味をそそられて、自分でいろいろ調べましたね。中学生の頃は、たまに星空に向かって「竜馬ぁ〜!! あなたのように行きたいっ!!」って叫んでましたから（笑）。長渕剛も好きだからライブにも行くんですけど、信者みたいな人が多いから引いちゃいますね。プロレスファンと似てるかもしれない。

――じゃあ池田さんは、プロレスファンって好きですか？

池田　（間髪入れずに）嫌いです！　中には普通に話せる子もいますけどね。オレはファンレター書いたことないし。近所のスーパーのサイン会に来たジャンボ鶴田を見に行くのが精一杯でした（笑）。

――けっこうオクテなファンですね。鶴田さんといえば、あの人もけっこうプロレスに醒めてた人だと思うんですけど、池田さんと近いものを感じますよね。

池田　そうですね。オレの心の師ですから。プロレスに冷めてた時期のオレは、鶴田さんの試合を見て心がプロレに引き戻されましたからね。

――話をしたことはあるんですか？

池田　オレにとってはすごくヒントになることを言ってくれました。専門的なことだから言えないですけど。

――たとえば鶴田さんは、「プロレスを型とエンターテイメントと格闘技に分類した方がいい」と最近の著書で書いてるんですけど、そういった類の話ですか？

池田　そういう話じゃないけど、載せられない話だよ。いや、これホント。テープ回ってなかったら言えるけど。

――わかりました、止めましょう！

（テープ中断）

――そうだったんですか？

池田　だからこそ一生懸命、頑張ろうと思いました。頑張ってれば誰かがどこかで見てくれますからね。

――頑張ってたから敷居が高いと言われている全日本に出ることも出来たわけですよね。

池田　そうですかね。全日本に出たことによって、そのへんの女子高生でも日テレちゃんを見れば、オレの試合を見てもらえるチャンスが出来ましたからね。

――なんで全日本に上がりたいと思ったんですか？

池田　オレのスタイルが全日本とは異なるスタイルだからですね。プロレスラーの池田大輔としてはおいしいと思いますよ。巡業が長いから普段、プロレスのことをあんまり考えないオレが、珍しく考えましたからね。全日本に上がったことで考えも変わってきましたね。

――どんなところですか？

池田　それまでのオレは「激しい」だけだったんですよ。

――全日本は「明るく、楽しく、激しいプロレス」ですよね。

池田　「明るく、楽しく」っていう部分を学びましたね。激しくっていうのはある程度できるんですよ。「明るく、楽しく」っていうのを試合で出そうと思ったら大変でした。

――例えば、どういう形で試合に出してるんですか？

池田　ババチョップ。

――へ？　あの脳天唐竹割りですか？　たしかにあれは、それまでのバトラーツにはなかったですよね。

池田　電車に乗ってるときに閃いたんですよ。



いけだ・だいすけ■'68年２月13日熊本県牛深市出身。新日本プロレス学校に入学、同期では臼田勝美、金原弘光らがいる。一旦、帰郷し再び上京。'93年藤原組に入門後、'95年からＦＭＷやみちのくプロレスに積極的に参戦。バトラーツになってからは石川雄規と共に団体を引っ張っていく存在になった。97年からは全日本プロレスにも参戦して、闘いの場をどんどん広げている。185センチ、100キロ。

子供が「ババチョ〜ップ！」っていいながら、チョップしてるのを見て。小学生ぐらいだったから、たぶん馬場さんの試合は知らないんだろうけど、それでも「ババチョップ」知ってるんですよ。それが衝撃でしたね。

――それで「激しさ」を追求するケンカ格闘プロレス志向は薄れてきたんですか？

池田　いや、そういうわけじゃないですよ。「激しい」のは、ひとつとして必ずなきゃダメなんですよ。

――では、新日本の「ストロング・スタイル」には興味がないんですか？　新日本は、バトラーツのいちばんの源流にあたるわけですけど。

池田　オレはあんまり源流とか伝説とか興味ないですから。過去は振り返らない。だいたい去年の両国大会『蘇れ！　ゴールデンタイム伝説』っていわれても、熊本地方はプロレス中継がゴールデンタイムじゃなくて深夜だったから。

――５月の大会は『金曜ゴールデンタイム伝説』ですけどね（笑）。

池田　熊本は曜日も違いました（笑）。

――そこで、ボブ・バックランドとの再戦が決まりましたね。

池田　あの試合の前日にボブさんのビデオを初めて見直してたんですよ。

――一夜漬けで研究したんですか？

池田　オレは学生の頃もそうでしたから（笑）。そのへんが敗因ですね。

――一度やってるから、今度は闘いやすいでしょうね。去年の10月のボブさんと池田さんの試合は、往年の必殺技が次々飛び出して、後楽園ホール全体が熱狂しましたね。

池田　そうですね。ボブさんも、試合後ご機嫌でしたね。「キミはグッド・レスラーだ。ボクのサイン入り写真をあげよう」って言われました（笑）。

――アハハ！　ファンじゃないんですから。

池田　それで結局ペンが見つからなくて、サインはまだ入ってないんですよ。

――じゃあ、札幌で入れてもらってください（笑）。

【99年４月３日、新宿区・某喫茶店にて収録】

元気とエロが売り物!! 噂のセクシーコマンドー本誌初登場!!

マグナムTOKYO



聞き手／中村カタブツ君
interview by Katabutsukun Nakamura
撮影／藤見道隆
photographs by Michitaka Fujimi

今年1月の旗揚げ興行で一気にブレークしたウルティモ・ドラゴン率いる闘龍門。中でもマグナムTOKYOは入場時のやたらセクシーなダンスといい（元AV男優とのこと）グラウンドの展開もこなせるプロレスセンスといい、ファンも関係者も絶賛。だが、彼はただのルチャドーラではない。空手の有段者であり、指導員まで務めた経歴の持ち主なのだ。格闘技の世界から、見せることに重きを置いたルチャの世界にきた男のプロレス観について、空手3級で根っ子は格闘技側の中村カタブツ君が疑問をぶつけてみた。押～忍!!

――今年1月31日の闘龍門の日本初興行では入場からいきなりブレークしましたね。Jメンズのダンサーばりに踊りながら出てきて、お客さんがパンツの中にお札をバンバン入れてっていう（笑）。

TOKYO ワハハハハハ！ 寄ってきましたね（笑）。

――ぶっちゃけた話、お金を入れてた客の半分ぐらいサクラでしょ（笑）。

TOKYO 実はサクラです（笑）。だけど、ホント半分ぐらいですよ。

――あの場のあのノリで入れてきた人も結構いると思いましたよ。なんか、オバチャンとか目がキラキラしてたし（笑）。その後の神戸とか横浜ではサクラとかは。

TOKYO その後はサクラは入れてないですからね。みんな、僕のことを知っていてくれて、お金を入れてくれるんですよ（笑）。

――ショッパナの後楽園で一気に火がついた感じですもんね。これほど反響があると思ってました？

TOKYO 実際のところちょっとびっくりしましたね。これだけはスゲェなって。だから、いままで牛丼の並みだけだったのがこれからは特盛りおしんこ、玉子付きが食えるなって（笑）。

――持ちネタか（笑）。そういうところはサスケさんとよく似てますよね。

TOKYO よく言われるんですよ、オレ（笑）。

――この取材の前にサスケさんにTOKYOさんについてのコメントをもらったんですよ。そしたら「まずマグナムくんに言いたいのは経営していたファッションヘルスはどうなったんだ、と」って言うんですよね。それでで「あ！ あれはマグナム北斗でしたねぇ～、ガハハハハハ」って（笑）。

TOKYO ワハハハハ！

――自分でボケて自分でつっこんで（笑）。ホントにルチャの人っていうのはまず自分のワザを見せつけようとしますよね。そのサスケさんは「レスラーは芸人なんだよ」ってかつて言ったんですけど、この発言についてはどう思います？

TOKYO まったく大賛成ですね（笑）。

――サスケさんはそのあと「レスラーにはプライベートなんかねぇんだ」とも言ってるんですが、例えばの話、サスケさんがリング上で突如として「マグナムには女がいるんだ」とか言い出したらどうします？

TOKYO もし、その時にいたら「いますよ」と。しかも、「その子だけじゃねえよ、もっといるぜ、ちゃんと調べてから言え」ぐらいは言いますね（笑）。

――ワハハハ！ プロ根性ありますね（笑）。

TOKYO いまは彼女がいるとか、隠す時代じゃないですよ。アイドルだってバンバン公表してるんだし。

――僕もその意見には絶対賛成です。ところでTOKYOさんは昔からマスカラス・ファンだったんですよね。

TOKYO マスカラスが小学校2年の時で、小学校3年になった時にタイガーマスクさんが出てきたんですよ。あの頃はもうマスクマンはみんな好きだったですね。

――タイガーのあとに出てきて、どちらかと言えば不評だったザ・コブラとかも？

TOKYO もちろんもちろん。あとはカブキさんとかも好きだったですね。だから、ギミックがはっきりして面白い人が好きだったんですよ。当時だと、カネックとか出てきた日にはもう（笑）。ソリタリオとかソラールとかも。だから、メキシコに行って8歳とか9歳とかの自分が憧れてた人と同じ仕事してることがメチャクチャ嬉しかったですよ（笑）。

――夢のような話ですよね。

TOKYO いや、ホントに（笑）。

――ただ、小学生の時はプロレスラーになりたいとは思ってはいなかったんですよね。

TOKYO というか、『キン肉マン』みたいな世界に憧れていたんですよ。

――僕は『黄金バット』に憧れた世代だからまったくわかりません（笑）。

TOKYO オレはね、カレクックって超人が好きだったんですよ。インド出身の超人で頭の上がカレーなんで、オレは給食でカレーが出てくると必ず頭の上に乗っけてたですもん（笑）。

――全然わかんない。ノブはキン肉マン世代だよね。やっぱりカレーを頭に乗っけてたの？

ノブ（同席する『紙プロ』ダメ編集者） 乗っけてましたね。あとオレはベンキマンが好きだったですね。

TOKYO 知ってる、知ってる。身体が便器だったヤツ（笑）。オレもその二つは忘れられない。カレーとウンコ（傍点は本人の強い希望による）は共通点あるし（笑）。

――子供心をくすぐりますよね（笑）。で、その後、空手を始めるわけですよね。

TOKYO 高3の時に空手やってるヤツが二人いて、そいつらが『月刊空手道』って雑誌を見ながら「凄ェよな」とか言ってるんですよ。それで「この野郎！」って思ったんですよ。

――空手がナンボのもんだ、プロレスのが強いんだと。

TOKYO 違います、違います。「なんだ、この野郎！ オレもその『月刊空手道』に出てやる」って思ったんですよ。

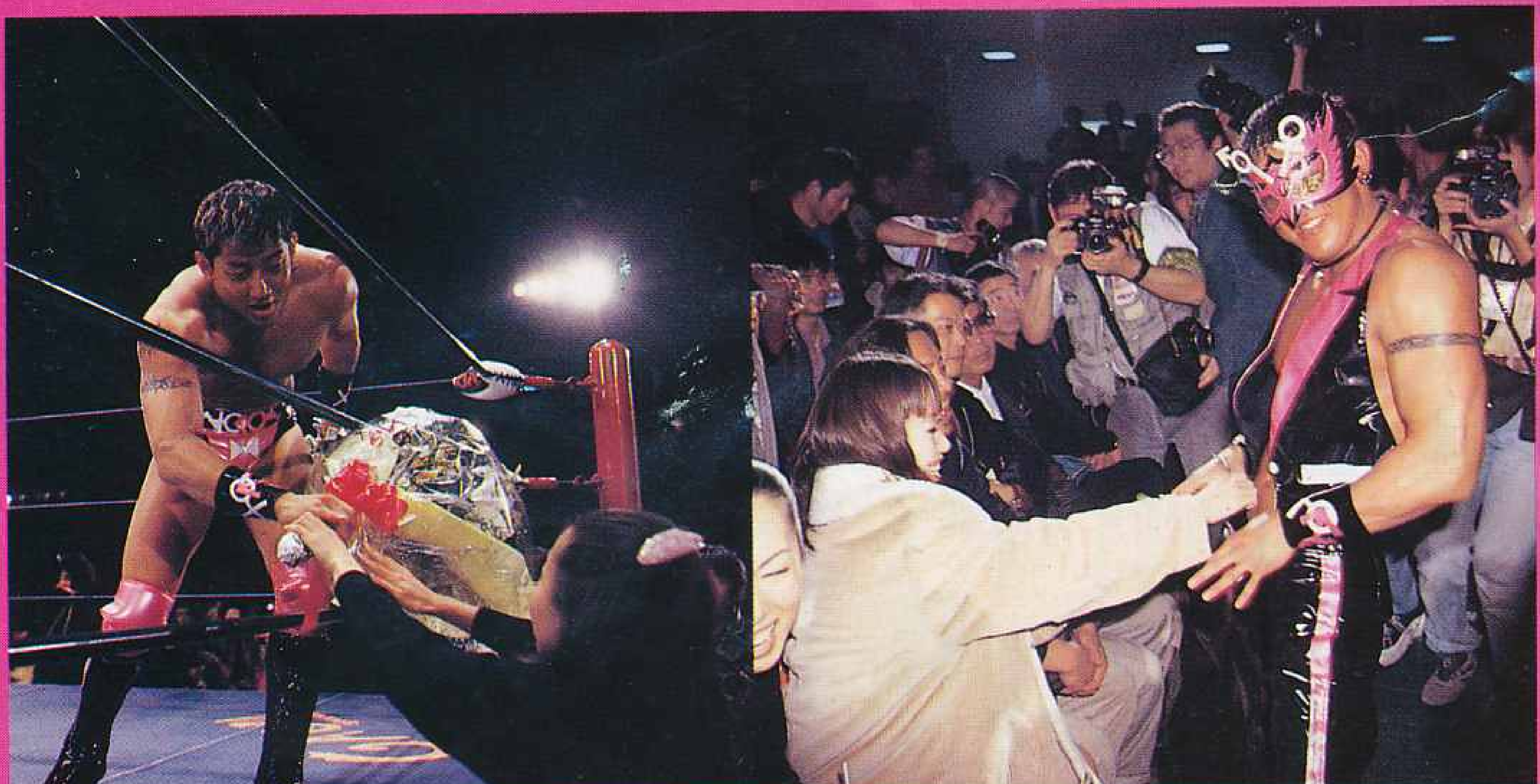
――なんでぇ！（笑）。

TOKYO なんだかわからないけど、そんなにスゲエなら、その雑誌に載ってやろうと思って（笑）。なんか、みんながチヤホヤしてて「空手は強い」とか「あいつは凄いよ」とか言ってるから、「じゃあ、オレも凄くなって『月刊空手道』に出よう」って思ったんですよ（笑）。

――よくわからない動機だなぁ（笑）。

TOKYO バカなんですよ（笑）。で、やるからには中途半端はよくないと思って学校にいかなくなりましたね。

――気持ちいいバカですね（笑）。で、選んだ空手の流派が大道塾だったと。ちょっと読者のために説明すると、顔面パンチに、投げと関節技も認める過激なスタイルで、パンクラスのセーム・シュルトが以前、所属していた団体なんですよね。また、第2回UFCに



1・31後楽園ホールでの旗揚げ第一戦（写真右）。女性客が差し出すお札をパンツに挟み込むマグナム。2・7横浜文体の最終戦（写真左）では女性客から花束のプレゼントを受ける。旗揚げから8日間でマグナムの魅力は確実に女たちに届いた

空手を始めたのは『月刊空手道』にでたかったからですよ

日本人として初めて出場した市原海樹も大道塾。最近では『THE WARS』という大会を開いてパンクラスの美濃輪育久がメインで登場した、総合系とも交われる高い可能性を持った団体ですね。

TOKYO そうです、そうです。

――そこで黒帯を取って指導員にまでなってるんですよね。

TOKYO だから、当時格闘技マニアの人がいて「大道塾って凄い」って言われて、調べたら家の近所だったし、もうここでいいやって思ってすぐに決めました。なんか「普通の空手よりも激しいよ」とか言われたんで、「激しい？ 激しいのかぁ。それはいいねぇ」って思って入っちゃいました（笑）。

――またエロネタを振ろうとしてますね（笑）。

TOKYO ワハハハハ！ 一応、親には塾に入るから金をくれって言って（笑）。

――いちおう〝塾〟という字は付いてますからね（笑）。

TOKYO 教材買うから金くれって言って道着買ったり（笑）。

――ウソじゃないですよね（笑）。だけど、その頃ってシューティング（修斗）もあったわけじゃないですか。タイガーマスクファンだったら、シューティングをやりたいっていうのはなかったんですか。

TOKYO 僕は中学の2年ぐらいから高2ぐらいまで空白のプロレス時間があるんですよ。そこは何かというと当時バンドが流行ってて『イカ天』（『イカすバンド天国』）。カブキロックス、リモートとかを世に出してしまった罪深きオーディション番組。バンド界の闘龍門？）とかってあってバンドやってるヤツがモテたんでバンドに走ってました（笑）。

――何を担当してたんですか。

TOKYO ドラムをやってたんですよ。

――あれぇ？ 場所的には一番目立たないじゃないですか。

TOKYO だから、それでボーカルと喧嘩になって辞めたんですよ。「オレが目立たなねぇじゃねぇか」って（笑）。

――普通わかりそうなもんなんですが（笑）。

TOKYO だって、すぐに出来そうな楽器じゃないですか（笑）。

――叩くだけだから（笑）。

TOKYO 単純だから（笑）。で、そんな時に学校の方では空手話が盛り上がってたんで、「じゃあ、空手にしよう」って乗り換えたんですよ。

――バンドで目立たないんだったら『月刊空手道』に載ろうと（笑）。

TOKYO でもね、でもね。オレ、バンド時代に雑誌に載ったんですよ。『PeeWee』（ハイティーン向けの女の子雑誌＝おやじ調）ってやつに、ちっちゃくだけど。最終的には『月刊空手道』にも出ましたよ（笑）。

――僕も『格通』にでましたよ（笑）。ただ、僕も以前、空手をやってたんでわかるんですけど、空手をやってくうちにプロレス嫌いになっていくっていうのはなかったんですか。

TOKYO それはないですよ。その頃も『週プロ』『週ゴン』はチェックしてましたから。

――じゃあ、いわゆる格闘家が持ってるプロレスアレルギー？ 例えば、あの蹴りは決まってねぇじゃん、みたいなものは全然なかったんですか。

TOKYO なかった。オレにとってプロレスっていうのは凄いキレイなものだったから。純粋だったんですよ、プロレスに関して。

――じゃあ、そのプロレスに関して言えば、空手を生かすんであれば選択肢としてはルチャじゃなく、U系に行く道もあったわけですよね。

TOKYO そうですね。でも、オレって空手の試合で、盛り上がる試合がしたかったんですよ。審判が「待て」って言ってるのに殴ったり、それで相手がやり返してきたら、またやり返したりとか、そういうことをやって、会場が盛り上がるのが好きだったんですよ。

――勝つことよりも注目を浴びるような試合を望んだと。

TOKYO なんかやらなきゃいけないなっていう（笑）。

――我慢できないんだ（笑）。

TOKYO 違う違う（笑）。自分がノッてる時はなんかやんなきゃって思うんですよ（笑）。オレはノらなきゃまったくやる気にならないですから。

――普通、格闘技の試合の場合はまず勝つことを考えるでしょ。

マグナムTOKYO

TOKYO オレは盛り上がる場面があって自分が納得すればそれでいいって感じだったんですよ。内容を考えちゃうんですよ。あんまり勝敗にはこだわってなかったのかもしれないですね。もちろん勝ちたいのは当たり前なんですけど、勝っても納得できるような、気持ちいい試合ができなきゃ嫌だって思ってたんですよ。ガチャガチャゴチャゴチャやってるのは嫌だったんですよ。

――わかりやすくて、美しい試合がやりたかったと。

TOKYO そうそうそう。見た人が面白いって思える試合がやりたかったんですよ。わかりやすくて楽しくて強さも見せたかったんですよ。オレはもう、純粋にそう思ってますよ。だから、場外に飛ぶとしてもただ飛ぶんじゃなくて「凄ェ！」って思うような飛び方をしたいんですよ。

――だから、ケブラーダをやるにしてもトップロープから飛ぶわけですよね。

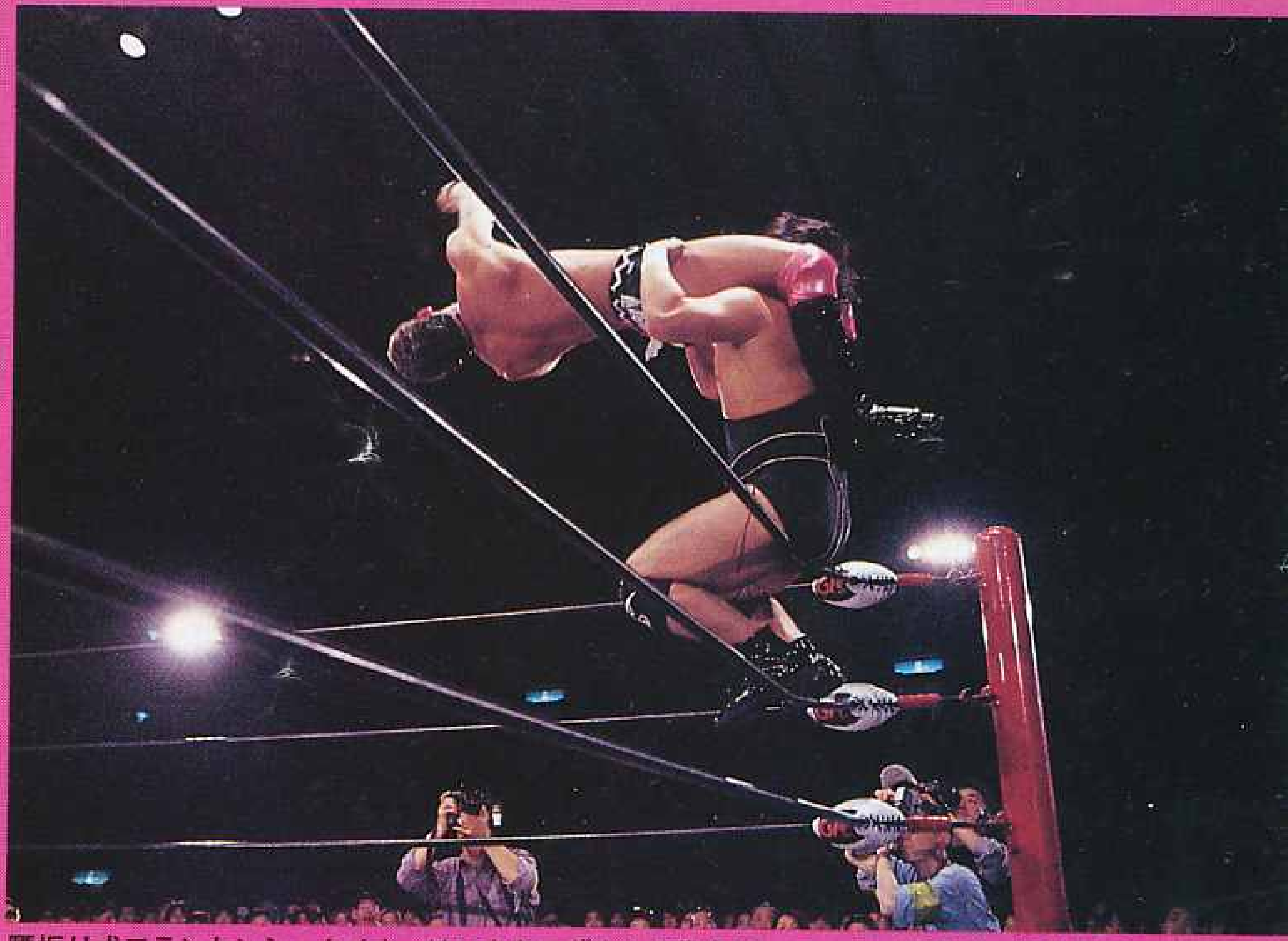
TOKYO そうそうそう。うちの師匠（ウルティモ・ドラゴン）とかサスケさんみたいに名前のある人がやるんだったら、その技がもう代名詞になってるんでいいんだけど、オレなんかは誰も知らないじゃないですか。腰振ってるだけだから。お調子モンって感じじゃないですか。

――いや、その腰振りが絶妙なんじゃないですか（笑）。

TOKYO だから、調子に乗った人間は猿じゃないけど。

――高いところが好きだよと（笑）。

TOKYO そうそうそう（笑）。僕はもともとルチャリブレが好きだったんですよ。で、ユニバーサル・レスリング（注1）が出てきた時が衝撃的だったんですよ。当時は17歳だったんですけど、8歳の頃に見てたビジャノとか、フィッシュマンとかブラソスとか、ああいうのが一気に来て「なんだこれは!?」って思ってる時に、初代タイガーよりも凄いことやる選手が浅井さんだったんですよ。メキシコのプロレスはやっぱり凄いなって思ってたところに、そこでさらに飛び抜けてたのが浅



腰振り式フランケンシュタイナーはいまやマグナムの代名詞。コーナーに登り、相手の顔の前で腰を振りまくり、最後にカンッと突き上げる動作を入れたのちにフランケンを決める、やられる方はかなり嫌なワザ

格闘 MAKE JUNGLE

ジャングルを守るより ジャングルを作る!!

井さんだったんですよ。

――ケブラーダを日本で有名にしたのは浅井さんだったですもんね。

TOKYO　ケブラーダにしてもそうですけど、プランチャーにしてもフォームが凄いキレイなんですよ。その中にスープレックス系の日本のワザとかあったり、ドロップキックとかもあったから、この人は一体誰だろうっていうのがまず最初でしたね。それから、雑誌も細かくチェックするようになってウルティモドラゴンにチェンジして、新日とかWARとかにも上がるようになって。

――じゃあ、その頃にプロレスラーになってみたいと？

TOKYO　当時はオレも仕事をしてたから「夢の世界だよな」っていう部分があったんですけど、たまたま友達から「今度ウルティモ・ドラゴンが来るから見にこない」って言われて行って。そしたら虜になっちゃって。

――で、ウルティモさんのもとに弟子入り志願してと。

TOKYO　いや、その時は弟子入りっていうよりも、しゃべってみたくなっちゃったんですよね（笑）。

――迷惑な人ですね（笑）。

TOKYO　当時、僕は23歳で年もいってるし、見てるだけでいいって思ってましたもん。それで偶然なんですけど、たまたまメシを食いに行ったら浅井さんがいて、「僕もレスラーになってみたいんですよ」って、とりあえず言ったんですよ。そしたら、浅井さんに「身体もデカイし、レスラーやれるよ、大丈夫、大丈夫」って言われて一気に火がついて。いま考えてみると軽いノリで言ってたってわかるんだけど、その時はその言葉で「よし！　絶対プロレスラーになろう」って思ったんですよ。

――だけど、その後に浅井さんに会ったら、そんなこと言ってねぇって言われたんですよね（笑）。

TOKYO　そうです、そうです。だけど、オレはそう言われたから、その気になったのにねぇ（笑）。最初の言葉は「オレ、そんなこと言った？　覚えてねぇよ」って（笑）。

――愕然としますよね（笑）。それでTOKYOさんはなんて答えたんですか。

TOKYO　「ともかく練習させてください」と。そしたら「すれば」って言われて（笑）。メチャメチャ冷てぇじゃねぇかよって（笑）。

――それで浅井さんの付け人になるまでどのくらいかかったんですか。

TOKYO　7ヵ月ぐらいですね。その間にも何回か会いにいって「バク転はできるの？　出来ないんだったら体操教室に行けば？」言われて、すぐに教室に入って。

――驚くほどプロレスに対して真面目ですね。

TOKYO　「色が白いねぇ、日焼けした方がいいよ」って言われたら、すぐに日焼けサロンに行って。

――たぶんウルティモさんは面倒臭いからいい加減に言ってただけですよね（笑）。

TOKYO　たぶんね（笑）。しつけぇなぁって思ったんじゃないですか。でも、オレはバク転とかができれば弟子入りさせてくれるのかって本気で思ったから。日焼けの時も1ヵ月もあれば真っ黒だぜ、白い歯でニッとやってやろうと思って（笑）。

――驚くほど素直ですよね（笑）。

TOKYO　だから全然疑いもしなかったですよ（笑）。うちの師匠の性格を知ったいまとなれば、いい加減に言ってたんだなって思うけど、そん時はバク転、バク宙ができなかったらオレはもうダメだって思ってましたから。その時は真剣だった。スゲエ真剣。

――驚くほどバカですね（笑）。で、その後、ウルティモさんの作った闘龍門に第一期生として入り、メキシコでデビューするわけですけど、あちらの国の人って血の気が多いみたいじゃないですか。怖い試合、いわゆるシュートみたいなことを仕掛けられたことってありますか。生意気そうだから、ここらでシメておこうみたいな感じで。

TOKYO　そういうのはなかったですね。

――じゃあ、例えばですけど、今後そういうような試合になった時はどうします？

TOKYO　どうしよう？

――僕に聞かれても（笑）。例えば相手が指を折りにきたりとか。

TOKYO　はっきり言って、そういう人とは試合したくないです。「すいません、路上に



2・7サスケ戦が終わったあと、リング上で号泣するマグナム。日本におけるベストファイトだろう

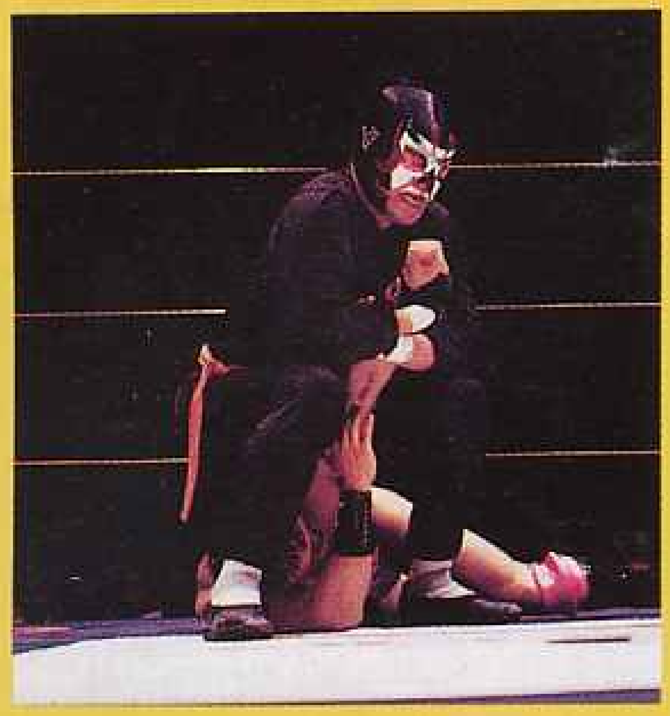
NWA世界ミドル級王座決定戦リポート

【2・7闘龍門旗揚げシリーズ最終戦】

ザ・グレート・サスケvsマグナムTOKYOの

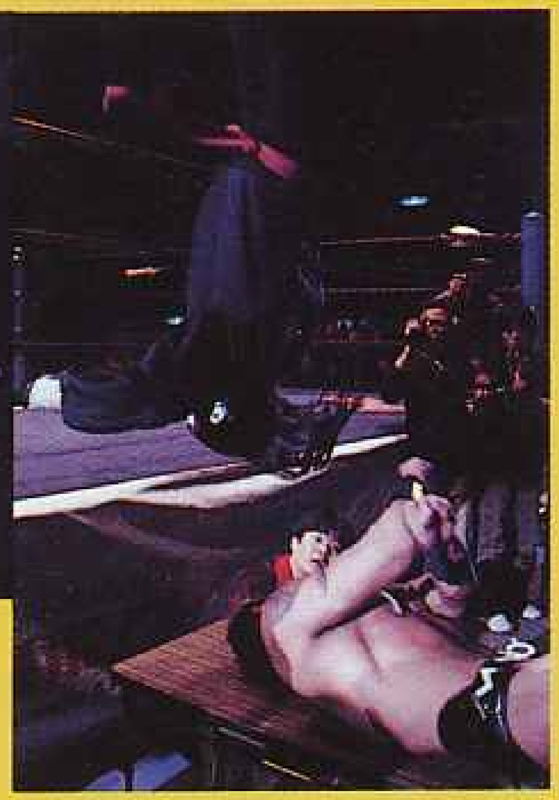


試合開始当初は互いに空手を経験しているもの同士だけに蹴りの応酬を展開する。この辺の間合いは、マグナムがこだわっている空手を生かしたものだろう。この手探り状態からサスケがカニ挟みを仕掛けてグラウンドの展開に移行。

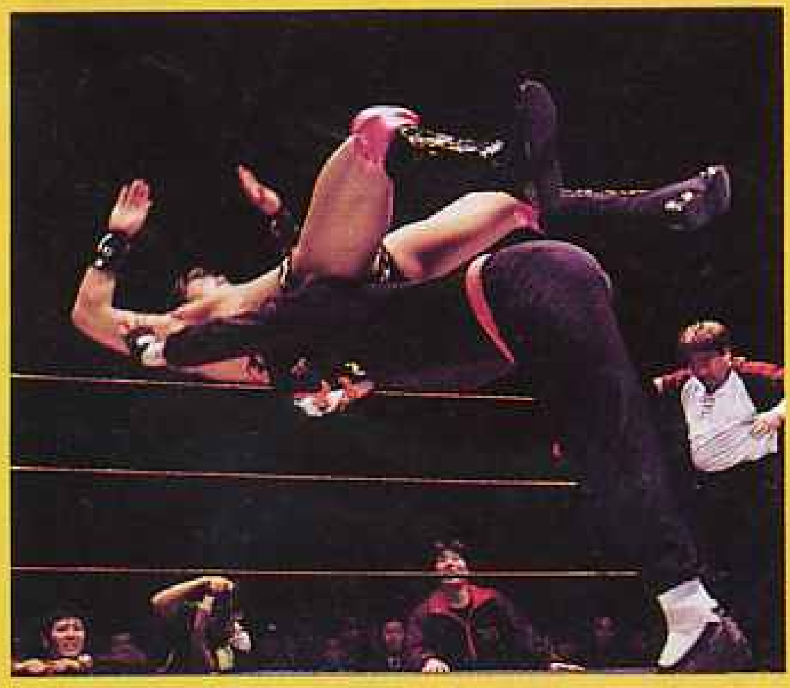


この写真は試合開始から7分ほどのところ。それまでもサスケはネチネチと関節技にこだわった試合をしていたわけだが、腕十字においては何度も仕掛けていた。この後、ロープに逃げたマグナムだが、サスケはコブラツイスト、卍固めとかなりしつこい。これで十分痛め付けたあとはマグナムをロープに振って、ニールキックを繰り出すが、これをマグナムがすかすと、サスケは場外に逃げる。





場外に逃げたサスケにマグナムはトペ。続いてトップロープからのケブラーダとたたみ込むが、これで「サスケさんはキレて、凄い怖かった」とマグナムは証言。この後、サスケは机を持ち出し、マグナムの頭を机に叩きつけるが、そこですかさず、マグナムが逆襲。先にリングインしたマグナムを追うサスケはロープをはさんで、ブレンバスターの掛け合いを展開する。マグナムはかなり堪えるが、力尽きて机に叩きつけられ、さらにサスケはノータッチトペコンヒーロ（写真右）。リングに戻ったサスケはさらにスワンダイブ式のミサイルキックで追い打ちをかける（写真左）。「凄い攻撃で、ホントに嫌になった」とはマグナムは語る。



場外の主導権争いで勝ったサスケはジャパニーズレッグロールで押さえにいくが、カウント2で返すマグナム。サスケはさらにボディスラムで叩きつけてムーンサルトプレスでカバーして2・9。マグナムはラ・マヒストラルにいくが、サスケもラ・マヒストラル。マグナムはサスケをコーナーに持ち上げて、腰振り式のフランケンだが、サスケは切り返す。この後、マグナムはフルネルソンバスターを仕掛ける。ここで先に立って逆転を狙うマグナムはバイアグラドライバー、AVスタープレス（シューティングスタープレス）を。だが、マグナムの攻勢はここまで。AVスタープレスで腰を痛めたマグナムはカバーができず、サスケはもがくマグナムにセントーンアトミコ。それが痛めた腰に直撃し、最後はサンダーファイヤーパワーボムでカウント3。試合後、気持ちのいい攻防ができたことでマグナムは号泣した。

【注1】ユニバーサル・レスリング連盟。1990年3月1日に旗揚げした日本初のルチャリブレ団体。TOKYOさんのみならず、当時のファンは浅井嘉浩（のちのウルティモ・ドラゴン）のラ・ケブラーダを初めて見て度胆を抜かれた。

「バク転できなきゃ体操教室行けば」って師匠に言われて行きましたよ（笑）

行ってください」っていうところです（笑）。例えば背中とかを思いっきり蹴るとかだったら、いいと思うんですよ。ただ、それでカチンとくる人もいるでしょうね。だけど、オレの考えでは闘うことと相手を傷つけることとは違うんですよ。人の心まで傷つけるべきじゃないですよ。もちろん、闘いですから、傷つけあうんですけど、それとダメージを負わせるのは違うでしょ、意味合い的に。わかります？

――相手を潰すような試合は闘いの意味合いから外れてくると。

TOKYO だから、一発いいのをもらった、それで返したってやって段々闘いが高まってくるっていうのならわかるけど、いきなり指の骨を折りにきたりとか、故意にやるのは、それは闘いの意志とは違うと思うんですよね。プロレスはスポーツであり、競技であり、エンターテインメントなんですよ。故意にケガさせようとか、そういうのはまた違うと思うんですよ。ルールのある喧嘩って言ったら、いいのかわからないけれど、オレはプロレスっていろんな要素を含んでると思うんですよね。楽しいのがあったり、キツイのがあったり、リングの上でドラマがあるじゃないですか。だからこそ、楽しいと思うんですよ。いろんなレスラーがいろんな考え方を持ってると思うんですけど、オレは楽しいプロレスがやりたいんですよ。

――1・4東京ドームの小川vs橋本戦って見ました？

TOKYO 見ましたよ。

――どう思いました？

TOKYO 嫌だなって思いましたよ、ファンとして。凄く後味が悪いから。

――なるほど！　後味のいいＴＯＫＹＯさんが言うと、もの凄い説得力あります（笑）。ただ、プロレスファンの中には「あれこそプロレスだ」って言う人もいるわけですよ。

TOKYO だから、そういう人はそういうところに見にいけばいいんですよ。オレは好きだからプロレスをやってるわけだし、好きなスタイルがあるわけですよ。だから、オレのピンクのパンツが見たい人がオレを見にくればいいと思うんですよ。オレはスタイルを変える気もないし、僕は新日本のジュニアって好きだから。闘いの中に華がある。過激さの中に華がある。闘いの中に美があるっていうか。だから、ファンとして見ていて爽快感がないのはオレは嫌です。

――だから、この前の2・7横浜文体の対サスケ戦は強さも凄さも楽しさもあってファンとしての爽快感があった試合たと僕は思ったんですよ。あの日、サスケさんは序盤戦で延々とグラウンド技で攻めてきましたよね。あれはどう感じました？

TOKYO 疲れた。しつこいなって（笑）。

――かなり長い時間、仕掛けてきましたよね。

TOKYO だから、そういう意味ではオレのいままでしたことのない試合？　あんなの初めてだから。サスケさんがオレの引き出しを開いてくれた部分っていうのか、こういう闘い方もあったのかっていうところ？　そういうのに対応できるんだなってわかった部分も含めて凄い勉強になりましたね。動きだけの試合ばかりだと、学校の勉強で言ったら基礎を学ばないで応用問題ばっかやっちゃってることになるんで。そういう意味ではやっぱり良かったと思ってますよ。

――「なんで、こんなことしてくるのかな？」とは思わなかったですか。

TOKYO オレのこと嫌いなのかなって（笑）。でも、グラウンドの試合っていろいろ対応を考えられるんですよ。やられててもお客さんの反応が聞こえてくるんで、どっちに対して歓声が上がってるのかわかるんですよ。サスケさんの方に歓声があがってるってわかったら、ちょっとした隙をついて、「腰を振ってやれ」とか（笑）。

――振りますか（笑）。寝技の攻防が途切れた瞬間に立ち上がって、低空ドロップキックを出して、すかさず踊ってましたよね（笑）。あれでサスケさん側に傾いてた歓声を引き戻しましたよね。

TOKYO だから、一回で元に戻せるんですよ。それまで向こうに持っていかれてても、パンパンってなんか2、3個やって、ちょっとパッパッとやればチャラに持ってけるんですよ。いくら7割攻められてても、残りの3割で五分五分までもってけるんですよ。

――だから、サスケさんとかプロレス関係者も言ってるんですけど、凄いセンスがあって評判なんですよ。だって、まだデビューして2年ぐらいでしょ。試合数も少ないだろうし。

TOKYO メキシコ、WCWを含めて100試合もいってないですよ。日本なんてまだ6試合ですから。シングルだったら全部で20戦やってないですね。だから、たぶんああいう試合は2度とできないんでマグナムTOKYOは俳優に転向します（笑）。

――ちょっと照れました？（笑）

TOKYO 最初で最後です、ああいう試合は（笑）。僕はサスケ社長のこと好きなんですよ、面白いから。でもね、プロだなやっぱりっていうのは試合で感じましたね。ホントに怖い部分もあったしね。

――それはどの辺で感じたんですか。

TOKYO 顔が怖い（笑）。



1・31旗揚げ戦終了後、リング上から挨拶するマグナム（左端から）、SAITO、ウルティモ・ドラゴン、ドラゴン・キッド。予想以上の成功に感極まって泣きだす闘龍門勢



サスケが語るマグナムTOKYOさんについて

――マグナムＴＯＫＹＯさんについて一言コメントをお願いします。

サスケ マグナム君についてですかぁ。まず最初に言いたいのは前に経営してたファッションヘルスはどうなったのかってことですよ。これをはっきりさせろ、と！

――はぁ？

サスケ あ！　あれはマグナム北斗でしたねぇ～（笑）。ＴＯＫＹＯ君について言えば、メキシコでの試合を見て「この男はオレと同類だぞ」とビッビッビッと来ましたね（笑）。

――今年の2月に彼と初めて試合したわけですが、序盤戦はずいぶん寝技にこだわってましたが。

サスケ 彼が元ＡＶ男優であることを広言して、はばからないのであれば「じゃあ、私も寝技で応戦するぞ」と。そういうメッセージだったんですよ（笑）。僕もね、ＡＶに2回出てるんですよ。一回目はオイルレスリングをやって、2回目はランジェリーレスリングのレフェリー（笑）。親近感がわくんですよ。彼には天性のセンスとオーラを感じるね。一言で言うなら日本プロレス界が捜し求めていたスター！　ぜひとも、みちのくプロレスに籍を置いて、みちのくを譲り渡したいな、と（笑）。あ！　それからもう一つ。この前、旗揚げした埼玉プロレスは今年、絶対にブレークしますから要注意ですよ。原始猿人ヴァーゴンとサバイバル飛田！　これはブレークしますから今から注目ですよぉ～（笑）。

格闘 MAKE JUNGLE
ジャングルを守るより ジャングルを作る!!

マグナムTOKYO

――サスケさんのホントの怖さは顔ですか（笑）。でも、ここはちゃんと言ってくださいよ。

TOKYO トペやったあとに、リングに上がると見せかけてケブラーダをやった時ですね。「あ！ ヤベエ、怒らしちゃった」って感じ。

――あの場外での主導権争いはかなり緊迫感ありましたよ、見てて。

TOKYO メチャメチャ怖かったですもん。

――サスケさんが場外で机を用意してその机にTOKYOさんの頭を叩きつけて、サスケさんの逆襲が始まるかなって思ってたらやり返したでしょ。

TOKYO 僕もあの時、すぐにサスケさんの頭を叩き返したでしょ。あの時はもうサスケさんっていうのを忘れてる。「ダメだ、いかなきゃ」って思ってるんですよ。

――サスケさんもあの場外では怒ってたでしょ。

TOKYO キレたら、この人、おっかねぇって思ったもん。だから、最後はブレーンバスターやられて、トペコンヒーロやられて、もう一回上から降ってきましたからね。「コレが日本だッ！ 覚えとけッ！」って言われたもん。これはビデオにも入ってますよ。

――ワハハハハ！ サスケさん、カッコイイな（笑）。だけど、それで緊張感のあるイイ試合になりましたよね。

TOKYO だから、場外のあとってあんまり踊ってないでしょ（笑）。ヤバイ、ヤバイって思ってて、腰振りフランケンを出したら、やっぱり返されたでしょ。

――そうですね。

TOKYO アレで自分のペースに持ってこようと思ったんだけど、もう怖かったよね。

――試合の中で自分をいかに見せつけるかって部分での凄い陣取り合戦でしたよね。

TOKYO 華もあって、ちゃんとエンターテインメントも作ってて激しさもあって、攻防があって綺麗さもあって。だけど、もう2度とできません（笑）。

――ワハハハハ！ プロレスをあんまり知らない僕でさえ、センスがあるなって思いましたもん（笑）。

TOKYO だから、なんにも考えてなかったからでしょうね。考えてたらどっかでウケをとらなきゃって焦っちゃったと思いますよ。アッという間の20分だった（笑）。

――だからこそ、いい試合だったんでしょうね。

TOKYO 僕はある意味、胸を借りるって感覚じゃなかったんですよ。逆に先輩に対して思い切りいかなかったら失礼だと思ったから。それになかなかシングルでああいうチャンスってもらえないから、自分の持ってるものを全部ぶつけたい。純粋にこれは勝ちたいっていうのがありましたね。沸かせる試合がしたいとか、うんぬんじゃなかった。ほかの試合では結構沸かせることとか考えるけど、あの試合に関してはなかったですよ。

――入場からなにから、あのシリーズではTOKYOさんはホントに注目されたし、会場人気もありましたし。だから、サスケさんもどの程度、試合で出来るのか計りにいった部分ってあったと勝手に思ってるんですけど。サスケさんもTOKYOさんのことを認めたから、ああいう試合をしていったんだなって思いました。

TOKYO 怖かったです。

――ところで、サスケさんとの試合では何回か蹴りは使ってましたけど、基本的にTOKYOさんは空手のギミックは使わないですよね。

TOKYO 相手が構えてくれれば、それなりにってのもあるし。やっぱり、相手がどういう風にやってくるかっていうのは最初は手探りだから。だから逆に、そこに空手は生きてますよ。構えにしても、間合いにしても。

――じゃあ、あえて封印してるとかそういうわけじゃなくて。

TOKYO 全然ないですよ。っていうか、試合の前に腰をダメにしちゃうから（笑）。

――女でね（笑）。

TOKYO ワハハハハ！ だから、チョップの受けにしても、ローキックの受けにしても空手を通過してるんで、ちょっとやそっとじゃ潰れないっていうのはありますね。それが精神的な支えになってるところはありますよ。だから、空手を封印してるっていうよりも、そういうものをちりばめたマグナムTOKYOってものを出していきたい。だから、ピンク色の空手戦士になりたい！ （そう言って水を飲むマグナムだが、途中で吹き出してテレコをビショ濡れにする）

――アーッ！ 何するんですか！

TOKYO すいません、すいません。あんまりくだらないセリフなんで吹いちゃって（笑）。だけど、これはこれで面白いんで書いといてください（笑）。

――わかりました。いいオチまでつけていただいて、今日はありがとうございました（笑）。

【99年4月7日、吉祥寺・デニーズにて】





マグナムTOKYO【まぐなむ・とうきょう】本名：黒木克昌。昭和48年1月9日生まれ。身長180㌢、体重83㌔。23歳の時にウルティモ・ドラゴンの弟子となり、メキシコの闘龍門ジムでは寮長。メキシコのアレナ・ナウカウパンでデビューし、WCWでも活躍した。1月31日から始まった闘龍門旗揚げ興行では常にメインを務める。元AV男優を広言し、入場でのセクシーダンスで一気にブレークした元空手家。押忍！



［撮影協力］
bar drop
■Open 21:00～
■不定休
東京都武蔵野市吉祥寺本町1-29-6
TEL.0422-20-0737
●マグナムさん＆闘龍門ガールズは付いてきませんが、各種イベント＆パーティーのスペースとして貸出中なのでお気軽にお問い合せください。




元気ですかーっ!?
こんな思いかなぁ?
今日はみんなどんな思いかなぁ?
いきますかーッ!!

猪木サン・ダー!!

INTERVIEW PART2

巻末
SPECIAL
INTERVIEW
第2弾

「ジャングルを守るよりも、今度ぁ逆に、ジャングルをつくりゃあいいじゃねえか！」――まさしく猪木イズム、アントン節が轟いた前号の第1弾に続き、待望の第２弾のお時間がやってまいりました。ンムフフフ。今回の話は、多少複雑かもしれませんが、氷風呂に入れば、いやがおうでも読まなきゃならないというか！(意味不明)。読みますかーッ！

聞き手／山口日昇
Interview by Noboru Yamaguchi
撮影／森鷹博
Photographs by Takahiro“Sankyu”Mori

格闘 MAKE JUNGLE
ジャングルを守るより
ジャングルを作る!!



アントニオ

UFOは散歩道!!

（なぜUFOが散歩道なのかは本文をご覧ください）

プロレスというものを難しくしてしまった責任はあるかもね。俺自身に

元気ですかーッ！

えー、前回の猪木さんの話は覚えてくれているでしょうか？

ジャイアント馬場さんの訃報をブラジルのジャングルで聞き、馬場さんが本当の意味で重い鎖から解かれて自由になったと思った話。絶滅寸前の小猿・ライオンタマリンの話、全ての病気の根源は現代人のミネラル不足にある！という話。"1・4"が閉塞する社会に先鞭をつけて風穴を開けた話などを語っていただきました。

前回の話を忘れてしまった人、まだ読んでいない人のために、たまにはサービスをさせていただいて、前回のラスト部分にちょっと巻き戻してから、今回の話へと続けさせていただきたいと思います。

前号と併せて読んでいただければ、精神のミネラル不足を補えます。では、ここは一発元気よく、巻き戻しますかーッ！

※

——1・4東京ドームで、小川（直也）vs橋本（真也）戦という問題提起があったんですけど、これを「マット界の環境問題」と考えるとすると、1・4を「環境破壊」だと捉える空気が蔓延してますよね。でも、ボクらからしてみると、あれはプロレスにある"自然"を保護してると捉えてるんですよ。

猪木　あれは環境問題じゃなくて日本の閉塞状態、経済とか政治という部分で捉えてたんで、環境には結びつかないなあ（笑）。なぜかと言うと、政治も経済もどうにも動けない、出口が見えない。そん中で喘いでいる状態でしょ。なんとか出口を作るため、風穴を開けるためには、異質なものが入ってこなければ変わらないですよね。そういった環境から、また21世紀に向けてどう風穴を開けるかっていうのが次の時代へのステップだと思うよね。だから、いま本当にプロレスがその先鞭をつけたというか。小川vs橋本戦がね。

——プロレスが真っ先に風穴を開けたということですね。

猪木　だから、ある意味では既存の常識をブチ破ることが、経済にしても政治にしても必要でしょう。まぁ、プロレスにしても、明日生き残るための一つのメッセージじゃないかな。

——ムリヤリ環境環境っていう言葉に結び付けると、1・4後の新日本プロレス側はいまのままの環境を守っていくという感覚を持ってるわけですよね。だから、UFOに関しては、「余計なことをしてくれたな」という感覚があるんでしょうね。



小川直也が乗り込んだUFOが、新日本帝国を襲撃した"1・4事変"。マット界の環境破壊か、それとも環境保護か？　まあ、ジャングルを守るだけじゃなく、ジャングルを作りゃあいいじゃねえか！　というか

猪木　環境があんなに太りますかね？

——ダハハハ！　もしかして橋本選手のことですか？

猪木　ンムフフフ。環境の話が出たからね、ついでに言っとくと、例えば「アマゾンを破壊しちゃいけません」とか、みんな言うよね。確かにそれは破壊しないほうがいい。でもね、自然にも寿命がある。8千万年かな？

——8千万年！

猪木　うん。アマゾンの歴史というのはね。その中でやっぱり天変地異があったり、いろんなことがあるけど、結局、巨木というのは、1本大きな木があると周りに大きな木が育たない。酸素の供給という面から言うと。飛行機で上から見ていくとガーッと緑のジャングルが広がるんだけど、下から見るとね、大木はもう葉っぱを付けてないんですよ！　結局いつかは巨木は倒れていくんですけどね。やっぱり、我々は酸素吸ってますから、小さな、これから成長期にある木を育てなきゃいけない。あるときには人間が手を加えてそういう環境を変えてあげるというかね。植林もそうなんだけど。そういう、老化しちゃったジャングルに新しい命を吹き込んであげるというね。よく、ジャングルって大蛇がいて、アマゾン河があってっていう恐ろしいイメージで語られるけど、アマゾンはいろんな顔を持ってますから。だから……。

※

さて、ここまでが前号のラスト部分を巻き戻してみたものである。

猪木さんの話はブーメランのように飛んでいき、あちこちを旋回しながらズバリと核心的な部分へと戻ってくる。

マット界に限らず古い価値観と新しい価値観が交差する不安定な時代の中で、これから"猪木イズム"は、はたしてどういう役割を果たしていくのか。"猪木イズム"とはいったいなんなのか？

プロレス以外の話をしていても、プロレスにフィードバックできる矜持を含んでいるので、尻の穴をかっぽじってよく聞いていてほしい。

まあ、皮膚感覚が大事というか。

それでは、アントン総帥インタビュー第2弾。行きますかーッ！

※

猪木　よく、ジャングルって大蛇がいて、アマゾン河があってっていう恐ろしいイメージで語られるけど、アマゾンはいろんな顔を持ってますから。だから、そういう面だけじゃなくて、例えば、その中にいろんな種類の植物があるわけでしょ？　それも古いヤツと新しいヤツが、時代、時代によって役割を果たしてる。若い、二酸化炭素を大量に吸収する樹木と、それから我々で言えば、あんまり食べなくても生きていくことはできるよ、という樹木がある。そういうのが、まさに自然のサイクルだと思うわけだよね。

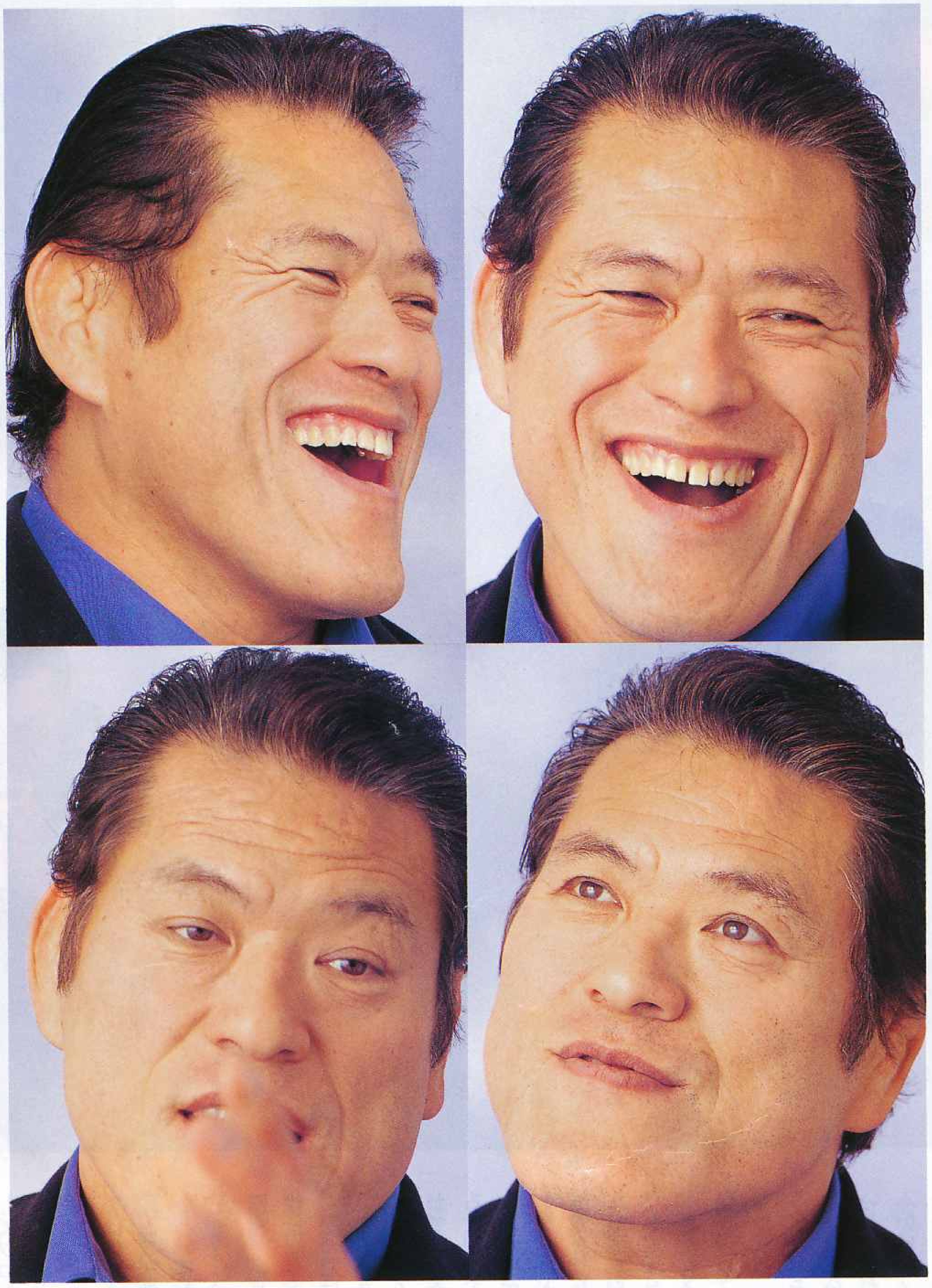
——その"自然"ということでいえば、1・4の小川vs橋本戦を見て、ある人が面白いことを言ったんですよ。「いま

の新日本プロレスというのはテーマパークだ。ただ、そこに猪木イズムが入ってくるとサファリパークになる」って（笑）。

猪木　ンムフフフ。まあ、アドベンチャー・ワールドになるというのかな。

――冒険ですね（笑）。プロレスという世界で考えてみても、〝自然〟というのは大切だな、というのはそういうとこでもわかるというか（笑）。小川vs橋本戦が〝自然〟ではなく、いまのプロレス界では限りなく〝不自然〟だと捉えられてしまうところが寂しいですよね。〝自然〟がある中で冒険しないとつまんねぇですからね。

猪木　そう。しかし、ズバリ言って、テーマパークはつまんねえですね！　こないだも、あるテーマパークを視察したけど、もう青息吐息というか、客は来なくなっちゃったしね。あんな施設を作ってどうすんの？　と。そこに自然がそのままあるんだったら、いかようにも自然として生きていけるわけだよ。いやー、お荷物で困ってるのがいくつもあるんで、こっちが困ってしまうというね（笑）。



――テーマパークはつまらない！（笑）。どこの団体か特定はしませんけど、やっぱりテーマパーク化が進んじゃって、マット界全体に〝自然〟が少なくなってきてますよね。

猪木　これはね、プロレスというものを本当に難しくしてしまったという責任はあるかもしれないね。俺自身に。

――エ！　猪木さんにですか?

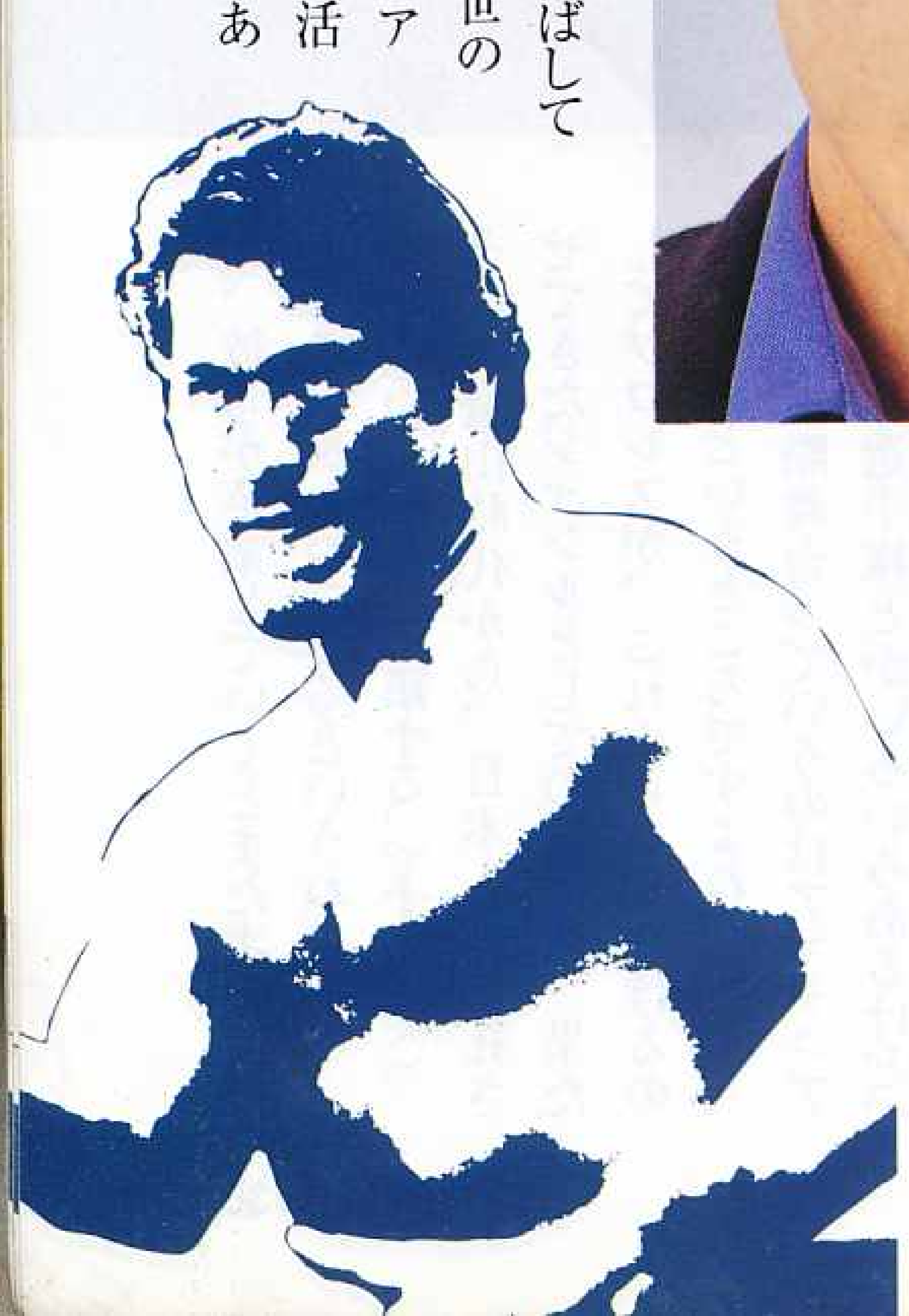
猪木　（頷く）力道山の時代っていうのは非常に単純でよかったと思うんだよね。力道山の形相というか怒った顔で凄い迫力の空手チョップで外人をブッ飛ばしていくっていうね。それがだんだん世の中が安定してきたところに、一つのアイデアとしてワールドリーグが復活して、要するに今度は闘いから、ある意味ではマッチメイクというのかな。イベントとして面白味を加えていった。

――イベントとして充実させていく方向ですね。

猪木　そっから俺たちの時代に続いていくんですけどね。結局、今度ぁ、その先は精神論に入っていっちゃうと思うんですよ。あるいは、それが猪木イズムになるんですけどね。ちょうど当時、プロレスから離れた連中を振り向かしたのは当時の学生さんなんですよね。いまでいうと50歳ぐらいになるのかな？　俺が20～25歳ぐらいのときに「見たくないヤツは結構だ！」っつって息巻いてるときですよ（笑）。

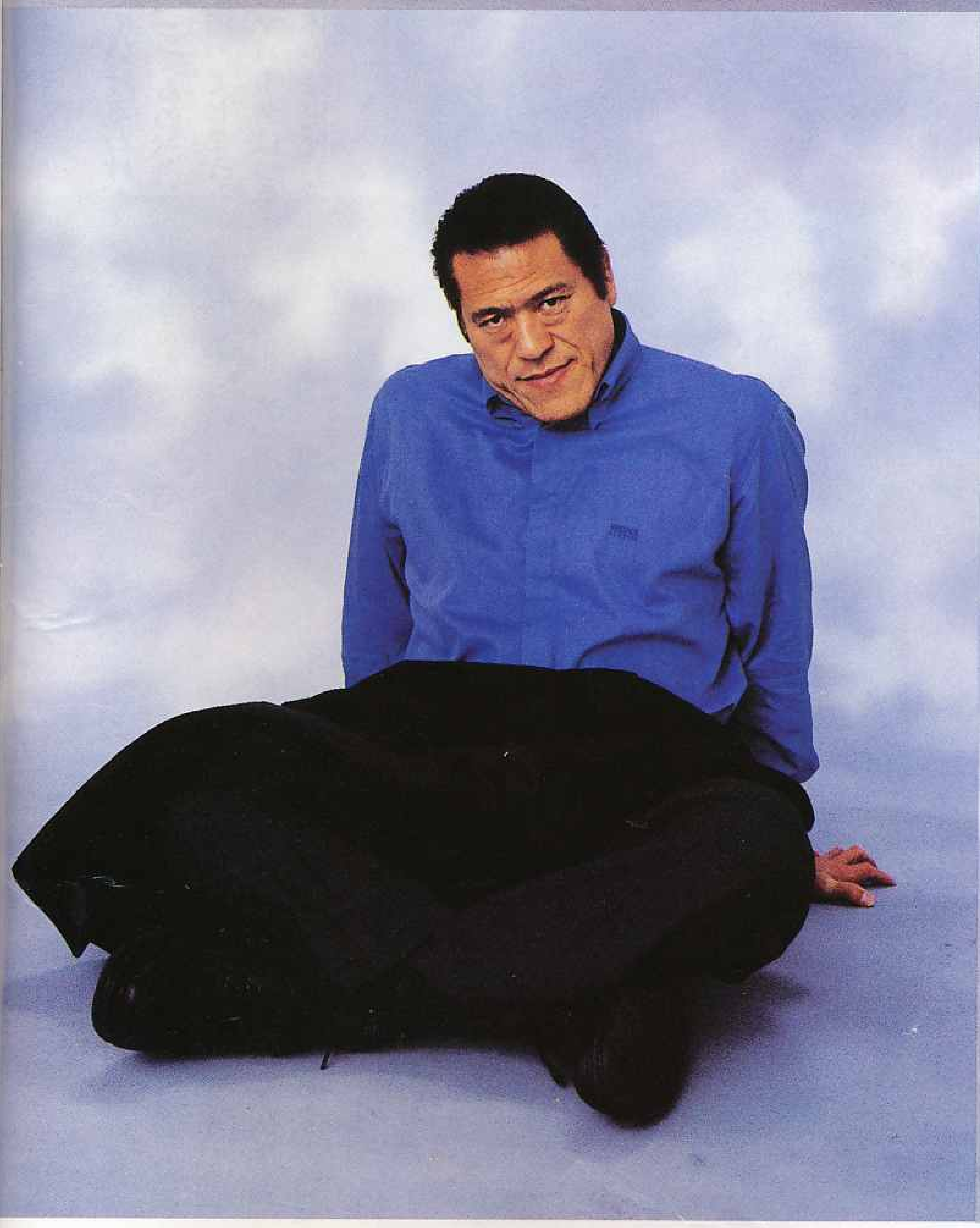
――若獅子と呼ばれてた時代ですね。

猪木　そのときに学生さんだった人たちですね。高校、大学にいってるような、そういう年齢の人が「面白いものがあるよ」という形でブームができてきたというか。それは、巡回していくというか











ね。彼らが卒業していくとまた次の世代がそこに加わってくるというね。

——面白いものは連鎖する、ですね（笑）。その力道山時代から、日本人を熱狂させてきたジャンルとしての役割に、果たしてプロレスが、これから返り咲けるのかどうかというところですよね。

猪木　国際舞台っていうのはアマチュアでは世界選手権とかいろいろあるけど、「プロの世界」で世界に通用していけるかというと、サイズが必要でしょ？

——はい。身体の大きさですね。

猪木　それに、風貌とか、これからの時代は語学力とか、まあ、いろいろたいへんなんだけどね。やっぱり、逆に言えば、いまインターネットとか衛星放送時代に入っていく中で、いろんなジャンルの人がアメリカへ出ていってる。例えば、ある女優さんなんかでも向こうの映画に出るのが夢で、有名な監督のオーディションを受けた。でも、いま俺がこうしゃべってることあるでしょ？　これを例えば作ってたら、いっぺんで見抜くでしょう。だから俺たちが、どんなに素晴らしい日本語をしゃべる外人を見ても、どっかで発音が違ったりね、見分ける。語学力がなければ「これはちょっと違うよ」となるよね。そこがね、言葉のいらない世界という部分で、我々はたいへんありがたいというか。外国へ斬りこんで行く、あるいはアメリカへ斬りこんで行ける、唯一のエンターテインメントだと思うんだよね。

——プロレスや格闘技は世界に通用する肉体言語ですからね。

猪木　だから、もう一つは無国籍！　ＵＦＯはそういう意味でね。こんなこと言

アジアにおける「格闘」は、精神論が加わったもの。アマチュアとは全く違う

ったら怒られちゃうけど、いまは小川というのが日本で中心でやってる。だけど要するに、外国人選手を育成していくっていう点では、例えば中国、インド、それからアメリカからもスターが生まれてくればいい。ハルク・ホーガンがWCWのスターであるように、形が違ったUFOのハルク・ホーガンが出てくればいいわけですね。

――ああ。広がりが出ますよね、凄いスケールで。ホーガン級のスターが世界各国にいて、全員UFO所属だったら痛快ですよ（笑）。それが、猪木さんが前から言ってた、後継者は日本人じゃなくてもいいという部分ですよね。ところでインターネットなんですけど、プロレスの世界も、マスコミが書かなければ済んだことが、インターネットでファンの側から伝わっちゃう時代ですよね。

猪木　そうですね。この前もアメリカでね、ウチのオフィスのインターネットでね、要するに、いろんな会場の試合の予想がピッタリ当たってるというね。それがインターネットで紹介されてるんだよ。それをまた誇ってるヤツがいる（笑）。

――マニアというのは、ホントいつでも気楽でいいですね（笑）。

猪木　勘がいいのか、控室のあたりをウロウロしてるのかわかんねえけどね（笑）。

――ガハハハ！　だからそういう時代に、これから選手側はなにを突き刺していけばいいのかという部分なんですけど。

猪木　だからね、いまアメリカの話をしたけども、アメリカと日本のプロレスは同じじゃねぇかといえば同じだし、そうじゃないって言えばそうじゃない。でも、その「そうじゃない」っていう部分をハッキリ色分けしていかなければいけねぇんですよ、どっかで。それにはポリシーだと思うんだよ。「闘い」というものが原点にあって、そっからエンターテインメントとしての表現力というのかな、パフォーマンスの部分を肉付けしていく。派手なパフォーマンスはプロとして大いにいいと思うけど、「闘い」という原点を置き去りにして、客に媚びて「お客さん、拍手ください」じゃシンドイしね。リングに上がって首掻っ切るマネしてりゃ、「本当にお前、首掻っ切るぞ‼」ってなるよね。

――ガハハハ！　猪木さんも「俺の首を掻っ切ってみろ！」って叫んでましたけどね。

猪木　いや、俺がもし掻っ切られたら、俺は掻っ切られて本望だから！　マネじゃないからね。だからそういうね、まぁ、非常に残酷だよね。これからの見方というのは。

――そうですね。凄くリアルな時代ですよね。

猪木　だから、千年前に帰った、パンクラチオンの原点に帰ってしまうような、それこそ「殺せ！」という時代に入るかもしれない。それは現実にできないけどさ。でも、いまだに俺のパキスタンの試合が語り草になってるというか。

――猪木さんとアクラム・ペールワンの試合※ですね。

※76年12月。パキスタンのカラチで行われた、ただごとではない異種格闘技戦。「ペールワン」というのは現地の英雄に与えられる称号。10万人近く集まった敵地の中で、猪木は、ギブアップしないその英雄の腕を折る。その瞬間、会場を警備していた兵士の銃口が一斉に猪木に向けられた。その後アクラムは自ら命を絶ち、猪木の腕にはいまでもアクラムに噛みつかれた跡が残っているという。

アントニオ猪木

猪木　アメリカにも（パキスタンから）20万人ぐらい移住してる。タクシーの運転手さんとか、全部知ってるわけだよね。20何年前の話を。そういう意味では東洋というか、アジアにおける「格闘」というのは精神論が加わったもんで、アマチュアとはまったく違うもの。そういう魂みたいなものを揺さぶってくれるもんじゃない。だから、俺はパキスタンにしてもインドにしても中国にしても、アメリカから1回は入っていけると思う。WWFも行ったでしょ。興行としてね。でも2回目は（観客が）それ以上になるってことはない。その半分だね。現実にいままでインドでそうなってる。そうじゃなくて、俺たちの、こんどは精神論が加わった「格闘」であれば、必ずそれは1万人が2万人、2万人が5万人、そういうことにはなっていくだろうということね。

――その精神論っていう部分でいうと、猪木さんは、馬場さんへの追悼の思いを語った『文藝春秋』の手記の中でも、「プロレスの本質である格闘、すなわち人間の怒りを取り戻せばプロレスは新しい世紀に向けて新しい生命力を与えられるだろう」と言ってますよね。

猪木　（身を乗り出して）ズバリ言って政治もそうなんだよ！　だから、政治でもプロレスでも人間が全部作り出してるものでしょ！　人間模様というか。だから俺が政治に打って出たときに「なんでプロレスと政治なんだ」とかいろんな声があったよね。

――「なんでプロレスラーが出るんだ」とか、バカがたくさんいましたね（笑）。

猪木　批判が凄かったけど。みんな生きてるじゃん！　それが政治なんだよ。

――みんな生きてることが政治！

猪木　それを集約したものが政治なの。だから映画の世界であろうと、スポーツの世界であろうと、あるいはサラリーマンであろうと、そういうそれぞれの生活の一つ一つをサポートしてあげるというのが政治の世界。政治という線を引いた



ズバリ言って「怒り」が必要！「怒り」がエネルギーになっていけば

馬鹿モンがまかり通ってた時代もあった。俺たちはそのときに怒った。まさに今回の都知事選がそうなんだけど、「怒り」がないというか。要するに談合の中で進んでいく。ある日、同じテーブルにいた人間が「談合なんかで譲れない」とやりゃあいいんです！　ズバリ言って、その「怒り」が必要なんですよ。いまはなんでも怒っちゃいけない、なんでも静かにってね。でも、どっかで自分をさらけ出せればね、「怒り」もあるだろうしね。喧嘩するってことじゃなくて、そういう「怒り」がもっともっとエネルギーになっていけばね。

――だから「怒り」を出すということが、もの凄いエネルギーを使うっていうことを、みんなある程度知ってて、エネルギーを使うことに臆病になってるんじゃないですかね。

猪木　いま、英雄を出さない世相になっちゃってますけども、逆に言えば英雄待望論というのがある。だから本当にそういうことをわかってるヤツが出てきて、ブッ飛ばしてブッ飛ばしてブッ飛ばしてブッ飛ばしていきゃあいい。そうしたらたいへんな人気が出るなと。もしかしたら、ちょっと小川がそのへんに気付いたかな、とね。

――それが1・4で立ち昇ったということですね。ぶっちゃけた話、これから新日本プロレスはどうなっていくんですか？

猪木　いや、けっこう気付き出したみたいだね。それはもともと眠ってる部分というか、ある意味では目が覚めてくれば、もともと歴史の中で積み重ねた部分が大きいですからね。いま俺がUFOでやってて、本当に一つのものが生まれるっていうのは、非常にたいへんだっていうことにあらためて気が付いた。新たに認知されるまでっていうのがね。新聞の一面取ったから、じゃあ興行が簡単に一杯になるかっていったらならない。そして、ひとつのキャラクターという個性が、シッカリできていくまでの時間。そこんとこだよね。どの会場行っても猪木コールになってしまって、選手の試合よりも拍手が多かったっていうことに不満を持つんじゃなくて、「それがなんなんだ」ということをちょっと頭を使ったらいいと思うんだよね。かって、俺が学校出てない、学歴がないからって馬鹿にしてさ、大学生が「なんでこんな学校出てないヤツに使われなきゃなんねぇんだ」って怒ったことがあったんですよ。

――そんな馬鹿がいましたか（笑）。

猪木　うん。そのレベルだから。そうじゃなくて、知恵というのは教育じゃないですよね。知識じゃないからね。知識だって俺はみんなに負けないだけ持ってる。いま、それこそ三国志さえ知らないプロレスラーがほとんどでしょ。俺が教えてあげてる。深くはわからないけど、要するに闘っていくための、ひとつの教科書みたいなもんじゃない。リングの上とはまた別の世界から、あるいは本から、そういうのを学びながら、そしてそれを使ってみる。だから、こないだ前田日明の試合は見てないんで、批判はできないんですけど、前田はそれでよかったと思うんですね。ただ、本当の闘いをやろうと思ったら闘い方があるんじゃないか。例えばロープを背にして、絶対中に入らない。そうすりゃあ捕まってもロープを掴んでる。まぁ、ズバリ言って、俺とアリとの闘いがそうです。彼は絶対、俺に持ってかれるのわかってましたから。入ってきたら一発打ち込む姿勢でロープを背にして闘う。そういう知恵があっていいんじゃないかと。もし俺がUFOリングを使ったらと考えてみても、いろんな闘い方が出てくる。だから、誰がうまく円形を活かしていくのかなと。

――馬場さんが亡くなったときに新聞で、「馬場プロレスは残る。猪木プロレスっていうのは一代限りだ」と猪木さんが発言してたのを読んだんですが、猪木プロレスが一代限りであると、ボクらは困っちゃうんですよね（笑）。個人個人では、猪木イズムというものを理解してる選手がたくさんいるんでしょうけど、それを活かせないマット界の環境が非常に悪いですよね（笑）。

猪木　ズバリ言って、これはわかりやすく言えば、みんな自分自身を知ってるんだと思うね。やっぱり、自分の弱さというかね。そういう闘いのできる選手はやっぱりそれを主張していくし、その闘いができなければ、それを違った形で正当化していくだろうね。だから馬場・猪木というのは、プロレスを最初に教わったときには同じことを教えられてるわけです。その中で道が分かれて行った。どちらが正しいなんていうことは言うつもりはねえですけどね。

――「闘い」という概念の違いなんですかね。

猪木　だから、かつて（タイガー・）ジェット・シンであったり（スタン・）ハンセンであったり、いろんな選手と闘ってきた。闘いがエスカレートしていくと

馬場さん追悼付録

猪木・馬場　最後の2ショット！



昨年秋、東京のホテル・オークラで最後の接近遭遇をはたした猪木さんと馬場さん（の後ろ姿）。お互い見てみぬふりをしながら、心の奥底で理解し合っていた地球規模のライバル関係だった（撮影／高鶴紀明）

格闘 MAKE JUNGLE
ジャングルを守るよりジャングルを作る!!

アントニオ猪木

きには彼らもエネルギーがあったけど、その闘いから一歩外れたときにね、エネルギーがしぼんでしまう。彼らはプロレスラーとしては面白いと思うんだよ。でも、それだけでは熱狂させることはできないです。涙を流させるような闘いにはなり得ないと思うね。

—やっぱり、そのエネルギーっていうものがリング上から伝わらないことには、お客さんも会場に行きませんよね。

猪木　うん。

—猪木さんの挨拶がなぜ面白いかというと、エネルギーが伝わっちゃうんですよね。

猪木　ンムフフフ。

—その部分は、選手が頭を使って考えても、盗みきれないっていう部分があるんでしょうね。

猪木　そうだね。いつの時代もそうだけど、金儲けなら金儲けのポイントが必要だしね。あるいは職人さんでも、同じ物を作っても、人と全然違うものを作るとかね。ポイントのわかってる人っていうのかな。「プロ」としての「ポイント」っていうのはなんだっていうね。その会場に入ったときに、計算じゃなくて自分の皮膚感覚が大事。例えばこういう試合を今日しようと思って絵を描いてたとする。それがもし狂ったときにどうなるか。ある意味で計算をして、その通りに行かない場合に、もう一つの闘い方を持ってる選手と、変えられない選手というのがいる。かつて、アメリカの選手で、ワンパターンしか試合が出来ないのがいたんだよね。名前は忘れたけど。「お前、いい加減にしてくれよ」っていうね（笑）。

—ガハハハ。また同じかよって（笑）。日本にもいますけどね、ワンパターンの選手は（笑）。



【RADICALフォーカス】ミネラルバランスを大切にするアントン総帥の足下には、いつもミネラル・ウオーターがある（ホントは偶然）

猪木　人間には二通りあるんだよ。

—ゼヒ教えてください。

猪木　自分が決めたことが狂ったらストレスになる人と、変わったら変わったで「面白えな」って言える人生観を持ってる人と二通り。

—猪木さんは圧倒的に後者ですよね（笑）。

猪木　レスラーにもそういう部分、いっぱいあると思うんです。あるいはボクサーにしたってね。だから、戦法通りにいかないよってなったときに臨機応変に違う対策を取れるようにね。

—対応力ですね。

猪木　この社会の閉塞状態は、創造性の欠如とか、対応していくっていうことをどっかで退化させちゃったっていうのかな。眠ってしまってるというか。そこで、ある意味では否応なしにショックを与えるというか！　ぬるま湯に浸かってればそこから出れないけど、それが氷風呂になりゃあ、動かさなきゃしょうがねえじゃん！

—それで猪木さんは氷風呂に入るわけですね（笑）。

猪木　ズバリ言って、それはそういう意味だよ。俺もナマクラだから凄く横着だしね。だから、自分自身を、それが身体にいいか悪いか知らないけど、とりあえず朝起きて、氷風呂に足を入れるか入れないか。どっちだっていいわけだけど、「やる」ということで、その1日の決断が一つ決まるじゃない。

—猪木さんはやっぱり、ロスでも氷風呂に入ってるんですか（笑）。

猪木　そうだね。でも、サンタモニカは水が冷たいんだよ（笑）。夏でも地下水取ってくるんで。だから、まあ要は「この道を行けばどうなるものか」ってね。一歩踏み出す勇気というか。それはやっぱり、俺らも臆病になってきますよ。だから「この道を行けば……」っていうのは自分に言ってるメッセージで、人に言ってるわけではないんでね。そういうのの連続ですから。

—あ、猪木さん、最後にお願いが二つあります。新日本プロレスのライオンマークをライオンタマリンのマークにしてTシャツ作ってほしいんですけど（笑）。

猪木　ンムフフフ。ライオンタマリン、ブラ下げとく？

—それからUFOをもっと見たいですね。

猪木　UFOは散歩道!!

—は？

猪木　UFOは散歩道!!　ンムフフ。

—あ！　遊歩道（ゆーほどう）ですか（笑）。

猪木　ダーッハッハッハ！　ただ、UFOに関しては、俺は早くみんなが好きにやってくれればいいんでね。アイデアは出しますけどね。俺は俺で好きなことをやらせてもらうというとこでね。そういう中で環境大学を作りたいなと。もう一つは、国民の健康！　全ての病気の根源は、ミネラル不足だから。その、必要なミネラルというものが、まだ値段が高いっていうことと、そういう認識がない。最近やっと認識が高くなってきたけどね。全ては口から入ってくるもの、つまり食するものが本物でなくなってしまってるから。そういう身体の抵抗力も弱ってきてる。

—ミネラルっていうのは高いんですか？



大根の葉っぱを湯がいて食べると見事に翌日はグリーンというか

アントニオ猪木

猪木　高い。俺自身が何年か前、腰が動かなくてね、膝だってこれ、くっついちゃってるんですよね。でも歩くのは支障はなくて、多少走れますからね。そういう自分が体験したことで、専門家じゃないんだけど、専門家からも知識をもらって指導していきたいっていうのかな。若い人で、よく「キレる」人が多いみたいなんだけど、なぜキレるの？　それは一方でブレーキがないんだよね。「怒り」の部分と「怒りを抑える」部分が、ミネラルというかホルモンの作用で、そのブレーキのほうがなくなっちゃってるから、子どもが先生を刺しちゃったりとかね。我々の周りにもそういうような人がいたりする。それを、いま言ったような方面から見ていくと見えてくるものがあったりするんですよ。いまの子どもたちに対して「プロレスをやってリングで身体を鍛えろ！」っていうことだけでは解決しない。それ以前の問題で、口から食するもの、本物を摂取するというか。それによって身体を鍛えていけば、本当にこれからの21世紀の子どもたちが元気でいられるようになるんじゃねえかと！

——元気が一番！ってやつですね（笑）。猪木さんはマット界にとって存在自体がミネラルだったわけですね、きっと。いま、気付きました（笑）。ところで、なんでそんなに元気なんですか？

猪木　ンムフフフ。原点を言うと、俺が成長期にブラジルに行って、結局野菜がないんですよね。向こうの人は食べないんだよ。だからコーヒー園に戦前に養殖した大根の種を植えて大根を作ったんだよね。

——大根の養殖!!

猪木　それが野生に帰っちゃってね。大根は本当に葉っぱばっかりで。それを、ゴワゴワしてますから、湯がいて食べると、見事に翌日はグリーンというかね。ダーッハッハッハ。トイレも水道もないからね。野グソなんだよ。ダーッハッハッハ！



——ガハハハ！　真グリーンですか。

猪木　あとは野草を食べてたからね。だから成長期に一番必要なときに必要なものを取れたんじゃないかな。ある専門家と話してたときに「なんでそんな回復力があるんだ？」って聞かれて、結論はそれに達したんですよね。もともと持ってた頑丈さとかがあって、それにプラスして、その環境と精神的な部分もあったりね。食のバランス、ミネラルバランスが大切というかね。

——マット界には猪木イズムという〝ミネラル〟と、猪木プロレスという〝自然〟が必要ということが今日はよくわかりました（笑）。

猪木　そのうち、猪木ミネラル作りますから。ンムフフフ。

——ホントですか？　それはいいですね!!　でも、ミネラルって高いんですよね？（笑）。

※

【3月15日／オーちゃんが、〝ザ・ビースト〟を破ってNWA世界王者になった翌日、六本木アートセンターにて収録】

どうですかー、お客さん？　精神論が加わった東洋発の「格闘文化」として、〝UFO道〟が世界を席巻する日はそう遠くない（のか？）。〝猪木イズム〟があれば、なんでもできる！　いでよ、マット界のミネラル！　精神にミネラルを！　いきますかーッ！　そろそろ？　猪木、サン、ダーッ！

佐山U.F.O.離脱!?

4代目タイガーマスクが佐山を語る!!



「UFO分裂!!」と表紙にでっかくコピーを打った『週刊ゴングNO.760』。そこで、佐山聡UFO代表の離脱が初めて活字になったわけだが、本誌が掴んでいた情報でも3月14日、横浜アリーナで行われたUFO興行第3弾『ハマのリングで勝負しろ!』終了後の打ち上げで、猪木会長と佐山代表が激しい口論を展開したというものだった。様々な原因が憶測で飛び交っているが、確かな情報は何一つない状況なのだ。いったいなぜ？　どうして？　どうなるの？　まずは、佐山代表と最も近い位置にいると思われる4代目タイガーマスクをみちのくプロレス4月7日の記者会見終了後にキャッチしてこの真相を聞いてみた。

――タイガーさん、佐山さんについて話をうかがいたいんですけど。

4代目　ボクも、いま情報収集中なんですよ（笑）。

――何かわかりましたか？

4代目　ん～、ディック東郷選手はそういうことになってたんですね（笑）。

――違いますよ、そっちのじゃなくて（笑）。

4代目　違いましたね（笑）。

――で、改めて佐山さんのUFO離脱問題なんですけど。

4代目　マスコミが大騒ぎするほどのこともないんじゃないかなあ。僕も最近、先生とは電話で2回話しましたけどね。まあ、UFOと先生が袂を分かったとしても、別に僕と先生が別れるわけじゃないですから。

――タイガーさんの試合が、これから、UFOで見れなくなっちゃう可能性も、出てきたわけですよね。

4代目　う～ん、ボク自身は、せっかく、こういう機会を先生に与えてもらったのに……「佐山先生が辞めたから、じゃあサヨナラ」ってフェードアウトするのではなくて、出来ることなら、UFOに残って試合をしていきたいですね。

――佐山さんが、もし格闘技を新たに始めるとか旗揚げすることになったらタイガーさんはそっちに行くわけですか？

4代目　もちろんね、先生にはそういう話はしてあってですね……。

――あ、実際そんな話がありますか？

4代目　そういう話って、具体的に旗揚げを考えてるっつわけじゃないですよ。先生はもともと昔から、アマチュア部門をやりたいって話してましたから、オレは「自分にできることがあれば、協力させてくださ い」って、言いました。まあ、こうなったことで、サスケ社長も心配してくださって、自分のところに電話もらって……で、まあ、サスケ社長も、みちのくプロレスも、「出来ることがあれば佐山先生に協力したい」という話になりましたよね。

――具体的に、何をやりたいってことは、佐山さんの口からは聞いてるんですか？

4代目　ボクの口からは……それは本人に取材を申し込んでもらった方が……。

――本人に、取材申し込んだんですけどダメだったんですよ（笑）。

4代目　あ～、なるほどね（笑）。いまは、こういう時期ですから、逆に、まわりがいろんなこと言うよりも、落ち着いて本人に聞いた方がいいですよ、ねっ？

――ある程度は佐山さんのやろうとしてることを知ってはいるんですよね？

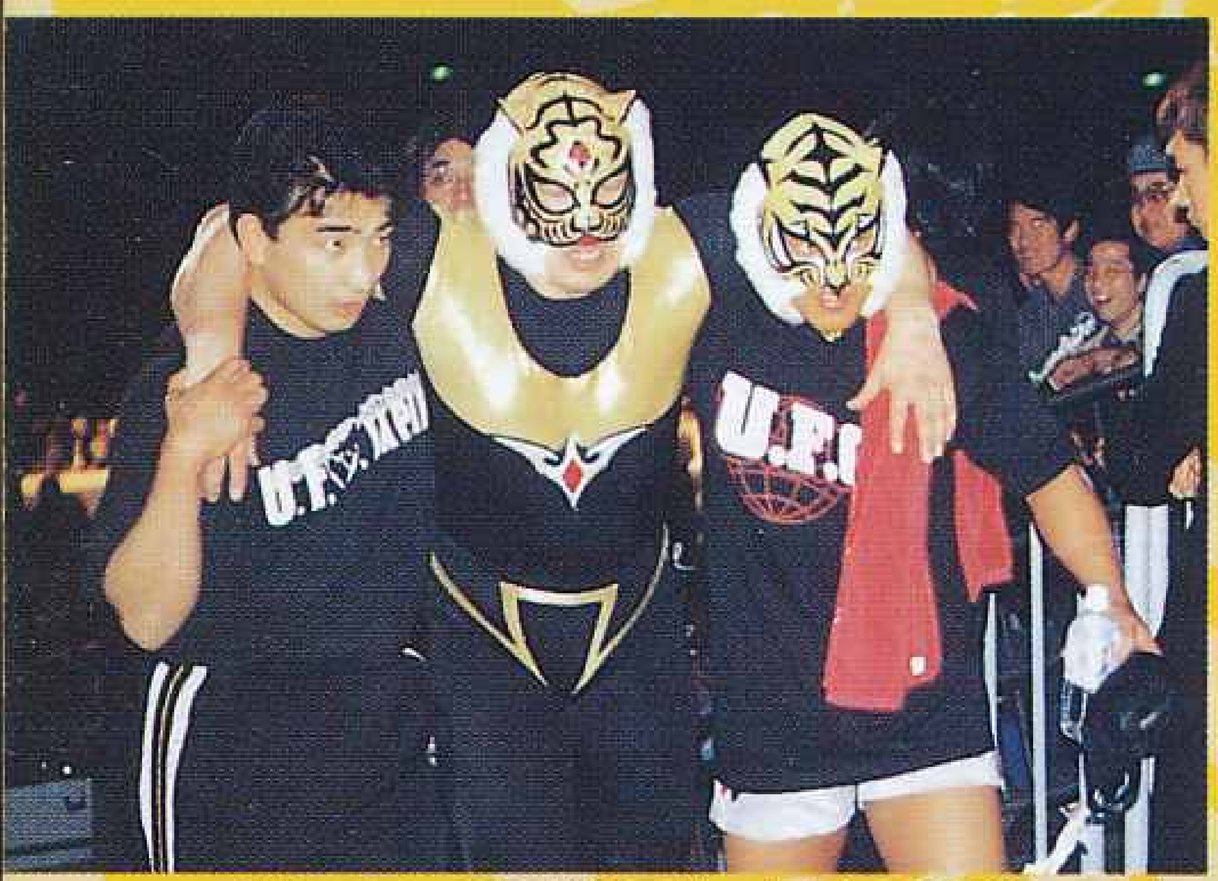
4代目　ある程度っていっても、佐山先生がどこまで本気で言ってるかわからないですけどね（笑）。「アマチュア部門を確立したい」っていうのは、UFOをやる前からそういう話を聞いてましたからね。まあ、それがたまたま、こういう形で大袈裟になっちゃっただけですよ。

――でも打ち上げパーティーでは猪木さんと佐山さんが激しく口論してたんですよね？　これは大ゴトですよ。

4代目　ボクはいましたけど、まったくわからなかったですよぉ（笑）。佐山先生はキレたら、もう、すごいじゃないですか。別にそんな様子もなかったですから。

【99年4月7日、六本木プリンスホテルにて収録】

★修斗同様、佐山が降りたUFOはこれからだいぶ身軽になるので浮上していくと思われるが……今後の成り行きに注目だ。



3月14日、UFO横浜アリーナ大会の試合後。しかし、4代目もＵＦＯには出たい、佐山先生には付いていきたい、板挟み状態であるようだ





プレゼ ジャイ子ントサービス

イェーイ。ジャイ子だよ。これを書いてる4月15日深夜、作業に詰まった坂井ノブにモノ凄い取引を持ち掛けられたの。「ジャイ子、オレ、読プレのリード書いてあげるから座談会のテープ起こしやってくれない?」リードっていうのはアナタが読んでるここのこと。座談会は今回7名参加で3時間近くしゃべってるから12時間は余裕でかかる作業。あまりの暴力的な提案に編集部は凍り付いたね。そのあとも「オレが痩せてたころに着てたTシャツあげるからさぁ」とか、行ってもいないくせに「埼玉プロレスのバウトレビューはオレが書いてあげる」とか気の狂った発言を連発。もう聞きたくないのでこれからテープ起こしやりま～す。

そうそう、プレゼントもいっぱい集めたから、みんな応募して大きくなれよ(馬場さん風)。

春だ! 一番! Tシャツ祭り



Special Thanks
relax
ナカシマさん

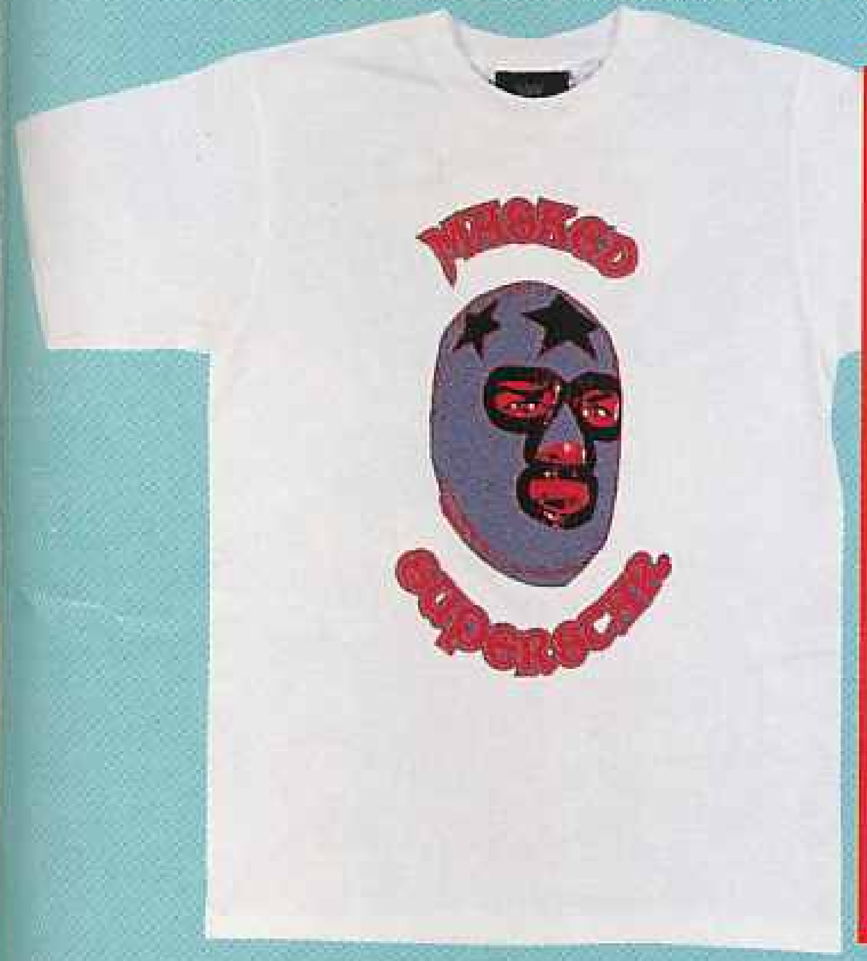
魔除けワルTシャツ　3名様

故『relax』ポスターにもなり、話題騒然となった真樹日佐夫先生がTシャツで登場！　このTシャツはホントに魔除けの糸が縫い込んであるの。これで夜道も安心。5月末までに『カラテグランプリ98in沖縄』のビデオ購入者にプレゼントの完全限定品。サイズは女子用チビT、男子用M、Lで～す。お問合せはUーエージェンシー☎03-5458-1166【Uーエージェンシー提供】



闘魂猪木塾Tシャツ、パンクラスNew Tシャツ、ヒクソンTシャツ　各1名様

ジャジャーン！　いいでしょ。このTシャツは闘魂猪木塾参加者だけの配られるウルトラレアな一品。この貴重品を売ってるショップを発見しましたぁ(吉田豪が)。完全限定200枚、4200円で渋谷ファイヤー通りのワールドスポーツプラザ渋谷WEST店☎03-3462-1001、池袋パルコ5Fの池袋店☎03-5391-8388にて発売中。急げ！　パンクラスグッズ他、プロレスグッズ、格闘技グッズも大充実中です。【ワールドスポーツプラザ提供】







バンバンビガロTシャツ　各1名様

野田くん店長就任記念に新旧織りまぜてドカーンとプレゼント。あの大人気のMASA'SカレッジTシャツ、ブロディTシャツが色違いで登場！　マスクド・スーパースターのみ新作です。お問合せはバンバンビガロ☎03-3460-1145　場所は地図見てね。

【バンバンビガロ提供】

ダイエットブッチャー 半そでトレーナー　各1名様

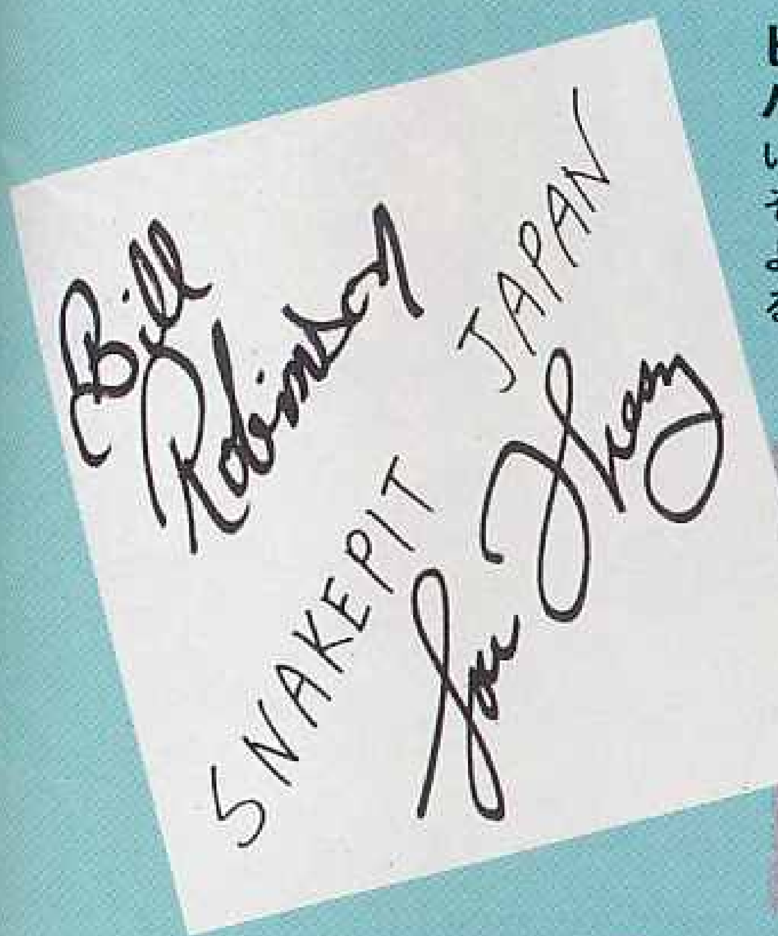
さすが裏原系！　ヤングに大人気の半そでトレーナーが登場！　こちらの商品は裏原宿、渋谷区神宮前5-16-18のオクタゴン☎03-3486-5539で販売してます。

［ダイエットブッチャー提供］

ビル・ロビンソン&ルー・テーズサイン色紙　5名様、パトリックTシャツ　3名様

いよいよ活動開始のUWFスネークピットジャパンから、重鎮2名の寄せ書き色紙。そして朗報！　スネークピットのグッズも出ます！　こちらを製作するアイ・ディー・エヌよりヨーロッパの人気ブランド、パトリックのTシャツをプレゼント。どんなグッズが出るか、首を長くして待て！

［UWFスネークピットジャパン&アイ・ディー・エヌ提供］







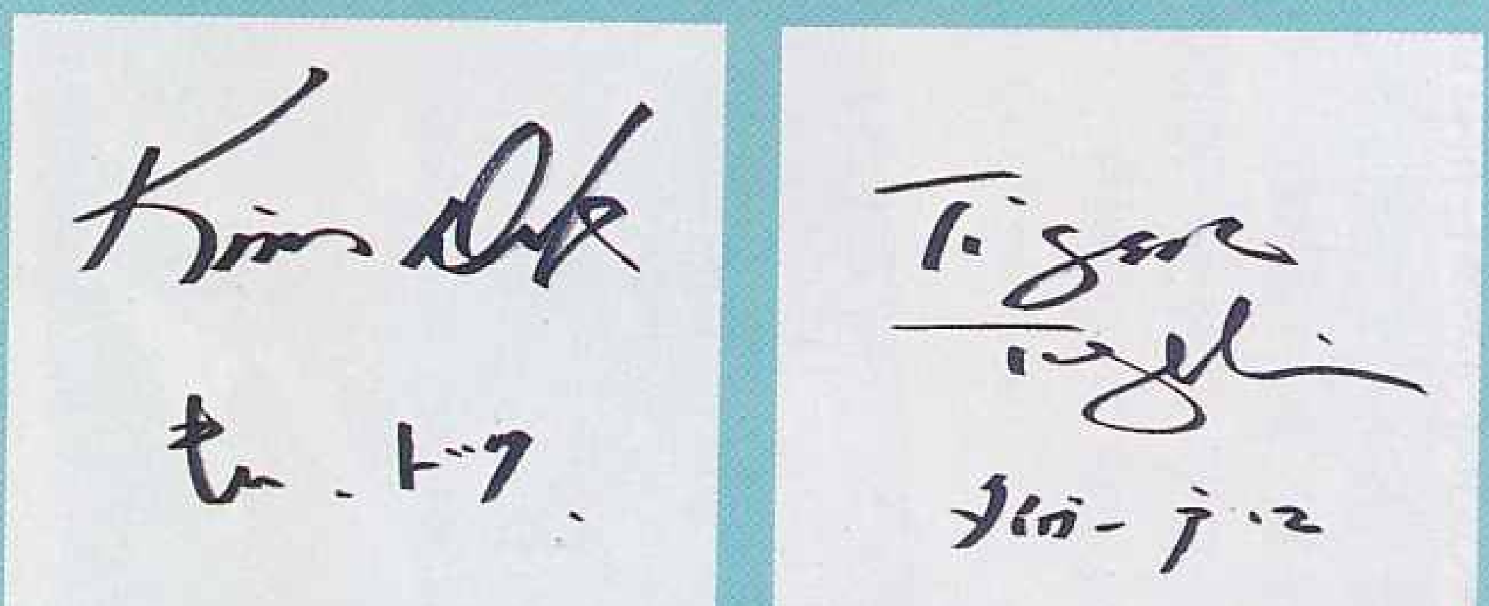
キャプチャーTシャツ、你好Tシャツ各1名様

スパイダープリントがイカしたキャプチャーTシャツ、パステルカラーが春の装いを演出してくれそうな你好Tシャツ（プリントがパステルピンクのバージョンもあり）は你好のテーマがプリントされてます。一緒に歌え！　福岡ジムもオープン予定で絶好調のキャプチャーではジム生も絶賛募集中！　Tシャツ、ジム共にお問合せはキャプチャー・インターナショナル☎044-959-3333まで。［キャプチャー提供］

キム・ドク&タイガー戸口サイン色紙　3名様

ダブルクロスといえばタイガー戸口。あれぇ？　聞いたことあると思ったらウチの会社もダブルクロスじゃん。奇遇だね。ところでホントはキム？　タイガー？　ムービースター？　AKIRAもがんばれ！

【キム・ドクさんorタイガー戸口さん提供】





格闘アストラルTシャツ　各1名様

「最強」「鉄人」「BI砲」などなどプロレスファンにはたまらないキーワードが勢揃いの格闘アストラルTシャツはチャンピオン東京店☎03-3221-6237にて絶賛発売中！　他では買えないよ。チャンピオンでは『紙プロ』オリジナルTシャツも買えちゃいま～す。

【チャンピオン東京店提供】



プレステソフト『王者の魂』　3名様

前号で大人気のため太っ腹なHUMANさんから再度、豪華パッケージ&馬場さんポスター付きの初回限定版をプレゼント! 激レアチラシ「ヒュースポ」もセットであげちゃいます。これでアナタのお家もチャンピオン・カーニバル!

【HUMAN提供】



アントニオ猪木キーホルダー 各5名様

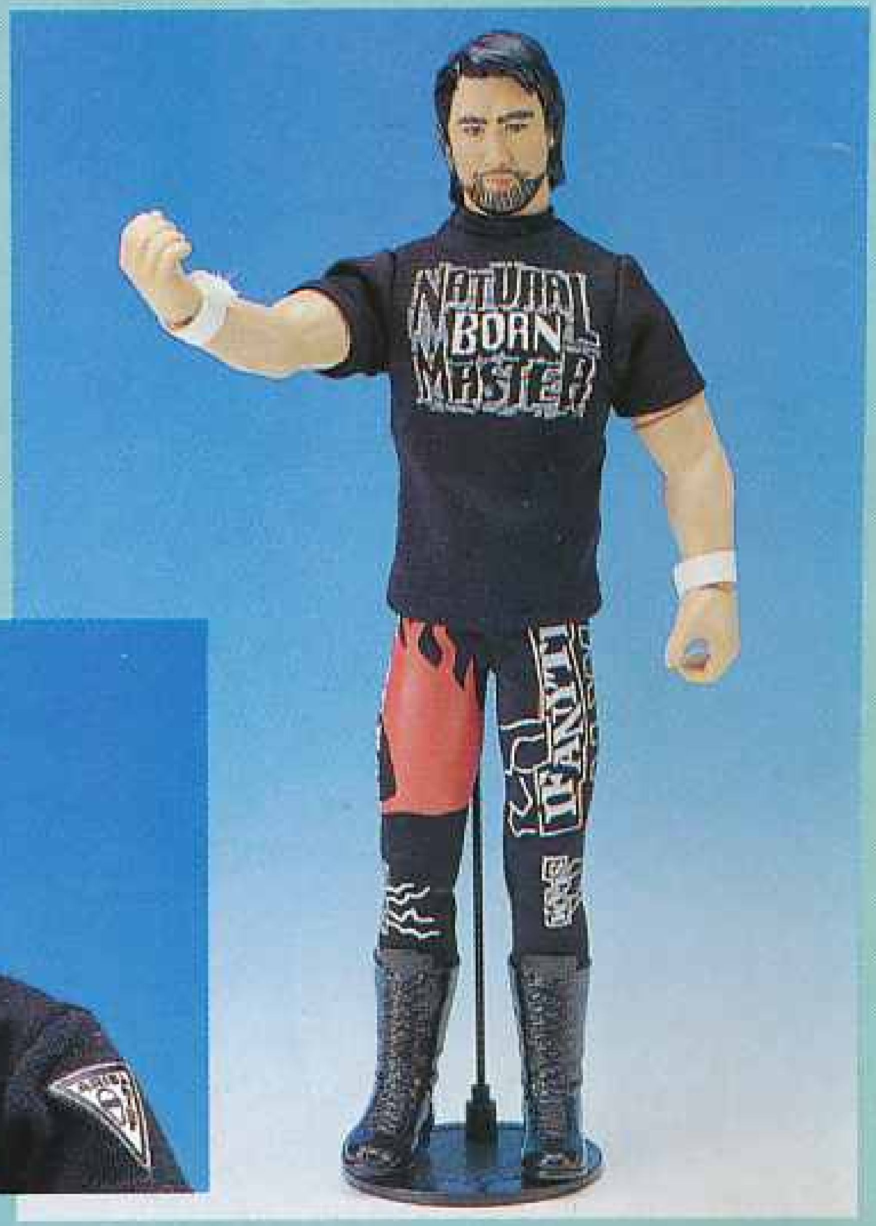
前号では携帯ストラップが大好評のイマ・コーポレーションから新製品ダーッ! 今回はUFOだけにUFOキャッチャー(&その他クレーンゲーム)でしか手に入らないんダーッ! トンチがきいてるんダーッ! 青タオルヴァージョンはメチャメチャ少ないんダーッ!

【イマ・コーポレーション提供】

武藤敬司・蝶野正洋フィギュアセットで1名様

蝶野選手のフィギュアは本誌14号でも紹介しましたが、今回は新作の武藤選手(本人監修のコスチューム付き!)とセットでプレゼント。ビバ、タカラ! 各12000円で発売中で～す。

【タカラ提供】







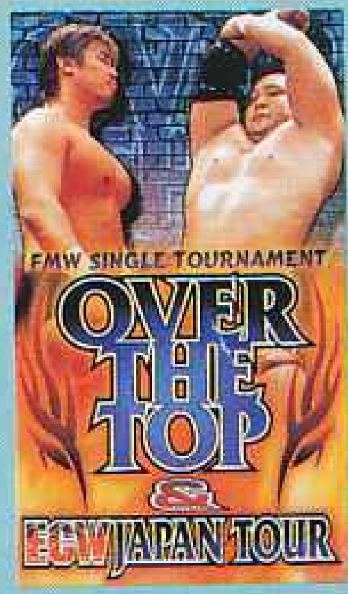


『蝶野正洋』　2名様

「90年代のレジスタンス男」(資料より)。蝶野本人がプロデュース、蝶野づくしの105分! 87年のヤングライオン杯の映像あり、蝶野自身が選ぶ「心のベストバウト」あり、そして「武藤論」「アメリカとの勝負」などを熱く語り倒すロングインタビューありの大充実っぷり! 必見!

【東芝EMI提供】





『オーバー・ザ・トップ&ECWジャパンツアー』 2名様

祝・創立10周年。FMW初のシングルトーナメント&ECWから2試合、田中将斗凱旋帰国試合、ボーナストラックとして田中将斗特別インタビューまで入った豪華版。お腹いっぱいになれることうけあい。

【東芝EMI提供】



『猪木vs藤波8・8死闘60分』『猪木vs藤波激戦闘魂・飛龍師弟対決』『猪木vs長州激闘ラストマッチ』『壮絶! 9・23幻の田園コロシアム』『猪木vsホーガン2大IWGP優勝戦』各2名様

80年代のあの名勝負がドドーンと再発! 『壮絶! 9・23幻の田園コロシアム』はハンセンvsアンドレ、猪木vsタイガー戸口、特別収録としてラッシャー木村の「こんばんは」発言も入ってるんダーッ!

【東芝EMI提供】

『あしたのジョー』ショルダーバッグ、ミニポーチ各1名様

バッグはたっぷり入るサイズ、『紙プロ』も入っちゃいま～す。街で、学校で、塾で、会社で、酒場で目立っちゃえ! ポーチはキーホルダー仕様になってるので小物をなくしやすいアナタに最適。こちらの商品は水道橋のMAX格闘館☎03-5212-7897で発売中。オリジナルウェア、レガースの注文も絶賛受付中!

[MAX格闘館提供]



浅草キッド著『みんな悩んで大きくなった!』　5名様

たとえプロレスラーが登場しなくとも『紙プロ』読者的には気になるメンツが揃った一冊。表紙見ただけでワクワクだね。本誌前号『書評の星座』にも登場済なので読んだかたも多いでしょうがまだの人、必読! ちなみにジャイ子は悩んでもいないのにこんなに大きくなっちゃいました～。【ぶんか社提供】





『AO CORNER』CD 1名様

日の当たりも～しない～、でお馴染みのアレクのテーマ曲が入った青西高嗣さんのCDをなんとアレクと青西さん二人のサイン入りでプレゼント!





バトラーツポストカードブック『Level B』、非売品『バト缶』　各3名様

怪しいバト・グッズでおなじみのアドブレーン・ピアスの新作。一見小洒落た小冊子に見えますが、中身は尋常じゃない! アンドロイドアレク、火の玉を背負った岡本魂、体調不良の島田レフェリーなど、ド肝を抜かれるよ。バト缶はアドブレーン・ピアスのバトグッズに封入されてるスクラッチカードで当たる鬼レアグッズ。ちなみにガッチリが出たら当たり(金なら1枚、銀なら5枚)、芳賀元太が出たらハズレで～す。お問合せはアドブレーン・ピアス☎03-3987-2195

【アドブレーン・ピアス提供】

石川雄規サイン入りバトラーツポスター　5名様

5月14日、バトラーツ最初で最後の札幌中島体育センター大会の特別ポスター、イカレ社長のサイン入り。希望者にはチョロが書いた松永選手のサインも付けちゃいま～す。

【格闘探偵団バトラーツ提供】



応募要項

ベイベー、希望商品は決まったぁ? あ、そう。じゃあハガキに右側の要領で記入の上送ってね。5月15日必着。世露死苦。
※応募券のないハガキは無効。わかったぁ? ジャイジャイ。

宛先は
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
(株)ダブルクロス
『紙プロRADICAL』編集部
「しゃべれば早いじゃん」係まで

応募券

1. 郵便番号・住所・電話番号
2. 氏名　3.年齢・職業
4. 希望商品
5. 面白かった記事&その理由
6. つまらなかった記事&その理由
7. 『PRIDE.0』(P52～)の勝者は誰?
8. 『紙プロ』に出て欲しい人は?
9. やって欲しい企画

紙のプロレス T shirts プレゼンツ 着れんのかーッ!!?

スタンダードTシャツ新登場!

『紙プロ』Tシャツで今年の夏は決まり!!



おなじみのロゴがTシャツに!



本誌「リングの汁」連載中花くまゆうさく先生公認!!

通信販売の方法

希望商品の代金＋送料¥500（何枚でも）を現金書留で、下記住所まで送ってください。あなたの住所、氏名、年齢、電話番号、希望商品、サイズとカラーを明記した明記したメモを忘れずに同封してください。これがないと商品が発送できませんので十分にご注意を。早めに買っておかないと、すぐなくなっちゃうはずなので、どんな手段を使ってもいい（万引きはダメ!）ので即ゲットだ!

〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
株式会社ダブルクロス
「紙Tヘックション通販係」

【お客様お問い合せダイヤル】
03-3403-5188

元気ですかーっ!!　え〜、あっという間に「岡本魂」Tシャツ＆バトラーツTシャツは完売してしまいました。買ってくれたみなさん、どうもありがとうございます!　買ってくれなかったみなさん、もう二度と手に入ることはないでしょう、ご愁傷様。え?　べつに欲しくないって?　またまたぁ〜、強がっちゃって。そんなこと言っても、今度の新作はノドから手が出そうなくらい、かっこいいぞ!　まず、目を引くのがどっかで見覚えがあるこのデザイン!　そして小さい版型の『紙プロ』本誌がロゴマークとして使っていた花くまゆうさく先生の『リングおじさん』のイラストをフューチャーしてみました。カラーバリエーションも【レッド】、【イエロー】、【ネイビー】と選べる3色。サイズもM・L揃えて、文句があるならかかってこい!!　このTシャツは小社での通信販売か、チャンピオン東京店のみ!!　ちなみに相変わらず少数生産なので、購入はお早めに。みんなが欲しいのはどんなTシャツでしょうかねぇ。こんなTシャツかなー?　いくぞーッ!!　イチ・ニ・サン・ダーッ!!

全カラー、M・Lとも ¥3500（送料¥500）

岡本魂Tシャツ＆バトラーツTシャツの通販受付は終了いたしました。チャンピオン東京店に若干残っているのみです。

紙のプロレス RADICAL
No.17
1999年5月25日発行
定価：本体743円＋税

発売元: 株式会社ワニマガジン社
〒160-0014　東京都新宿区内藤町一番地
TEL.03-3357-2911（販売・営業）
発行元: 株式会社ダブルクロス
〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
TEL.03-3403-5188（編集・制作）
編集兼発行人: 山口日昇
編集スタッフ: 坂井ノブ／松澤チョロ／八木賢太郎（CD発売記念で非番）
スーパーバイザー: 吉田豪
風雲!　広告嬢: 佐藤恵美
助っ人: ジャイ子／恒遠バカツネ／愚乱
デザイン: ツー・スリー（出田さん、村松さん、ヒサくん、マツ、出前持ち入江、セッキー&グッチー）
カメラマン: 斉藤ユーリ／遠藤政文／森鷹博／戸成ぶつぞう／藤見道隆
試合写真: 平光幸雄／長尾迪
お勘定: 林ヘックション一枝
安いセッケンの香り: 中村カタブツ君（36歳）
フィニッシュ: ツー・スリー
印刷: 図書印刷株式会社
印刷人: 大杉すぎすぎ昌也

編集内容等に関するお問い合せは（株）ダブルクロスにしてね。ジャイジャイ。

本誌史上初 発売日特定告知!
No.18は5月26日発売!!
※地域によっては3～4日発売が遅れます

紙のプロレス WANIMAGAZIN MOOK 106 RADICAL 1999 NO.17 オイオイ オイオイ 蛮撃！蛮撃三昧!!! UFO
平成11年5月25日発行 編集発行人／山口日昇
発売元：(株)ワニマガジン社 〒160-8580 東京都新宿区内藤町1番地 電話／03-3357-2911
発行元：(株)ダブルクロス 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話／03-3403-5188
ワニマガジン社 定価：本体743円＋税

雑誌 69862-06
ISBN4-89829-556-8
C9476 ¥743E
9784898295564
1929476007438
印刷：図書印刷株式会社